

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第47集

# 瀬名遺跡 III

## (遺物編 I)

静清バイパス(瀬名地区)埋蔵文化財調査報告書 3

### 本文編

1994

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

## 誤

挿図目次 第10図

P 69

挿表目次 第17表

P 57

P 292 棒状木製品観察表

第91表

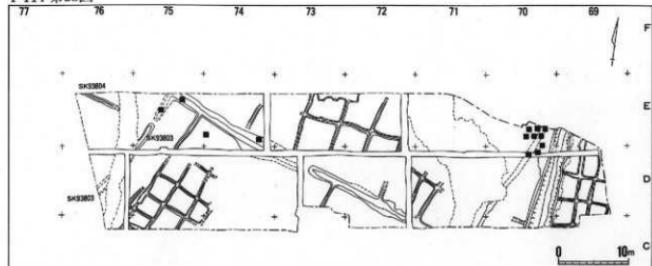
## 正

P 70

P 58

第92表

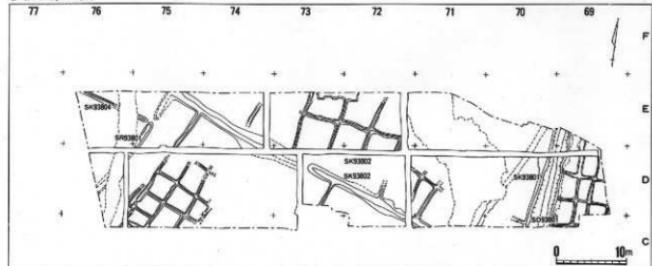
P 114 第23図



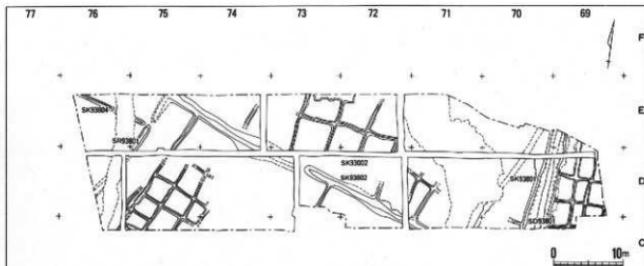
第23図 9区38層水田田下駄出土位置図

■田下駄出土地点

P 172 第46図

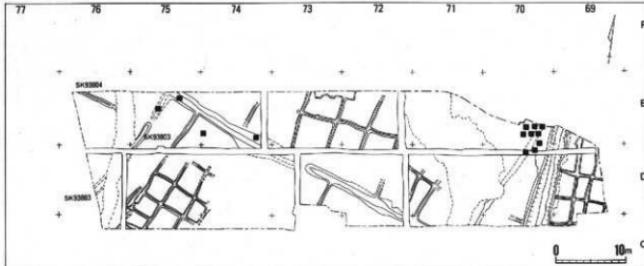


第46図 9区38層水田平面図



第23図 9区38層水田平面図

■田下駄出土地点



第46図 9区38層水田田下駄出土位置図

■田下駄出土地点

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第47集

# 瀬名遺跡 III (遺物編 I)

静清バイパス(瀬名地区)埋蔵文化財調査報告書 3

## 本文編

1994

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

# 序

瀬名遺跡は、弥生時代中期から近現代までの水田跡を発見した遺跡として全国的に注目されてきた。静岡平野の東北端で、清水市と隣接する位置にあり、北から迫る丘陵の間を流れる長尾川の扇状地の前面に広がる自然堤防带上にのる遺跡である。長尾川を中心とするいくつかの河川が低地に土砂を堆積させ、人々が營々と作った水田を土砂で被覆してしまうことを繰り返してきた。この被覆した土砂をはずすと次々に水田遺構が確認でき、当地における初期水田農耕の時期から現代までの稻作農耕の具体的な姿を考古学的におさえることができた。

当研究所は、静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財発掘調査業務として建設省中部地方建設局の委託を受け、昭和61年度から平成2年度まで4年8ヶ月を費やして現地発掘調査を行い、調査面積は延べ182,834m<sup>2</sup>に及んだ。水田遺構以外にも、いくつかの話題を提供してきた。弥生時代の方形周溝墓群では、木棺と人骨を良好に残す主体部が発見され、注目を浴びた。『倭名類聚抄』の地名がより古式に記された木簡の出土、いわゆる律令制祭祀の祭料である木製形代類の出土などがあった。

それでも、水田遺構の発見が最も特筆に値する成果であり、特に次の三点は全国的に注目される成果といえる。1つには、古代の条里制区画を持った水田が検出されたこと。2つには、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて大規模な水利灌溉施設を伴った残存状態良好な水田が発見されたこと。3つには、当該地域では稻作開始時期に当たる弥生時代中期の水田遺構が発見されたことである。本遺物編においては、これらの遺構の調査成果を踏まえて、遺物の特殊性にも着目して報告した。

出土遺物に関しては、低湿地性の遺跡のため、多数の木製品の出土という特殊性を指摘することができる。2万点を越す木製品の中でも、弥生時代中期から古墳時代にかけての木製農具はその数が多く、種類も豊富であった。これらの資料が、静岡平野における水田稻作農耕文化の解明に大きな意義をもつものと信じている。

この調査に深い御理解と御協力をいただいた建設省中部地方建設局静岡国道工事事務所、静岡県教育委員会、その他の関係諸機関及び多くの関係者の皆様に心から感謝と敬意を表したい。また、本調査に従事し、発掘や整理作業に力を合わせた本所員及び作業に参加された多くの方々の労苦をねぎらいたい。

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

## 例　言

1 本書は、静岡市瀬名地先に所在する瀬名遺跡の発掘調査報告書第三分冊（遺物編Ⅰ）である。本書では土器、石製品、金属製品及び木製品を扱ったが、木製品の一部は第四分冊に記載を予定している。

2 調査は「静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財発掘調査業務」として、建設省中部地方建設局の委託を受け、静岡県教育委員会の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

3 発掘調査体制は次のとおりである。

昭和61年度 所長斎藤忠 常務理事八代龍一 調査研究部長岡田恭順

調査研究一課長植松章八

調査研究員森下春美 足立順司 曾根辰雄

昭和62年度 所長斎藤忠 常務理事大石保夫 調査研究部長山下晃

調査研究二課長平野吾郎 主任調査研究員佐野五十三

調査研究員宮村典雄 小柴秀樹

昭和63年度 所長斎藤忠 常務理事亀山千鶴男 調査研究部長山下晃

調査研究二課長栗野克巳 主任調査研究員佐野五十三

調査研究員曾根辰雄 杉浦高敏 宮村典雄 杉澤正敏

木下智章

平成元年度 所長斎藤忠 常務理事亀山千鶴男 調査研究部長山下晃

調査研究二課長栗野克巳 主任調査研究員伊藤豪

調査研究員守谷孝治 竹山喜章（9月まで） 宮村典雄 杉澤正敏

中山正典 内藤朝雄 繩巻強 木下智章 村瀬隆彦 小林孝誌

嘱託技術員前嶋秀張

平成2年度 所長斎藤忠 常務理事亀山千鶴男 調査研究部長山下晃

調査研究二課長栗野克巳

調査研究員宮村典雄 杉澤正敏 中山正典（10月まで） 伊林修一

笠原芳郎 塚本裕巳 小林孝誌（10月まで）

平成3年度 所長斎藤忠 常務理事鈴木勲 調査研究部長山下晃

調査研究二課長栗野克巳 主任調査研究員宮村典雄

調査研究員中山正典（11月から） 一杉高徳（9月まで）

伊林修一（9月まで） 小林孝誌 嘱託技術員中鉢賢治

平成4年度 所長斎藤忠 常務理事鈴木勲 調査研究部長山下晃

調査研究二課長栗野克巳 調査研究員中山正典 小林孝誌 嘱託技術員中鉢賢治

平成5年度 所長斎藤忠 常務理事鈴木勲 調査研究部長植松章八

調査研究二課長栗野克巳 調査研究員中山正典 青木修

4 本書は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の職員が分担して執筆した。

中山正典 第I章、第III章、第V章、第VI章第3・4節

中鉢賢治 第II章、第VI章第1・2節

5 平成4年度の資料整理は中山正典、小林孝誌、中鉢賢治が中心となって実施し、石井弘道、中川里美、榎本喜代子、石原茜、夏目景五、他の協力を得た。また平成5年度の資料整理は、中山正典、青木修が中心となって実施し、榎本喜代子、石原茜、夏目景五、平井豊子、岩崎しおぶ、柴田圭子、他

の協力を得た。

- 6 平成4・5年度の資料整理は下野第1整理事務所（清水市下野線町1番バイパス高架下）で実施した。
- 7 遺物写真は杉山すず代、池田洋仁氏、楠華堂（楠本真紀子氏）に撮影を依頼した。
- 8 木製品の樹種鑑定については、山内文氏（元国立科学博物館）に依頼し、玉稿をいただき第VII章に収録した。
- 9 石材の鑑定については伊藤通玄氏（静岡大学農学部）に依頼した。
- 10 金属の成分分析は青木繁夫氏（東京国立文化財研究所）の指導のもと住友金属鉱山中央研究所に依頼し、その分析結果を第VII章に収録した。
- 11 曲物の資料検討は南博史氏（京都文化博物館）、織機の部材の資料検討は酒井晶子氏（東大阪市立郷土博物館）の指導をそれぞれ受け実施した。
- 12 漆器の分析については北野信彦氏（元興寺文化財研究所）に依頼し玉稿を第VII章に収録した。
- 13 本書の図集は静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
- 14 木製品の加工痕の資料検討は宮原晋一氏（奈良県教育委員会文化財保存課）の指導を受け実施した。
- 15 方形周溝墓内より出土の人骨についての人類学的分析は、山口敏氏（国立科学博物館）に依頼し、玉稿をいただき第VII章に収録した。

## 凡 例

本書の記述及び図示は、以下の基準に従っている。

- 1 遺物の実測図及び写真は、図版編に掲載した。
- 2 遺物の実測図は土器が縮尺1/3、木製品が縮尺1/3を基本とした。ただし、鍬が縮尺1/4、鋤が縮尺1/4、田下駄が縮尺1/5、輪カンジキ型田下駄が縮尺1/5、鎌が縮尺1/2、堅杵が縮尺1/6、田舟が縮尺1/6、杭が縮尺1/6又は1/10、楕状木製品が縮尺1/6とした。また石器は縮尺1/3及び金属器は縮尺1/2とした。
- 3 木製品の実測図は正面図、側面図及び横断面図を示すことを基本とし、必要により増加又は省略した。木製品の木目は断面図の中に模式的に示した。
- 4 木製品の欠損部は推定できるものを破線で表現した。
- 5 木製品において、炭化している部分はスクリーントーン で示し、樹皮を用いている部分はスクリーントーン で示し、墨書きされている部分は黒で塗りつぶしている。土器において、赤彩部分はスクリーントーン で示し、黒彩部分はスクリーントーン で示した。
- 6 遺物個々の法量、出土位置、形態的特徴、技法的特徴などは、観察表にまとめ、巻末に付した。ただし、文章中にはほしいものは文の中に挿入した。
- 7 実測図に付された番号は、分類ごとの整理番号であり、観察表の通し番号と一致する。
- 8 石器実測図において、打製石斧は |——| で使用痕跡、|-----| で装着痕跡を、砥石は |——| で砥面の範囲を示している。

# 目 次

例言・凡例	
序	
第Ⅰ章 調査の方法	1
第Ⅱ章 土器	7
第1節 1区出土土器	7
第2節 2・3区出土土器	9
第3節 5区出土土器	13
第4節 6区出土土器	17
第5節 7区出土土器	19
第6節 8区出土土器	22
第7節 9区出土土器	24
第8節 10区出土土器	26
第Ⅲ章 木製品	29
第1節 木製品の分類	29
第2節 瀬名遺跡出土の木製品	34
第3節 一括出土として扱う木製品	46
1 2・3区16層以下出土の木製品	46
2 2・3区14層水田出土の木製品	48
3 5区13層出土の木製品	50
4 2・3区12層水田出土の木製品	52
5 5区10層水田出土の木製品	57
6 2・3区10・11層出土の木製品	60
7 7区8層S R70801出土の木製品	62
8 9区S R93301出土の木製品	68
9 1区S R12001出土の木製品	71
10 9区S R92502・92503・93303出土の木製品	73
11 9区S R92501出土の木製品	75
第4節 農具	79
1 鋤	79
2 鋤	84
3 田下駄	85
1)板状四孔田下駄	85
2)輪カンジキ型田下駄	88
4 錘	90
5 ヨコヅチ	90
6 堅杵	91
7 福錘	91

8 田舟 .....	91
<b>第5節 祭祀具 .....</b>	<b>92</b>
1 鳥形木製品 .....	92
2 舟形木製品 .....	93
3 馬形木製品 .....	93
4 人形木製品 .....	93
5 刀形木製品 .....	94
6 竹串 .....	94
7 その他の木製祭祀具 .....	95
<b>第6節 容器 .....</b>	<b>96</b>
1 刃物 .....	96
2 高杯 .....	98
3 曲物 .....	98
4 挽物 .....	101
5 漆椀 .....	104
<b>第7節 食事具 .....</b>	<b>105</b>
1 箸 .....	105
2 火鑊臼、火鑊杵 .....	105
<b>第8節 土木材 .....</b>	<b>106</b>
1 杭 .....	106
1) 1区22層 SK12202 .....	106
2) 1区22層 SK12205 .....	107
3) 2・3区12層 SK21201 .....	108
4) 2・3区12層 SK21204 .....	108
5) 5区10層 SK51003 .....	109
6) 6区16層 SK61606 .....	110
7) 6区16層 SK61601 .....	111
8) 7区10層 SK71003 .....	112
9) 8区17a層 SK817a08 .....	113
10) 9区38層 SK93803 .....	113
11) 9区22層 杭列3 .....	114
12) 9区22層 杭列1 .....	115
13) 10区33層 SK103302 .....	115
14) 10区33層 SK103305 .....	116
2 檻状木製品 .....	116
<b>第IV章 石器 .....</b>	<b>119</b>
<b>第1節 打製石斧 .....</b>	<b>119</b>
<b>第2節 砥石 .....</b>	<b>120</b>
<b>第3節 その他の石製品 .....</b>	<b>121</b>

<b>第V章 その他の出土遺物</b>	123
<b>第1節 金属製品</b>	123
1 鉄製品	123
2 銀貨	124
<b>第VI章 考察</b>	125
<b>第1節 濑名遺跡出土の弥生式土器</b>	125
<b>第2節 濑名遺跡の打製石斧について</b>	133
<b>第3節 静岡県における弥生時代・古墳時代の木製農耕具</b>	143
<b>第4節 田下駄の形態変遷と機能</b>	163
<b>第VII章 遺物の自然科学的分析</b>	191
<b>第1節 濑名遺跡出土の木製品の樹種</b>	山内 文 ..... 191
<b>第2節 濑名遺跡出土漆器資料の製作技法</b>	北野 信彦 ..... 197
<b>第3節 濑名遺跡出土金属製品の分析結果</b>	S MMリサーチ ..... 203 住友金属鉱山(株)中央研究所
<b>第4節 濑名遺跡出土の弥生時代人骨</b>	山口 敏 ..... 213
<b>報告書抄録</b>	219

## 挿図目次

第1図	2・3区16層以下出土遺物実測図	47
第2図	2・3区14層出土遺物実測図	49
第3図	5区13層出土遺物実測図	51
第4図	2・3区12層出土遺物実測図1	55
第5図	2・3区12層出土遺物実測図2	56
第6図	5区10層出土遺物実測図	59
第7図	2・3区10・11層出土遺物実測図	61
第8図	7区S R 70801出土遺物実測図1	67
第9図	7区S R 70801出土遺物実測図2	68
第10図	9区S R 93301出土遺物実測図	69
第11図	1区S R 12001出土遺物実測図	72
第12図	9区S R 92502・92503・93303出土遺物実測図	74
第13図	9区S R 92501出土遺物実測図	78
第14図	C類田下駄形態模式図	87
第15図	曲物部位名模式図	99
第16図	曲物接合方法模式図	99
第17図	1区22層水田平面図	107
第18図	2・3区12層水田平面図	109
第19図	5区10層水田平面図	110
第20図	6区16層水田平面図	111
第21図	7区10層水田平面図	112
第22図	8区17a層水田平面図	113
第23図	9区38層水田平面図	114
第24図	9区22層水田平面図	115
第25図	10区33層水田平面図	116
第26図	弥生時代土器編年図(1)	127
第27図	弥生時代土器編年図(2)	128
第28図	領域設定図	133
第29図	瀬名遺跡出土打製石斧	134
第30図	打製石斧出土遺跡図	136
第31図	県内出土打製石斧	138
第32図	法量分類図	140
第33図	静岡県内の木製農耕具	150
第34図	静岡県内の木製農耕具	151
第35図	静岡県内の木製農耕具	152
第36図	静岡県内の木製農耕具	153
第37図	静岡県内の木製農耕具	154
第38図	静岡県内の木製農耕具	155
第39図	田で履く下駄 民具分類模式図	167
第40図	田下駄の分類模式図	168

第41図	1 区22層水田下駄出土位置図	169
第42図	2・3区12層水田下駄出土位置図	170
第43図	2・3区14層水田下駄出土位置図	170
第44図	5区10層水田下駄出土位置図	171
第45図	6区16層水田下駄出土位置図	172
第46図	9区38層水田下駄出土位置図	172
第47図	瀬名遺跡の板状田下駄編年図	174
第48図	瀬名遺跡の板状田下駄編年図	175
第49図	穿孔形態模式図	178
第50図	輪カンジキ型田下駄編年図	180
第51図	田下駄の計測部位名	181
第52図	田下駄面積分布図	187
第53図	塗通り構造の分類	198
第54図	横木地と堅木地の要領	199
第55図	赤色系漆(朱漆HgS)のX線分析結果	200
第56図	赤色系漆(ベンガラ漆Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )のX線分析結果	200
第57図	各遺跡別の一括出土漆器資料の組成	201
第57図 - 1	瀬名遺跡	
第57図 - 2	原川遺跡	
第57図 - 3	南古館遺跡	
第57図 - 4	オカ・ノギヤチ遺跡	
第57図 - 5	元興寺境内遺跡	
第57図 - 6	タテチョウ遺跡	
第57図 - 7	沓掛城遺跡	
第57図 - 8	久米第一遺跡	
第57図 - 9	金沢城兼六園内遺跡	
第57図 - 10	仙台城三ノ丸遺跡	

## 挿表目次

第1表	瀬名遺跡調査経過	1
第2表	瀬名遺跡木製品分類表	31
第3表	瀬名遺跡木製品一覧	35
第4表	時代別出土遺物一覧表	36
第5表	1区瀬名遺跡木製品一覧	37
第6表	2・3区瀬名遺跡木製品一覧	38
第7表	5区瀬名遺跡木製品一覧	39
第8表	6区瀬名遺跡木製品一覧	40
第9表	7区瀬名遺跡木製品一覧	41
第10表	8区瀬名遺跡木製品一覧	42
第11表	9区瀬名遺跡木製品一覧	43
第12表	10区瀬名遺跡木製品一覧	45
第13表	遺構別出土遺物一覧 2・3区16層以下	47
第14表	遺構別出土遺物一覧 2・3区14層	48
第15表	遺構別出土遺物一覧 5区13層	50
第16表	遺構別出土遺物一覧 2・3区12層	53
第17表	遺構別出土遺物一覧 5区10層	57
第18表	遺構別出土遺物一覧 2・3区10・11層	60
第19表	遺構別出土遺物一覧 7区 S R 70801	63
第20表	遺構別出土遺物一覧 9区 S R 93301	69
第21表	遺構別出土遺物一覧 1区 S R 12001	71
第22表	遺構別出土遺物一覧 9区 S R 92502・92503・93303	73
第23表	遺構別出土遺物一覧 9区 S R 92501	76
第24表	瀬名遺跡出土容器集計表	96
第25表	瀬名遺跡曲物底径分布表	101
第26表	瀬名遺跡挽物 復元最大径分布表	103
第27表	瀬名遺跡挽物 高さ分布表	103
第28表	瀬名遺跡挽物 推定容積分布表	103
第29表	瀬名遺跡遺構変遷表	131
第30表	形態分類・遺物対応表	135
第31表	使用石材表	135
第32表	石器組成表	137
第33表	静岡県木製農耕具の器種の消長	158
第34表	田下駄分類	168
第35表	田下駄形態別の消長表	176
第36表	板状田下駄の穿孔形態の消長表	178
第37表	田下駄計測表	182
第38表	前孔間度数分布表	186
第39表	後孔間度数分布表	186
第40表	前孔前長度数分布表	186

第41表	後孔後長度数分布表	186
第42表	瀬名遺跡出土遺物樹種鑑定一覧	195
第43表	瀬名遺跡出土漆器資料觀察表	198
第44表	ろくろ挽物の用材分類一覧表	199
第45表	近世初 - 前期頃の年代に比定される各地の遺跡	200
第46表	試料種と調査内容	204
第47表	出土品の発光分光分析結果	205
第48表	発光分光分析定性結果報告書 錄	206
第49表	発光分光分析定性結果報告書 袋状鉄斧	207
第50表	発光分光分析定性結果報告書 銅	208
第51表	定量分析結果	209
第52表	永久歯の歯冠計測値	213
第53表	乳歯の歯冠計測値	214
第54表	歯冠計測値に基づく渡来系弥生人および縄文人平均からのペンローズ距離	214
第55表	土器觀察表 1区	220
第56表	土器觀察表 2・3区	224
第57表	土器觀察表 5区	229
第58表	土器觀察表 6区	235
第59表	土器觀察表 7区	238
第60表	土器觀察表 8区	243
第61表	土器觀察表 9区	245
第62表	土器觀察表 10区	248
第63表	瀬名遺跡木製鋏觀察表	250
第64表	瀬名遺跡泥除け具觀察表	253
第65表	瀬名遺跡鋏觀察表	254
第66表	瀬名遺跡田下駄觀察表	255
第67表	瀬名遺跡田下駄計測表	265
第68表	瀬名遺跡輪カンジキ型田下駄觀察表	269
第69表	瀬名遺跡その他農具觀察表	272
第70表	瀬名遺跡祭祀遺物觀察表	273
第71表	瀬名遺跡剝物觀察表	277
第72表	瀬名遺跡高杯觀察表	277
第73表	瀬名遺跡曲物觀察表	278
第74表	瀬名遺跡挽物觀察表	281
第75表	瀬名遺跡漆器觀察表	282
第76表	瀬名遺跡箸觀察表	283
第77表	瀬名遺跡火鑓臼・火鑓杵觀察表	283
第78表	瀬名遺跡杭觀察表 1区22層 S K12202	284
第79表	瀬名遺跡杭觀察表 1区22層 S K12205	284
第80表	瀬名遺跡杭觀察表 2・3区12層 S K21201	285
第81表	瀬名遺跡杭觀察表 2・3区12層 S K21204	286
第82表	瀬名遺跡杭觀察表 5区10層 S K51003	287

第83表	瀬名遺跡杭観察表 6 区16層 S K61606	287
第84表	瀬名遺跡杭観察表 6 区16層 S K61601	288
第85表	瀬名遺跡杭観察表 7 区10層 S K71003	289
第86表	瀬名遺跡杭観察表 8 区17 a 層 S K817a08	289
第87表	瀬名遺跡杭観察表 9 区38層 S K93803	290
第88表	瀬名遺跡杭観察表 9 区22層杭列 3	290
第89表	瀬名遺跡杭観察表 9 区22層杭列 1	291
第90表	瀬名遺跡杭観察表10区33層 S K103302	291
第91表	瀬名遺跡杭観察表10区33層 S K103305	291
第92表	瀬名遺跡槌状木製品観察表	292
第93表	瀬名遺跡金属製品一覧表	293
第94表	瀬名遺跡銭貨一覧表	293
第95表	瀬名遺跡石器計測表 1	294
第96表	瀬名遺跡石器計測表 2	295

## 写真目次

写真 1	S K51006田下駄出土状況	173
写真 2	8区14 b 層田下駄出土状況	173
写真 3	9区田下駄出土状況	173
写真 4	10区30 b 層田下駄出土状況	173
写真 5	漆塗り膜面の塗り構造	202
写真 6	漆塗り膜面の塗り構造	202
写真 7	漆塗り膜面の塗り構造	202
写真 8	漆塗り膜面の塗り構造	202
写真 9	漆塗り膜面の塗り構造	202
写真10	漆塗り膜面の塗り構造	202
写真11	漆塗り膜面の塗り構造	202
写真12	漆塗り膜面の塗り構造	202
写真13	平根型矢じり (A)	203
写真14	平根型矢じり (B)	203
写真15	鎌	203
写真16	袋状鉄斧	203
写真17	劍外觀	203
写真18	劍外觀	203
写真19	鎌の金属組織観察のための切断部位	210
写真20	袋状鉄斧の金属組織観察のための切断部位	210
写真21	1区木棺墓人骨の頭骨	216
写真22	7区 5号墓出土の歯	216
写真23	7区 7号墓出土の歯 (乳歯)	216
写真24	7区14号墓出土の歯	216
写真25	8区15号墓出土の歯	216

# 第Ⅰ章 調査の方法

## 第1節 瀬名遺跡調査経過

瀬名遺跡の現地調査は昭和61年度より始まり、平成2年度まで都合5年の歳月を費やし、延べ調査面積182,834m<sup>2</sup>を調査し終了した。平成2年度後半より本格的な整理作業に着手し、平成2年度、3年度は遺構を中心に整理し、平成3年度末には、報告書「瀬名遺跡 遺構編」を刊行した。平成4年度は遺構の時代変遷についてのまとめ及び自然科学的分析結果のまとめを収録する「瀬名遺跡 遺構編Ⅱ」、そして平成4・5年度は土器と主な木製品を中心に報告する「瀬名遺跡 遺物編Ⅰ」の作成に当たった。

第1表 瀬名遺跡調査経過

	昭和61年度	昭和62年度	昭和63年度	平成元年度	平成2年度	平成3年度	平成4年度	平成5年度
1区			↔ S63・4 H1・3					
2・3区			↔ S63・4	→ H2・3				
5区	↔ S61・4	→ S63・3						
6区			↔ S63・8	→ H2・3				
7区			↔ S63・8	→ H2・3				
8区			↔ H1・2	→ H2・10				
9区			↔ H1・4	→ H2・11				
10区			↔ H1・2	→ H2・7				
遺構整理	概報	概報	概報		概報	遺構編Ⅰ 刊行	遺構編Ⅱ 刊行	
遺物整理				H2・8				遺物編Ⅰ 刊行

## 第2節 遺物整理事業の基本方針

- 整理作業の経緯** 濑名遺跡の出土遺物の整理作業は平成3年度後半から本格的に展開されることになった。勿論、昭和61年度の現地発掘調査の段階から既に、主な遺物の実測図及び遺物写真は作成しているが、やはり器種の分類を把握した上で統一した手法による実測図作成は平成3年度後半からで、尚且報告書への掲載方法を明確に意識して作成したのは平成4年度からと言ってよい。瀬名遺跡出土の遺物は土器、金属器、石器も出土しているが、量、数とも木製品が圧倒的に多い。2万点にも及ぶ木製品を限られた整理作業の期間内にある程度の精度を維持して実測図を作成するには、それなりの基本方針に沿っての展開を余儀なくされた。そこで、平成4年度当初より一年間で可能な仕事量を考慮に入れながら次のような4点を遺物整理の基本的な方針とし事業を進めた。本来は人間の加工の手が加わったすべての遺物は資料紹介しなければならないという義務感があった。この義務感と現実とを視野の中に入れた時立てたのが以下の基本的な方針であった。
- 一括遺物の取扱い**
- 1) 遺構、流路出土の一括遺物を一群として扱い、整理し報告する。第Ⅲ章第3節の一括出土として取り扱う木製品のところで詳細に触れるが、瀬名遺跡の特徴である水田遺構の場合、各調査区の水田一面を一つの遺構とし、その水田の所属する土層からの出土品をその水田遺構からの一括遺物として取り扱うことにする。その他、各調査区内で検出された旧流路内の遺物もここでは一括遺物として取り扱った。遺構編Iでは報告すべき遺構が膨大であったが故に、各遺構出土の遺物紹介は最低限度に留めた。そこで、各遺構からの出土状況をできるだけ遺物編においても意識せねばならない。この遺物編Iでは、土器、木製品はまず遺構、流路ごと、一括遺物を取り扱うことから始めた。器種分類しての報告又は各時代ごとの報告はその次の段階とした。その結果、本報告書は土器においては各区、各調査面ごとの報告、木製品においては遺構、流路出土の木製品を一括して報告する。
  - 2) 水田遺構出土の遺物はその性格を考慮に入れて検討し、報告する。瀬名遺跡の遺構の中心は水田跡であり、遺物を扱う上でも当然水田耕作に伴う道具、施設構造物を中心的に扱い、遺物整理に当たった。木製農具及び水田施設としての杭、堰、水路（樋状木製品）等を最優先にした。特に農具中心の遺物整理に終始したことは否めない事実であろう。器種の認定作業も農具より始まり、農具に関しては細かな細分類まで試みている。他の器種に関してはそのように周到な準備が行き届いたか甚だ不安である。
  - 3) 器種に分類できるものは、すべて器種ごとにまとめ、検討し報告する。特に木製品の場合は、その分類を慎重に行なった。まず、瀬名遺跡出土の木製品に合致するような遺跡独自の木製品分類の試案を作成した。その内容については、第Ⅲ章第1節を参照していただきたい。この分類試案に基づき、木製品を分類し、その器種ごとに実測図を作成していくという手順を踏んだ。この手順はこの器種内において遺物の実測方法の統一、遺物の器型観察等において有効であったが、一方において分類が煩瑣で実測着手までに時間がかかるという欠点もあったことは確かである。
  - 4) 器種が既定できたものを優先させて整理、検討し報告する。上記の分類試案に基づき分類し、分類できた遺物を優先的に実測図作成、写真撮影に回した。必然的に、農具を始め形状等により分類基準が当てはまるものは報告書に検討を加えた後掲載されてくるが、用途不明の加工木製品は多くの部分を実測図で示したが、総体は示しきれずに終わった。
- 優先順位**

先述の理由でやむをえないことと報告者は判断した。

### 第3節 遺物整理作業の方法と内容

上述の基本方針の下、遺物整理作業を進めていったが、その方法と内容を順次、概説的 方法と内容に報告する。遺物は木製品、土器が中心となっているため、必然的にその方法とその内容もこれらの遺物を扱う上でのものになっている。ここでは瀬名遺跡の遺物の特殊性、つまり2万点にもおよぶ木製品の整理経過をその特異性として示せるように報告する。

#### 1) 水洗・注記

水洗・注記は原則的には現地調査の枠内で終了する方針であったが、総量が多いため現地調査後の整理作業の中でも展開せざるをえないようになった。木製品の場合、現地においてシーラバックという水を含んだままポリエチレン又はナイロンシートで密閉してしまう作業を進めたが、これも現地では一部分しか実施できなかった。そこで整理作業の準備段階として水洗し、土器は注記、木製品の場合は注記カードを封入したシーラバックをすべての遺物にしてしまう必要があった。

#### 2) シーラバック仮収納

木製品の場合、数量ともに膨大なため収納箱に水をはって水没のまま保管し整理することでは作業効率が悪い。そこで前述のようにシーラバックにして仮収納することにした。巨大なもの、重要遺物は除いてすべての木製品をシーラバックした。そして先立って遺構編を作るべく調査区ごと、調査面ごと、遺構ごとを優先させ仮収納テンパコを設け、仮収納台帳にテンパコ内の遺物内容を記入し、登録することとした。重要遺物で一見しただけで、用途、器種が判明する物（農具の内でも特に鍔や田下駄など）は最初から別扱いをして実測に回すようにし、この仮収納から別の流れを作っていた。この仮収納台帳整理を済ませたが、終わった段階でいよいよ本格的な遺物整理に入ったわけである。

#### 3) 接合・復元

土器はここで調査区、遺構、層別に接合作業を行った。ただ層別の接合を中心としたものの、意外と上下の層の間で接合できるものもあり、層を越えた土器接合の必要性があった。この段階で実測に優先的に回すものとそうでないものを選別し収納していった。木製品は確かに小片に分割されてしまっているものもあり、同一遺構、層内の接合をある程度試す必要性もあったが、接合だけの作業は設けず次の仮収納作業の中で接合し、合うものがあるかどうかを注意して見ることにした。

#### 4) 分類・仮収納

木製品は2万点を越える数、そして膨大な量のためそれ以後の整理作業が効率よく進むように収納を工夫した。まず、用途がある程度限定できるものを選抜し、実測図作成に回すべく器種別、調査区分、層位別に収納した。これら抽出分の木製品はまず器種別にし、その中で調査区に分け、更に層位ごとテンパコ収納していった。この段階での抽出分は1100点を越える数に上了。そして残りの2万点弱の木製品は遺構編を書く時の資料遺物として各調査区分にし、上層より層位別に並べて遺構出土の遺物は遺構ごとに仮収納した。以上のように抽出分の木製品とその他の木製品という二重構造が出来上がり、その後その他の木製品が抽出分に比べ検討を十分に加えることができないという不手際を招来してしまうことになる。抽出遺物はその場で略測図を作成し、器種別の実測用木製品登録台帳作成

帳を作成した。

#### 5) 実測

実測 B 3 判の方眼紙に描くことを基本とした。B 3 判に収まらない大きな遺物は適宜用紙を選択した。木製品は普通紙では湿気のため収縮するのでセクションフィルムを使用した。土器に比して木製品の場合表現方法が細部において統一されていないため、瀬名遺跡における「木製品実測の約束ごと」を作成し、既ねの実測図の統一をはかった。欠損部分、焼痕部分、樹皮等の表現の仕方、木目の表現の仕方等逐一統一せねばならない問題点が生じた時、「木製品実測の問題点」というノートを一冊作っておき、統一した事項を記しながら進めていった。瀬名遺跡では全国の他の遺跡よりも多数の田下駄、泥よけ等が出土しているためその器形の特徴を示す実測図の表現方法を若干であるが工夫した。記録としては正面、側面、横位断面の三面を図示することを基本として図化していくが、中には多数の杭材を図示する場合正面図と横位の断面図を 2 ~ 3 箇所図示するのに留るもののが多數あった。木製品の実測は先述のように抽出した 1100 点余の分を優先させた。その他杭を含める木製品は時間の許す限り実測を進めたが勿論全部実測完了まで至らなかった。そこで抽出分以外の木製品はまず略測図（既に調査現場でその後の整理にも十分耐えれる略測図が出来上がっている調査区もあった。その場合には現地での取り上げ台帳の略測図をそのまま利用した。）を作り、遺物登録を明確化した。この略測図はフリーハンドで簡潔にスケッチし、全長、幅、厚さの計測値を記入したものである。

#### 6) 遺物の写真撮影

写真撮影 遺物写真是整理作業開始当初においては 6 × 7 の白黒と 35mm のカラーリバーサルの 2 種を撮影していく。途中より報告書の写真図版作成用を中心に考え 6 × 7 の白黒のみに切り替えた。また土器、農具その他立体制的な遺物、長大な遺物は 4 × 5 型の大型カメラによる撮影を行った。上記の撮影の仕方をした遺物は木製品の場合抽出分の 1100 点余のものであり、土器の場合実測可能な遺物に限られた。その他の木製品及びその他拓本をとった土器に関しては集合写真を 35mm 白黒で撮影した。特にその他の木製品は 8 点を一単位とし、次の遺物カードに連動するように撮影していく。ただ農具、土器を中心 4 × 5 のネガが多數整理する必要が出てきた。この 4 × 5 のネガの整理については整理作業段階ではまだ完全な整理収納までは至らなかった。

#### 7) 遺物カード

遺物カード 実測図が出来た遺物は、速やかに実測のコピーを貼付した遺物カードを、遺物一点に対し一枚づつ作成し、勿論当研究所のカードを利用した。裏面には撮影済の遺物写真をサービス版または手札サイズに焼いて貼付した。実測図は完成後トレース版下図作成時にコピーするのに用いるのみとし、基本的な遺物の整理はこのカードを中心に行うようにした。カードには特に法量についてその後の整理が効率的なように計測値を詳細に記入していく。以上のような遺物カードは実測図が出来た遺物に関してでありそれ以外の 19,000 点もの木製品は 8 点につき 1 枚のカードとした。略測図のコピーを 8 点分貼付し、各区、層ごとに遺構ごとに整理し作成した。

#### 8) 遺物登録

データベース 木製品、土器、金属器、石器、すべての遺物に関してカード型データベースのソフトを用い 1 点 1 点登録した。登録項目に関しては「遺物の分類と整理」（静岡文研情報処理検討委員会 1991）に沿い項目設定したが若干の項目追加をして瀬名遺跡の遺物整理の現

状に合うようにもした。たとえば木製品では「器型」（細項目に示せない器型上の特徴）、「プレバラート作成」、「復元最大径」などの項目を追加することによりその後の便宜をはかった。木製品の場合、2万点余りにものぶるため先述の1,100点余りの抽出分の木製品は器種別に登録し、余りの1万9,000点余りは1区より現地における「木製品取り上げ台帳」の記載順に登録していった。このパソコンの遺物管理により実測図管理、写真管理、保存処理の進行把握、遺物の収納保管、観察表の作成等、遗漏なく円滑に作業が進んだ。特に遺物の収納保管に関しては基礎台帳の役割を果たした。

#### 9) 観察表の作成

土器、木製品、金属製品、石器は実測できたものに関しては基本的にすべて観察表を作成した。木製品に関しては当研究所の「大谷川Ⅲ（遺物編）」（静埋文研 1988）及び「大谷川Ⅳ（遺物・考察編）」（静埋文研 1989）等の観察表を参照しながら、特に製作技法、形態について客観的な文章で記録することを心掛け、また器種によってはその用途を考える時必要になってくる計測値などを盛り込んで作成していった。本報告書ではそのすべてを記載できなかったが出来る限り観察表を載せた。

#### 観察表の 作成

#### 10) 報告書の作成

以上の遺物整理の流れで遺物編の報告書を作成していった。平成5年度は遺物編Iとし、遺物編の土器、金属器、石器の総体、及び木製品は建築材及び用途不明木製品の一部を除いた大半を報告書を扱い報告した。木製品の建築材、文字資料、用途不明木製品の一部等及び自然科学的分析は平成6年度以降刊行予定の遺物編IIで報告する予定である。

#### 11) 遺物の保存処理

木製品と金属製品は保存処理を行った。特に木製品は2万点を越える数であるため早日に計画的な処理方法を立案、実施することが要求された。木製品の抽出分1,100点余りに関してはPEG（ポリエチレンゴリコール）含浸法を中心に、曲物等薄く小型で脆弱なものに関しては真空凍結乾燥法を併用しながら処理を実施した。抽出分のPEG処理は加熱式の処理槽内で100%PEGを含浸させる丁寧さで実施した。その他の19,000点以上にもなる木製品に関してはスギ材で残存状態が良好なもの（このようなものは総数の9割を越える）は常温でPEGを40%まで含浸させる処理方法を採用了。PEG40%含浸の処理はまだ未開発であるため実験的に試行錯誤を繰り返しながらの作業になった。

#### 木製品の 保存処理

このPEG40%含浸処理の方法は近い将来、計量的データも明示されながら報告される予定であるが、ここでは極簡潔に要点のみ報告する。この方法は元来針葉樹材で残存状態良好な杭などを簡便に処理する方法はないかと模索され、試行されたものである。まず木製品に不純物が付着していないよう水で洗う。そして第1段階としてPEG20%溶液の中に木製品を浸した。今回はこの処理槽をビニールハウスで覆い、出来るだけPEG溶液の温度を上げ含浸速度を上げるようにした。この20%溶液には3ヶ月浸すとほどの木製品も重量が安定することが実験結果でわかった。3ヶ月20%溶液に浸した後、40%溶液にやはり3ヶ月浸した。この40%溶液中でも3ヶ月で安定する。木製品を溶液から取り出し表面を水洗いまたは濡れた布等で表面のPEGを拭いとる。あとは風通しのよい室内で自然乾燥させる。この乾燥の期間については、まだ明確な実験データが出ておらず、現段階では明示できないが、概ね6ヶ月～9ヶ月は必要であろうと推測している。平成5年現在ではまだ経年変化のデータが出揃っていないためこの程度の把握しかできていないが、以上のような処理でその後常温で日陰の保管に十分耐え得る仕上がりである。PEG常温

#### 常温含浸法

#### PEG40% 含 浸

含浸処理の方法は遺物編Ⅱで計測データを示しながら詳述したい。

12) 遺物、図面の収納保管

収納・保管 の 方 法 パソコンによる遺物登録をベースに調査区分、層位別、遺構別で遺物はテンパコに収納保管する。ただ木製品の場合は、抽出分はそれだけです器種別に収納し保管することとした。遺物の実測図面の管理、保管のため、実測図台帳を作成した。これら遺物、遺物実測図の収納整理は8)の遺物登録の時既に併行した作業として実施した。完全な形での収納保管は遺物の保存処理も全て完了した段階で確定する。

13) 土器の整理の方向

瀬名遺跡から出土した土器は、コシテナで約133箱と調査面積に比べ多いとはいえない。しかし、多年次にわたる調査により担当者の変更もあり、整理は先送りが繰り返されてきた。そのため、前年度に報告された遺構編Ⅰでは、遺物整理の遅滞により、提示できた土器は非常に少なく、遺構の記述に間連する時期及び性格等について若干の曖昧さを残すものもあったといえよう。ここでの報告は遺構編Ⅰを補完することを第一義と考えた。そこで、遺構編Ⅰの方針に合わせ、各調査区ごとの出土遺物を下層から層位順に並べて報告することにより、遺構と遺物との関係を把握することに重点を置いた。特に現地調査及び整理の担当者が遺構の時期を決定する根拠となった土器については小片でも極力図化することに努めたが、復元に関して若干疑問の残るものがあるかもしれない。また同一層内に大きな時期差が存在するものもあるが、残された記録(図面・台帳・ラベルなど)に忠実に従った結果である。

<参考文献>

- |               |       |                     |
|---------------|-------|---------------------|
| 静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1987年 | 『瀬名遺跡－昭和61年度発掘調査概報』 |
| 静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1991年 | 『瀬名遺跡調査概報』          |
| 静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1988年 | 『大谷川Ⅲ 遺物編』          |
| 静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 1989年 | 『大谷川Ⅳ 遺物・考察編』       |

## 第Ⅱ章 土器

### 第1節 1区出土土器

#### 28層出土土器

1はややすんぐりとした算盤玉状の胴部を呈する壺である。口縁部は緩やかな受け口状をなしており、7段の備描き横線文が頸部から胴部にかけて施される。灰白色を呈し胎土は非常に緻密であり、搬入品の可能性が考えられる。弥生中期後葉の長床式であろう。13 長床式は壺の胴部で、沈線区画の内側を縦文で充填したものである。弥生時代中期後葉に位置づけられる。

#### 26層出土土器

26層は疊混じりの粘土層で遺構の確認はなされていない。2、3はいずれもの底部で、砂粒・石粒を多く含んでいる。2は底部が厚く突出するもので、外面を荒いタテハケで調整し、裏面に木葉痕が残る。2は弥生時代中期後葉、3は弥生時代中期末から後期初めに木葉痕位置づけられよう。

#### 22層出土土器

22層からは水田が検出されているが、4～7、13は畦畔から出土したものである。4は複合口縁の壺である。全体に摩滅が著しいが、口縁部に備描き波状文が施されている。5は丸味を帯びながら緩やかに屈曲する壺で、器壁がやや薄い。6、7は壺の底部だが、いずれも小片のため詳細は不明である。13は壺の頸部で、幅の狭い繊細な備描き横線文・波状文が施されている。8～12、15は耕作土中からの出土である。8は薄い粘土帶を貼り付けた折り返し口縁の壺で、頸部は太めで短く、無文である。9はやや内湾気味の口縁部で、端部がやや肥厚するものである。10は胴部下位に緩い稜を持つ壺で、底部は上げ底状となる。外面はヘラミガキで丁寧に調整されている。胎土・色調など在地のものとは異なっている。弥生時代中期後葉の白岩式に比定できるだろう。11は壺の底部で、胴部は直線的に白岩式立ち上がる。12は台付壺の接合部だが、摩滅により調整等は不明である。15は壺の肩部である。5条の備描き波状文と横線文を施文後、細い棒状浮文を貼付したものである。

時期は10を除いて考えると、4、8が弥生式土器の指向を持つ土器で、古墳時代初頭に位置づけたい。15は弥生後期後半と考えたい。他のものについては弥生後期後半～古墳時代初頭の範疇に収まると理解したい。

#### 20層出土土器

16～19は20層中より出土した土器である。16は小型丸底土器である。偏平気味の胴部に 小型丸底  
わずかに屈曲する口縁部がついたもので、口縁部高：胴部高はほぼ1：1である。古墳時 土 器  
代前期に位置づけられよう。17は壺の口縁部だが、小片のため、復元に若干難が残るかも  
知れない。18は須恵壺である。やや内湾気味に体部は立ち上がり、底部には糸切りが残る。  
19は長胴壺である。口縁部を水平に屈曲させ口端部をつまみ上げて丸く收める。器壁は非 長 脇  
常に薄い。18、19ともに8世紀後半から9世紀の間で考えたい。20はS R 12001の右岸 手捏ね土器  
に位置する斎串等集中出土地点出土の手捏ね土器である。一応壺形と考えているが、不整 手捏ね土器  
形で歪みが大きく、焼成も非常にあまい。21は小型の壺で、器壁の薄いものである。内面

駿 東 坏 は丁寧なナデによって調整されており、雲母を多量に含んでいる。22、23は所謂駿東坏である。22は小片で摩滅が著しく調整等は不明瞭だが、23は外面ヘラミガキ、内面には放射暗文風のヘラミガキが施される。時期はいずれも9世紀代とすることができよう。

#### 19層出土土器

19層は条里型水田と考えられている水田跡である。24は須恵坏である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部を外に引き出して丸く収めている。西駿系と考えられるもので、9世紀代に比定できよう。25は灰釉大壺で、口縁部を若干立ち気味に緩く屈曲させている。26は灰釉壺の底部である。小さい高台部は、端部が丸く仕上げられ、やや外に張り出している。25、26ともにO53号窯式期に併行する時期のものと考えたい。

#### 18層出土土器

18層は19層と17層に挟まれた砂層で、直接遺構とは関連するものではないが、参考として掲げておきたい。27は須恵坏で、底部の端には鋭さを欠く偏平した四角形の高台が貼り付けられている。28は大平鉢で、緩やかに内湾して立ち上がる体部から口縁部を若干引き出して丸く収めている。

#### 17c層出土土器

17c層からは2棟の掘立柱建物跡が検出されているが、出土した土器は柱穴31内の灰釉壺60のみである。高台は三角形を呈するもので、体部は深めで緩やかに内湾している。底盤には墨書きがあり、「前」と読めよう。O53号窯式期に併行するものと考えられる。

#### 17b層出土土器

3層に分層された17層中最も多くの土器を出土した層であるが、出土箇所の詳細は不明である。29~37は灰釉壺である。体部が内湾気味に立ち上がるものを基本とするが、31のように内湾が弱く体部中位で弱い稜をなすものや、32のように直線気味に立ち上がるものもある。口縁部は外に引き出すものと引き出さないものとに分けられるが、31、32は大きく引き出し丸く収めている。高台は定形的なものがなくなり、バラエティーに富む。30は端部が丸く認められた断面逆台形を呈するもの、33は端部を若干内湾させたやや高めのもの、34は端部の丸い四角形のもの、35は端部を内湾させた外に張り出し気味の四角形、36は三角形、37は端部の丸い四角形である。38~43は山茶壺である。いずれも器體が厚く、内湾して立ち上がる体部からわずかに口縁を引き出して丸く収めている。高台が残存しているのは38と43であるが、両者とも端部の丸い四角形を呈するものである。44~52は小壺である。体部の形態から、丸く内湾気味に立ち上がるもの(44、51)、見込み部分で稜をなし屈曲するもの(45、46、47、48、49)、直線的に立ち上がり屈曲するもの(50)に大別されよう。この中で、46は偏平で歪みがあり、皿形に近いものである。44は口縁部を内湾させ、やや尖り気味に収めている。50、51は口縁部を外に引き出し気味に仕上げている。高台は潰れた三角形状のものが多いが、45は外に張る長方形、48は丸みを帯びた逆台形を呈している。53、54は大平鉢である。53は直線気味に立ち上がり、口縁部を緩く屈曲させることもある。54は高台部で、端部が丸く外に張り出るものである。55は縁釉碗の底部である。鋭さを欠いた四角形の高台で、裏面は沈線状に強いナデが加えられている。

#### 17a層出土土器

17b層水田を覆った砂礫層から出土したものである。56は山茶壺で、内湾する体部から模倣壺で、端部が丸く外に張り出るものである。57は土師の模倣壺で、丸味を帯びた三角形様の高台である。58は白磁碗である。直線気味に立ち上がり屈曲するものである。59は白磁碗である。直線気味に立ち上がり屈曲するものである。

上がり、口縁部をわずかに引き出すもので、体部には型押し蓮弁文が施されている。59は 型押し蓮弁文  
壺である。口縁部は肥厚し、断面三角形を呈している。

#### 16層出土土器

61、65は灰釉壺である。61はやや内湾気味の体部から口縁部を軽く引き出している。65  
は端部の丸い三角形高台である。62~64は山茶壺である。62、63は内湾する浅い体部から  
口縁を軽く引き出し丸く収めるもの、64は直線気味に立ち上がるるものである。66は小壺で、  
外に張り出す三角形高台を持つ。67は青磁碗で、体部が直線的に立ち上がり、内面にヘラ  
による施文が施されるが、小片のためモチーフは不明である。龍泉窯のものと考えられ、 青磁碗  
12世紀後半に位置づけられる。68は常滑産の壺で、外面には格子状の叩き目が残る。12世 常滑産  
紀代のものであろう。

#### 13層出土土器

69は灰釉壺である。欠損が大きく高台の接合部分の位置などは不明であるが、底部から  
大きく屈曲して直線的に立ち上がり、口縁部は強くなっている。70の小壺は緩やかに湾曲  
する体部からわずかに口縁部を引き出している。71、72は山茶壺の底部で、いずれも偏平  
に潰れた四角形の高台を持つ。13世紀代のものであろう。

#### 10層出土土器

10層は土器の出土量が少なく、また小片が多いため、図化できたのは、73の1点だけ  
ある。青磁碗で、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。時期的には13~14世紀に 青磁碗  
かけてのものであろう。

#### 3層出土土器

3層は調査対象外の上層の砂礫層であるが、出土した土器を一応紹介しておくことにし  
た。74は灰釉壺で、端部が丸味を帯びている四角形高台を呈す。75は須恵高坏で、透かし  
のない中空のものである。8世紀代のものと考えられよう。

#### S R 1 - 01

調査区の東側を流れる旧河道から出土した土器であるが、出土層位などは不明であり、  
紹介するにとどまる。76は須恵坏で、稜の弱い四角形を呈する高台が付く。77は灰釉壺で  
ある。底部は糸切り未調整で、四角形の大きな高台が付く。78は山茶壺の底部で、低く潰  
れた高台が貼り付けられている。79は青磁碗である。小型のもので、口縁端部を水平に引  
き出し鎌首状に収めている。型押しの蓮弁文が施されており、龍泉窯のもので13世紀代と 青磁碗  
考えられる。80は高坏で、直線的に開く中空のものであるが、全体に摩滅が激しく調整等  
は不明である。古墳時代中期のものであろう。81は台付壺の脚台部で、やや外反気味の台  
形を呈したものである。時期は特定できないが、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて  
のものと考えたい。

## 第2節 2・3区出土の土器

#### 21a層出土土器

1は21a層中より出土した壺の破片である。肩部と考えられるが、浅い单斜条痕による  
調整である。弥生時代中期初頭丸子式のものと考えられよう。

丸子式土器

#### 20層出土土器

20層出土の土器は、洪水痕跡内より出土した小片が主体となっているが、2、7は20層

中と考えられるものである。2は壺の胴部と考えられるが、細いヘラガキの沈線が施されている。7は縄文の施された細頸壺の口縁部であろう。3～6は洪水痕跡中のものである。

3は壺の底部で、直線気味に胴部につながる。4、5は粗製の鉢の口縁部である。いずれも竹管状工具によると考えられる3本の平行沈線が施され、5には内面にも沈線がめぐっている。6は浅鉢の口縁部で、緩やかな波状をなしている。直線的な菱形をモチーフとしている。

**浮線網状文** 6は浮線網状文が施されており、内面は丁寧に研磨され、金雲母を多く含んでいる。4～6は縄文時代晚期終末に位置づけられる。

#### 16層出土土器

8は調査区の東南に位置するS D2601から出土した壺で、16層水田の時期認定の資料となったものである。口縁部の開きが小さい細頸のもので、口端部にLRの縄文を施している。9～13は調査区西側の非水田域から出土したもので、いずれも壺の破片である。全体に摩滅が著しく、調整が不明瞭なものが多い。9は大きく外反する単純口縁、10は胴部を欠いているが同一個体の壺で、細い長頸を呈すものである。11～13は厚く突出した底部である。時期はほぼ同一の時期と考えているが、弥生時代中期後葉に位置づけておきたい。

#### 14層出土土器

14層は土器の出土量が非常に少なく、畦畔から出土した2点のみである。14はSK21401から出土した壺である。口縁部を欠いているが、頸部は短かく、下半に不明瞭な後を有する球状の胴部を呈しており、全体にすんぐりとした印象を受ける。頸部には拂描き波状文が施され、円形浮文が貼付される。弥生時代後期前半に位置づけられよう。15は壺の底部で、やや直線気味に胴部は立ち上がっている。

#### 12層出土土器

16は壺の口縁部である。直線気味に外に聞く単純口縁で、内外面ともにハケにより調整される。17は壺の底部で、厚く突出しており、胴部は直線的に立ち上がっている。調整はやや粗く、外面には指頭圧痕が残る。18は壺の底部である。平底の薄い底部から胴部は直線気味に大きく外に聞きながら立ち上がる。19は小型壺で、口縁部及び底部を欠損している。全体的に偏平した無花果形を呈している。20は台付壺の脚部である。残存部分はやや細身で、小型の壺かもしれない。21はS字状口縁台付壺で、12層水田の時期決定の資料としたものである。胴部は羽状にハケメがつけられ、上位には平行線文が施されている。赤塚分類C類の範疇に収まるものと解したい。16、17は弥生時代中期後葉に、18～20は弥生時代後期と考えておきたい。

**S字状口縁台付壺** 21はS字状口縁台付壺で、12層水田の時期決定の資料としたものである。胴部は羽状にハケメがつけられ、上位には平行線文が施されている。赤塚分類C類の範疇に収まるものと解したい。16、17は弥生時代中期後葉に、18～20は弥生時代後期と考えておきたい。

#### 10層出土土器

10層は砂礫層であるが、流路・堰が検出されており、土器は流路S R21001からの出土が大半である。

**(S R21001内出土土器)** 高坏(22～25)、小型壺(26)、小型土器(27)、壺(32～34)、壺(35～37)が出土している。高坏は4点である。22は口縁部が内湾気味に收められ、23は直線的に聞くという違いはあるが、両者とも坏部下位に棱を持ち、脚部が緩やかに膨らみながら外方に聞き気味に伸びて屈曲し裾部が大きく聞く点で共通している。25も同様の形態である。24の脚柱は聞きの小さい円柱状のものである。脚部内面の調整に相違が認められるものの、坏部・裾部はナデ、脚部外側へラミガキは共通している。26の小型壺は器壁が全体に薄い。半球状の胴部から、緩やかに屈曲して内湾気味に大きく外方に聞く口縁部を持つ。小型土器の27は壺形を呈するものである。胴部は球状で、口縁部は聞きの小さ

い直立気味のものである。30、31は壇、32～34は球形の胴部を持つ大型の壺である。30は器壁の薄い口縁部、31は偏平球状の胴部を呈する上げ底状のものである。大型壺はいずれも欠損しており、全体の形状は不明である。この内、32、33は灰白色を呈するもので、口縁部を欠くが、色調・胎土から9層で出土している壺と同様に折り返し口縁を持つものと思われる。34は32、33に比べてやや小振りだが、やはり口縁部を欠いている。球形の胴部で、底部は厚く突出している。壺は3点出土している。35は胴部中位に最大径を持つやや歪みの大きい丸底のものである。口縁部の屈曲は強く、若干肥厚する。36は平底で、胴部上半に最大径を持つ提灯形のものである。口縁部の屈曲は弱く直立気味に立ち上がる。37は平底の壺で、内面に炭化物が付着している。以上のものは全て、古墳時代中期と考えられよう。28、29は時期的にはずれるものである。28は直線的に外方に開く高坏の脚部で、円孔を有し、彫描き横線文が施されている。弥生時代後期後葉の欠山式に含まれるものであろう。29は小型器台の脚部である。器受部及び裾部を欠いているため、全体の形態は不明である。一応古墳時代前期としておきたい。

〈10層中出土土器〉 砂疊層内より出土したものである。38、39は高坏である。38は坏部下位に明瞭な稜を持ち、口縁部は内湾気味に認められる。脚部は緩やかに膨らむ円柱状を呈し、裾部は大きく屈曲して開いている。39は裾部を欠損している。坏部の稜は不明瞭で、直線気味に立ち上がる。脚部の膨らみはわずかで、外方に開きながら伸びている。40は複合口縁の大型壺、41は若干内湾気味に立ち上がる壺の口縁部である。いずれも古墳時代中期に属するものである。

#### 9層出土土器

9層からは流路と杭列を検出しているが、調査区西側微高地からは多くの土器が出土している。

〈S R 20901内出土土器〉 42は裾部を欠損した高坏である。坏部下位に稜を持ち外反気味に立ち上がる。脚部はわずかに膨らみながら外方に伸びるものである。43は壺である。球形の胴部を呈し、口縁部はくの字に屈曲して立ち上がり、口縁端部はヘラ工具による強いナデ調整が行われている。

〈西側微高地出土土器〉 遺構編Ⅰで土器集中群として報告されている。ここでは遺構出土ではないが、グリッド杭20列以西から出土した土器を一括したものと捉えたい。出土した器種は高坏・壺・壺・壇・小型壺・小型土器で、基本的な器種構成の内、壇・坏・鉢・瓶を欠いている。高坏は3点だが、いずれも摩滅・剥離が著しく調整は不明瞭である。44、高45はともに坏部下位に明瞭な稜を有するもので、44は坏部の屈曲が大きく深めで、脚部はわずかに膨らむ円筒状をなしている。坏部底から中空の脚部にホゾを差し込むことにより接合している。45は大きく開く坏部で口縁端部を内側につまんで収めている。脚部は短めで円錐状に伸びるものである。46は緩やかな膨らみを持ちながら外に開くものである。

壺は51～56である。胴部はいずれも球形を呈すが、折り返し口縁のものと単口縁のものとに分けられよう。折り返し口縁のものは51、52、55、56が該当するが、先に述べた10層の32、33もこれらと同一のタイプであろう。口縁部は厚い幅広の粘土帯を貼り付けた後、端部を強くなることにより形成している。胴部は球形で器壁が厚く、底部は厚く突出している。胴部内面はハケ調整、外面は摩滅により不明だが、32の例からヘラミガキを想定することができよう。口縁部から頸部にかけてハケメが一部で認められることから、外面はハケ後にナデが加えられたと考えられる。色調は灰白色が主体で、胎土中に長石・赤色

折り返し  
口縁

炭化物

欠山式  
小型器台

壺

壺  
折り返し  
口縁

**單 口 線** チャートを含む点で共通している。單口線のものは53、54の2点である。53は口縁部がくの字に屈曲し直線的に外方に開くもので、口縁部はやや厚く、胴部との接合部で粘土のはみ出しが明瞭に認められる。調整は外面がヘラミガキ、内面はハケメである。形態から壺としたが、胴部下半には煤が付着しており煮沸に用いられたとも考えられる。54は口縁部の屈曲が弱く直線的に外方に開くものである。器壁は全体に薄く底部で若干の歪みが認められる。

**甕** 壺は57~65と脚部のみの71である。口縁部の屈曲と胴部の形態からいくつかに分けられる。口縁部はA：屈曲が強く「く」の字を呈するもの（57、61）とB：屈曲が弱く丸味を帯びるもの（58、59、60、62、63）とに分けられ、Aの器壁が厚く、Bがやや薄い傾向を認めることができる。胴部は欠損品が多いため確実には分けられないが、a：球形を呈するもの（57、58、59、62、63）とb：長胴化傾向もの（60、61）に分けられよう。調整はハ

**台 付 壺** ケメが基本となるが、口縁Bの62、63はナデ（板ナデ）調整が認められる。台付壺は64と71の2点である。64は胴部中位に最大径を持つ偏平気味の球形を呈している。口縁部の屈曲は丸味を帯びており、外面は板ナデが顯著である。

**壠** 壇は48~50である。48は胴部を欠損しており全体の形態は不明だが、口縁部の屈曲が大きいものである。49、50は口縁部の屈曲が弱く最大径が胴部にあるもので、調整はとともにハケ後にナデが行われている。

**小 型 増** 小型壠は66、67、68である。66は口径と胴径がほぼ同じでハケ調整、67は胴部が偏平気味な点から、胴部に最大径があると考えられるもので板ナデ調整である。68は球形の胴部

**小 型 土 器** に短い口縁部が付くものである。69、70は小型土器である。69は壺形、70は鉢形に近い形態である。

これらの土器の位置づけを器種構成や各器種の形態から考えてみたい。器種は先に述べたように、高杯・壺・甕・壠・小型壠・小型土器である。壺は折り返し口縁を持つ大型のものが残っており、壠よりも卓越している。甕は球形を呈するものが多いが、長胴化の傾向を持つものも現れ、また口縁部の屈曲が小さく丸味を帯びたものやナデ調整といった新しい要素も認められている。そのため古墳時代中期前葉から中葉の段階というやや長い時期幅をもつと考えるのが妥当なようである。また先に述べた10層のS R21001出土の土器も時期的には大差がないと考えられよう。

**駿 東 壺** 72は微高地から出土したものだが、所謂駿東甕と呼ばれるものである。時期的に後出するものであり、混入したものと考えられよう。65はS R20901の左岸の土器集中群から出土したのだが他には実測可能なものはほとんどない状態であった。やや厚めの器壁を呈したもので、口縁部がくの字に屈曲するものである。

#### 8層出土土器

**駿 東 甕** 8層は出土量が少なく、図化できたのは73のみである。駿東甕の範疇に含まれるものであろう。口縁部内面の肥厚は顯著ではないが、内側を強く撫でることにより整形している。胴部が欠損しているため、全体の形態は不明だが、外面には細かいハケ調整がなされている。

#### 6層出土土器

74~77は灰釉壺である。74は体部が直線気味に立ち上がる浅めのもので、濱け掛けによる施釉が施される。75~77は無施灰釉で、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部を外に引

**土 筋 坏** き出して丸く収めるものである。O53号窯式期に併行するものであろう。78は土筋坏で

ある。外面ヘラケズリ、内面は不明瞭だが、同心円暗文状にヘラミガキがなされている。駿東坏の範疇に含まれるものであろう。79は畦畔SK20602から出土した須恵壺である。駿東坏口縁端部を上下に引き延ばし、頸部には断面三角形の突帯が貼り付けられている。8世紀代のものと考えられよう。

#### 5層出土土器

5層は水田の可能性を持つ粘土層である。80は小壺である。内溝して立ち上がる体部からわずかに口縁部を引き出している。81は古墳時代中期の高坏で混入したものである。大きく外に開く円錐形を呈すが、摩滅により調整は不明である。

#### 4層出土土器

4層も水田の可能性を持つ粘土層である。82、83は山茶壺の底部で、潰れた台形状の高台を持つ。13世紀代と考えておきたい。84はミニチュアの坏で、ロクロにより丁寧に整形され、底部には糸切り痕が残る。

#### 3層出土土器

85、86は畦畔SK20302より出土したものである。85は型押しの蓮弁文を持つ青磁碗で、青磁碗である。86は灰釉壺の底部である。潰れ気味の長方形高台を持つもので、底部は糸切り未調整である。87は不明。

### 第3節 5区出土土器

#### 14a層出土土器

14a層上からは水田跡が検出されているが、出土した土器は全て水田域からはずれたものである。1は水田西側の層中(14a層)より出土した壺の胴部である。胴部下位に最大径を持つ無花果形を呈すると考えられるものである。全体の形態が分からぬいため時期は特定できないが、弥生時代中期末～後期前半に位置づけられよう。2～6は水田西側の窪地内から出土している。2は胴部中位に最大径をもつ長球状の壺で、頸部は緩やかなカーブを描いて立ち上がり、口縁部の開きは小さい。頸部から肩部にかけて、重三角文が描かれ、半截竹管による刺突が施されている。3は胴部下位が大きく張り出す算盤玉状に近い壺である。底部を欠損しているが、厚く突出する小さいものであろう。頸部から胴部上半部にかけて、櫛描き横線文と櫛書きによる垂下文が施されている。4は壺で、口縁部は指頭押圧により成形され、外方に開いている。外面は全体をハケ調整後、胴部上半に斜行する沈線と横位の沈線が施されている。5の壺は、口縁部の開きが小さいもので、単位の長いハケメが施されている。6は口縁部にハケ工具による刻み目が施された壺である。2～6はいずれも弥生時代中期後葉の範疇に含まれるものである。

#### 13b層出土土器

13b層は調査区西側のみに堆積する緑灰色の粘土である。7は胴部下位が大きく張る短頸の広口壺である。口縁部は摩滅・剥離が著しく調整不明瞭だが、胴部上位を糸痕、下位をハケで調整している。8は壺である。口縁部の開きはやや大きく、指頭押圧により波状に形成されている。胴部の調整はハケである。9は小型の壺であるが、口縁部を短く水平に引き出し波状に整形している。調整の点から7に比べ8、9が後出と考えられるが、全て弥生時代中期後葉に位置づけられよう。

#### 13a層出土土器

条 痢

13a層上の確認面で検出された2本の流路から出土した土器と13層中から出土した土器に分けて報告したい。

〈S R51301出土土器〉 壺・甕が出土している。壺は法量的に大型のもの(10)と中型のもの(11、12、13)に大別できそうである。10、11は口縁部から頸部にかけてのもので、口縁部は大きく外反して開き口縁端部を丁寧に面取りし、豆粒状の浮文を貼付している。

- 籠 目 12、13は胴部である。12は胴部下半が大きく垂れて張り出しており、不鮮明ではあるが籠目が残っている。13は頸部がやや細目で、最大径がやや上方にある。施文はいづれも頸部に櫛描き波状文が施され、赤彩の痕跡が確認できる。また10には口縁端部にも櫛描き波状文が施文されている。14は台付甕である。胴部中上位に最大径を持つもので、口縁部の屈曲は小さく、端部にはハケ工具による刻み目が施されている。15、16の甕は小片のため、復元に難があるかもしれない。15は胴部上位に最大径があるので、半球状を呈したものであろう。口縁部の屈曲は大きく水平気味に引き出され、端部には刻み目が付けられる。16は口縁部が屈曲し直立するもので、端部を面取りした後に、薄い板状の工具で刻み目を施している。17の甕は中部高地系の甕である。頸部に簾状文を施し、それを挟むように上下に櫛描き波状文が施文されている。胴部下位はヘラミガキによって丁寧に調整されている。胎土も婁母を多く含むなど在地のものとは明らかに異なっており、搬入品と考られる。弥生時代後期前半の時期が与えられよう。

〈S R51303出土土器〉 18は口縁部が大きく外反する壺である。口縁端部は面取りされた後、櫛描き波状文が施され、豆粒状の浮文が貼付される。また頸部には櫛描き波状文が施されており、S R51301出土の中型の範疇に含まれよう。弥生時代後期前半のものである。19は壺の底部でやや上げ底気味である。弥生時代中期の終わりから後期にかけてのものだろう。20は甕である。指頭押圧により形成された口縁部は緩やかなカーブを描いて直立気味に立ち上がりっている。

- 壺の分類 〈13a層出土土器〉 13a層から出土した土器は壺・短頸壺・甕で、高杯・鉢などは確認することができなかった。壺は口縁部の形態を中心に便宜上以下の4つに分けることができそうである。

- A : 外方への開きが小さく直立気味の単純口縁
- B : 口端部に粘土帯を貼り付け、直立させたもの
- C : 外反があまり大きくない単純口縁
- D : 大きく外反し、端部を丁寧に面取りした単純口縁

Aには21、22が該当する。弥生時代中期後葉有東式期のものだが、21は器壁が非常に薄いもの、22は頸部に指頭によるくぼみを付けて施文の効果をあげている。Bは26の1点だけであるが、立ち上げた口縁部には縄文(L R)が施されている。Cには細長い頸部と無花果形の胴部を持つ完形品の25が概当しよう。器面は全体をハケ調整しており、頸部に文様帶(縄文)を有する。23は口縁部のみ、24は肩部以下を欠いているが、25と同様の形態と考えられ、口端部には縄文が施されている。また口縁部を欠いているが、形態上の特徴から29・30・31も含めることができると考える。29は大型品で頸部に縄文(L R)が施される。30は頸部が長く胴部下半が垂れているものである。器面全体をハケ調整後、頸部に櫛による横線文・波状文が施文されている。31は胴部下半が大きく張り出すものだが、30と同様の調整・施文が行われている。Dは27、28とともに大型品であろう。27は口端部に櫛描き波状文が施され、棒状浮文が貼付される。28は無文のもので、器面全体にタテハ

ケ調整が行われている。次に胴部のみのもの（32～37）だが、胴部下位に最大径を持つ無花果形を呈するものが大半を占めるが、大きく垂れるもの（33）や中位が張る算盤玉状のもの（36）も存在する。底部は34のようにやや厚く突出する印象のものもあるが、その他は突出が顕著ではなく、本葉痕が残るもの（25、30～35）が多い。

短頸壺は37の1点である。胴部下半に最大径を有するもので、器面をハケ調整によって仕上げている。

底部には木葉痕がわずかに残るが、ナデにより不鮮明である。

壺も口縁部の形態から便宜上以下のように大きく3つに分類しておきたい。

#### 壺の分類

A：指頭押圧により口縁部を波状に成形するもの

B：指頭押圧の後に刻み目を入れたもの

C：刻み目を持つもの

Aは38～43、49である。38、39は胴部上半に最大径を持つ半球形を呈し、口縁部は大きく屈曲して外方に開くもので、法量的な差異が存在している。底部を欠損しているが42も同様な形態であろう。49は胴部中位に最大径を持つもので、口縁部は大きく屈曲しているが、指頭押圧が弱く一見すると単口縁という印象を受ける。40、43は口縁部が短く屈曲がやや小さいもの、41は屈曲が弱く直立気味のものである。胴部はいずれも下半部を欠損しているため全体の形態は不明だが、直立気味に立ち上がっている。Bは44の1点である。口縁部は短く屈曲も小さいもので、外面を指で押さえて波状に作り出した後、斜め方向からハケ工具で刻みを入れている。Cは刻みの付け方や胴部の形態からさらに分類することができるかも知れない。45、46は口端部の後に刻みを入れるものである。45は刻みが非常に小さく、胴部は中位に最大径を有し、下半部は直線的である。46も胴部中位に最大径があると思われるが、短い口縁部は大きく外に屈曲している。47、48は口端部を面取りした後に刻み目を入れたものである。48は大型品で胴部下位を一部欠いている。口縁部は短くなく屈曲の小さいもので、口端面に斜め方向からの細いヘラ状の工具で刻みを入れている。胴部は中位で大きく屈曲して立ち上がっている。脚台部は器壁が厚い安定感のあるもので、接合部には豆粒状の大きな浮文が貼り付けられる。胎土は緻密で、色調も黄灰色を呈しており、在地のものとは異なる印象を受ける。脚台部のみのものが3点ある。50は小型の壺の脚台部と思われる。51は大きく外に開く低いもので、38、49と同じく胴部からホゾを差し込むことによって接合している。52は開きの小さい脚台部で、接合部はナデにより調整されている。

13a層の時期だが、包含層という性格もあり、若干時期幅があるものと考え、弥生時代中期後葉～弥生時代後期前半の中に収めたい。しかし、壺Cと壺Aが13a層では主体となっていることを考えると、流路出土の土器よりも先行するものと解釈しておきたい。

#### 12層出土土器

12層上の確認面では水田跡が確認されている。出土した土器は少量で、12層水田下と記録されており、12層中の耕作の及んでいない下位からの出土なのか、12層下の青灰色砂層からの出土なのかは不明である。53は壺である。胴部下位に最大径を持つ無花果形を呈している。口縁部は大きく外反しており、口端部には薄い粘土帶を貼り付けて肥厚化させ、丁寧に面取りを行っている。文様は摩滅により不鮮明だが、頸部に柳描き波状文が施されている。弥生時代後期前半のものである。54は内湾気味に大きく開く壺の口縁部である。口縁部及び口端部に柳描き文が施されている。胎土には雲母が多く含まれており、在地の

**中部高地系** ものとは異なる。中部高地系のものであろう。55は指頭押圧により波状に形成された口縁部を持つ壺である。口縁部は屈曲が小さく短いものであり、胴部は若干歪みを持っている。弥生時代中期後葉のものであろう。

#### 10層出土土器

56は幅広の薄い粘土帯を貼り付けた折り返し口縁の壺である。無文のもので、口端部には豆粒状の小さな浮文が貼付されている。57、58はともに単口縁の壺である。57は球形の胴部を呈し、口縁部の屈曲がややきついものである。58は広口のもので、底部を欠いているが台付壺であろう。59は小型高坏、60は高坏で、坏部下位に稜を持たないものである。時期としては56、58といった弥生時代からの系譜を引くもの、59は外米の新しい器種と考え、古墳時代初頭～前期と考えたい。また57、60は後出するものであり、古墳時代中期まで下るものであろう。

#### 9層出土土器

10層上に堆積した厚い砂礫層中から出土したものである。61、62とともに、口端部に薄い粘土帯を貼り付けた折り返し口縁の壺で、弥生式土器への指向が強い土師器と考えられよう。61には口縁部内側に小さな円形浮文が貼り付けられている。

#### 8層出土土器

8層は層中より流路、上層の確認面より水田を検出しておらず、ここでは流路内出土のものと層中より出土のものとに分けて報告したい。

**高杯** 〈S R50801出土土器〉 出土した遺物は高坏・壺(台付壺)・壠・小型壠・鉢・坏などは確認できなかった。高坏は63～70である。坏部の形態から下位に明瞭な稜を有するもの(63～66)と稜が不明瞭なもの(67～70)に分けたが、後者の内68は沈線が施されるものである。脚部は63を除きいずれも中位が膨らむエンタシス状をなすが、やや太く短い傾向にある。裾部は屈曲しハの字に開くが、脚部が細目で長い63は強く屈曲し裾部の径が大きいのに対し、64～68は屈曲が弱く裾部の径も小さい傾向にある。坏部と脚部との接合は64、66～68のように坏部内側より円筒状の脚部にホゾを差し込んで接合するものが認められる。また脚部と裾部との接合は63、65がナデ調整、64、66～68は円盤状の裾部に脚部を差し込んだまま調整を行っていないため粘土のはみ出しが顕著である。調整は坏部及び裾部がハケないしハケ後ナデ、脚部はタテヘラミガキである。壺は78が唯一当てはまろうか。壺は79～85、その内79、80は台付壺である。胴部は球形を呈し、口縁部は肥厚化しくの字に大きく屈曲する。脚部は胴部に比べ大型で、外方に開く台形状を呈し安定感がある。81～85は口縁部である。いずれもくの字に屈曲するものだが、81、83、85はやや丸味を帯びている。81は胴部のカーブから長脚化の傾向を持つものと考えられ、調整もナデが認められるなど新しい要素を含むものなのかも知れない。壠は76、77であるが、口縁部の開きがある

**小 型 壇** まり大きくななく、胴部に最大径を有するものである。小型壠は71～75で、バラエティーに富んでいる。71は口縁部高と脚部高がほぼ1：1のもの、72は口縁部の屈曲が小さいものの、73は口縁部が大きく屈曲して開くもので、いずれも口縁部に最大径がある。75は口縁部が短く胴部が球形を呈するもので、壺形に近い形態で、わずかに胴部径が大きいものである。

時期は古墳時代中期であるが、器種組成から壺が消えている点、高坏の脚部が短く裾部の開きが小さくなっている点、壺に長脚化の傾向を認められるものがある点など新しい要素であると考えられる。しかし反対に小型壠や台付壺が残るなどの古い要素もあり、時期幅を持つと考えた方がよいのかも知れない。

〈8層中出土土器〉 8層からは時期幅の大きい土器が出土している。86、87は高坏である。86は坏部が浅く下位に明瞭な後が認められるもの、87は坏部に歪みがあり後は認められない。88は複合口縁の壺である。口縁部には棒状の沈線が施されている。89は壺で球形の胴部を呈し、口縁部の屈曲は丸味を帯びており弱いものである。90は底部が厚く突出する壺である。内面には炭化物が付着している。91は壺である。口縁部を内湾させて軽くつまみ上げている。胎土は水漬したと思われ、非常に緻密なものである。92は須恵坏である。全体に器壁がうすくノタメが明瞭に残るものである。93は灰釉壺である。口縁部を外に引き出さずに丸く収めるもので施釉は漬け掛けである。O53号窯式期のものと考えられ、8 漬け掛け層水田の時期を決定したものである。94、95は水田面を侵食した洪水痕跡から出土したものである。94は壺蓋で、宝珠状つまみを持つものである。V期の前葉～中葉に当たる。95は長頸瓶である。口端部を上下に引き出し三角形状に作り出している。

#### 6層出土土器

96は須恵坏である。四角形の不安定な高台が付くもので、底部はやや垂れ気味である。97は灰釉壺である。ハの字に開く丈の長い高台が付き体部は深くゆったりとしたものである。H72窯式期に併行するものであろう。98は灰釉壺の底部である。O53号窯式期のものであろう。99は土師坏だが、摩滅により調整は不明瞭である。

#### 3層出土土器

100は灰釉壺である。口縁部を外側に引き出すもので、非常に器壁の薄いものである。101は小皿で、直線気味に立ち上がるものである。

#### 2層出土土器

102は小壺である。内湾気味に立ち上がる体部から口縁部を若干外に引き出している。

## 第4節 6区出土土器

#### 23a層出土土器

1は壺で頸部及び胴部下位を欠損している。肩部に文様帶が付けられるが、半截竹管による平行沈線文を描いて縦位の沈線で埋めている。胴部上半には縦走羽状条痕が施され、胴部下半には横位の条痕で器面を調整している。2～11は同一個体と思われる壺の破片である。口縁部は大きく外に開くもので、口端部を肥厚させ、横位の条痕を施している。口辺は横位の条痕で仕上げている。両者とも弥生時代中期初頭丸子式土器である。

丸子式土器

#### 20層出土土器

13～15の3点で、いずれも壺の破片である。13は頸部の破片で、3条単位の細かな構描き横線文が施されている。14、15は胴部の破片で、縄文（L R）が施されている。弥生時代中期後葉と考えられる。

#### 18層出土土器

19層では水田が検出されている。この面では調査区北東側に導水施設の可能性を持つ窪地が検出され、土器を出土している。窪地の覆土は18層と考えられ、土器片の多くは18層から出土したものと接合関係にある。ここでは、19層の窪地内出土のものも含めて、18層出土として報告することにした。

出土した土器は壺・壺のみである。壺は長頸のもの（16～20）と短頸のもの（21）の2種類がある。長頸のものは法量から大型・中型・小型の3種類に分けられる。大型品は17 法量分化

で受け口気味に内湾する複合口縁である。中型品は16、18、19である。16は完形のもので、無花果形の胴部を呈し、口縁部は大きく外反する単純口縁である。18は口縁部に薄い粘土帯を貼り付けて肥厚化し、口端部を平坦に仕上げたものである。小型品は20で、無花果形の胴部を呈し、底部は胴部に比べやや大きいくらいなものである。文様はいずれも頸部の横描き波状文が主体となるが、17には口縁部に横描き波状文が施され、また18の頸部には横描き横線文も認められる。また円形浮文が16、20の肩部に、棒状浮文が18の口縁部に貼付されている。短頸の20は頸部から緩やかに外方に開き、内外面をハケ調整する無文のものである。壺は22、23の2点で、いずれも口縁部にハケ工具による刻み目を持つものである。22は胴部中位に最大径を持つもので、一部刻み目をナデている。23は胴部下位に最大径を有す半球形のものである。欠損のため脚台部との接合の調整は不明である。21の所属に疑問が残るが、いずれも弥生時代後期前半と考えたい。

#### 16層出土土器

24は口縁部が大きく外反する単純口縁の壺で、胴部中位が大きく横に張り出す偏平な球S字状形を呈している。文様は肩部にS字状結節文を伴う羽状繩文と円形浮文、口縁内面に押圧結節文繩文が施される。弥生時代後期後半以降のものと考えたい。25は薄い粘土帯を貼り付けた折り返し口縁の壺で、頸部は太く口縁部の外反は小さい。全面にハケ調整がなされる。26は無文の壺であるが、口縁部は強く屈曲して外方に聞くものである。27は壺の底部である。小型丸底土器 突出は目立たず、緩やかに胴部につながっている。28は小型丸底土器で、畦畔SK61614とSK61609との交差部より出土したものである。口縁部高と胴部高がほぼ1:1となる偏平なもので、最大径は口縁部にあり、底部はわずかにくぼむ。口唇部をナデる他は全面を密なハケメにより調整している。29は台付壺の脚台部である。器壁は厚く端部を折り返し肥厚させており安定感がある。24、25は弥生時代後期からの系譜を引く壺である。また28は形態から、古墳時代前期前半段階のものと理解したい。

#### 15層出土土器

15層は砂層で下層の水田を良好にパックしている。遺物の出土量は少なく、図化できたものは2点である。遺構との直接的な関係はないが、参考として報告したい。30は大きく外反する単純口縁の壺で、頸部に横線文口縁内面に横描き波状文が施されている。31は複合口縁の壺の破片である。5本単位の棒状沈線が施されている。16層とは同時期のものと考えて良いだろう。

#### 14層出土土器

32は木造61401の北側から出土した高坏で、坏部は下位に緩い棱を有しており、直線的に開いている。脚部は短めで直線的に外方に聞くものである。33は丸底の壺で、球形の胴部を呈している。口縁部はやや長く、くの字に屈曲して立ち上がるものである。

#### 13層出土土器

13層の土器は調査区東側の非水田域から出土した34の土師坏1点である。やや厚手で、底部から内湾気味に立ち上がるものである。

#### 11層出土土器

11層は上面で水田を検出している。また出土した土器は層中のものと遺構面上（直上）のものとに分けて取り上げられている。35、36は層中より出土した灰釉壺で、ともに罐部が丸みを帯びる三角形高台を持つ。O53号窯式期のものと考える。37は山茶壺である。38～43は11層直上のものである。38～41は須恵坏としたが、焼成は軟調であり、須恵質の土

器とでも言えそうなものである。38、39は口縁部をわずかに引き出すもの、40、41は引き出さないものである。42は土師壺である。調整は摩滅により不明瞭だが、内面はヘラミガキの痕跡がわずかに確認され、色調・胎土から駿東壺と考えても良いかもしれない。43は駿東壺瓶で、15C後半~16Cと考えられる金谷三ツ沢窯産のものである。遺構に伴うものではなく混入品と考えられよう。

#### 9・10層出土土器

9・10層は砂礫及び砂層である。直接遺構とは関連を持たないものであり、現地調査時においても中間層として掘り下げており、遺物の出土層位も明確には分離できないためまとめて報告したい。43は10層、49、50は9層、他は9・10層として登録されている。44は灰釉壺である。高台は外に張り出すもので、H72号窯式期に併行する時期のものと考えたい。45は須恵壺である。体部は内湾気味に立ち上がるが、若干歪みを持っている。46は灰釉大壺の底部で、肉厚の四角形高台を持つ。47は小壺で内湾気味に立ち上がるものである。48は灰釉長頸瓶で、内面にはノタ目が明瞭に残り、底部の歪みが大きい。49は長胴壺の口縁部で、口縁部は水平に屈曲し、口端を上方に引き出している。50は須恵壺蓋で、偏平した宝珠状つまみである。

その他の層から出土した土器

8層から上の層からは5層で水田が検出されただけである。5層出土の土器は5層の年代を決定できるものではないため、まとめて報告することにした。51は8層出土の小壺である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部を丸く収めている。52は須恵壺蓋である。小片のため、復元に難があるかも知れない。8世紀代のものである。53は3層から出土した土師壺である。摩滅により調整は不明瞭である。

洪水痕跡内出土土器

調査区北西側の5層~11層上に及ぶ厚い洪水堆積の中から出土した土器である。54は壺である。複合口縁が変形したものと考えてよいだろうが、口縁部中央は断面三角形状に隆起している。55はくの字に屈曲する壺の口縁部で、端部を若干肥厚させている。56~58は灰釉壺で口縁部を外に引き出すものである。いずれも小片のため、復元に多少無理があるかも知れない。

### 第5節 7区出土土器

#### 12層上出土土器

12層は厚い砂礫層であり、その上に堆積したシルト層をベースに方形周溝墓群が構築されている。方形周溝墓から出土した遺物の量は非常に少なく実測が可能なものはほぼ図示したものに限られる(1~12)。1は5号方形周溝墓西側周溝より出土した壺で、口縁部及び胴部下半を欠損しているが、球形の胴部と円筒状の細長い頸部を有するものである。頸部及び肩部に縄文地の上に沈線による重菱形文・円形文が描かれ、胴部下位は単斜条痕により調整されている。弥生時代中期中葉須和田式のものと考えられよう。2は6号方形周溝墓南側周溝から出土した壺である。胴部下位に最大径を持つ無花果形のもので、口縁部は受け口状をなしている。口縁部下位に櫛描き波状文頸部に櫛描き横線文が施され、胴部上半は3帯の複帶構成をなしている。弥生時代中期中葉貝田町式と考えられよう。3は貝田町式8号方形周溝墓南側周溝及び12号方形周溝墓西側周溝から出土し接合した壺である。長頸

のものだが、頸部は太く、口縁部の開きは小さい。器面全体を条痕で仕上げ、頸部と胴部に浅い幅広の沈線を施している。底部穿孔の可能性もあるが、破片の接合資料であり判断を下すことはできなかった。弥生時代中期後葉のものと考えられる。4は12号方形周溝墓の盛土内から出土した壺だが、ほぼ縦に半切されている。底部は内側に粘土帯を貼り付けて補強している。5は12号方形周溝墓西側周溝から出土した壺で、小さい底部は中央が膨らみ不安定である。胎土には植物繊維が混入しており、黒色を呈している。6は14号方形周溝墓東側周溝から出土した壺である。胴部は大きく広がり、太い下広がりの頸部を持つ。

**爪 槌 式** 槌描きによる文様が3帯にわたって施されている。弥生時代中期中葉瓜郷式のものである。7は5号方形周溝墓北側周溝から出土した壺で、口縁部は外反して開く。摩滅が激しく調整は不明瞭だが、横位の条痕によるものと思われ、口端部は竹管様の工具により刻み目が施されている。8は8号方形周溝墓から出土した壺である。細かなタテハケ調整がなされ、口端部には刻み目が施される。9、10は14号方形周溝墓から出土したものである。9は東側周溝の壺でハケ調整後、ヘラによる沈線文が施されている。10は南側周溝から出土の壺である。摩滅が著しいが、横位の条痕により調整され、口端にはヘラによる刻みが付けられる。砂粒の他、長石・雲母が多く含まれている。11は8号方形周溝墓の盛土内から出土したもので、台付きの鉢であろう。摩滅が著しく、調整等は不明だが、接合部には粘土帯を貼り付けて刺突を加えている。清水天王山遺跡出土の台付き鉢に類例を求めることが出来る。12は8号方形周溝墓東側周溝から出土した深鉢の口縁部である。外面に2本、内面に1本の沈線を施している。11、12とも縄文時代晩期のもので、盛土として用いられた12層の砂礫の中に混在していたと考えられるものである。

#### 10 b 層出土土器

13は調査区西側の櫛群中より出土した壺である。受け口状の口縁をなすもので、口縁部に櫛描き波状文が認められるが全体に摩滅が激しい。14は層中より出土した壺である。口縁部は外方に開くもので、口端部を面取りした後、竹管状工具により刻み目が付けられる。いずれも弥生時代中期後葉のものと考えられよう。

#### 10 a 層出土土器

10 a 層は層上の遺構面で、杭列畦畔を伴う水田が検出されている。出土土器は畦畔内、層中、確認面に分けて取り上げられている。15は畦畔 S K 71005から出土した壺である。口縁部は太く短い頸部から大きく外に開いている。頸部には櫛描き波状文の痕跡が残るが単位等不明瞭である。16は畦畔 S K 71003から出土した壺である。球形の胴部を呈するが、口縁部の屈曲は弱く、端部に刻み目が施されている。17、18、21は層中からの出土である。17は胴部下位で大きく張り出す太頭のものである。21は壺である。胴部上位に最大径を持つ偏平気味の球形を呈すもので、口縁部は短く屈曲は小さい。18~20、22、23は遺構面から出土したものである。18~20は球形の胴部を呈す単口縁の台付壺である。18、19はやや偏平気味で、脚台部は直線的に外方に開く台形状のものである。20は胴部下半を欠損して

**S字状口縁台付壺** いるが、中位に最大径を持つものである。22、23はS字状口縁台付壺である。22は脚台部を欠くが、胴部の張りが小さいもので、肩部には平行線文が付けられていない。安達分類III Bに該当しよう。23は胴部中位を欠くものであり、平行線文の有無はわからない。口縁部の屈曲はやや弱いが、安達分類IIIに認められよう。24は層中から出土したものだが、時期的に異なるもので流れ込みとを考えた。長胴の壺で、長めの口縁部は緩やかに屈曲して立ち上がりっている。胴部下位は丁寧なタテヘラミガキがなされている。24を除き弥生時代後

期後半から古墳時代初頭までに収まるものと考えたい。

#### 9層出土土器

25は鉢で底部を欠損している。口縁部は段をなして屈曲しさらに外方に開くものである。26は壺の口縁部である。器壁はやや厚く外反気味に開いている。27は丸底の壺である。球形の胴部を呈し、口縁部は緩やかに屈曲し肥厚している。いずれも古墳時代中期のものと考えられよう。

#### 8層出土土器

28、29は溝状造構 S D 70801から出土のものである。28は模倣壺である。底部を欠損しているが、器高の低いもので、受けは退化し緩い稜として表現されている。29は長胴壺の胴部である。単位の長いタテハケにより調整され、底部には木葉痕が認められる。30はS X 70801から出土した壺である。胴部を欠損しているが、球形のものと考えられ、口縁部はくの字に屈曲して端部をわずかに肥厚させている。駿東壺であろう。31～40は8層中から出土したものである。31～33は壺である。31は平底で、体部が強く張り口縁部を内湾させるもの、32は丸底で口縁部を内湾させるもの、33は口縁部を屈曲させる鬼高窓併行のものである。34は口縁部を屈曲させる大型の壺である。35は壺の口縁部で、端部を内側に折り肥厚させている。36は高窓の脚部である。37は須恵壺である。箱形の体部に断面四角形の高台が貼り付けられる。38、39は灰釉壺である。39は体部の深いもので、方形の高台が貼り付けられるが、調整は難である。40は直胴型の壺である。全体に歪みがあるが、単位の長いハケ調整が行われ、把手は胴部を穿孔してホゾを差し込み接合している。

駿東壺

鬼高窓併行

8層の土器は古墳時代後期～平安時代にわたる長い時期幅を持っているが、調査担当者は37の出土から8層を奈良時代と想定している。だが、出土した土器はグリッド49列を境に水田の存在する東側からは古墳時代後期のものが、非水田域である西側からは奈良時代～平安時代の遺物が出土している。

〈流路 S R 70801出土土器〉 41～48は須恵壺で、41～43は蓋、44～48は身である。41は天井部が偏平気味で、口縁部が外に開く。42は弓張り状の天井部をなし、口縁部を垂直に下げる。43は天井部が平坦で、口縁部が外に開いている。3点とも稜は緩く、浅い沈線で作り出している。壺身は48を除き、立ち上がりが内傾し、端部のナデが弱いものである。体部は45、46が底部が平坦なもの、47、48は弓張り状をなすものである。時期としては、41、42、44、45はⅢ期中葉、43、47、48をⅢ期後葉と考えたい。49は長脚2段透かしの高窓で、窓部稜の部分で欠損している。Ⅲ期中葉のものであろう。50は長頸瓶で、肩部が大きく張る球形を呈している。51～58は土師壺である。51、52は模倣壺で、弓張り状の緩やかなカーブを描く深いもので、口縁部を大きく内傾させる。53は伝統的な壺である。底部を一部欠くが、平底気味の深いものである。54～56は鬼高窓併行期の壺である。54、55は鬼高窓併行口縁部が屈曲し外反気味に立ち上がるものの、55は楕とした方がよく、屈曲して直立気味に立ち上がる大型のものである。57、58は土師壺で体部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁部を丸く收めるものである。59は高窓である。太い外開きの脚部から、緩やかに裾部が広がるものである。60は壺である。頸部は直立し、口縁部が内湾気味に立ち上がっている。胴部を欠損している長胴形のものであろう。61、62はくの字に屈曲する壺の口縁部で、いずれも口縁端部がわずかに肥厚している。出土遺物は層位による分離は不可能ではあるが、古墳時代後期を中心とするものと律令期のものとに分けることができそうである。

#### 7層出土土器

7 区は条理型の水田が検出されている層である。63、64は須恵坏である。糸切り未調整の底部から体部は内湾して立ち上がり、口縁部を丸く收めている。65は大きい底部から内湾気味に立ち上がる土師坏で口縁部が若干肥厚している。66～70は灰釉陶器である。66、67は内湾する体部から口縁部を外に引き出して鋸首状に收めるもので、高台は丸味を帯びた断面三角形状を呈している。68～70は直線気味に立ち上がり口縁部を引き出さずに收める

**墨書** るものである。69には墨書きがなされているが、施釉部分を境に消えており、判読不能である。70は輪花壇で、内湾気味に立ち上がり口縁部は丸く收められる。71は灰釉模倣壇である。直線的に立ち上がり、口縁部直下を強く押さえている。外面は黒色仕上げである。72

**軟質須恵器** は軟質須恵器である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部を丸く收めている。73、74は土師坏である。73は内湾気味に立ち上がるものの、74は口縁部を外に引き出するものである。63～65は9世紀代、66～74はO53号窯式期に併行する時期のものと考えられよう。

#### 6層出土土器

6層は洪水堆積による砂層であり、遺物は遺構に伴うものではないが、参考として提示したい。75は灰釉壇である。口縁部は引き出さないもので、成形は雑である。高台は体部に比べやや高い三角形を呈している。76は土師坏だが、器壁の厚い雑な仕上げである。

#### 4層出土土器

4層は調査区東側に部分的に堆積する粘土層である。77は灰釉壇である。見込み部分で屈曲し、口縁部をわずかに引き出している。78は小壇である。全体に器壁が薄く、三角形の高台が貼り付けられる。

#### 南辺排水溝出土土器

南側排水溝掘削時に出土したものであり、出土層位などは不明である。2点とも墨書きの施された灰釉陶器であるが、欠損により判読不能である。79は薄手のもので、やや雑な成形で口端部のみわずかに肥厚する。80は三角形高台が貼り付けられた底部である。

## 第6節 8区出土土器

#### 21層出土土器

**壺** 1～5は調査区東側の層中から出土した壺の破片で、同層の時期を決定したものである。

全て肩部と思われるが、外面を横位の条痕、内面をナデ調整している。弥生時代中期初頭

**丸子式** 丸子式である。6は深鉢の把手である。繩文時代後期中葉加曾利B II式に当たるはめられようか。7は流路S R82101から出土した深鉢の口縁部である。外面に繩文、太い沈線を施している。繩文時代晩期と考えられる。S R82101からは粗製の深鉢を中心に繩文時代の土器が多く出土しているが、ほとんどのものは図化が不能であった。

#### 20層出土土器

20層では層中からの土器の出土は全く認められず、全て調査区西端の流路S R82001から出土したものである。いずれも繩文時代晩期の深鉢の口縁部と考えられるが、8は安行系の磨消し繩文、9、10は口縁部に平行沈線を施すもので、9には口端部にも沈線が施されている。11は太い沈線と繩文を組み合わせている。

#### 18層出土土器

18層は砂礫層上に堆積した粘土層で、3基の方形周溝墓が自然堤防上に構築されている。

19～21は1号方形周溝墓南側周溝から出土した壺で、同一個体と考えられる。器面を單斜

条痕で調整し、口縁部内外面に刻みを入れている。底部の破片21はハケ調整によるもので、裏面には網代痕が認められる。22は2号方形周溝墓西側周溝から出土したもので、胴部が 網代痕張らない細身の長球形を呈しており、ハケ調整のみで無文である。23は北側周溝から出土したもので、胴部中位が張り出している。摩滅が著しいが、やはり無文のものであろう。24は3号方形周溝墓南側周溝から出土した長球形を呈すものである。肩部に彫書き横線文が施されている。胴部下半には焼成後穿孔がなされ、煤が付着している。これらはいずれ 穿孔も弥生時代中期後葉に位置づけられるが、1号方形周溝墓出土の壺が時期的に先行すると考えられる。

#### 17b層出土土器

17b層上の確認面からは水田跡が検出されている。17b層そのものは畦畔内で確認できるのみで、耕作土は攪拌により17a層と均一化しているため、17a層出土の可能性もある。12、13はともに丸味を帯びながら屈曲する壺の口縁部で、刻み目が付けられるものである。弥生時代後期のものであろう。

#### 17a層出土土器

17a層は17b層水田を踏襲した杭列畦畔を伴う水田である。14は小型壺である。15は小 小型精製型高坏である。器壁の薄い丁寧な作りのもので、小型精製土器といえるものであろう。16 土 器は高坏の脚部で、中位でわずかに屈曲して外方に開くものである。17は高坏が深く直線的に立ち上がるもので、脚部は太く短いものである。全体に作りが粗く脚部は中実の内部をへらで搔き取って成形している。18は口縁部が肥厚する壺である。

#### 16層出土土器

16層は17a層水田を覆った泥炭層であり、土器集中群としてSX81601、SX81602が確認されている。25~27はSX81601から出土したものである。25の高坏は高坏は深く下位で稜をなす、長脚のものである。26は球形を呈す壺で、口縁部は屈曲して直立する。内外面とも単位の長い緻密なハケ調整がなされている。27は口縁部がくの字に屈曲する壺だが、全体に歪みが大きい。28はSX81602出土の壺である。口縁部は丸味を帯びて屈曲している。29、30は層中より出土のもので、29は口縁部が外反する壺、30は口縁部の屈曲の小さい壺である。

#### 15層出土土器

31、32は高坏である。31は円孔を有するもので、脚部は緩やかに外方に開いている。古墳時代前期に位置づけられる。32は高坏下位に不明瞭な稜を有するもので、細長い脚部を持つものである。富士市三新田遺跡出土の高坏に類似しており、和泉式併行期の初頭段階 三新田遺跡と考えることができよう。

#### 14層出土土器

14層は15、16層の影響を受けた14b層と疑似畦畔を検出した14a層とに分けられる。36、37は14b層出土の灰釉壺である。36は口縁部を引き出して蝶首状に收めるもの、37は端部を丸く收めるものである。33~35は14a層出土のものである。35は断面四角形の高台が貼り付けられたもので、成形が粗くノタ目が明瞭である。34は土師皿、33は灰釉模倣壺だが、全体に器壁の厚いもので、内面には草木・巴を形どった線刻が施されている。

線 刻

#### 13層出土土器

38、39はともに灰釉壺である。38は畦畔SK81301から出土したもので、端部がやや丸い三日月高台を貼り付けている。刷毛塗り施釉で、内面見込みには十字に塗られている。K 刷毛塗り

90号窯式期のものと考えられよう。39は口縁部が大きく外に開くもので器壁は非常に薄い。10層出土土器

10層では2面の水田が確認されている。40、41は10a層出土のものである。40は長方形  
清け掛けの高台が貼り付けられた厚手のもので、漬け掛け施釉がなされている。O53号窯式期に併行するものであろう。41は体部が深いもので、高いハの字に開く高台が貼り付けられている  
縁釉陶器。H72号窯式期に併行するものと考えている。42は縁釉陶器で、高台裏面に沈線状のつよいナデが加えられている。

## 第7節 9区出土土器

### 42層出土土器

1は流路S R94201から出土した壺である。胴部中位やや上方に最大径をもつ球形を呈するものである。縄文地にヘラ描きで菱形連繫文、重三角文が描かれる。胴部下半は横位の条痕による調整である。2~5も壺の下半部である。2~4は横位の条痕によるもので、同一個体であろう。5は横走の羽状条痕である。弥生時代中期中葉に位置づけたい。6~10も同じ流路から出土した土器である。縄文時代後期から晩期にかけての深鉢と思われる。6は口縁部に浅い沈線を施すもの、7は大きく外反する端部が肥厚化している。8は口縁部が内斜しており、内外面に細い沈線を巡らせている。9は口端部を肥厚させているものである。10はヘラにより斜行の浅い沈線が付けられているもので、口端部には2列の刺突が施されている。

### 41層出土土器

41層の上面からは2基の方形周溝墓が検出されている。11~13は方形周溝墓から出土した土器である。11は1号方形周溝墓東側周溝から出土した壺で、球形の胴部をなしている。外面はハケ調整がなされ、煤付着が著しい。12は2号方形周溝墓から出土した壺である。胴部中位や下方に最大径をもつ細身の長球状を呈している。肩部に4条の櫛描き横線文が3段施される。外面はハケ調整がなされるが、全体に平滑である。13は南側周溝出土のものである。全体に歪みが大きいが、胴部は下位が大きく張り出す無花果形をなしている。頸部は太く短いもので、口縁部の開きは小さい。器面全体をハケ調整した後、5条単位の櫛描き横線文が6段施されている。胴部下半には煤が付着している。14は頸部が小さくすぼまる壺である。3条の櫛描き横線文により文様帯が区画されており、上位に縄文、下位にヘラ描きによる鋸歯文と赤彩が施され、前者の中央には太い櫛描き波状文が付けられる。胎土及び色調も在地のものとは異なっており、搬入品である可能性も考えられよう。15は胴部中位に最大径をもつが、肩部の張りが小さい。頸部は太く、口縁部は欠損しているが、開きは小さいと思われる。外面の摩滅が激しいが、無文でハケ調整のみであろう。16は球形の胴部を呈するものであるが、全体に摩滅が著しくハケメが一部に残るだけである。全て弥生時代中期後葉のものと考えられる。

### 40層出土土器

17は太頸の壺である。口縁部を肥厚させ、わずかに外反させている。18は肩部がやや張る壺で細い頸は直立し、口縁部の外反は緩やかである。4条の櫛描き横線文が肩部に施されている。内面の調整はナデだが、指頭圧痕が明瞭である。2点とも弥生時代中期後葉に認められよう。

### 38層出土土器

19は層中より出土したもので、球形を呈し、胴部中位に最大径をもつ。口縁部は短く緩いカーブを描いて外反している。20は畦畔SK93804出土の壺である。胴部は直立気味に立ち上がり、口縁部は面取りされ、小さな刻みが付けられている。弥生時代後期のものであろう。

### 37層出土土器

21はS字状口縁台付き壺であるが、口縁部の屈曲が充分ではなく、内面が肥厚している。S字状口縁胴部は中位や上方に最大径をもつ偏平球状を呈している。ハケ調整は羽状になされ、肩台付き壺部には平行線文が施されている。赤塚分類C類になろうか。22は小型の台付き壺である。胴部は球形を呈し、長い口縁部は直線的に外方に開いている。台部は大きく外に張り出す台形状のもので安定感がある。

### 33層出土土器

33層はa、bの2層に分けられ、土器はほとんど33a層上面で検出された流路からの出土である。しかし、上層の流路の関係で、出土箇所に暖昧さが残るものもあるため、流路出土とそれ以外に分けて報告したい。23、24はSR93301出土のものである。23は壺である。口縁部を欠損しているが、肩部が張り出す球形を呈しており、肩部には沈線が施される。Ⅲ期後半に位置づけられようか。24は小型高壺の脚部である。円孔が3箇所施される。摩耗が著しいが、外面は丁寧なヘラミガキがなされている。25はSR93302から出土した土師壺である。平底気味の底部から緩やかに立ち上がり、口縁部をわずかに外反させる。摩減が激しく調整不明だが、底部裏面には木葉痕が認められる。古墳時代後期鬼高期に併行するものである。26~32はSR93303出土のものである。26、27は須恵壺だが、破片のため、全体の形状は分からぬが、やや浅い感じを受ける。26は立ち上がりがやや長いが、内傾が強く、27は口縁部をわずかに外方に引き出している。Ⅲ期後葉に位置づけられよう。28は壺である。小片のため若干復元に難があるかも知れない。頸部はやや太めで、肩部に沈線を施している。29、30は土師壺である。29は丸底のもので、肩は張らず口縁部を内湾気味につまみ上げている。30は器高の低いもので、上位で屈曲し口縁部を直立させている。31は台付き壺の脚部で、内湾気味に開く台形を呈している。摩減が著しく調整は不明瞭である。32は大型壺の口縁部で厚い粘土帯を貼り付ける折り返し口縁である。29、30は古墳時代後期、31、32は古墳時代初頭と考えられる。33~35は出土箇所を決定できないものである。33は灰釉壺である。体部は内湾気味に立ち上がり、口端部のみをわずかに引き出し丸く収めている。34は模倣壺だが、全体に器壁が厚く、体部中位で屈曲し、口端部を外に引き出している。35は灰釉壺である。内湾気味に立ち上がり、口縁部を外に引き出し、丸く収めている。33~35はいずれもO53号庶式期に併行するものと考えられる。

### 25層出土土器

25層からは3本の流路と杭列が検出されており、土器は全て流路からのもので、36~43がSR92501、44はSR92502出土である。36は須恵壺である。直線的に立ち上がり、口端部を肥厚させている。37~40は土師壺である。37は内湾気味に立ち上がり、口端部が肥厚している。38は体部が直線的に立ち上がる器高が高いもので、底部が厚く仕上げられている。39は歪みが大きいが、口縁部は外反気味に開きわずかに肥厚している。40は無高台のものである。緩やかに内湾しながら立ち上がっている。41は土師壺である。見込みで緩やかに屈曲して立ち上がっている。42は小型の壺である。提灯形の胴部を呈し、短い口縁

部はくの字に強く屈曲している。胴部下半は手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキで、黒墨書色に仕上げている。43は灰釉壺で、歪みが大きいものである。墨書は「万茂」と読めるが吉祥句である。44も灰釉皿である。口端部を引き出し鎌首状に仕上げ、高台はやや偏平な三日月高台が付けられる。施釉は漬け掛けである。K90号窯式期のものであろう。

#### 22層出土土器

46は灰釉壺である。内湾気味に立ち上がるるもので、口縁部の引き出しはごくわずかである。漬け掛け施釉がなされる。47は小壺である。見込みで屈曲し、口縁部をつまみ上げている。48は土師壺である。平底風の底部から直立気味に立ち上がる。摩滅が著しく調整は不明である。

#### 20層出土土器

20層からは水田と5本の流路が検出されている。土器は流路からの出土であるが、時期を決定する材料にはならず、参考資料としておきたい。49~52はS R92001出土のものである。49は須恵壺である。受けは水平に引き出され、立ち上がりは長く直立しており、口端部をヘラで成形している。III期前葉であろう。50は土師壺である。平底のもので、口縁部直下がやや張り出す。摩滅により、内外面ともに調整不明。51は台付き壺の台部である。端部をわずかに内湾させている。52は高壺の脚部である。脚柱は直立し、小さな裾部は緩やかに開いている。53はS R92003出土の模倣壺である。中位で屈曲し、立ち上がりを内傾させている。外面には指頭圧痕が認められる。54の須恵壺はS R92004から出土したものである。器高はやや低いもので、受けは外に大きく引き出され、口端部は強いナデにより成形されている。III期中葉と考える。55は長頸瓶の口縁部である。大きく外反するもので、口縁部直下に隆起があるが、口端部の引き出しは上方のみである。56はS R92005から出土の土師壺である。底部には木葉痕が認められ、口縁部は強いナデで尖るものである。内面は放射状の暗文が認められ、剥離しているが、黒色仕上げがなされている。

木葉痕  
文 17層出土土器

17層は調査区東側のみに堆積している粘土層であるが、出土したのは57の灰釉陶器1点のみである。肉厚のやや角張った三日月高台で底部は回転ヘラケズリである。K90号窯式期の段階と考えられよう。

#### 16層出土土器

16層も遺構とは直接関係しないが、参考としてあげておきたい。58は小壺である。肉厚で、直線気味に立ち上がり、口縁部は丸く収められている。

#### 13層出土土器

59は壺蓋であるが、端部は強く折り返し三角形状に仕上げている。V期前半としておきたい。60は山茶壺である。低く潰れた三角形の高台が付けられている。

## 第8節 10区出土土器

#### 39層出土土器

1、2は畦畔SK103903から出土した壺である。1は胴部中位が大きく張り出すもので、太い頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部の開きは小さい。頸部から肩部にかけて、3状単位の太い筋により波状文・横線文が施されている。2は底部が突出せず、直線的に立ち上がっている。3、4は層中から出土の壺の破片である。ハケ調整の後、ヘラ描きに

より斜行の沈線が施されている。これらは弥生時代中期後葉の範疇に含まれるものである。

#### 35層出土土器

全体に出土量が少なく圓化できたのは 5、 6 の 2 点である。5 の 壺は直立する細い頸部で口縁部は直線気味に外反している。頸部に構描き横線文・波状文が施される。5 区 13a 5 区 13a 層 層出土の土器に近い時期と考えている。6 は壺である。口縁部は丸味を帯びて屈曲するもので、口縁端部に刻み目が付けられる。

#### 33層出土土器

33層では35層を踏襲した水田が検出されている。7 は畦畔 SK 103303 から出土した小型壺である。胴部中位が張り出し、頸部は太く短い。口縁部には幅広の薄い粘土帯が貼り付けられ、胴部はヘラミガキによって調整される。弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけてのものだろう。

#### 31層出土土器

31層は a、 b の 2 層に分層されているが、8、9ともにどちらの層から出土したかは不明である。8 は高壺の壺部で、下位に明瞭な縫を持つ深めのものである。調整は板ナデによる。9 は高壺の壺部～脚部である。小型のもので、脚部は丁寧なナデ調整が行われている。壺部からホゾを差し込んで接合している。

#### 30層出土土器

30層は a、 b、 c の 3 層に分層されている。泥炭質の弱い層である b 層から木造状遺構・水田が検出されており、土器は畦畔 SK 10303 内の木造状遺構の脇より出土している。10 は土師壺である。肩部がやや張り気味のもので、口縁部をつまみ上げている。摩滅により詳細は不明瞭だが、ナナメハケの後、ナデが行われている。11 の 小型壺は頸部で大きく屈曲するもので、全体に歪みが大きい。比較的厚手で、手捏ねによって製作された印象を受ける。12 は球状の胴部を呈した壺である。口縁部は頸部でくの字に屈曲している。全体に器壁が厚く、内面のナデは粗く輪積み痕が明瞭に残っている。

手 捏ね  
輪 積み痕

#### 21層出土土器

21層は調査区東側に厚く堆積した砂礫層である。時期的にまとまりらず、遺構と直接結びつかないが、参考として掲載した。13 は土師壺である。頸部から緩やかに聞く口縁部は薄い粘土帯が貼り付けられ、豆粒状の小さな浮文が貼付されている。弥生式土器の系譜を引くもので、古墳時代初頭と考えたい。14 は壺である。丸底で胴部中位に構による刺突が施されている。15 は土師壺である。肩部の張りがやや小さいもので、底部には木葉痕が残る。16 は壺の口縁部である。頸部でくの字に屈曲し、直線的に開いており、口端部を若干肥厚させている。

木葉痕

#### 16層出土土器

17 は須恵壺である。体部の内湾は緩やかで、口縁部をわずかに引き出し丸く収めている。O53窯式期のものと考える。

#### 14層出土土器

18 は灰釉壺である。内湾して立ち上がり、口縁部は外に引き出さず丸く収めている。

#### 10層出土土器

10 層は 11 層中で検出された溝の覆土として認定されているが、出土した溝が不明なため、ここで扱うこととした。19 は天目茶壺である。口縁部を直立気味に屈曲させている。20 は壺である。厚手のもので、口縁部を肥厚させ強いナデにより成形している。

#### 9層出土土器

21は壺である。厚い粘土帯を貼り付け、折り返し口縁風に仕上げられている。

#### 6層出土土器

22は擂鉢である。直線的に立ち上がるもので、外面は回転ヘラ削りにより成形されている。23は小碗である。高台は強いナデにより中央が窪んでおり、底部裏面には「×」の窓印が刻まれている。

#### 4層出土土器

24は須恵壺である。体部は深めで、内湾して立ち上がっている。受けは小さく短い立ち上がりは内傾している。体部約1/2まで回転ヘラ削りが施され、内面はノタメが明瞭である。Ⅲ期後葉に位置づけられよう。25は長頸瓶である。直立気味の頸部から口縁部は緩やかに外反し、端部を上下につまみ出している。26は小皿である。鉄砂釉が施され、内面には鉄釉によって、巴が描かれている。

#### <引用・参考文献>

- 愛知県教育委員会 1983年 「愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)」  
赤塚次郎 1986年 「S字窓覚書'85」[愛知県埋蔵文化財センター 年報]  
安達厚三・木下正史 1974年 「飛鳥地域出土の古式土師器」[考古学雑誌]第60巻第2号  
加納俊介 「駿河湾東部の発生土器編年のための覚書」 富士宮市教育委員会 1981年 「月の輪遺跡群Ⅱ」  
北川憲一 1985年 「静岡県東部地方の和泉式期の土師器について」[静岡県考古学研究]21  
静岡県教育委員会 1989年 「静岡縣の窓業遺跡」  
静岡県考古学会 1979年 「須恵器-古代陶質土器-の兩年」  
静岡県考古学会 1985年 「古墳時代の土師器」  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988年 「大谷川Ⅲ(遺物編)」  
清水市郷土研究会 1960年 「清水大王山遺跡第1次-第3次発掘報告」  
富士市教育委員会 1983年 「三新田遺跡発掘調査報告書」  
富士川町教育委員会 1975年 「駿河山口」  
富士宮市教育委員会 1989年 「浜沢遺跡」

## 第三章 木製品

### 第1節 木製品の分類

瀬名遺跡から出土した木製品を報告するに当たり、各調査区、各層位、各造構ごとの報告に終始することも考えられたが、瀬名遺跡の最大の特色である弥生時代から近代までの水田造構検出を考えると水田稲作に伴う道具=農具、祭祀具を機能をも考慮に入れながら器種ごとに分類して報告せざるをえないと判断した。そこで本報告書において木製品を分類するに当たり、いかなる考え方の下にいかなる基準によって分類したかをここに整理しておきたい。

木製品の分類案を作成する時に参考にした次の3例を瞥見しておく。第1は「木器集成 過去の分類図録 近畿古代篇」(奈良国立文化財研究所 1985)である。「機能上の分類を中心に検討しながら製作技法による分類を併用せざるをえ」とし、1工具、2農具、3紡織具、4運搬具、5漁獵具、6武器、7服飾具、8容器、9食事具、10籠編物、11文房具、12遊戯具、13祭祀具、14建築模型部材、15雑具、16部材、17用途不明品の17に大分類している。この大分類のもと、たとえば2の農具においてはA鋤、B鋤、Cえぶり、D馬鋤、E鎌、F鉈柄、G横柾、H唐白の杵、I豊杵、J木鍤、K田下駄というように11に細分類している。そして「木器の名称については民具などに用いられている一般的な名称を用いる」としている。ここで1~17の大分類は明らかに機能を念頭においていた分類であるがA~Kの分類は「機能上の分類」なのかまたは、「機能上の分類」と「製作技法による分類」の併用なのか了解できない。A~Kの名称は民具より命名したものである。A~Kは物によってはその機能、用途も若干ではあるが明記している。しかし何の機能、用途も記述していないものもある。

次に「近畿自動車道大阪線遺物整理事業 基本マニュアル ★遺物整理から報告書作成まで★」(財団法人大阪文化財センター 1985)の「木製品の分類基準」を見てみる。大項目が衣、食、住、農耕、漁獵具、その他の生業、社会生活、不明品、製作工程の9に分かれている。そして小項目としてたとえば農耕においては農具Ⅰ耕作具、農具Ⅱその他、収穫の加工具、水管理、土木材の4つに分け、更に種類という細分項目を設定している。たとえば農具Ⅰ耕作具においては、1鋤、2鋤、3えぶり、4馬鋤、5犁と5分類している。この分類は民具分類の影響が濃く、特に大項目にある分類は屢々民具分類に見られる大分類である。まず機能分類が重要であると多くの人が考えるよう、当瀬名遺跡においてもこの機能分類を基本にしている。大阪文化財センターの分類基準で出土木製品を分類してみた。ところが水田造構出土のものが多いという理由からか種類総数105の項目があるにもかかわらず該当項目はわずか28、それも曲物、鋤、田下駄、杭の4種類で総点数(用途不明品を除く)の97%に達してしまい分類の星をなさなくなってしまった。

今ひとつ多数の木製品が出土し、分類して報告している「伊場遺跡遺物編Ⅰ」(浜松市教育委員会 1978)を見る。「可能な限りの推測も加えつつ次のような機能別分類を行い、用途不明の資料については形態分類を行うことにした。」とし、労働用具、生活用具、建築部材、武器・武具及び馬具、呪術祭祀用具、その他の木製品の6つに大分類している。

更に、たとえば労働用具はA農具、B漁具、C運搬具、D編具、E機織具、F工具に分類し、Aの農具は彌、大足、田下駄、代搔、柄振、又鋸状木製品、鎌柄、堅杵、木柄類に細分類している。伊場遺跡出土の木製品の特殊性を考え民具学、考古学の研究蓄積をも援用しながらなかなか合理的な分類案と考えられる。しかし用途不明以外は「機能分類」としているがはたしてそうなのかという懸念は消えない。農具のうちの又鋸状木製品、木柄類、容器のうちの挽物、曲物、刎物等々。これらを機能分類と呼ぶのならそれなりの形態に伴う機能の付与が必要であろう。

**機能分類** 機能分類は民具の整理分類上唱えられてきた分類である。現行民具の場合、聞き取りによって明確に機能が把握できるため生業、社会生活等を軸に収集民具を機能分類することが行われる。民具資料の分類で現在なお基本とされるものに以下の3つがある（田辺悟 1985）。1つは『民具蒐集調査目録』（アチックミューゼアム 1936）の分類で(1)衣食住に関するもの、(2)生業に関するもの、(3)通信運搬に関するもの、(4)団体生活に関するもの、(5)儀礼に関するもの、(6)信仰に関するもの、(7)娛樂遊戯に関するもの、(8)玩具・縁起物の8項目に始まる分類がある。次に『民俗資料調査収集の手びき』（文化財保護委員会 1962）における分類、(1)衣食住、(2)生産・生業、(3)交通・運輸・通信、(4)交易、(5)社会生活、(6)信仰、(7)民俗知識、(8)民俗芸能・娯楽・遊戯、(9)人の一生、(10)年中行事である。そしてその後の機能分類に大きな影響を与えていた『宮本常一の『民具論集』』（宮本 1969）の分類がある。それは(1)農耕具、(2)漁業用具、(3)畜産用具、(4)養蚕用具、(5)脱穀・調整用具、(6)食料加工用具、(7)煮焼・調理用具、(8)食用具、(9)容器、(10)住居用具、(11)灯火用具、(12)着用具、(13)容姿用具、(14)紡織用具、(15)切裁用具、(16)加工用具、(17)運搬用具、(18)計測用具、(19)意志伝達用具、(20)玩具・遊戯・娯楽用具、(21)信仰用具の分類である。これら物質文化としての生活用具を機能分類する試みは民具学において鋭意研究されてきている。考古資料の木製品を機能分類する上においてもこの民具学の成果を積極的に援用する必要がある。

**機能分類の問題点** 出土木製品を無条件に機能分類することに大きな問題点が2つある。ひとつは衆目が認めるところである出土木製品の機能とはすべての木製品においてそう単純に判明しないという点である。用途不明木製品に代表されるように機能論的研究がある程度進められてきても、形態を即機能に結びつけられないところがある。今ひとつは分類するとき形態差に着目するがその形態差が単純に機能差に直結するかというとそうでもないということである。この形態差は時間差でもあり得るであろうし、空間差でも有り得る。横井浩一は「考古資料を分類配列してゆく際の座標軸として最も基本的なものは機能と時間と空間である。」（横井 1985）とし「機能、時間、空間の軸に沿う分類を基礎としないで、他にどのような詳細な分類を試みても、その分類は歴史的な位置付けを欠いた宙に浮いた分類となってしまうであろう。」と説く。

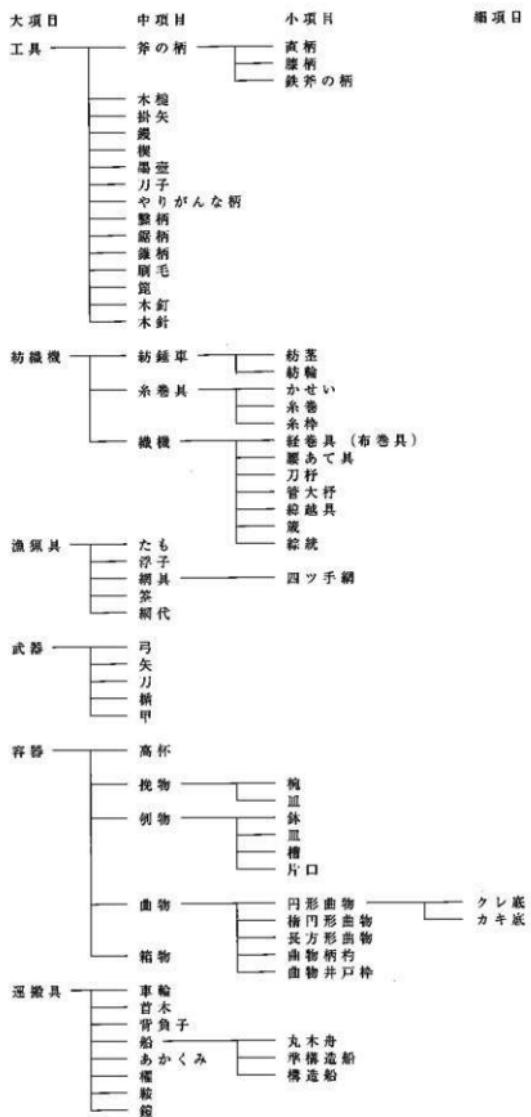
**形態分類** 形態上の分類も、以上のようにその後の研究がより機能差、時間差、空間差に結びつく可能性を秘めた重要な分類であることも了解できる。そこで、本報告書は今までの研究史の中で客観的なデータにより機能まで迫ることができるところまで機能分類し、その後は機能差、時間差、空間差が期待できる形態上の分類を試す方法をとる。

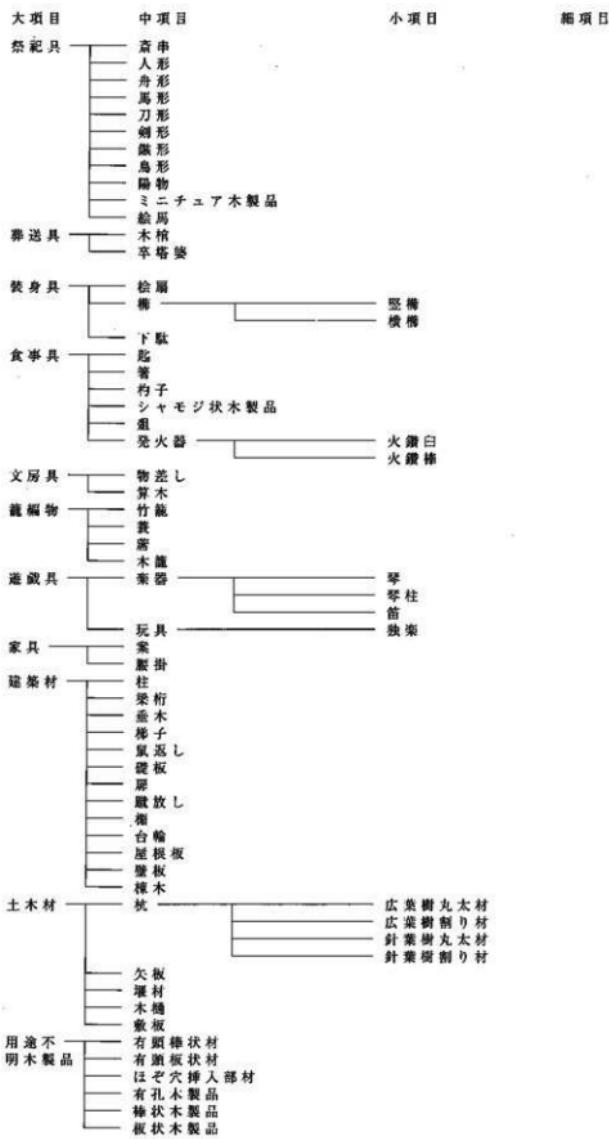
**分類試案** 次に示したものが瀬名遺跡出土木製品21,373点を分類した試案である。ここで示した項目すべてにわたって瀬名遺跡で出土している訳ではない。この分類項目を挙げたとき、少なくとも静岡県下の遺跡出土の木製品はほぼカバーできる項目と考えた。当研究所『遺物

の分類と整理』(静文研 1991)の分類を基本に、瀬名遺跡の遺物に合うよう項目等の追加をし改訂した。尚、前述の機能分類と形態分類の一線は小項目と細項目の間で引いたつもりである。本来はここで詳細に小項目一つについてその機能の定義と形態上の特徴を明記しなければならないはずだが第3章の各々の記述において機能と形態について言及するに留ることにした。細項目は現在のところ容易には機能差や時間差に結びつかないが、今後の研究によりこれらに直結する可能性がある形態上の分類項目である。また部材の組み合わせによる構造物は、この細項目で各部材名を挙げた。

第2表 瀬名遺跡木製品分類

大項目	中項目	小項目	細項目
農具	鋤	柄孔装着鋤	柄孔狭鋤 柄孔広鋤 柄孔横鋤 柄孔小型鋤 柄孔小型多又鋤 柄孔手平鋤 柄孔三本鋤 柄孔四本鋤 柄孔多本鋤 腰柄狭鋤 腰柄広鋤 腰柄二又鋤 腰柄三又鋤 腰柄多又鋤 ナスピ型腰柄鋤
		曲柄装着鋤	腰柄 腰柄二又鋤 腰柄三又鋤 腰柄多又鋤
		鋤の柄	反柄 直柄 一枚式 二枚式 スコップ式 二又 三又 鉄刃装着
		泥除け	
	鋤	一木鋤	一枚式 二枚式 スコップ式 二又 三又 鉄刃装着
		根合わせ鋤	
		鋤の柄	棒状握り T字型握り 三角形握り 黄 台木 柄 引き棒
エブリ			
馬歎			
田下駄		三穴板状 四穴板状	足圓い有り 足台有り 多穴孔 足板 横板 輪
		輪カンジキ型	
大足			足板 横板 はぞ穴横棒 縦枠
田舟	縁	木縁 鐵縁の柄	はぞ穴装着 柄込装着
		木包丁 手縁の握り	
穂摘み具			
ヨコヅチ			心持ち 削材
堅杵			算盤型凸帯有り 算盤型凸帯無し
臼			
福錘		右孔福錘 槌の子型	





## 第2節 瀬名遺跡出土の木製品

- 木製品の範囲** 瀬名遺跡では総数21,373点の木製品が出土している。木製品とは、人為的な加工の痕跡が観察できる木片のことである。ここでは人為的な加工の痕跡がない、つまり自然木、流木の類は外している。自然流路が数多く検出されており、これらの流路内より多数の木片が出土した。流路の覆土中には木製品と一緒に自然木、流木が含まれていた。現地調査においては、加工痕のない木片は取り上げないという原則で遺物取り上げに当たった。
- 器種ごとの出土状況** 瀬名遺跡の木製品の器種ごと、調査区ごとの数を第3表にまとめた。器種ごとの出土状況を概観する。数量的には、杭が全調査区合計で11,409本と圧倒的な数である。これは古墳時代初頭に廃絶された杭列水田に密に打ち込まれていた杭が大半である。尚、このうち300本近くは平安時代の条里型地割の区画を示す水田からの出土である。農具と限定できる木製品が計321点出土している。弥生時代中期の鍬から、中近世の輪カンジキ型田下駄まで各時代の農具が散見できるが、主にはやはり古墳時代初頭に廃絶された水田より出土した田下駄を始めとした農具が8割以上を占める。泥除け具、輪カンジキ型田下駄、鎌、ヨコヅチ、編錘はこの時代より新しい時期の層より出土している。容器も総数298点出土している。楕円形の剝物は主に弥生時代後期～古墳時代初頭の土層より出土し、その他方形剝物、挽物、曲物、漆椀は、奈良時代から平安時代（中世にまで及ぶものもある）の自然流路内出土が殆どである。祭祀具は55点出土しているが、鳥形木製品を除けば律令制祭祀に伴う遺物が大半であり、簫串、刀形、人形、舟形、馬形と主要な器種が揃っている。これら律令制祭祀具は主に平安時代の自然流路より出土した。
- 時期区分** 第4表は時代別出土木製品一覧表である。ここでは便宜的に弥生時代中期、弥生時代後期より古墳時代前期、古墳時代中期、古墳時代後期より奈良時代、平安時代、そして中・近世と6つの大きな時代枠を設定した。この時代枠は、後述する各調査区における各層、遺構の年代観を最大公約的にまとめたものである。弥生時代中期から古墳時代前期にかけては、最大公約的には弥生時代中期と弥生時代後期から古墳時代前期の2期に大別するしかない。が、2・3区においては、弥生時代中期前半、弥生時代中期後半、弥生時代後期前半、弥生時代後期後半から古墳時代前半と4期に分けることができる。これは各調査の各層、遺構の検出状態及び出土土器の時期幅に起因する問題である。ここでは各時代の出土木製品の傾向を把握するため、概略的に6時期に分けた。
- 器種ごとの出土状況** 弥生時代中期においては、2・3区と9区で若干の農具が出土している他、7区の広鍬、8区の組合せ鋤はいずれも方形周溝墓の周溝内より出土した。弥生時代後期より古墳時代前期は、全調査区より古墳時代初頭に廃絶された水田が検出され、その水田からの出土が大半である。田下駄が178枚もこの時期に限定され出土している。その他鍬が43点出土しており他の時代と比較しても農具が卓越する。杭、建築材を除き用途が限定できた木製品の数は270点余りになり、尚且この時期に一万点を越す杭が出土している。奈良時代から平安時代にかけての流路内より出土した木製品を除けば、木製品の主要部分がこの時期幅におさまる水田耕作土中より出土している。古墳時代中期の土層は瀬名遺跡においては1区より10区まで泥炭層が発達している。杭列の水田を被覆する泥炭層がそれである。2・3区の10層では自然流路に堰が設けられており、この自然流路内よりの出土木製品が多い。6、7、8、9、10区では木道状遺構が検出され、その木道内に建築材その他の木製品が敷かれていた。

第3表 潤名遺跡木製品一覧

	1区	2・3区	5区	6区	7区	8区	9区	10区	合計
農具	鉢	6	11	9	11	2	4	4	54
	泥除け		3			5	7	4	21
	籠		1	1			2	1	6
	板状田下駄	15	64	20	18	13	11	25	122
	輪カシキ型田下駄		8	7	1	2	4	4	30
	輪カシキ型田下駄 横板				2		1	4	11
	輪カシキ型田下駄 輪						1		2
	鋤							1	1
	田舟				1	1		3	5
	横鍔	2				3		3	8
	堅忤		1			1			2
	幅鍔					2		1	3
服飾具	下駄		1			3		3	7
	襦帶						1		1
紡織具	かせい						1		1
	纺錘車			1					1
発火器	火あり臼			2			1	1	5
	火あり棒						1		1
食事具	箸	5	3	9		1		4	3
容器	挽物	1	2	1	1	52	1	19	279
	鉢物	6	3	3	1	20	2	10	46
	曲物	12	3	9	7	57	8	57	160
	漆椀	1	2		2	1	1	4	12
	高杯				1				1
交通交易	木舟	1						2	1
	付札状木製品	1	2	1		5		1	1
	櫂		1						1
	鞍		1			1			2
	船		2						2
武器	矢		1						1
	楯			1					1
工具	刀子					1			1
祭祀	丼串	12				14		14	1
	刀形							3	3
	人形		1						1
	舟形			1	1			1	6
	櫂 ミニチュア						1		1
	鳥形							1	1
	馬形		1						1
	鹿物			1					1
葬送具	卒塔婆				1				1
用遁不明木製品		12	31	43	22	45	38	78	56
建築材	檜板		9						9
	柱棟		5		1			2	5
	風通し		4	1	1				8
	梯子		3	6	3	2		1	18
	原			1	1			1	2
土木材	杭	1,244	1,877	746	3,060	697	564	1,190	2,031
	縫紋木製品	3	11	6	3		3	1	28
その他の用遁不明木製品		1,476	810	542	1,584	1,623	742	1,474	563
合 計		2,815	2,850	1,410	4,718	2,549	1,395	2,915	2,721
									21,373

古墳時代後期より奈良時代においては、1区の自然流路 S R12001、7区のS R70801内の出土が多い。9区の自然流路は長尾川の本流とも考えられる大きな流路であるため時代幅がありすぎ、ここでは時代を限定できずある。明らかに中近世と考えられる遺構・遺物は多くは示せない。各調査区、少数散見するに留る。

以上、瀬名遺跡出土の木製品は、1) 初期水田農耕の段階である弥生時代中期の木製農具 2) 弥生時代後期より古墳時代前期の杭列水田に伴う多数の木製農具 3) 古墳時代

第4表 時代別出土遺物一覧表

	1区	2・3区	5区	6区	7区	8区	9区	10区
弥生時代中期		鐵(1) 田下駄(5) 縦(1)			鐵(1) 曲物(1) 舟車(1)	鐵(1)	田下駄(1) 羽物(1)	
弥生時代後期 より 古墳時代前期	鐵(6) 高(1) 田下駄(15) 羽物(1)	鐵(8) 高(1) 田下駄(55) 輪樋型田下駄(1) 朝御(1) 船(3)	鐵(11) 田下駄(17) 田舟(1) 羽物(1)	鐵(11) 田下駄(13) 輪樋型田下駄(1) 付札状木製品(1)	鐵(4) 曲(1) 田下駄(11) 羽物(1) 舟物(2)	鐵(3) 曲(1) 田下駄(22) 輪樋型田下駄(8) 付札状木製品(1) 舟形(1) 鳥形(2)	鐵(6) 曲(1) 田下駄(12) 付札状木製品(1) 舟形(1) 鳥形(2)	
古墳時代中期		鐵(2) 田下駄(4) 輪樋型田下駄(5) 羽舟(1) 羽物(1) 矢(1) 舟形(1)	鐵(1)	田下駄(1) 輪樋型田下駄(3)	堅物(1)	泥除け(1) 火さり臼(1) 火さり杵(1) 曲物(1)	鐵(1)	鐵(1) 輪樋型田下駄(5) 舟形(1)
古墳時代後期 より 奈良時代	鐵(2) 朝御(5) 曲物(9) 木筒(1) 付札状木製品(1) 舟車(12) 人形(1)	曲物(1) 椎(1) 馬形(1)		曲物(1)	泥除け(4) 田舟(1) 横柵(2) 輪樋(2) 下駄(3) 青(1) 羽物(51) 羽物(18) 羽物(51) 付札状木製品(4) 鐵(1) 刀子(1) 舟車(13)	泥除け(5) 輪樋型田下駄(4) 横柵(1) 機(1) 挽物(1) 羽物(1) 曲物(2) 挽物(7) 羽物(3) 曲物(14) 油桶(4)	泥除け(1) 田下駄(1) 機(1) 挽物(2) 羽物(1) 曲物(1)	輪樋型田下駄(4)
平安時代	曲物(1)	泥除け(3) 輪樋型田下駄(2) 下駄(1) 挽物(1) 羽物(1) 舟物(2) 付札状木製品(1)	輪樋型田下駄(6) 羽舡(1) 挽物(1) 曲物(6) 羽物(1) 付札状木製品(1)	挽物(1) 曲物(4)	泥除け(1) 挽物(1) 羽物(2) 舟物(4)	泥除け(1) 曲物(3) ミニチュア櫛(1) 挽物(1) 羽物(1) 下駄(3) 火さり臼(1) 管(4) 挽物(12) 羽物(4) 舟物(43) 木筒(1) 付札状木製品(1) 舟車(14) 刀形(3) 舟形(1)	泥除け(1) 挽物(1) 羽物(1) 曲物(5)	
中・近世	鐵(5) 曲物(2) 縦(1)	鐵(3) 縦(2) 付札状木製品(1)	輪樋型田下駄(1) 火さり臼(1) 管(9) 羽物(1)	曲物(2) 唐脱(2) 芋塔(1)	輪樋型田下駄(1) 曲物(1) 挽物(1)	輪樋型田下駄(2) 唐脱(1)	木筒(1)	泥除け(1) 火さり臼(1) 管(3) 挽物(1) 曲物(2) 縦(1) 木筒(1) 舟車(1) 舟形(1)

中期の泥炭層内より出土の木製品 4) 奈良時代から平安時代にかけての自然流路より出土した日常什器及び祭祀具、等の特徴を総括的に示し得るであろう。

### 1 1区出土木製品

下部で木棺が検出され、上面で水田跡が検出された28層中からは、用途が限定できる木製品は殆ど出土していない。22層上面で古墳時代初頭に廃絶された密な杭列を作り水田跡が検出されている。この層中からは、膝柄装着二又鋤が3点、四又鋤1点、詳細不明の鋤の身片が1点、鋤の膝柄1点と、鋤が6点出土している。田下駄が14点出土しており、弥生時代後期後半～古墳時代前期までの木製品と考えることができる。畦畔中より樋状木製品が3点出土しており水利施設の部材と考えられる。20層から切り込まれている自然流路 S R 12001から出土した木製品については後述する。17c層上面より2棟の堀立柱建物跡が確認され礎板9点、柱根5点が出土している。水田跡が検出された10層より3点、赤褐色の疊層である3層より2点箸状木製品が出土している。2,815点の木製品のうち、22層より杭が1,117点をはじめ2,096点出土している他は20層のS R 12001で523点出土しており、他は少数に留まる。

第5表 1区 瀬名遺跡木製品一覧

造構・層位		3層	10層	13層	16～19層	SR12001	20層	22層	23層	28層	29-35層	計
時代		中近世	中世・平安		奈良～平安		弥後後～古前		弥中後			
農具	鋤							6				6
	田下駄					2		13				15
	横樋					2						2
食事具	箸	2	3									5
容器	挽物							1				1
	飴物					4	1	1				6
	曲物		2	1		8	1					12
	漆椀	1										1
交通 交易	木籠					1						1
	付札状木製品					1						1
祭祀	壇串					12						12
	人形					1						1
用途不明木製品						8		4				12
建築材	礎板				9							9
	柱根				5							5
	梯子							2		1		3
土木材	杭		21	3	7	2		1,117		82	12	1,244
	樋状木製品							3				3
その他の用途不明木製品					1	486	10	947	2	24	6	1,476
合 計		3	26	4	22	527	12	2,094	2	107	18	2,815

## 2・3区出土木製品

**最良の木製農具資料** 2・3区は、全調査区の中で弥生時代中期～古墳時代中期まで特に木製農具の様相を把握するには最良の資料を提示できる調査区である。20層水田は弥生時代中期前半に遡る可能性のある水田で、この20層より広鉗の身の一部と考えられる木製品が一点出土している。16層水田は弥生時代中期後半、14層水田は後期前半、密に打たれた杭列を伴う12層水田は弥生時代後期後半～古墳時代前期、そして黒色泥炭層である11層、砂礫層である10層、黒色泥炭層である9層は古墳時代中期、と各々時期をある程度限定できる土器が伴出しており、木製農具もこれらの各層より出土している。16～9層出土の木製品については第3節で詳述する。6層上面は木樋造構を伴う杭列も検出できた水田跡であった。この6層は平安時

第6表 2・3区 木製品一覧

造構・層位		3・4層	5層	6層	7・8層	9・10層	11層	12層	14層	16層	20・21層	計
時代		中近世		平安	奈良～平安	古中		弥後後～古前	弥後前	弥中後	弥中前	
農具	鋤					1	1	6	2		1	11
	泥除け				3							3
	鋤							1				1
	田下駄					4	42	13	4	1		64
	輪型田下駄				2		5	1				8
服飾具	腰帶					1						1
	下駄				1							1
食事具	箸	2	1									3
容器	挽物				2							2
	制物				1		1		1			3
	曲物				2	1						3
	漆椀		2									2
交通 交易	付札状木製品			1	1							2
	柵									1		1
	轍					1						1
	船							2				2
武器	矢						1					1
祭祀	舟形						1					1
	馬形					1						1
用途不明木製品		2	2	8	2	6	1	8		2		31
建築材	鼠返し							2	2			4
	梯子						2		2			6
土木材	杭	835		67		107		712	58	8	90	1,877
	樅状木製品							11				11
その他の用途不明木製品		8	6	101	30	242		277	65	32	45	810
合 計		849	10	188	35	362	11	1,069	142	47	137	2,850

代後期と比定されているが、この層中より泥除け具3点、輪カンジキ型田下駄2点、挽物 泥除け具2点、曲物2点などが出土している。3層水田より杭列が検出され、杭が835本を数えた。輪カンジキ2・3区の出土木製品の総点数は2,850を数える。うち、88点の農具が出土しており、時期も上述のように押えることができる資料で重要である。やはり杭が1,877本と圧倒的に挽物・曲物多い。木製品の時期としては12層中の出土を中心とはするが、21層より3層まで時代の杭特色を示す木製品が確認できる。

### 3 5区出土木製品

14層の弥生時代中期後半の水田では木製品が検出されなかった。13層の自然流路より鉢をはじめとした木製品が出土しているが、後述する。12層水田は弥生時代後期前半であるが、田下駄はじめ小数の木製品しか出土していない。10層上面で密に打たれた杭列を有する水田が検出されているが、これも後述する。8層水田は水田区画がその後の湿地化によ

第7表 5区 木製品一覧

遺構・層位		2層	3層	5層	6層	8層	9層	10層	12層	13層	計
時代		中	近	世	平安	古中～ 平安	古中	古前	弥後前	弥中後～ 弥後初	
農具	鍬						1	4		4	9
	鋤							1			1
	田下駄							18	1	1	20
	輪カンジキ型田下駄			1		6					7
紡織具	紡錘車				1						1
発火器	火つき臼			1				1			2
食事具	箸	5	4								9
容器	挽物					1					1
	朝物									3	3
	曲物		1		1	5		2			9
	高杯									1	1
交通・交易	付札状木製品				1						1
武器	楯									1	1
祭祀	舟形						1				1
	隔物					1					1
用途不明木製品		2	1	6	25	1	5	2	1	43	
建築材	柱模									1	1
	鼠返し					1					1
	梯子							2		1	3
	扉					1					1
土木材	杭				2	4		683	44	13	746
	橋状木製品							6			6
その他の用途不明木製品		2	12	2	12	88	1	128	59	235	542
合 計		7	19	5	23	133	3	853	106	260	1,410

輪カンジキ 型田下駄 り、流路の河床となり、相当部分削られている。8層耕作土中というよりこの8層を切る  
輪カンジキ型田下駄6点が出土している。6層は暗青灰色砂質粘土で遺構は検出されず、木製品も小数である。5層は区画も明瞭でない水田跡であり、3層は水利灌漑施設も検出できた水田であり、2層では遺構の検出はない。いずれも中近世の若干の木製品が出土しているに留る。

#### 4 6区出土の木製品

鍼 弥生時代後期前半と考えられる18層水田からは膝柄装着三叉鍼1点、膝柄装着鍼の聚縛  
田下駄 部1点、鍼の膝柄1点の鍼3点が出土している。16層水田上面では古墳時代初頭に廃絶された杭列を伴う水田跡が検出されている。この16層中より二又鍼が大半の鍼8点、田下駄17点の農具が出土している。15層は砂砾層、14層は泥炭質の暗茶褐色粘土層で、いずれも古墳時代中期の層と考えられている。14層直上では木道状遺構が検出され、輪カンジキ型  
輪カンジキ型田下駄 田下駄が組み合わせ状態で出土したのを含め3点出土している。11層上面では、条里型地  
曲物 割で区画された水田が検出され、曲物が出土している。5層上面で一部水田は検出されたものの、木製品としては10層以上では特筆すべきものは見当らない。

6区は木製品の総点数4,718点と全調査区中最も多い。これは6区は基盤層が全調査区の中で最下位にあることと大きい関係があろう。ただ、その内3,060点は杭であり、更に杭列が発達してその内1,594点が古墳時代初頭に廃絶された杭列を伴う水田の畦に打たれていたもので

第8表 6区 木製品一覧

遺構・層位		2層	5層	6~10層	11~12層	13層	14~15層	16層	17層	18層	19~20層	計
時代		中	近	世	平安	奈良?	古中	弥後 ~古前	弥後前	弥中		
農具	鍼							8		3		11
	田下駄						1	17				18
	輪型田下駄						3					3
	田舟									1		1
容器	挽物				1							1
	鉢物							1				1
	曲物			2	4	1						7
	漆碗	1		1								2
葬送具	卒塔婆	1										1
用途不明木製品			1		4		5	9	1	2		22
建築材	鼠返し							1				1
	梯子							1		1		2
	扉						1					1
土木材	杭		1,195	2	3	59	20	1,594	18	160	9	3,060
	楕状木製品							3				3
その他の用途不明木製品		2	47	1	20	10	68	1,307	4	122	3	1,584
合 計		4	1,243	6	32	70	98	2,941	23	289	12	4,718

ある。総点数のわりには農具等の用途が限定できる木製品が少ない。6区は16層水田に代表される杭列が発達した水田域であったといえよう。

### 5 7区出土木製品

12層の砂礫上面では盛土をして方形周溝墓が作られた。1号墓周溝より鉢の身の一部が出土している。10b層上面では縄群が検出されているが、この10b層は、上位の10a層水田の耕作が及んでいる層である。10a層上面は古墳時代初頭に廃絶された杭列を伴った水田跡が検出された。四又鉢1点、田下駄が13点出土している。9層は暗褐色泥炭層でやはり田下駄古墳時代中期に発達した泥炭層である。木道状遺構が検出され、その中から堅杵が出土している。8層から切り込んでいる自然流路S R 70801は後述するが、奈良時代を中心とした多数の木製品が出土している。6層、7層の土中より容器類が出土しているが、遺構にかかわるものではない。

7区はS R 70801出土の木製品を除けば10a層水田の杭列も顕著ではなく、木製品の出

第9表 7区 木製品一覧

遺構・層位		2・4層	6・7層	SR70801	8層	9層	10a層	10b層	11層	12層	13層	計
時代		平安～中世	平安	6C後～8C	古後～奈良	古中	弥後後～古前	弥中後	弥	中		
農具	鉢						1			1		2
	泥除け		1	3			1					5
	田下駄						13					13
	輪樋型田下駄	1					1					2
	田舟			1								1
	機械			3								3
	堅杵					1						1
	礪錐			2								2
服飾具	下駄				3							3
食事具	箸				1							1
容器	挽物		1	51								52
	刷物		2	18								20
	曲物	1	4	51					1			57
	漆椀	1										1
	交通 交易	付札状木製品			1	3		1				5
工具	駒				1							1
祭祀	肅串				13				1			14
用途不明木製品				3	31	1	1	9				45
土木材	杭	490		113			94					697
その他の用途不明木製品		128	15	511	27	32	701	1	18	57	133	1,623
合 計		621	26	804	31	34	821	2	19	58	133	2,549

土数も多くはない。S R 70801出土の木製品は、奈良時代の木製の日常什器を垣間みるに良い資料である。

#### 6 8区出土木製品

18層上面で方形周溝墓3基が検出され、その周溝内より弥生時代中期後葉の土器と共に、組合わせ鉢が出土した。17b層上面で弥生時代後期前半の水田跡が検出され、それとほぼ区画を踏襲しながら古墳時代初頭に廃絶された水田跡が17a層上面で検出されている。これら17層では、木製農具（鉢、田下駄など）が18点ほど出ているが、他の調査区に比して多い数ではない。また、この時期の杭列も特に6区のような多数の杭を用い複雑な構造を簡素な杭列を持ったそれと異なり、簡素な杭列になり、当然杭の本数も少なくなっている。8区では歴史時代以降になんでも自然流路も殆どなく、あったとしても小規模なもので終わってしまう、自然流路に伴うことが多い木製品の数も少ない。この木製品の出土数の少なさは8区の標高の高さに起因するものと考えることができる。古墳時代初頭に廃絶された水田跡のレベルを見ると6区で海拔7.5m、7区で7.8m、9区で7.4m、10区で7.5mであるのに比して8区では8.1mである。当然地下水位の高さもこれらのレベルと相関関係があろう。地下水位の相対的に低い8区では杭列も発達せず、田下駄を始めとする湿田用農具の出土例も少なく、あつたとしても土中水分が少ないため、後世の残存状態も悪い。また、歴史

第10表 8区 木製品一覧

遺構・層位		5~6層	7~9層	10~13層	14a層	14b層	15~16層	17a層	17b層	18層	20~24層	計
時代		平安・中世			奈良・平安		古中	弥後後 ~古前	弥後前	弥 中		
農具	鉢							4				4
	泥除け				1	5	1					7
	轍							1		1		2
	田下駄							4	7			11
	輪樋型田下駄		2			4						6
服飾具	横梯					1						1
発火器	火つき臼						1					1
	火つき杵						1					1
容器	挽物					1						1
	剣物					1		1				2
	曲物			3		2	1	2				8
	漆椀	1										1
祭祀	櫛ミニチュア			1								1
用途不明木製品		5	6	2	3	11	6	5				38
建築材	柱根										2	2
土木材	杭	91	9	19	1	3	1	429	3	4	4	564
	樋状木製品							1	2			3
その他の用途不明木製品		33	23	13	24	74	148	284	90	43	10	742
合 計		125	39	42	28	94	164	732	107	48	16	1,395

時代に入ってもやはり相対的にレベルの高い8区調査区内には自然流路も流れず、当然木少數の製品の出土数も少ないという現象を導き出したと考えられる。木製品の数1,395は全調査木製品区で一番数が少ない。また、古墳時代初頭に廃絶された水田より出土した木製品の数も732と一番少ない。

## 7 9区出土木製品

第11表 9区 木製品一覧

造構・層位		1~19層	20~34層	SR92501	SR92502~ SR93303	35層	37層	38層	40層	41~42層	計
時代		中近世	奈良・平安・中世			古中	弥後後~古前	弥中			
農具	鋤					1	1	2			4
	泥除け		1	2		1					4
	鋤							1			1
	田下駄		1			1	7	15	1		25
	輪様型田下駄						4	4			8
	鋤					1					1
	田舟		2			1					3
	横檣			1		2					3
	鋤鉤			1							1
服飾具	下駄		1	1		1					3
紡織具	かせい						1				1
発火器	火つき臼				1						1
食事具	箸		1	3							4
容器	挽物		1	11		7					19
	剝物		3	3		1		2		1	10
	曲物		12	33		12					57
	漆椀		2		2						4
交通 交易	木簡	1			1						2
	付札状木製品			1							1
祭祀	斎串		3	2	9						14
	刀形				3						3
	舟形					1					1
用途不明木製品		3	11	20	6	15	3	3	17		78
建築材	梯子							1			1
	扉		1								1
土木材	杭	115	456		3		1	7	515	91	2,1190
	櫛状木製品									1	1
その他の用途不明木製品		24	531	44	116	126	21	72	371	6	163, 1,474
合 計		143	1,026	122	141	169	26	95	928	98	167, 2,915

- 杭列論、弥生時代後期～古墳時代前期までの水田跡より出る杭列には密に杭が打ち込まれている。9区の木製品の出土状態の特徴はSR92501～SR93301に代表される歴史時代の自然流路から木製品が多数出土していることであろう。これらの自然流路については後述する。
- 曲物・挽物 鉄刃装着鎌
- 斎串
- 刀形木製品
- 9区の木製品の出土状態の特徴はSR92501～SR93301に代表される歴史時代の自然流路から木製品が多数出土していることであろう。これらの自然流路については後述する。概ねの傾向を記すと、SR93301は曲物、挽物等の容器及び完形の鉄刃装着の鎌が出土している。SR92502～SR93303は斎串10点、刀形木製品3点が出土しており、祭祀的色彩が強い流路である。SR92501は曲物33点、挽物7点とやはり容器類の出土が多い。SR93301とSR92501では容器類の良好な資料を示すことができる。SR92001は20層土面で検出された流路であるが、この流路内より斎串は1点であるが小児の頭骨、多数の梅または桃の種子及び錢貨4枚が集中して出土している。9区ではその他、中・近世においては大小の自然流路が交錯しており、流路の覆土中より木製品が出ている。
- この時期の流路は、互いに複雑に切り合っており、流路内出土の土器も大幅な時期幅を有しているため、各々の流路の時期を限定して考えることが難しいところばかりである。
- 以上9区では弥生時代後期～古墳時代前期にかけての杭列を伴う水田跡より出土した木製品もあるものの、歴史時代に多分現在の長尾川の本流が何處かこの9区内を流れたと考えられ、それらの自然流路内より日常什器を中心とした木製品が多数出土していることが特筆できよう。
- ### 8 10区出土木製品
- 弥生時代後期前半以前には杭列はあるものの、木製品はあまり見られない。弥生時代後期後半～古墳時代前期までの所謂杭列水田跡より膝柄が装着したままの鉢や鳥形木製品が出土していたりする。また、この水田跡には杭が密に打たれた畦畔が走り、特に護岸とも考えられるような長大な杭の列が何列も検出されている。調査面積に比して、この水田より1,630本もの杭が確認されていることは特筆すべきことであろう。31層上面で古墳時代前期と位置付けられる水田跡が確認されているが、この層からは残念ながら特徴を示す木製品は出土していない。歴史時代以後、9区の方が標高が低く、自然流路が縦横に流れるのに比して10区は安定した水田域で、木製品等の遺物も散見するのみである。

第12表 10区 木製品一覧

造様・層位		5~17層	18層	19~22層	23層	24~27層	30層	31~32層	33~35層	36層	39~41層	計
時 代	近世	平安		奈良~平安		古中	古前	弥後後~古前	弥後前	弥中		
農具	鎌						1	4	2			7
	泥除け	1		1								2
	鋤							1				1
	田下駄							5	7			12
	輪樺型田下駄					4	5					9
発火器	火きり臼	1										1
食事具	箸	3										3
容器	挽物	1		1								2
	剣物			1								1
	曲物	2	4	1								7
	漆碗	1										1
交通 交易	木簡	1										1
	付札状木製品								1			1
祭祀	煮串	1										1
	舟形	1					1	1				3
	鳥形								1			1
用途不明木製品		25	10	12	3	7	3	4	1		1	66
建築材	鼠返し								1	1		2
	梯子							3				3
	扉				1				1			2
土木材	杭	51		3	115	24	17		1,630	189	2	2,031
	橋状木製品								1			1
その他の用途不明木製品		98	31	62	16	11	132	35	159	19		563
合 計		186	45	81	135	46	159	53	1,803	210	3	2,721

### 第3節 一括出土として扱う木製品

**一括出土 質料** 木製品は、土器が各地域における編年が組まれ、精緻で体系的な研究が進められているのに比して、その資料の数量においても、その体系的な研究においても貧弱と言わざるをえない。編年の基礎資料となる時期幅の狭い一括資料が、木製品の場合数少なく、あつたとしても、地域的に木製品が残存するような地下水位の高い所に限定されてしまうということなど、編年を粗んだり、形態的変遷を追ううえに、大きな支障となる問題が多い。

**一括資料の抽出・検討** 瀬名遺跡出土の木製品は、2万点を越え、点数の上から見ても、その器種の豊富さから見ても、全国に冠たる資料と思われる。そこでここでは、様々な出土状況にある木製品のうち、出土状況において、一括性の強い木製品の一群をその出土状況を検証しながら扱ってみたい。勿論、土器のように短い時期幅の中で捉えられるものではないし、また木製品は、自然流路の覆土中よりの出土が多く、当然、伴出する土器をもって性急に時期を決定することが憚れる資料が多いことは確かである。そのような制約や、問題点も了解した上で敢えて一括資料として扱ってみたい。

**一括資料の内訳** ここで扱う一括資料は以下の11群である。

- |           |                                  |
|-----------|----------------------------------|
| <b>内訳</b> | 1 2・3区16層以下出土の木製品                |
|           | 2 2・3区14層水田出土の木製品                |
|           | 3 5区13層出土の木製品                    |
|           | 4 2・3区12層水田出土の木製品                |
|           | 5 5区10層水田出土の木製品                  |
|           | 6 2・3区10・11層出土の木製品               |
|           | 7 7区S R 70801出土の木製品              |
|           | 8 9区S R 93301出土の木製品              |
|           | 9 1区S R 12001出土の木製品              |
|           | 10 9区S R 92502・92503・93303出土の木製品 |
|           | 11 9区S R 92501出土の木製品             |

**一括資料の時期** 1は弥生時代中期後半、2、3は弥生時代後期前半、4、5は、弥生時代末～古墳時代初頭、6は古墳時代中期、7、8は概ね奈良時代、9は8世紀後半から9世紀前半、10は9世紀～10世紀、11は平安時代後半とそれぞれ、幅はあるものの、ある程度、時期を限定して扱える資料群である。

#### 1 2・3区16層以下出土の木製品

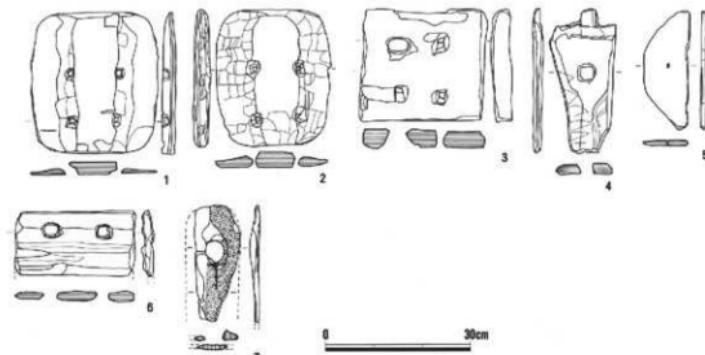
**検出構成** 16層の茶褐色粘土層は、17層～19層の砂疊層と15層の砂疊層に挟まれていた。16層上面では、調査区の東半分において、水田跡が検出されている。調査区西側は下層の19層疊層が大きく盛り上がっている影響で、微高地を形成しているため、水田はこの地形に沿って低地にあたる東半分の域内に造成されたと考えた。水田は大規模な畦畔によって囲まれた内を東西南北に走る小規模な畦畔によって細かく区画されている。調査区内において水田域の東端に溝 S D 21601が検出されており、この溝内より有束式併行（弥生時代中期後葉）の壺型土器が出土している。この16層水田の土層は砂疊層に挟まれていることより、この16層出土の木製品をこの時期と限定できるものである。

1、2、3、4、5は水田土層中より出土した。1、2は東側水田域中央やや北側の畦寄りの田面内より出土しており、2つの田下駄が同一箇所に並んでいた。形態的にも継長で、足代の隆起も長軸方向に長く、漸次盛り上がるよう削り出しているところは、その後（弥生時代後期以降）の田下駄との差異を示している。田下駄の四孔は表面、裏面両方向より粗く切り込み、方形を意識して穿っており、また表、裏にはやや規則性に欠く調整痕が残るなど、穿孔技術、表面調整技術などを観察できる良好な資料である。3は方形の厚い板に4孔穿たれており、やはり後期以降の田下駄とは趣を異にする。4、5は用途不明木製品である。以上、1、2、3は潮名遺跡においても数少ない弥生時代中期後半に時期を限定することが可能な田下駄である。

6、7は追加資料として載せておく。6は20層より出土しているが、20層上面では水田跡、流路、堰状杭列構造が検出された。条痕文系の土器片が少量出土しているというが、時期が明確におさえられない。田下駄の半分は欠落しているものと考えることができるが、弥生時代中期後半より古い田下駄と言いつ切れるほど明瞭な残存状態を示すものではない。7は21層より出土したものだが、鉢の身の可能性を指摘しておきたい。21層の堰状杭列付近のE15グリットより出土している。21b層より丸子式土器が出土していることより、この21層は中期前半以前と考えられているが、この鉢が21b層の土器の時期と判断するのは難しい。

第13表 遺構別出土遺物一覧 2・3区16層以下

No	登録番号	層位	遺構	大項目	中項目	小項目	細項目	グリット	レベル	出土位置	形 亜	全長	最大幅	厚さ	種類
1	W 1547	16層	農具	田下駄			E14N	6.960	畦野寄りの田面内	4孔板状の田下駄 A型に属する。	29.1	26.1	3.1	(スギ)	
2	W 1548	16層	農具	田下駄			E14N	6.995	畦野寄りの田面内	△型に属しW1547とセットとなる。	28.1	23.7	3.2	(スギ)	
3	W 1552	16層	農具	田下駄			D16N	6.705	SK21601近く西面	ほぼ方形板状の4孔田下駄。C1型	22.8	25.3	3.3	(スギ)	
4	W 1561	16層	用途不明品	有孔木製品			D14S	6.427	田面内	板状の木下駄に加工している。	29.6	13.7	2.3	(スギ)	
5	W 1509	16層	用途不明品				D13S	7.251	SD21601付近西面	半円形の板材。	22.9	9.5	1.1	(スギ)	
6	W 1595	20層	農具	田下駄			D20S	4.923	段食痕跡内	4孔田下駄の半分が残存。C1型。	13.3	24.4	1.8	(スギ)	
7	W 1638	21層	SR22102	農具	鉢	広輪	E16N	4.852		正圓の柄孔付近のみが残存。	23.6	9.4	0.8	カシ	



第1図 2・3区16層以下出土遺物実測図

## 2・3区14層水田出土の木製品

検出遺構 暗褐色粘土層である14層は、下層に15層の砂層、上層に13層の砂層に挟まれており、夾雜物がない良好な遺構、遺物を提示してくれる。上面の水田跡の検出では、東西方向2本、南北方向4本の計6本の大規模な畦畔が確認された。2・3区では、16層上面で弥生時代中期後葉の水田が確認でき、15層の砂層を挟んで14層上面で弥生時代後期前半（登呂式併行期）の水田が確認でき、また13層という砂層を挟んで12層上面で古墳時代初頭に廃絶された水田が、それぞれ確認できている。16層、14層、12層、各々が、短い時期幅で、時期が限定でき、各々上面で水田跡が確認され、また各々の層には、小数の土器と伴に多数の木製品が含まれていた。この3層は瀬名遺跡の中でも、その夾雜物を含まない一級資料の水田遺構と遺物を示すことができる。

杭列の性格 14層水田には畦を補強する杭列も確認されているが、その大半は心持ちの広葉樹材によるもので、この後、弥生時代後期後半以降、どの調査区でも確認できるスギの割材を用いた杭列とは性格を異にする。また出土木製品の多くは、補強材として埋め込まれていた畦畔の盛土中や畦畔と畦畔の交差点付近からの出土であった。

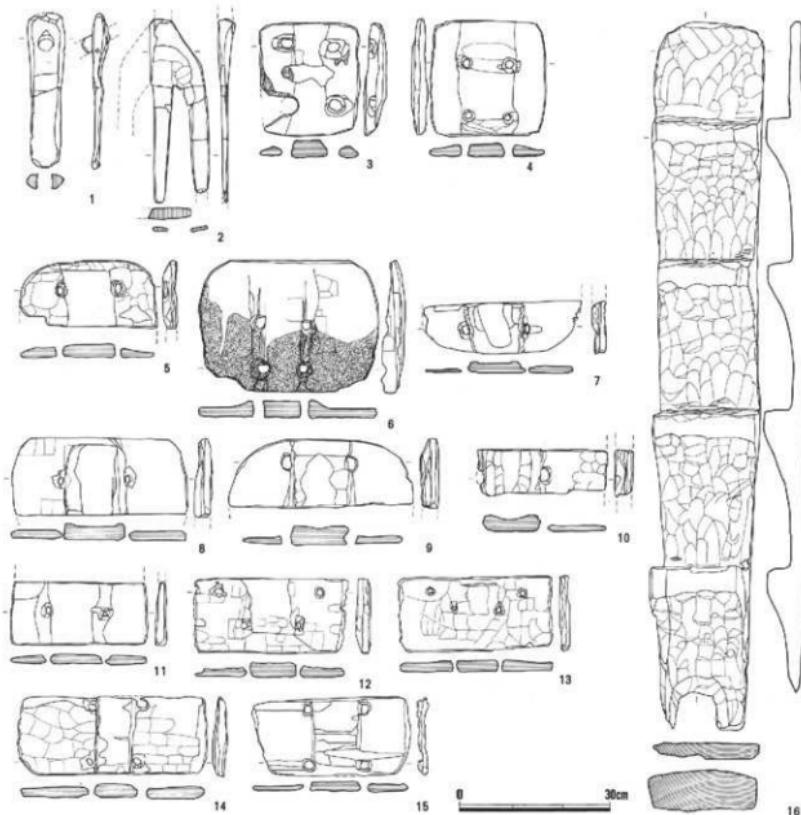
狹 錘 1は瀬名遺跡で唯一確認できる柄孔装着の狭鍘である。2は欠落部分があつて不確かであるが、藤柄装着の三叉鍘となるものであろう。これだけの木製品が出土しているこの14層中より、藤柄装着の二叉鍘が全然見られないことは、記憶に留める必要がある事実であろう。田下駄は13点確認できる。3、4、5は前出の16層で確認できた弥生時代中期の継長田下駄の系譜を引く物と考えられる。6、7、8、9、10は田下駄の項でB-1類に分けた、足問い合わせ横長の田下駄である。6は、特に残存状態が良く、形態、加工痕跡も明瞭に観察できる資料である。7、8はほぼ同一箇所の畦内より出土している。11、12、13はB-2類に属する足台漸次隆起の横長田下駄である。11、12は畦内より近接して出土した。継全長がいずれも短く、前孔間が特別長いなど他の田下駄と相当違うため、セットで用いられたものと考えることができる。14、15はB-3類に属するものである。この2・3区の14層出土の田下駄に限って言えば、A類もまだこの時期残り、B-1類、B-2類、B-3類が出現していくという事が抑えられる。16は畦の中に敷かれていた梯子である。

第14表 遺構別出土遺物一覧 2・3区14層

No.	登録番号	遺構	大項目	中項目	小項目	編項目	グリット	レベル	出土位置	形態	全長	最大幅	厚さ	樹種
1	W 1598	SK21403	農具	鍘	狭鍘		C195	7.326	SK21405との交差部分付近	柄孔装着の狭鍘の身と柄の一一部。	31.9	7.7	0.9	カシ
2	W 1413	SK21404	農具	鍘	又鍘	三叉鍘	C15N	7.243		藤柄装着の三叉鍘の身。	37.8	3.6	0.5	カシ
3	W 1147		農具	田下駄			B16N	6.528	SK21403より南約1m	継長の後状4孔田下駄。A類。	23.2	20.6	3.5	(スギ)
4	W 1414		農具	田下駄			C17S	7.018	SK21401の東側近く	継長の板状田下駄。A類。	23.6	23.8	2.3	(スギ)
5	W 1426	SK21404	農具	田下駄			C16N	7.215		継長の板状田下駄の手半分。A類。	13.4	20.0	2.6	(スギ)
6	W 1146		農具	田下駄			E17N	7.456	SK21402 SK21406との交差部分近	継長の板状田下駄。足柄の状隆起あり。B1類。	27.0	37.0	3.2	(スギ)
7	W 1428	SK21401	農具	田下駄			R16S	7.583		継長、足問い合わせ横長あり。手半分残存。B1類。	10.1	31.8	2.0	(スギ)
8	W 1493	SK21401	農具	田下駄			C18S	7.401	SK21403との交差部分	継長、足問い合わせ横長あり。前方半分残存。B1類。	16.8	35.9	2.6	(スギ)
9	W 1475		農具	田下駄			F16S	7.707		継長、足問い合わせ横長あり。前方半分。B1類。	14.1	37.7	3.4	(スギ)

第14表 遺構別出土遺物一覧 2・3区14層

No	登録番号	遺構	大項目	中項目	小項目	細項目	グリット	レベル	出土位置	形 態	全長	最大幅	厚さ	樹種
19	W 1478	轟具	田下駄				E16N	7.618	SK21402の南約1m付近	横長、足廻り伏隠起あり。B1駄。	9.5	28.1	2.7	(スギ)
11	W 1496	轟具	田下駄				D18N	7.516		横長、側次足台隠起。前方半分伏起。B2駄。	13.0	27.9	1.8	(スギ)
12	W 1474	SK21402	轟具	田下駄			E17N	7.500	交差部分	横長、頭次足台隠起。頭孔細長い。B2駄。	15.2	31.4	2.9	(スギ)
13	W 1473	SK21402	轟具	田下駄			E17N	7.529	交差部分	横長、頭次足台隠起。B2駄。	15.4	31.5	2.0	(スギ)
14	W 1425	轟具	田下駄				C15N	7.145	SK21404近くの西側	横長、足台隠起して伏隠。B3駄。	16.2	39.0	3.0	(スギ)
15	W 471	轟具	田下駄				E18S	7.370	SK21402, SK21401の交差部分分岐	横長、足台隠起。B2駄。	16.1	31.8	1.9	(スギ)
16	W 863	建木材	梯子				D15N	7.538	SK21404近く東側	残存状態良好。椎丸形。又に加工。	146.9	22.9	9.3	(スギ)



第2図 2・3区14層出土遺物実測図

### 3 5区13層出土の木製品

**検出構構** 13層上面では水田跡は検出されず、3本の流路跡（S R 51301, 51302, 51303）、これららの流路内より5列の堰跡、流路と流路の間の部分より森林跡、東側の流路 S R 51301より東に2棟の掘立柱建物跡が、それぞれ検出されている。14層淡黒色粘土層は上面で弥生時代中期後半の水田跡を出しており、この14層の上に13b層の緑灰色粘土層があるが、この13b層は調査区中央部から西側にしか存在せず、掘立柱建物が建つ東側には存在しない。その上に13a層の青灰色粘土があり、上述の遺構を検出している。そしてこの13a層の上に灰褐色粘土層の12層があり、この12層では弥生時代後期としか言えない土器片を少量伴う水田跡を検出した。11層は青灰色砂礫層で、この上に杭列を伴い、古墳時代初頭に廃絶された10層水田がくる。以上のように、5区の13層、12層の年代観は微妙なところがある。

**年代観** 13層上面の流路跡より、登呂式に併行、もしくは若干それより古いという時期幅の土器が出土しており、12層水田では、少量の弥生後期の土器片、そして12層は砂礫の11層に覆われ、その上の10層は古墳時代初頭まで続く。

この13層の3本の流路より木製品が出土している。S R 51301より5点（うち1号堰にかかって出たのが2点）、S R 51302が1点、S R 51303が4点の計10点である。1、2、3、4はいずれも多又鋤の一部である。1は残存状態悪く、直柄柄壺装着の三又鋤と考えられる。2、3、4は藤柄装着の四又鋤、4はいくつに分かれるか不明の多又鋤片である。5はS R 51301の丁度中央部辺りの川底から出土した田下駄である。6はS R 51303の5号堰にひっかかっていた高杯の脚部である。7、8はこの時期の典型的な梢円形削物である。9、10はS R 51301の1号堰に水を止めるため、組み置かれていた面積のある板状の木製品で、堰に転用される前はそれぞれ橋及び梯子であった。1~10までい

**多又鋤** 3、4はいずれも多又鋤の一部である。1は残存状態悪く、直柄柄壺装着の三又鋤と考えられる。2、3、4は藤柄装着の四又鋤、4はいくつに分かれるか不明の多又鋤片である。5はS R 51301の丁度中央部辺りの川底から出土した田下駄である。6はS R 51303の5号堰にひっかかっていた高杯の脚部である。7、8はこの時期の典型的な梢円形削物である。9、10はS R 51301の1号堰に水を止めるため、組み置かれていた面積のある板状の木製品で、堰に転用される前はそれぞれ橋及び梯子であった。1~10までい

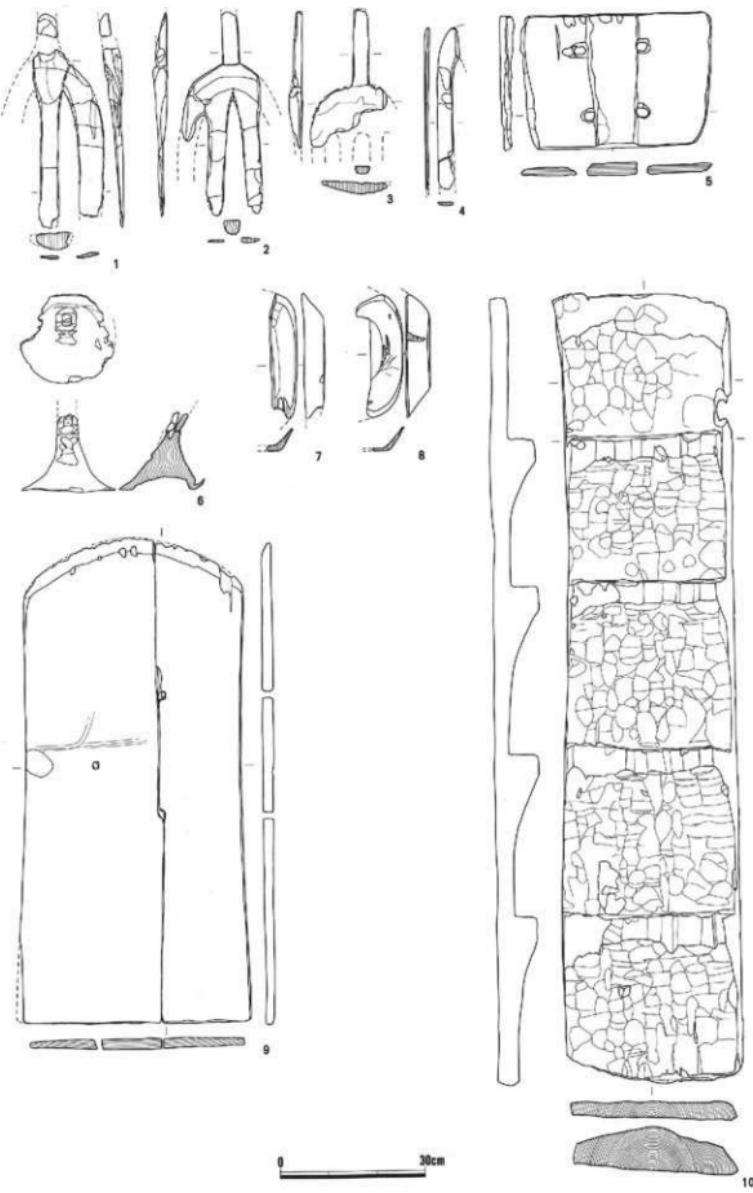
**田下駄** られ、2、3は藤柄装着の四又鋤、4はいくつに分かれるか不明の多又鋤片である。5はS R 51301の丁度中央部辺りの川底から出土した田下駄である。6はS R 51303の5号堰にひっかかっていた高杯の脚部である。7、8はこの時期の典型的な梢円形削物である。9、10はS R 51301の1号堰に水を止めるため、組み置かれていた面積

**橋** のある板状の木製品で、堰に転用される前はそれぞれ橋及び梯子であった。1~10までい

**梯子** すれも精巧な技法で製作された木製品である。

第15表 遺構別出土遺物一覧 5区13層

No	登録番号	遺構	大項目	中項目	小項目	細項目	グリット	レベル	出土位置	形態	全長	最大幅	厚さ(高さ)	種類
1	W 321	S R 51301	農具	堰	又鋤	三又鋤 柄穴	F295	6.536	S R 51301川底付 左	三叉縁で束縛が明 穴に導入される。	44.1	4.9	0.5	カシ
2	W 344	S R 51302	農具	堰	又鋤	四又鋤	D31N	6.331	川底付近	四又縁、藤柄堅縛 用の突起がある。	42.0	3.5	0.6	カシ
3	W 415	S R 51303 4号堰	農具	堰	又鋤	四又鋤	E32N	6.366	S R 51303西岸支 流との交差部分	四又縁、藤柄堅縛。	28.0	13.8	0.9	カシ
4	W 343	2号堰	農具	堰	又鋤		I32S	6.658	S R 51303西岸SD 51301より南3m	多又鋤の身の一端。	32.3	3.2	0.7	カシ
5	W 334	S R 51301	農具	田下駄			F295	6.559	川底付近	横柾、足台陶泥張 B1駄。	27.7	38.9	2.1	(スギ)
6	W 417	S R 51303 5号堰	容器	高杯			F32S	5.885	S R 51303西岸支 流との交差部分	組み合せ式の木 製高杯。	17.9	19.4	13.8	(スギ)
7	W 333	S R 51301	容器	倒物			F29W	6.486	川底付近	梢円形の削物。	24.8	5.4	4.4 (1.0)	(スギ)
8	W 331	S R 51301	容器	倒物			F29			梢円形の削物。	25.2	8.9	5.0 (0.4)	(スギ)
9	W 362	S R 51301 1号堰	武器	槍			D28N	6.185		1号堰に組み合 れていた槍、二つに 割れて転用。	100.4	44.0	2.2	(スギ)
10	W 371	S R 51301 1号堰	建築材	梯子			D28N	6.270		1号堰に組み合 っていた梯子、4段 のステップ。	163.0	36.4	9.2	



第3図 5区13層出土遺物実測図

#### 4.2.3 区12層水田出土木製品

- 潮名遺跡においては、全調査区で古墳時代初頭に廃絶された水田跡が検出されているが、  
12層水田の性 格 この2・3区12層水田はその最も典型的で良好な資料を提示できるところである。12層は  
良縁な資料 14層の水田が洪水で廃絶された後に堆積した粘土層で、下層には厚さ5cm程の13層砂礫層  
が存在し、上層は厚い11層の黒泥層に覆われている。下は13層の砂礫が、上は11層の黒泥  
がそれぞれ存在し、12層を挟み込んでおり、12層水田をより時期幅の狭い、夾雜物の少な  
い良好な資料にしている。
- 柱畔の構造 12層上面で検出された水田跡は東西方向に2本、南北方向に4本ある大規模柱畔によっ  
て区画されている。杭や横板でもって柱畔を固定しているところが大半であり、また、こ  
ぶし大の石を埋めて、柱畔を補強しているところもある。柱畔内は種々の木製品が敷き込  
まれ、埋め込まれている。特に調査区北端を東西に走る柱畔SK21201内からは、杭、横木、  
準備造船 板敷、農具の他、準備造船の舷側部材が敷き込まれるなど、種々の木製品が出土した。こ  
の柱畔SK21201より、二又歎5点、田下駄15点が出土している。遺物一覧表で示して  
いるように12層水田より出土した木製品のうち、杭以外で用途が限定できたのは、40点に上る。  
鍬が6点、鎌の柄1点、田下駄25点、剣物1点、舟材2点、橋状木製品5点である。大半  
膝柄装着 が柱畔SK21201とSK21206内より出土している。1~5は膝柄装着の二又鍬身である。  
二又鍬身 すべてSK21201内出土である。6は膝柄装着の三又鍬身である。鍬で注目すべきことは、  
前出の2・3区の14層及び5区13層では、多又歎が卓越していたが、この12層水田では、  
その前の時期には全く姿もない膝柄装着二又歎が圧倒的な数を占めることである。後述す  
るよう、古墳時代中期の泥炭層よりは、わずかに破片が出土する他、殆ど消滅している  
ことより、この2・3区14層出土をもって、膝柄装着二又歎の時期を示し得ると考える。  
6の三又歎も含め、この12層から出土の歎はすべて膝柄装着の歎である。これは潮名遺跡  
全体の傾向であるが、柄孔装着の歎が少なく、膝柄装着の歎が卓越することはこの12層で  
代表される湿田における当時の着柄の技術を窺うことに直結すると想定できよう。つまり  
柄孔装着の歎より膝柄装着の歎の方が、柄の装着としてより強固であったと想像できる。
- 田下駄 8~32は板状で4つ張綱用の孔が穿たれている田下駄である。田下駄の分類でいくと、  
8~12がB-2類、13~16がB-3類、17~31がC-1類、32がC-2類にそれぞれ属す  
る。各々、規格の類似性をあまり考えられないほど、様々な形態を示す。ここで抑えてお  
きたい事実は次の3点である。14層（弥生時代後期前半）までは、A類及びB-1類があつ  
たが、ここでは一例も見当たらないこと。C類は2・3区14層、5区13層では皆無であつ  
たが、この16層においては、田下駄25点中16点がC類というように、多數になっている  
こと。田下駄9、10、11、15、20、21、26、29、32の穿孔が小さな方形をしており、また28のよう  
に縦位に鋭い刃を入れて粗く穿つなど新しい穿孔技術が用いられていることがあげられる。  
前者の穿孔方法をG類とし、後者の穿孔方法をH類として、その穿孔方法の変遷を第V章  
第4節で考察している。
- 精円形剣物 33はこの時刻の定型化した精円形剣物である。34、35、36、37、38、39は有頭板状の木製品  
である。34を輪カンジキ型田下駄の足板とも言えるかもしれないが、縦縛用の穿孔もなく、

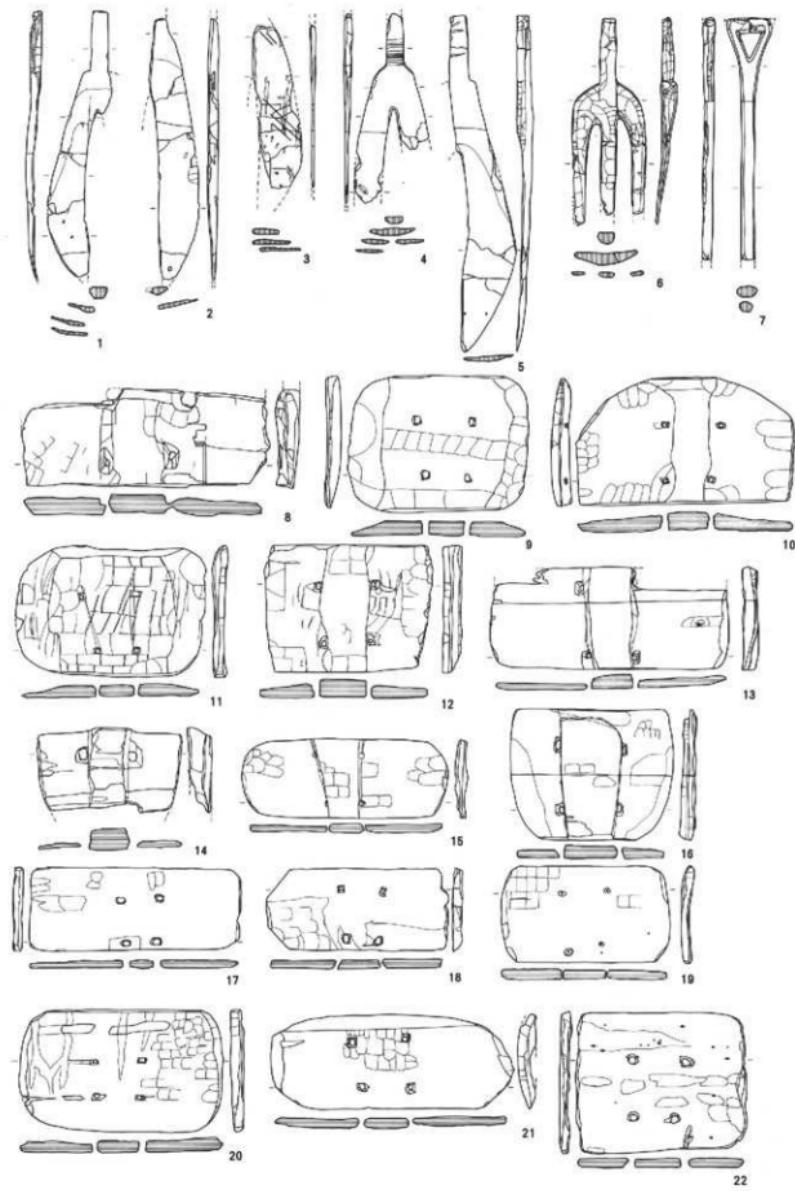
懷疑的にならざるをえない。40、41は用途不明である。42、43、44、45、46は後述するが、SK21206の畦内に畦と直交するように埋め込まれていた、暗渠とも考えられる水利施設の構造物部材である。瀬名遺跡では、樋状木製品として、やはり畦畔に直交するように埋め込まれたものが、多数出土しているが、この2・3区12層のSK21206におけるこの構造物は、その組み合わせ方法、遺構（水田）との関係なども窺い知れる重要な遺物である。

第16表 遺構別出土遺物一覧 2・3区12層

No	登録番号	遺構	大項目	中項目	小項目	組項目	グリット	レベル	出土位置	形 態	土質	最大幅	厚さ	特徴
1	W 420	SK21201	農具	鉢	又鉢	二又鉢	F13S	8.026	SK21203との交差部分付帯出土地点	勝利型鉢の二又鉢。 やや小型。	54.8	7.9	0.5	カシ
2	W 478	SK21201	農具	鉢	又鉢	二又鉢	F14S			勝利型鉢の二又鉢。	53.6	8.3	0.5	カシ
3	W 404	SK21201	農具	鉢	又鉢	二又鉢	E16N	8.182	SK21202との交差部分付帯出土地点	勝利型鉢の二又鉢。	33.4	8.6	0.5	カシ
4	W 626	SK21201	農具	鉢	又鉢	二又鉢	F16S	8.130	SK21202交差部分より範囲約10m	勝利型鉢の二又鉢。 完全に側面破損あり。	44.5	5.9	0.5	カシ
5	W 432	SK21201	農具	鉢	又鉢	二又鉢	R15N	8.011	SK21202交差部分より範囲約2m	勝利型鉢の二又鉢。 やや大型。	68.7	10.4	0.5	カシ
6	W 722-1		農具	鉢	又鉢	三又鉢				勝利型鉢の三又鉢。	42.3	2.9	0.7	カシ
7	W 722-2		農具	鉢	筒の柄	二角形 握り	C18S	7.631 7.454	SK21205(盛土の高まりをなし)の内堀	握りが三角形をしている。 一本棒の柄。	49.6	9.2	2.3	カシ
8	W 296	西側排水溝	農具	田下駄						捷美、足台駄状次進駄。 B2駄。	20.0	50.4	3.6	(スギ)
9	W 408	SK21201	農具	田下駄			E14N	8.190		捷丸長方形。B2駄。	28.0	36.6	2.8	(スギ)
10	W 721	SK21206	農具	田下駄			C18S	7.465	本體状造槽より東約3m	前方潜溝を描く。 B2駄。	25.9	46.0	3.7	(スギ)
11	W 412	SK21201	農具	田下駄			E14N	8.186		捷丸長方形。9に似る。 B2駄。	26.4	38.7	2.4	(スギ)
12	W 429	SK21206	農具	田下駄			C18S	7.511	(漫食痕跡内)	捷美。足台駄状次進駄。 B2駄。	26.0	34.6	3.7	(スギ)
13	W 609	S212101	農具	田下駄			F15S	8.073	舟形田地地点(区外)	縦に仕切して横に長い。 足台駄状次進駄。 B3駄。	20.9	47.9	2.8	(スギ)
14	W 453	SK21204	農具	田下駄			C21N	7.441	漫食痕跡内?	小形で足台駄状。 大きめ。B3駄。	16.4	29.5	4.4	(スギ)
15	W 435	SK21201	農具	田下駄			F14S	8.007	SK21203との交差部分	捷美、鶴門形。手 回し小舟形。B3駄。	16.2	42.4	1.9	(スギ)
16	W 681	SK21201	農具	田下駄			F14S	7.667		足台駄の捷美、足の 間に削る。B3駄。	26.9	33.4	2.5	(スギ)
17	W 430	SK21206	農具	田下駄			C18S	7.607		捷丸長方形。C1駄。	17.1	43.5	1.8	(スギ)
18	W 449	SK21204	農具	田下駄			D21S	7.310		左側溝の角、切り落とす。C1駄。	16.8	37.2	1.9	(スギ)
19	W 554	SK21201	農具	田下駄			F13S	8.099	舟形田地地点	両側縁は低張。 C1駄。	19.7	34.6	1.9	(スギ)
20	W 438	SK21201	農具	田下駄			E16N			捷丸長方形。C1駄。	24.9	41.6	1.9	(スギ)
21	W 436	SK21201	農具	田下駄			F15S	8.133		捷丸長円形。 C1駄。	19.2	49.9	2.1	(スギ)
22	W 406		農具	田下駄			E14N	8.063	SK21202より南へ約2m	吉平横溝。捷丸方 形に近い。C1駄。	28.8	34.8	1.8	(スギ)
23	W 154	西側排水溝	農具	田下駄			C21S			捷美型方形。 C1駄。	22.3	40.2	2.1	(スギ)
24	W 720	SK21206	農具	田下駄			C18S	7.538	SK21205との交差部分	捷丸長方形。 C1駄。	21.3	37.8	2.7	(スギ)
25	W 418	SK21201	農具	田下駄			F14S	8.241		捷丸長方形。 C1駄。	18.5	38.8	1.4	(スギ)

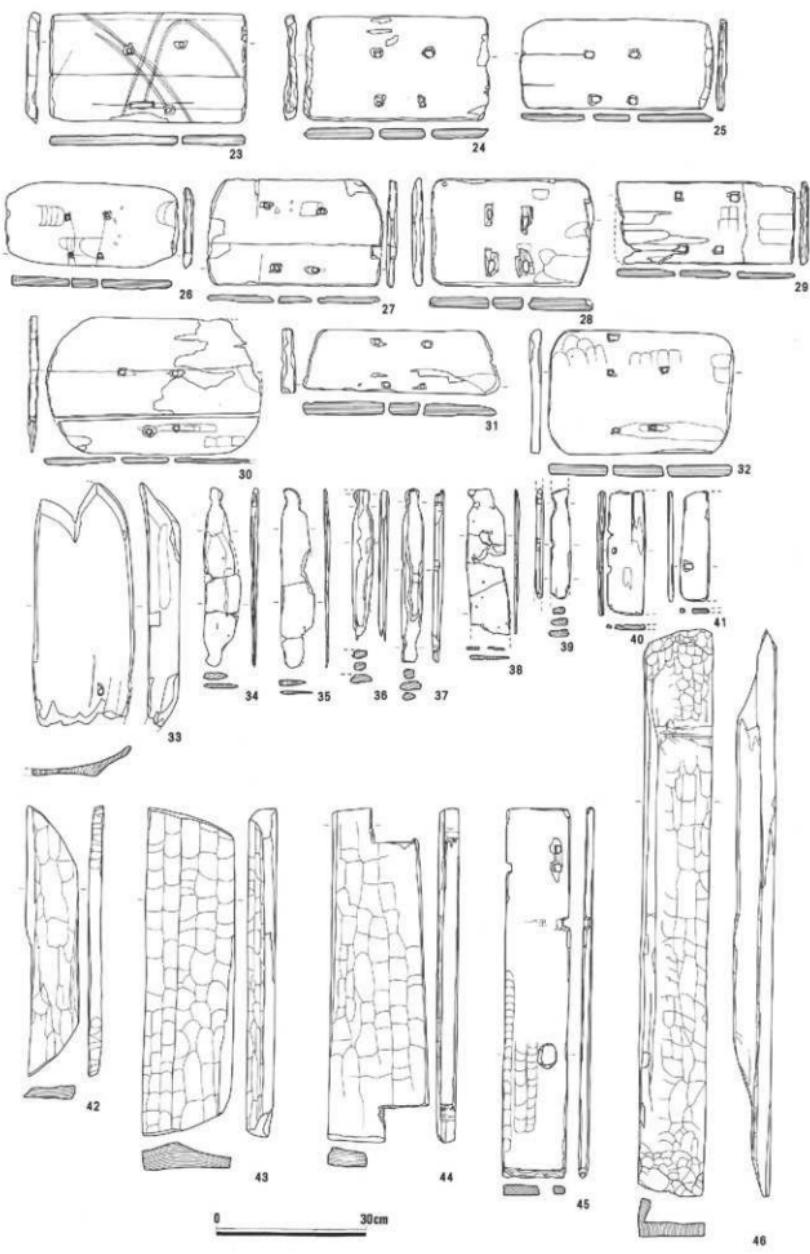
第16表 遺構別出土遺物一覧 2・3区12層

No	登録番号	遺構	大項目	中項目	小項目	細項目	グリット	レベル	出土位置	形態	全長	最大幅	厚さ	樹種
26	W 625	SK21201	農具	田下駄			F16S	8.131	SK21202との交差部 分より東へ約10m	横長。はば櫛円形。 C1面。	17.0	35.4	1.7	(スギ)
27	W 633	SK21201	農具	田下駄			F18S			横長。はば櫛円形。 C1面。	21.0	35.6	1.3	(スギ)
28	W 417	SK21201	農具	田下駄			F13S	8.069	舟材出土地点	横丸長方形。 C1面。	22.1	33.3	2.1	(スギ)
29	W 403						E16N	8.083	SK21201南側	横長長方形。C1 面。	16.9	36.1	1.4	(スギ)
30	W 413	SK21201	農具	田下駄			F16S	8.244 8.209	SK21202の交点より 西側	横長地円形。C1 面。	27.0	43.8	1.2	(スギ)
31	W 582	SK21201	農具	田下駄			F14S	7.884	SK21203との交差部 分内	縦に屈く横長円形。 C1面。	13.0	40.3	2.4	(スギ)
32	W 388	SK21201	農具	田下駄			F17S	8.236	SK21202との交差部 分	横丸長方形。C2 面。	25.5	37.4	2.1	(スギ)
33	W 505	SK21204	容器	鉢物			E21N	7.733	船跡に沿って出土	椎円形の範物。	50.0	20.6	6.3	(スギ)
34	W 405	SK21201	農具	田下駄	輪擣型 田子駄		E16N	8.222	SK21202との交差部 分	輪カンジキ型田下 駄の足底。	36.0	7.4	1.6	カシ
35	W 409	SK21201	用途不明品				E15N	8.316		輪が缺く輪カンジ キ型田下駄になる か不明。	36.7	7.4	1.2	カシ
36	W 1728	SK21201	用途不明品	有縫板 状製品			F17S	8.266	SK21202との交差部 分より南北外	有縫板状材。	31.0	4.0	1.8	(スギ)
37	W 1728	SK21201	用途不明品	有縫板 状製品			F17S	8.274	SK21202との交差部 分より西	両端有縫板状材。	35.0	4.5	1.9	(スギ)
38	W 410	SK21201	用途不明品				E15N	8.263		輪カンジキ型田下 駄の足底の可動性 あり。	29.0	3.0	0.9	カシ
39	W 641	SK21201	用途不明品	有縫板 状製品			E16N	8.094	SK21202との交差部 分	有縫板状材。	23.0	4.0	1.5	(スギ)
40	W 645	SK21201	用途不明品	加工木 片			F14S	8.318	舟材出土地点	側面に2箇所-1角 形の切り込みあり。	25.0	7.5	1.0	(スギ)
41	W 1505		用途不明品	有孔木 製品			E20N	7.263	便食痕跡	方形の孔1箇所残 存。	22.0	6.0	1.0	(スギ)
42	W 1031	SK21206	土木材	機械木 製品			C19S	7.252	木橋状造機(木製) 船跡に直交している	円形の範材の一部。	55.0	10.7	2.6	(スギ)
43	W 768	SK21206	土木材	機械木 製品			C19S	7.219	木橋状造機(木製の 蓋板)船跡に直交	42~46は組合わせ られて木橋に。	67.5	18.5	5.4	(スギ)
44	W 768	SK21206	土木材	機械木 製品			C19S	7.234	木橋状造機(木製の 蓋板)船跡に直交	木橋の側板の筋材 に用いられていた。	68.0	20.0	3.6	(スギ)
45	W 1032	SK21206	土木材	機械木 製品			C19S	7.260	木橋状造機(木製) 船跡に直交している	木橋の側板の部材 に用いられていた。	70.0	13.0	2.1	(スギ)
46	W 1033	SK21206	土木材	機械木 製品			C19S	7.167	木橋状造機(木製) 船跡に直交している	木橋の底、側板と して用いられていた。	116.0	13.0	7.0	(スギ)



第4図 2・3区12層出土遺物実測図1

0 30cm



第5図 2・3区12層出土遺物実測図2

## 5 5区10層水田出土木製品

12層水田は洪水によってもたらされたと考えられる砂礫によって覆われている。これが 12層水田の  
11層の青灰色砂礫層で、この砂礫層の上に淡茶褐色粘土層の10層水田耕作土がくる。この 性 格  
10層は上から9層青灰色砂礫層が重い、上下砂礫に挟まれた純粹な層である。10層上面で 時 期  
は杭列を伴う水田跡が検出され、古墳時代初頭に洪水流により廃絶された水田と考えられ る。検出された水田跡は調査区全域に広がり東西方向3本、南北方向4本の大規模な畦畔 による区画である。南北方向の水路も伴っている。

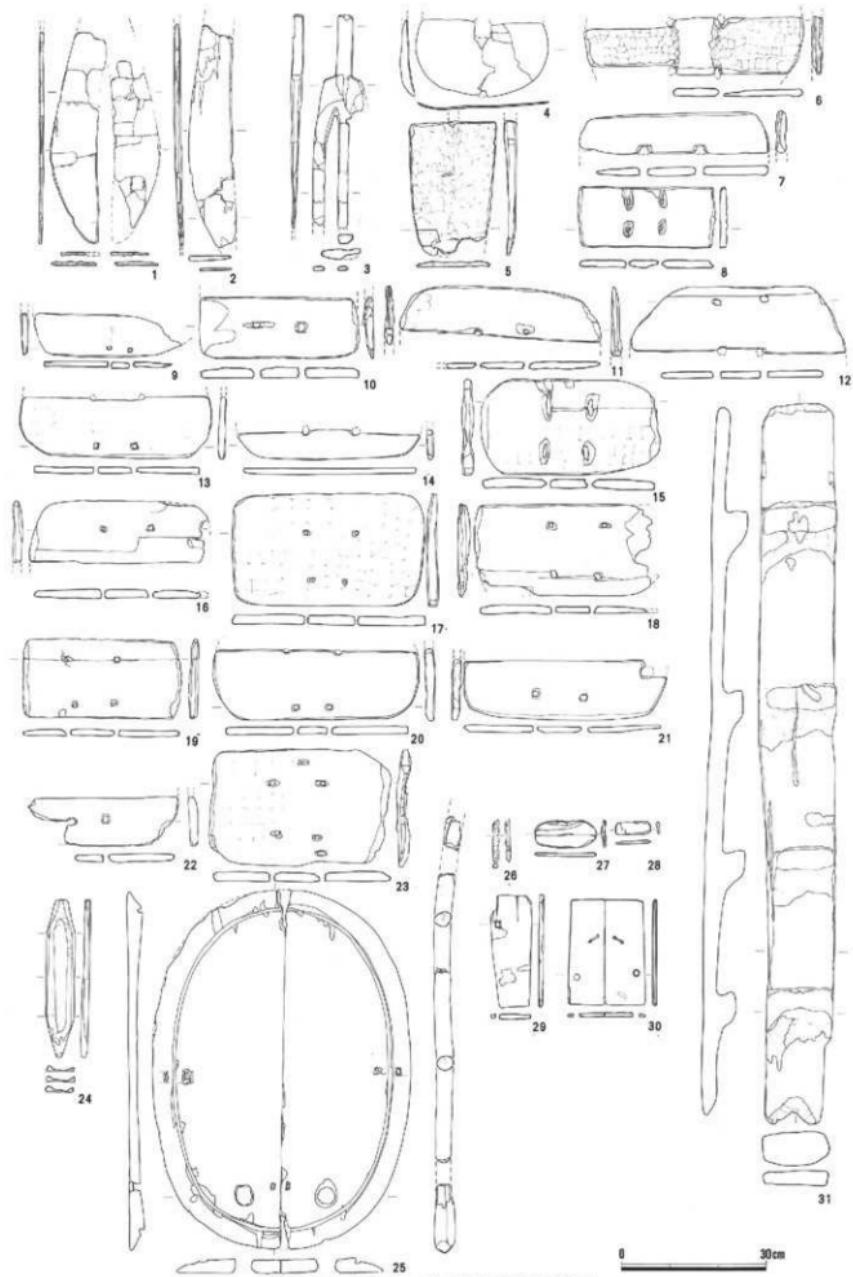
用途が限定できる木製品は27点出土している。丸鉗も含め鉢が4点、鋸が1点、田下駄が18点、舟形木製品1点、楕円曲物の底板が1点、火鑓白1点、梯子1点がそれぞれ出土している。大半が畦畔内より出土しており、特にSK51001、SK51004、SK51006、SK51007よりの出土である。

1、2は膝柄装着の二又鉢の身である。3はやはり膝柄装着の三又鉢である。当遺跡で 確認できるこの時期（弥生時代後期より古墳時代前期）は湿地化が進み、鉢もより頑強な 膝柄装着 二又鉢  
緊縛ができる膝柄装着の鉢が卓越する傾向を読みとることができる。4は唯一丸鉢と認定 三又鉢  
できるもので、泥除け具と考えたい。5は柄が欠落しているが、スコップ状の一木鋤である。6～23は田下駄である。田下駄は南北方向のSK51002、SK51001、東西方向のSK51007、SK51006内から出土している。SK51006を削っている浸食痕跡のSD5101内より3点出土しているが、これらは元来SK51006内のものであったと考えられる。 丸 鉢  
田下駄  
田下駄はこれらの大畦畔内よりの出土である。田下駄の形態については、圧倒的にC-1類が多数である。18点中、16点がC-1類である。6はB-3類である。ここではA類、B-1類はもとより皆無であるが、B-2類も見当たらない。この点は注目したいところである。C類も残存状態の良いものは少ないが、平面形は横長の長方形、楕円形を基本とするが、規格的に近似していない。穿孔技法は2・3区12層で見たとおり、小さな方形に穿つもの（穿孔技術のG類）と、縦位に刃幅のある刃物で切り込んで穿ったもの（穿孔技術のH類）が目立つ。9、11、13、16、17、18、19、20、21、23などは前者であり、8、15は後者である。

24は板材を加工して舟形木製品にしたものである。25は楕円形の容器の底板と考えられる木製品である。右の棒状木製品が上に乗って出土している。板に穿った円形の孔に、棒 状材が丁度挿入できることより、この棒が栓の役割を果たしたとも考えられる。この底板 容器の底板  
にどんな側板が装着されるかでこの木製品の評価が、分かれるところであるが、曲物の側板が装着されれば、曲物容器として最も古い段階に属するものとも考えられる。側板がはめ込まれていたと考えられる溝が楕円形にめぐり、側板と底板とを縫じ合わせた縫を挿入したと考えられる穿孔も2つづつ4箇所あり、運搬具としての楕円形曲物と想定できる形態上の条件は揃っている。時期が古墳時代前期に遡ることにより、曲物の底板と断定することには慎重にならざるをえない。詳細は曲物の項を参照してほしい。26は火鑓白である。火 鑓 白  
27、28、29、30は用途不明木製品である。31は梯子でありやはりSK51006に埋め込まれ、梯 子  
敷板として転用されたものである。

第17表 遺構別出土遺物一覧 5区10層

No	登録番号	遺構	大項目	中項目	小項目	細項目	グリット	レベル	出土位置	形 肢	全長	最大幅	厚さ	説明
1	W 275	農具	鍬	又鋸	二又鋸					鍬柄堅持の二又鋸。	43.5	9.5	0.5	カシ
2	W 282	SK51004	農具	鍬	又鋸	二又鋸	G27S	8.186	SK51006との交差部分	鍬柄堅持の二又鋸。	46.5	9.0	0.4	カシ
3	W 214	SK51001	農具	鍬	又鋸	三又鋸	D31N	7.887		鍬柄の方向に斜って傾むる	43.8	2.8	0.7	カシ
4	W 208	SK51001	農具	鍬	鋸跡付	丸鋸	E31N	8.008	鍬柄の方向に沿って傾むる	薄く、直角断面は一方形の割合がある。	16.0	27.2	0.3	カシ
5	W 231	SK51006	農具	鍬	一本鋸	スコップ状	G27S	7.949	SK51004との交差部分	一本鋸の身の部分。	27.2	17.6	2.5	カシ
6	W 212	SK51001	農具	田下駄			E31S	7.906		足台後縁を強調。B3脚。	11.8	48.2	2.2	(スギ)
7	W 209	農具	田下駄							腰板板状田下駄。C1脚。	8.6	38.9	1.8	(スギ)
8	W 216	農具	田下駄				E32N			腰板表方形。C1脚。	12.5	28.0	1.6	(スギ)
9	W 215	SK51001	農具	田下駄			D31N	7.906		腰板表圓形。C1脚。	8.7	29.1	1.1	(スギ)
10	W 221		農具	田下駄						腰板表方形。C1脚。	12.5	32.7	1.8	(スギ)
11	W 211		農具	田下駄						腰板、椎円形。C1脚。	10.1	40.6	1.5	(スギ)
12	W 204		農具	田下駄						半円形。C1脚。	13.9	44.0	1.3	(スギ)
13	W 234		農具	田下駄						腰板、椎円形。C1脚。	12.7	39.3	1.2	(スギ)
14	W 227	SK51006	農具	田下駄			F26N	7.947	腰帶に沿ってい	腰板、椎円形。C1脚。	8.2	37.2	1.2	(スギ)
15	W 228		農具	田下駄						腰板、椎円形。C1脚。	19.4	36.8	1.8	(スギ)
16	W 229		農具	田下駄						腰板、ほぼ椎円形。C1脚。	12.8	35.4	1.6	(スギ)
17	W 230	SK51006	農具	田下駄			G27S	7.929	SK51004との交差部分	腰板、扁丸表方形。C1脚。	23.2	39.8	2.3	(スギ)
18	W 224	淀食痕跡	農具	田下駄			F32N	7.653	SK51002を複数した淀食痕跡部分	腰板、扁丸表方形。C1脚。	18.9	36.4	1.8	(スギ)
19	W 232	SK51006	農具	田下駄			G27S	8.012	SK51004との交差部分	腰板、ほぼ表方形。C1脚。	16.2	32.7	1.6	(スギ)
20	W 233	SK51006	農具	田下駄			G27S	7.919	SK51004との交差部分	腰板、椎円形。C1脚。	14.5	42.3	1.6	(スギ)
21	W 209	SK51001	農具	田下駄			D31N	7.840		腰板、椎円形。C2脚。	12.3	41.8	1.3	(スギ)
22	W 249	SK51006	農具	田下駄			F28N	7.886		腰板、椎円形。C1脚。	9.9	30.8	1.5	(スギ)
23	W 207	SK51007	農具	田下駄			E30N	8.063		腰板、扁丸表方形。表面に1つ穴があつた。	24.1	36.4	1.5	(スギ)
24	W 250	SK51006	薪火具	舟形			F25N	7.844		腰板、1.5cmしかなく深い舟形である。	32.5	5.8	1.2	(スギ)
25	W 205		骨器	曲物						カブゾ形状になる。大きめな孔と、細れための橋状孔及び骨板組織の孔がある。	74.3	53.5	3.2	(スギ)
26	W 82		舟火器	火あり			G27S		SK51004とSK51006との交差部	火あり白状の孔が2ヶ所ある。	8.7	1.3	1.0	(スギ)
27	W 213-1	周邊不明品	板状木製品				D32N				5.6	12.7	1.1	(スギ)
28	W 213-2	周邊不明品	板状木製品				D32N				2.7	7.2	0.6	(スギ)
29	W 251	SK51004	周邊不明品	丸孔木製品			F27K	8.074	SK51004との交差部分よりE29南	方形の孔が1つ残る。	23.1	8.3	1.0	(スギ)
30	W 263	SK51004	周邊不明品	丸孔木製品			F27K	8.193	SK51004との交差部分よりE29南	2枚板を棊じ合わせている。	21.6	16.0	0.9	(スギ)
31	W 258	SK51006	建築材	棒子			C27S	8.176	SK51004との交差部分	4段ステップが残存。	148.5	16.6	8.3	



第6図 5区10層出土遺物実測図

## 6 2・3区10・11層出土木製品

10・11層の性格は確認されていない。が、後述する様に木製品は多く含む。10層は上下を泥炭層に挟まれた砂礫層で12層上面の杭列水田が放棄され湿地化した期間の一時期に流路や洪水によって堆積したものと考えることができる。この砂礫層は粘土質の強い泥炭層である9層に覆われている。10・11層は和泉式土器併行期と考えられ、他の調査区でも確認されている古墳時代中期の泥炭層に対応するものである。

**鍼** 1は10層内出土の鍼の身片である。隆起状の厚みのある柄孔付近の一部である。2は11層泥炭層より出土した藤柄装着二又鍼の身片である。弥生時代末～古墳時代初頭にかけてあれだけの出土例を数えた藤柄装着の二又鍼も古墳時代中期には殆ど消滅してしまった。

**田下駄** かのようにしか出でこない。3、4、5は四孔板状田下駄である。3の田下駄はやはり弥生時代後期～古墳時代初頭に盛行する横長の板状田下駄が粗雑化した形態と考えられる。表面整形も不規則に粗雑で、穿孔もバランスがとれていない。5の田下駄は前時代の形態をそのまま残すが、後孔は再度穿ち直したものと考えられる。6、7、8、9、10は輪カカンジキ型田下駄である。特に6、7、8は両端を有頭状に削り出し、足緊縛のための孔が3箇所穿かれていると想定できるため、まず輪カカンジキ型田下駄であろう。9、10は有頭状の板材であり、大きさとしても足板として相応しく、また6区のW64などは足緊縛用の穿孔しかない足板（これは横板を伴って出土しているため輪カカンジキ型田下駄と断定しうる）も出土しているため、これらもその可能性が十二分にあると考える。11は豊舟形木製品

杵の敲打部である。12は小型の舟形木製品である。13は祭祀の要素も舟形同様指摘できる矢

矢または矢形木製品である。

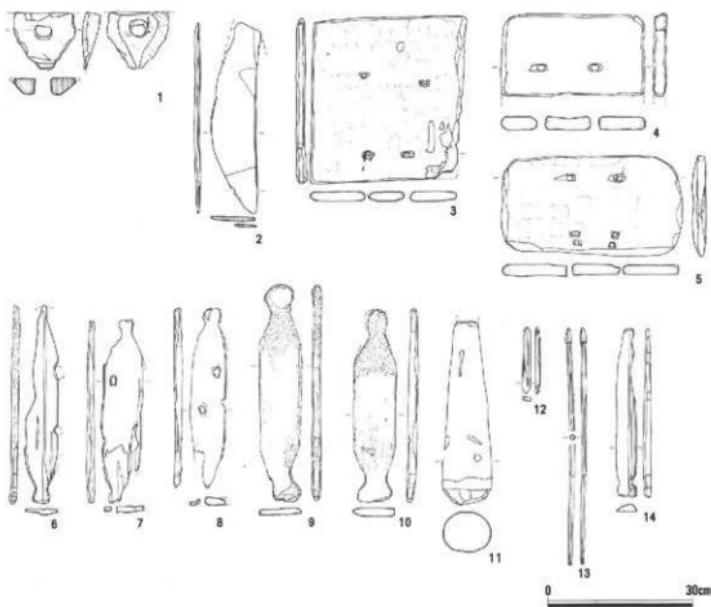
この時期になるとこの直前の時期の杭列水田の時期に比して木製品の数も少なくなるが、鍼、田下駄が粗雑化してきており、一方で輪カカンジキ型田下駄が盛行してくることが言えよう。

第18表 遺構別出土遺物一覧2・3区10・11層

No	登録番号	種別	遺構	大項目	中項目	小項目	標項目	グリット	レベル	出土位置	形態	全長	最大幅	厚さ	材料
1	W 391	10層 砂層内	農具	鍼	鍼	広頭		D19			広頭の舟形駆起の みが残存している。	11.7	12.6	1.8	カシ
2	W 395	11層 泥炭層	農具	鍼	又鍼	二又鍼	F16S	8.280	SK31201(12層) 上		二又鍼の片身の のみが残存してい る。	39.1	9.1	0.6	カシ
3	W 393	11層 泥炭層	農具	田下駄			E16S	7.984	SK31202西側上		ほほ丸の板材に 横溝などが4つ穿 かれている。	34.2	32.6	2.2	(スギ)
4	W 400	11層 泥炭層	農具	田下駄			E15N	8.337	SK31201とSK31202交差部分上		圓丸方型になると 想定できる。	16.7	29.4	2.7	(スギ)
5	W 394	11層 泥炭層	農具	田下駄			E16N	8.021	SK31202西側上		楕円、圓丸楕方型。 後方の2孔は再度 穿ち直している。	20.5	37.4	2.1	(スギ)
6	W 396	11層 泥炭層	農具	田下駄	輪型 田下駄		F16S	8.362	SK31201上		複数有頭状の板に 3孔が穿かれたも のと想定する。	40.8	6.5	1.2	(スギ)
7	W 398	11層 泥炭層	農具	田下駄	輪型 田下駄		F16S	8.394	SK31201上		両端の舟形状の板 に方孔の3孔が穿 かれていた。	36.7	8.1	1.2	(スギ)
8	W 397	11層 泥炭層	農具	田下駄	輪型 田下駄		F16S	8.410	SK31201上		両端の舟形状の板 に3孔が穿かれて いた。	36.9	7.5	1.6	(スギ)
9	W 390	11層 泥炭層	農具	田下駄	輪型 田下駄		E14N	8.152	SK31202南約2m		両端舟形状の板 である。縦孔はな い。	44.9	8.6	1.8	(スギ)

第18表 遺構別出土遺物一覧 2・3区10・11層

No	登録番号	層位	遺構	大項目	中項目	小項目	細項目	グリット	レベル	出土位置	形 態	全長	最大幅	厚さ	網目
10	W 389	11層 泥炭層		鳥糞	田下駄	輪型 田下駄		E15N	8.119	SK21202南約2m	両脇有頭状の板材である。端丸はない。	39.7	8.7	1.8	(スギ)
11	W 316	10層	1号塚	鳥糞	堅杵			D18S	7.976		堅杵の片方の轍打部である。	32.5	機部最大 径10.0	—	カシ
12	W 53	10層	SK21001	祭祀場	身形			E19			長さ13.7cmの小形の身形である。	13.7	3.7	0.8	(スギ)
13	W 54	10層	SK21001	武器	矢			D18S			矢先を有頭状に削り出している。	48.5	1.2	1.2	(スギ)
14	W 399	11層 泥炭層		用途不 明品	有頭状 本品			E15N	8.417	SK21201とSK21 202の交差部分上	両角を有頭状にし ている。	35.0	4.0	1.6	(スギ)



第7図 2・3区10・11層出土遺物実測図

7 7区8層S R70801出土木製品

- 検出遺構 9層は古墳時代中期に堆積したと考えられる泥炭質土壤の層であり、その上を被覆する暗緑色粘土層が8層である。8層上面では調査区東端で小規模な畦畔によって区画された水田跡が一部検出でき、またこの水田跡を切る様に、最大幅18.6m、深さ約1.1mの自然流路S R70801が調査区やや東寄りに北から南流しているのが検出できた。この流路の河床は約5/300の急勾配であり急流だったことが想定できる。この流路内で2箇所堰が検出されている。1号堰はS R70801の北端やや西寄りに位置し、構造物として丸太材を組み合わせ、流れに対して網代編みのヨシを架している。また2号堰は1号堰の南約7.5mのところに時 期 構造物を設けている。この流路内からは遼考研編年のⅢ期中葉の須恵坏より、奈良時代の高台付長頸壺まで時代幅のある土器が出土している。流路であることを考え、概ね奈良時代の流れとも考えられる。後述するが、木製品に関しては明確に古墳時代のものと言えるものはなく、むしろ奈良時代と限定してもおかしくない。流路内出土であるため慎重にるべきとも考える。
- 泥除け 1、2、3は鍔の柄に装着する泥除けと考える木製品である。奈良時代の流路よりこの田舟 泥除け具と考えられる木製品が3点出土したことを確認しておきたい。4は大型の田舟のヨコヅチ 一部である。5、6、7はヨコヅチであるが5は扁平な作りである。8、9は編錐である。
- 編錐 10~22は簀串である。1つ1つの形態上の特徴は後述する。10~14及び16の6点が完形で簀串 出土している。16は左右8ヶ所づつ三角形の切り込みを入れている卒塔婆型の簀串であり、この形態は瀬名遺跡においては特殊な形態である。他の完形品5点の共通要素はいずれも主頭状をしている頭頂に表裏面と平行方向に上方より下へ切り込みが入っている加工である。左右側面の斜めの切り込みはそれぞれ異なっているが、この主頭上の切り込みは共通している。この切り込みは瀬名遺跡出土の他の簀串には見られない加工で、このS R70801出土の簀串にのみ共通に見られるものである。
- 削物 23~35は削物である。33は肥厚で特別な器型を呈す。34は左右に把手が付く盤状の容器である。35は一部が残存しているため全体の器形は明確には出来ないが、舟形になる浅い容器と考えられる。これら特殊な3点を除けば23~32の10点の削物はすべて平面形が方形または長方形の削物である。この時期の削物がこの器形に定型化することを確認しておきたい。
- 曲物 36~76は曲物の底蓋板である。36~46の11点はカキゾコの曲物であり、47~76の29点はクレゾコの曲物である。73は木釘痕が観察できるが、残存部より楕円形の大型のクレゾコ挽物 曲物になると思われる。77~102は挽物である。77、78は椭型の挽物であり、79はやや浅くなるものの椭型である。80~102は「盤」と呼ばれる皿状の皿状の挽物である。80~101までは底面径が19.8cm~13.2cmの比較的まとまった皿状挽物である。102は小型の皿にな下駄 下駄である。103~105は歯削り出しの下駄である。106は小鞍とも考えられる小型の鞍である。
- 鞍 装以上、奈良時代の流路より出土した木製品として当該期の生活用具を把握できる一括資料と考えられる。

第19表 造構別出土遺物一覧 7区 S R 7 0 8 0 1

No	登録番号	大項目	中項目	小項目	編號H	グリット	レベル	出土位置	形 類	全長	最大幅	厚さ(高さ)	備考
1	W 718	農兵	軒	泥除け	E48N			川底	上層泥除が斜めに切り込みがある形と考えられる。	29.0	8.3	0.8	(スギ)
2	W 518	農兵	軒	泥除け	C50N	7.656		川底付近	純方形を基準とした形である。	20.1	4.3	1.2	(スギ)
3	W 798	農兵	軒	泥除け					羅列しが2つ観察できる。	14.6	3.6	0.7	(スギ)
4	W 653	農兵	屋舟			E48S	7.635	2号掘付近	平底船内にいる形状である。把手が1つ残存。	41.5	13.7	3.2	(スギ)
5	W 598	農兵	横桟		軒材	D48N	7.597	東岸張り出し部	馬平舟ヨコヅナである。船打部の凹み複数である。	36.1	船打部最大径 大径 6.3	新部最大径 2.3	(スギ)
6	W 443	農兵	横桟		芯持ち	D48N	7.733	東岸張り出し部	羅列がストッパーとて有頭状になっている。	32.2	船打檻最 大径 6.2	新部最大径 3.6	ヒノキ
7	W 469	農兵	横桟		芯持ち	D48N	7.809	川底1番 2号掘付近	羅列がストッパーとて有頭状になっている。	38.0	船打檻最 大径 5.1	新部最大径 2.8	ヒノキ
8	W 498	農兵	縦桟	有孔		D48N	7.997	川底付近 2号掘付近	丸太を手平して作った縦桟である。	7.4	12.0	4.5	イヌマ キ
9	W 615	農兵	縦桟	有孔		E49N	7.830	川底 1号掘付 近	丸太を手平して作った縦桟である。	8.4	13.2	4.0	ヒノキ
10	W 39	祭祀具	蓋串			E48S	7.700	川底より南8m 川底近く離上	SDKをもる丸太 な蓋串である。筒 形の切り込みが因 著である。	60.6	3.5	0.9	(スギ)
11	W 719	祭祀具	蓋串			E48N		川底	直頭部の頭頂に横 位の切り込みが入 っている。	22.3	2.0	0.4	(スギ)
12	W 95	祭祀具	蓋串			D49		砂礫上面	直頭部の頭頂に斜 め覆面の切り込み が入っている。	19.7	2.2	0.3	(スギ)
13	W 224	祭祀具	蓋串			C50		砂礫上面	13.7cmと小形の蓋 串である。	13.7	1.5	0.4	(スギ)
14	W 279	祭祀具	蓋串			C50N	7.583		直頭部がヤレジ 状である。頭頂に 横位の切り込みが 入っている。	17.7	1.6	0.5	(スギ)
15	W 114	祭祀具	蓋串			D49		砂礫上面	上部が欠落してい る。	10.3	1.3	0.3	(スギ)
16	W 46	祭祀具	蓋串			C50N	7.751	川底近く	両側に半塔壁状の 切り込みが有頭洞 に入る。	21.2	1.5	0.2	(スギ)
17	W 627	祭祀具	蓋串			E49S	7.726	川底 2号掘付 近	上部が欠落してい る。	30.0	1.9	0.8	(スギ)
18	W 754	祭祀具	蓋串			D50N			下部のみ残存して いる。	11.0	1.4	0.4	(スギ)
19	W 112	祭祀具	蓋串			D49	7.919	SKS1004との交 差部分砂礫上面	D部のみ残存して いる。	10.0	1.4	0.5	(スギ)
20	W 50	祭祀具	蓋串			E49		砂礫上面	D部のみ残存して いる。	17.7	1.9	0.5	(スギ)
21	W 296	祭祀具	蓋串			C49N	7.452	川底付近	D部のみ残存して いる。	17.7	1.0	0.6	ヒノキ
22	W 753	祭祀具	蓋串			D50N			下部が破壊、 2つに割れている	22.1	1.4	0.6	(スギ)
23	W 411	容器	器物			E49S	7.916	西側川底	平面長方形の倒物 である。	30.0	19.8	1.2 (7.9)	(スギ)
24	W 235	容器	器物			C49N	7.458	川底	平面長方形の倒物 である。	29.2	6.8	1.3 (6.8)	(スギ)
25	W 700	容器	器物			C49N	7.592	東側川底	平面ほぼ正方形に なる倒物。	19.7	10.0	1.1 (4.8)	(スギ)
26	W 545	容器	器物			C49N	7.718	SD70801が交差 入り込んだ地点	平面ほぼ正方形に なる倒物。	18.0	11.3	1.2 (4.5)	(スギ)
27	W 66	容器	器物			D49		砂礫上面	平面ほぼ正方形に なる倒物。	16.2	3.9	(3.9)	(スギ)
28	W 413	容器	器物			E49S	8.138	西側川底	平面ほぼ正方形に なる倒物。	18.0	5.3	1.0 (4.0)	(スギ)
29	W 216	容器	器物			D50		砂礫上面	平面ほぼ正方形に なる倒物。	10.3	2.5	0.6 (4.0)	(スギ)

第19表 遺構別出土遺物一覧 7区 SR 70801

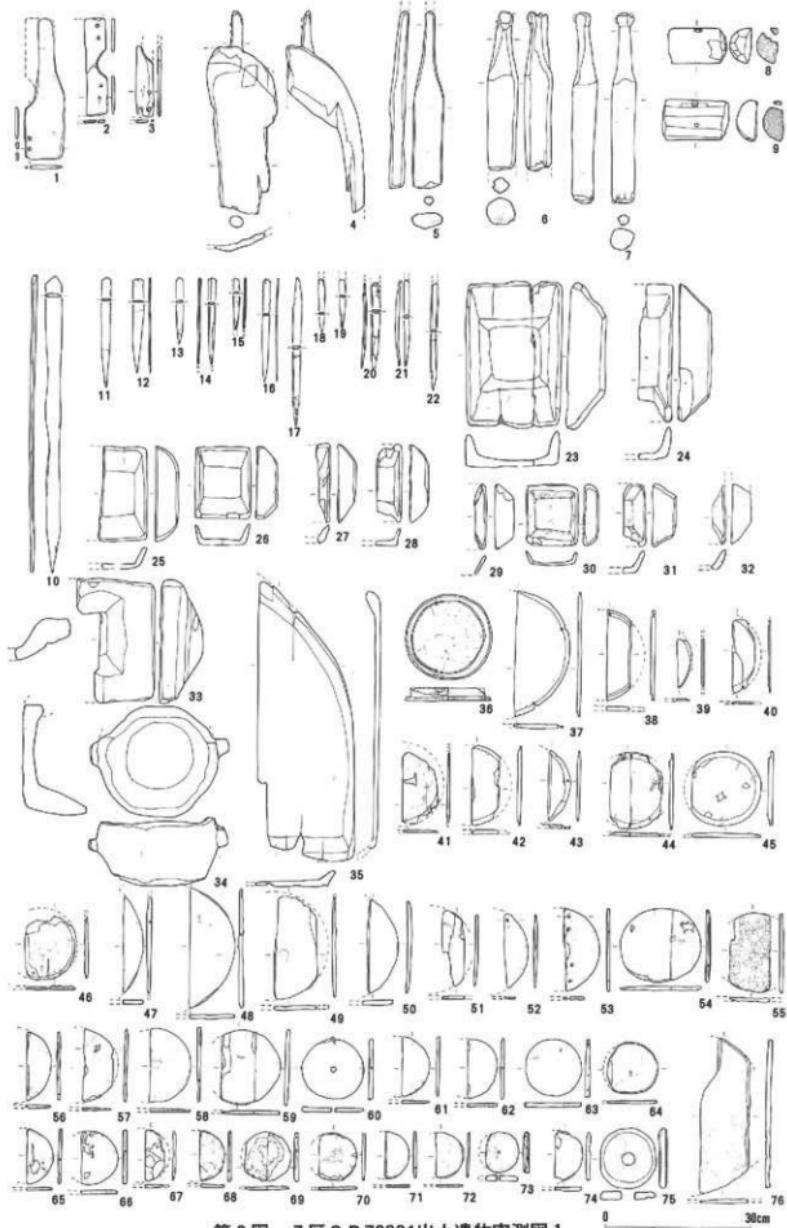
%	登録番号	大項目	中項目	小項目	細項目	グリット	レベル	出土位置	形 動	全長	最大幅	厚さ(高さ)	種類
30	W 419	容器	陶物			D49S	7,575	西側川底	平底正方形の陶物である。	17.2	10.7	0.5 (3.2)	(スギ)
31	W 215	容器	陶物			D50		砂礫上面	平底ほぼ正方形の陶物。	12.5	4.9	1.1 (5.0)	(スギ)
32	W 203	容器	陶物			C50		砂礫上面	平底ほぼ正方形の陶物。	12.2	2.9	0.8 (4.1)	(スギ)
33	W 121	容器	陶物			E48		砂礫上面	側面が斜めで、底面で丸みがあるが底盤なる形態である。	25.6	16.0	2.6 (7.7)	(スギ)
34	W 42	容器	陶物			D50N	7,882	西岸川底近く	円柱が付いた形の本底状をしている。	22.8	28.5	2.5 (13.3)	(スギ)
35	W 671	容器	陶物			E48N			縦溝が3つあると直角に折れ曲がり下から手前側になる。	53.5	20.0	1.1 (3.2)	(スギ)
36	W 38	容器	陶物			D49S	7,705	川底2号 sondより 約3m用	「美」の文字有り ガキゾコの陶物の底板。	17.3	17.8	1.1 (2.6)	(スギ)
37	W 763	容器	陶物			E49S	7,695	木戸の下層2号 sond より西2m用	複数大底25.7cm などある大底のガキゾコの陶物。	25.7	11.3	1.0	(スギ)
38	W 193	容器	陶物			D49		砂礫上面	ガキゾコの陶物の底板。	18.6	5.0	0.8	(スギ)
39	W 111	容器	陶物						ガキゾコの陶物の底板。	9.9	3.0	0.5	(スギ)
40	W 62	容器	陶物			D49		砂礫上面	ガキゾコの陶物の底板。	15.0	4.7	0.4	(スギ)
41	W 715	容器	陶物						ガキゾコの陶物の底板。	14.5	7.3	0.6	(スギ)
42	W 784	容器	陶物			C49N			ガキゾコの陶物の底板。	16.3	5.7	0.9	(スギ)
43	W 786	容器	陶物			C49N			ガキゾコの陶物の底板。	14.3	4.6	0.8	(スギ)
44	W 579	容器	陶物			D49S	7,434	西側川底	ガキゾコの陶物の底板。	15.9	10.8	0.8	(スギ)
45	W 537	容器	陶物			C49N	7,709	東側川底 砂礫上面	「J」の文字有り ガキゾコ。	15.5	14.3	1.0	(スギ)
46	W 685	容器	陶物			D50S	7,857	内側川底	ガキゾコの陶物の底板。	12.7	10.4	0.7	(スギ)
47	W 56	容器	陶物			D49		砂礫上面	クレゾコの陶物の底板。	19.8	4.2	0.9	(スギ)
48	W 466	容器	陶物			D49N	7,741	東側河床中央 2号 sond 5cm	双元大底24.4cm と大底のクレゾコ の陶物。	24.4	9.3	0.9	(スギ)
49	W 693	容器	陶物			D49N	7,664	裏側振り出し部 裏振り	クレゾコの陶物の底板。	21.2	8.9	1.0	(スギ)
50	W 471	容器	陶物			D49N	7,691	裏側振り出し部 中央	クレゾコの陶物の底板。	19.1	6.6	0.9	(スギ)
51	W 87	容器	陶物						クレゾコの陶物の底板。	15.5	4.6	0.6	(スギ)
52	W 626	容器	陶物			E49S	7,954	川底付近	クレゾコの陶物の底板。	15.1	4.9	0.7	(スギ)
53	W 292	容器	陶物			C49N	7,565	西側川底	横じ合わせ用の底 板。	17.1	7.3	0.7	(スギ)
54	W 439	容器	陶物			D48N	7,714	2号 sondより南 (下流) 約5m	楕円形を呈す。ク レゾコの陶物の底 板。	15.1	16.7	1.0	(スギ)
55	W 273	容器	陶物			C50N	7,301	川底付近	クレゾコの陶物の底 板。	16.4	8.6	0.7	(スギ)
56	W 63	容器	陶物			D49		砂礫上面	クレゾコの陶物の底 板。	14.1	5.1	0.7	(スギ)
57	W 683	容器	陶物						クレゾコの陶物の底 板。	14.9	6.2	0.6	(スギ)
58	W 656	容器	陶物			D49S	7,499	西側川底	クレゾコの陶物の底 板。	15.4	8.4	0.8	(スギ)
59	W 615	容器	陶物			C50N	7,702	川底付近	クレゾコの陶物の底 板。	15.4	12.0	0.8	(スギ)
60	W 660	容器	陶物			D50N			中心に伴1cm程の 孔が空く。クレゾ コ。	12.8	12.7	1.0	(スギ)

第19表 遺構別出土遺物一覧 7区 S R 7 0 8 0 1

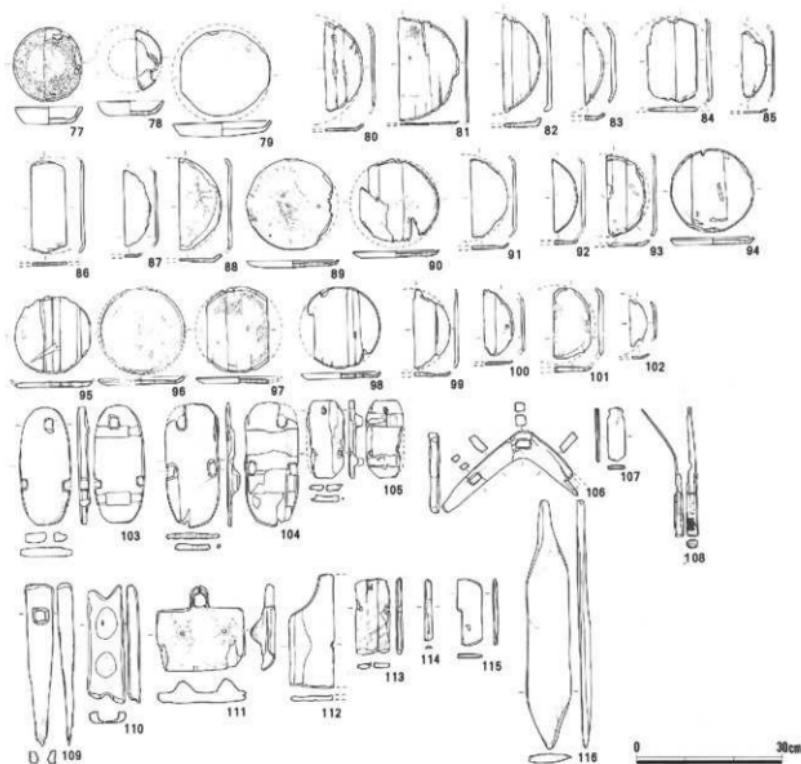
No	登録番号	大項目	中項目	小項目	編項目	グリット	レベル	出土位置	形態	全長	最大幅	厚さ(高さ)	測定
61	W 590	容器	曲物		D49N	7.571	他の大片下層 土面付近に出し基	クレゾコの曲物の底板。	12.4	5.7	0.6	(スギ)	
62	W 363	容器	曲物		D48S	7.654	2分複座(下流) 約3m	クレゾコの曲物の底板。	12.4	6.1	0.7	(スギ)	
63	W 365	容器	曲物		D48S	7.656	2分複座(下流) 約3m	複円形を呈す。ク レゾコの曲物の底板。	11.9	11.6	0.9	(スギ)	
64	W 581	容器	曲物		D60N	7.518	西側川べり付近	複円形を呈す。ク レゾコの曲物の底板。	10.6	10.5	0.7	(スギ)	
65	W 728	容器	曲物		E48S		川底	クレゾコの曲物の底板。	11.2	5.3	0.6	(スギ)	
66	W 735	容器	曲物		E48N		川底	クレゾコの曲物の底板。	11.1	7.4	0.8	(スギ)	
67	W 89	容器	曲物					クレゾコの曲物の底板。	10.4	3.9	0.7	(スギ)	
68	W 54	容器	曲物					クレゾコの曲物の底板。	10.4	5.0	0.7	(スギ)	
69	W 299	容器	曲物		E48N	8.178	東側川底	表面に焼痕あり。 クレゾコ。	10.0	9.5	0.9	(スギ)	
70	W 512	容器	曲物		D49N	7.592	SR70801西側 SD70802東側近	やや内凹を呈す。 クレゾコ。	9.7	7.9	0.9	(スギ)	
71	W 55	容器	曲物		D49		砂礫上面	クレゾコの曲物の底板。	9.5	5.0	0.6	(スギ)	
72	W 228	容器	曲物		C80		砂礫上面	複円形を呈す。ク レゾコ。	9.3	5.7	0.6	(スギ)	
73	W 300	容器	曲物		E48S	7.986	2分複座(下流) 約1m	中心に小孔あり。 木柱を支持する。 曲物の底板とする。	8.3	6.8	1.3	(スギ)	
74	W 750	容器	曲物					クレゾコの曲物の底板。	9.9	5.5	0.8	(スギ)	
75	W 45	容器	曲物					中心部に2.8cm幅 の窓がある。ク レゾコ。	12.3	11.5	1.7	(スギ)	
76	W 189	容器	曲物		D49		砂礫上面	複円形の大型の曲物の底板と考慮する。	33.3	30.5	0.9	(スギ)	
77	W 237	容器	残物		D50S	7.283	川底付近	複円形の大型の曲物の底板で考慮する。内面に焼痕あり。	15.0	14.2	1.3 (3.6)	ヒノキ	
78	W 522	容器	長物		C80N	7.482	西側川底付近	複合台形の複である。	12.5	5.3	0.8 (2.9)	ヒノキ	
79	W 473	容器	残物		D49N	7.640	川底付近	複合台形の複である。	17.6	18.4	1.5 (3.0)	スギ	
80	W 223	容器	残物		C50		砂礫上面	直状の残物。	16.9	7.8	0.6 (1.4)	ヒノキ	
81	W 436	容器	残物		D48N	7.659	2号複座付近 (下流)	直状の残物。	20.7	8.2	0.9 (1.8)	ヒノキ	
82	W 716	容器	残物		E48N		川底	立ち上がりの屈曲 が内角に近い。	19.6	7.8	1.0 (1.9)	ヒノキ	
83	W 787	容器	残物					直状の残物。	16.0	4.2	0.9 (1.4)	ヒノキ	
84	W 721	容器	残物		E48S		川底	直状の残物。	17.0	10.0	1.0	ヒノキ	
85	W 368	容器	残物					直状の残物。	16.8	7.8	0.6 (0.7)	ヒノキ	
86	W 59	容器	残物		D49		砂礫上面	直状の残物。	19.1	7.2	0.6 (1.3)	ヒノキ	
87	W 227	容器	残物		C80		砂礫上面	直状の残物。	15.1	5.5	0.5 (0.6)	ヒノキ	
88	W 738	容器	残物		E49		川底	直状の残物。	18.9	8.6	0.8 (1.6)	ヒノキ	
89	W 588	容器	残物		D60N			直状の残物。	18.8	17.5	0.8 (1.4)	ヒノキ	
90	W 1007	容器	残物		C50N			直状の残物。	17.0	16.1	1.0 (1.3)	ヒノキ	
91	W 693	容器	残物		E48S	7.528	SR70801とSD708 との交差部分	直状の残物。	15.9	7.6	0.7 (1.1)	ヒノキ	

第19表 遺構別出土遺物一覧 7区 S R 7 0 8 0 1

No	登録番号	大項目	中項目	小項目	細項目	グリット	レベル	出土位置	形 素	全長	最大幅	厚さ(高さ)	個體
92	W 785	容器	挽物			C49N			圓状の挽物。	15.1	4.9	0.8 (0.8)	ヒノキ
93	W 202	容器	挽物			C50		砂礫上層	圓状の挽物。	16.5	7.8	0.7 (1.2)	ヒノキ
94	W 687	容器	挽物			D50N			圓状の挽物。	17.0	17.2	1.0 (1.4)	ヒノキ
95	W 519	容器	挽物			C50N	7.605	川底付近	圓状の挽物。	15.9	15.5	1.1 (1.1)	ヒノキ
96	W 40	容器	挽物			E48S	7.605	2号 sond 斧約 4 m (下流)	圓状の挽物。	17.7	17.2	0.8 (1.4)	ヒノキ
97	W 623	容器	挽物			C50N	7.622	川底付近	圓状の挽物。内面 に瘤痕あり。	17.7	12.8	0.8 (1.2)	ヒノキ
98	W 578	容器	挽物			D50S	7.497	川底付近	圓状の挽物。	16.7	14.0	0.9 (1.2)	ヒノキ
99	W 773	容器	挽物						圓状の挽物。	16.4	7.5	0.8 (0.9)	ヒノキ
100	W 521	容器	挽物			C50N	7.468	西側川底付近	圓状の挽物。	13.7	6.0	0.5 (0.8)	ヒノキ
101	W 580	容器	挽物			D50S	7.350	川底付近	圓状の挽物。	13.9	7.8	1.0 (1.6)	ヒノキ
102	W 729	容器	挽物			E48S		川底	圓状の挽物。	9.8	3.4	0.5 (0.9)	ヒノキ
103	W 574	腰身具	下駄			D49S	7.503	東壁出張より南 川縫が狭い場所	平盤形が椭円。左 足用。	24.5	10.5	2.4	スギ
104	W 503	腰身具	下駄			D50N	7.847	西側川べり付近	平盤形が椭円。右 足用。	25.7	11.0	2.6	スギ
105	W 43	腰身具	下駄			D49S	7.608	東壁出張より南 川縫が狭い場所	小型で小足用の下 駄。左足の駄を 離す。	16.0	7.9	3.1	スギ
106	W 238	交通文 章	板			C50N	7.606	西側川底	小型であるため、 小駄か。	27.7	16.6	2.2	ヒノキ
107	W 61	交通文 章	付札状 木製品			D49		砂礫上層	上部左右にくぎ を刺り出している。	11.0	3.5	0.8	(スギ)
108	W 1013 (M-1)	工具	刀子			C49N	7.710	西側川底近く	刀身の板合付箇所 削れて出土。	26.5	2.2	1.8	ムクノ キ
109	W 362	周邊不 明品	有孔本 製品			E48S	7.612	2号 sond 斧より南 (下流) 約 3 m	刀身の柄穴が空た れている。	32.0	5.5	2.8	(スギ)
110	W 41	周邊不 明品	加工木 片			D49N	7.823	2号 sond 斧より南 (下流) 約 5 m	円筒形の穴が 2ヶ 所開け込まれてい る。	30.7	8.4	2.6	(スギ)
111	W 562	周邊不 明品	加工木 片			E49S	7.980	2号 sond 斧約 7 m	2つの円形の穴跡 がある。	17.5	18.1	5.0	(スギ)
112	W 306	周邊不 明品	板状木 製品			E48N	8.190	1号 sond	左上の圓形の加工 が「丁寧」である。	23.3	9.2	1.3	(スギ)
113	W 64	周邊不 明品	加工木 片			D49		砂礫上層	3孔章たれている。	15.6	7.2	1.3	(スギ)
114	W 79	周邊不 明品				D49		砂礫上層	1孔章たれていてる。	12.6	1.6	0.6	(スギ)
115	W 708	周邊不 明品	第 1 木 片			E48S		川底	曲物の底板とは接 えない不規形さで ある。	13.7	5.1	1.0	(スギ)
116	W 840	周邊不 明品				E48S	7.800	2号 sond 付近	側面に尖らせた板 材である。	50.7	9.1	2.4	(スギ)



第8図 7区SR70801出土遺物実測図1



第9図 7区S R70801出土遺物実測図2

#### 8 9区S R93301出土の木製品

検出構 9区は特に歴史時代において長尾川の本流とも考えられる大きな自然流路が何度も流れ込んだようで、自然流路の検出例が多い。その中でもここでは土器を伴っていて、一括性のある木製品が出土したS R93301とS R92502～S R93303とS R92501を取り上げる。

33a層上面を検出中に確認した流路はS R93301、S R93302、S R93303の三本である。そのうちS R93301は川幅が最も狭いところでも10mもあり、調査区北端の最も広くなるところでは20m以上になっている。川深の深さは最大で約130cmで41層まで影響している程である。このS R93301から土器は少量出土しているが、丁度前述の7区S R70801と時期幅が似る。より古い時期の包含層を切り崩して流れに来たとも考えられるが最終的には奈良時代にはほぼ流路としての機能を終えている流れである。木製品は180点ほど出土

しているが、用途が限定できる木製品は28点を数えた。

1は鉢に装着すると考えられる泥除け具である。2は田下駄であるが今までの他の出土 泥除け例から判断してもこの形状のものが奈良時代にあるとは考えにくく、古い時期の包含層内 田下駄のこれらの遺物を押し流してきた結果と考えられる。3は田舟であるが、梢円形というより 田舟長方形の箱型になりそうな形状である。

4は鉄刃装着の状態で出土した鉄鎌である。5、6はヨコヅチである。7はやや扁平で 鉄鎌あるが舟形木製品である。8は例物で平面形長方形を呈する。9~18は曲物の底蓋板である ヨコヅチが、このS R 93301内の曲物底蓋板10点はすべてクレゾコである。10点を数える曲物に 舟形木製品1点もカキゾコがないことは特筆すべきことであろう。19、20の曲物の側板もクレゾコに 曲物付くもので木目孔が観察できる。21~27は挽物で皿状を呈する。

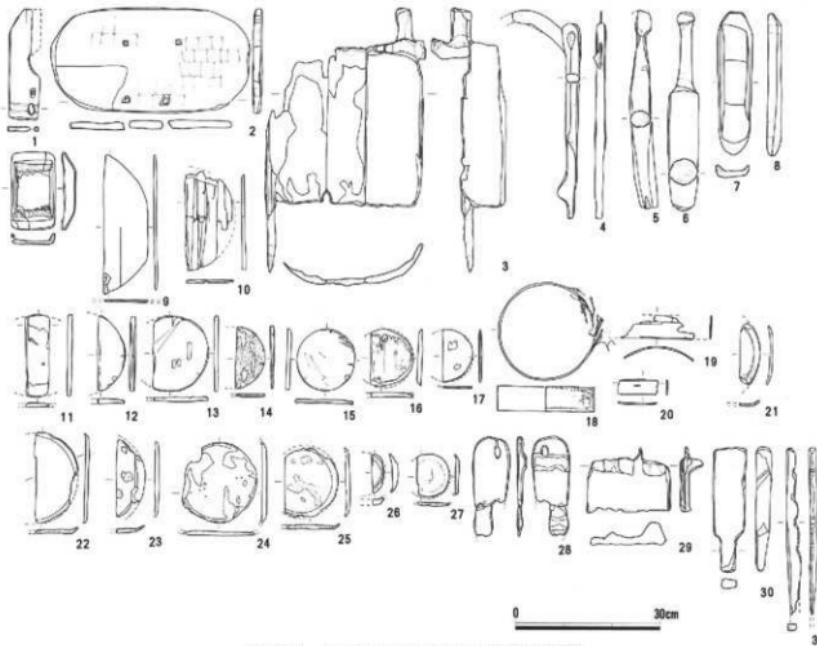
以上、7区SR70801と時期幅も類似し、出土遺物の器種も近い資料である。容器類、特に曲物の出土状態を念頭に入れておきたい一群である。

第20表 遺構別出土遺物一覧 9区 S R 93301

No	登録番号	部位	大項目	中項目	小項目	標項目	グリット	レベル	出土位置	形態	全長	最大幅	厚さ(高さ)	種類
1	W 1254	農具	鍬	鋸歯	泥除け	E71S	7.471	泥路ほば中央 川底	泥除けの典型的な 形状を示す。	22.6	6.4	0.9	(スギ)	
2	W 1647	農具	田下駄			C71V	7.211	川底泥路東側	円形、横長の田下 駄である。C1駄	21.6	40.8	1.6	(スギ)	
3	W 1392	農具	田舟			E71S	7.868	泥路ほば中央 川底	舟が形状が良いが 舟の形状を把手 があることより田 舟とした。	54.2	32.6	1.6	(スギ)	
4	W 2922 (M-009)	農具	鋸			E71S			舟が鋸としてま 上出した。	40.3	3.7	1.8	タブノキ	
5	W 1685	農具	耕鋤			E71S	7.480	西側岸に近い泥 路	鋤の端部を有頭 状にしたヨコヅチ である。	40.2	耕打部最 大径 4.3	3.0	ヒノキ	
6	W 1124	農具	耕鋤			D70N	7.355	川底泥路東側	鋤の端部を有頭 状にしたヨコヅチ である。	40.7	耕打部最 大径 6.2	2.5	ヒノキ	
7	W 1355	船帆	舟形			E71N	7.479 7.464	川底泥路西側	浅い安定の良い舟 形木製品である。	29.3	7.3	2.4	(スギ)	
8	W 1285	容器	例物 J			E71S	7.371	泥路ほば中央 川底	手彫形が袋形の 形状である。	16.1	9.0	0.7 (2.8)	(スギ)	
9	W 1742	容器	由物			D70N	7.169	東岸に近い川底	室内にはならない。 クレゾコの曲物の 底版。	28.6	9.0	0.4	(スギ)	
10	W 1166	容器	由物			D70N	7.362	川底泥路ほば 中央	クレゾコの曲物の 底版。	19.6	9.6	0.7	(スギ)	
11	W 1273	容器	由物			E71S	7.266	川底泥路ほば 中央	表面に幾筋が見ら れる。クレゾコの 曲物の底版。	16.8	4.8	1.0	(スギ)	
12	W 1236	容器	由物			E71S	7.443	川底泥路西側	クレゾコの曲物の 底版。	15.4	5.5	1.1	(スギ)	
13	W 1164	容器	由物			D71N	7.413	川底泥路西寄	クレゾコの曲物の 底版。	15.4	11.2	1.0	(スギ)	
14	W 1240	容器	由物			E71S	7.570	西側岸に近い 泥路	クレゾコの曲物の 底版。	12.7	5.9	0.6	(スギ)	
15	W 1675	容器	由物			E71S	7.496	西側岸に近い 泥路	クレゾコの曲物の 底版。	12.6	12.0	0.9	(スギ)	
16	W 1676	容器	由物			E71S	7.535	西側岸に近い 泥路	クレゾコの曲物の 底版。	11.6	8.6	1.1	(スギ)	
17	W 1298	容器	由物			E71S	7.298	川底泥路ほば 中央	クレゾコの曲物の 底版。	10.8	6.1	0.5	(スギ)	
18	W 1353	容器	由物			D70N	7.232	川底泥路東寄	クレゾコの曲物の 底版。	20.0	20.0	0.4 (5.0)	(スギ)	
19	W 1677	容器	由物	側板		E71S	7.519	西側岸に近い泥 路	クレゾコの曲物の 底版。	15.0	4.8	0.4	(スギ)	

第20表 遺構別出土遺物一覧 9区 S R 93301

No	登録番号	層位	大項目	中項目	小項目	組項目	グリット	レベル	出土位置	形 態	全長	最大幅	厚さ(高さ)	種類	
20	W 1227		容器	器物		剖板		E715	7.412	川底 流路ほぼ中央	内面に板のケビキ 縫が入る。	3.1	8.1	0.3	(スギ)
21	W 1350		容器	器物			D70N	7.349	川底 流路東側	板状の挽物。	12.5	4.1	0.6 (1.2)	ヒノキ	
22	W 1363		容器	器物			D70N	7.300	川底 流路東側	板状の挽物。	18.6	8.5	0.8 (1.3)	ヒノキ	
23	W 1228		容器	器物			E715	7.470	川底 流路西側	板状の挽物。	15.6	5.8	0.9 (1.6)	ヒノキ	
24	W 1241		容器	器物			E71N	7.516	西側岸に近い流路	板状の挽物。内面に縫痕がある。	16.4	14.7	0.9	ケヤキ	
25	W 1282		容器	器物			E71N	7.931	川底 流路西側	板状の挽物。内面に縫痕がある。	14.1	11.0	0.8 (1.2)	ヒノキ	
26	W 1680		容器	器物			E71S	7.558	西側岸に近い流路	小型の貝殻挽物。	8.0	2.4	1.2 (1.7)	スギ	
27	W 755		容器	器物			E71N	7.533	川底 中央部に近い流路	小型の貝殻挽物。	8.2	6.5	0.9	ヒノキ	
28	W 1210		瓶身共	下灰			E71S	7.641	川底 流路ほぼ中央	平面形が椎円を呈す。左足用。	20.3	7.6	2.0	(スギ)	
29	W 1250		用途不明品	板状木製品			E71S	7.564	川底 流路ほぼ中央		13.2	17.2	4.8	(スギ)	
30	W 1317		用途不明品	板状木片			D71N	7.383	川底 流路ほぼ中央		25.5	7.0	3.4	(スギ)	
31	W 1291		用途不明	板状木			E71S	7.236	川底 流路ほぼ		34.1	3.0	1.7	(スギ)	



第10図 9区 S R 93301出土遺物実測図

## 9 1区 S R 12001出土の木製品

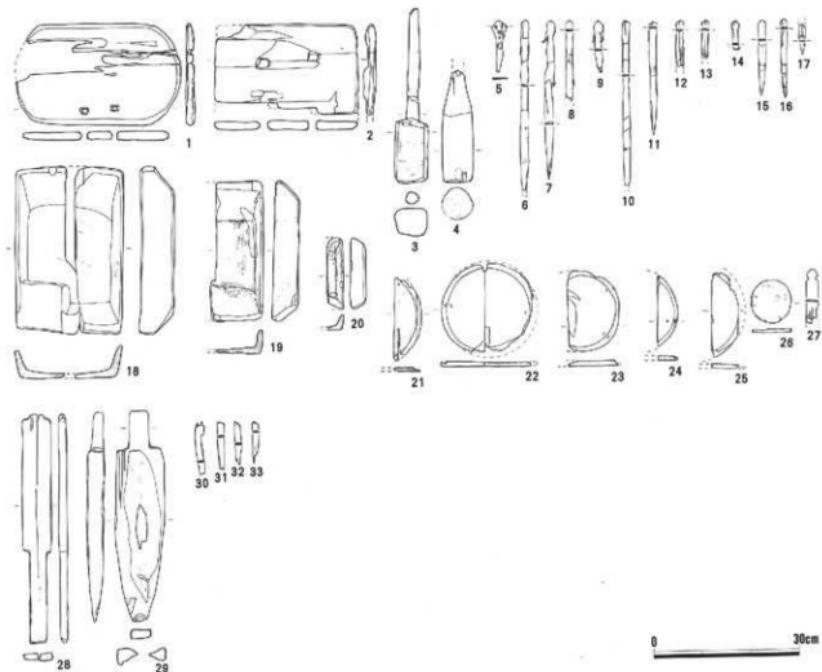
21層は泥炭質を多く含む黒褐色粘土層で、古墳時代初頭に廃絶された水田跡を覆う。よ 検出遺構  
り西の調査区では明瞭な泥炭層になる古墳時代中期の堆積層である。その21層の上に堆積  
した灰色砂質粘土層が20層でその上面でこの自然流路 S R 12001が検出された。この流路  
の覆土内より多数の木製品が少量の土器を伴って出土した。

第21表 遺構別出土遺物一覧 1区 S R 12001

No	登録番号	大項目	中項目	小項目	種類	グリット	レベル	出土位置	形態	全長	最大幅	厚さ(実寸)	樹種
1	W 189	農具	田下駄		P9N	8.718	溝SR12001川底付近 流路	表面の磨滅感しく 流れ込みと考えら れる。C1駄。	20.7	33.8	1.8	(スギ)	
2	W 636	農具	田下駄		F10N			流れ込みと考えら れる。C1駄。	18.4	29.6	1.8	(スギ)	
3	W 62	農具	穀耙		F10N		SR12001の覆土 中	穀耙が横面が方 形を有すヨコナチ である。	35.7	鹿打部最 大径 6.9	鶴郡最大径 2.6	カシ	
4	W 173	農具	穀耙					裏から唐次太く なって鹿打部に至 る。	23.0	鹿打部最 大径 6.3	-	ヒノキ	
5	W 54-1	祭祀具	人形		F10N	8.993	溝SR12001の右 岸蓋等出土点	人形が墨書きされて いる。慈り肩か不 明である。	10.5	3.2	0.3	(スギ)	
6	W 54-2	祭祀具	壹串		F10N	8.993	溝SR12001の右 岸蓋等出土点	両側面に交叉に削 り込みがある。	34.9	1.7	0.4	(スギ)	
7	W 54-4	祭祀具	壹串		F10N	8.993	溝SR12001の右 岸蓋等出土点	両側面に交叉に削 り込みがある。	32.6	2.1	0.6	(スギ)	
8	W 54-3	祭祀具	壹串		F10N	8.993	溝SR12001の右 岸蓋等出土点	両側面に削り込み があつたと思われ る。	18.4	1.6	0.2	(スギ)	
9	W 361	祭祀具	壹串		F10N	8.804	SR12001の覆土 中	上部のみ残存。左 右に削り込みがあ る。	10.6	2.0	0.3	(スギ)	
10	W 365	祭祀具	壹串		F10N	8.812	SR12001の覆土 中	両側面に削り込み がある。	33.8	1.6	0.4	(スギ)	
11	W 544	祭祀具	壹串		F10N	8.707	溝SR12001の流 路 川底付近	上部のみが残存。	23.0	1.7	0.3	(スギ)	
12	W 54-6	祭祀具	壹串		F10N	8.993	溝SR12001の右 岸蓋等出土点	上部のみが残存。 左右に削り込みが ある。	9.6	1.6	0.4	(スギ)	
13	W 54-7	祭祀具	壹串		F10N	8.993	溝SR12001の右 岸蓋等出土点	上部のみが残存。	7.8	1.4	0.4	(スギ)	
14	W 352	祭祀具	壹串		F9S	8.703	溝SR12001の流 路 川底付近	上部のみが残存。	6.1	1.7	0.5	(スギ)	
15	W 358	祭祀具	壹串		F10N	8.781	SR12001の覆土 中	両側面に削り込み がある。	15.6	1.6	0.3	(スギ)	
16	W 54-5	祭祀具	壹串		F10N	8.993	溝SR12001の右 岸蓋等出土点	両側面に削り込み がある。	16.4	1.3	0.4	(スギ)	
17	W 381	祭祀具	壹串		F10N	8.753	SR12001の覆土 中	下部のみが残存。	6.3	1.5	0.2	(スギ)	
18	W 63	容器	鉢物		F10N	8.471	溝SR12001川底 付近 流路	平底が長方形の割 合である。	34.4	22.4	1.0 (6.9)	(スギ)	
19	W 60	容器	鉢物		F10N			平底が長方形の割 合である。内部に 焼痕あり。	28.7	10.9	0.8 (5.4)	(スギ)	
20	W 105	容器	鉢物		F9S	8.781	壹串出土点より 南5m SR12001底	平底が長方形の小 型の鉢物である。	14.6	3.4	0.9 (3.4)	(スギ)	
21	W 61	容器	鉢物		F10S	8.656	溝SR12001川底 付近 流路	カキコの鉢物の 底板である。	17.1	5.4	1.0	(スギ)	
22	W 150	容器	鉢物		F9S			カキコの鉢物の 底板である。	17.1	18.4	1.1	(スギ)	
23	W 422	容器	鉢物		F9S			カキコの鉢物の 底板である。	16.5	10.6	1.1	(スギ)	
24	W 59	容器	鉢物		F9S	8.651	壹串出土点より 南5m SR12001底	カキコの鉢物の 底板である。	14.6	4.2	0.9	(スギ)	

第21表 遺構別出土遺物一覧 1区 S R 12001

No	登録番号	大項目	中項目	小項目	種項目	グリット	レベル	出土位置	形 態	全長	最大幅	厚さ(高さ)	種類
25	W 587	容器	曲物			F10N	8.795	溝SR12001流路左側	カキツボの曲物の底板である。	17.3	5.6	1.0	(スギ)
26	W 178	容器	曲物			F9N	8.686	溝SR12001剛版付左、流路	径が9cmに満たないか小さい円筒の板である。	8.9	8.0	0.8	(スギ)
27	W 659	交通	付札状木製品			F9N	8.856	轍等出土点より深10m覆土中	板状の両端をくびれさせている。	11.2	2.6	0.3	(スギ)
28	W 140	用達不明品	加工木片			F9S	8.677	溝SR12001の東路 川底付左、	半分に割れている。	46.9	6.2	1.8	(スギ)
29	W 674	用達不明品	加工木片			F9S	8.755	轍等出土点より深5m里溝近	移動歴のような形狀である。	42.9	10.2	3.7	(スギ)
30	W 362	用達不明品				F10N	8.801	SR12001の覆土中	轍等または刃物の底片かもしれない。	16.8	2.0	0.3	(スギ)
31	W 373	用達不明品				F10N	8.811	SR12001の覆土中	轍等または刃物の底片かもしれない。	9.9	1.6	0.35	(スギ)
32	W 386	用達不明品				F10N	8.754	SR12001の覆土中	轍等または刃物の底片かもしれない。	8.8	1.5	0.3	(スギ)
33	W 655	用達不明品				F10N	8.793	SR12001の覆土中	轍等または刃物の底片かもしれない。	8.7	1.5	0.3	(スギ)



第11図 1区 S R 12001出土遺物実測図

覆土中から斎串4点、田下駄1点、剣物2点、曲物3点が出土している。そしてこのS R 斎 串  
12001の右岸に斎串6点、人面墨書き人形1点、手捏土器1点が集中して出土した地点がある。田 下 駄  
川岸より0.2~1.5mとほぼ川辺で南北2.5mの範囲に集中している。この中の斎串には 剣物・曲物  
地中に突き刺された状態で出土しているものもあり、当時川辺で行った祭祀跡とも考える 人 面 墨 書  
ことができる。しかし、斎串の出土状況が様々でS R 12001との土層の上下関係も明確で 人 形  
なかったことより一概にこの祭祀遺物集中地点と S R 12001内出土のものとが同一時期か 祭祀遺物の  
は不明である。概ね20層上面の遺物であることは変わりなく、ここでは S R 12001出土木 集 中  
製品の中に含めて考えることにする。年代観は上下の層より判断して8世紀後半~9世紀 年 代 観  
頃と考えられる。

1、2は田下駄である。3、4はヨコヅチである。5は人面墨書きの人形である。6~17の  
10点は斎串である。18、19、20は平面形長方形をなす剣物である。21、22、23、24、25はカキゾ  
コの曲物の底蓋板であり、26はクレゾコのそれである。27は付札状木製品である。

#### 10 9区 S R 92502・S R 92503・S R 93303出土木製品

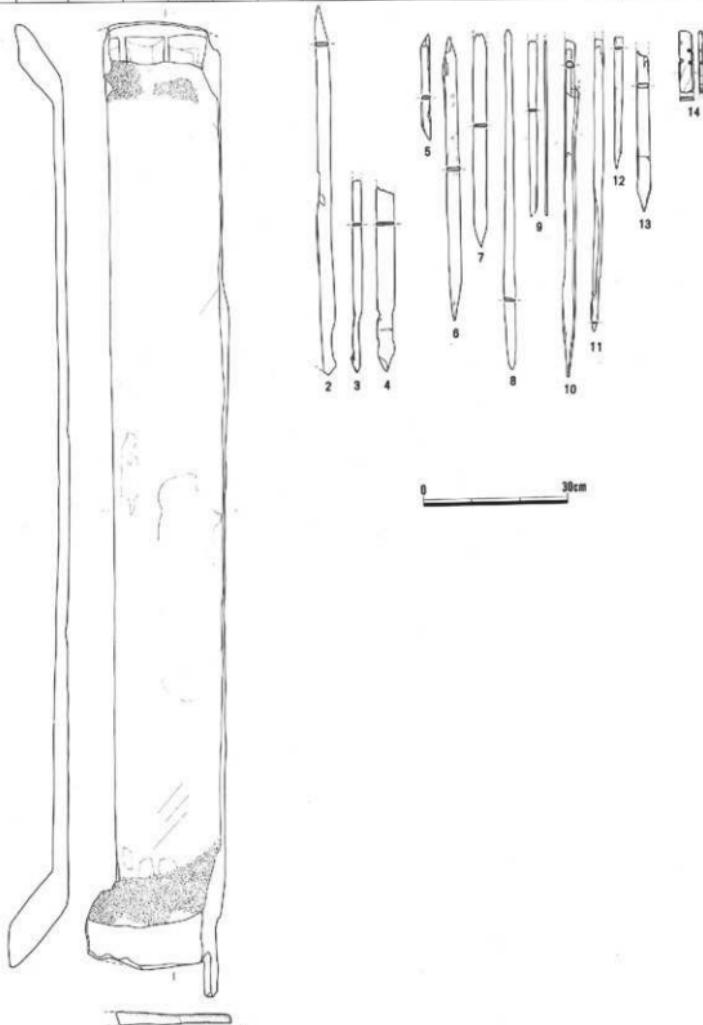
S R 93303は9区33a層を検出時に確認された自然流路であり、S R 92502・92503は 造構の性格  
25層検出時にそれぞれ確認された。しかし、このS R 93303・92503・92502は元来川幅4  
m程のS R 93303の覆土を切ってS R 92503・92502が流れていることにより、厳密に三  
本の流れを分けることは現地調査の段階で既に困難であった。よってこの交錯した三本の  
自然流路内出土の木製品をここでは一括して扱った。良好な出土状況でないことは十分了  
解しているが、刀形を中心とした少し特異な遺物が集中しているため扱う。

第22表 造構別出土遺物一覧 9区 S R 92502・92503・93303

No	登録番号	層位	大項目	中項目	小項目	種類目	グリット	レベル	出土位置	形 題	全長	最大幅	厚さ(高さ)	側種
1	W 1159		裏片	田歩			E75N S	7.356	西側流路より川底にかけて	全長2.3m前の田舟である。船手がつくな。	198. 7	27.3	3.4	(スギ)
2	W 393		祭祀具	刀形			E76N	7.920	川底 流路西側	全長70cmを越える最大な刀形である。	75.6	3.1	0.6	(スギ)
3	W 396		祭祀具	刀形			E76N	7.931	川底 流路西側	刀身の半分より先が欠落している。	39.4	1.8	0.5	(スギ)
4	W 391		祭祀具	刀形			E76N	7.953	川底 流路内側	刀身の半分より先が欠落している。	37.4	3.8	0.7	(スギ)
5	W1154		祭祀具	斎串			E76K	8.030	流路西側	上端、下端を削めに切り落としている。	22.0	1.8	0.6	(スギ)
6	W 394		祭祀具	斎串			E76H	7.908	川底 流路西側	上端、下端とも頭状に尖らせている。	88.6	2.8	0.8	(スギ)
7	W 926		祭祀具	斎串			E75S	8.038	流路のほぼ中央	上端、下端とも頭状に尖らせている。	43.8	2.8	0.5	(スギ)
8	W 395		祭祀具	斎串			E76Y	7.851	川底 流路西側	端が強く湾い、上部に左右の削り込みがある。	69.7	2.4	0.7	(スギ)
9	W 401		祭祀具	斎串			E76K	7.943		上部が欠落している。	36.0	1.8	0.4	(スギ)
10	W1153		祭祀具	斎串			E76N	7.927	流路西側	上部が欠落している。	69.0	3.0	1.3	(スギ)
11	W 392		祭祀具	斎串			E76N	7.925	川底 流路内側	最大な斎串の上部が欠落しているものである。	60.2	1.9	0.4	(スギ)
12	W 397		祭祀具	斎串			E76N	7.927		上部が欠落している。	27.3	1.7	0.4	(スギ)

第22表 遺構別出土遺物一覧 9区 S R 92502・92503・93303

No	登録番号	層位	大項目	中項目	小項目	細項目	グリット	レベル	出土位置	形 態	全長	最大幅	厚さ(高さ)	種類
13	W 930		祭祀具	卓席			E75N	8.22	流路112中央 机列5	下部が残存してい る。	32.9	2.8	0.9	(スギ)
14	W 417		発火器	火きり	白		E74S	8.540	流路東側	火きりの丸は3ヶ 所確認できる。	12.7	2.6	0.8	(スギ)



第12図 遺構別出土遺物一覧 9区 S R 92502・92503・93303・出土遺物実測図

出土土器は古墳時代の須恵器片から猿投窓O53併行の灰釉陶器まで出土している。それより新しい土器片は出土していない。

木製品は川を川が切った形で検出された大きな自然流路の右岸寄りに漂着したような状態で多数出土した。が、用途が限定できるものは15点に留る。そのうち3点が刀形木製品、簫であり、9点が簫串であることより、その祭祀性が際立つことが了解できる。

1は田舟である。2～4は刀形木製品であり、3、4は柄の部分を削り出す典型的な形状をしたものである。5～13の簫串は7区のS R70801や1区S R12001と形状的に異なり、定型化しないが、所謂簫串状をなすものである。左右の削り込みは8を除いて観察できない。

#### 11 9区 S R92501出土木製品

S R92501も9区25層検出時に確認できた自然流路である。S R93301の覆土を切るよう下刻しており、調査区内で大きくクランクしている。川幅は狭いところで約6m、広いところでは10m近くあり川底までの深さは約1.3～1.5mある。この流路内より100点以上の木製品が出土しているが骨片も30点を越える数が出土しており、馬の骨と見られるものもあった。中央部や東岸近くに多数の桃の種が出土し、その対岸方向の流路底には馬の骨片が散乱していた。また、内面黒漆塗りの堺や吉祥句墨書の碗などの土器類も出土している。かなり祭祀的要素が指摘できる流路である。S R92501内からは古墳時代の須恵器片から灰釉陶器片まで出ているが、山茶碗片と考えられる土器片は見当たらない。

1、2は鍔に装着したと考えられる泥除け具である。3は田下駄であるがこの形状のものが灰釉陶器O53に伴うとは到底考えられない。混入と考えたい。4はヨコヅチ、5は簫編錐、6、7は簫串である。8、9、10は平面形長方形の削物である。11～16はカキゾコの曲物である。特に11、12は側板も残存しており、良好な資料である。17～33はクレゾコの曲物である。17、18はほぼ全形を復元できるものである。27は焼痕が記号のように見える。36は椀形挽物である。37～42は皿状の挽物である。挽物が7点も出土していることに注目したい。43、44、45は箸状の木製品である。

このS R92501は明らかに平安時代に主に木製品その他を流してきたと考えられる流路である。既述の7区S R70801と9区S R93301の奈良時代を中心とした流路内出土の木製品と比較して考えたいものである。このS R92501では挽物の類、特に椀型挽物が含まれていることに注目する。

刀 形  
簫 串

祭祀的要素  
出 土 土 器

簫 串

制 物

曲 物

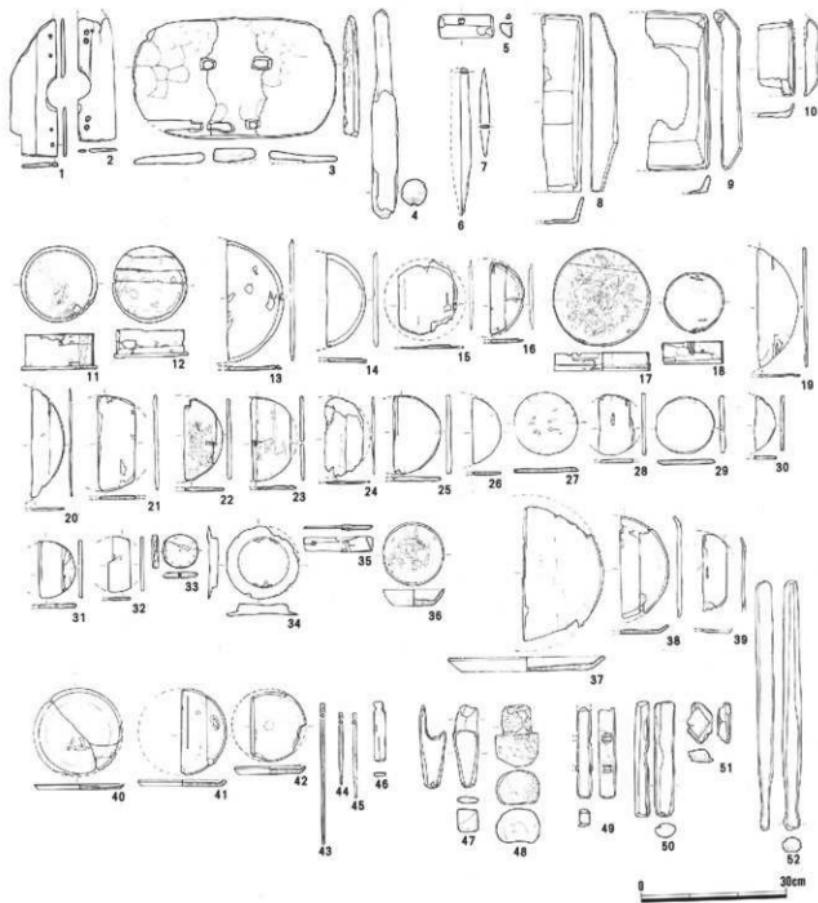
挽 物

第23表 遺構別出土遺物一覧 9区 S R92501

No	登録番号	所位	大項目	中項目	小項目	測量項目	グリット	レベル	出土位置	形 種	全長	最大幅	厚さ(高さ)	備 案
1	W 793	25層	農具	鍬	泥除け	E71S	7.504	川底 流路内側	泥上げ具の典型的な形状を示す。	28.3	9.8	0.6	(スギ)	
2	W 808	25層	農具	鍬	泥除け				上端部が一部欠落している。	25.2	7.7	0.7	(スギ)	
3	W 537-1	25層	農具	田下駆		C71N	7.822	川底 流路内側	遺物と想る。	24.8	41.6	3.1	(スギ)	
4	W 714	25層	農具	横耕					握りから転打部にかけて斜めに広くなるヨコヅナ。	42.4	鐵打部最 大径 9.4	柄部最大径 3.0	ヒノキ	
5	W 710	25層	農具	鋤鋏		E71S	7.836	川底部 流路四 面	圓頭、半円形をした 鋤鋏である。	4.7	11.2	2.3	イヌシダ セアカシテ	
6	W 668	25層	祭祀具	壇卓					上端が欠落している。	29.7	2.0	0.5	(スギ)	
7	W 760	25層	祭祀具	壇卓		D71N	7.372	種子集中地点	上下端とも尖頭状 に削り出している。	18.2	1.9	0.5	(スギ)	
8	W 758	25層	祭祀具	割物		D71N	7.324	大きく窪へカーブする点の判例	平面が長方形を呈 す割物。	36.6	8.1	0.6 (5.3)	(スギ)	
9	W 705	25層	祭祀具	割物		D71N	7.694	西側川岸に近い 流路	平面が長方形を呈 す割物。	32.7	13.0	0.6 (4.1)	(スギ)	
10	W 816	25層	祭祀具	割物		E71N	7.635	川底 流路東側	平面が長方形を呈 す割物。	15.8	7.6	0.8 (3.4)	(スギ)	
11	W 657	25層	容器	缶物		D71S	7.621	川底 流路中央 部	側板が底板に組じ られたまま出土した。 カキゾロ。	15.8	15.6	0.6 (7.1)	(スギ)	
12	W 535	25層	容器	缶物		D71S	7.674	(SR13)鉢部西岸	側板と底板が組合 わせられて出土した。 カキゾロ。	15.7	15.1	0.6	(スギ)	
13	W 799	25層	容器	缶物		E71N	7.630	川底 流路東側	カキゾロの缶物の 底板。	25.1	11.5	0.8	(スギ)	
14	W 804	25層	容器	缶物		E71N	7.459	川底 流路中央 部	カキゾロの缶物の 底板。	19.3	7.9	0.8	(スギ)	
15	W 723	25層	容器	缶物		E71S	7.501	川底 流路東側	カキゾロの缶物の 底板。	14.3	11.9	0.6	(スギ)	
16	W 703	25層	容器	缶物		E71S	7.715	川底 流路東側	カキゾロの缶物の 底板。	14.9	6.9	0.7	(スギ)	
17	W 712	25層	容器	缶物		E71S	7.602	流路東寄り 川 底	側板が底板に木釘 で固定されて出土した。 カキゾロ。内側に 刀物痕。	20.0	20.0	0.5 (3.7)	(スギ)	
18	W 623	25層	容器	缶物		D71S	8.067	川底 流路中央 部	側板が底板に木釘 で固定され出土。	12.3	12.3	0.8 (4.5)	(スギ)	
19	W 667	25層	有器	缶物		D70S	7.467	川底、種子集中 地点より東流路	カキゾロの缶物の 底板。	24.5	8.3	0.6	(スギ)	
20	W 691	25層	有器	缶物		E71S	7.890	東側川岸に近い北 東端	カキゾロの缶物の 底板。	21.2	6.8	0.5	(スギ)	
21	W 713	25層	有器	缶物		E71S	7.434	川底 流路中央 部	カキゾロの缶物の 底板。	19.7	7.7	0.7	(スギ)	
22	W 698	25層	有器	缶物		D71N	8.600	川底 流路東側	カキゾロの缶物の 底板。表面に沈痕 あり。	16.7	7.9	0.6	(スギ)	
23	W 695	25層	有器	缶物		E71S	7.858	東岸に近い北 東端	カキゾロの缶物の 底板。	17.3	7.9	0.7	(スギ)	
24	W 655	25層	有器	缶物		D71S	7.757	川底 流路中央 部	カキゾロの缶物の 底板。	16.0	8.0	0.5	(スギ)	
25	W 718	25層	有器	缶物		E71S	7.665	川底 流路東寄	カキゾロの缶物の 底板。	16.2	9.7	0.9	(スギ)	
26	W 1040	25層	有器	缶物		E71N	8.060		カキゾロの缶物の 底板。	13.6	5.8	0.6	(スギ)	
27	W 590	25層	容器	缶物		E71N	7.620	西岸に近い流路 端より南 2 m	焼き繩による紀号 が入る。カキゾロ	12.1	13.0	0.8	(スギ)	
28	W 795	25層	容器	缶物		E71S	7.551	流路東側 川底	カキゾロの缶物の 底板。	12.4	7.3	0.7	(スギ)	

第23表 造構別出土遺物一覧 9区 S R 92501

No.	登録番号	層位	大項目	中項目	小項目	細項目	グリット	レベル	出土位置	形態	全長	最大幅	厚さ(高さ)	特徴
29	W 810	25層	容器	虫歫			ET1N	7.703	川底、流路水側 堰状状況北側	やや指円になるクレゾコの曲物の底板。	11.6	12.0	0.9	(スギ)
30	W 708	25層	容器	虫歫			ET1S	7.670	川底、中央部に 近い流路	クレゾコの曲物の底板。	11.3	4.3	0.7	(スギ)
31	W 778	25層	容器	虫歫			ET1S	7.656	東川岸に近い川底	クレゾコの曲物の底板。	11.8	7.5	0.9	(スギ)
32	W 803	25層	容器	虫歫			ET1N	7.607	川底、流路東側 堰状状況南	クレゾコの曲物の底板。	11.7	4.6	0.6	(スギ)
33	W 814	25層	容器	虫歫			ET1S	7.381	東川岸に近い流路	径が7 cmに満たないクレゾコの曲物の底板。	6.8	6.9	1.3	(スギ)
34	W 722	25層	容器	虫歫			ET1N	8.108	流路西側 堰状状況東側	端子状に段差が大きき。容器の蓋か底と考へられる。	16.1	14.7	2.5	(スギ)
35	W 414	25層	容器	虫歫			ET5N	8.750	ほぼ中央部	カバ縁で覆はれた 瓦版の一端。	3.1	15.1	0.7	(スギ)
36	W 709	25層	容器	挽物			ET1S	7.667	川底、流路西側	無窓の内に折た 瓦版の模である。	13.0	12.8	1.4 (3.4)	ヒノキ
37	W 813	25層	容器	挽物			DT1S	7.279	S R 92501 の内岸 川<川	復元最大径が32.2 cmになる瓦版の挽 物。	27.3	16.6	1.3 (2.9)	スギ
38	W 656	25層	容器	挽物			DT1S	7.447	種子島中進点 南側	瓦状の挽物。	20.8	9.9	0.8 (1.7)	ヒノキ
39	W 767	25層	容器	挽物			ET1N	7.720	堰状状況	瓦状の挽物。	15.7	5.1	1.6 (1.1)	ヒノキ
40	W 776	25層	容器	挽物			ET1N	7.656	川底、流路中央 部東側状況南	内面に撻痕が記号 のようについた 瓦版の模。	18.0	17.9	0.5 (1.0)	ケヤキ
41	W 707	25層	容器	挽物			ET1S	7.798	川底、流路中央 部	瓦状の挽物。	17.8	9.3	0.8 (1.3)	ヒノキ
42	W 405	25層	容器	挽物			DT0N	8.657		瓦状の挽物。	14.4	11.3	1.1 (1.6)	ヒノキ
43	W 704	25層	食事具	箸			ET0S	8.766	西側岸に近い流路	採り部、断面は方 角形薄板は円形に なる。	28.9	0.7	0.7	(スギ)
44	W 800-1	25層	食事具	箸			ET1N	7.638	川底、流路東側 堰状状況北側	先端部のみ残存。	14.9	0.8	0.8	(スギ)
45	W 800-2	25層	食事具	箸			ET1N	7.638	川底、流路東側 堰状状況北側	先端部のみ残存。	16.9	0.7	0.7	(スギ)
46	W 802	25層	交通交易	付札状品			ET1N	7.551	川底、流路中央 部東側状況南約1 m		12.3	2.4	0.7	(スギ)
47	W 777	25層	用途不明品	加工木片			ET1K	7.522	川底、流路西側 堰状状況北側	石質の板とも考 えられるが不明。	16.9	5.1	5.4	(スギ)
48	W 699	25層	用途不明品	加工木片			ET1S	7.922	川底流路東側		12.8	8.8	7.2	
49	W 757	25層	用途不明品				ET1S	7.510	川底に近い西側 流路	大足の棒とも考 えられる破片である。	18.5	3.5	3.3	(スギ)
50	W 779	25層	用途不明品	棒状木製品			ET1S	7.502	川底に近い西側 流路		23.6	4.3	3.1	(スギ)
51	W 697	25層	用途不明品	加工木片			ET1N	8.019	川底、流路内側 より南約3 m		8.4	5.1	2.7	(スギ)
52	W 1037	25層	用途不明品	有縫漆紋			ET1N	7.360	流路中央部	堰状状況の板に使 用されていた	51.3	3.6	3.6	(スギ)



第13図 9区SR92501出土遺物実測図

## 第4節 農具

瀬名遺跡は弥生時代中期から近現代までの水田遺構を多く検出しており、検出遺構の大半が水田跡ということからも、遺構に伴う遺物の中で、特に水田稲作に用いられたと考えられる農具の出土が注目される。木製農具の研究もまだ機能論にまでなかなか達せない現今、明確に機能を付与した名称を冠した分類に従って整理し、報告することは困難である。従来の研究成果に従ってここでは分類し報告する。が、機能まで明示できない便宜上の分類による整理、報告は近い将来その分類、命名が修正されることも当然あることを念頭に置いておきたい。特に今回の報告の中で農具としたもののうち、「輪カンジキ型田下駄」「泥除け具」とした木製品に関しては本報告以外の報告書では一般的な分類でも命名でもない。本来は従来の研究史の中で用いられないこれらの名称は明確な定義とその機能を明示し、その名称を用いた客観的理由を説明しなければ用いられないものであろう。その点、本報告のうち、上述の2点の木製品に関しては若干の定義付け、及びその命名理由を説明しているが、不備の跡りは免れないであろう。

瀬名遺跡の木製品は既述のように分類したがここでは農具を更に下記のように分類して報告する。田下駄は特にその点数が多いため、形態的差異も顕著なため細分類になった。

水田遺構に  
伴う遺物

### 1 錘

#### 1) 広錘

黒崎直氏の分類に従えば(黒崎 1985)、広錘とは「着柄隆起を外側に作る刃幅15cm～20cm前後の最も一般的な錘」となる。更に黒崎氏は広錘をA～Fに形態細分した。広錘Aは「長方形の平面をもち、刃幅15cm前後、着柄角度60°～80°」の錘である。また広錘Cは「上刃幅が狭く下刃(刃部)幅が広い台形状の平面をもち、刃幅17cm前後、着柄角度60°～75°前後」の錘である。瀬名遺跡出土の1、2、3は広錘であり、1は黒崎分類の広錘Cに、2、3は広錘Aに該当するであろう。

1は7区の弥生時代中期中葉～後葉の方形周溝墓、1号墓東周溝内より出土した錘の一部である。外側の着柄隆起は緩やかに柄孔に向かって肥厚する。内側は柄孔付近が若干凹むように整形している。残存部最大幅が12cm程度であるため、刃幅は20cm強程になると想像できる。2は2区21層出土で弥生時代中期の資料である。外側の着柄隆起はやはり緩やかに柄孔に向かって肥厚している。形状は明確には復元できないものの、東海地方でも弥生時代中期に篠東遺跡、瓜郷遺跡、有東遺跡などで見られる、平面長方形で外側の着柄隆起が緩やかに柄孔にむかって肥厚し、刃幅は10cm～15cm前後とやや短いタイプの錘である。3は10区31層水田(古墳時代初頭に廃絶された水田)より出土しているが、外側の着柄隆起は段差を設けて強調する形状になっている。広錘の出土例が3点であるため、この着柄隆起のあり方が時代差なのか不明である。

#### 2) 狹錘

4は所謂、狭錘である。黒崎分類の狭錘B(刃幅が10cm前後以下で平坦な身に55°～75°狭の鋭角で柄が装着される錘)に該当する。刃幅は概ね6cm、身の全長31.9cm、着柄角度が60°である。外側の着柄隆起は身の中央部より柄孔に向かって漸次肥厚になっている。この狭錘は2・3区14層水田(弥生時代後期前半)よりの出土である。5は有段状の着柄隆

広  
錘

狭  
錘

起の部分のみが残存しているが、広鍔の可能性を指摘できる鍔の身片である。身の全体的な形状を推定するのは困難である。外側の着柄隆起は段差を設け三角形に削り出している。

### 3) 二又鍔

膝柄装着の二又鍔は24点出土している。6～29がそれであるが、16と29を除くとすべて古墳時代前期に廃絶された水田から出土している。16は2・3区11層出土で出土レベルが8.40mであり、11層も下部で12層水田（古墳時代前期に廃絶された水田）上面と限りなく近いと考えられる。また29は10区30b層の泥炭層の出土である。レベルは7.78mと31層水田（古墳時代前期に廃絶された水田）上面レベルにやはり近い。16、29も古墳時代中期の土器を伴う自然堆積層の下部近くよりの出土である。この2点については古墳時代中期に下る可能性はある。22点については調査区によって限定できる時期が異なってはいるが、瀬名遺跡では1区より10区まで普遍的に存在する杭列を伴う水田、それは古墳時代前期に廃絶された水田から出土している。第3節でも述べた通り、2・3区には12層水田と5区10層水田は特に弥生時代後期後半より古墳時代前期までの時期に限定できる。2・3区において、12層より5点出土しており、既述のように11層砂疊層の下部より1点出土しているのみで11層より上層からは出土しておらず、また、13層以下の層からも出ていない。5区10層水田より2点出土しているが、11層より下層また9層より上層からは1点の出土もない。つまり2・3区、5区の出土状況より判断すると、この膝柄装着の二又鍔は弥生時代後期後半より古墳時代前期までの極限られた短い時期にのみ用いられたと考えることができる。他遺跡の出土例を見てみるとこのタイプ（膝柄装着の二又鍔でナスピ状の突起を肩に有しないもの）は、北は中在家南遺跡（宮城県）から西は勝川遺跡（愛知県）まで出土が確認できる。これらの二又鍔はナスピ型ではない膝柄装着の二又鍔で、瀬名遺跡の二又鍔もこれに属する。その他、弥生時代中期に畿内を中心に分布し、身の尖る二又鍔、及びナスピ型の二又鍔がある。そこで以下、説明のため膝柄装着の二又鍔を3つに分けそれぞれA・B・Cと命名する。

#### 出土時期が 限 定

#### 膝 柄 装 着

#### 二 又 鍔 A

膝柄装着二又鍔Aは次のような形態を示す。鍔の身は二又になっているが二又の分岐部より刃先の下端部まで二又の間が外に大きく広がっていく。身は2cm前後とやや厚く身もB・Cに比すと細く先端にもかって尖る。鍔としての機能を考えると耕土に打ち込むことには向いていようが、鍔の身の上に土をのせ、客土する機能は考えられない。緊縛部分の軸部は、勝川遺跡の二又鍔に代表されるように有段状に段差をつけたり、幅広の溝を削り出したりしている。特にBが有段状に軸部先端を削り出していると顕著な差異がある。出土遺跡としては布田遺跡（鳥取県）、玉津田中遺跡（兵庫県）、池上遺跡（大阪府）、瓜生堂遺跡（大阪府）、勝川遺跡などが挙げられる。時期としてはいずれも中期の枠内におさまるもので後期には属さない。この時期に近畿地方を中心に西日本中心に分布する膝柄装着の二又鍔といえる。

#### 膝 柄 装 着

#### 二 又 鍔 B

Bは瀬名遺跡出土の膝柄装着の二又鍔の形態を示す。平面形は西洋梨型の下ぶくれの形をし、二又に分かれる間隙は幅が狭く、分岐部から一旦間隔が3cm前後まで広がった後、刃先部に向かってまた間隔は狭くなる。身の厚さは薄いものだと中央部でも3mm程度と極薄い。機能を考えると、瀬名の着柄状態で出土した二又鍔の着柄角度は63°であり、やや鋭角的に装着されている。また身が極薄く、二又の刃の間隔が狭いことより、身に土をのせて客土するに向いている身の形状を呈している。分布域を見ると、勝川遺跡より西はこの形態をした鍔は見当たらぬ。東は中在家南遺跡（宮城県）まで確認でき、特に、最近で

は静岡県静清平野の瀬名遺跡、川合遺跡、長崎遺跡等で多数確認できるのを初め、石川条里遺跡（長野県）、国府門遺跡（千葉県）でも多数確認されている。いずれも弥生時代後期から古墳時代前期までの時期幅におさまってしまう。この時期、東海、関東を中心とする東日本で盛行した膝柄装着の二又鋏であると考える。尚、町田章氏は「弥生時代中・後期からある笠形の頭部が発達していないもの」を「膝柄股鋏A」としたが、ここで私が言う「膝柄装着二又鋏A」と「膝柄装着二又鋏B」とが両方ともこの町田氏の「膝柄股鋏A」に属すると言えよう。

Cは肩の部分に三角形の突起部を左右に削り出す所謂、「ナスピ型」の膝柄装着の二又鋏である。町田章氏が「膝柄股鋏B」と分類したものである。黒崎直氏は更に、このナスピ型膝柄鋏を柄軸の形状で4つに細分しているが、当地がこのナスピ型膝柄鋏の分布域外にあるため、ここでは扱わない。このナスピ型膝柄装着の二又鋏は九州より畿内まで分布する。明らかに定型化したナスピ型を呈する二又鋏の最東端の出土は今のところ北堀池遺跡（三重県）と考えてよいだろうか。たしかに新保遺跡の二又鋏の中に笠状の突起に似た形状のものを肩にもつものもあったり、石川条里遺跡の三又鋏の中にも笠状の突起をもつものがある。樋上昇氏は、これを「山陰型ナスピ形農耕具」と呼び、山陰から北陸を経由して信濃、北関東に入ったと説く（桶上 1993）。いずれにせよ、新保遺跡、石川条里遺跡のナスピ型は定型化した所謂「ナスピ型」から少しはずれた重流であろう。このナスピ型膝柄装着の二又鋏は弥生後期後半から北部九州、瀬戸内、畿内を中心に盛行する。二又鋏と並行して二又にならないものもほぼ同じ分布を示す。この二又にならないナスピ型膝柄装着の鋏が後、古墳時代中期以降U字型の鉄刃を装着し、分布圏を拡大する。このU字型鉄刃装着のナスピ型鋏は若干平面形を変えながらも律令期まで続いている。東海地方でも山西遺跡（愛知県）、伊場遺跡（静岡県）、大谷川遺跡（静岡県）などで出土するようになる。C類の形態から機能を考えるとC類の刃部の平面形が多様であるため一概に論ずることができない。Aのように刃がやや厚手で幅狭く刃先に向かって尖るものもあればBのように二又の間隙が狭く刃が薄く刃幅が広いものもある。Cには二又の他、又なし、三又もあり、多機能、多形態の鋏でありながらも、肩に笠状の突起を削りだす意匠が当時広域に伝播したものであろう。

瀬名遺跡出土の膝柄装着の二又鋏 24点のうち、7点については継全長が計測できる資料である。便宜上、継全長が小さいものから並べた。6は全長54.6cmを測り、最長の13は69.8cmを測った。7点の平均値は61.9cmであった。身のみの残存状態は7が最良であったが8に関しては膝柄が装着した状態で出土したものであったため、ここでは8についてその出土状況と形態について詳述してみたい。

8は10区の33層水田の杭打ち畦畔であるSK103302の盛土内より出土した。33層は32層という青色砂礫が調査区南側を覆い、その上を31層という黒泥質の強い腐植土層が覆っている。この31層を30層という全くの黒泥層が覆い、この30層中より古墳時代中期の堆等が出土している。33層上面の水田は出土した小片の土器及び以東の調査区の土層対比より古墳時代前期に廃絶されたもので、その上に泥炭質の31層が堆積したが、それでも水田経営は継続されていた。30層になると全くの泥炭層になり水田はここで完全に廃絶されたものと思われ、この時期が古墳時代中期である。この8の着柄の二又鋏は33層の上面の水田を検出した際には確認できなかった。SK103302の盛土を少し削ったところで姿を現した。身は45°程斜めに盛土内に埋まっていたが、身のレベルが一番高いところは限りなく

東日本中心  
に 分 布

膝柄装着  
ニ又鋏 C

九州～畿内  
に 分 布

鉄刃装着の  
ナスピ型鋏

出 土 状 況

33層上面に近かった。つまり、8は33層内でもかなり上面に近い盛土内の出土といえる。膝柄装着部はほぼ身の軸部に合体した状態で出土している。柄部にも身の軸部裏面にも植物の蔓状の紐が規則的に巻かれているのが観察できた。柄は膝部近くで一度破損しており、その延長の柄と判断できる棒状の木製品が身より30cm程離れた場所に横たわっていた。

形態を見ると、身の全長56.0cm、二又の身の片身最大幅が7.2cmを測る。やや二又鋤としては小さい方に属する。縛縛部である軸の長さは14.0cm、最大幅は4.2cmある。軸部表面である膝柄との接合面は平滑に調整している。軸部の横断面は半円形を呈している。軸部先端の裏面は有頭状に突起を削り出し、縛縛した紐のズレを防止する役割を果たしたと

**緊縛紐** 考えられる。軸裏面の身に近い部分に横位に規則的に巻いた植物纖維が残存している。山内文氏の鑑定によると、断定はできないが、クレマチス属の植物纖維の可能性が強いとのことである。蔓状に延びる自生のクレマチス属の蔓を利用して身と膝柄を縛縛したものと想定できる。身の肩部は1.5cm程直線的に面を削り出している。身は最大幅部を中心やや下部に置き、身の外形は無花果状を呈する。身の二又の刃は薄いところで3mm程度まで薄くなっている。内側も渾曲させるように横断面が弧を描く形に削り出している。身の外縁は角を取った調整をしているが、厚いままでしている。二又の間隙の内側は刃のように端部に向かって薄くなり尖っており、意識的に刃を削り出していると考えられる。膝柄は屈曲部近くで一度欠落しているが、柄中央部は一緒に傍で出土した。柄の握部の方の先端は欠落しており、柄部の長さは不明である。膝柄の角度は63°である。この角度とは身の軸に接する平坦面と、柄の中心軸とがなす角度を計測した。この平坦面は収縮したか土圧の影響を受けたのか、一部変形しており、図の断面などでは平坦と言えない形状をしているが、本来は平坦であったであろうと推測できる面が一部観察できる。膝柄の膝頭の部分は溝を切り出している。人の膝を想定すると脛に当たる部分にも蔓状の植物纖維で縛縛したであろう圧痕が観察できる。出土当時にはここにも蔓状纖維が規則的に巻かれたように付

**二箇所を** 着していたという。膝柄鋤で従来想定されていたように膝柄の膝頭の部分と脛の部分の二箇所を身の軸部に蔓状纖維で縛縛していたことが了解できる。

他の二又鋤は観察表を参照してもらい概略のみここでは記す。6が漸名遺跡の中では一番小さく全長が54.6cmを測るものである。軸部は12.4cmと比較的軸が長い。7は軸が9.4cmしかない。7は身としての残存状態が最も良好なものである。肩から身の最大幅のところまでは直線的に輪郭をとり、そこから刃先の端部まではやや弧を描きながら緩やかな輪郭を示す。9、10はあまり残存状態が良好でないが、概ねの形状復元ができる。本来は7のように身の最大幅部が下半部にあり、そこで屈曲していたかもしれないが、9、10を復元すると、外側の輪郭は殆ど円形を描くようである。12は全長が68.7cmあり、左側刃部が欠落しているが残存部は残りが良い。7と同様、身外側の輪郭は肩より身最大幅のところまでは直線的でそこから刃先端部までは弧を描く。内側は分岐部より緩やかに弧を描いてやはり最大幅部まで行き、そこから今度は直線的に刃先端部に至る。13は全長69.8cmを測る最長の二又鋤である。14~29は二又鋤のある部分のみが残存したもので全形が推定できないものである。14、15、18は摩滅したとも考えられるが残存部の肩を見る限り、肩を削りだしていない。29は一応肩のない二又鋤の中に入れはしたものの大半の位置が上すぎたり、身の大きさが小さすぎたりしており、ここで扱った弥生時代後半~古墳時代初頭にかけての膝柄二又鋤とは別系統の鋤の可能性が多分にある。

#### 4) 三又鋤・四又鋤

### 三 又 錄

30~34は三又録である。30~33の4点は藤柄装着の三又録である。30はほぼ全形が観察できる良好な資料である。2~3区12層水田より出土したもので、上述の藤柄装着の二又録と加工技術の系譜は同じと見ることができる。縛縛用の軸部は二又録とほぼ同じ作りである。軸端部を有頭状に削り出し、身に近い部分を少し、細く抉る形は軸の先端部と基部の二箇所で緊縛することができるものである。身は三又に分かれているが、刃の間は3.3cm前後間隙があり、刃も8mm~10mmと厚く、二又録が身の上に土がのるのに比して、この三又録は土がのらない。つまりこの三又録は同時期の二又録とは機能を異にしており、耕作土に容易に突き刺さることから機能を類推することも可能であろうか。32は肩を直線的に削り出しているという違いはあるものの、加工技術、形態はやはり二又録と同系統のものと考えられる。34は残存状態が良くないため断定しにくいが、柄孔装着の三又録と考えられる。柄孔付近の残りも悪く、また貧弱な作りであるため、柄孔装着の三又録とはしつく要素もある。35~42は藤柄装着の四又録である。35, 36, 37, 39の4点はほぼ類似した形態を持つ。軸部は有頭状になるかは不明であるがやはり断面半月形である。身の肩は丸く、側縫から刃先端部に向かって若干外へ広がっていく。刃の間隙は分岐部より徐々に広がり、刃先へ向かう。刃先は劍状に尖る。刃幅は3cm~4cmと幅広で厚さも刃中央部で3mm~6mmと薄い。36, 37は5区13層の流路内より、39は6区18層水田より各々出土しており、これら3点は弥生時代後期前半に位置付けられる資料である。35は1区22層水田より出土しているがこの1区22層は弥生時代後期~古墳時代初頭にかけての土器を含むため、弥生時代後期前半の可能性も大いにある出土の仕方である。この形態を示す藤柄装着の四又録は当遺跡においては、弥生時代後期前半におこることが可能であるといえる。38, 40, 41, 42の四又録は身の全幅が12cm~18cm程度と幅広くなく1本1本の刃が2cm前後と幅狭で厚さは1.0cm~1.5cm前後と若干厚く、断面が長方形を呈するという共通の形態がある。所謂“フォーク状”的又録や“四本録”と表現した方が適した形態である。40, 41は斜めで短いが肩を削り出している。43は多又録の刃の一部と考えられる。

### 5) 諸手録

ここでいう「諸手録」とは北九州で初期稻作農耕段階に木製農具として導入された所謂「諸手録」とは別系統のものと考えられる。ただ形態的には身が内側に彎曲し、柄孔付近には舟形隆起が内側につき、エブリ状をしながらも打ち録としての機能も考えることができるものとして所謂「諸手録」と類似する。44, 45の細かい形態・技法は観察表参照のこと。

44は5区12層上面で検出された自然流路SR50801残存部内より出土した。古墳時代中期の埴、高杯を共伴し、柄が身に挿入されたままの状態で出土した。身が若干土圧で変形はしていたもののはほぼ全形を判断することができる資料である。柄孔は円形でその周囲に三角形の隆起がある。柄は身の横軸方向左に若干傾き、その身とのなす角度は85°である。また隆起の主軸方向に対し上へ若干倒れ、その角度は79°である。45は9区の黒泥層35層より出土している。35層は瀬名遺跡において、普遍的に存在する古墳時代中期の泥炭層である。ほぼ完形での出土である。44に比すと、柄孔及び柄の断面形が長方形であることと、柄が身の横軸方向に傾かないという差異がある。身の44のそれとほぼ同形であるが身左端部は一段幅狭になり、刃先にはU字型鉄製録先が装着されていたものと想定できる。川合遺跡(静岡市)出土の同形態の録の身が出土しており、これにはU字型鉄製録先が装着したことが明瞭に確認できる先端加工があった。この川合遺跡出土の諸手録は5C末の自然流路SR1101よりの出土である。また45は柄が隆起の主軸方向に対し、やはり上へ倒れ、

### 四 又 錄

その角度は82°である。44の79°と近似値である。

柄の装着に関しては柄孔が長方形という理由もあって45の装着方法は本来の装着を明示するものと思われる。44の柄において身の横軸方向左に傾くのは土圧による変形か本来の

諸手鍬の傾きが不明な点である。いずれにせよこの2例の諸手鍬は少なくとも次の2用途が形状から窺える。1つは身を代搔きに用い、三角形隆起の頂点を下に向け用いる。このとき下端の刃は三角形隆起の頂点で一度くびれ、左右両側が緩やかな弧を描いて膨らむ輪郭を示す。もう一つの用途は縱長に用いU字型鉄製鍬先を装着して幅狭の身に直角の柄を利用して打ち鍬として用いる用い方である。打ち鍬としての用途を考えると44の柄が身の横軸方向左に傾いていたのは、身の左側を用い打ち鍬とするときその傾きが85°というには打ち鍬が直角か若干それより鋭角的に柄が装着されるという傾向に合致することが考えられる。

古墳中期のみ出現 北九州より畿内まで分布する所謂水田稻作開始初段階の「諸手鍬」と違い、複雑な用途を兼ね備えた特異な形態を示すこのタイプの鍬が静清平野において古墳時代中期にのみ出現するという現象は注目する必要があろう。東日本においてはこの静清平野の2遺跡計6点の他は新保遺跡（群馬県）で同タイプと思われる横鍬が出土している他は今のところ見当たらない。（国府関遺跡出土の鍬の中に、これに似る形状のものがあるが、同タイプと言いかけるか不明である。）特異な形態、機能を有するだけに、今後の資料増加でこの鍬の系譜が明確になるであろう。

#### 6) その他の鍬

46~50は明瞭な鍬の形状は示さないものの、材質がカシ材であり、一様鍬の身の一部を想定できるものである。46, 47は鍬の膝柄を縦縛する軸部である。48, 49, 50は多又鍬の身の一部と想定できる木製品である。51, 52, 53は鍬に装着される膝柄である。瀬名遺跡の場合、組み合わせ鍬の柄も含め、鍬の柄はすべてサカキを用いている。51の装着角度は64°、52は52°、53は52°である。8が64°であったが、これらからこの膝柄装着の鍬は柄の装着

泥除け 角度が50°から65°あたりに集中すると考えられる。52は黒崎氏等がアリヤクリの溝を持つた広鍬に装着されると想定する「泥除け具」としての「丸鍬」であるとしたい。瀬名遺跡ではこのアリヤクリの溝を持つた広鍬は出土していないが、静清平野においては川合遺跡、長崎遺跡、下野遺跡（清水市）で出土している。

## 2 鍬

ほぼ完形に近い1点を含む組み合わせ鍬が2点、一本鍬が握りの部分のみの2点を含めて4点、計6点の鍬が出土している。1は8区の18層上面で検出された3基の方形周溝墓のうち北側の3号墓南周溝から出土したものである。1号、2号墓は土盛が良好に残存していたが、この3号墓は盛土が削平されており、主体部も不明で周溝のみが確認できた。

組み合わせ鍬 組み合わせ鍬は南周溝の西隈底部より柄が挿入されたまま出土した。この南周溝からは2個体分の供獻土器の壺が出土している。有東式土器併行期（弥生時代中期後半）の年代である。柄は三ヶ所で寸断されてはいたが、概ね柄の形が想定できる。細かい形態及び技法は観察表参照のこと。この組み合わせ鍬は資料的に次の点で特に注目すべきことだと思われる。1)弥生時代中期後半という限定された時期の確実な資料である。2)組み合わせ鍬の柄が身に装着されたまま出土した例は少なくその装着方法を把握することができる資料である。3)組み合わせ鍬の柄の形態があまりわかっていない現段階においてその柄の形状、

方形周溝墓 特に身の溝及び穴に挿入される部位と柄の握部は重要であろう。4)従来、組み合わせ鍬も

水田耕作における起耕具の一つとして考えられてきたが、本資料はじめ組み合わせ鋤は方形周溝墓築造のための土木具としての位置付けが必要であることが了解できる。服部遺跡（滋賀県）、朝日遺跡（愛知県）、瓜生堂遺跡（大阪府）等の方形周溝墓の周溝内出土の一本鋤、組み合わせ鋤はやはり、周溝墓築造のための土木具である。静岡県下でも角江遺跡（浜松市）でもほぼ瀬名遺跡と同じ時期の方形周溝墓の周溝より同形態の組み合わせ鋤が出土していることからも、この地域では組み合わせ鋤が当初、方形周溝墓築造のためなどの土木具としての用いられ方をしたことが想定できる。

2は中央部に直柄を挿入したであろう加工痕が残るため、組み合わせ鋤の身とした。緊縛用の突起は欠落していると想定した。

3は身が二又に分かれる二又の一木鋤である。4は身のみ残存しているが、肩が張って一木鋤であることより鋤にした。5、6は柄の握りが三角形に削り出しており、一木鋤の握りとした。

### 3 田下駄

田下駄とは水田で農作業時に履く下駄であるが、本報告書では、近年の研究の中で一般的になっている「稲刈りなどのときに湿田にはまりこまないために履く」（木下 1985）大足下駄を示している。木下忠氏は、「田下駄」には、「稲刈りなどのときに湿田にはまりこまないために履く」としての「田下駄」と、代踏みに使用する田下駄（一般に「おおあし」の語があてられる）の二種類がある。」としている。後者の「代踏みに使用する田下駄」は「大足」と報告されることが一般的である。この大足は杵型の大型の履物であり、近年、古代遺跡の友井東遺跡（大阪市）や池ヶ谷遺跡（静岡市）からもほぼ完形で出土しており、全体の器形が把握できるようになっている。また機能としても、代踏みと同時に緑肥を踏み込むという機能も、この大足を考える上で大切である。この「大足」とはここで言う「田下駄」とは機能を異とし、「田下駄」は「稲刈りなどの時湿田にはまりこまないために履く」下駄を示していることを確認したい。考古学の秋山浩三氏（秋山 1993）や民具学の潮田鉄雄氏（潮田 1969）は「大足」と「田下駄」という機能を含意した分類を避け、田で履く下駄を総称して「田下駄」と呼称している。秋山氏は「既知の考古資料にみる田下駄」を三形式に分類している。その三形式とは「棒なし形式」、「円形杵付き形式」、「方形杵付き形式」である。つまり「棒なし形式」とは瀬名遺跡の報告で扱う「板状田下駄」であり、「円形杵付き形式」とは「輪カンジキ型田下駄」であり、「方形杵付き形式」とは「大足」のことである。秋山氏も認めているとおり、「棒なし形式（板状田下駄）」と「円形杵付き形式（輪カンジキ型田下駄）」とは湿田に足がはまりこまないようにするために履く下駄という機能を同じとするものであり、「方形杵付き形式（大足）」とは別機能である。本報告では、既述のように分類は、機能が別であることを優先し、機能差の判明しない形態上の差異は、その下位にくるとの立場をとる。従って下に示したように、水田稲作、特に湿田で用いる下駄は大別して、「田下駄」と「大足」と機能的に分けることが可能であり、次に「田下駄」は形態上の差異に着目して「板状田下駄」と「輪カンジキ型田下駄」とに大別できるとする。

#### 1) 板状田下駄

瀬名遺跡においては、弥生時代中期後葉から出現して、古墳時代中期頃まで確認できる歴史時代の遺物を含む溝1区S R12001や9区S R93301などがあるが、いずれもより

からの出土

期

古い時期の包含層を削り流して堆積したものと考える。確認できた数は178点に上る。形態的には次の分類を試みた。

- 分類案 A類・・・平面形が横の長さより縦の方が若干長いか、または正方形に限りなく近い形をし、足台は左右両端から中央部に向かって漸次隆起する。
- B類・・・平面形は横長の長方形かまたはそれに近い形をし、足台は隆起させてある。
- B-1類-平面形は横長の長方形をし、足台は足囲い状に削り出している。
- B-2類-平面形は横長の長方形をし、足台は左右両端から中央部に向かって漸次隆起する。
- B-3類-平面形は横長の長方形をし、足台部分は段差があり、足台を強調するように削り出されている。
- C類・・・平面形は横長の長方形か、またはそれに近い形をし、表裏面とも平坦で、足台を削り出さない。
- C-1類-平面形は横長の長方形で表裏面とも平坦で、縫孔が4つ穿たれている。
- C-2類-縫孔が4つあり、それに加えて1つ用途不明の孔が穿たれている。
- C-3類-縫孔が4つあり、それに加えて2つ以上の孔が穿たれている。
- 尚、ここで各分類のグループ内での田下駄の順番は調査区の1区より、そしてその調査区内では古い順（下層から順番）に並べてある。このように並べたのは、A、B、C類の分類は時間差、機能差につながる可能性があるため、この分類で分け、後は古い順に並べることでしか有効に並べる基準を設定できなかった。後述するが、平面形でも分類は可能であるが、検討の結果、この平面形による分類は時間差、機能差に結びつきえないことより、ここでは形状の説明以外には平面形による分類は避けることにした。
- A類 第69図の1~5が、A類に属する田下駄である。特に1、2はその典型であろう。形態的には平面形は若干縦長の隅丸長方形である。足台は丁度足が載る部分は平坦であるが、左右両端から中央部に向かって漸次隆起する。孔は整状加工具で、表、裏面から何度も突き刺しながら穿った様子が窺われる。1、2は共に2・3区の16層（弥生時代中期後半の
- 弥生中期の有東式土器の出土した水田が検出された層）より出土しており、瀬名遺跡においては、確
- 實資料 実に中期に遡る資料である。3、4はほぼ似た形状を示す。特に4は1、2に酷似する。3、4は2・3区の14層水田から出土しており、この水田も砂層に被われた弥生時代後期前半と時期限定が可能である。
- B-1類 第70図の6~10はB-1類である。6は典型的な形状を示す。足を囲うように足を載せる部分を削り出している。U字形に足囲いを削り出しているのではなく、足の左右側縁を囲うように削り出している。その後民具資料にまでつながるU字形の足囲いはU字形の足囲いの部分に孔を横方向に入れて繋縛するのであるが（沼津市境出土の田下駄や会津若松市門田条里制跡出土の田下駄）、これらB-1類は板に直接4孔穿っている点、民具資料にまでつながるU字形の足囲いとは異なる。これら5点はいずれも2・3区14層水田（弥生時代後期前半）より出土している。同一の技術により製作された一連の田下駄と考えられる。
- B-2類 第71図の11~32はB-2類である。足台を削り出しているが、左右両端より漸次隆起する形態である。横断面は横に長い台形を呈する。平面形は様々である。11は前方も後方も弓状に弧を描くように裁断されている。13、14は2・3区14層水田にて近接して出土しており、調査者は一足分としている対になる資料である。前孔間が通常のものに比して大き

く離れている。15はB-2類に属するものの、他のものに比して粗雑な作りで大型である。16、18は2・3区12層出土で隅丸長方形の似た平面形を示す。17は前方が弧を描き、後方が直線的に裁断されている。20、21はほぼ同形で同一の技術で作製されたと考えられる。22、24、26、28、31は小型で面積も小さいものである。22は右前孔が前に出て離れている。31は未製品なのか右後孔が穿たれていない。26と32はほぼ横長の楕円形を呈する。32は左後方の孔が一度穿たれた後、右に孔を拡大し、再び、孔の左外側に別な孔を穿っている。

33~49はB-3類である。足台部の平坦面と、左右の平坦面とは段差があり、仕切られている。縫孔は段差付近で薄い部分に穿たれている。平面形は多種多様である。35、37、41、49は面積が小さく小型である。一方34、40など37に比して面積は2倍以上ある大型のものもある。34、36は平面形が若干隅丸の長方形である。38、47は前方の辺が直線的で半円形に近い形になる。39、43、45は左右の側辺が弧を描く。48は楕円形を呈する。足台は前端から後端まで縦列に平坦に削り出しているが、38は足ののる前端を一段落している。丁度、素足の形に足台を作り出している。41の足台は段差が4cm以上あり、特異な高さである。47は表面一面に不規則な調整痕が残り、焼いたと思われる炭化痕が部分的に観察できる。他の製作技法と異なることを示すもののかは不明である。

50~158はC-1類である。109枚にも及ぶ、平面形の説明のため、便宜上ここで次の6つの平面形に分類してみる。a) 正方形、b) 長方形、c) 隅丸長方形、d) 小判型、e) 楕円形、f) 円形の6つである。a) 正方形に属するものは62、94、148等である。b) 長方形に属するものは55、63、77、78、85、98、114、116、126、130、145、147、151等である。c) 隅丸長方形に属するものは52、68、71、72、76、86、87、92、106、113、115、127、146、150等である。d) 小判型は前方辺と後方辺が直線的であるが、左右側辺は弧を描くものであり、50、79、90、110、129、132、140、142、153、154、155、156、157等がこれに属する。e) 楕円形に属するものは73、104、152、158等である。f) 円形に属するものは121、147である。これら平面形6つに大別しても属しきれないものがある程多様である。先述のように、平面形によるこの分類は時間差、機能差に結びつくとは判断できず、その有効性には疑問がある。特異なものを持記する。56は後方辺が直線的で全体としては半円形を呈する。94は正方形というものの、若干縦長であり、それも板目材であるが、木目が横に通っている。板材を幅広く短く木取りしてある珍しい例である。147と148は9区37層水田で近接して出土している。ほぼ正円と正方形であり、加工技術、穿孔技術とも極似している。意図的な製作と考えられる資料である。153~157までの5枚の田下駄は10区の33~35層出土のものであるが、平面形がすべて小判型であり、大きさも横40cm~50cm、縦16~20cmと近似しており、やはり同一の技術のもと製作されたと考えられる一連のものである。

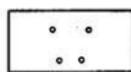
159~169はC-2類としたもので、C-1類の形状のものに孔をもう1つ不規則に穿たれているものである。平面形としては隅丸長方形と小判型をしたものが多い。5つ目の孔の位置としては、前孔より前に穿たれているものに、159、162、165、166、168がある。後孔より後に穿たれているものに、160、164、167がある。163は右側辺近く、中位に穿たれており、169は右前孔横に小孔が穿たれている。瀬名遺跡出土の建築部材の中

第14図 C類田下駄形態  
模式図

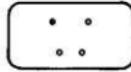
C-1類



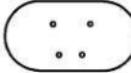
a) 正方形



b) 長方形



c) 隅丸長方形



d) 小判形



e) 楕円形 C-2類



f) 円形

で、壁材と想定できる板状材があるが、これには一方の側面近くに長方形の小孔が等間隔に穿たれたものがある。159、164、165などは、この壁材を転用して田下駄にしたとも考えられるものである。

**C - 3 類** 170～175はC-3類とした一群で、緒孔としての4孔以外に2つ以上孔が穿たれた田下駄である。170は後孔を再度穿ち直したものと考えられる。ただし、どちらが穿ち直した孔であるかは判別がつかない。171は前孔の前と後孔の後にそれぞれ1つづ孔が穿たれている。173は右側面に前と後に1つづ孔が穿たれている。174の緒孔の4孔以外は田下駄が半分に割れたときの補修のための孔と考える。175は左右に長方形の大きな孔を穿っている。

176、177、178はやはり水田で履く下駄と考えるが、A～C類の田下駄と別形態、別系統、別機能のものであろう。進行方向に細長く出来ていることより、株間を抜って歩くのに用いた下駄とも想定できる。沼津市と富士市の境付近に広がる浮島沼の湿田農具の内、「ヒエトリ用ゲタ」と称するものがある。これらの下駄は綫長で、やはり株間を歩くのに便利なように作られている（神野 1979）。176、177は緒孔というより、両側から溝をクサビ状に切り込んでいる。178は縦に2孔づつ計6孔穿たれている。

179～184は残存状態が悪く、田下駄と言い切れないが、その可能性が高い板状木片を並べた。

**緒孔付近の緊縛用の繩の当たりを観察したが、顯著に観察できるのは裏面であり、前孔2孔の間及び後孔2孔の間に、溝状の凹みがあるものがある。16、17、20、127、154、155はその例である。緊縛用の繩は裏面で左右に渡すようにしたと想定できる。タスキ掛けのように緊縛した痕跡は観察できなかった。その他田下駄の製作技法上、気になる穿孔技術、孔の位置、田下駄の大きさ等の検討は考察の第4節で統計的に扱いたいと思う。**

## 2) 輪カンジキ型田下駄

瀬名遺跡では、輪カンジキ型田下駄の足板が30枚、横木が11本（枚）出土している。

**輪カンジキ型田下駄** ここで「輪カンジキ型田下駄」と呼称しているが、ここで、この呼称を用いる下駄は、前述1)の板状田下駄と機能はほぼ同じで、湿田における稲刈りを中心とした農作業時に、足が泥に深く沈みこまないように、足に浮力を付けるために履く下駄である。形態状の構造は板状田下駄とは異なり、足を載せる綫長の足板と、この足板と十字に交わる横木（棒状のものもある）と、足板と横木の外線を回る輪の3点が、組み合わされる構造がある。瀬名遺跡では、3点が重なり合って出土した例が2つある。また調査時に輪は確認できなかったが、足板と横木とが組み合わさるものと考えられる出土例が10点あった。これらは確実に輪カンジキ型田下駄になることにより、他の類似型の木製品の用途にも言及できると考えられる。

まず、組み合わせの実態が把握できる資料を検討する。1、2の輪カンジキ型田下駄は8区14b層より出土した。5世紀代の泥炭層15、16層より上位にあり、この14b層より須恵器小片が数点出土しており、遠江研編年のIV期前半と見られる小片が含まれている。この14b層より上は平安時代の水田址 10b層まで土器は出土していない。概ね、この資料は古墳時代後期に属すると考える。4世紀代から5世紀にかけて、地下水位が上がり湿地化したことにより発達した泥炭層15、16層を覆う粘土層14b層が耕作土として用いられた時期に、用いられた湿田用下駄である。出土状態はいずれの部材も裏面を上にしていた。輪を一番下にその上に足板そして、横木という順で、重なり合って出土した。（巻頭カラー

写真参照のこと。) 足板は板目材のスギを利用し、前後先端を尖らせるように斜めに頭状に切り落とし、前後端近くに横長楕円形の孔を穿っている。緒孔は3つ穿っており前孔の1つは右に寄っているため、左足用と考えられる。足を載せる面は木表を用いている。横木はやはり杉の板目材を用いるが、足板に当たる面は平坦に削り出し、断面半円形を呈する。輪が当たる部分は鋭利な刃物で溝状に切り込まれている。輪は山内文氏の樹種鑑定によると、喬木類ではなく、蔓性緑灌木のティカカヅラを用いている。ほぼ一周、楕円形に足板と横木にわたして回している。断面は半円形をし、蔓性の材を半裁して用いている。輪の素材足板と輪、横木と輪は、おののの接する所、4箇所で紐状のもので縦縫したと想定する。2は10区30b層よりの出土である。30層は約40cmの厚さに堆積した泥炭層だが、より泥炭質の強いa、cに粘性の強いb層が挟まれていた。このb層中より木道状遺構が検出されており、和泉式併行の甃片、小型片が出土している。古墳時代中期の資料としてよいであろう。足板はスギの板目材を用い、全体を凸レンズ断面状にし、前後を有頭状に削り出している。残存状態が不良のため断定は出来ないが、緒孔はないものと想定する。横木はやはりスギの板目材を用い、左右両端を有頭状に削り込んでいる。輪は樹種鑑定の結果ツルグミを用いていることがわかった。図版編95図の輪カンジキ型田下駄の輪がティカカヅラで、この輪がツルグミであるという用材選択が興味深い。3は2と同じく10区30b層中より出土し、出土地点も近接している。ただ形状、及び、大きさが異なるためセットになるかどうかは判明しない。足板は板目のスギ材の両端を削り込んで有頭状にしている。緒孔と考えられる小孔が1つ穿たれており、前孔と考えられる。横木は板目板状材の両端を有頭状に削り出している。4、5は9区の37層水田上面から出土している。37層上面では、古墳時代前期に廃絶された杭列を伴った水田が検出されているが、36層の泥炭層がこの上面を覆っていた。これは瀬名遺跡においてどの調査区でも言えることであるが、古墳時代前期に廃絶された水田を泥炭層が覆っている。この水田の上面に載るようにして出土している遺物に関しては、この水田の廃絶された時期に帰属するのか、泥炭が発達した時期に属するのか明確に分別できない。8区においては、泥炭層の最下層において古墳時代中期の土器が集中して出土した例もある。以上のことより、この4、5の帰属時期は、古墳時代前期～中期の時期幅があるといえる。またこれらは同一の技術で製作されている。足板は板目のスギの板状材を有頭状に削り、緒孔はない。横木はどちらも残存状態がよくないが、4-1の横木の左端より判断すると、両端は溝も、孔も設げず有頭状にも加工していない。4、5はその製作技法が類似していること、形態的にも、大きさもほぼ同じであること、また近接して出土したことにより、2対の輪カンジキ型田下駄とする。6は6区14層のやはり古墳時代中期の泥炭層より出土している。輪は一緒に出土していないが、足板と横木が交わって出土しており、輪カンジキ型田下駄であることは間違いないであろう。足板はスギ板の板目材を用い、前後の角を斜め直線的に切り落としている。前後端には、円形の縦縫孔を穿っている。横木はスギの板目材の両端近くに、楕円形の小孔を穿ったものである。7、8は10区26層水田より出土した。26層上面では小区画の水田が検出されており、この7、8は畦畔の上に置かれるよう重なり合って出土した。26層は土器が出土しておらず、古墳時代中期～平安時代の時期幅内に入ると考えられる。7-1、8-1は前後端部を平坦にし、両側縁は弧を描くように削り込んだ板材を足板にしている。7-1の足板は本来は3つの緒孔であったと思われるが、後に右足用から左足用に変えたときに前の緒孔を穿ち直したため緒孔が4つある。左足用としたのは8-1が右足用であるこ

とから推定した。また7-1の2つの前縫孔のうち右は方形で小さく未使用のように見られるのに対し、左の縫孔は角が摩滅し、使用された孔と観察できる。7-1の前後の緊縛孔は本来横長の長方形に穿たれていた。後の横長の緊縛孔がつぶれたため、その両脇に小孔を1つづつ穿ったものと想定できる。横木は幅広で薄い板目板材である。両側端部付近に緊縛孔を穿っている。8-1はほぼ7-1と同形態であるが、足板前後の緊縛孔が前に2つ、後に2つ方形に穿たれている。以上が、部材の組み合わせが出土状態より確認できた輪カンジキ型田下駄である。

次に、これらの確認できた部材を中心に、足板と横木とする部材、1つ1つを取り上げる。1-1~10-1、11~30は輪カンジキ型田下駄の足板である。1-2~10-2、31は横木である。1-1~10-1、11~30は足板であるが大別すると、前後を有頭状に削りだしタイプのものと、前後端付近に緊縛孔を穿つタイプの2種に分けることができる。2-1、4-1、5-1は前後を有頭状に削り出し、縫孔はない。3-1は前後を有頭状に削りだし、縫孔は前孔1つである。11~18は前後有頭状に削り出し、縫孔は3つ穿っている。6-1、9-1、10-1は前後端付近に小孔を1つづつ穿っているが、縫孔はない。

#### 4 錐

**鉄刃装着錐** 木製の柄に鉄製の刃が装着した状態の錐が1点出土している。9区S R93301からの出土であるが、流路内の出土という不確実性がつきまとつ資料である。S R93301は川幅20m以上にもなる流路跡であり、含む土器は奈良時代、古墳時代の小片である。古墳時代の包含層を開削して流れたと考えられ、ほぼ奈良時代に比定できようが、新しくなる可能性も含まれる。刃身は湾曲して、刃先に達するが、刃先の一部が欠落している。柄には、刃の基部を貫通させた孔に挿入して端部を角形に直角に折り曲げて固定させている。柄はタブノキを用いており、節が2ヶ所観察でき、良質とは言えない。頭部をやや大きく有頭状に削り出している。刃を挿入する孔は、刃が鈍角に装着できるような角度に入れている。握りの部分はやや細くし、断面楕円形にしている。握りの下は一方だけコブ状に突起を削り出し、ストッパーをしている。残存状態はあまりよくないが、完成された型の錐の原形をほぼ復元できる資料である。

**復元案** 刀の先端部が欠損しているため、図のような復元破線をひいて計測した。刃弦長14.3cm、刃全幅2.8cm、刃厚0.2cm、刃の湾曲0.18cm（刃の湾曲とは、刃弦に対する刃縁の湾曲最高部の重線との比率である。つまり刃縁の湾曲最高部の重線の長さを、刃弦長で除した数値である。この数値はゼロに近ければ近いほど刃部は湾曲せず直線的であり、大きければ大きいほど刃部は湾曲していることを示す。）、刃弦角105°（刃弦角とは柄の中心線と刃弦がなす角のことである。）、柄長31.7cm、重量142.9gである。

稲刈りを専らの機能とする錐の形態は民具資料によると、A)刃弦長は13~17cm程度がよい、B)刃幅は2.0~3.5cm程度がよい、C)刃の湾曲は0.08~0.14程度がよい、D)刃弦角は94°~104°程度がよい、E)重量は100~180g程度がよい、となるという（中山 1992）。この錐は若干刃の湾曲の度合が大きいが、ほぼ稲刈り錐の条件の範囲内に収まっている。稲刈りの稲刈り錐としてよい資料であろう。

#### 5 ヨコヅチ

8点のヨコヅチが出土している。「ヨコヅチ」とするものは、「敲打部と柄部とがヨコ

一直線に連続していて、柄部を握って振りおろし、敲打部でものを敲くという作業」（渡辺 1985）をする木製品である。

2は直方体の敲打部に、握り断面楕円形の柄が連続する。敲打部の長さは13.2cmと短い。実測図で正面図とした面中央に直線的なキズが残り、この面で敲打したと観察できる。1区の20層（奈良時代から平安時代初期にかけて）よりの出土である。3は3.5cm程の厚さの板を羽子板状に削り出している。表面の中央部には凹みがあり、やはりこの面が敲打部と考えられる。7区の奈良時代の河道跡 S R 70801からの出土である。4～9は同形態のヨコヅチである。野球のバット状のヨコヅチと言える一群である。心持ち材を用い、14.5cm～28.5cmの長さの敲打部を持ち、敲打部より漸次握りに向かって細く削り出し、グリップエンドは球状に削り出してストッパーをしている。6は特に敲打部の使用痕跡が明瞭である。樹種は2がカシ材、3がスギ材、4～9はすべてヒノキ材である。樹種から想像しても、2、3と4～9は形態的にも機能的にも別ものであろう。4～9は樹種も形態も同一であることより、同一機能と判断してよい資料であろう。いずれも、奈良時代から平安時代にかけての資料である。以上のように瀬名遺跡のヨコヅチは、奈良時代から平安時代にかけてのものがすべてである。

期

## 6 竪杵

竪杵は2点出土している。10は片方の敲打部のみ残存する。古墳時代中期の資料である。材はカシの削材を用いている。11は残存状態が良くないが、ほぼ全体が把握できる資料である。やはり古墳時代中期の泥炭層より出土している。ツバキの心持ち材を用いている。

## 7 編錐

編錐が3点出土している。いずれも、半削材を用いている。12、13は7区のS R 70801より、14は9区 S R 92501より出土している。樹種は12がヒノキ、13がイヌマキ、14がシデ（イヌシデ又はアカシデ）であり、樹種の選定はしていないことが窺われる。

## 8 田舟

15～18は大型の刳物であり、湿地での農作業時に、稲束や農具や土を運搬するときに用いたと考えられる田舟の可能性を指摘できる木製品である。15～17は後藤守一氏が「両手横」と呼び、木下忠氏が「把手つきの槽」と呼んだ山木遺跡出土のもの（木下 1985）と同形態と考えられる。底が扁平で、平面形はやや縱長の小判形をし、前と後に2所、把手状の突起を削り出している。15は全長198.7cm、深さ27.3cmを測る。9区のS R 93303よりの出土で漂着した出土状態であった。16、17は把手部も残存していることより15に似た形状をとると類推することができる。18は把手は残存していないが、大型の槽の底に近い一部であると思われる。径1.5cmの円形の小孔が穿たれており、その孔を木製の栓で充填している。これらは田舟と断定できないが、瀬名遺跡において湿地稻田に伴う農具を考える上で、田舟の可能性を確認しておきたい。

舟

## 第5節 祭祀具

瀬名遺跡から祭祀具に分類できる木製品は55点出土している。性格上大別すると、弥生時代後期から古墳時代にかけての水田に伴う祭祀をしたと考えられる遺物と奈良時代から平安時代にかけ、所謂「律令制祭祀」の祭料と考えられる一連の遺物群とに分けることが可能であろう。前者に該当する木製品は、鳥形と舟形である。出土遺構としては水田面からであり、水田稻作に当たり、豊饒祈願の祭祀に伴うものと考えたい。全国的にも、弥生時代の遺物として、鳥形木製品、舟形木製品が確認できる。鳥形も舟形も、「稻魂」＝神の乗り物としての性格付けが可能であり、その実態は律令制祭祀に比して不明瞭ではあるが、ある規格性を伴った祭祀であったことが窺われる。後者に該当するものは、人形、馬形、舟形、刀形、斎串である。律令制祭祀の祭料は平城京宮においても、木製品は人形、馬形、鳥形、絵馬、舟形、武器形、陽物、斎串等が挙げられ（金子 1988）、県内では伊場遺跡で人形、馬形、絵馬、舟形、斎串、鳥形、剣形、刀形が確認でき（浜松市教委 1978）、神明原・元宮川遺跡では人形、馬形、絵馬、舟形、刀形、斎串が出土している。その組成を見ると、瀬名遺跡の律令制祭祀に伴う木製品は出土点数こそこれらの遺跡の比ではないにしても、その基本的な器種は一応揃っているといえる。水田稻作に伴う祭祀遺物の出方は一括性がなく、ただ水田面、畦からの出土という性格があるのに対し、律令性祭祀の遺物はやはり溝内、旧流路内より一括性を持って出土しているという性格が指摘できる。特に、1区19層 S R12001、7区8層 S R70801及び9区25層 S R92503～93303の三箇所からまとまった数の斎串、刀形が出土している。これらの各々の流路に関しては第Ⅲ章第3節で、7 7区 S R70801出土の木製品、9 1区 S R12001出土の木製品、10 9区 S R92502～93303出土の木製品のところでその流路の性格を説明している。

### 1 鳥形木製品

この鳥形木製品は10区35層水田の杭列と杭列の間から出土している。本格的な泥炭層30層（古墳時代中期）が被覆した31、32層水田は、泥炭質混じりの耕作土であり、その下に32層という砂疊層があり、この砂疊層に覆われた水田が33層の古墳時代初頭に廃絶された杭列を伴う水田である。この33層を解体する際に遺構面としては検出できなかったが、大区画の畦畔の杭列を検出できたのが当該の35層水田であった。以上より古墳時代前期に廃絶された水田に近い時期であり、弥生時代後期～古墳時代前期の時期幅に収まるものである。35層水田の杭列は畦畔の両側に密に棒状の杭を打ち込んでいる。この板状の鳥形はS形とK103505とSK103507とがT字状に交差する付近の杭列より出土している故、畦畔内出土と断定してよいであろう。

詳細な形状把握は観察表を参照していただきたい。鳥を上部より平面的にとらえており、羽根と胸部を別作りにし中央部で止めることなど、形態的には沼津市雄鹿塚遺跡、長野県石川条里遺跡の鳥形木製品と同系譜のものと考えられる。雄鹿塚遺跡のものが、弥生時代後期、石川条里遺跡のものが古墳時代前期のものであり、弥生時代後期より古墳時代前期にかけて中部地方では上から平面的にとらえた鳥形を棒に差し、水田において祭祀が行われたことが窺える。

弥生時代、祭祀に用いられたと考えられる鳥形木製品は畿内を中心に多数出土している

が、池上遺跡（大阪府）、瓜生堂遺跡（大阪府）、山賀遺跡（大阪府）、西川津遺跡（島根県）等の鳥形は立体的もしくは胴部は横から見て平面的に作り出しており、やはり、胸部と羽根部とを別作りにし、胸部中央に棒を差し込み立てたことが窺える資料である。基本的な鳥の表現のし方、及び用いられる方法は、中部地方のそれと同じであろうか。中部の地方の3例がすべて鳥を上から平面的にとらえて表現していることは特筆に値するであろう。また從来より説かれてきたような、稻魂を運ぶ鳥の考えは、瀬名遺跡の鳥形が水田遺構の畦の交差点付近より出土したことより、より一層補強されたと考えたい。

## 2 舟形木製品

舟形は6点出土しているが、2、3、4は弥生時代後期から古墳時代前期の水田より出土したもので、5、6、7はいずれも流路内からの出土である。

2は5区の10層水田（弥生時代後期～古墳時代前期）の畦の杭列内より出土している。3は10区の31層水田（弥生時代後期～古墳時代前期）の畦畔SK1031a04、SK1031a05、及びSK1031a03がT字形に交差した付近からの出土である。4は10区の30b層（弥生時代後期～古墳時代前期）の水田面より出土している。いずれの3点も所属時期は弥生時代後期～古墳時代前期であり、水田の畦畔又は田面より出土している。特に2点は畦畔内より出土していることより、この時期、畦で水田稻作農耕儀礼にかかわるなんらかの祭祀が行われたと考えられる。

6は2-3区10層（古墳時代中期）の自然流路S R21001から、5は9区の自然流路S R93301（奈良時代～平安時代）から、7はやはり10区の11層の小流路S R101101から各々出土している。時期は2、3、4より新しく、6は古墳時代中期、5、7は歴史時代のものである。5は律令制祭祀の祭料の1つと考えられる。これら5、6、7は自然流路内に流したものと考える。形態的には、1点1点、大きさも形状も異なる。2、5、6は厚みがなく扁平な作りである。4は半分を削り込まない特殊な作りをしている。3が唯一、立体的に舟を模したものと思われる。

以上、瀬名遺跡出土の6点の舟形木製品は弥生時代後期～古墳時代前期の水田から出土したものと、自然流路に流された後世のものとに大別できる。

## 3 馬形木製品

1点のみ確認できた。2-3区の8層上面からの出土である。8層上面は調査区東側の低地部分では小区画水田が検出されているが、水田が検出されなかった西側の微高地から出土したもので、時期については調査者によると奈良～平安時代前期の時期幅におさまるものとしている。平行四辺形の板材を用い、下部に2箇所三角形を切り込みを入れ、上部に1箇所半円形の切り込みを入れ、頭部をやや丸みをつけ整形している。下部には棒を差したと考えられる切り込みが下から入れられている。金子裕之氏の分類によれば裸馬であり（金子 1980）、大谷川遺跡の報告書によればI類（「平行四辺形を基本形とする。」）のb（「平行四辺形のままで切り落としはないが、えぐりの位置及び尾の跳ね上げにより、頭部と尾部は明瞭である。」）に属すると思われる。

奈良～平安  
前　　期

## 4 人形木製品

1点出土した。1区20層よりの出土である。19層水田の下層から20層、21層および22層

の一部を切り込む自然流路 S R12001が検出されたが、位置的には左岸の斎串一括出土地点から出土しているが、レベルがこれら斎串より低く、20層中より出土したとされており、はたしてこのS R12001周辺出土の斎串群と一括で扱えるのかは不明である。頭は圭頭状に切り出しており、肩に向かっての切り込みから判断してイカリ形の人形になるかと想像される。顔面を墨書きしており、眉、目、鼻、髭（ケチヒゲ）、鬚（アゴヒゲ）を描いている。

## 5 刀形木製品

明瞭に刀形木製品と言えるものは3点である。いずれも9区S R92503~93303から出土しており、第3節10のところで詳述したように、自然流路内に長大な斎串とともに一括して出土したものである。10は全長75.6cmと長大なもので、柄頭を圭頭状に作り、柄部の下部のみ弧を描いて削りだし、柄を表現している。11、12は刀形木製品の典型的な表現であり、柄頭を圭頭状にし、柄の上部を2箇所三角形に切り込み、下部を台形に切り込んで柄部を表現している。大谷川遺跡の報告書（静埋文研 1990）の分類によると、10がE類（「柄を作り出していると思われる切り欠き部分が1箇所だけである。」）、11、12はB類（「柄上部は2箇所直角三角形状に切り欠き、柄下部は弧状に切り欠く。」）に当てはまるであろう。佐藤達雄氏の分類（佐藤 1993）によれば、10がII類のd、11、12がII類のbに当てはまる。いずれにしても、加工は直線的で単純なもので、精巧な模造品とはいえないものである。

## 6 斎串

斎串とは、黒崎直氏が定義づけるように（黒崎 1976）、祭祀遺物の中の「細長い薄板の両端を削って尖らした串状の木製品」であり、用途については本来的な性格として「神を請い降す神の招代、すなわち神の依るという『神聖な木』」としての役割があり、具体的な用途としては「他地と聖域と区別するしるし」や「『斎串』を立てて神への獻げ物として」の「しるし」が考えられている。これらの用途を念頭に置きながら、金子裕之氏、黒崎直氏の研究を援用すると、瀬名遺跡の木製品のうち斎串と認定しうるものは、41点になる。瀬名遺跡の木製品の中には、現地調査の段階で「斎串」と命名された板状のものが相当数あったが、整理作業の過程で、出土状態の確認及び上記のことを考慮することによって

斎串 41点に絞られたという経緯があった。

分類案 瀬名遺跡出土の斎串は次のような形態分類をあてはめてみた。

A類—上端は圭頭状をなし、下部は漸次幅が狭くなり曲線を描きながら下端部に至る。

圭頭状の頭部には、木目方向に（A類はすべて板目取りの板材である。）上から下への切り込み。

A1類···左右両面に切り込みが複数段入る。上端には上方より斜めの角度で切り込みが入る。

A2類···左右両端面に一箇所づつ上から下への切り込みが入る。

A3類···側面には切り込みはなく、上端に上方より斜めの角度で切り込みが入る。

B類—上端は緩やかな弧を描く円頭状を呈する。下部は漸次横幅が狭くなり曲線を描きながら下端部に至る。

C類—上下端を逆方向に切り落とし台形状にしたもの。

D類—長大で、上端も下端も直線的に鋭く尖る。上端は圭頭状に尖らせる。下端はA、B、C類とは異なって、斜めに直線的に切り落とし先端を尖らせている。

E類—上端は圭頭状を呈する。上部両側面に三角形の切欠きを等間隔に何箇所か設ける。卒塔婆状の斎串である。

13~20がA 1類である。すべて、1区19層S R 12001内、またはその岸からの出土である。13、14、17ではほぼ全体像が把握できる。圭頭状になっていること、両側面に切り込みが複数段入ることが特徴である。22、23はA 2類としたもので、やはり圭頭状の頭部に両側面に一箇所づつ切り込みが入るものである。24~27がA 3類で、両側面に切り込みが観察できないものである。このA類の斎串の頭部はすべて上から横（木目方向）に切り込みが入っている。この切り込みに、弊帛を挿んだと考えられ延喜式に記載されている「挿弊帛本」と比定できよう。29~32はB類に属する。頭部が明瞭な圭頭状をなさず、むしろ弧を描くように丸い。29はやはりA類に見られるように頭部は上方から横に切り込みが入っている。30は推定復元するとやや幅広になるものと考えられる。33、34はC類に分ける。上下端を逆方向に斜めに切り落とし台形状になっている。大谷川遺跡の斎串の分類ではB 1類（「上下の逆方向の切り離しで、台形状を呈する。」）に当たるものである（静理文研1989）。35、36、37はD類とした。長大で、上端も下端も直線的に両側から斜めに切り落とし鋭く尖らせているものである。大谷川遺跡の斎串の分類ではC 2類（「両端が圭頭と劍先状の中間的な形態を呈する。」）としたものである。38はE類としたもので、卒塔婆状に両側に等間隔の三角形の切り込みが入るものである。黒崎直氏のE類に入るもので「両側辺に對称位置にV字形の切り欠きをほどこした斎串」である。大谷川遺跡ではG類とし年代觀を平安末~中世と示して、他より新しいことを指摘している。他は上部のみ、下部のみの欠落部が大きいものである。概ね、出土状況やその製作技法より斎串と考えてもよいものであろう。

1区19層S R 12001出土のものは大半がA類に入ってしまう。7区S R 70801はA 2・斎串のA 3類が中心である。他は、様々な形態を示している。奈良時代を中心とした時期にはA 定形化類のように定型化された斎串が用いられていたと考えられる。

延喜木工式にある「毎月晦日御賄料」「十一月新嘗祭 十二月神今食御賄料」には、「挿弊帛本」がそれぞれ「廿四枚」「三百八十四枚」とあり、「木偶人」=（木製の人形）と同数あげられている。この数字は宮中のものであるが、それにしても瀬名遺跡の場合、斎串の数が多く、人形は同時期とも言いがたいものが1点出土しているのに留る。馬形も1点であり、大谷川遺跡、伊場遺跡の木製祭祀具の組成比率が大幅に違い、斎串、舟形、刀形以外の祭料が少ないことが指摘できよう。

## 7 その他の木製祭祀具

その他、54は陽物の破片と考えられ、時期は古墳時代中期のものである。55は大きさ11.3cmのミニチュアの櫛状木製品である。いずれも祭祀遺物の1つとして数えておきたい。

## 第6節 容器

瀬名遺跡出土の木製容器は削物、高杯、挽物、曲物、漆椀に大別する。製作・加工方法による違いで分類すると、削物、挽物、曲物の三分類が適當かと思われるが、これら三分類に形態的、技法的顯著な特徴がある高杯と漆椀とを加えたい。削物とは斧、鑿、槍鉤等の工具を用い、材を削りぬいて作る容器のことである。挽物との明白な差異は、輻轂を用いないで人間の手により中を削りぬくことである。挽物とは木材を削っておよその形を整え、輻轂によって整形した容器である。曲物とは薄板を円筒状に曲げて、両端の重合せの部分を桜皮紙（桜の樹皮）で縫合させて側板とし、これに蓋板あるいは底板を接合した容器のことである。高杯とは食物の盛り付け用容器で、特に弥生時代に顯著な特徴を示す。

削物の工具を用い、材を削りぬいて作る容器のことである。挽物との明白な差異は、輻轂を用いないで人間の手により中を削りぬくことである。挽物とは木材を削っておよその形を整え、輻轂によって整形した容器である。曲物とは薄板を円筒状に曲げて、両端の重合せの部分を桜皮紙（桜の樹皮）で縫合させて側板とし、これに蓋板あるいは底板を接合した容器のことである。高杯とは食物の盛り付け用容器で、特に弥生時代に顯著な特徴を示す。

高杯 木製の高杯の場合、杯部、支柱部、脚部の3部位を別々に作り連結する手法が定型化する。

漆椀 漆椀は挽物の椀に漆を塗布した容器である。

漆椀 瀬名遺跡では削物が37点、高杯1点、挽物48点、曲物146点、漆椀12点がそれぞれ出土している。各調査区ごとの内訳は次のとおりである。

第24表 瀬名遺跡出土容器集計表

	1区	2・3区	5区	6区	7区	8区	9区	10区	計
削物	6	3	3	1	20	2	10	1	46
高杯				1					1
挽物	1	2	1	1	52	1	19	2	79
曲物	12	3	9	7	57	8	57	7	160
漆椀	1	2		2	1	1	4	1	12

### 1 削物

2 形態に 大別 瀬名遺跡出土の削物を2つに大別すると、平面形が橢円形を呈するものと正方形または長方形を呈するものとに分けることができる。

1～10は平面形が橢円形の削物である。いずれも残存状態が良くないが、内面が削り抜かれており、容器として用いられたことが窺われる。1は全体の1/3程度しか残存しておらず、全長、横全幅は予測の域を出ないが、全長は60cmを越え、横全幅も40cm程度になる大型の削物である。平面形は橢円形を呈し、内面は緩やかに中心に向かって窪む。内面底部は平坦面を意識的に作り出さず、滑らかな曲線を描く。口縁部は幅1cm程度～3cm程度の平坦な面を巡らしている。外面底部は座りが安定するように大きな平坦面を設けている。側面に1ヶ所径1.2cm程度の円形の孔が貫通している。2は全長59.0cmを測る。1に比して口縁部の平坦面が幅5cm近くあるところもあり、相当な幅広である。3は欠落している部

分も大きいが、残存しているところでほぼ全体が推定できる。作りは丁寧でこの時期の楕円形削物の典型的な形態を示す。全長は30.5cm、横幅は17.4cm（本来の横全幅は20cm程度と推定する。）高さは5.6cm、推定容積は613.4cm<sup>3</sup>を測る。やはり内面には平坦な内底を削りだしておらず、外面部は平坦面を広くとっている。側面に径1.2cm程度の孔を1ヶ所穿っている。4は1つのコーナーのみが残存しているだけで全体が想定できない。ただ内面底は平坦面を作り出しているようである。5は底部の一部しか残存していないため、器型を想定できない。内底面が平坦に円形を呈すとも考えられ、他の楕円形削物と趣を異とする。6も底部の一部しか残存しておらず、積極的に楕円形削物の底部とは言い切れない。7、8は類似した形態、製作技法を示す削物である。全長は7が24.8cm、8が25.2cm、高さは7が4.4cm、8が5.0cmを測る。横全幅は推定で18cm前後になると想定する。7、8とも内底面に平坦面を作り出しているが、7は隅丸長方形に近く、8は楕円形である。9は底部付近しかやはり残存しておらず、内底面は円形に平坦面を削りだしているようである。10は内面にも外面にもコーナーに稜が観察でき、他の楕円形削物と異なる。以上楕円形削物においては法量の差異はもちろんあるものの、1、2、3、7、8は1つの典型を示していると指摘できる。

11～34は平面形が長方形または方形を呈する削物である。11は側面部のみしか残らないが、全長62.2cmを測る長大なものである。12も53.3cmと大型である。13は外底面の縦長さが18.1cmあるにもかかわらず、内底面の縦長さが6.4cmしかない。14は1つのコーナーをすべて削り込んでおらず、特異な内面の形をする。16がほぼ全体が残存している良例であろう。縦全長が30.0cm、横全幅が19.8cm、高さが7.9cmで推定容積が1946.7cm<sup>3</sup>を測る。口縁部には殆ど平坦面を作らず、薄くし、底部に近づくにしたがい厚くなるよう側面は削りだしている。内底面はほぼ正方形になる平坦面を削り出している。19は内底面は縦長の長方形に平坦面を作っている。23、24、25、32はほぼ完品で、形態、技法も似る。22、23、24、25、32は容積を計測できたが、153.4～279.6cm<sup>3</sup>と値が近い範囲でまとまる。以上、長方形削物も法量の違いはかなり幅があるものの、形態、技法的には近似しているものが多い。35は側縁が厚く、容器であるか不明である。36は平面が舟形と想定できるものである。舟の形になるとすると、平城宮で出ている古墳時代の舟形の槽と似た形状になる（『平城宮発掘調査報告X古墳時代I』1980）。37は両側外面に耳状の把手が付いた容量の大きな容器である。推定容積は2762.9cm<sup>3</sup>を測る。内面に焼痕が残るものが4、8、14、17、24、27、29、30、32、33と多数ある。内側を削り抜く時、焼きながら削っていった加工法 内面に焼痕が想定できる。19は外側に観察できる。

削物の出土状況をみる。楕円形削物の大半（1、2、3、4、6、9）は弥生時代末期～古墳時代初頭にかけての杭列水田の土層よりの出土である。7、8は登呂式土器が出土した5区13層よりの出土である。既述のように、5と10は楕円形削物の中に入れはしたもの、形態、技法とも他のものと趣を異なる。つまり7、8は他に先行する弥生時代後期前半に用いられた削物であり、他の楕円形削物は弥生時代末期～古墳時代初頭の削物である。

11～34の長方形削物に古墳時代前期以前のものは一点もない。16、18、20、23、27、28、31、32の8点はすべて7区のSR70801からの出土である。SR70801からは須恵器片が出土しているが、遠考研編年のⅢ期中葉より奈良時代の高台付長頸壺まで時代幅はある。下限をもってすると、SR70801内出土木製品は概ね奈良時代とすることができます。13、

楕円形削物  
が先行

14、15、17、19、21、22、24、25、26、29も時代幅がより広がるが奈良時代の土器と共に伴っている。以上より長方形削物は奈良時代を中心とし、それ以後新しい時期のものと想定することができる。

**柱目から** 削物の木取りについてまとめてみる。梢円形削物のうち1、3、4、5、7、8、9、10が柱目または追柱目取りをしている。そして削物を縦長に置いた時、縱に木目が走るように用材している。一方長方形削物は大半が板目材を削り抜いている。上面に木表がくるものが15例、上面に木裏がくる例が7例である。畿内を中心とした歴史時代の削物の木取りは「横木取りの材などでは木裏面を口縁部にあてる」ことを原則としているようである。(『木器集成図録 近畿古代篇』1985)という。瀬名遺跡出土の奈良時代以降の長方形削物の場合「木裏面を口縁部にあてる」という原則は守られないが、横木取りは確かに大半のものはそうである。つまり、歴史時代に入って板目材を削り抜いた長方形削物が一般化するようである。そして瀬名遺跡では弥生時代末から古墳時代初頭にかけては柱目材を削り抜いた梢円形削物が一般的であったことが了解できる。

## 2 高杯

**形態** 木製高杯が一点出土している。脚部と支柱部と杯部の三点を組み合わせる高杯である。脚部と支柱部の一部が残存していた。ただ、ここで脚部としたが、川合遺跡出土の三点が組み合わされたまま出土した例を見ると、ラッパ状に開き、内側の削り抜きが半球状に小さいだけをもって脚部とは言い切れない。脚部が杯部である可能性もあることを指摘しておきたい。瀬名遺跡出土の高杯は土圧の影響を受けて歪んで出土した。材はスギである。横木取りをしている。脚部末端の最大口径は19.4cmを測る。支柱部は脚部に挿入される多分断面方形となると思われる棒状のものが残っていたのみである。底面は3cmほどの平坦面を外縁にとり、内側は円形に削り抜いている。

**出土状況** 5区の13層上面で検出された。SR51303に設けられていた堰5の中の多数の木製品の一点であった。堰5とは川幅7~8mの自然流路に流れ込む川(SR51303)の合流直前に設けられた堰である。この13層上面では登呂式土器が多数検出され、この堰の時期もこの時期である。

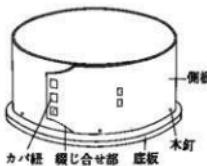
静岡県中部では、有東遺跡、登呂遺跡、川合遺跡、瀬名遺跡で同形態の木製高杯が出土している。この時期に当該地方では、土製の高杯が僅少であることも考え考え合わせ、木製高杯の土器との補完関係も今後検討しなければならないであろう。

## 3 曲物

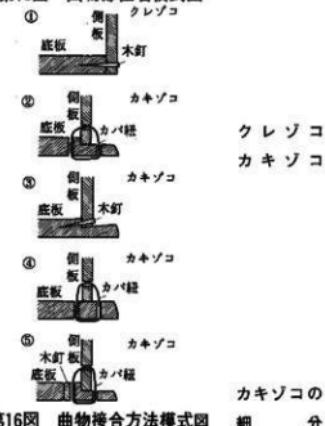
曲物は、瀬名遺跡では底板、側板を含め146点出土している。出土遺物の曲物については、各部の名称及び構造の名称については、一般化しておらず、報告書によって多種多様である。そこで、まず、各部の名称と、底板と側板の接合方法について概説しておきたい。

**接合方法** 曲物は、薄板を円筒状に曲げて両端の重ね合わせの部分を山桜の樹皮の紐で縫じ合わせ、それに蓋板あるいは底板を接合させた容器である。円筒状に縫じ合わせた薄板を側板とし、側板が二重になり山桜の樹皮の紐で止めた部分を縫じ合わせ部とする。この縫じ合わせる紐は伝統的に山桜の樹皮が大半であろうが、「カバ紐」の方が一般的であるためにここではカバ紐とする。現行の民具例ではカバ(櫛)の樹皮を用いる例は少なく、圧倒的に山桜の樹皮である。側板に接合する円形又は梢円形の板を「底板」と称することにする。とい

うのは出土遺物の曲物の場合、たとえ側板とこの円形板材が接合されたまま出土したとしても、それが、蓋に用いられたものか、身または底に用いられたものか判別がつかない。これは、古代から現在の曲物製作技術においても、その製作上蓋も底も殆んど同じ技法を用いることからきていく。底板と側板とも固定する際に、木製の釘を用いる場合があるが、これを木釘と称する。底板と側板との接合方法は、遺跡出土の曲物に関しては、大別すると、底板が側板の内側に入り込んでしまう「クレゾコ」と、底板の径が側板の径よりも1cm前後長く、底板が側板よりはみ出している「カキゾコ」とがある。この「クレゾコ」と「カキゾコ（カキレゾコ）」という名称は、報告書にも散見できるが、この名称は曲物の大産地であった長野県木曾郡松川村で用いられてきたもので、ここでは他に指し示す適当な名称もないで、これらの名称を用いる。クレゾコの側板を底板に固定する方法は①のように側板の外側から木釘を打ち込んで固定する方法がとられている。更に、接合方法を分けると、カキゾコは次の4通りに細分できる。②のように、底板は外側に近い部分を一段落とし、そこに側板を当てがい、カバ紐で底板と側板を縫じ合わせてしまう。③は外側に近い部分を一段落とした底板に側板を当てがい、側板の外側から木釘を打ち込んで固定する方法である。④は平坦な底板に、側板を載せ、底板と側板をカバ紐で縫じ合わせてしまう固定方法である。⑤は段差のある底板に側板を当てがい、②のようにカバ紐で縫じ合わせ、更に、カバ紐を通すため底板に穿った孔にカバ紐を通した後、空隙を木栓で埋め込んでしまう方法である。これら5通りの他、現行の民具例でも見られるが、クレゾコで側板と底板を漆やニカワで固定してしまう方法がある。出土遺物の場合、残存状態が良好でないため、漆で固定したかニカワで固定したかどうかは明確には判別できないのが現状である。①の固定方法はクレゾコの出土遺物の曲物の大半において見られるものである。②の固定方法はカキゾコの曲物において一番一般的なものである。③は川合遺跡SR1101出土の曲物の底より了解できる固定方法である。④は古代遺跡出土の曲物の中に散見できる方法である。⑤は平城京宮より出土している曲物に見られる固定方法である。（この接合方法を『木器集成図録』では、木釘を底板から側板に向って打ったものとしているが、木釘ではなく、カバ紐を通す孔の空隙を埋めるために打たれた木栓であることが観察できる。）瀬名遺跡出土の曲物のうちクレゾコ、カキゾコか判別するものの総数は129点である。そのうち①は87点、②は42点、④は明確なのは1点、③、⑤は瀬名遺跡の曲物中には見当たらない。



第15図 曲物部位名模式図



第16図 曲物接合方法模式図

1は楕円形曲物の底板としたが、種々の問題点がある資料である。これは5区10層水田の杭列を伴った畦畔SK51005内に敷き込まれたような状態で出土した。長径74.3cm、短径53.5cmで平面形は楕円形を呈する。この楕円形の外枠より4.5cm程の内側に幅1cmほどの溝が彫られ巡らされている。この溝に曲物の側板がはまると思定した。この溝より外側は斜めに削り落とされている。内側は中央に向かって若干薄くなるように削り落とされて

楕円形曲物

いる。裏面は平坦面を丁寧に整形している。底板内側に隅丸長方形とほぼ円形の孔が2つ穿たれている。出土時にはこの底板の上から棒状の加工木製品が出土しており、調査担当者は、この棒状木製品が、この底板の孔にちょうどはまるこことを指摘した。巡っている溝に沿って内側と外側に1つづ対になった長方形の小孔が4組穿たれている。この底板はほぼ中央部で縦に半分に割れており、この割れのため、この長方形の小孔2組は部分的にしか残存していない。残存状態の良い2組の小孔には木片が餘のようにつまっている。側板を紐状のもので底板に固定し、その紐状のものを通した孔に木片をつめて孔を塞ぐと同時により強く固定したものと想定することができる。残念ながら側板を固定したと想定できる紐状のものは残存していない。また中央で2つに割れた部分を縫じたと考えられる補修孔が2つ1組観察できる。2つに割れた後も補修して用いられたことが想定できる。

以上、楕円形の大型の曲物の底板と想定したが、出土状況より古墳前期の資料であるため、古墳時代の問題も多かろう。県内でも古墳時代の曲物の例も散見できる。5世紀末の川合遺跡の円形

曲物。7世紀代の神明原・元宮川遺跡の楕円形曲物。7世紀代の伊場遺跡の円形曲物が知られる。曲物の淵源論として有名なのは木下忠氏と小林行雄氏の間での論争がある。木下忠氏が昭和37年『伊豆山木遺跡』の中で、山木遺跡出土の木製品の中に曲物の底板が6点あると報告し、その淵源が弥生時代まで遡る可能性を指摘したのに対し、小林氏は『統古代の技術』の中で、「日本における曲物の歴史は、弥生時代はおろか、古墳時代まで遡らせることも確証に乏しい。」と断言している。その後の考古資料の曲物の出方もほぼ小林氏の言の通り、奈良時代以降の遺跡からが大半である。これらの曲物は小型円形曲物、楕円形曲物に代表される所謂定型化した曲物である。近年、既述のように、古墳時代においても、曲物の技術を用いた容器が出現していることは確かである。その中においても、古墳時代前期に時期限定できる瀬名遺跡の楕円形曲物の底板の意義は大きい。

奈良時代の曲物実態を示す好例である。側板は上部が欠落しているため、深さは不明である。底の裏面中央に焼印のように焼いて記号を付している。3は深さも示せる残存状態良好なカキゾコの曲物である。5~42はカキゾコの曲物の底板である。復元最大径の大きい順に並べた。底板はいずれも残存状態が良くないが、2の曲物の底板より観察できることは、段差の断面が一度厚みが薄くなったあと、外側端部に向かって徐々に肥厚になることである。そして2、3、4、10、11、12、13、19、21、23、26、30、31、32、33、34、36、37、38、41、42、85、86、87、126は側板と底板との接合に用いたカバ紐が残っている。ただここで5、6、14、22、28の底板を見ると、カバ紐で緊縛したと思われるところに直径3.4mmの円形の小孔が穿たれている。これらは、接合方法⑤で示したように、カバ紐を通して後、空隙を木栓で埋め込んだためにできた円形の小孔と考えられる。

43、44はクレゾコの曲物のほぼ原形を留めている資料である。43は口径20.0cmとクレゾコの中では大型に属する。ただ深さは3.7cmと口径に比して浅い。また、側板の外側にもう一周りまわしの側板がはめられている。底板内面には炭化した有機物痕があるとともに、無数に近い刃物痕が観察できる。44は口径12.3cm、高さ4.5cmとクレゾコの曲物としてはケビキ線平均値に近い一般的な形状を示すものである。43、44は側板の内面にケビキ線という側板を曲げる際に入れたと思われる直線的な刃物痕が縦位に等間隔にひかれている。45~125はクレゾコの曲物の底板を復元最大径の大きいものから順番に並べたものである。相当数のものに、前述の底板と側板との接合方法①のような木釘の痕が観察できる。殆どの底板

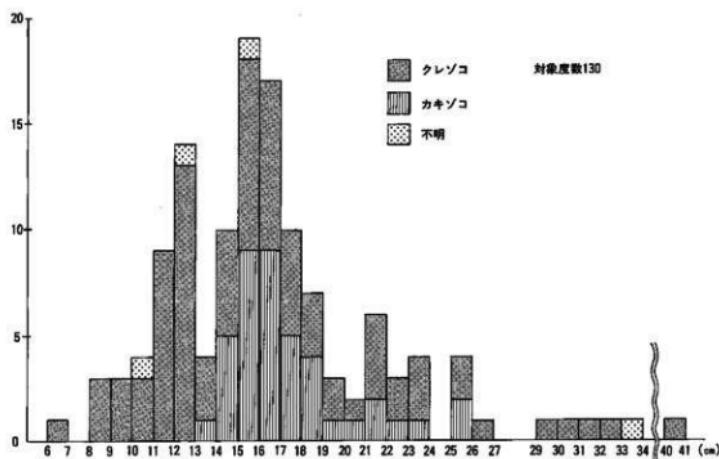
は正円に近いものと想定しているが、63、73、111は明らかに若干橢円になる。95は底板の中央に直径1cmの、124は直径7mmの円形孔が穿たれている。

第25表は、底板の径の分布表を作成してみた。11cm～19cmの間に大きな山があり込む。ピークは15～16cmである。民具の曲物の報告（中山 1992）によると、携帯用飯入れ（弁当）としての機能を持つ曲物が大半であることが了解できる。

この分布表を見て確認しておきたいことが二点ある。一点は29cm～34cmあたりに点数は少ないが、散在する曲物のことである。明らかに11cm～19cmの間に弁当入れを想定した曲物とは一線を画したものと想定される。当然弁当入れとは機能を異にするものであろう。もう一点はクレゾコとカキゾコの割合に注目したい。クレゾコは6cmと小型のものから大型すべてに亘ってあるのに対し、カキゾコは小型には見られず、14cm程度のものから見られる。6cm～14cmの小型のものは大半がクレゾコである。これは民具例において、大館（秋田県）の曲物の中に、今でも大型の飯櫃を作る際、カキゾコ状に作り、小型はクレゾコにするという製作技術上の使い分けがあることが想起せられる。カキゾコの方が側板との固定上、強固なものに仕上がるるのである。

底板径の分布表  
制作技術上の使い分け

第25表 濑名遺跡 曲物底径分布表



#### 4 挽物

瀬名遺跡は、48点の挽物が確認された。挽物とは「木材を削っておよその形をととのえ、挽物の定義 穀穂によって整形した容器」（奈文研 1985）のことである。穀穂整形が観察できる容器のみをここでは扱った。器形として、同心円形をしていること、同心円の連続した刃物痕が残っていることなどで挽物と判断した。また瀬名遺跡出土の挽物には、残念ながら明確に穀穂の爪痕と言えるものが観察できない。

瀬名遺跡の48点の挽物は、3つのグループに大別することができるであろう。無高台の

3形態に 挽と、器高が低く皿状をなすものと、皿ではあるが、小形になるものとの3つである。

大別 1～4はやや器高がある無高台の挽である。特に1と4は残存状態が良く、4は完形品である。1は轆轤による同心円の連続した刃痕が無数に観察できる。また、内面・外面の低面には直線的な刃物痕がある程度方向的にまとまって見える。外面の屈曲部では轆轤挽きした後、刀子等の工具で整形した痕がある。外面底部には、手持ちの刃物痕が一面に見え、轆轤の爪痕を削り消したと考えられる。内面全体に黒い付着物が見え、漆とも見えない。この付着物の分析を元興寺文化財研究所の北野信彦氏に依頼した。S P I R (フーリエ型赤外分光光度計)にかけた結果、漆、柿渋ではないと判明し、天然ものの漆様のもので、ツタ、ヌルデの類の樹液を塗っている可能性があるという。4は1より更に丁寧な整形をしている。特に外面底部は削り、入念に刃を無数に当てている。内面には部分的に斑に焼痕が残る。焼きながら削り、轆轤にかけたのか、整形後何か焼いたのかは不明である。1～4はすべてヒノキ材で、縦木取り(「木口を器の口縁部にあてる」木取り)の柾目材である。5は器高が3.0cmとややあり、復元最大径も1～4に比して大きく、20.2cmを測る。5は木取りが横木取りの板目である。明晰に板目とわかるのは、挽物ではこれのみである。6は大型の皿で、復元最大径が32.2cmを測る。スギ材である。

7～45は中型の皿である。39枚がほぼ規格化された形態のものである。最大径で14.8～中型の皿 22.9cm、高さは1.4～2.1cmの間にすべて収まるものである。やはりすべて、横木取りの柾目材である。底面は平坦で、立ち上り部は鈍角に直線的に立ち上る。立ち上り部長も1.5～2.5cmの範囲にはほぼすべて入ってしまう。立ち上り角度も45°を中心に、ほぼ近似の角度である。樹種はヒノキ材が92%を占め、14がスギ材、25と31がケヤキ材である。内面底部に轆轤の刃痕が同心円状に残るものが多い。8、10、11、13、16、19、23、25、27、29、30、32、34、35、36、37、40、43、45などは良く観察できる。内面底部に部分的に焼痕が残るものがある。8、14、29、30、41、43で焼痕が観察できる。また、前述の1の様に、内面に有機質の付着物があるものがある。24、34、40などがそれである。底部内面に無数の直線的に切り傷があるものがある。15、19、21、24、29、34、36、38、40、45などがそれである。底部外面に直線的な切り傷があるものは34、36、45などである。底部外面に記号のような印が焼いて記されているものがある。34は「公」、45は「之」とも読める。はたして、印を記したものであろうか。底部外面に調整の刃痕が残るものがある。34は特に丁寧に底部外面を単位の大きな刃痕で調整しているのが窺える。やはり、底面を平滑にすると同時に轆轤の爪痕を消し去るためと考えられる。

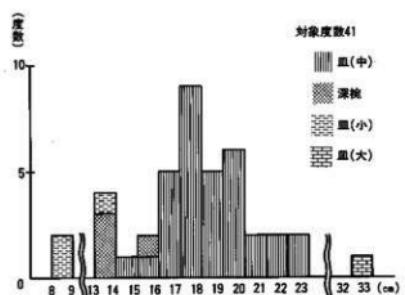
46、47、48は、小型の皿である。7～45とは、別形態をねらい作られたものと考えられる。小型の皿 47、48は復元底径がいずれも6.6cmと小さく、同形態である。

瀬名遺跡の挽物の復元最大径と器高と推定容積を出し、その分布表を作成してみた。第26表は復元最大径の分布表である。無高台の挽型、中型の皿、小型の皿と、それぞれ分布が分かれ、集中することは了解できる。特に中型の皿は16～20cmに集中し、相対分布を示す。高さについては、第27表であるが、1.0～1.8cmに、中型の皿は集中することがわかる。また、無高台の挽は2.5～3.8cmとやはり皿とは一線を画し、深いことがわかる。推定容積(推定容積は、内最大径と内面底径から、内最大径部面積と内面底面積を出し、それを足して2で除し、それに内高を乗じたものである。)の分布は第28表である。無高台の挽、中型の皿、小型の皿それぞれ、やはり集まることが了解できる。

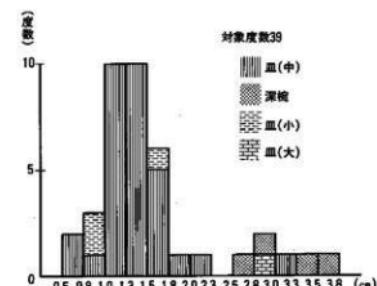
48点の挽物中、7区のSR70801内よりの出土は、26点にのぼる。SR70801がほぼ奈良時代に収まると考えると、この時期に先述の三種類すべてが同時に用いられていることが了解できよう。また5の特異な挽物を除くと、SR70801から出土した挽物は、すべてヒノキ材を用いている。他の出土地点を確認すると、9区のSR92501～93301が15点を数える。他の出土地点は1点づつ散在する。年代観としては奈良時代から平安時代にすべて収まり、8世紀、9世紀代のものが大半と考えてよいだろうか。

次に瀬名遺跡の挽物の製作技法に関して、次の4点を確認しておきたい。第1は挽物の轆轤の爪痕底部外面に屢々観察される轆轤の爪痕が、殆ど観察できないということである。これは静岡市池ヶ谷遺跡出土の挽物には、明瞭に観察できるのと対照的である。瀬名遺跡隣接の川合遺跡出土の挽物にも轆轤の爪痕が観察できない。爪痕を削り去ることは最終調整を丁寧に行っていることを考えることができる。瀬名遺跡出土の曲物、挽物の中には、記号を焼記号の焼書したもののが見られ、ましてや「公」と読めるものもあることを考え合わせると、川合遺跡、瀬名遺跡の挽物は役所的な施設で用いられたものとも推測しうるものである。

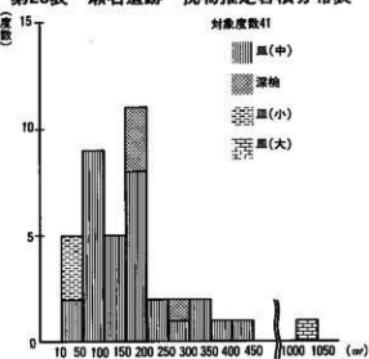
第26表 瀬名遺跡 挽物復元最大径分布表



第27表 瀬名遺跡 挽物高さ分布表



第28表 瀬名遺跡 挽物推定容積分布表



横木取りの  
柾目材  
ヒノキ材の  
多用

第2点は先述のように、挽物は明瞭に高台なしの椀、中型の皿、小型の皿の3種にグループ分けすることが可能であるという点である。それぞれのグループ内の個体は規格化された近似の形状を示す。特に数の多い中型の皿は、特筆に値するであろう。第3点目は木取り方法が5の1点を除いてすべて、横木取りの柾目材であることである。橋本鉄男氏、後藤護氏の報告で、縱木取りのものや、横木取りでも板目材のものが、民具例、木地師の技術の中では報告されているが、瀬名遺跡の挽物はミカン割り材を荒取りし、挽いているという技術が窺えよう。歴史時代の針葉樹材を用いる容器の木取りの基本は、この横木取りの板目材であると思われる。4点目は挽物の樹種選定がヒノキに集中していることである。ケヤキ2点、スギ4点以外はヒノキ材である。特に無高台の椀、中型の皿と定型化した挽物は、大半がヒノキである。

## 5 漆器

漆椀が12点出土している。固化できたのは8点である。漆椀の詳細な分析は（財）元興寺文化財研究所の北野信彦氏に依頼し、その成果は自然科学的分析としてⅣ章の第2節に掲載した。塗膜構造の分析等の詳細は、そちらを参照していただきたい。

中近世  
の容器

12点の出土地点、層位であるが、10、11を除くと中近世の層よりの出土である。瀬名遺跡は造構編参照のとおり中近世の層位は明確でなく時期も限定できないのが大半である。が、いずれにせよ、10、11以外は古代に遡るものではないことは確認できる。10、11に関しても、9区のS R92502～93303という大河道が何度も切り合って河川の堆積も分離できない状態の土層からの出土である。中近世の資料とも当然考えられる。出土状態から判断して、瀬名遺跡の他の主な容器、剖物、曲物、挽物の大半が古代の資料であることを对比され、漆椀は中近世の容器であると位置づけられよう。第Ⅳ章の北野氏のレポートも、塗膜分析等をふまえ、庶民の日常食膳具としている点と結びつくであろう。

横木取りの  
板目の増加

木取りは漆の塗布により肉眼で識別できないため北野氏の観察を参照した。すべて横木取りではあるが、柾目取りが6点、板目取りが6点と丁度半々であった。既述のように瀬名遺跡出土の挽物がすべて横木取りの柾目であるのに対し、板目は、相当増加しているのが了解できる。木地師のアラガタ取りの方法で、ムキドリと呼ばれる板目取り（須藤1982）が、瀬名遺跡では後出の技術であることが確認できる。

高台を確認

高台は残存状態が良いものにはすべて観察できるため、すべて高台が削り出されたものと想定することができる。明瞭な文様は1、2、4で観察できる。黒漆の上に赤い顔料を用い絵を描いている。1は内面に楕円・山を、外側に花弁文様を描いている。2は内外面とも、桜の花弁文様を描いている。4は家紋であろう。5は記号状の文様を描いている。樹種は多種であり、シオジ4点、ケヤキ4点、ムクロジ1点、ハルニレ1点、ハリギリ1点、カツラ1点である。

## 第7節 食事具

### 1 箸

瀬名遺跡では箸状の木製品が25点確認できる。ここで箸状木製品として拾い挙げたものは、一方または両端を尖らせるように加工してある棒状の木製品である。先端を尖らせていない、無造作な棒状木製品は対象外とした。

出土層位、遺構は多様であるが、1、8、12は9区のSR92501から出土している。9は7区のSR70801からの出土で、これらは、古代に属するとも言える資料である。他は中・近世の層位からの出土であり、古代にまで遡らないであろう。

完形品は1、3、4、6、9の5本である。1は一方の先端は尖らせているが、一方は長軸に対し、直角に切断している。3、4、6は長さは少しずつ違うが、形態的には両先端を尖らせているところが共通している。9は細く、断面がほぼ円形をし、一方の先端のみ尖らせている。一色八郎氏の分類（一色 1990）に従えば、1、9は片口箸であり、3、4、6は両口箸である。他は片方のみの端部であるため判別がつかない。

流路跡より、多数の箸状木製品が出土した報告がある。石川県穴水町遺跡、静岡県静岡市大谷川遺跡、静岡県三島市御殿川流域遺跡群等である。いずれも、時期は短い幅に限定できないものの、中近世の流路内出土である。いずれの報告書も、その出土状態が多数のものが一度に出、大谷川遺跡のものは大半が半折されているなど祭祀的な色彩が強いため、祭祀具の可能性を指摘している。本遺跡の箸状木製品は集中には出土せず、出土状況に「祭祀的」と読みとることはできない。日常的な「箸」としての機能を想定したい。

### 2 火鑽臼、火鑽杵

火鑽臼が5点、火鑽杵が1点出土している。

火鑽臼は1、2、5が棒状のもので、3、4が板状のものである。1はウス部に刻み目が観察できないが、キネが当たったと思われる溝に焼痕があるため火鑽臼とした。逆に2は刻み目があるにもかかわらず、キネの当たったと思われるウス状の窪みが明瞭でない。3は板状材を用い、4箇所は明瞭にウス状の窪みも刻み目を観察できる。4も板材であるが、幅狭である。3箇所でウス部の窪みも刻み目を明瞭であるが、1箇所、刻み目のない焼痕のあるウス状窪みがある。5は棒状材の2箇所に明瞭に火を鑽った痕が残り、全体的に焼痕が観察できる。6は火鑽杵であり、ウスに当たる先端部は良好に残っている。断面が円形で先端のウスに当たる部分は摩滅し、焼痕が残る。

4が9区のSR92502～93303出土であり、2、6が8区の15層出土である。この3点は古代に属する（特に8区15層は、古墳時代中期まで遡る可能性がある。）ものである。時期は中近世のものと考えられる。

## 第8節 土木材

瀬名遺跡出土の木製品のうち土木材として取り上げるのは、杭と樋状木製品である。杭は瀬名遺跡においては、畔の両側に補強の意味で打ち込んだものと、流路の岸に護岸の意味で打ち込んだものとに大別できる。樋状木製品は畔に直交する形で出土しており、田越しの導水施設と考えるものである。いずれも、瀬名遺跡が水田造構中心の遺跡という性格も考え合わせ、水田経営に伴う土木作業における施設用いられた木製品という位置づけが可能であろう。

### 1 杭

瀬名遺跡では現地調査の段階より「杭」の定義として、形態からのそれではなく、出土状態において縦に地中に刺さった状態で出土したものとしてきた。故に形態がいくら先端がエンビツ状に削り込まれていても、出土状態が旧流路内に転がって出たものについては

**4 形態に  
大 別** 杭としてはいない。杭と確認された加工木製品は遺跡全体で11,409点にのぼる。杭の個別の性格で便宜上整理しやすく大別すると次の4つになる。ひとつは針葉樹材（スギ材と限定してよからう。）を板目に刺ぎ取った幅広の板材である。先端部は両側から直線的に尖らせていて、一般には「矢板」とも称されるものである。ふたつ目はやはり針葉樹材を割材として用いているもので、これは一番一般的に杭材として使われるものである。この割材も本来は幅広の板目材を縦に割取ったものであるが、そこまで木取り過程を明確にできる資料は少ないためここでは針葉樹材の割材としておく。三番目は心持ち材、つまり細い丸太材である。これらは大半がスギを中心とした針葉樹材である。最後は広葉樹材の割材である。これはミカン割にした角材を加工して作られている。樹種はタイミニタチバナ、ツブライジ、スダジイ、カスミザクラ等の雜木を用いている。

**畦畔に伴う  
杭** 瀬名遺跡では古墳時代初頭に廃絶された水田を中心に杭列を伴う畦畔造構が多数確認されている。ここではこれらの畦畔を補強したと考えられる杭に焦点を当て、典型的な特徴を示す杭列を抽出して、杭列の造構の断面図を示しながら一点一点の杭の実測図を明示したい。当遺跡ではこの畦畔に伴うほか、流路の護岸に打たれる杭列が検出されている。これら護岸の杭に関しては造構編Iでその断面図等も記載されてるので、その程度についておいて、ここでは専ら畦畔に伴う杭に注目したい。

1区から10区の8調査区で14箇所の杭列を抽出した。抽出した杭列を更に報告書に掲載できるスペースを考慮に入れて、縦列する杭のあるものからあるもの間にある杭をすべて実測し示した。杭材の4つの形態を示したが、そのいずれも最低1箇所は抽出した。だが、2番目の針葉樹材の割材は全体の傾向としても杭列の大半を占めるようにここでもやはり多くを占めることになった。1箇所ずつ造構=水田との関係もはっきりさせながら、その杭列の構造およびその性格を記述しながら確認していくたい。

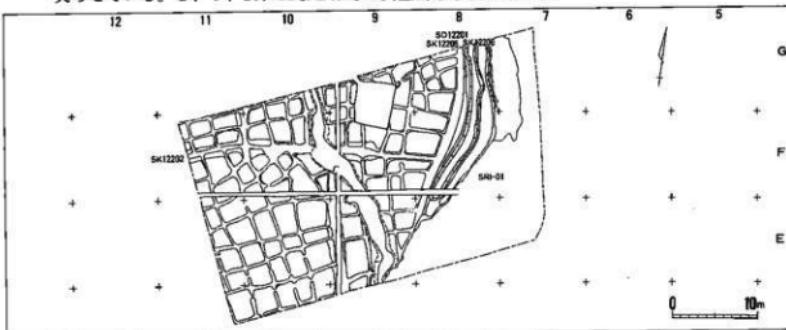
#### 1) 1区22層 SK12202

1区の22層上面では、水田跡が調査区のはば全域で検出された。上層の21層は植物遺体の有機質を多く含む黒褐色粘土または黒泥になる所謂泥炭層である。21層は瀬名遺跡において、普遍的に存在する古墳時代中期の泥炭層に当たる。つまり、22層上面は古墳時代前期に廃絶された水田跡である。水田は大畦畔がほぼ東西方向に1本、南北方向に3本あり、

その内に小区画の水田が畦畔によって区切られている。小区画の水田はすべてで105枚を数える。

S K 12202は東西方向の大畦畔である。東西に約30mの長さで検出されているが、調査 大 畦 畔 区中央部で上端幅1.1mとかなり幅広く畦畔が盛土されている。特に、中央部では、三角形状に張り出し部を設け、畦畔が南に広がっている部分もある。杭は東端から西端まで打ち込まれているが、特に中央部の畦畔南側沿いに密に打たれている。中央部は1.5m程の杭が密に打ち込まれており、横板も長さ3~4m、幅も10~15cmのものを伴っており、それが東西方向に行くに従い、杭の長さも短くなり打ち方も疎になってくる。また、この列では、何度か時間差をもって同じ列、同じ位置に杭は打たれており、レベル差をもって杭が検出されている。今回取り上げた列は、F 9 グリッド東部より西部の間である。この列で注目したいのは、1、3、4、6、7、8、10、11、12、16、19、21、22、24、26、27の32本中、16本が広葉樹材であることである。樹種は、概ね、観察表に示したが、タイミンタチバナ、ツブライジ等で、これらの広葉樹の割り材である。他はスギ材の割り材である。杭列の断面図を見るとこれら1、3、4、6、7、8、10、11、12、16、19、21、22、24の一定レベルの列と、その一段上に2、5、9、13、14、15、17、18と統くレベルの列とが識別できる。この上段が下段を打った後に打ち込まれたものと考えることができる。つまり、ある時期、広葉樹材を用いた杭列を打ち込んだ後、若干の土層堆積があり、そこに今度はスギの割り材の杭を打ち直していることが了解できる。

杭の形状は広葉樹材は心持ち材又は半割り材をそのまま用いているものが多く、先端もあまり意識的に尖らせていない。22のように、丸太材を先端部未加工のまま打ち込んでいるものもある。それに比して、スギの杭材は若干板目の幅広材を用い、先端部を両側から尖らせている。2、9、20、31などはその典型的な形状であろう。



第17図 1区22層水田平面図

## 2) 1区22層 SK12205

同じく1区の22層水田で検出された大畦畔に打たれた杭列である。この畦畔SK12205は南北に走る大畦であるが、このSK12205西側は小区画の水田が一面に広がる。このSK12205の東をやはり南北に溝SK12201が通り、この溝の東岸を畦SK12206が走る。更にその東は、大河川の流路跡SKR1-01がある。つまり、大河川の流路の堤防状に作られた2本の畦のうち、水田寄りの畦が当該のSK12205である。

調査報告によると、この畦畔の盛土は東西の大畦畔のSK12202に比して乾燥して縮まつていたという。杭の打たれ方も、SK12202より1本、1本の間隔があり、横板もまばらにしか組まれていなかった。今回抽出した部分は、SK12202との交差点より2m程北から部分である。この間の杭列はすべて、スギの割り材を加工している。SK12205を通じてスギの割り材である。スギの割り材はスギの幅広の板目材を縦に裁断して角材にしたものを用いている。下端部はV字形に両側から直線的に切り落としている。上端は大半が尖ったような形状をしているが、実際の物を観察すると、風化のため摩滅し、尖った形になっていることがわかる。上端は明瞭に削り込んで尖らせたと判断できる加工痕は観察できない。下端部の加工では、4、9、22、31などは先端が平らになったままで、V字形に削り込んでいない。17は下端部の加工は有頭状に端部を削り出しており、抜けない工夫の返しとも考えられる。23はV字形の下端部近くに方形の穿孔がある。建築材等を転用したと考えられるもので、杭に必要な孔とは思えない。

### 3) 2・3区12層 SK21201

12層の下層の13層は砂層であり、14層の水田を覆った洪水のためのものと考えられている。12層上面で大区画の杭列を伴った水田跡が検出されており、多数の木製農具もこの面で出土している。この12層を厚い黒泥層の11層が覆っている。11層からは古墳時代中期の土器が出土し、12層からは古墳時代初頭の古式土師器が出、14層からは登呂式土器が出土する。この2・3区は瀬名遺跡全調査区の中で、弥生時代中期後半から古墳時代中期まで、短い時期幅で、各面が捉えられる唯一の調査区である。この12層は特に下層が砂層、上層が泥炭層と特殊な自然堆積に挟まれた純粋な出方をした層である。

12層上面の西半は広く、10層の段階からの流路や洪水流によって下刻されている。中央部より東にかけて大畦畔によって区画された水田跡が検出され、畦畔にはいずれも杭や横板が伴う。全調査区で東西方向に2本、南北方向に3本の大畦畔が確認されている。この盛土内にSK21201は調査区北端付近を東西に走る畦畔で、14層水田の畦畔をほぼ踏襲した位置にある。畦畔の盛土内には、前述の多数の木製農具の他、東端付近で、準構造船の船材が埋め込まれていた。

杭が密に抽出した杭列の範囲は、このSK21201の検出された30mほどの内の中央部である。密打たれるに杭が打ち込まれており、横木も間断なく組み入れられており、握り拳大の敷石も埋められていた。杭はこの範囲内において、すべてスギの割り材である。形状は規格性がなく、規格性のない杭千差万別の感がある。6、13、33は幅広の板材を用いており、特に6、33は表裏面とも刃物痕が一面に観察でき、建築材の壁板材等を2次加工し、転用したものと考えられる。9、12、14、18、27、30、32、37等は前の板状の杭程幅広ではないが、10cm前後の幅がある板状材である。これらの下端はV字形に両側から直線的に切り落としたものが大半である。2、7、8、12、15、16、20、21、26、31、34等は横位断面が正方形に近い形状をし、割り出した棒状材である。下端部はエンビツ状に多方向から尖らせるため削りだしている。4、23、36、38、39等は横位断面が、扇形またはそれがつぶれた形状をしている。これはスギ材をミカン割りにしたことにより、得られた棒状材である。9、11、18、24、25、28、32、37は板目材を加工している。下端部は板材は両側からV字形に切り落とし、棒材はエンビツ状に尖らせているのが大半である。17、16、35、39は先端部を尖らせた形跡がない。

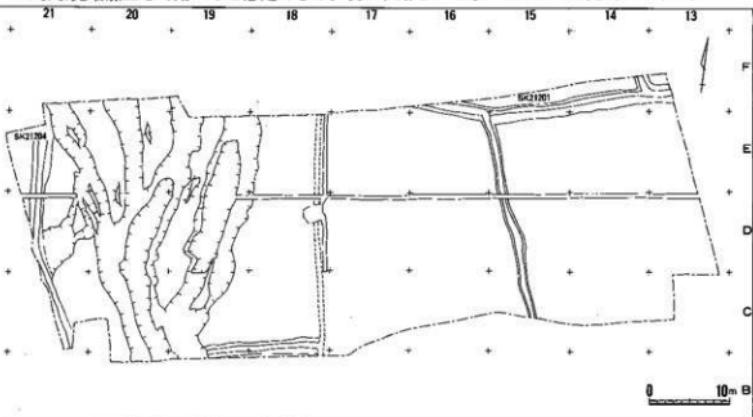
### 4) 2・3区12層 SK21204

SK21204は12層上面で検出された南北方向の大畦畔である。12層上面西側では、10層

より切り込んでいる河川の浸食痕跡が認められ、更にその西側で、調査区西端で検出されたのがこの大畦畔である。SK21201と同様に、畦畔盛土内より多数の杭や木製品が埋め込まれていた。杭列は2列確認でき、畦道を確保できるように、畦畔の幅に沿って打ち込まれている。西側の列が東側の列より密に打ち込まれている。このSK21204の杭はSK21201の杭よりも全体的に長大なものが多いことが指摘できる。

大 畦 畔  
長 大 な 杭  
多 い

ここで抽出した範囲は、西側の杭列で、調査区内のやや北側に位置し、一番杭の密度が高い部分を選んだ。この抽出した範囲わずか3mの間に杭が32本打ち込まれていた。SK21204の杭はすべてスギ材の割り材である。長大な杭が多く、12は130.3cm、16は144.0cm、20は137.9cm、22は130.6cmと長い。100cmを越える杭は、32本中、12本あり、SK21201の杭の平均長が57.5cmであったのに比して、SK21204の杭の平均長は96.3cmであった。下端はすべて尖らせているが、1、18、13、30、32等はV字形に両側から直線的に切り落としており、他の大半はエンビツ状とまでいかなないが、多方面より削り込み尖らせている。上端はやはり、風化のためか摩滅し、原形は不明である。木取りに関しては、1、3、6、11、15、17、18、19、20、26、27は明瞭に板目材である。他はミカン割りした割り材をそのまま先端加工して用いると想定できる。杭に転用されたものはここでは見当たらない。



第18図 2・3区12層水田平面図

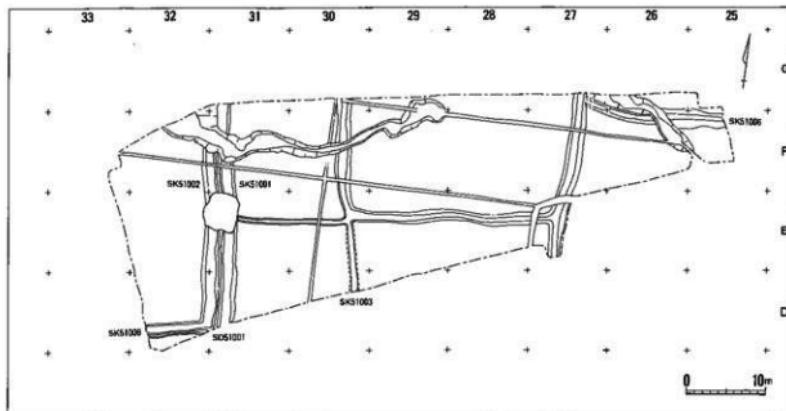
##### 5) 5区10層 SK51003

5区の10層上面では古墳時代初頭に廃絶された水田跡が確認されている。10層水田は砂疊層である9層によって覆われており、下層も砂疊層で、砂疊層に挟まれた良好な出方をした水田である。時期幅も弥生時代末～古墳時代前期と較って考えられる。水田跡は調査区全域にわたり、東西方向に3本、南北方向に4本の大区画畦畔が確認された。調査区西側で南北に通る畦畔SK51002とSK51001との間には、水路と考えられる溝SD51001を検出している。10層水田の畦畔は杭列を伴う通りと伴わない通りと明確に別れる。南北方向の畦畔には杭列が大半伴い、畦畔の幅も1m程と頑強な構造である。東西方向の畦畔は調査区東端のSK51006と西端のSK51008を除くと杭列を伴わず、畦幅も狭く小規模な構造である。

ここで取り上げたSK51003は、調査区ほぼ中央を南北に通る大区画畦畔であり、杭列 大区画畦畔

杭間は東側と西側の2列が確認されている。調査時の盛土の位置と2列の杭列が若干ずれるため、盛土の区画を有した水田時期と杭列が打ち込まれた時期がずれる可能性もある。抽出した範囲はこのSK51003の東側の杭列北側2/3程度のところである。18.5mの範囲に杭は22本とやや疎といおうか、杭間が若干ある方であろう。この間、幅20~30cmの大形の板材を横木としてわたしている。

規格性のある杭列 22本の杭はすべてスギの割り材を用いており、長さ、形状ともかなりの規格性があり、同時に打ち込まれたものと考えられる。長さの平均は66.8cmで、この値を中心として、最短でも45.3cm、最長で83.3cmであり、他の杭列に比してバラつきは少ない。下端加工はやや尖らせる加工をしているものの、最先端部まで尖らせらず粗雑な削りであり、上端は打ち込みやすくであろうか、頭を平坦に削り出している。杭のすべてはこの下端、上端加工である。4、6、19、21、22は長軸の四面のうち、1面に手斧痕と考えられる調整痕が縱位に並んでいる。柱材等の建築材を割り二次転用したものと考えられる。どの杭も断面がほぼ長方形をしており、板目状である。以上のように、このSK51003に打たれた杭は、同一の技法で作られたことが了解でき、規格性のある杭列として取り上げた。



第19図 5区10層水田平面図

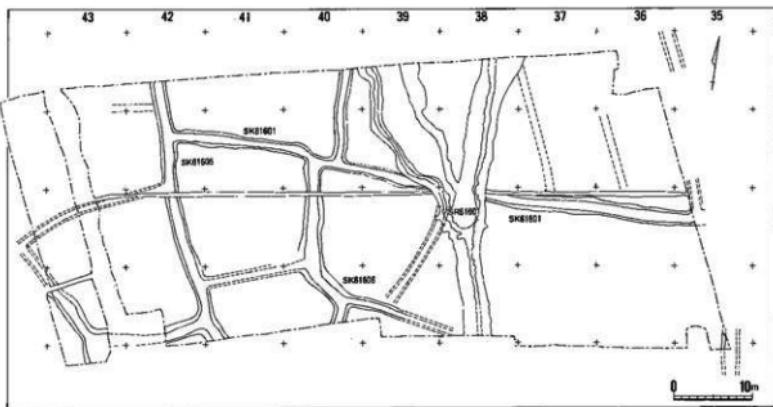
#### 6) 6区16層 SK61606

16層は15層の砂疊層と17層の砂疊層とに挟まれた粘土層で、調査者によると、a（暗赤褐色粘土）、b（暗青灰色粘土）、c（明茶褐色粘土）、d（明茶褐色粘土雜質混じり）の4層に分けることができるという。プラントオパールはaではカウントがなく、b、cで水田跡の数値を示す。b、cが耕作土として水田経営が行われていたとする。16層上面では、20本の畦畔を検出し、19面の水田面を確認した。畦畔は十字形に交差せず、T字形またはY字形に交差する。また、畦畔は盛土には大差がないものの、盛土内の構造によつて4つのタイプに分けている。Aは杭列により補強されたもの、Bは矢板により補強されたもの、Cは杭に支えられた横板により補強されたもの、Dは盛土のみの畦畔という分類である。これら4タイプがどのような条件の故作り分けられたのか報告者が言及していないので不明である。4タイプが法則性を持っているのか了解できない。

S K 61601は調査区中央の南端で、東西に走る畦畔である。ここで抽出した範囲の箇所は、この畦畔の南側列中央部で規格化された矢板が非常に丁寧に打ち込まれたところである。6 mの範囲の中に33枚の矢板が間断なく打ち込まれていた。板目取りの幅広の板材である。幅は21の最大幅のもので35.1を測るが、20cm程の幅のものが多い。下端はV字形に両側から直線的に切り落としており、上端は風化摩滅のため不明であるが、ほぼ主軸に対し直角方向に平らに斬ち落としている。1、3、4、12、16、20、22、24、25、26、27、28、29、30、31、32、33、34、37、41、42はその典型的な形状を示す。これらはスギの巨木から板目材を剥ぎ取って形取った矢板である。21、23、25、27は表裏面とも手斧痕が残る。21、23は下端部が弧を描いており、本来は丁寧な調整を施した建築材の転用であると想像できる。25、27は下端部が平坦にしてあり、転用前のものか不明である。この4点を除いて他は調整痕が観察できず、転用材であるのか不明である。2、7、8、9、10、11、13、14、15は細い棒材を矢板列の間に棒材を中に打ちこんだものである。間隙を埋めるために打ちこまれたものであろうか。典型的な矢板として示したこれらの形状は、瀬名遺跡の矢板を示す良好な資料である。

規格化された矢板  
下端部を尖らせる

間に棒材を打ち込む



第20図 6区16層水田平面図

#### 7) 6区16層 SK61601

S K 61601は16層水田のほぼ中央を東西に走る杭列を伴う畦畔である。約70m東西に検出され、中央部をS R 61601によって切られているが、6本の南北畦畔がT字状にこの畦畔に交差すると想定された。西端は南北畦畔のS K 61605にT字状に交差する。このS K 61601は畦の南北両側に杭列を伴うが、その杭列の構造が6)で挙げたA、B、Cのタイプすべてが部分的に錯綜する（詳しくは遺構図Iを参照のこと）。このS K 61601内に矢板を伴う部分が2ヶ所分かれで確認されている。ここで抽出した範囲は、そのうちの中央より北側列の矢板列である。2mの範囲の中に14枚の矢板とそれを補強するのか間隙を埋めるためか、棒状の角材杭が11本打ち込まれている。1、2、4、5、7、8、9、10、12、18、19、21、22、25は矢板で、幅10cm～25cm程度のスギの板目材である。これらの矢板は下端部が尖らず板材の直線的な木口のまま打ち込んでいる。6)で確認したV字型の下端部と比較すると顕著な違いである。上端は風化摩滅のため明確には判らないが、ほぼ平坦な頭である。

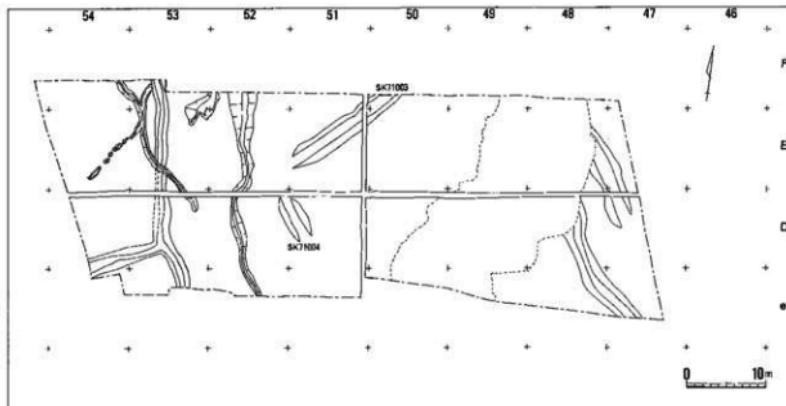
と観察できる。つまり板目の幅広い短冊状の板材をそのまま打ち込んでいるのが了解できる。その間の3、6、11、13、14、15、16、17、20、23、24の11本の杭は下端部を尖らせていらない角材である。長さは15が39.0cmと短く、20は110.8cmと長いように不規則である。

S K 61601 S K 61606の矢板とS K 61601の矢板とは下端の形状が顕著に違っているからも、間に角材を打込む造作等類似しており、矢板を打つ構造を示すことができる良好な資料である。

#### 8) 7区10層 SK 71003

10層はその下層では方形周溝基盤が確認された12層があり、礫混じりの黒褐色粘土の11層がそれを覆っている。また10層は古墳時代中期の泥炭層である9層によって被覆されている。10層上面では、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての水田が検出されている。畦畔6本を確認しているが、調査者によると水田区画を東・中央・西の3グループに大別できるという。このうち中央部の畦畔は更に3つのパターンがあるという。北辺排水溝から約8mまでの部分では横板の両側に約10cm程の間隔で杭が打たれており、その他に建築材を転用した敷板が用いられている。その西に続く3mほどは横板の使用ではなく、杭と敷板及び円錐と敷石として補強している。更にその西、次の屈曲点までは若干の杭と敷板がみられるものの、主体は礫を敷き込んでいる。これは基盤層の高低に影響されているらしく、北東へいくに従い低くなり地盤も軟弱になるため、第1のパターンのように杭に横板に敷板という構造になるのである。

このSK 71003は中央部の3つパターンのうち最初の畦の構造をもつものである。南西から北東に向かうSK 71003の中央部で北側と南側の2列の杭列の南側に当たる。杭、横木、敷板、そして若干の握り拳大の礫を埋め込んだ構造になっている。2mの範囲内に杭は21本打たれていた。すべてスギの割り材である。杭の形状は多種多様である。4、5、11、13、16、17、19は70～80cm前後の長さで、横断面が正方形で下端部をエンビツ状に削り出している。1、2、12、20は30～40cmの短い角材の杭でやはり先端を尖らせているものである。6は短いが矢板状に幅広である。10は特異な形状をしているが、下部が一度くびれさせてから先端でV字形に尖らしている。13～21は形状的に類似はしているものの、



第21図 7区10層水田平面図

このSK71003の杭は全体的に規格性のない種々雑多な形状を示している。

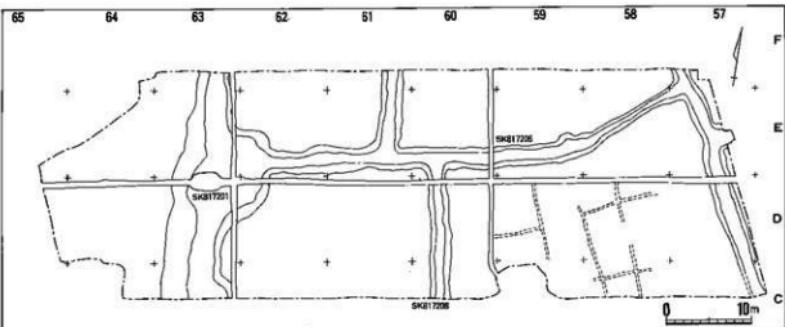
規格性の  
ない杭列

9) 8区17a層 SK817a08

17a層上面では、弥生時代末～古墳時代初頭の大区画の水田跡が検出されている。17b層というその直下の層は、a層が灰茶褐色の粘土であるのに比して若干暗くなり、暗茶褐色の粘土であった。17a層を剥ぎ去ったところで、中央を東西に通る大畦畔が若干北にずれる畦畔が検出され、大畦畔の作り変えがa層とb層との間で行われたことが窺えた。17層下の18層上面で弥生時代中期後半の方形周溝墓が確認されている。17a層は15層・16層の古墳時代中期の泥炭層によって被覆されていた。

17a層上面で検出された大区画の畦畔は、南北方向に4本、東西方向に2本確認されている。西端の南北方向の大畦畔は下層の方形周溝墓の盛り土を利用した畦畔で幅広である。この畦畔はほとんど杭列を伴わないが、他の畦畔は概ね杭列と横木、敷板を伴う構造である。中央東西方向のSK817a05、817a01などはスギの割り材を密に畦両側に打ち込み横木をわたし、畦畔内に板材、枝材その他の木製品を多数敷き込む構造になっている。

当該のSK817a08は南北に走る畦であるが、畦の東側のみに杭列がある。また、このSK817a08に区画される東と西の水田は西の図面のレベルが高く、東の図面は低い。杭列が東側のみとこのレベル差は関係あるのだろうか。このSK817a08の中央部7.2mほどを抽出した。この間杭は22本あり、その内12本が広葉樹、すべてスダジイの割り材であった。他はスギの割り材である。3、4、5、7、8、9、10、11、12、13、14、15と広葉樹材が並ぶ。広葉樹材の6はスギの板材である。これら12本の広葉樹材は概ねミカン割りした板目材で、若干幅広くとり下端をV字形に尖らせている。1は一般的な矢板で、板目材の下端をV字形に尖らせたものである。16、17、18、19、20、21、22は板目材の矢板であるが、下端は尖らせておらず、板の木口の直線的な部分をそのままにして打ち込んでいる。この矢板の2種は既述してある6区16層SK61606とSK61601との顕著な差異に直結するものである。



第22図 8区17a層水田平面図

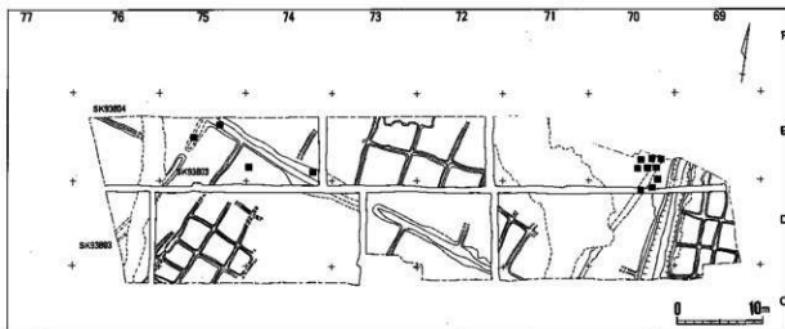
10) 9区38層 SK93803

38層上面では弥生時代末～古墳時代初頭の小区画を伴った水田跡が検出された。37層上面でもほぼ同時期と、38層水田区画を概ね踏襲した水田跡が検出されている。36層が古墳時代中期の泥炭層である。38層の下は調査区西側では39・40層という粘土層が堆積しているが、中央より東では方形周溝墓を検出した41層がくる。

38層上面では大区画の畦畔の中に小さな畦で区画された小区画水田が広がっている。大畦畔は南北方向に2本、東西方向に2本確認されている。この大畦畔内を小畦畔が縦横に走っている。南北畦畔は特に杭列が密に打たれており、横木、敷板も埋め込まれている。

**大区画畦畔** S K93803は調査区西側に位置する南北方向の大区画畦畔である。盛土の両側に東西2列の杭列があり、東列と西列では杭の打たれ方が違う。西列は杭の長さが揃っておらず、南半分では細い角材の杭であり、北半分では天板状の幅広の杭を打っている。それに比べて東列はスギの角材の杭を等間隔に密に打ち込んでいる。

ここではこのS K93803の東列南端の2m範囲を取り上げる。この範囲内に23本の杭が打たれていた。すべてスギの割り材である。長さは50~65cm程度の範囲でまとまり、横位断面形は正方形、長方形がほとんどである。下端部はV字形かエンビツ形に丁寧に尖らせている。ここで注目すべきは、5、6、11、18、19は先端部に横位に溝を削り込み、杭が抜けないように返しを設けていることである。すべての杭に返しがあるのではなく、この範囲22本中5本である。この傾向はこの東列にあてはまるものである。この東列の杭は極めて規格性があり、殆ど同一の技法によって作製されたものである。



第23図 9区38層水田平面図

#### 11) 9区22層 杭列3

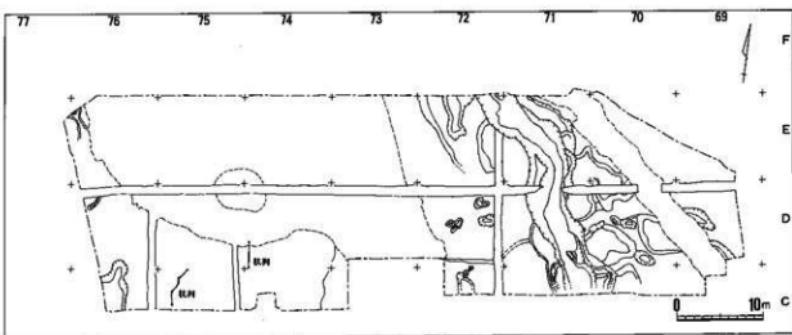
22層は青灰色粘土層で腐植混じる下層と砂質の上層とに分かれ、遺構は下層の上面で確認されている。この下層上面ではかなりの面積が上層の流路により下刻されており、部分的に畦畔の高まりと南北方向の3列杭列を検出した。この3列の杭列は東から第1列、第2列、第3列と命名されているが、この3列とも調査区においては畦畔に伴う杭列か、他の性格の杭列か判別つかなかった。遺構編の執筆者は下層の25層の護岸杭列と方向及び技法が似ることにより、護岸の杭列であったかもしれない点を指摘している。いずれにせよ遺構がらみでないことにより、この杭列の性格付けは明確に言えない。この杭列の時期は11世紀以降~中世初めとされている。

ここで取り上げる杭列はまず一番西側の第3列の杭列である。検出された5mほどの杭列は中央部で「く」の字状に屈曲している。この範囲で杭は23本打たれており、これらの杭は広葉樹の心持ち材と針葉樹の割り材とに大別できる。1、4、6、7、9、11、12、14、15、16、17、18、20、22は広葉樹の心持ち材の枝をはらい、下端部をエンビツ状に尖らせたものである。長さは17のように137.4cmもあるものから、6のように49.1cmのものまで長短ある。

3、5、8、10、12、19、21、23はスギの割り材であり、下端部をV字形に尖らせたものである。広葉樹の心持ち材を数本ごと間に入れて打たれているようである。明確な規則性はない。心持ち材の広葉樹材を用いた畦畔に伴う杭列は、瀬名遺跡では明確には確認されていないため、この杭列を畦畔に伴うものとすることには背首しがたい。

#### 12) 9区22層 杭列1

9区22層下層上面では3列の杭列が確認されているが、前述の杭列3が西端の列で、この杭列1が東端の列である。この杭列1はほぼ南北に一直線に並んでいる。3.1mの範囲にはほぼ等間隔に心持ちの針葉樹材の杭が打ち込まれている。心持ちの針葉樹の枝を払ったものを用い、下端部をエンピツ状に尖らせている。長さは4が155.8cmと長く、他は100cm前後の長さである。心持ちの針葉樹材の杭を同一技法で杭に打ち込んでいる様子が了解できる。



第24図 9区22層水田平面図

#### 13) 10区33層 SK103302

10区では30層が古墳時代中期の泥炭層であり、その下の泥炭質の粘土層から2面水田が検出されている。この2面の水田は古墳時代初頭～古墳時代中期に帰属すると考えられる。その下に砂礫層があり、この砂礫層に覆われているのがグライ化した粘土層33層である。この33層上面より多数の杭列を伴った水田跡が確認されている。33層水田は古墳時代初頭に廃絶されたものである。この杭列を伴う水田は、区画を踏襲時から連続して3面確認されている。36層水田、35層水田、33層水田である。35層水田に打ち込まれた杭列は、33層上面にも少し頭が出ていた。36、35に引き続き33層でも再び大がかりな杭列の補強を行い、36層から踏襲してきた大区画をそのまま利用している。そして、この区画内に小さな区画を設けている。

このSK103302は調査区の南東にあり、南西から北東方向に伸びている杭を伴う畦畔である。この畦畔には東側と西側の2列の杭列があるが、杭の疎密、長さが異なる。西側の杭列は約2m間隔で70～80cmの長さの杭が打たれているのに比して、東側の列の杭はほとんど間断なく密に打たれ、杭の長さは100cm以上のものが多い。

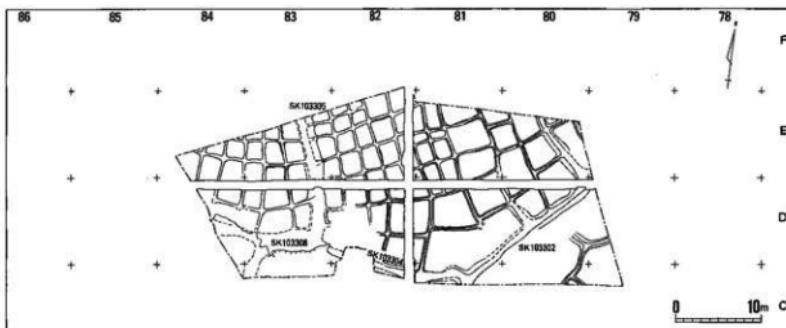
ここで抽出した杭列は、このSK103302の中央部で東側の杭列である。範囲わずか1.4mの間に17本の杭が打たれていた。すべてスギの割り材で幅は10cm前後、長さは100cmを越える長いものが多い。下端部の加工はV字形に尖らせているものが大半である。2、4、

36層杭列の  
利 用

8は縦軸の1面に手斧痕が連続して観察できる。

#### 14) 10区33層 SK 103305

SK 103305とは前述のSK 103302と同じ33層水田の大畦畔である。調査区やや西寄りで南北に直線的に伸びる杭列を伴う畦畔である。やはり畦畔の盛土の東端と西端に杭が打たれている。東側・西側とも、SK 103304、06とa交差点から離れたところでは、針葉樹材の杭と広葉樹材の杭が一定間隔で組み合わされていた。東側の杭列では、針葉樹材3本から5本に1本の割合で広葉樹材が、西側の杭列では逆に広葉樹材5本に1本の割合で針葉樹材が打ち込まれていた。そんな傾向のある杭列であるが、西側杭列の南端ではスギ材の規格化された杭列が検出されている。この部分2.4mを抽出した。この範囲内に17本の幅広の杭が打たれていた。すべてスギの板目材であり、幅は20cm~30cmあり矢板とも言えるであろう。下端部はV字状に両側から直線的に切り落としている。3は表面に手斧痕が一面に観察できる。1、4、6、8、9、11、15は下端部が鍛状に切り落とされている。何か他の材を杭に転用したものだろうか。



第25図 10区33層 水田平面図

#### 2 棚状木製品

ここで言う「棚状木製品」とは、形態的には断面U字またはコの字状をし、「棚」のような形状を一本で割り出した木製品を言うが、機能的には田越しの水を誘導する施設を念頭に置く。後述するが、2・3区12層で検出された1、2、3、4、5の組み合わされた施設、8区の17b層で検出された6、7の棚状木製品は、いずれも幅1m程の大畦畔を直交する方向で畦畔盛土内より検出されている。畦畔越しに導水する際に畦畔に直交し、溝を通すため棚状の木製品をわたしその上に蓋をのせる。このような施設が弥生時代後期～古墳時代前期にかけての大畦畔にはいたるところに設けられていたことが想定できる。1～7は明らかに畦畔に直交し畦畔盛土内より出土した棚状木製品である。8、9、10は畦畔内よりほぼ完形で出土しているが、畦畔を横切るように埋設された出土状況は示しておらず、導入用と言いかねない。11～16は破片であるが、棚状を示す木製品の一部であり出土地点も畦畔内である。17～28は棚状木製品の完形または一部であると判断するが、出土地点が畦畔内と確認できないもので、この棚状木製品においては二級資料扱いしたい。

1、2、3、4、5は5点を組み合わせることにより導水施設になったものである。出

土状況図より復元した組み合わせを第172図に示した。横位断面し字形をする長さ116.5cmの底板5に2と4を縫いで側板にし、更にその上に1と3を蓋としてのせた構造である。1、2、3、4いずれも表裏面に調整刃物痕が残り、形も樋状木製品を意識的に作りだしたものでは思われない形状をしていることより、建築材の転用と考える。5は片側が破損したものであり、本来は断面コの字状の樋状をなしていたと想定する。上下端の加工はこの樋状木製品に多く見られる。両端の側板部分を斜めに切り落としている。土盛の畦畔に形状を合わせるための加工と考える。この構造物は2・3区の12層水田のSK21206から検出された。SK21206は東西方向の杭列を伴う大畦畔で、調査区の南端で確認された。この畦畔の中央付近で東西方向に直交する南北方向にこの構造物が組まれ、畦畔の盛土で埋設されていた。北の水田に導水された水を更に南へ導水する施設である。

SK 21206

6は図の下端が欠落しているが、横位断面コの字をした樋状の木製品である。上端はやはり側板が先端部を斜めに切り落としている。これは8区の17b層水田のSK817b05により出土している。SK817b05は東西方向に走る大畦畔であり、6は直交する南北方向に置かれ、大畦畔を横切るようにして埋設されていた。SK817b05で区画された北の水田と南の水田は、レベル差が10cm近くあり、北の水田から南の水田へ導水するための施設と考えられる。この施設は17b層水田を解体時に検出されているが、17a層水田は17b層水田の畦を踏襲しているため、17a層水田に伴う施設なのか17b層水田に伴うものか判然としない。

SK 817b05

7は図の上端が欠落している。側板部も摩滅して残存状態は良好でない。下端部は側板部を斜めに切り落としているのが観察できる。残存部長で126.4cmある。7は6同様、8区17b層水田のSK817b05から出土しているが、東西方向のSK817b05にT字形に直交するSK17b08との交差点で出土している。このT字形に交差する結節点で北側の水田から南の水田へ導水するために設けられたと考えられる。以上の3施設が遺構との関係の上からも導水施設としての位置付けが可能な資料である。

8は完形品であり、横位断面がコの字をなす。長さは83.4cmを測る。上下端は垂直に切り落としている。1区の22層水田のSK12202より出土しているが、上層の流路に擾乱されている部分での出土で、畦にも直交はしない。9は下端がスプーン状に広がっている。全長126.4cmある。2・3区12層のSK21201とSK21203との交差点より出土している。畦畔と同じ方向に敷かれたような出土状況である。10は上端が欠落しているが横位断面がコの字状を示し下部の残りは良い。6区16層水田のSK61609より出土している。畦畔には直交しない。11~16は片側板及び底の一部が欠落している破片である。いずれも弥生時代後期から古墳時代前期にかけての杭列水田の畦畔内より出土している樋状木製品の部分である。17~28はやはり樋状木製品の部分と思われるが、導水施設に用いられたかは不明のものである。このうち20、21、22、27は杭として出土しており、転用されたものと想定する。17~25は畦畔内より出土しているが、26、27、28に関しては畦畔から若干ずれた地点からの出土である。

以上の樋状木製品はすべて弥生時代後期~古墳時代前期の水田遺構より出土している。それも3例を除けば、畦畔にからみ埋設された状態で出土している。製作技術においても、スギ材を板目どりにして中を削り抜き、横位断面コの字状にして作成している。同系譜の技術を用いた水利用施設である。本来は1~7の3施設が示す構造を持っていたものと想定する。この時期の導水施設の構造を把握する上で重要な資料である。

期

<引用・参考文献>

- 小林行雄 1964年 「『古代の技術』」 塙書房  
 木下 忠 1966年 「農具」「日本の考古学Ⅶ 耕生時代」 河山書房  
 木下 忠 1969年 「おおあし－代踏み田下駄の起源と機能」『民具論集』Ⅰ 奈友社  
 木下 忠 1985年 「日本農耕技術の起源と伝承」 雄山閣  
 潮田鉄雄 1967年 「田下駄の変遷」『物質文化』10号  
 鶴田比呂志 1967年 「農具銅器化の二つの期別」『考古学研究』13-3  
 鶴田比呂志 1989年 「日本農耕社会の成立過程」 岩波書店  
 関根真隆 1969年 「奈良朝食生活の研究」 吉川弘文館  
 黒崎 直 1970年 「木製農耕具の性質と発生社会の動向」『考古学研究』16-3  
 黒崎 直 1976年 「古墳時代の農耕具－ナスピ形着柄鏡を中心として－」『研究論集』Ⅲ 奈良国立文化財研究所学報第28号  
 黒崎 直 1976年 「古墳時代の農耕具の変遷」『物質文化』10号  
 黒崎 直 1985年 「農具「くわとすき」」『考古学研究』5 道具と技術Ⅰ 雄山閣  
 桐木 修 1976年 「木製農耕具の変遷」『考古学研究』22-4  
 岩井忠 1978年 「農用の用途」『大阪市立博物館研究紀要』第10号  
 岩井忠 1979年 「ろくろ」 法政大学出版部  
 金子祐之 1980年 「古代の木製機械」『研究論集』Ⅳ 奈良国立文化財研究所  
 金子祐之 1988年 「律令祭祀遺物集成」  
 金子祐之 1989年 「平城宮と奈良」『国立歴史民俗博物館研究報告書』7集共同研究「古代の祭祀と信仰」本篇  
 町田 韶 1980年 「古墳時代農耕具の問題点」『平城宮発掘調査報告X』 奈良国立文化財研究所学報第39号  
 金岡 開 1982年 「神を招く鳥」『考古学論考』 小林行雄博士古記念論文集  
 和田 韶 1982年 「祝符木簡の系譜」『木簡研究』  
 猪俣 鹿 1982年 「幕らしの中の木簡」 ぎよせい  
 康保明 廉 1985年 「下駄」『飴文化の研究』第5巻 雄山閣  
 田辺 喬 1985年 「民具の分類」『民具研究ハンドブック』 雄山閣  
 松井和幸 1985年 「鐵鍊」『飴文化の研究』第5巻 雄山閣  
 渡辺 誠 1985年 「型式論」『岩波講座日本考古学』1 岩波書店  
 高橋幸夫 1985年 「ヨコヅナの考古・民具学的研究」『考古学文獻』70-3  
 山田昌久 1986年 「火の道具」 柏齊房  
 久保春一郎 1986年 「くわとすきの変遷」『日高遺跡』 群馬県教育委員会 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 佐藤達雄 1987年 「日本古代の船舶工具－舟形挽造品資料集成－」『九州考古学』61号  
 朝上 昇 1989年 「人形木簡」『大谷川IV (遺物・考察編)』 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
 朝上 昇 1990年 「木製農耕具の変遷とその変遷」『奈良昭和63年度』(財) 愛知県埋蔵文化財センター  
 平野吾郎 1990年 「発生時代中期における木製農耕具の器種構成について」『岡山遺跡』 (財) 愛知県埋蔵文化財センター  
 一色八郎 1990年 「箸の文化史」 飴茶の水書房  
 上原真人 1991年 「農具の変遷－種と歴－」『季刊 考古学』第37号  
 田舎茂伸 1991年 「農具の変遷－竹籠と脱穀の道具－」『季刊 考古学』37号  
 風塚武司 1992年 「古代小山地区の木工生産について」『伊場遺跡・遺物編Ⅰ』  
 中山正典 1992年 「簡刈り縫についての民具学的検討」『民具研究』99号  
 中山正典 1993年 「作物の製作方法と形態」『食生活と民具』 雄山閣  
 秋山治三 1993年 「『大足』の再検討」『考古学研究』  
 佐藤達雄 1993年 「刀形木製品－その形態と変遷－」『考古論集』(瀬見 浩先生追記論文集) (財) 愛知県埋蔵文化財調査研究所  
 宮本常一 1993年 「民具論集」 離友社  
 アチックミューゼアム 1993年 「民具農耕調查要目」  
 文化財保護委員会 1993年 「民俗資料収集の手びき」  
 浜松市教育委員会 1978年 「伊場遺跡・遺物編Ⅰ」  
 浜松市教育委員会 1978年 「伊場遺跡・遺物編Ⅱ」  
 (財) 愛知県教育サービスセンター 1984年 「勝川」  
 (財) 大阪文化財センター 1974年 「池上遺跡 木器編」第1分冊 1976年 「池上遺跡 木器編」第2分冊  
 (財) 大阪文化財センター 1983年 「友井東(その2)」  
 (財) 大阪文化財センター 1983年 「近畿自動車道大阪阪和東部整理事業基本マニュアル－遺物整理から報告書作成まで－」  
 奈良国立文化財研究所 1980年 「奈良城發掘調査報告書X 古墳時代I」  
 奈良国立文化財研究所 1985年 「大友遺跡集成圖說 近畿古代篇」  
 (財) 東大阪市文化協会 1987年 「菟虎川の木質遺物－第7次発掘調査報告書第4号－」  
 三重県教育委員会 1980年 「奈良遺跡－構造と遺物－」  
 瓜生堂遺跡調査委員会 1973年 「瓜生堂遺跡」  
 日本考古学協会 1954年 「豊吕 木編」 東京堂出版  
 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986年 「新緑遺跡I 弘生・古墳時代 大講編」  
 清水市教育委員会 1985年 「下野遺跡」  
 爱知県教育委員会 1982年 「朝日遺跡」  
 道賀県教育委員会 1984年 「隈部遺跡調査報告書V」  
 豊川市教育委員会 1988年 「山西遺跡」  
 沼津市 1958年 「沼津市誌」 下巻  
 会津若松市教育委員会 1990年 「甲田条リ制跡発掘調査報告書」  
 農政調査委員会 1977年 「日本の繩・錦・笙」  
 静岡県教育委員会 1983年 「有東遺跡I」  
 六水町教育委員会 1987年 「静岡県 熊登における中世村落の発達調査」  
 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1987年 「獣名遺跡－昭和61年度発掘調査概報－」  
 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988年 「大谷川II 遺物編」  
 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988年 「獣名遺跡－昭和62年度発掘調査概報－」  
 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989年 「大谷川II 遺物・考察編」  
 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989年 「低湿地遺跡の調査－発掘調査方法の改善研究－」  
 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989年 「獣名遺跡－昭和65年度発掘調査概報－」  
 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991年 「獣名遺跡－平成2年度発掘調査概報」  
 (財) 静岡県教育委員会 1991年 「阿久佐遺跡－平成2年度発掘調査概報」  
 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991年 「長崎遺跡II (遺構編) - 平成2年度発掘調査概報」  
 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991年 「長崎遺跡II (遺構編)」  
 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993年 「御殿川流域遺跡群Ⅰ」

## 第IV章 石 器

### 第1節 打製石斧

瀬名遺跡から出土した打製石斧は総計25点である。これは瀬名遺跡出土の石器总数の56%を占める。遺構からの出土品ではなく、いざれも包含層からの出土である。完形品は5点(20%)のみで、部分的に欠損したものや基部途中で折損したものがほとんどである。以下、時期的に限定される6区23a層とその他の出土品に分けて記述していきたい。

#### 1 6区23a層出土品

丸子式土器出土の单一時期に収まる層である。合計9点の打製石斧を出土している。1、2は、ともに基部で半切していたものを接合した資料である。1は最大厚1.3cmの薄手のもので、基部末端部分にわずかな原縁面が残る。2は撥形を呈するものである。原縁面は一切認められない。刃部は使用による摩耗が著しく、左右両側縁及び裏面には装着による激しい潰れが確認される。また左側縁で顕著なように装着部分は内湾気味に加工され、基部に厚みをもたせるなど、装着を意識した作りがなされている。3~7は基部折損のものである。3は欠損部分が外に膨らむ点から、撥形と考えられるものである。背面基部末端に原縁面を残すもので、2と同様に装着部分を内湾気味にし、刃部へ向かい薄く仕上げている。4も撥形と考えられ、腹面に原縁面を残すものである。装着部分は内湾させており、潰れが明瞭である。5は原縁面が残されず、左右の側縁に装着痕が認められる。形態は撥形であろう。6も原縁面が残されていない。左右側縁には装着痕が明瞭だが、右側縁はやや内湾気味に形成されている。7は背面に原縁面を残すものであるが、泥による汚染から変色している。8は基部中央部分が残ったものである。撥形を呈するものと考えられるもので、側縁に装着痕が認められる。厚さ1.75cmとやや薄手である。9は刃部のみの残存である。刃部腹面に大きな剥離が認められるが、刃縁の摩滅は顕著ではない。

#### 2 その他の出土品

10は10区41層出土のもので、刃部を欠損しているが、瀬名遺跡で最大のものである。刃部を打ち欠いているが、短冊型の範疇に含まれるであろう。背面全体に原縁面を残しており、一次剥片をそのまま用い、側縁調整により形成されている。側縁には装着痕が認められ、やや内湾気味に仕上げられている。11も刃部の一部を欠いている。背面に原縁面を残す一次剥片を用いている。側縁は装着を意識して、内湾気味に仕上げており、摩滅が明瞭である。12~16は基部欠損品である。12は背面に原縁面が残されている。欠損部分がやや広がる点から、撥形と判断されよう。両側縁には装着による潰れが認められる。13は全体的に摩耗が進んでおり、装着痕跡等は不明瞭である。形態は内側がややくびれる撥形であろう。14~16はともに、硬質中粒砂岩製のものである。14は側縁の一部が潰れており、装着痕と思われる。15は基部端部に原縁面が残されている。厚さ1.5cmの薄いもので、側縁は内湾気味に加工されている。16は背面に原縁面を残している。側縁の調整はかなり粗いが、装着部分は緩やかに内湾させている。17、18は基部欠損により、刃部が残存したものである。材質はともに、硬質中粒砂岩である。17は装着部分を内湾させた撥形である。刃部先端を欠いているが、背面及び側縁には使用痕と考えられる摩滅や装着による潰れが認められる。

硬質中粒  
砂 岩

められる。18は短冊型と考えられるもので、腹面の刃部先端に原縁面を残しており、使用による摩滅が認められる。

19~23は細身の短冊型である。完形品は2・3区21層より出土の19のみである。背面に原縁面を残し、装着を容易にするために、大きく剝離調整を行っている。刃部の背・腹両面には使用による摩滅が顕著である。20は9区42層出土のもので、黒色粘板岩製である。刃部は先端を欠いているが、欠損後も使用されており、摩滅が認められる。21~23は基部の途中から欠損したもので、いずれも2・3区からの出土である。背面に原縁面を残し、側縁調整を行っている。

**輝緑凝灰岩** 24は唯一の輝緑凝灰岩製で、原縁面を残していない。装着部分を内湾させる撥形であろう。25は長さ11.3cmの小型の撥形である。背面に原縁面を残し、側縁調整を行い、内湾気味に仕上げている。右側縁に装着痕跡が認められる。

## 第2節 砥石

瀬名遺跡で出土した砥石は総数15点である。基本的には台石(作業台)としても用いられるような大型のものは認められず、携帯・運搬が容易なものに限定される。素材と形態と分類の関係から、以下のとおり分類した。①粗面岩及び凝灰岩製の柱状ないしは板状を呈していたと考えられるもの、②やや偏平な砂岩の原縁を用いたもの、③軽石製のものである。①のものは使用による欠損や摩耗により、原型をとどめていないものがほとんどであり、法量・形態の復元は困難である。石材は粗面岩4点、粗面岩質凝灰岩2点、やや粗面岩質石材凝灰岩1点、凝灰岩質粘板岩1点である。26は唯一の完形品で、方柱状をなすものである。6面を使用しており、全ての面で使用痕が顕著である。特に表・裏の使い込みは著しく、中央部がくびれている。また砥面端部には荒い刃痕が認められる。27は8区6層出土の粗面岩製の柱状を呈すものだが、端部を欠いている。砥面は5面全ての面に使用痕が確認できる。表面は大きな凹凸があり、2ヶ所に分けて用いられている。また、裏面には「X」の刻線が認められる。28、29は2・3区出土の粗面岩製のもので、欠損した端部の破片である。砥面はやや荒れており、使用痕跡は不明瞭であった。28は柱状をなし、4面を砥面として使用している。側面の使い込みが激しく、中央部へ向かってくびれている。29も柱状を呈す4面使用のもので、28と同様側面の使い込みが顕著である。泥による汚染で、変色している。30は6区3層出土の粗面岩製の柱状を呈すと考えられるものである。砥面は劣化が激しく使用痕跡は確認できなかった。4面全てをよく使い込んでおり、薄くなつた部分で欠損している。31は8区10a層出土の破片で、端部に近い部分と考えられる。4面が使用されており、表・裏両面の使い込みにより、中央部分に向かいくびれている。32は2・3区4層出土の薄い板状を呈すものである。両面の使い込みにより欠損した破片であるが、特に表面の使用が著しく、擦痕も明瞭である。33は厚さ0.6mmの薄い板状のもので、中央部付近で折れたものである。3面使用と考えられ、表面は鏡面状に研磨されており、細かい擦痕が明瞭である。裏面は若干の擦痕が認められるが、使用期間は非常に短く、使い込まれる前に廃棄されたと考えられよう。

②に属するものは4点である。いずれも2ないし3面を砥面として使用したものだが、特に側面の使用は顕著で、緩やかにくびれるものもある。34は6区11層から出土したもので、伴出した土器から10世紀代に比定される。表・裏の2面と側面1面を用いており、

側面は使用により緩やかにくびれている。35は6区の表採品である。表面と側面の2面使用で、表面は2ヶ所の部分的使用である。36は9区の自然流路S R92503より出土したものである。底面は側面の2面のみであり、使用による緩やかにくびれをもつ。重量や形態から、側面を床に置いて使用したと想定できよう。37は表採資料である。やや偏平な、中粒ないし細粒砂岩を用いたものである。表・裏両面及び側面1面の3面を使用している。表面は1ヶ所、裏面は2ヶ所の使用痕が認められるが、両面とも側面に近い部分のみを用いている。側面には3ヶ所に浅いくぼみが認められたが、底面はその内の1ヶ所である。また上下の端部には敲打による摩滅及び潰れが認められ、叩き石として転用されている。

③は瀬名遺跡出土の軽石16点の中から、刃痕が認められるものの1点、孔を穿ったもの1点、研面と刃痕が認められるもの1点の計3点を取り上げた。38は摩滅・欠損による不明部分があるが、12ヶ所の刃痕を確認した。幅約0.7~1.5mm、最も深いもので3mm、断面はV字形を基本としている。39は穿孔を2ヶ所もつもので、直径は0.7および0.8cm、深さは最も深い部分で1.1cm、両孔とも垂直にあけられており、穿孔底部には小さな突起が認められる。竹管状のものを研磨するために回転させて使用したと考えられよう。40は欠損しているが、小判型を呈すと思われるものである。表・裏の2面を底面として用いているが、細かい擦痕が顕著に認められた。

### 第3節 その他の石製品

ここでは出土点数の少ない石製品及び何らかの形で人為的に手の加えられた石材について記述を行うが、石材については図化せず、報告にとどめたい。

#### 1 四石 (41)

6区23a層から出土した軽石製の四石だが、縱方向に半切しており、接合・復元できたものである。くぼみは楕円形を呈し、最も深い部分で1.6cmである。全体に風化しており、使用痕跡も残っていないため、用途については不明である。

#### 2 敲打器 (42)

ハンマーとして用いたやや凝灰質の粗粒砂岩製のものである。7区13層で検出された杭列内より出土しており、杭を打ち込むためのものと考えたい。くぼみはややすく鉢状の断面を呈している。くぼみ底部は長楕円に近い方形をなし、長軸3.9cm、短軸1.8cmを計測する。激しい敲打により、潰れや摩滅が認められる。手中に収まるような転石が利用されており、背面には原縁面が残されているが、指の当たる部分には原縁面が削り取られており、手擦れ（指擦れ）が部分的に認められる。

#### 3 石鎚 (43)

8区22層遺構面から出土した黒曜石製の打製石鎚である。凹基有茎式のもので平面五角形を呈している。基部の内済はやや強く逆刺が明瞭である。側辺は剥離調整が施され、内済気味に整形されている。最大長2.28cm、幅1.77cm、厚さ0.45cm、重さ1.2gを計測する石鎚が、弥生時代中期後葉以降に大型化する石鎚と対照的である。用いられている黒曜石は透明度が高く良質なものである。

#### 4 磨製石斧 (44)

乳 棒 状 縄文後期から弥生中期にかけての包含層である8区21層より出土した乳棒状磨製石斧の  
磨 製 石 斧 刃部破片である。刃面の一部に擦痕が認められるが、刃線は使用によりほとんど潰れてい  
橄 榄 岩 る。石材は橄欖岩であるが、石斧の用材としての橄欖岩は硬度・耐久性といった点から適  
当とは言えないようである。  
(1)

#### 5 石匙 (45)

8区出土のものだが、出土層位・地点とも調査記録に残されていない。安倍川水系の暗  
凝灰質粘板 岩 灰色を呈した凝灰質粘板岩を用いている。つまみが刃部の反対側に作られる横型のもので  
刃部は弧を描いている。単剝離打面の貝殻状剝片を使用し、剝片末端の湾曲部分を刃部と  
して丁寧に剝離調整を施している。

#### 6 黒曜石

瀬名遺跡からは23点の黒曜石が出土している。割り出しの行程でできたもので、重さ2  
1.6gの石核を除くと、6g以下の細かい剝片である。時期について、若干考えてみたい。  
7区10層、8区 17b層、9区38層のものは流れ込みであり、遺構とは時期的に伴うもの  
ではない。また、7区及び9区の方形周溝墓から出土したものは、下層の基盤層に混入し  
ていたものが、掘削土とともに墳丘に盛られたものと考えられよう。同様に、周溝出土の  
ものも墳丘からの流入であり、方形周溝墓に直接関連するとは考えにくい。これらの点や、  
8区21層出土例から、弥生時代中期後半以前という時期を一応示しておきたい。

#### 7 軽石

加工や使用的痕跡が認められなかった13点の軽石を報告する。法量はさまざまであり、  
出土時期も大きな幅があるため、一定の傾向を認ることはできない。軽石は砾石や浮子  
として利用されるが、遺跡周辺では採集できないため、海岸に打ち上げられたものを運び  
込んだものと考えられる。  
(3)

#### 8 剥片

ここで言う剥片は、割り出しや剝離調整によってできたもので、使用痕跡の認められなか  
ったものとするが、剝離加工を行う過程で廃棄された転石1点も含む。石材の内訳は砂質  
粘板岩5点、黒色粘板岩2点、黒色頁岩3点、輝緑凝灰岩3点である。基本的に先述した  
打製石斧の石材と類似しており、出土地点・層位もほぼ共通していることや、これらの石  
材を用いた他の石器が認められなかったことから、打製石斧の製作と関連し、廃材になっ  
たものと考えることができよう。

<註>

(1) 静岡大学伊藤透玄教授の御教示による。

(2) 7区12層の砂礫層、9区41層砂質粘土層である。前者は洪水堆積であり、後者はS R94202からの供給による堆積である。

(3) 原産地を特定することはできないが、駿河湾の海底火山の活動による噴出物が海岸に打ち上げられた可能性を想定できる。

# 第V章 その他の出土遺物

## 第1節 金属製品

瀬名遺跡では、金属製品が錢貨を除くと11点出土している。これらの金属製品は、腐蝕が相当進んでいるものが多く、その素材すらも肉眼では不明なもの多かった。そこで東京国立文化財研究所の青木繁夫先生のところに持ち込み、御指導を受けた。素材の分析、刃先の構造を分析目的として、5点につき住友金属鉱山中央研究所に分析を依頼した。鎌の刃1点、袋状鉄斧1点、平板型鐵2点、鋼1点の計5点である。このうち平板型鐵と鉗に関しては肉眼では素材が不明であったため、素材または含有金属の判明を主眼において分析してもらった。また鎌と袋状鉄斧は素材は当初より鉄であることは了解できたが、刃先の構造、特に鋼、または焼き入れの構造の把握を主眼において分析してもらった。その分析結果は、第VII章第3節に掲載しているのでそちらを参照していただきたい。

### 1 鉄製品

1は鎌の刃である。9区の20層水田より出土している。曲刃であり、基部が折り返して鎌の刃である。刃弦長10.0cm、刃全幅3.1cmである。9区22層S R 93301では柄付きの鎌が出土しているが、それに比して刃の湾曲の度合いが大きい。(木製農具の鎌の項参照のこと。) 2は刀子であり9区の13層水田(中近世の水田)からの出土である。握部は真鍮製である。刃部は腐蝕による欠落が大きい。3、4は馬鍔の刃を想定する。いずれも中近世の資料と馬鍔の刃を考えられる。3は全長が22.2cm、4が23.1cmを測る。近世農書の『百姓伝記』では、「まんぐわの事、年中に一度つゝ用いる道具にてあれとも大切な道具なり。…(中略)…子の長さ八寸九寸にして土あたりの方をせまく、見込の方をはひろに少しきをくれに角を立て、うたすへし。」としている。3、4は概ね8寸あり長さとしても適しいであろう。3は扁平な造りであるが頭はやや厚く造っており、頭を叩いたと思われるつぶれを観察できる。刃先は扁平のまま尖るが、正面図右側がやや摩耗が大きい。使用のための摩耗であろう。4はやはり横位断面が長方形でやや扁平であるか、刃先は断面が正方形に尖っている。先端は針状に尖る。頭はやはり叩かれたようにつぶれている。5は袋状鉄斧である。2・袋状鉄斧3区の9層泥炭層からの出土で5Cと時期を限定できる資料である。腐蝕が甚だしく、断面観察したところ厚いところでは6mm程の腐蝕層があった。刃も腐蝕または摩滅しているが曲刃であったと想定される。

6、7、8、9は鉄鎌である。6、7は後藤守一氏の分類(後藤 1939)に従えば「有茎平根式」の「主頭斧箭式」とされるもので、また杉山秀宏氏の分類(杉山 1988)によれば「主頭鎌群B-I類」(Bとは主頭斧箭鎌のことであり、Iとは無闇を示す。)となる。6、7ともに10区の31層水田より出土している。古墳時代前期の年代観を付与してよいであろうか疑問は残る。6は主頭をなしているが、摩滅のためか両刃端が丸くなっている。茎部は長く、下端部は欠損しており、まだ長かったものと観察できる。7は6より頭部がより鈍角の主頭である。闇はないものと思われるが、闇の部分に溝が設けられている。闇とも言えないため無闇としておく。8は後藤氏の分類では「有茎平板式第二」(第二とは

腸抉式のこと)の「正三角形腸抉式」か「柳葉腸抉式」に該当しうるが、この「正三角形」と「柳葉」の中間的形状である。杉山氏の分類に従えば「腸抉三角形鐵群」の「B形式」(小形のもの)のうちで「角闘」を有するものである。7区の古墳時代中期の泥炭層9層の上面で確認されたものである。刃部が半円形を呈し、所謂、三角形を呈さない。腸抉も直線的に入るが深くはない。闘は段差になっており「角闘」である。茎は長く下端は欠損しており、もっと長かったことが想定される。9は刃先が欠落しているが雁股形の鉄鐵である。闘は台形をしている。茎部下端も欠損しており、実際にはもっと長かった。2・3区の4層より出土している。中近世の資料と思われる。

**銅 鐵** 10は小形の銅鐵である。発光分光分析、定量分析の結果によると銅が主成分であるが、スズと鉛との合金であることがわかった。外径が6.2cmと小さく、銅としてはやや小さくて疑問点も残る。7区の古墳時代中期の泥炭層中より出土した。

## 2 錢貨

**渡 来 錢** 10枚の錢貨が出土している。10の寛永通宝を除けば、すべて渡来錢である。9区 S R 92001出土の4枚を除くと、出土位置が散在し特別の出方をしていない。S R 92001は9区20層上面で検出された小流路である。この川底より子供の頭骨、多数の梅または桃の種子、斎串、土器片とともに「皇宋通宝」(宋 初鋳造年1039~)、「熙寧元宝」(宋 初鋳造年1068~)、「正隆元宝」(金 初鋳造年1156~)、「永樂通宝」(明 初鋳造年1408~)かの4枚が出土している。人骨、桃、斎串、錢というセットの祭祀が考えられる。

### <引用・参考文献>

- 杉山秀宏 1988年 「古墳時代の鐵鐵について」『櫛原考古学研究所論集』第八 吉川弘文館  
後藤守一 1939年 「上古時代鐵鐵の年代研究」『人類学雑誌』54-4  
飯塚武司 1991年 「鐵鐵－その時代性と地域性－」『研究論集』X 東京都埋蔵文化財センター

# 第VI章 考 察

## 第1節 濑名遺跡出土の弥生式土器

- 1 はじめに
- 2 出土土器の概要
- 3 遺構の変遷
- 4 時間的位置づけについて
- 5 まとめ

### 1 はじめに

一遺跡内での遺構さらには遺跡群相互の時間を軸とした序列や共存関係を考えるための基礎作業の一つとして土器編年研究がある。駿河地域における弥生式土器の編年は南関東地方の成果を基軸とした杉原莊介氏による編年作業(杉原 1949)とその成果を受けた小野真一氏による一連の研究(小野 1958・1969・1979)が長らく基礎となってきた。しかし、資料の激増により、小野氏の編年成果と矛盾をきたす事実が多く現れきている。特に後期弥生式土器を中心にそれらを克服する研究成果が提出され、新しい地域編年の樹立が求められており(加納 1981)、新たな編年案が提出されている(石川 1983・中嶋 1988)。しかし、それらは資料の蓄積が進んだ東駿河を中心としたものであり、西駿河においては良好な資料が少ないためかほとんど編年研究が進展していないのが現状である。

瀬名遺跡出土の弥生式土器は絶対量が少ないとや遺構出土の数が限られ一括性に欠けること、さらに土器組成に欠落部分が多いことなど編年資料として用いるには適してはいない。ここでは、一遺跡内における遺構の変遷を把握するための基礎作業として出土した弥生式土器について検討を加えることを目的とする。

### 2 出土土器の概要

瀬名遺跡は静岡平野の北東部に位置し、長尾川の堆積によって形成された扇状地形上に立地する弥生時代から近世にかけての複合遺跡であり、弥生時代の遺構として水田跡、方形周溝墓群、掘立柱建物跡、流路などが検出されている。ここでは遺構出土の土器他、包含層出土のものも含めて、大きくⅤ期に分けた。

#### Ⅰ期

1は6区23a層から出土した壺である。胴部下位に最大径を有するもので、半截竹管による沈線文、縱走羽状条痕が施されている。同層からは他に壺1個体と打製石斧9点を出土している。2・3区21a層、8区21層からも数は少ないが、単斜条痕を施した壺の破片が出土している。

#### Ⅱ期

II期は7区の方形周溝墓群から出土した土器を代表とする。2は6号方形周溝墓、3は14号方形周溝墓、4は5号方形周溝墓からそれぞれ出土した壺である。2は受け口状口縁をなしており、櫛描きによる波状文・横線文、胴部には3帯の複帯構成を持っている。尾張地方の貝田町式と考えられるものである。3は頸部が下広がりで中位に弱い稜をなしており、櫛描き・ヘラ描きによる3箇所の文様帯と研磨帯により構成されている。三河から西遠江に分布する瓜郷式である。4は細長い円筒形の頸部と球形の胴部を呈している。繩文地に菱形連繫文・沈線文・円形文が施されており、須和田式と考えられよう。

壺は小片のみだが、2点とも横位の条痕調整によるもので、口縁部に刻みが施されている。壺を見る限り各地域の土器が混在している状況をうかがうことができる。当該期と考えられる土器に9区42層出土の7がある。胴部上半には繩文地に重菱形文と重三角文を組み合わせ、下半は横位の条痕による調整がなされている。

### III-1期

前段階の系譜を受け継ぐものであり、条痕調整の残存する段階である。8は7区8・12号方形周溝墓出土の壺である。頸部が太く中膨らみとなっている。器面全体を浅い条痕で調整し、頸部及び胴部に巾広の深い沈線が施されている。9は5区13b層の広口壺である。次段階の土器も含む包含層出土のため問題はあるが、上半を条痕、下位を刷毛調整にしており、当該期と考え得る。10は8区1号方形周溝墓出土の壺である。口端部には刻みを施し、口辺部を条痕、底部を刷毛で調整している。同一個体と思われる胴部の小片中に条痕地に巾広の深い沈線を施したものがあり、8との類似性から同一の時期とした。

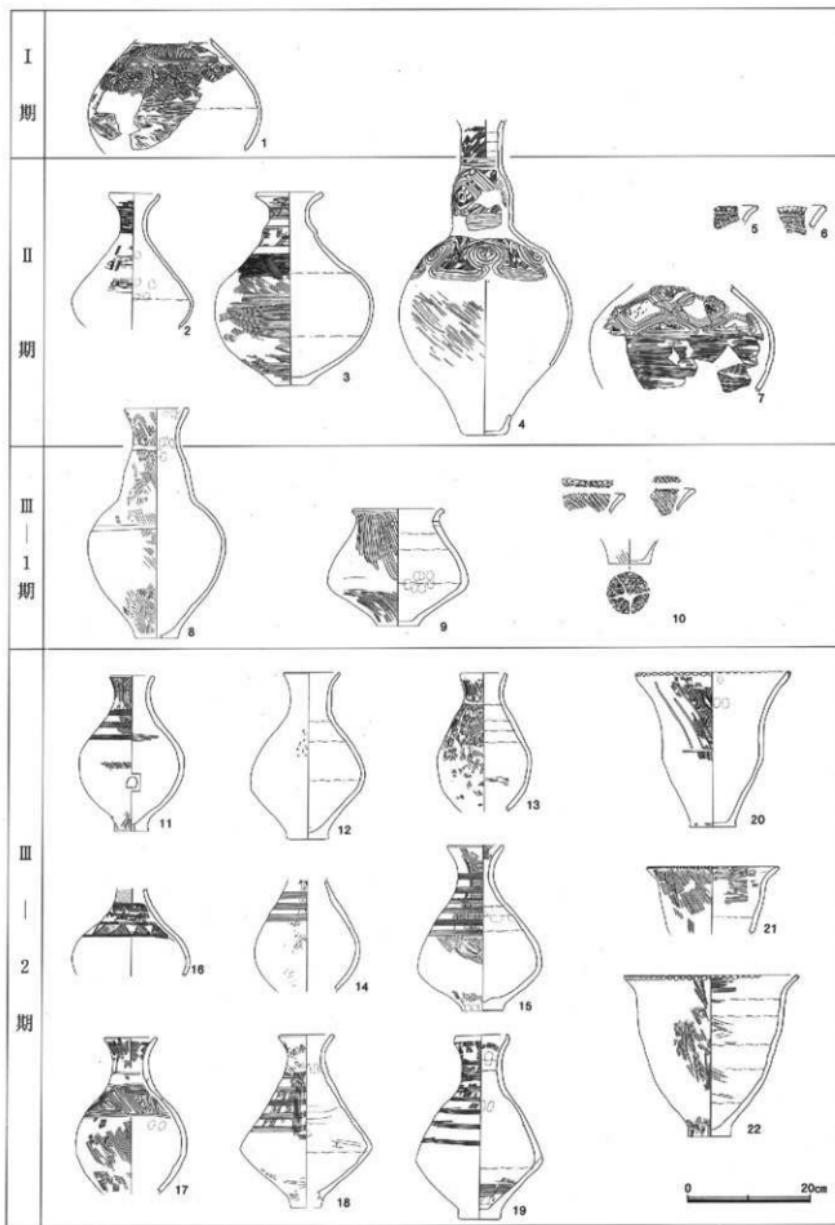
### III-2期

壺が小型化し、器面調整が全て刷毛になる段階である。11は8区3号方形周溝墓、12、13は8区2号方形周溝墓、14、15は9区2号方形周溝墓からの出土である。その他は明確な遺構出土ではないが、当該期のものとしてあげた。16は9区41層、17、18、20、21は5区14a層の窪地内、19は1区28層、22は5区13b層からそれぞれ出土した土器である。壺は法量的にはほぼ一定しており、頸部は太く直立し、口縁部は単口縁でわずかに外反している。胴部は中位に最大径をもつ長球状ないしは球状を呈するもの(11~14、16、17)、無花果形を呈するもの(15)、胴部中位が張り出す算盤玉状に近いもの(18、19)などのバラエティーがあるが、定形化してきているともいえよう。器面は刷毛調整を基本とするが、刷毛後にナデが行われるものもある。櫛描き横線文が多いが、17のように半截竹管による沈線文や12、13のような無文のものも認められる。また16のように櫛によって内部に波状文を有する繩文帯と鋸歯文帯とに分けるものもあり、文様の多様性が伺われる。また19は1区28層から出土した撇入品と考えられる長床式の壺である。詳しい併行関係は分からぬが、施文の共通性から当該期に含まれると考えた。

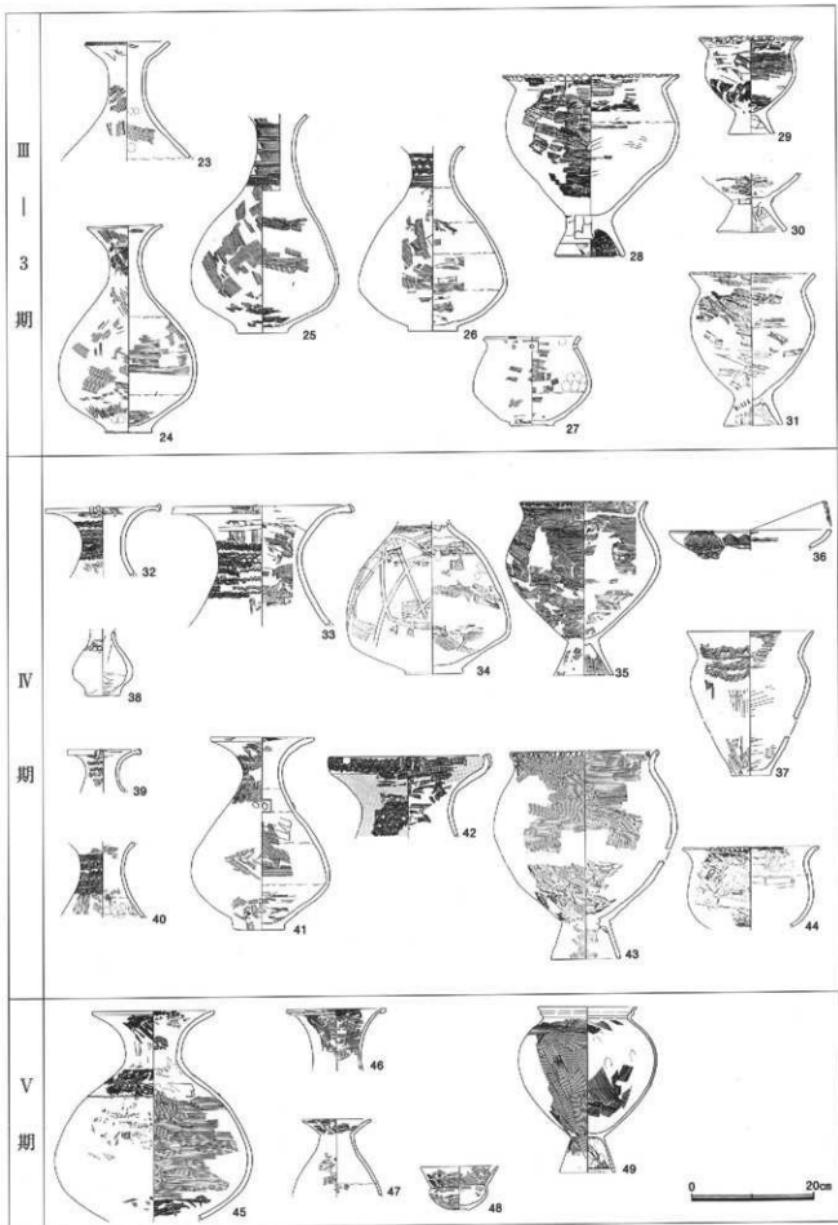
壺は口縁部が外反するものだが、胴部から緩やかに外反しながら開くもの(20)とややすんどうな胴部を呈し、頸部で屈曲するもの(21、22)がある。口縁部は指頭押捺と刻みの両方が存在する。器面調整は刷毛によって行われ、一部にナデも用いられている。20にはヘラ描きによる斜行及び横位の沈線が施されるが、有東式土器に多く認められる横走羽状文との関連性が窺えるが、横位の沈線は前段階の壺に系譜が求められるのかも知れない。

### III-3期

23~31は5区13a層から出土した土器である。壺は胴部下位が最大径となる無花果形を呈したもので、前段階に比して大型化し、頸部は直立する細い長頸となる。同層より大型品が出土しており、法量分化が行われていることが窺える。口縁部は全て単口縁だが、頸部で屈曲して開くもの(23)、頸部から緩やかに開くもの(24~26)とがある。口端部は面取りが施されるが、かなり粗雑である。施文は一部口縁部に施されるものを除いてはほぼ頸部に限定される。繩文は沈線区画が無くなり(23、24)、櫛描き文は横線文と波状文の組み合わせである(27、28)。壺は器形全体が分かれるものが少ないので、比較的大型のものと小型のものがあり、法量分化が認められる。胴部中位もしくは上位に最大径を有するが、胴部高に対して張りが大きいもの(28)、図示していないが直線的に立ち上がる寸胴のものある。口縁部は大きく外反するが、中には口縁部が短く外反が小さいものや直立気味のものもある。口唇部は指頭押捺により、大きな波状を呈しているが、33のように押さえが弱く単口縁に見えるものもある。小型の壺(30)を除いて、胴部と台部との接合方法は胴部内側より台部に穿孔し、ホゾを差し込むことにより行われている。胴部側は丁寧にナデてホゾ跡を消しているが、台部は穿孔による粘土がはみ出したまま



第26図 弥生式土器編年図（1）



第27図 弥生時代編年図（2）

である(28、30)。これらの壺は全てハケ調整が行われている。

#### IV期

32~37は5区13a層S R 51302、38~44は6区18層からの出土である。壺は形態的には胴部下位に最大径を有する無花果形が基本となる。前段階との相違は、頸部が太く短くなる傾向や口縁部の外反が大きくなることなどが上げられるが、口端部をやや肥厚化させ、丁寧な面取りを行っている点も上げてよいだろう。特に口縁部は42のように受け口状のものもあるが、ほとんどは單口縁で、32のように水平近くまで開くものもある。施文は受け口状の42を除いて頸部に限定され、模描き波状文が施されるが、40のように横線文が組み合わされているものもあるが、その他の施文方法は見あたらなかった。口端部には棒状ないしは豆粒状の浮文が、肩部には円形浮文が貼付されるものが多い。調整は刷毛を主体としているが、口縁部や胴部は刷毛の後にナデが行われているものが日立つ。法量的には大・中・小に分けることが出来そうである。壺は台付きのもので、個体差はあるが、胴部中位ないしや上位に最大径をもつ球形に近い形態となり、頸部から口縁部にかけての外反は曲線的となり緩やかである。口唇部は梢円形に近い大きめの刻みが付けられている。台部は前段階に比べて高くなり、成形も丁寧で、安定感が増している印象を受ける。36、37の壺は中部高地系のものである。2個体ではあるが、全体の点数から考えれば、高い比率であるともいえる。

#### V期

弥生式土器の系譜を引く土器と外来系の新器種によって構成されている。45~48は6区16層、49は2・3区12層出土である。45は胴部中位に最大径がある偏平球状を呈す壺で、肩部にはS字状結節文を伴う羽状繩文、口縁部内面には押圧繩文が施されている。46は口縁部に薄い粘土帯を貼り付けた壺、47は単口縁の壺であるが、ともに、刷毛調整のみである。48は刷毛調整の小型丸底上器、49は肩部に平行線文を有するS字状口縁台付き壺である。

### 3 遺構の変遷

瀬名遺跡の出土土器について大まかな時期区分を行った。次にこの時期区分に従って、各調査区における遺構の対応関係及び変遷について検討をしていく。しかし、本遺跡では水田遺構など土器の共伴が少ない遺構が多く、土層等の対比から時期を決定した遺構も多い。ここではあくまで、数量的には少ないが、土器を確実に伴った遺構に限定して進めていく。(1)

I期の段階の土器は3つの調査区から出土しており、2・3区21a層からは溝状遺構・堰、6区23層からは凹地と丸太杭が検出されている。遺構の性格が不明のものもあるが、打製石斧を伴っている点やプラントオパールの数値が高い点など低地への進出の可能性を示すものであろう。

(2)  
II期は7区の方形周溝墓群の形成が始まった段階である。瀬名遺跡で主体的に集落が形成された時期と考えてよいだろう。7区の方形周溝墓の形成は次の段階にも引き継がれている。住居跡等、集落の中核部分は発見されていないが、7を出土した9区42層ではプラントオパールの数値が高い点や検出された溝が導水路である可能性が指摘されており、完成された農耕集落の形成がこの段階で行われたと考えてよいかもしれない。

(3)  
III期は土器の出土量が前段階に比して増加しており、遺構も各調査区に広がっている。遺跡の拡大傾向として捉えられるかもしれないが、それは特にIII-2期以降で顕著である。III-1期は7区の方形周溝墓が継続し、8区の方形周溝墓が形成され始めているが、その他の調査区では遺構は検出されていない。III-2期は8区・9区の方形周溝墓の構築と共に、2・3区、7区を除く各調査区で水田遺構が検出されており、本遺跡における水田耕作の盛行期ともいえるであろう。III-3期は若干の縮小傾向として捉えられるかも知れない。2・3区16層及び10区35層で水田跡の他は5区で掘立柱建物跡など集落の

一部が検出されているだけである。

Ⅳ期はⅢ-3期に引き続いて、縮小傾向にある。2・3区14層、6区18層の水田、5区13層の流路以外では遺構を確認していない。また遺構が遺跡中央部に位置する調査区に集約される印象を受ける。

Ⅴ期では再び、遺跡の拡大が認められるようになる。各調査区で杭列を伴う畦畔区画という同一の構築方法による水田が検出されている。

#### 4 時間的位置づけについて

瀬名遺跡における弥生式土器の大まかな時期区分とそれに対応する遺構の変遷を追ってみた。あくまでも一遺跡内での変遷であるため、現段階までに理解されている相対的な年代に当てはめることにより時間的な位置づけを行っていきたい。

I期は中期初頭段階の丸子式である。丸子式土器は2時に区分される見通しが示されているが（佐藤 1988）、現在のところ明確な資料の提示がないため、本遺跡との比較検討は出来ない。富士宮市浜沢遺跡は丸子式の代表的な遺跡とされてきたが、出土した土器は北関東・中部高地の影響と丸子式との融合から仮称浜沢式が提唱されており（山上 1989）、資料が不足している西駿地域との比較は時期区分の問題も含め、今後の課題といえよう。<sup>(4)</sup>

II期は中期中葉段階に位置づけられるものである。駿河地方では従来、須和田式土器の系統を引くものとして鴨ヶ池式土器・原添式土器等の名称で編年が行われてきた。しかし、鴨ヶ池遺跡（佐藤 1938）は伊豆地方の遺跡である点や充分な報告もなされていない点で西駿地域の指標として用いるには難があると思われる。また原添式（杉原 1951）も公表された資料が少なく、さらに有東式の古い段階という認識もあり、型式設定が出来ないというのが現状であろう。隣接する東遠地域では嶺田式土器が成立しているが（松井 1985）、西駿地域の遺跡においては志太平野東端の清水遺跡（藤枝市教委 1992）で貝田町式・瓜郷式・嶺田式の各土器ないしはその影響下にある土器が出土している。また静清平野では清水市下野遺跡（清水市教委 1985）から瓜郷式・同市荒古遺跡（清水市教委 1984）からは須和田式の壺が確認されている。特に西からの影響は嶺田式土器の分布範囲を越えて直接的である。竹内直文氏は当該期の土器を原添式の名称で再設定し、「基本的に嶺田式や中里式等の東日本的な土器の仲間ではあるものの、貝田町式・瓜郷式のダイレクトな影響下にある土器」としている（竹内 1988）。原添式の名称に若干の疑問は残るが、東海西部のダイレクトな影響という点は頗るに値する。さら付け加えるならば東日本の直接的な流入なども併せて考えることが必要であり、嶺田式にみられるような個性的の確立は認め難いように思われる。現実には対象となる資料が不足しており、今後の資料増加に期待を持たれるが、県外に目を向ければ千葉県常代遺跡で貝田町式の壺が須和田式に混入した方形周溝墓（甲斐 1992）、愛知県朝日遺跡では須和田式の壺が出土している（愛知県教委 1975）。これらは一方的ではない広範囲での地域間交流を示していると考えられよう。更に飛躍して考えれば、東西交流の接触地帯として西駿地域を捉えることが可能なのかもしれない。

III期は中期後葉有東式の段階である。近年では有東式土器は隣接する関東の宮ノ台式土器と同一土器文化圏とする考えがある（向坂 1987）。関東地方では宮ノ台式土器の細分研究が進展しているが、駿河地域では近年静清平野での資料の増加があるものの、十分に研究が進んでいるとはいえない。瀬名遺跡では先述の通り資料不足のため、3段階に区分するにとどまった。1期はII期の系譜を引くものとして有東式の初頭段階と考えた。同じ時期にあたる川合遺跡出土の壺には全面を条痕調整したものと上半を条痕、下半を刷毛調整にするものがあり、時期差が存在する可能性があるようである。本遺跡の資料では壺ではないが8と9、10の間に時間差が存在することになり、7区の継続する方形周溝墓と8区の方形周溝墓の構築開始時期にわずかではあるがズレが生じている可能性もある。<sup>(5)</sup> 2期はIII期の中核を

なす段階であるが、1・3期に比べて長い時間幅を持っていると思われる。壺は文様が多様化していることが認められ、時間的な変遷を捉えられる可能性がある。また壺に関しては横走羽状文を指標に2段階ぐらいい分ができるかもしれない。<sup>(7)</sup>

3期は有東式の最終末の段階として位置づけることにより、後期への過渡的な様相を示すものとして考へており、IV期も含めて検討していきたい。瀬名遺跡の資料に限って言えば、III-3期とIV期の変化は壺の場合長頸から短頸、細頸から太頸という頸部の変化と口縁部の成形技法の変化として捉えることが出来る。またIII-3期の文様は柳描き文と繩文が共に使われており、IV期が柳描き波状文主体となる等の変化が認められる。壺はともに台付きである。胴部はIV期が球形に近くなるなどの相違点を見い出すことができるが、口縁部が指頭押印から刻みへと変化している点、台部が低いものから高いものへという変化、さらに胴部と台部との接合方法の相違を付け加えることが出来よう。後期の編年に関しては先述したように東駿河地域の資料が主に用いられており、向原遺跡溝状造構出土土器（小野・秋本 1972）を中期末、小型精製土器を含む大駿式土器を古墳時代初頭と限定し、その間に位置する土器を後期土器として把握することにより編年を行っている。古墳時代初頭は土器組成の上からも背首できるが、中期末から後期への移行には大きな差異がある。駿河地域における後期弥生式土器の成立が明確になってはいないが<sup>(9)</sup>、本遺跡の資料を中期末に据えることにより中期から後期への移行として考えたい。

IV期はほぼ1時期として捉えられそうである。中嶋都夫氏は駿河の後期弥生式土器を「登呂・飯田様式」として一様式にまとめ、その中を古・中・新の3小期に区分されている（中嶋 1991）。また石川治夫氏も登呂式と飯田式との間には過渡的な土器が多いとされ、一線を限ることはできないとされている。両者とも東部地域の資料を用いた編年であるため、単純な比較は出来ないが、本遺跡出土の土器は長頸である点や頸部に文様帯が残るなど古い様相を残しており、後期前半に位置づけることができよう。

V期は古墳時代初頭の土器群である。当該期における中部地方の土器は池田将男氏により、3時期に区分されている（池田 1985）。瀬名遺跡の資料は小型丸底土器やS字状口縁台付き壺の存在から概ね池田編年のII期に該当すると思われる。しかし、水田造構が大半を占め、一括資料として扱えないことから時期的に絞り込み難いという欠点がある。6区16層から出土している壺はむしろ池田編年I期に含めた方が妥当かもしれない。また7区10a層水田からもS字状口縁台付き壺の出土が認められるが、同層から出土しているその他の土器の多くは弥生後期からの系譜を引くものである。壺は後期といつてもよいものもあるが、壺の口縁部はナデ調整の单口縁が多く弥生後期よりも新しい要素として捉えられよう。これらの点から、瀬名遺跡のV期は池田編年のI期からII期にかけてという比較的長い時間幅で捉えるべきである。

第29表 瀬名遺跡造構変遷表

段階	時期	造構など		
		2・3区21×層	6区23×層	8区21層
I期	中前期			
II期	中前期	7区方形周溝基(5・6・14号)		
III-1期	中后期	7区方形周溝基(8・12号)	8区方形周溝基(1号)	
III-2期	中后期	1区28層水田	5区14層水田	9区40層水田
III-3期	中期末	2・3区16層水田	10区35層水田	5区13層
IV期	後期終半	2・3区18層水田	5区18層水田	5区51301・61302
V期	古墳時代前期	1区22層水田	2・3区12層水田	6区16層水田
			7区10a層水田	

## 5まとめ

瀬名遺跡出土弥生式土器の編年作業を基礎に遺構の共時性及び変遷を追ってみた。土器を出土していない調査区や層位は除いており、遺跡の全てにわたっての分析ではない。そのため、現地担当者の見解や遺構編との相違が生じているかも知れないが、一つの試案として了解して頂きたい。瀬名遺跡という大規模な遺跡の一部分を調査しただけであり、今回提示した変遷も全体の様相を示したものではないが、Ⅲ-2期での遺跡の拡大とⅢ-3期からⅣ期にかけての縮小と断絶、Ⅴ期での再拡大といった変遷を何うことが出来た。その要因については検討することが出来なかったが、静清平野全体での遺跡の動向と合わせ、検討する必要があるだろう。また時間的位置づけについては現段階での研究成果に照合するのみで、自ら検討することを怠ってしまったとともに、西駿河での資料不足と編年研究の遅れを痛感することにもなった。今後の資料の増加と編年研究の進展に期待したい。

(中鉢賢治)

### <註>

- (1) 遺構の時期決定については現地担当者と整理担当者のそれぞれの重点の置き方により、相違が生まれる可能性があるだろう。
- (2) 2・3区21a層では1800個／m<sup>2</sup>、6区23a層では1800~2000個／m<sup>2</sup>がカウントされている。
- (3) 小林孝徳氏の御教示による。
- (4) 丸子式の様式及び直痕系土器の編年も未だに安定的なものとは言えず、それらも含めての検討課題となるであろう。
- (5) 静岡市川合遺跡、清水市高島遺跡など。
- (6) 山田成洋氏による。
- (7) 宮ノ台式七器では東の文様は大きく構造き文、崩落繩文から単純な帶繩文への変化として捉えられるが、有東式が同様な変化を示すかは今後の検討課題となるであろう。
- (8) 当然横走羽状文が施される段階では無文の発見は存在しており、横走羽状文の有無だけで判断できるものではない。
- (9) 向原遺跡溝状構造土器には、時期幅があると思われ、中期末として位置づけることができるか疑問である。
- (10) 上器の組成についても検討することができなかつたが、折り返し口縁盤の出現などを指標の一つとする事はできないだろうか。

### <引用・参考文献>

- 愛知県教育委員会 1975年 「朝日遺跡群第1次調査報告」  
池田将男 1985年 「中部地方の古式土器」[静岡県考古学会シンポジウム6 古墳時代の土器]  
石川治夫 1983年 「東部地域の後期弥生土器」[静岡県考古学会シンポジウム5 弥生後期の集団関係]  
小野真一 1958年 「駿河地方の弥生文化」  
1969年 「東海地方東半の弥生文化」[信濃] 21-4・5  
1976年 「人門弥生土器 中部東海東部」[考古学ジャーナル] 126・127・129  
小野真一・秋本義一・竹内直文 1972年 「北伊豆南南町向原遺跡発掘調査報告」[駿豆考古] 13  
甲斐博幸 1992年 「須和田期の方形周溝墓について」[考古学雑誌] 78-1  
加納俊介 1981年 「駿河清東部の弥生土器編年のための覚書」[月の輪遺跡群II] 富士宮市教育委員会  
佐藤民雄 1938年 「伊豆ノ村ヶ池弥生式遺跡」[考古学] 9-3  
佐藤由起夫 1987年 「静岡市丸子セイゾク山遺跡、沢渡遺跡出土土器の再検討」[静岡県博物館協会研究紀要] 10  
清水市教育委員会 1984年 「菟古遺跡」[有度山東麓の考古資料]  
1985年 「野猪遺跡」  
杉原莊介 1949年 「土器」[登呂(前編)]  
1951年 「静岡県安倍郡原添遺跡」[日本考古学年報] 1  
竹内直文 1988年 「東日本における弥生文化の發展-静岡県の土器編年を中心として-」[史誌] 20  
中嶋禎夫 1988年 「いわゆる「南川式」と「飯田式」の再検討」[転機] 2  
1991年 「駿河における後期弥生土器編年と土器移動」[東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器]  
藤枝吉教育委員会 1992年 「清水遺跡」  
松井一明 1985年 「横田式土器の検討-とにかく圓形土器について-」[転機] 1  
向坂鋼二 1987年 「考古学的方法における静岡県の地域区分」[静岡県史研究] 3  
山上英吾 1989年 「法式遺跡の土器について」[法式遺跡] 富士宮市教育委員会

## 第2節 濑名遺跡の打製石斧について

- 1 はじめに
- 2 濑名遺跡出土の打製石斧
- 3 県内出土の打製石斧
- 4 分類と地域性
- 5 打製石斧の意味
- 6 まとめにかえて

### 1 はじめに

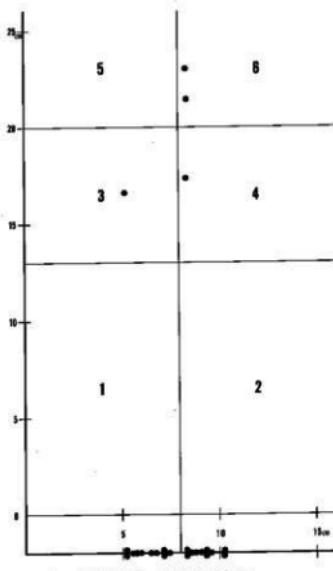
弥生時代の石器研究は水稻耕作技術とともに伝播した大陸系磨製石器と戦争の開始に伴う武器を中心になっていたといえる。しかし、弥生時代の石器組成の中には縄文時代の系譜を引く石器も含まれており、その代表として打製石斧をあげることが出来る。打製石斧は時間の変遷に比べ形態・技法の変化がほとんど認められない点、遺構内出土が少ないので時期を特定できない点などから、特定地域を除いては殆ど関心が払われていないといえよう。<sup>(1)</sup>縄文時代晚期から打製石斧は大型化し、量的に増加している。<sup>(2)</sup>特に弥生時代初期の打製石斧は、縄文時代晚期からの直接的な系譜を引く石器として、縄文時代から弥生時代への移行期における継続性や断絶性を考える指標の一つになりえるかもしれない。また弥生時代を通じて残存する打製石斧については他の石器や金属器との関係からその機能・役割について検討されるべきであろう。小論では瀬名遺跡から出土した打製石斧の検討を行い、さらに静岡県内出土の打製石斧を概観しながら前記の問題について多少なりとも考えてみたいと思う。

### 2 濑名遺跡出土の打製石斧

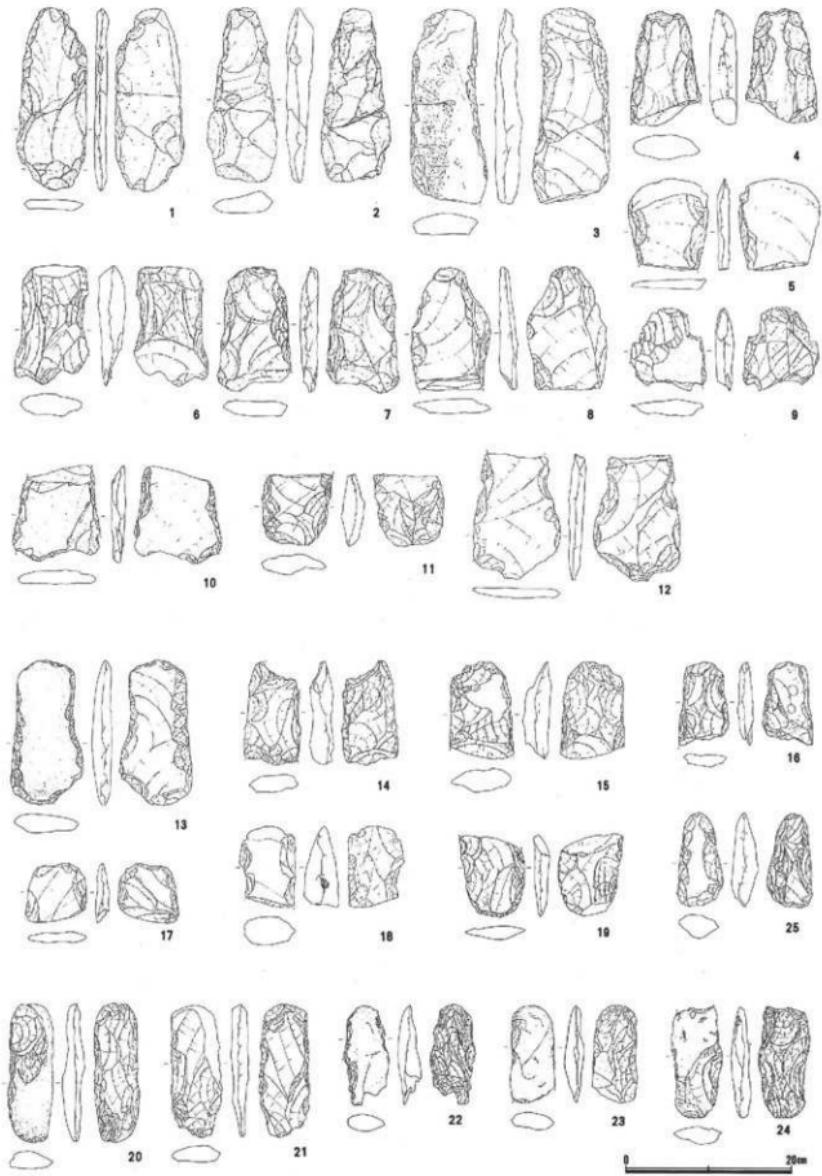
瀬名遺跡から出土した打製石斧は25点である。1点所属時期に疑問が残るものがあるが、基本的に弥生時代に所属すると考えられる。

#### 1) 分類

打製石斧の分類については、平面形態の特徴から縄文時代の打製石斧と同様の分類が行われている。瀬名遺跡の打製石斧も、基本的に從来からの分類である「撥形」「短冊形」の範疇に含まれるものであるが、法量からある程度のまとまりを想定することができる。完形品が少ないため、対象とする資料の有効性・信頼性を欠く点は否定できないが、あくまで傾向として把握することにした。5点の完形品から最大長を~13cm・13~20cm・20cm~に分け、次に最大幅8cmを境に2分することにより、6つの領域を設定した(第28図)。欠損品は残存幅のみを横軸にとり、上記の領域に当てはめることとした。最大幅8cm以上になるものは



第28図 領域設定図



第29図 濑名遺跡出土打製石斧

欠損品を含め13点である。完形品は領域4に1点、領域6に1点存在する。欠損品は領域2、4、6のいずれかに含まれることになるが、他地域との比較からも領域2に含まれるものは考えられず、全て領域4、6に含めることにした。領域3には20のような細身の短冊形が含まれる。欠損品も含め、同様の形態は瀬名遺跡において5点を数えることができた。長さは確定できないものの、最大幅6cm以下、厚さ2cm前後と法量的にも一致している。さらに側縁の直線的な仕上げや、使用石材の類似性など、ある種の用途に応じた定形化した製品として捉えられる。次に残存幅8cm以下の欠損品について考えたい。この中には残存部の幅が6cm以上のものが5点あり、最大幅8cm以上になる可能性がある。残存長から領域1に含まれるものはなく領域3、4、5、6のいずれかに含まれると考えられよう。

以上の結果から瀬名遺跡出土の打製石斧を4つの群に分けることにした（第30表）。1群は領域5、6に含まれるものであり、2群は領域3、4にまたがる群である。この2つの群に関しては検討資料が少ないため、明確な線引きをすることはできない。この2つの群には、撥形と短冊形が存在するが、ともに側縁をやや内湾させるなど、装着を意識した作りがなされている。3群は先述した細身の短冊型である。基部側縁を直線的に、刃部を弧状に仕上げるものである。4群は1点しか該当するものはないが、小型で撥形を呈するものである。

第30表 形態分類・遺物対応表

群	法量 - 形態	遺物	
1群	大型-撥形・短冊形	1・2	3・4・5・7・9・10・13・15・17
2群	中型-撥形・短冊形	11	6・12・14・16・18・24
3群	中型-短冊形	19・20・21・22・23	
4群	小型-撥形	25	

第31表 使用石材表

群	砂岩	頁岩	粘板岩	輝緑凝灰岩	計
1・2群	11	5	2	1	19
3群	0	4	1	0	5
4群	0	1	0	0	1
点数	11	10	3	0	25
%	44	40	12	1	100

## 2) 使用石材

使用された石材はすべて安倍川水系の軽石を利用したものであるが、砂岩及び頁岩の割合が多く、両者で全体の84%を占めている。砂岩は硬度が高く板状剥離の認められるものが用いられており、選択的に採集されたようである。頁岩は粘板岩に比べ、板状剥離が顕著ではなく不定形の剥離になるため、断面は不整形になっている。先に分類した群ごとに使用石材をみると1・2群は砂岩11点、頁岩5点、粘板岩2点、輝緑凝灰岩1点となり、さらに砂岩の占める割合(57.9%)が高くなる。定形化した3群は頁岩製4点、粘板岩製1点である。砂岩の使用は認められず、選択性が看取される。

長尾川を挟んで隣接する川合遺跡においては、安倍川水系の粘板岩の使用が圧倒的であり、瀬戸川層群に含まれる丘陵上に立地する丸子セイゾウ山・佐渡遺跡の両遺跡から出土している打製石斧は輝緑岩製のものである。<sup>(3)</sup>石材は遺跡の周辺で採取されるものが使われていると考えられるが、遺跡単位で使用石材に相違がみられ、選択に何らかの原理が働いている可能性が考えられる。<sup>(5)</sup>

## 3) 時期

瀬名遺跡出土の打製石斧は、基本的に包含層出土のものであり、時期を限定できるものは少ないが6区23a層の他、2・3区21a層及び8区21層からは丸子式土器が出土している。これらは各区の土層の対比状況から同時期に認定されている。また、9区42層出土のものは、同一層内の土器片から弥生時代中期中葉に位置づけられよう。その他のものについては若干の検討を要する。5区14a層は弥生時代中

期後葉段階の水田であるが、打製石斧は同層の下位で検出されている。下層の14b層は縄文時代晩期に比定されており、弥生時代中期後葉から中期前葉の範囲で考えることができよう。また7区12層のものは弥生時代中期中葉の方形周溝墓下の疊層から出土しており、中期中葉以前に位置づけられる。これらの状況から考えれば、瀬名遺跡出土の打製石斧は弥生時代中期後葉以前のものと限定することができるが、その盛行は弥生時代中期前半にあったといえるだろう。<sup>(6)</sup>

### 3 県内出土の打製石斧

瀬名遺跡の打製石斧について検討を加えてきたが、次に弥生時代中期前半以降の県内出土の打製石斧について大きく3地域に分けて概観していきたい。形態については後述するが、従来の平面形態からの分類に基づいている。

#### 1) 遠江

沢上VI遺跡（浜松市文化協会 1990）

都田川南東の小支谷を囲む台地上の遺跡で、住居跡と土器棺が検出されている。時期は弥生時代中期前葉に位置づけられる。打製石斧は5点出土しているが、完形品は2点だけであり、いずれも刃部の開きの小さい撥形である。欠損品も残存状況から、同様の形態ないしは短冊形と考えられる。石材は全て、緑泥片岩と報告されている。打製石鎌、凹石の他、大型蛤刃石斧、偏平片刃石斧といった大陸系磨製石器も出土している。



第30図 打製石斧出土遺跡図

半田山遺跡（浜松市教委 1986・1987）

天竜川の形成した河岸段丘の中位に位置する遺跡で、住居跡、土器棺、土壤、小穴群が発見されている。時期は弥生時代中期前葉である。打製石斧は4点出土しており、短冊形と撥形に分かれれる。最大長10cm以下の小型品が3点とまとまる。共伴した石器は大型蛤刃石斧、乳棒状石斧、磨き石、凹石、打製

石器がある。

#### 松東遺跡（浜松市文化協会 1990）

天竜川の形成した沖積平野の微高地上に位置する環濠集落で、堀立柱建物跡、大型土壙などが確認されている。打製石斧は、大型土壙 SX26より、砥石とともに出土している。緑泥片岩製のもので、形態は撥形である。共伴した土器から、弥生時代後期後半に位置づけられる。

#### 向山遺跡（浜松市教委 1982）

都田川を望む丘陵先端部に位置する弥生時代後期の集落遺跡で、竪穴式住居跡13棟、掘立柱建物跡1棟、窓状造構が検出されている。打製石斧は住居跡および窓状造構から9点が出土している。細身の短冊形を基本としているが、やや刃部が広がる撥形のものも認められる。磨製石鏃4点の他は大陸系磨製石器は出土していない。

#### 原川遺跡（静岡埋文研 1988）

原野谷川の形成した沖積平野内の微高地上に位置する弥生時代中期前葉の集落跡である。堀立柱建物跡の他、幼児を埋葬した土器棺墓を検出している。打製石斧は包含層より3点出土している。短冊形の他、刃部の広がりの小さい撥形がある。石器の出土量は少なく、磨製石剣・敲き石など縄文時代からの系譜を引くものに限定されている。

#### 白岩遺跡（田辺 1972、加藤・大橋 1975・1978）

西方川の形成した沖積平野に位置する遺跡であり、白岩式土器の標識となった遺跡である。数次にわたり調査が行われているが、正式な報告がなされておらず、詳細は不明だが、弥生時代中期中葉から後期にかけての打製石斧が数多く採集されている。形態は短冊形の中に、撥形が若干含まれるようである。

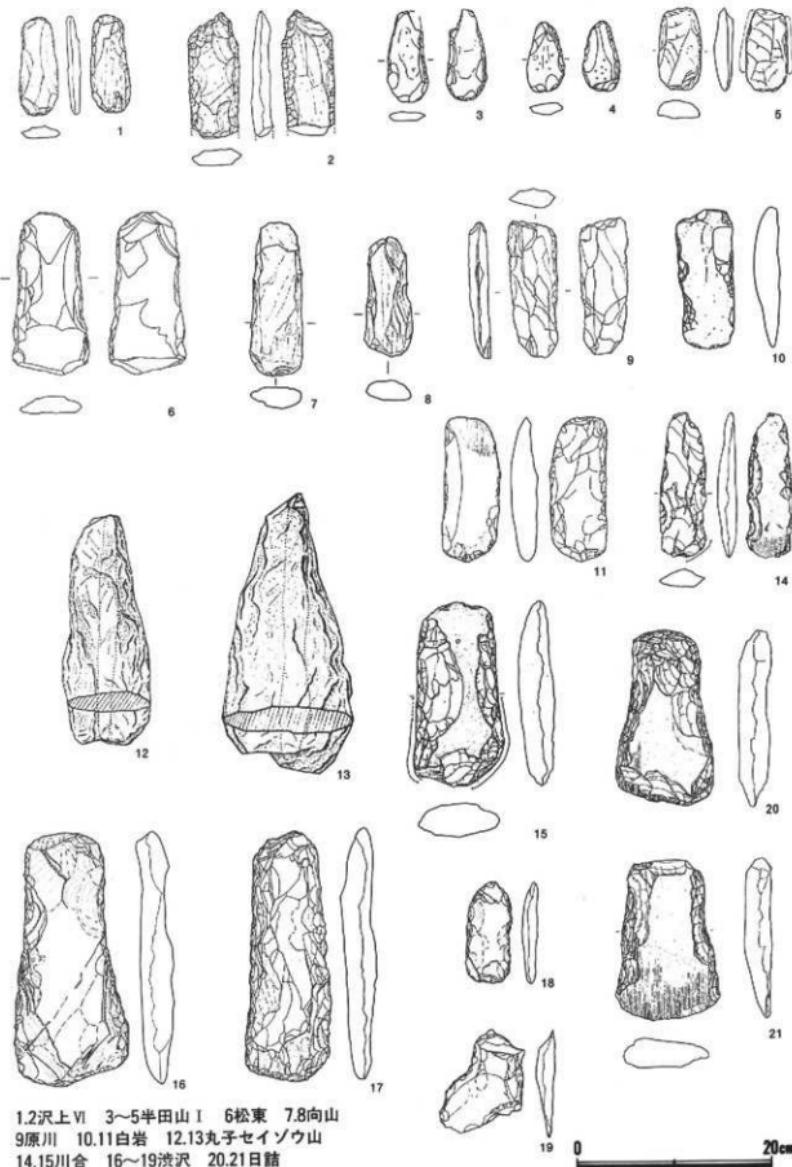
第32表 石器組成表

遺跡名	時期	立地	土器片		取扱具		木工具		耕作具		食料加工具		漁労具		その他			
			打製石斧	撥形 短冊形 その他の	打製石斧	磨製石斧	その他の	栽培用	施肥用	打製石器	磨製石器	磨石	石臼	磨石	石鍬	打製石	浮子	砥石
沢上 <sup>1</sup>	中期初頭	丘陵	○	○				○	○	○				○				
平昌山 <sup>1</sup>	中期初頭	丘陵	○	○				○	○	○	○							
原用	中期初頭	沖積地	○	○										○			○	
白岩	中期中葉～後期	沖積地	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○				
松永	後期	丘陵	○													○		
内山	後期	丘陵	○	○	?				○	○	○					○		
丸子セイゾウ山	中期初頭	丘陵	○	○													○	
佐渡	中期初頭	丘陵	○						○									
難名	中期初葉～後葉	沖積地	○	○												○		
周合	中期前葉～後葉	沖積地	○	○				○	○	○	○	○		○	○	○	○	
沢沢	中期初頭	丘陵	○	○	○	○		○	○	○	○						○	
日暮	中期後葉～後期	沖積地	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

#### 2) 駿河

##### 丸子セイゾウ山遺跡（杉原 1962）

安倍川下流の右岸の丘陵頂上部に位置しており、丸子式土器の標識となった遺跡である。6点の打製石斧が報告されている。形態としては撥形と短冊形が認められる。撥形には刃部が大きく広がる三角形



第31図 県内出土打製石斧

状をなすものと、刃部の広がりの小さい短冊形に近いもの、基部が内湾するものがある。その他の石器は、打製石鎌2点、磨製石剣1点、石錐1点、独鉛石1点など全て縄文系のものである。隣接する佐渡遺跡からも撥形の打製石斧2点が出土しているが、偏平片刃石斧の破片が報告されている点は注目されるだろう。

#### 川合遺跡（静岡埋文研 1992）

静岡平野の北東部の長尾川と巴川に挟まれた沖積低地の北辺部の自然堤防状の微高地に位置する遺跡である。打製石斧は包含層からの出土が主だが、弥生時代中期中葉以前に位置づけられている。形態及び法量からの分類が行われており、18cm前後のものを大型品、13~14cm前後を中型品、10cm以下の小型品としている。形態的には撥形・短冊形が含まれ、基部中央にくびれをもつ分銅形に近いものも存在する。短冊形の中には、瀬名遺跡で3群としたものも含まれるようである。大型品は厚みが3cm以上のかなり肉厚なものもある。大陸系磨製石器は第7遺構面の他、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺物包含層であるX層から未製品も含め大量に出土している。

#### 渋沢遺跡（富士宮市教委 1989）

富士山西麓末端にあたる舌状台地の先端に位置する遺跡で、土壙、土器棺墓が確認されている。打製石斧は土壙・包含層の他表採品を含めて、33点が報告されている。形態的には刃部の広がりの小さい撥形が多く、短冊形も認められる。さらに、基部をえぐった分銅形に近いものや、不定形のもの、さらには南信濃や南九州に多いとされる靴形石器（神村 1985）に類似するものが含まれる。法量的には長さ25cm前後のもの、15cmから18cmのもの、10cm前後以下のものにまとまりそうである。その他の石器としては、磨製石斧2点、環状石斧1点、打製石鎌13点、横刃不定形石器28点、砥石4点、磨石2点の他、磨製石包丁が出土している点は注目されよう。

### 3) 伊豆

#### 日詰遺跡（南伊豆教委 1978~1979）

青野川中流の沖積地に立地する弥生時代中期後葉～後期にかけての集落遺跡である。県教委調査分の正式な報告がなされていないため詳細は不明である。打製石斧は住居跡・方形周溝墓・包含層の他祭址遺構からも出土している。形態的には撥形が主体をなしており、短冊形も認められる。前者の中には刃部が大きく広がる長台形を呈するものも存在する。少数の大陵系磨製石器の他、石皿、敲石、磨り皿、石錐など縄文時代からの系譜を引く石器が出土している。

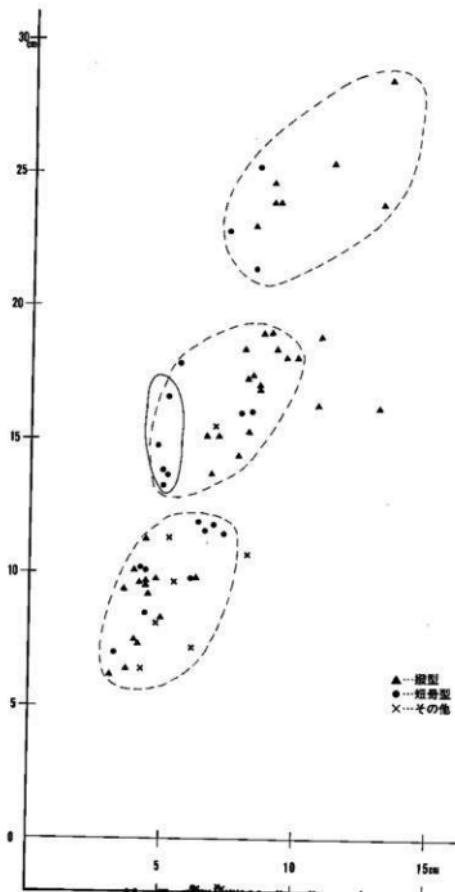
## 4 分類と地域性

県内出土の打製石斧について、瀬名遺跡での分類に基づき、完形品を中心に行き法量及び形態による分類を行った。（第32図）このグラフから判断すると、大型品は長さ20cm、幅8cm前後以上のもの、中型品は長さ20~13cm、幅10cm前後以下、小型品は長さ13cm以下、幅7cm前後以下のものとすることができそうである。しかし、日詰遺跡出土品の中には長さに対して最大幅が大きく、この枠組みには収まらないものがあり、中型品については検討を要する。平面形態に関しては、他地域では良好な資料の増加により形態の変化も認められ、いくつかの分類が試みられている。一般的には「撥形」「短冊形」「分銅形」という縄文時代の打製石斧と同様の分類がなされる。しかし、少數だがこの範疇に収まらないものもあり、梢円形を呈するものや分類できない不定形なもののが存在する。また刃部の形態にも差異があり、それらも加えることでさらに形態分類は可能であるが、今回は資料的な制約もあり、従来通りの形態分類によらざるを得なかった。大型品から小型品の全てにわたり基本をなす形態は撥形と短冊形であるが、その中でも撥形の割合が高いといえよう。全体の数量から判断すると大型品の割合は高いとはいはず、多くのものは中型品の範疇に含まれるといって良いであろう。また分銅形と不定形なもの（梢円形を含

む)は少數であり、小型品に限られている。また典型的な分類形は存在を確認することはできなかつた。

次に地域的な差異について考えてみたい。遠江地域では大型品に分類できるものではなく、中型～小型品に収まるものだけであった。形態的には短冊形が主体をなしており撥形としたものでも、刃部の開きが大きなものは少ないようである。中期前葉では特にその傾向が強いように思われる。後期段階に入ると向山遺跡のように多くの打製石斧を出土する丘陵上の遺跡も存在するが、小型の短冊形が主である。それに対し、後期の松東遺跡や中期から後期にかけての白岩遺跡のような沖積地の遺跡からは中型品を主体とするものが出土している。前者からは撥形、後者からは短冊形を主に撥形が出土している。丘陵上の遺跡と沖積地の遺跡における相違が認められるが白岩遺跡からは多くの木製農具が出土しており、それらとの関係から打製石斧の機能については考えいかなければならぬ。

駿河地域においては、丸子セイゾウ山遺跡や渋沢遺跡といった丘陵上の遺跡から出土した大型の打製石斧が特徴的である。形態としては撥形が多く、その中でも刃部が大きく広がる三角形状のものは特徴的といえよう。川合遺跡・瀬名遺跡など低湿地の遺跡か



第32図 法量分類図

らも包含層はあるが、中期前半を中心撥形・短冊形が数多くが出土している。両遺跡からは数量的に多いとはいえないが、幅6cm以下、厚みが2cm前後の粘板岩・頁岩製の短冊形が出土しており、先述したようにある種の規格性として捉えることもできそうである。中期後半段階では、沖積高地の郡遺跡(藤枝市教委 1982・1986・1990)・上戸田川の丁遺跡(藤枝市教委 1981)・矢崎遺跡(清水町教委 1990)からも大陸系磨製石器とともに打製石斧が出土している。後期段階では丘陵上に位置する

集落である八兵衛洞遺跡の住居跡内から刃幅約5cmほどの欠損品が出土している（沼津市教委 1981）。駿河地域では中期前半に最も多く出土しており、法量的にも多様性に富んでいる。その後は点数的にも急減しており、質的な変化があったことをうかがわせている。

伊豆地方では日詰遺跡のあり方が問題になろう。撥形と短冊形が含まれ、撥形の中には最大幅が10cmを超える長台形のものが含まれる。後期段階に至ってもなお打製石斧が石器の主体となっていることは山間部における生業を考える点からも注目しなければならない。

地域間の相違は中期前葉の駿河と遠江、中期後葉以降（後期）の駿河・遠江と伊豆において顕著といえる。特に前者では駿河で特徴的に存在した大型品が遠江では確認されていない点、形態的には遠江で短冊形が主体となるのに対し、駿河では撥形の割合が高い点を指摘する事ができる。この要因は立地する土壤や生業の相違などを想定することができるが、大陸系磨製石器の導入内容・時期の差異も含めて検討しなければならないであろう。<sup>(9)</sup>

## 5 打製石斧の意味

打製石斧は縄文時代の伝統を引く石器として、弥生時代を通じて用いられていた。当然生業と深い関わりを持った存在であったはずである。弥生時代中期前葉は石器の組成など縄文晩期以来の伝統を引く要素に加え、新しい要素が加わり出す時期として捉えられるだろう。大陸系磨製石器の登場、都田川流域の遺跡（佐藤 1985）や原川遺跡にみられるような沖積平野への進出、佐渡遺跡での櫻庄痕土器なども、この時期の複雑な社会を体現しているのかも知れない。そのような状況の中で、打製石斧は主要な石器としての役割を担っていたのである。駿河地域でみられたような大型の打製石斧を含めた法量の多様性は、耕起、土堀、除草といった用途に応じた形態の相違として捉えることも不可能なことではなかろう。渋沢遺跡では磨製石包丁や多量の横刃不定形石器が出土しており、収穫具の存在があったことを示している。南信濃では石鍬と石包丁、群馬県においても、石鍬と打製刃器の組み合わせから畠作が指摘されている（麻生 1990）。他県の例ではあるが、これらの指摘から弥生中期前葉の生業を畠作とすることに大きな魅力を感じるのである。しかし、肝心の生業を示す遺跡・遺構は発見されていない。また同一の時期として捉えられる良好な組成を示す資料が乏しいことも事実である。しかし、今後への期待を含めて、弥生時代中期前葉の打製石斧を畠作の可能性も含めた生業に関連する主要な石器（農耕具）として位置づけておきたい。

中期中葉～後葉段階以降は水田耕作を中心とした弥生文化が成立した時期と考えられる。中期中葉段階の明確な水田遺構はいまだに確認はされていないものの、大陸系磨製石器の確立・木製農具・方形周溝墓などの要素が出揃う時期でもある。この段階で残る打製石斧は、すでに石器の主役という座から下りたものと捉えても良いであろう。すなわち生業と直接に関連した農耕具から、他の道具を補完するための石器（土木具）へと転化していったのである（平野 1986）。この傾向は後期にも引き継がれており、簡便に作成できる道具として有効性を持ち続けたといえるが、その後は鉄器の急速な普及によりその役割を失い、他の石器とともに終焉を迎えるのである。だが、この時期にも日詰遺跡のように縄文的な石器の組成を示している遺跡もあり、畠作とは異なる生業の存在が看取される。それは主に平野部と山間部という立地条件の相違によるものであり、山間部においては依然として、打製石斧は主体的な石器として存続しているのである。そこには弥生時代を水田農耕社会としてのみ捉えることのできない生業の多様性が現れていると考えなければならないだろう。

## 6 まとめにかえて

縄文時代からの伝統を引く石器としての打製石斧はその役割を変化させながらも弥生時代を通じて存

在している。特に中期前葉の駿河地域においては打製石斧の多様性などから、生業に関わる農耕具として位置づけたが、中期中葉以降は木製農具や鉄器を補完する土木具として、その役割は変化した。一方、山間部においては後期段階でも中期前葉と同様の状況を示していた。今回は中期前葉の打製石斧のあり方から畑作の可能性も考えたが、収穫具の問題や実際の生産遺構が未検出など想像の域を超えることはできなかった。この点は、打製石斧が急激に増加する繩文晩期からの石器組成の流れを踏まえた上でさらに検討していかたい。また、遠江と駿河における法量や形態などの地域差についても、その事実を確認したのみで要因については全く触れることができないままである。法量の差異に関しては一般に言われる土器と異なる用途の見解だけでは説明がつかないのでないかという疑問も残っている。その点は今後、打製石斧に残された使用痕跡の検討が詳細に行われることに期待したい。

(中鉢賢治)

〈註〉

- (1) 特に時期に関しては、繩文時代の私品として扱われることが多いようである。
- (2) 浜松市川山遺跡・富士町山王遺跡からは多量の打製石斧が出土しており、周辺地域への販賣ないしは未製品の供給が行われた可能性が考えられている。
- (3) 静岡大学伊藤通玄教授のご教示による。
- (4) 安倍川本系で採集される輝緑凝灰岩のことであろう。
- (5) 打製石斧に用いる石材のための供給システムがあったとは考えにくいが、立地条件や対象の違いなどに対応する選択として捉えたい。
- (6) 方形規則形状の土器は基本的に12層の纏を用いており、その中から繩文時代晚期の土器片が出土している。同時に比定される可能性も考えられよう。
- (7) 大工原典氏による往還引車II遺跡の分類、神村達氏の分類などがある。
- (8) 刃部は大きく3つの形態に分けることができそうである。刃部を弧状に調整する曲刃、平坦に仕上げる平刃、先端が尖る尖刃だが、曲刃が最も多く、尖刃は非常に少ない。
- (9) 駿河では中期前葉段階の遺跡では伐採跡は確認されておらず、遠江との相違が認められ、導入時期には一段階クッションがあつたのかも知れない。
- (10) 順名遺跡I区42層にその可能性がある。

〈引用・参考文献〉

- 麻生敏雄 1990年 「弥生時代の石製農具－石鋤と石包丁－」『研究紀要』7 財団法人春馬邑文化財調査事業団  
加藤賀二・大橋保夫 1975年 「西方川河川改修工事における採集遺物(上)」『森町考古』9  
加藤賀二・大橋保夫 1978年 「西方川河川改修工事における採集遺物(下)」『森町考古』13  
神村達 1985年 「『2. 石製耕作具』『弥生文化の研究』5 雄山閣  
佐藤由起男 1985年 「静岡川流域における弥生時代の開始」『静岡県考古学研究』17  
鈴木敏朗・伊藤通玄 1992年 「『静御殿』『弥生時代の石器－そのなりと終わり－』  
杉原莊介 1962年 「駿河丸子及び佐渡遺跡出土の弥生式土器に就いて」『考古学雑誌』第4番  
田辺昭三 1972年(再版) 「白岩下流遺跡報告」  
平野吉郎 1986年 「東海地方における弥生時代の石器について」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』1  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988年 「原川遺跡」  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992年 「川合遺跡遺物編2(石製品・金属製品編)」  
清水町教育委員会 1990年 「清水町御倉矢崎遺跡」  
沼津市教育委員会 1981年 「八丈衝洞遺跡発掘調査報告書」  
浜松市教育委員会 1982年 「山内遺跡・谷上古墳群発掘調査報告書」  
浜松市教育委員会 1986年 「浜松市半田山遺跡(IV) 発掘調査報告書」  
浜松市教育委員会 1987年 「浜松市半田山遺跡(V) 発掘調査報告書」  
浜松市文化協会 1990年 「郡田地区発掘調査報告書 下巻」  
浜松市文化協会 1990年 「松東遺跡II」  
藤枝市教育委員会 1982年 「静岡縣藤枝市郡藤井名掘査発掘調査報告書」  
藤枝市教育委員会 1986年 「静岡縣藤枝市郡藤井名掘査発掘調査報告書III」  
藤枝市教育委員会 1990年 「静岡縣藤枝市郡藤井名掘査発掘調査報告書IV」  
藤枝市教育委員会 1981年 「国道1号線藤枝バイパス(藤枝地区)埋蔵文化財発掘調査報告書(第6番) 上 藤田川の丁遺跡」  
富士宮市教育委員会 1989年 「弓沢遺跡」  
南伊豆町教育委員会 1978年 「南伊豆下加茂日詰跡」  
南伊豆町教育委員会 1978, 1979年 「日詰遺跡」Ⅲ~V

## 第3節 静岡県における弥生時代・古墳時代の木製農耕具

- 1 はじめに
- 2 静岡県の木製農耕具の出土遺跡
- 3 鍔の分類試案
- 4 静岡県内の鍔の器種とその組成の変化
- 5 まとめ

### 1 はじめに

静岡県内では、近年低湿地性の遺跡の発掘調査が進み、地下水位の高いこれらの遺跡から多数の木製品が出土している。特に静清バイパスの建設に伴う関連遺跡では水田遺構を多く検出しており、また、これらの遺構より水田遺構と密接な関係をもつ木製農具が出土している。遺構に関しては、様々な角度より検討が加えられて来ている。一方で木製農具の資料も蓄積されつつあるが、その地域性の色濃い故か、また出土遺跡が偏在するが故か、共通の土俵で検討、分析、整理されることが少なかった。

ここでは静岡県内の遺跡から出土した木製農耕具を集成し、検討してみた。弥生時代・古墳時代の農耕具とは鍔と鋤を示す。当該時期の鍔と鋤に関しては出土資料も蓄積され、各器形の系譜や器種組成も把握できる段階に来ている。小文では鍔の分類の整理をまずしてから、静岡県内出土の鍔鋤をこの分類に当てはめ、全国の鍔鋤の形態変遷を瞥見しながらその消長を確認していきたい。

### 2 静岡県の木製農耕具の出土遺跡

今回、県内の鍔鋤を集成し年代順に並べる際、当該時期を以下の5期に大別した。当然、土器の編年を当てはめたのであるが、県東・中・西部で必ずしも形式名が横並びになるわけでもなく、研究者間の年代観の相違もあって、若干不明確な時代区分になることは了解願いたい。まず1) 弥生時代中期後半は現時点で明確な水田遺構、木製農具が確認できる最も古い時期である。水田稻作が体系化され、完成された技術で導入された時期、「初期農耕」の時期である。ただ西部において国鉄工場内遺跡、角江遺跡などで中期の木製農具が瓜郷式土器を伴っており、畿内第三様式併行の時期も含めて考えたい。あくまでも三河で長床式、遠江で白岩の新しい段階、駿河で有東式、南関東でいう宮ノ台式の時期が中心である。<sup>(1)</sup> 2) 弥生時代後期前半は、県下では広域に確認できる伊場式（県西部）、登呂式（県中・東部）の時期である。後期の中でも、所謂古式土師器を伴わない古い時期と言える。瀬名遺跡、長崎遺跡など静清平野の遺跡の中には、この登呂式の時期と次の古式土師器を伴う時期が明確に分層できる場合が何ヶ所か指摘できる。（瀬名遺跡の2・3区では、この2時期の層の間に砂層が挟まれているという良好な出土資料がある。）3) 弥生時代後期末から古墳時代前期までは、弥生時代後期の土器の中に古式土師器が混在し、S字状口縁甕が伴出する時期である。静清平野で確認できる水田遺構では、杭列・横板・敷板の構造を持つ杭列畦畔が確認できる時期である。これらの畦畔内からは多数の木製品が出土しており、必然的に木製農具の資料も、この時期には他の時期に比して数、種類とも豊富である。4) 古墳時代中期であり、所謂和泉式土器を伴う時期である。また川合遺跡のS R 1101内出土の木製品もこの時期に含めた。土師器では宮之腰II式、陶邑編年のT K 208型式の時期まで含んでいる。5) は古墳時代以降で、歴史時代（奈良時代）の要素がない時期である。この時期以降、木製農具の出土点数は極端に減り、また時期を限定して考えることが出来るその点数は数点に留る。歴史時代に入ると、木製農耕具の形態変遷、ましてやその器種組成を検討出来る資料は今のところないのが実状である。以上の5

期に出土木製農耕具を当てはめたが、中には時期幅を限定できない資料もあり、それらは今回除いた。

次にこれらの木製農耕具が出土した遺跡のうち主なものについて、その位置、立地条件、農耕具の出土状況について概観しておく。

戦後まもなく日本考古学協会主導のもと、登呂遺跡（静岡市）が調査された。1947年から4年間の調査で水田跡と集落跡が検出された。木製品は奈良県唐古遺跡と並び評される弥生時代の生活文化を知る重要な資料として注目された。容器類を中心とする様々な日用品、鉢・鋤・臼・堅杵・ヨコヅチ・田下駄などの農具、劍・琴などの祭祀具、工具、建築材など多数にのぼった。これらは水田域の杭打ちの畦畔付近より出土したものが大半である。山木遺跡（茎山町）も1950年に第1次調査が行われ、その後1984年の第8次に至るまで調査が実施されている。狩野川の支流の堂川が平野部に流れこむ低湿地に立地し、住居跡、水田の畦畔、水路が検出されている。やはりこの畦畔内や水路跡より多数の木製品が出土した。特に1次2次の調査では鉢・鋤・エブリ・堅杵・田舟・田下駄等の農具をはじめ、剣物容器、梯子・ネズミ返し等の建築材等の木製品が確認された。大半は古墳時代前期に属すると考えられ、ここでは弥生時代後期～古墳時代前期の幅で考えたい。白岩遺跡（菊川町）は菊川の支流、古西方川によって形成された自然堤防の微高地上にある。1966年の調査でDトレンチ内で農具を中心とする木製品が多数出土している。中期II（東三河の下長山式土器）の土器を共伴した。木製品は鉢・剣物容器、弓等が出土している。以上3遺跡は戦後まもなくより調査が開始され1950年代から木製農具の存在が意識された遺跡である。1970年代に入ると山木遺跡の3次以降の調査が進み、1976年以降には浜松市の国鉄工場内遺跡（梶原遺跡）が始まり、特に1982年の調査で砂堤列から北の低地に下る包含層より瓜郷式土器と共に、鉢・木鎌等の木製品が出土した。伊場遺跡（浜松市）では1968年の2次調査以降、1973年の7次調査までの報告が木製品に限っては1978年に刊行されている。大溝内より多数の木製品が確認されている。鉢・鋤・堅杵・单甲狀木製品は弥生時代後期前半のものである。また鉢・鋤・大足・エブリ・馬鉢・鎌・堅杵などの農具、そして漁具、運搬具、編具、機織具、粗箸などの厨房具、曲物・剣物・挽物などの容器、弓・鞍などの武器・武具、人形・馬形・舟形・絵馬・畜串などの祭祀具が古墳時代以降の木製品として報告されている。これだけの器種のバラエティーは時期幅があるという理由からも窺えれるが、これほど多岐に亘る木製品を一遺跡で出土したことは注目に値する。分類及び用途の限定にも民具学の成果が援用されており、学際的な木製品分析を展開した。<sup>(2)</sup> 1978年に調査された川の丁遺跡（藤枝市）は志太平野北部の丘陵に沿う低湿地で、河川跡、住居跡が確認されている。弥生時代後期～古墳時代前期の旧河道より二又鉢、田下駄、劍形・ヨコヅチ・剣物などの木製品が出土している。

1980年代に入ると、地下水位の高い低湿地性の遺跡の発掘が次々と行われ、木製品も多数出土し、資料が蓄積されていった。御殿・二之宮遺跡は磐田原台地の南端で平野と接する低湿地であり、1978～1985年にかけての4次にわたる調査が行われた。弥生時代後期～古墳時代前期にかけての溝を検出し、二又鉢・鋤・フォーク状木製品などの農具などが出土している。また1989年の第5次調査では、土坑内より一本鋤・二又鋤が出土している。小黒遺跡（静岡市）は静岡平野南部、低い丘陵が低湿地と接するところで、微高地上には集落が、低湿地には水田が広がった。1982年には調査され、低湿地部より多又鋤・田下駄などの農具、容器、建築材、琴・劍形・舟形・人形等の祭祀的な木製品が確認されている。神明原・元宮川（大谷川）遺跡（静岡市）は、1983年～1985年にかけて有度丘陵西端を南北に流れた旧河道の調査が主だったので、多量・多数の木製品が出土した。特に土製の祭祀具と一緒に旧流路内より木製の人形・馬形・刀形・舟形・畜串・絵馬等が多数出土したため、祭祀遺跡として有名になった遺跡である。弥生時代後期の鋤から特に古墳時代後期～奈良時代にかけての木製品は祭祀遺物に留らずに、多種多様な木製品が確認できた。鋤・鎌・ヨコヅチなどの農具、剣物・曲物・挽物などの容器のほか梯子・下駄・弓など伊場遺跡に匹敵する程の量と種類であった。1988年には、離鹿塚遺跡（沼津市）という浮

島沼の中央部に近い低湿地遺跡が調査された。弥生時代後期の住居跡と溝状遺構等が検出され、やはり多数の木製品が出土した。羽板まで復元できる鳥形木製品・剣形・舟形・陽物等の祭祀具があり、その他多又鋤・広鋤・小型鋤・鋤・ヨコヅチ・田下駄などの木製農具・効物などの容器・建築材が出土した。

静清バイパス関連の調査が1984年から本格的に開始され、静清平野の低地部も深く発掘調査されることになった。特に木製品を多数確認できた遺跡として、川合遺跡・長崎遺跡・瀬名遺跡・池ヶ谷遺跡を挙げることができる。川合遺跡は静岡平野の北東部で長尾川の東に位置し、洪水痕跡が何度も確認できる低湿地性の遺跡である。弥生時代後期～古墳時代前期にかけての包含層及び流路より、多又鋤・小型鋤・鋤・田下駄などの農具・効物容器・建築材が出土している。また、旧流路SR1101内から5世紀末の土器と伴に多数の木製品が確認されており、古墳時代の木製品で時期が限定できる貴重な資料である。この流路内より後述する鋤の一群の他、鋤・鎌・堅杵・ヨコヅチ・編鎌などの農具・舟形・刀形・剣形・斎串などの祭祀具などが出土している。池ヶ谷遺跡（静岡市）は駿河丘陵の東山裾にあり、麻機低地との接点にある遺跡であり、条里制地割が明瞭に確認できている。その畦畔は杭が打たれていたり、多数の木製品が埋め込まれており、平安時代の鋤・大足・輪カンジキ型田下駄・鎌などの農具が出土している。下層の弥生時代の水田跡からは静清平野においては普通に出土する板状の田下駄が多数出土している。長崎遺跡（清水市）は清水平野の北西部の巴川流域低湿地に位置し、弥生時代後期～古墳時代前期の水田跡からやはり多数の木製品が出土している。鋤・鎌・田下駄・ヨコヅチなど、静清平野の当該期における一般的な木製農具を揃えている。瀬名遺跡（静岡市）については、以上の県下の木製品農耕具検出の歴史の中で特筆に値する2点を挙げておく。まず弥生時代後期～古墳時代前期にかけての藤柄装着の又鋤の資料が揃っていることである。そして古墳時代中期の完形の諸手鋤の出土である。内容については後述する。また農耕具以外の木製品の特色は別の場所で詳説しているので、ここでは記さない。

以上が1993年現在、県内で確認できる木製品を多く出土させた主な遺跡である。1993年現在調査中で木製品が出土している遺跡として、岳美遺跡（静岡市）、上土遺跡（静岡市）、角江遺跡（浜松市）などがある。特に角江遺跡は、既に弥生時代中期後半から後期にかけての多数の木製農耕具が出土しており、その器種組成は今まで県内で確認されているどの遺跡のものよりも揃っていることが予想される。また臼・堅杵などの農具・効物・高杯などの容器・弓・琴などの弥生時代の木製品が確認されている。

### 3 鋤の分類試案

農耕具に限らず、出土遺物の命名・分類が研究整理されていくには、良好な一括資料に恵まれることが必要不可欠な条件であることは言うまでもない。木製農耕具に関して、良好な一括資料の出発点は唐古遺跡（京都帝国大学 1943）であり、その後登呂遺跡（日本考古学協会 1949、1954）の調査があり、戦後急速な開発事業に伴って低湿地・旧流路の発掘調査が行われていった。大中の湖遺跡の調査が、1964年～1966年にわたり、その調査結果を中心に、その他篠束遺跡（小坂井町教委 1961）、山木遺跡（篠山町 1961）等の資料を加えて、弥生時代木製農耕具を初めて体系的に検討したのが木下忠氏であった（木下 1966）。木下氏は機能を考慮に入れつつ、農耕具を「平ぐわ」「またぐわ」「すき」「ふぐし」「フォーク状木器」に大別した。形態を細分せずに、鋤の柄の装着角度を検討するなど、その後の形態的に細分類するその後の動向とは違う1歩を踏み出している。大中の湖遺跡の成果を受け、本格的に弥生時代の木製農耕具を分類したのが黒崎直氏であった（黒崎 1970）。その後体系的にまとめられる農耕具の分類の根幹がここに出揃っている。「広鋤」「狭鋤」「丸鋤」「又鋤」と鋤を分け、鎌は「長柄鎌」「着柄鎌」「スコップ」に分けている。そして、弥生時代を4期に分け（Ⅰ期弥生時代前期、Ⅱ期弥生時代中期前半、Ⅲ期弥生時代中期後半、Ⅳ期弥生時代後期）、当時としては限定された資料の中で、その変遷を捉えようとした。この時期、黒崎氏のⅢ期、Ⅳ期の資料があまりなく、変遷を追える段階ではな

かった。その後、70年代に入ると、里田原遺跡（長崎県 1974）、瓜生堂遺跡（瓜生堂遺跡調査会 1972）、南方遺跡（岡山市 1971）、納所遺跡（三重県教委 1973）、下市瀬遺跡（岡山県教委 1973）、上東遺跡（岡山県 1974）、池上・四ツ池遺跡（第2版和国遺跡調査会 1970）等の資料が報告され、それらを受けて、根木修氏が縄文時代からの流れも考慮に入れつつ検討している（根木 1976）。鍬は「A引鍬」と「B打鍬」とに大別している。「引鍬」とは、「着柄角度は鋭角的で60度を境に前後15度範囲で着柄されている」鍬で、(A)引鍬(B)丸鍬(C)特殊の引鍬に分かれている。また「打鍬」とは「着柄角度は60～90度で鍬身15cm以下と相対的に幅狭に作られている」鍬で、(D)打鍬(E)打引鍬(F)馬鍬とに分けている。鍬を柄の装着角度を中心に打鍬と引鍬とに分けることは、民具研究の分類の中核である機能分類に近いもので、形態を機能的に類別できる可能性を指摘したものである。しかし、民具研究者が現行の民具例の鍬を機能分類をしようとしても出来ずにおり、用途が聞き取れる民具においても、その柄の装着角度や身の幅で打ち鍬と引き鍬を明確に分離できない現今、この分類の有効性は完全とは言い切れないものがある。<sup>(6)</sup>考古資料を単に機能分類にだけ注視して分類することの限界を感じさせる。鍬はA長柄鍬、B踏鍬、Cスコップ状木器、Dフォーク状木器、Eスコップ状木器、F馬鍬とに分けている。Bの「踏鍬」とは「身と柄が別木で作られ、組み合わせて使用される」鍬であるが、この組み合わせ動を「踏鍬」という命名のものと「浅耕用」としている。「着柄状況」「強度」から導き出せるとするが、後述するように組み合わせ動には、土木用具としての色彩が強いことを考え合わせ、この機能に関する説には背首しがたいものがある。

現在、考古資料の木製農具を分類する上において、最も基本となる分類は、1985年に黒崎直氏が示した分類（黒崎 1985）であろう。拾六町ツイジ遺跡（福岡市教委 1983）、薬畠遺跡（唐津市教委）、板付遺跡（福岡市教委 1981）等、九州の出土資料も増え、全国的に鳥瞰できる資料が揃ったところで分類を試みている。「狭くわ」「広くわ」「又くわ」「横くわ」に大別し、更に、その中を、着柄角度、刃幅、平面形など諸要素より細分を試みている。これらの分類の上に形態的変遷をおさえ、更に機能にまで言及している。拙文での分類もこの黒崎氏の分類の延長上にあることは言うまでもない。

山田昌久氏は「新保遺跡」の中で、新保遺跡出土の木製品農耕具190点を整理、分類している。大きさは広鍬、狭鍬、横鍬、又鍬、三又鍬、長柄鋤、着柄鋤、鍬、農具膝柄、農具直柄と分けている。さらに、広鍬ならa類～h類まで8つに細分している。その形態的特徴も各々記述している。山田は北九州、近畿、東海、関東、各地方の鍬鋤の形態も検討し、「弥生時代中期後半以降の鍬鋤類の動向は(a)近畿～北陸の繁がりと(b)東海～(中部)～北関東の連絡とのふたつの大きな流れを示しているらしい。」と指摘している。この報告書内では、新保遺跡出土の鍬鋤しか分類していないが、『シンポジウム日本における稲作農耕の起源と展開』（山田 1988）の資料で「木製農耕具の形式分類」として、全国の遺跡出土の鍬鋤を念頭において、模式図で分類を示している。「広鍬」はA～Uまで実に21に細分している。細分の基準はこれがシンポジウムの資料という性格上か明記されていない。また、「時期差、地域差別木製農耕具」の表から地域差である組成の違いは了解できても「時期差」は読みとるに困難である。

短いレポートではあるが、上原真人氏は畿内の弥生時代、古墳時代の鍬鋤を集成している過程で得られた分類を明示している。鍬は身と柄とから成る故、「身の材質、柄の形態と着柄法、身の形態の3つの属性に基づいて」分類することが可能であるという。身の材質は当該期においてはすべて木製である木鍬が大半である故問題はない。着柄法で大別すると「直柄鍬」と「曲柄鍬」に分けることができる。また身の形態は平鍬と又鍬に大別でき、平鍬は広鍬、狭鍬、横鍬に分ける。直柄の広鍬はI式よりIV式まで細分できる。この分類に基づき、直柄平鍬、曲柄鍬の各々の変遷を整理している。機能にも言及しながら、器種組成、形態変遷をまとめている。ただ、分類上、柄の装着法と身の形態の各々の分類基準の優先が不明で、「身の材質」「柄の形態と着柄法」「身の形態」の3つの属性を同時に念頭に入れるることは難しい作業である。

以上、諸氏の木製農耕具の分類を念頭に入れつつ、東海地方で出土した木製農耕具の実態を把握するに相応しいと考えられる分類を考えてみたのが次の表である。

鉢	柄孔装着鉢	柄孔狭鉢
		柄孔広鉢
		柄孔横鉢
		柄孔小型鉢
		柄孔小型多本鉢
		柄孔諸手鉢
		柄孔三本鉢
		柄孔四本鉢
		柄孔多本鉢
曲柄装着鉢		腰柄狭鉢
		腰柄広鉢
		腰柄二又鉢
		腰柄三又鉢
		腰柄多又鉢
		ナスピ型腰柄鉢

第33表 鉢の分類案

まず、身と柄の結合方法で柄孔装着の鉢と曲柄装着の鉢とに大別する。身に孔を穿って、直柄を挿入し固定するのが柄孔装着の鉢である。<sup>(7)</sup>その後、身が刃先が鉄器化した風呂鉢へ、そして身全体が鉄器化した鉢鉢になっても、この身と柄との結合方法は不变であり続けている。現行の鉢のうちでこの結合方法をとらないものは、数える程しかないものも事実である。一方、曲柄装着の鉢とは身に緊縛用の棒状の突出部をつくっており、そこに膝柄または反柄を植物の繊維等で縛り付けるものである。膝柄とは枝材の分岐部分を利用し、カギ状に屈曲した鉢柄であり、反柄とは、カギ状に緊縛部が屈曲せず、柄が反ったまま端部に至り、端部には緊縛のための突起を設けているものである。この装着の鉢はナスピ型鉢の消滅とともに終焉を迎えると見える。平安時代後半には消滅しているのだろうか、中世以降現在に至るまで、この装着法は絶えて久しい。これは身が全て鉄器化することで、身と違う材質の木質の柄には緊縛ただけでは固定できなかった事情が消滅を招來したものである。

柄孔装着の鉢は狭鉢、広鉢、横鉢、小型鉢、小型多本鉢、諸手鉢、三本鉢、四本鉢、多本鉢に分けることができる。

狭鉢はやはり黒崎氏が定義付けるように、刃幅10cm前後以下の鉢である。鉢全体の数の中で、狭鉢に属するものは少なく、組成全体の中でやはり特異な機能を持ったと考えられる。弥生時代中期の資料の中に、舟形隆起を削り出す狭鉢がある。一方着柄隆起を持たない狭鉢も確認できる。

広鉢はやはり黒崎氏によると、着柄隆起を外側に作る刃幅15~20cm前後の一般的な鉢を示す。黒崎氏はA~Fの6つに細分しているが、Fの「蟻じゃくり」の溝を持つものとしている鉢は平面形が台形を示すものと、平面形が有頭状になるものの2種があるため、このアリジャクリ溝を1つ下位の属性として整理した。広鉢は概ね4つに分けられるだろうか。1つは肩を斜めに切り落とし、平面形が台形をするものである。着柄のための舟形の隆起が外側に削り出されている。2つに平面形が基本的には台形であるが、柄孔付近の左右両側にくびれをつくり、有頭状にする広鉢がある。これも舟形隆起が外側につく。この2種の広鉢には、泥除け具を付ける仕組みをもつものとそうでないものとがある。3つ目に平面形がバチ形になるものがある。これは明瞭な舟形隆起をもたない。柄孔付近をやや肥厚に削り出しているか、またはほとんど着柄隆起を持たないものもある。4つ目は平面が長方形を呈するもので、これは平面が台形になるものが明瞭な舟形隆起を持つものに対し、柄孔付近を肥厚にしただけの隆起があるものと、全く隆起がないものとに分けることができる広鉢である。

横鉢は「身丈よりも刃幅の方が広い」(黒崎 1985)鉢であり、木目が横位に走り、通常の木目が縱位に走る幅が縱全長よりも狭い鉢とは明瞭な差異を示す。平面形が丸または梢円のものと長方形を呈す

るものとがある。東海地方では丸鍬と呼べる鍬は破片でしか確認できないが（朝日遺跡）、長方形を呈する横鍬は弥生時代を通じて確認できる。長方形の横鍬には柄隆起のあるものとのないものとがある。

小型鍬は種上昇氏が東海地方の鍬の器種の中でその名称を用い位置付けしたのが始めてであろう。縦全長が10cm～15cm程、身幅も8cm～10cm程度の小型の鍬である。鍬としての機能をはたさないのではなく疑問もあるが、ここで確認できる小型鍬はすべてアカガシの柾目材を用いており、柄孔は他の柄孔装着鍬と同じ程度の径をもつことから、鍬の製作技術により作られていることは確かで、ここでは鍬としたい。鬼虎川遺跡（大阪市）をはじめ、全国的に散見できる資料である。東海地方では、弥生時代中期、後期においては、特異な器型ではあるが、その消長を追うことができる鍬である。また、この小型鍬とほぼ平面積が近似値をしめす多本鍬が散見できる。四本が基本かとも思われるが、三本も確認できる（静岡市長崎遺跡）。

「諸手鍬」という名称は北九州における初期農耕の段階に導入された鍬で、身はエブリ状に長く、ほぼ中央に柄孔が穿たれ、身は緩やかに彎曲する。この器型の諸手鍬は北九州、畿内（東は三重県納所遺跡まで伝わる）にかけ、やはり初期農耕の農耕具であった。この諸手鍬と形状が極めて類似する鍬が、静岡平野の遺跡の5世紀代の層より出土している（川合遺跡、瀬名遺跡）。この古墳時代中期の諸手鍬は片方の刃先にU字型の鍬先を装着する。この諸手鍬については後述するが、器型的には、この2つの諸手鍬は近似しているため、ここでは「諸手鍬」という同一の用語にした。現在の出土資料だけだと、近畿まで分布する初期農耕の諸手鍬は、一度そこで途絶えると考えられてもいいように、東海、北陸以東では確認例が少ない。ただ新保遺跡から弥生時代後期の例としてこの後者の諸手鍬と同タイプと思われるものが出土している。今後出土資料の増加でこの諸手鍬の2つの系譜がつながるのか、また全く別の系譜なのかが判別できるであろう。現段階では機能を考え合わせ、形態的に近似しており、同系譜の可能性があるため、ここでは「諸手鍬」と総称したい。

柄孔装着の鍬において刃先が分かれることは、フォーク状に先が尖り、刃先の断面は方形または円形になる。これらは又鍬と呼ぶより、多本鍬と呼びたい。後述の曲柄装着の鍬においては分かれている刃先が幅広で薄く作られており、多又鍬と呼ぶに相応しい形状を示している。この柄孔装着鍬においては三本、四本、多本鍬に分けて考えたい。<sup>(10)</sup>

曲柄装着鍬には狭鋸、広鋸、二又鋸、三叉鋸、多又鋸、ナスピ型鍬に分けることができる。ナスピ型鍬を除けばすべて柄は膝柄になると、現段階では言えるであろう。曲柄装着鍬と総称したのは膝柄を装着する鍬の系譜の中で登場したナスピ型鍬に反柄が装着されるようになり、ナスピ型鍬に関してはその身の形状からだけでは柄が膝柄になるのか反柄になるのか不明であるという事情があったからである。膝柄狭鋸とはやはり柄孔狭鋸と同様に身幅が10cm～15cmと狭く、身が長い形状のものである。この膝柄狭鋸はその着柄軸の形状により2つに分けて考えることができる。1つは着柄軸の外側が有段状に上端部と中位部に緊縛用の段差を削り出しているものと、もう1つは、ただ着柄軸の上端を有頭状にしてあるものである。膝柄広鋸は身幅が20cm前後または20cm～25cmと幅広のものである。身の形状は膝柄狭鋸のように定型化しておらず、平面形は多様である。<sup>(11)</sup>下端の刃先に向かって幅広になる傾向があるものが多いのが特徴であろう。

膝柄装着の二又鋸は身全幅が25cm～30cmとあり、身の長さは40cm～50cmと大型で刃厚は1cmに満たない薄い仕上がりである。中央縦に分岐の切り込みを入れているが、幅2cm～3cmと狭く、又鋸といつても、身に十分土がのる構造を示す。この二又鋸は東海、関東、南東北と広域に分布し、弥生時代後期に現れ、古墳時代初頭に盛期を迎える、古墳時代中期には見られないという特異な消長を示す鍬である。地域性を読みとる資料としては、重要な鍬である。膝柄装着の二又、三叉、多又の鍬がある。これらの又鋸は前述の柄孔装着の多又鋸と違って、又の歯は幅があり、薄く作り出されている。膝柄装着で身が長

く、身幅が狭い長身の鉄がある。

曲柄装着の鉄の中に、「ナスピ型」の鉄がある。藤柄または反柄を緊縛しやすいように、着柄軸に突起を削りだしており、それが平面形で見るとナスピのヘタ状をなし、それより「ナスピ型」鉄と呼ばれる。畿内を中心に二又のナスピ型鉄が弥生時代後期に見られるが、静岡県下ではナスピ型の着柄軸を有する鉄は現段階ではU字型の鉄刃を装着する古墳時代中期以降のものしか確認されていない。石川条里遺跡（長野県）、新保遺跡（群馬県）では、二又のナスピ型鉄が出土しており、東海地方でも今後、U字型の鉄刃を装着しない無分岐のナスピ型鉄や二又のナスピ型鉄が確認できる可能性はある。ナスピ型鉄はU字型鉄刃を装着しない木鉄として無分岐のものと二又に分かれるものとがある。それにU字型の鉄刃を装着するものを加えると三つに分けることができる。（全国的には三又のものもある。）

以上が北九州から南東北までの弥生時代、古墳時代の鉄を分類する試案である。

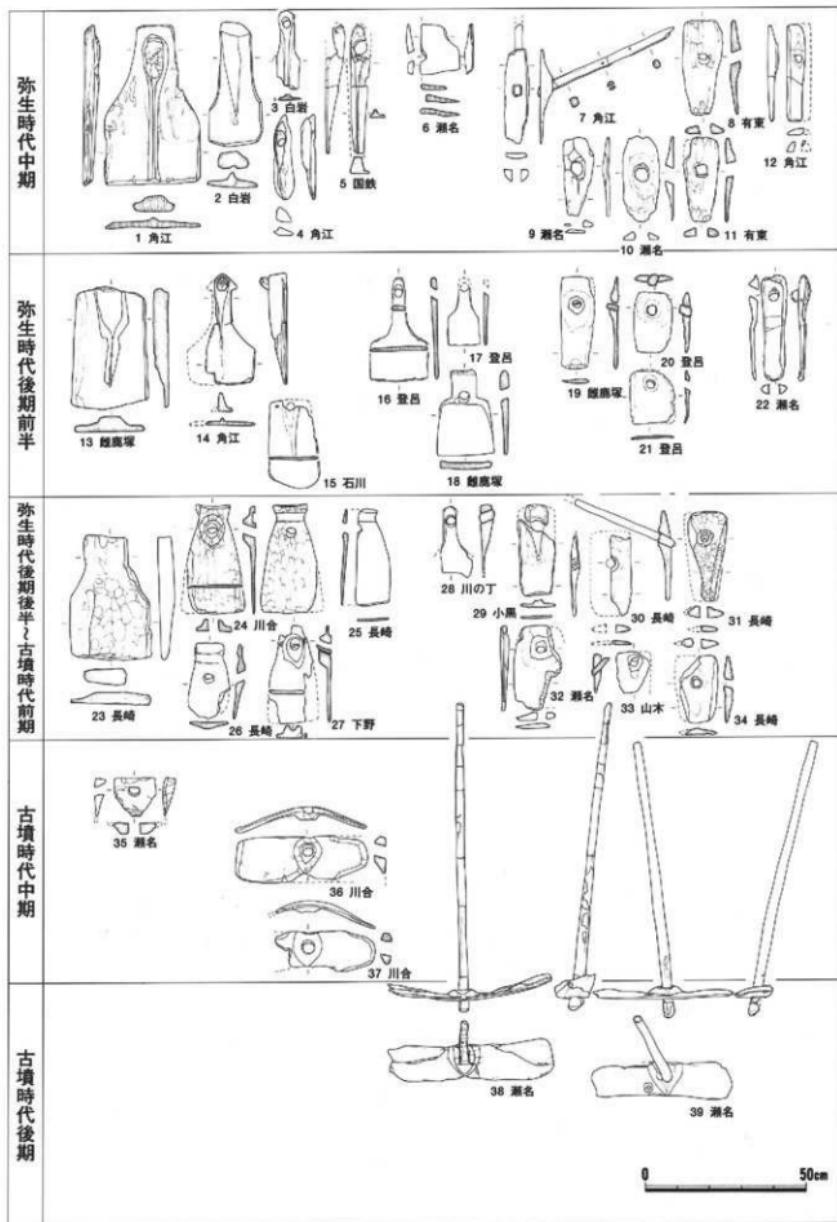
#### 4 静岡県内の鉄の器種とその組成の変化

静岡県下の遺跡より出土した木製農耕具を集成してみた。今後より資料が追加されるであろうが、弥生時代から古墳時代の県内の木製農耕具の変遷は概ね追えるものと思われる。第33図静岡県内の木製農耕具から第38図までを参照していただきたい。既述のように時期は弥生時代中期後半、弥生時代後期前半、弥生時代後期後半～古墳時代前期、古墳時代中期、古墳時代後期の5つに分けた。ただ古墳時代後期に属する木製農耕具は数少なく、この時期を除いて検討せざるをえないところもある。

1、2、3、4、13、23は一般的な広鉄で平面が台形を呈するものである。いずれも舟形隆起が明瞭である。1、2、13、23はいずれも未製品で舟形隆起は削り出してあり、肩もおとしているためこの広鉄と判別がつくが柄孔もまだ穿たれておらず、身全体もまた肥厚である。3、4は欠落部分があり、広鉄と断定できず狭鉄になる可能性もある。5は舟形隆起があり狭鉄になるものである。14、24、25、26は平面形か有頭状になる広鉄である。14は柄孔両側に傘状の突起を削り出している。また舟形隆起が明瞭である。24、25、26は上部両側縁をくびれさせ、有頭状にしている。いずれも「蟻じゃくり溝」と呼ばれる泥除け具装着用の溝が柄孔上部にある。これらの着柄隆起は所謂「舟形隆起」と呼べる程明瞭なものではない。15、27は平面が台形で柄孔左右両側付近にやはり泥除け装着用の穿孔がある。16、17、18、28はバチ形の広鉄である。これらの着柄隆起は明瞭でなく、刃先から基部に向かって肥厚していく。7、8、9、10、11、19、20、21、29、30、31、32、33、34は平面が長方形を呈す広鉄である。これらは弥生時代中期後半の資料にも舟形隆起はみられず、柄孔に向かって漸次肥厚する着柄隆起である。広鉄を検討して言えることを拾いあげてみる。明瞭な舟形隆起を持つ広鉄は、弥生時代中期後半からあり、後期前半で消えてしまう。泥除け装着の構造を持つ有頭状の広鉄は、弥生時代後期～古墳時代前期には限定できよう。バチ形の広鉄は弥生時代後期前半が中心である。平面長方形の広鉄は弥生時代中期後半から古墳時代前期まで、その形態を殆ど変えず継続的に用いられた。

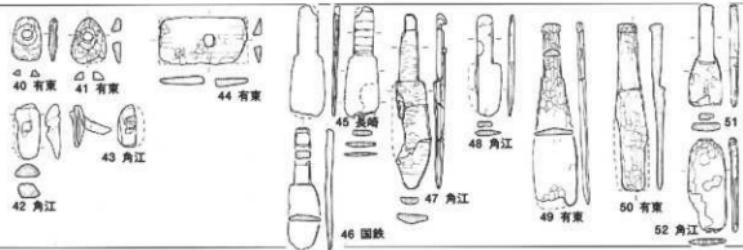
5、12、22は狭鉄である。他の鉄の出土数に比して少ない。40、41、42、43、53、54、55、56、57、65、66は小型鉄である。65、66は川合遺跡出土のものであるが、調査者によると弥生時代後期～古墳時代前期の時期の幅があるという。後期前半に属してもかまわないかもしれない。44、58、67は横縫である。58は柄孔付近を台形状に厚く削り出している。67は柄孔付近が緩やかに厚くなるようにしている。

45、46、47、48、49、50、51、52、59、60、61、62、63、64は藤柄装着の平鉄である。45、46は着柄軸外側に有段状の緊縛用突起部を削り出しており、樋上昇氏が「東海の藤柄鉄A」と呼ぶ東海地方独自の着柄軸のものである。47、48、49、50、51と弥生時代中期後半のものは着柄軸先端は明瞭に有頭状に削りだしている。47、51は藤柄が当たる部分を身の平坦面より一段落としている。後期前半になると、着柄軸の先端部が明瞭な有頭にならない。また身の平面形が60はオムスピ形、63は長方形と中期後半のような規格性が失なわ

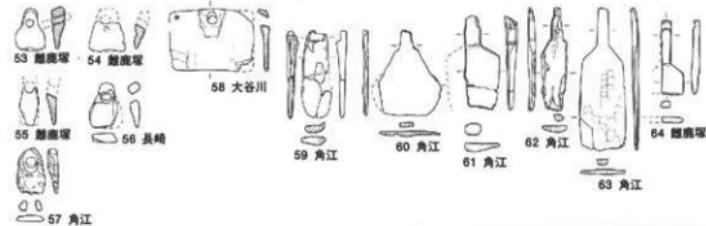


第33図 静岡県内の木製農耕具

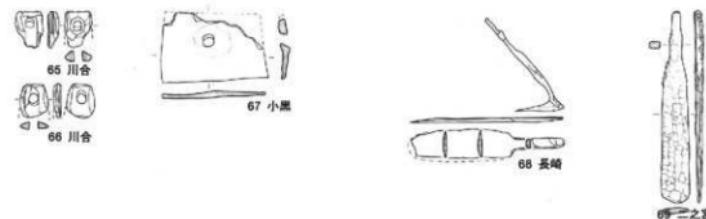
弥生時代中期



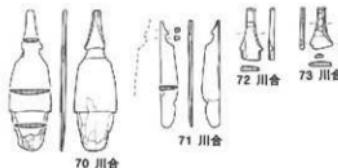
弥生時代後期前半



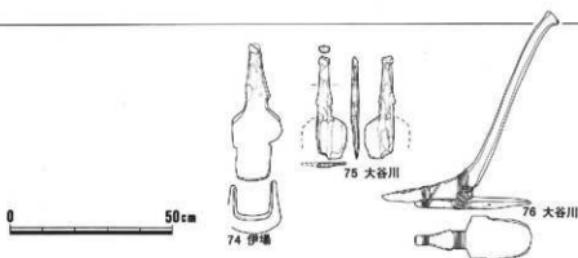
弥生時代後期後半  
～古墳時代前期



古墳時代中期

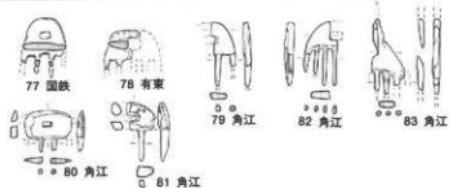


古墳時代後期



第34図 静岡県内の木製農耕具

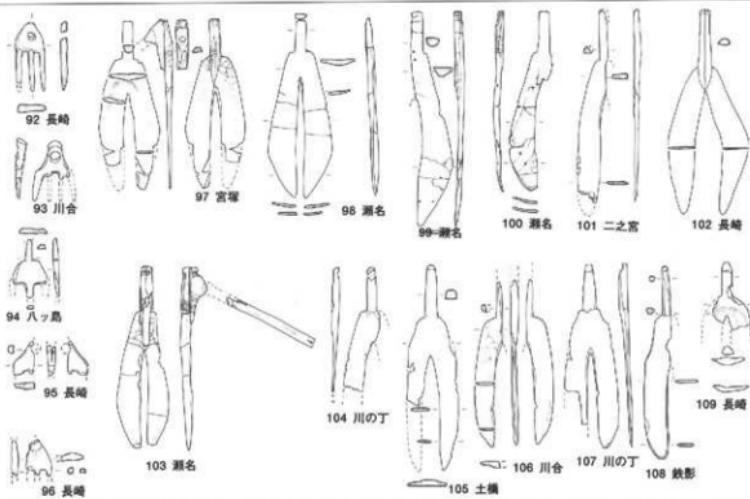
弥生時代中期



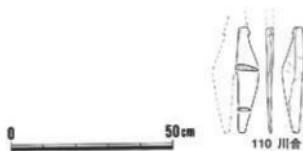
弥生時代後期前半



弥生時代後期後半～古墳時代前期



古墳時代中期



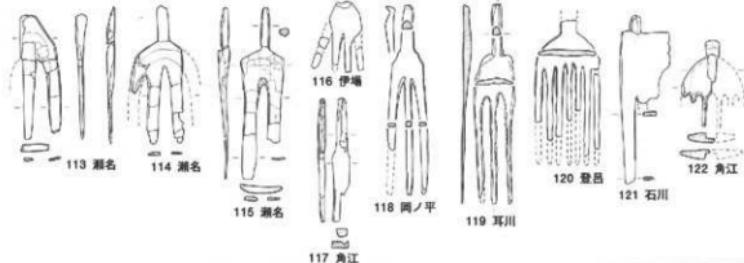
0 50cm

第35図 静岡県内の木製農耕具

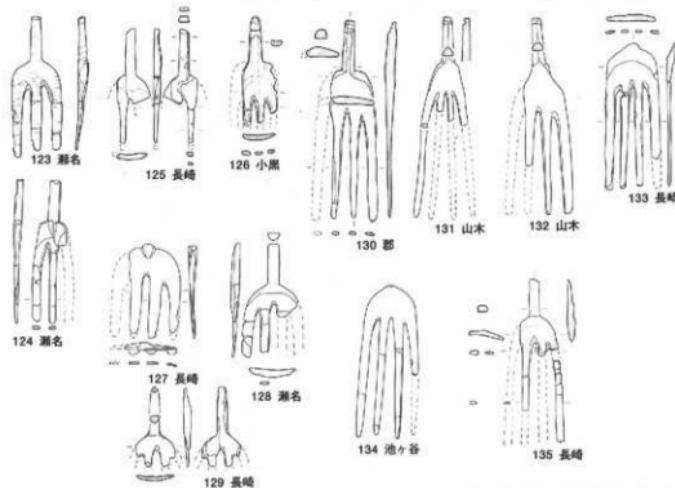
弥生時代中期



弥生時代後期前半



弥生時代後期後半～古墳時代前期

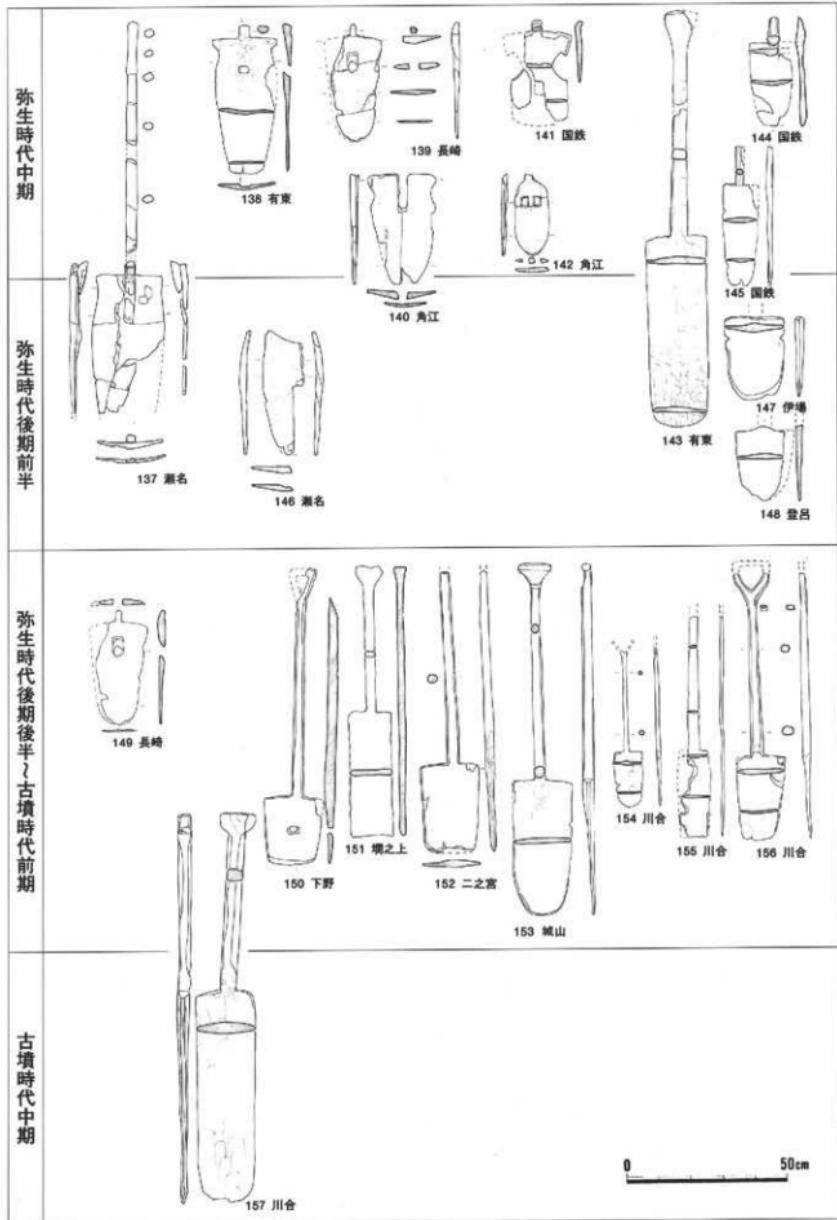


古墳時代中期



0 50cm

第36図 静岡県内の木製農耕具



第37図 静岡県内の木製農耕具

弥生時代中期

169 角江

170 角江

168 有東

弥生時代後期前半

173 登昌

174 登昌

171 村前

172 間の平

弥生時代後期後半～古墳時代前期

175 長崎

176 長崎

167 川合

166 長崎

165 長崎

164 川の丁

163 潟名

162 畠名

161 塚之上

160 二之宮

古墳時代中期



第38図 静岡県内の木製農耕具

れてきているのが了解できる。69は身が59cm程あり、長身の膝柄鍬である。以上膝柄装着の平鍬は中期後半には定型化されたものが現われ、後期前半には平面形がくずれ、後期後半には見当たらぬようになってしまう。

36,37,38,39はU字型鉄刃が装着される諸手鍬である。36が身としては残存状態が良く、これから身の形状を類推したい。36は横長に置くと右側にU字型鉄刃が装着され、左側はそのまま木の刃先である。着柄隆起は三角形または、逆水滴状をなし、緩やかな隆起である。着柄隆起の下端は側縁から切り込まれている。柄の装着復元は38を参照したい。この柄孔は正方形で、柄の装着角度はこの復元が正しいと思われる。<sup>(13)</sup>柄自体は何ヶ所かに折れて出土しているが、柄の装着部は土圧等の影響での変形はなかつたと見る。柄は上方（身を横長に置いた位置で）に若干ふれていますが了解できる。つまり、右側のU字型鉄刃を用いる打ち鍬としても用いられ、横長に置いた下端を利用する「エブリ」の機能もあったと推定できるものである。この4例とも古墳時代中期に限定できることに注目したい。他の時期でこれに類した鍬は東海地方では見当たらない。

70,71,72,73,74,75,76は所謂「ナスピ型鍬」である。着柄軸にナスピのヘタ状の突起がつく。いずれもU字型の鉄刃が装着されたナスピ型鍬と考えられる。70は残存状態が良く、明瞭にU字型鉄刃の当たりを削りだしているのが観察できる。松井和幸氏はこのU字型鍬先の出現を大阪府藤井寺市野中古墳出土の鍬先などより5世紀初頭から前葉頃としている（松井 1987）。川合遺跡の70から腰河でも5世紀末にはU字型鍬先が用いられるナスピ型鍬が用いられているのがわかる。74の鍬先は都出比呂志氏の言う「刃先部が直線刃になり、U字形というより凹字形というべきもの」（都出 1967）で、都出氏もやはりこの伊場遺跡のナスピ型鍬を示して論じているように、中期から後期に入り、この「凹字形」の刃先が出現するものと思われる。静岡県内では樋上氏も東海地方の鍬の変遷の中で指摘しているように、ナスピ型の鍬は弥生時代には見られず、古墳時代中期にU字型鉄刃を装着するナスピ型が導入される。

77,78,79,80,81,82,84,85,86,87,88,89,90,92,93は柄孔装着の多本鍬である。92が三本歯、77,79,80,81,88,93が四本歯、78,84,87が五本歯、82,89,90が六本歯になる。歯の本数はこのように4本から6本の範囲内にすべてある。この中で84,85,93は「小型多本鍬」と言えるもので、意識的に小さく作り、平面形も柄孔付近の身幅を狭くし、バチ形に近い形にしている。小型鍬とともに特異な形態を示すものである。90も6本歯で、柄孔付近を突出させるように作り出している。多本鍬は基本的に畿内の影響を受け、77,78,79,82,80,81,88,89は上端は半円形で弧を描き、刃の断面もほぼ正方形をするものである。これらは89を除き、上端から刃先まで15cm～20cm程度で、膝柄の又歛に比して小型であることが注目される。これら定型化された柄孔装着の多本鍬は、弥生時代中期後半および後期前半が中心で、後期後半には、その形も崩れているのが了解できる。78,80,81,82,88,89は柄孔が横長の長方形をしている。やや、隅丸に摩滅しているものの、これらは柄孔が長方形で、特に中期後半には明らかに円形の柄孔ではなく、円形柄孔は後期になって現われるよう観察できる。後期後半～古墳時代前期の資料には長方形になるものは見当たらぬ、長方形柄孔は後期前半で消失すると思われる。

91及び97～109は膝柄装着の二又鍬である。東海地方より南東北（中在家南遺跡）まで広域に分布する鍬である。樋上氏はこれらの鍬を「東海型膝柄鍬」と呼び、畿内の瓜生堂遺跡、池上遺跡で出土している二又の膝柄鍬と別系統として扱っている（樋上 1989）。この「東海型膝柄鍬」は愛知県の勝川遺跡、静岡県では角江遺跡、瀬名遺跡、御殿・二之宮遺跡、長崎遺跡、川の丁遺跡、川合遺跡、土橋遺跡、鍬影遺跡、宮塚遺跡等で出土しており、また長野県の石川条里遺跡、千葉県の国府間遺跡、群馬県の新保遺跡、宮城県の中在家南遺跡でも確認されている。いずれも弥生時代後期から古墳時代前期の時代幅で収まる資料である。膝柄緊縛部は断面半円形で棒状に伸び、先端部は裏面のみ有頭状に削り出している。身はほんの1cm程度の肩を設け、両側面は徐々に広がり、中位または下部で最大幅になり、刃

先に向かってやはり弧を描きながら尖る。中央部は刃先より2~4cmと幅狭なスリットが入る。厚さは薄くほぼ完形で出土した98は刃先部で3mm、中央部で6mmと相当薄く仕上がっている。出土した遺跡数から見ても静岡県内では既に9遺跡で確認されており、瀬名遺跡ではこの「東海型二又鋏」は24点もの多数が確認されている。現時点では、静岡県の西部、中部を中心として西は愛知県、東は千葉県、南東北にまで分布していると言えるかもしれない。県内資料では、97~108は弥生時代後期後半から古墳時代前期に限定できる資料で、この時期に定形化された藤柄装着の二又鋏が盛行することが確認できる。91は浜松市角江遺跡の二又鋏で、後期前半とされる。後期前半の出土例として注目される。110はナスピ型鋏が二又に分岐したものと考えられる。

113、123、124は三又の藤柄装着鋏である。123、124は着柄軸の形状が二又鋏と同形である。縦全長が43cm前後と二又鋏や四又鋏に比してやや小型である。114、115、116、117、123、126、127、128、129、130、131、132、133、134、135は四又の藤柄装着鋏である。着柄軸の形状はやはり二又鋏と同形である。身幅は二又鋏より広く、縦全長は二又鋏に近い。既述のように柄孔装着の多又鋏の刃の断面形が方形に近いのに対し、藤柄装着の又鋏は刃が幅広で薄いのが特徴である。柄孔装着多又鋏は土に突き刺す機能が想定され、また小型であることも考え、碎土に向く形態をしている。藤柄装着の多又鋏は身全体が大きく刃が幅広で薄いことより、粘性のある土を拾い上げ、土塊を移動させる機能を想定することが可能と思われる。111、112、118は藤柄装着の三又の鋏であるが、肩の形状が類似している。また左右は外側に開き先端に至り幅は狭く、厚みが他の藤柄装着の鋏よりある。120は7本歯という特異な多又鋏である。122は6本歯で、短い着柄軸が付くが、身に柄を装着する溝が削り込まれ、裏まで貫通している。この着柄装置だけ見ると、組み合わせ鋏と考えたいが、6本歯であると肩が弧を描いていることなどから、ここでは藤柄装着の多又鋏に入れておくが鋏である可能性は十分にある。今後の類例資料を検討したい。藤柄装着の三又、四又の鋏は弥生時代後期前半より古墳時代前期の時期が中心であることが了解できる。

137、138、139、140、141、142、146、149は組み合わせ鋏の身で、身と柄を別作りし、紐で緊縛するものである。特に今回、瀬名遺跡より出土した137は、柄の形状及び装着方法も復元できる資料である。柄の握りは一本鋏のように三角形またはT字状にはならず、一握分太くした端部を削り出している。身との接合部は嘴状にやや曲がりながら先端部に至り、その曲がり部分を身の装着用の孔にさし込むようになっている。138、139、140、141、147、149はこのように柄が装着されたものと想定する。142は短い着柄軸を持ち、身に2つ長方形の穿孔があり、柄が緊縛されるものとされる。大中の湖遺跡出土の組み合わせ鋏より（水野 1967）この142も組み合わせ鋏とする。ただ、この142は2孔と着柄軸までの間隔が短いため、藤柄を緊縛することも可能である。137、140はそれぞれ、瀬名遺跡、角江遺跡の方形周溝墓の周溝より出土した。農耕具というより土木具としての機能を想定したい。

143、144、145、147、148、150、151、152、153、154、155、156、157、158、160、161、162は一本鋏である。全長が143は135.3cm以上あり、154は48.5cmとバラツキがある。身の平面形もいずれも足が掛かるように肩が直線的に削り出している。143、151、153、161、157は身が長大である。握りの形状は153、157はT字状であり、150、154、156、160は三角形を呈す。151、161は未製品の可能性がある。一本鋏は弥生時代後期後半から古墳時代前期に残存状態の良い資料が多く見られる。静岡県中部の水田を多数検出した瀬名遺跡、長崎遺跡、池ヶ谷遺跡では多種で多数の鋏が出土しながら一本鋏は殆ど見られない。鋏、田下駄が水田遺構に伴い多数出土する状況と違い、鋏の出土状況は明確に水田に伴うと言えるものが少ない（162は水田関連である）。先述のように、組み合わせ鋏が土木具の機能を果たしていたことから、一本鋏も水田の起耕具としてより土木具としての機能を中心と考えたい。

159、164、165、166、167は櫛状の木製品である。164、165、166はいずれもアカガシ材で出来ており、

第33表 静岡県木製農耕具の器種の消長

	弥生時代中期後半	弥生時代後期前半	弥生時代後期～古墳時代初頭	古墳時代中期	古墳時代後期
柄孔狭鋤（角形隆起）	---	-----			
柄孔長方形狭鋤		-----			
柄孔 舟形隆起有 広鋤	-----		-----		
		-----			
柄孔バチ型広鋤		-----			
柄孔長方形広鋤	-----				
横鋤	-----				
柄孔小型鋤	-----	-----			
柄孔小型多本鋤	-----				
諸手鋤			-----		
柄孔三本鋤		-----	-----		
柄孔四本鋤	-----		-----		
藤柄狭鋤	-----		-----		
藤柄広鋤		-----			
藤柄二又鋤		-----			
藤柄三又鋤		-----			
藤柄四又鋤		-----			
藤柄多又鋤		-----			
ナスピ形鋤				-----	
組合せ鋤	-----	-----			
一本鋤	-----				
櫛状木製品		-----	-----		

159、167も固い広葉樹材である。身の部分の面積が小さいため客土用には向かないが、掘る機能を備えた道具と考えたい。この櫛状木製品も弥生時代後期後半より古墳時代前期の時期幅の中に大半が収まる。

168~170は鍬に用いられたと思われる膝柄である。ここで拾い上げたのは、膝頭部分に有頭状の聚轉部を削り出しているものである。弥生時代中期後半から確認でき、古墳時代前期までは明らかに多数存在することがわかっている。膝柄装着の鍬の身の出土数から言って当然の傾向であろう。70、71、72、73、74、75のナスピ形鍬の身には膝柄が装着されるのであろうか、県内資料では確認できない。

## 5まとめ

以上、静岡県下の弥生時代から古墳時代の木製農耕具を分類試案に従って検討してみた。その器種の消長を捉えることができるものを選んで第34表にまとめてみた。各時代ごとの器種組成を中心に概観してみる。

### <弥生時代中期後半>

静岡県における初期農耕段階で、水田造構も瀬名遺跡、角江遺跡等に確認されている。大陸系磨製石斧がまだ多数確認できる時期で農耕具は基本的に石器で加工していると考えられる。既に鍬の器種では柄孔装着の狭鍬、広鍬、横鍬、小型鍬、多本鍬、及び膝柄装着の狭鍬と、その後古墳時代前期まで基本となる器種は揃っている。舟形隆起を持った狭鍬が、この時期に確認できる。広鍬では、肩を斜めに落とした明瞭な舟形隆起のあるものが盛行し、平面長方形のものもある。横鍬もある。完成された形の小型鍬がある。膝柄装着の狭鍬では、着柄軸裏面が有段状になるものがあり、有段状にならない通常のものも定型化している。柄孔装着の四本鍬は上端が弧を描き、柄孔が横長長方形又は隅丸長方形になるものが多い。鍬に関しては、鍬が農耕具か土木工具かという問題はあるが、当該期は組み合わせ鍬が中心である。丁寧に作られ、完成された型の組み合わせ鍬が目につく。

### <弥生時代後期前半>

水田造構は、登呂遺跡、静清平野を中心に杭列を伴って検出されている。登呂遺跡で鉄片が2、川合遺跡で板状鉄斧が7、離鹿塚遺跡で棒状鉄片が2確認されており、逆に大陸系磨製石斧が減少することにより、当該期においては、木製品の加工は相当部分鉄器化していると想像できる。基本的な農耕具の組成の変化は少ない。狭鍬は着柄隆起が不明瞭になっている。広鍬は舟型隆起を明瞭にもつものが継続的に作られている。広鍬では、バチ型のものが新たに登場する。平面長方形の広鍬も継続的にある。横鍬も継続的にある。小型鍬は盛行する。柄孔装着の小型の多本鍬がある。中期後半に定型化された上端弧を描く柄孔装着の多本鍬は、この後期前半にもあるが、上端が三角形をしたり、柄孔付近のみ突出したり、不定型になってきている。膝柄装着の狭鍬は中期後半の定型化されたものが、着柄軸の技法や平面形において崩れきっていることが了解できる。着柄軸裏面が有段状になっているもの、太く有段状になって着柄軸をもつものが消失している。膝柄装着の広鍬といえる身幅の広い膝柄鍬が登場している。

膝柄装着の二又鍬の初現が、この時期にある。膝柄装着の三叉、四叉、多叉鍬はほぼすべて出揃っている。組み合わせ鍬は、極端に減少する。一本鍬も、中期後半と同じく少數なら確認できる。櫛状木製品の初現が見られる。

### <弥生時代後期後半から古墳時代前期まで>

静清平野のそれも巴川沿いの遺跡（長崎遺跡、川合遺跡、瀬名遺跡）では大規模な杭打ちの畦畔を伴った明瞭な水田造構が確認できる時期である。県下出土の木製品の総数も、当該期が圧倒的に多い。加工工具は概ね完全に鉄器化している。木製農耕具の器種組成は古代において、最も充実する時期に当たる。

柄孔装着の狭鍬は殆ど見当たらぬ。広鍬において、舟形隆起が消滅しており、柄孔付近も円形に隆起させていたり、漸次隆起させるに留まる不明確な隆起である。泥除け装置が設けられ、平面有頭状に

なっている広歫には上辺近く横位に溝が彫られていたり、柄孔両側に穿孔があつたりする。バチ型は減少する。平面長方形の歫は継続的に作られる。小型歫は明確には言えないが、減少または消滅していると考えたい。横歫はまだ存続している。膝柄装着の多本歫も不定型ながら若干残る。

明確に膝柄狭歫といえるものは長崎遺跡の一点を除くと殆ど見あたらなくなり、身長のものが残る。膝柄装着の二又歫は圧倒的多数を占めるようになる。形状も安定し、定型化している。三又、四又歫も二又歫同様定型化し、多数出土している。農耕具の中ではこれら膝柄装着の二又、三又、四又歫が当該期、中心的な木製農耕具であったことが了解できる。

組み合わせ鎌は1例確認されているが、ほぼ消滅に近い状態であったであろう。一方、一木鎌は隆盛を極める。大きさ、平面形にバラツキがあるものの数的には他の時期と比較にならぬほど、多数確認できる。櫛状木製品も一本鎌同様当該期が中心となる。

#### <古墳時代中期>

前の弥生時代後半から古墳時代前期までの木製品の農耕具の組成はこの時期に来て、ドラステイクな変化を迎える。中期古墳より鉄製の方形歫先、U字型歫先（U字型は後期古墳より多数出土する）、鉄鎌が出土している。古墳時代前期までその系譜を辿ることが出来た歫、鎌の大半は当該時期においては殆ど消滅してしまっている。全く別系譜の鉄刃装着の諸手歫が出現している。また、U字型鉄刃装着のナスピ型歫が出現している。他の器種は殆ど確認できていない。ナスピ型歫は平安時代前半までその系譜が続くが、諸手歫は当該期のみで消滅してしまう。刃先に鉄が用いられることにより、それまでの木製農耕具はその器種組成を全く変えてしまうことが了解できよう。

#### <古墳時代後期>

古墳時代中期もそうであるが、当該期の水田遺構は時期限定してなかなか検出されていないのが実状である。木製品全体を通じて、当該期のものと限定して考えることができるものは希有である。後期古墳からは、鎌及びU字型鉄製歫先が多数確認されており、一般的にもU字型歫先を装着した歫が浸透していた。ここでは風呂歫である（U字型鉄刃装着の）ナスピ型歫が確認できる。

以上各時代の概観で了解できたように、古墳時代前期と中期との間断の大きさがあまりにも明瞭である。初期農耕段階の弥生時代中期後半に畿内の影響を受け、多くの器種を揃えて導入された木製農耕具の組成は、弥生時代後期前半、後期後半、古墳時代前期と地方色のある形態を生み出したり、部分的な消失を招いたりするものの、基本的には、その組成の大枠をほとんど変えずにきた。それが、古墳時代中期に入ると、木製農耕具の刃先に鉄器が用いられることにより、それまでの組成の殆どを捨て去り、地域色の強い諸手歫と畿内の影響を受けたナスピ型歫が出現するという構造の変化がもたらされた。

静岡県内の木製農耕具を追うことをしただけでも、時代による形態差、形態的地域色、機能的形態差が少しづつ読みとることが可能である。

(中山正典)

#### [註]

- (1) 西部において今朝は瓜彫式、長床式、下長山式の時期幅の木製品をこの時期に一括して扱った。今後、少なくとも瓜彫式の時期と長床式の時期を分けて論ずる時が来るであろう。
- (2) 山木遺跡を弥生時代後期とする説（「雄山町史」第1巻）もあるが「静岡県史資料編1考古学」等は、住居跡は古墳時代前期のものであるとして、遺物は弥生時代後期から古墳時代前期のものとしている。後者の説にここでは従う。
- (3) 「伊場遺跡遺物編I」では「可能な限りの推測も加えつつ次のような機能分類を行い、用途不明の資料については形態分類を行うことにした。」と記述している。
- (4) ここでは古墳時代の木製遺物を多少なりとも含む遺物を中心に述べた。当然、城山遺跡（浜松市）、郡鶴川流域遺跡群（三島市）等はその理由により、ここでは触れなかった。
- (5) 木下忠氏は「農耕具は刃先まで木製であるとはいえ、すでに弥生文化形成の当初から木柄、刀身、鎌など複雑に応じて分化していく」と説く。器種の分化の背景に必ず機能差があるという視点で、農耕具の研究は木下氏によって行われた。今一度この視点に立つことの重要性を感じる。
- (6) 民具学の領域においても歫は全国を入れた機能分類がなされていない。全国を視野に入れる「日本の歫・鎌・鎌」（国民政調会 1979）のように「肥後歫」というように地方名を冠した歫とか「六本鎌手歫」というように形態的に特徴を有する歫など

- に分類し、まとめる他ないのが実状であろう。
- (7) この柄の装着方法で歴を2分する研究は、上原真人氏（上原 1991）や藤上昇氏（藤上 1990）等が進めている。曲柄は藤柄、反転の両者を含むものとして、ここでは用いてしまった。「柄孔装着」とは、一般的でないかもしれない。「柄孔装着」についてには、まだ研究者によって對象が違うのが現状であろう。
- (8) ナスピ盤鉤の静岡県下における下限は、池ヶ谷遺跡出土のナスピの傘が退化した歴をもつてする。この歴はDⅢ層柱群よりの出土でこのDⅢ層中より伊豆神津島高天山の火山灰（83年頃に噴火）が検出されている。
- (9) 「鏡じり」は鏡の把抜けを意味する。本報告では奈良時代以後、静岡平野で確認できる2枚の板を組み合わせる歴史時代の泥染けとは別系譜のものと考える。この歴生時代の泥染けと歴史時代の泥染けとは、機能的には同じであるが、形態上からも、装着方法からも、出現系譜からも別の系譜のものであろう。
- (10) 良具例の櫛中歴の中でも、大型のものは荒巻に用い、小型の軽い櫛中歴は紳士に用いる例がある（『日本の歴、歴、鞆』）。多本歴、又又歴は刃の断面形とともに、平面形の大きさにも機能性を反映していると考えたい。
- (11) ナスピ盤鉤に反転が装着された典型的な例が神明原・元宮川遺跡（静岡）で出土している。その他の、反転の例としては、針江中遺跡（滋賀県）、服部遺跡（滋賀県）など挙げることができる。
- (12) 歴生時代中期後半においては柄孔装着の広がいわゆる広歴としての歴頭を基なし、唐刺装着歴は身幅が狭いことから狭歴としての機能を果たしていたかもしれない。
- (13) 柄孔が方形なのは、4例中38のみである。円形の柄孔に拡大されて上中に埋まつたものより、方形の柄孔に断面方形の柄が挿入されている方が、上庄等の諸条件による変形、柄のズレは少ないと考える。
- (14) 齒車柄（スギ材が多い）の耀様をする木製品が多いが、ここでは扱わなかった。計画樹材の農耕具は考えられず、県内特に中部においては農耕具の大半はアカガシであるように古い広業樹材を選別していると考える。

#### <引用・参考文献>

- 後藤一郎 1962年 「苗山村山水遺跡」 「苗山村史」 第1章所収  
 斎藤 安 1967年 「伊豆苗山官下遺跡」 「苗山村史」 第2章所収  
 木下 忠 1966年 「森井」 「日本考古学書古文書 IV 式生時代」 河出書房  
 木下 忠 1985年 「日本農耕技術の起源と伝承」 雄山閣  
 都出比呂昌 1967年 「木製農耕器具の歴史と式生時代の動向」 「考古学研究」 13~3  
 都出比呂昌 1989年 「『日本農耕社会の成立過程』」 岩波書店  
 黒崎 直 1970年 「木製農耕器具の歴史と式生時代の動向」 「考古学研究」 16~3  
 黒崎 直 1976年 「古墳時代の農耕マニススピ形柄装着歴を中心として」 「研究論集」 奈良国文化財研究所学報第28冊  
 黒崎 直 1985年 「『日本における式生時代農具の変遷と展開』」 日本書古学協会設立40周年記念シンポジウム「日本における作農耕具の起源と変遷－資料叢－」  
 横木 修 1976年 「木製農耕具の歴史」 「考古学研究」 22~4  
 筧木隆夫 1978年 「着柄歴の出土」 「静岡県考古学研究」 1  
 可田 章 1980年 「古墳時代農耕具の問題点」 「平成宮富遺跡調査報告書 X」 奈良国文化財研究所学報第39冊  
 乙益重慶 1992年 「式生農業と現地民俗」 六興出版  
 乙益重慶・大場 勝 1980年 「上総・苦曾遺跡」 中央公論、美術出版社  
 小林行雄・末永雅雄 1994年 「木製器具及び植木製品」「『和唐吉弥生式遺跡の研究』」 京都帝國人考古学研究報告第16号  
 山田昌久 1982年 「木工技術の変化と特徴的な著柄歴、歴について」 滋賀県教育委員会、(財) 滋賀県埋蔵文化財調査委員会  
 「日本遺跡」  
 山田昌久 1986年 「くわとうすきの来た道」 滋賀県教育委員会、(財) 滋賀県埋蔵文化財調査委員会「新保遺跡 T 苏生・古墳時代大発掘」  
 川越哲志 1983年 「式生時代の鍬刀鋸耕具」 「日本製鉄史論集」 たたら研究所  
 岩崎信也 1985年 「鉄鍬歴、歴の出現」 「日本史の黎明八幡一郎先生碑記念考古学論集」 六興出版  
 松井裕幸 1987年 「日本古代の鉄製農具、歴について」 「考古学雑誌」 72~3  
 小木村有作 1988年 「東海地方出土の式生時代木製品について」 「月刊考古学ジャーナル」 292号、ニューサイエンス社  
 連上 昇 1989年 「木製農耕器具の種類とその変遷」 「午年の昭和63年度」 (財) 愛知県埋蔵文化財センター  
 連上 昇 1990年 「式生時代中期における木製農耕器具の種類組成について」 「岡道遺跡」 (財) 愛知県埋蔵文化財センター  
 連上 昇 1993年 「木製農耕器具研究の一覧」 「考古学フォーラム」 3 考古学フォーラム  
 平野哲郎 1990年 「東海地方における水稲耕作の開始について」 「研究紀要」 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
 上原真理 1991年 「式生の変遷」 「季刊考古学」 第37号  
 佐野裕恭 1991年 「東日本への稻作传播を考る」 「考古学ジャーナル 9月号」 337分 ニューサイエンス社  
 工藤哲司・荒井格 1990年 「鈴鹿市中南在家遺跡出土の木製品」 「考古学ジャーナル」 323号 ニューサイエンス社  
 吉田秀備 1990年 「式生時代・古墳時代の木製農耕具について」 滋賀県下の動向へ」 「記録」 第4号 (財) 滋賀県文化財保存協会  
 田中義昭 1983年 「古代農業の技術と展開」 「講座・日本技術の社会史 第1巻 農業・農産加工」 日本評論社  
 日居直人 1993年 「善光寺平の水田跡の調査」 「考古学ジャーナル」 365号 ニューサイエンス社  
 日本文書学会 1954年 「豊呂・本郷」 東京文庫出版  
 滝澤文化財研究会 1983年 「木製農具について」 (『埋蔵文化財研究会第1回研究集会資料』 )  
 1991年 「各地域における米づくりの開始」 第30回埋蔵文化財研究集会資料  
 (財) 滝澤文化財調査委員会 1986年 「新保遺跡 I」 関越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査報告書第10集  
 萩原市教育委員会・(財) 長生郡市文化財センター 1991年 「『新保遺跡 II』 1993年」 「府県遺跡調査」  
 (財) 長生郡市文化財センター 1991年 「『新保遺跡 III』 1993年」 「府県遺跡調査」  
 小坂井町教育委員会 1960年 「蓬東第一次調査報告」  
 篠山市教育委員会 1963年 「瓜湖」  
 篠山市教育委員会 1992年 「西中寺明社南遺跡」  
 瓜生堂農業専門学校 1973年 「瓜生堂遺跡 I」 1982年 「瓜生堂遺跡 II」  
 瓜生堂農業専門学校 1982年 「朝日遺跡」  
 (財) 爰知県教育委員会・ピスセント 1984年 「勝川」  
 三重県教育委員会 1980年 「駒所遺跡－造幣と煮物－」  
 三重県教育委員会 1981年 「北堀池遺跡発掘調査報告」 第1分冊  
 木原町教育委員会 1988年 「八内江口遺跡」 (行方町地区) 発掘調査報告書 木原町埋蔵文化財調査報告書第1号  
 滝賀貿易教育委員会 1967年 「大中の湖遺跡調査報告」  
 滝賀貿易教育委員会 1983年 「針江中遺跡」 「国道161号バイパス関連調査概要3」  
 滝賀貿易教育委員会・守山市教育委員会 1984年 「守山市教育委員会」 「守山市教育委員会」  
 (財) 大阪文化財センター 1974年 「池上遺跡 木器編」 第1分冊 1978年 「池上遺跡 木器編」 第2分冊  
 (財) 大阪文化財センター 1983年 「荒井」 1984年 「荒井遺跡 II」  
 (財) 大阪市文化財協会 1987年 「鬼川川の木質遺物」 第7次発掘調査報告書第4号  
 第2版和田内遺跡調査会 1970年 「池上・四ツ池遺跡13」

- 東大阪市教育委員会他 1988年 「鬼虎川遺跡第19次発掘調査報告」  
 東大阪市教育委員会他 1988年 「鬼虎川遺跡第29-30次発掘調査報告」  
 国山市教育委員会 1973年 「上東遺跡の調査」 「山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ」岡山県埋蔵文化財調査報告第2集  
 岡山県教育委員会 1973年 「下吉瀬遺跡」 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」  
 岡山市教育委員会 1971年 「南子遺跡」 「岡山県埋蔵文化財発掘調査概報」  
 松山市教育委員会 1975年 「福音寺遺跡」 「現文化財発掘調査概報」 松山市文化財調査報告書Ⅷ  
 府津市教育委員会 1982年 「豪傑一佐見庄津市における初期船作遺跡の調査—」  
 長崎県教育委員会 1974年 「黒田原遺跡」 長崎県文化財調査報告書第18集  
 福岡市教育委員会 1983年 「拾六町フジマ遺跡」  
 福岡市教育委員会 1977年 「板付周辺遺跡調査報告書(4)」  
 福岡市教育委員会 1989年 「板付周辺遺跡調査報告書(16)」  
 静岡県 1990年 「静岡県史 資料編一 古古一」 ぎょうせい  
 静岡県 1990年 「静岡縣史 資料編二 古古二」 ぎょうせい  
 静岡県 1990年 「静岡縣史 資料編三 古占三」 ぎょうせい  
 静岡県教育委員会 1983年 「有賀遺跡 I」  
 沼津市教育委員会 1990年 「雄略塚遺跡発掘調査報告書Ⅱ 造物編」  
 静岡市教育委員会 1982年 「駿河・豊田遺跡 - 駿岡市外局施設用地内遺跡発掘調査の報告 -」  
 静岡市教育委員会 1989年 「有東城子遺跡 II 第3次発掘調査報告書」  
 清水市教育委員会他 1985年 「伊野遺跡」  
 萩川町教育委員会他 1986年 「耳川遺跡 (II)」  
 藤枝市教育委員会他 1981年 「上飯田モミダ遺跡 上飯田川の丁遺跡 岩内遺跡」  
 藤枝市教育委員会他 1986年 「御殿跡発掘調査概報Ⅲ」  
 旗井市教育委員会他 1985年 「土燒遺跡 - 基礎資料編 -」  
 旗井市教育委員会 1991年 「福島ジョウヤマ遺跡発掘調査報告書」  
 舞田市教育委員会 1991年 「舞殿・二之宮遺跡 市立二之宮保育園建設に伴う発掘調査報告書」  
 浜松市教育委員会 1978年 「伊場遺跡・遺物編 I」  
 浜松市遺跡調査委員会 1983年 「国鉄浜松工場内(隅子)遺跡第IV次発掘調査概要」  
 (財)浜松市文化協会 1991年 「隅子遺跡」  
 並山町教育委員会 1969年 「山木遺跡 - 第二次調査結果報 -」 「並山町史」第1巻所収  
 越山町教育委員会 1976年 「木本遺跡 - 第三次調査結果報 -」 「並山町史」第1巻所収  
 武山町教育委員会 1977年 「山木遺跡第四次調査報告書」 「並山町史」第1巻所収  
 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988年 「磐名遺跡調査報告」  
 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989年 「磐名遺跡調査報告」  
 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991年 「磐名遺跡調査報告」  
 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989年 「大谷川N(遺物・考察編)」  
 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989年 「池ヶ谷遺跡開発概報」  
 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991年 「池ヶ谷遺跡開発概報」  
 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991年 「角江遺跡」  
 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992年 「角江遺跡調査概報」  
 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991年 「長崎遺跡 I (遺構編)」

## 第4節 田下駄の形態変遷と機能

- 1 はじめに
- 2 田下駄研究小史
- 3 濑名遺跡出土の田下駄
- 4 板状田下駄の形態変遷
- 5 板状田下駄の穿孔方法について
- 6 輪カンジキ型田下駄の形態変遷
- 7 田下駄の形態と機能
- 8 まとめ

### 1 はじめに

瀬名遺跡から板状田下駄が178点、輪カンジキ型田下駄が30点（足板の数である。）出土している。近年、静岡県内の低湿地性の遺跡の発掘調査が進み、従来の登呂遺跡、山木遺跡の資料に相当数の板状田下駄の資料が加わっている。特に、静清平野の田下駄資料は瀬名遺跡を初め、池ヶ谷遺跡、川合遺跡、長崎遺跡、有東遺跡、有東梶子遺跡、下野遺跡、小黒遺跡、神明原・元宮川遺跡などの遺跡から出土しており、300例を越える数に達している。輪カンジキ型田下駄も瀬名遺跡と川合遺跡八反田地区で横木及び輪を伴った完形のものが確認されており、静清平野は田下駄を検討する上で良好なフィールドである。中でも瀬名遺跡の田下駄資料は数の多さも勿論であるが、弥生時代中期、弥生時代後期前半、弥生時代後期後半～古墳時代前期、古墳時代中期と時期幅を限定することができる資料に恵まれている。そこでここでは、田下駄の良好な一括資料を明示できる瀬名遺跡出土の田下駄を専ら扱い、その形態変遷を中心に考えてみたい。また、これら田下駄が多数出土している静清平野の遺跡の板状田下駄は大きさにバラツキがある。平面積の大小いかなるものか複数遺跡の田下駄を比較して検討してみたい。

拙文で扱う「田下駄」とは「稲刈りなどのときに湿田にはまりこまないためにはく」木製の履き物である。研究者の中には代搔き、縁肥踏み込みに専ら用いる長方形枠型の「大足」と、「稲刈りなどのときに湿田にはまりこまないためにはく」（木下 1969）、つまり足を浮かせるために履く「タゲタ・ナンバ」<sup>(1)</sup>とを総称して、水田で履く物として「田下駄」と称する人たちもいる。たしかに水田で履く下駄ではあるが、足を浮かせる機能をもつ「田下駄」と、代搔き、縁肥の踏み込み機能をもつ「大足」とは明らかに機能が異なり、形態上も明瞭に一線を画せる以上、総称することをここでは避けたい。  
<sup>(2)</sup>

### 2 田下駄研究小史

出土遺物としての田下駄の確認は千葉県菅生遺跡が嚆矢であろうか。菅生遺跡第1次調査（昭和13～16年）で縦長三孔の下駄が確認されている（乙益 1980）。が、本格的に研究対象となったのは、登呂遺跡、山木遺跡から多数の板状四孔の田下駄が出土してからであろう。登呂遺跡の田下駄については後藤守一氏が昭和29年に論じており（日本考古学協会 1978）、既に山木遺跡の第1次調査（昭和25年）で出土している田下駄も視野に入れて、田下駄を4形式に分類し、その用途まで言及している。「第1型式」は「小形のものであり、長さも28cmぐらいであり、幅は18cm、厚さ8mmの長方形板に前後の端に近く、かつ中央位におのの一孔、左右側縁では中央よりも一方に片寄っておのの一孔ある」ものであり、「第2型式」は「比較的に細長い形」のもの、これは山木の三孔ある舟形木製品を示している。「第3型式」は「長さ38cm、幅16cm、厚さ4cm近くの厚板を選び取り、中央に幅10cm近く矩形をなす面を残し、その左右側面に相対称に4孔をうがったもの」であり、「第4型式」は「幅は44cm、長さは18

cmという横長のものであり、中央に鼻緒や織り緒のための孔が4個相対してあけられている」ものである。「第2型式」は輪カンジキ型田下駄の足板であり、「第3型式」は足台隆起の板状田下駄であり、「第4型式」は偏平の四孔板状田下駄のことであり、既に、その後の分類の基本となる原型が提出されている。後藤氏は機能について「現在の土俗をみると、普通の田ではこれを使っていない。泥田、深田、つまり粘土質であり、かつうっかり田の中に飛び込もうならば膝を没するようなところで用いている」として、湿田用の履物を指摘した。また、綠肥を踏み込む「代踏下駄」の機能もあり、登呂遺跡付近は深田ではないので、代掻きの機能を指摘したい意が明言はしていないが読み取れる。

山木遺跡は昭和25年に第1次調査が行われ、昭和42年は第2次調査、昭和50年に第3次調査、昭和51年に第4次調査、昭和53年に第5次調査、昭和55年に第6次調査、昭和57年に第7次調査、昭和59年に第8次調査が各々行われてきている。田下駄に関しては第3次以降でも少数出土しているが、第1次、第2次調査で多数を確認している。特に第1次調査の報告書として昭和37年に刊行された「蘿山村山木遺跡」（後藤 1962）の中で、木下忠氏がまとめ報告した内容は、「日本の水田用の下駄」を「田下駄」と「大足」に分け、「田下駄」とは、「肥料その他の運搬や稲刈りのため湿田ではなく」ものとし、「大足」を「苗しろや本田に青草や積み肥を埋め込みあわせて、しろの泥を細かに練るためのしろ踏用の下駄」としている。更に、山木遺跡出土の田下駄を「長方形の板を縦長に使い、三つの縫あなを下駄のようにあけた型式のもの」と「長方形の板を横に使って、翼のように浮力を応用し、中央に低い台を掘り出し、その側面に四つの縫あなをあけた型式のもの」との二種に分けている。また山木遺跡で多数出土している縫孔が3つ穿たれた「舟形木製品」が、「大足」の「下駄の部分」であるとして論が展開されている。この「舟形木製品」が大足の足板に相当するとする木下説に近年秋山造三氏（秋山 1993）等が疑義を提出している。拙論も後述するが、山木遺跡で出土した「舟形木製品」は、輪カンジキ型田下駄の足板である説をとる。輪カンジキ型「田下駄」と称するように、綠肥踏み込みや代掻きといった大足の機能ではなく、水田内で足が沈まないようにするという田下駄の機能を有する点をここでは強調しておきたい。いずれにせよ、木下氏の大足・田下駄研究で、この領域の研究は飛躍的に前進した。田で履く下駄には田下駄と大足があり、機能を別にすること、また田下駄にも形態的な差異が確認できること、田下駄が湿田用の農具であること、大足の使用は代掻きの技術導入を意味し、それが田植えにつながること等を説いた点で古代の農業技術論の進展に大きく寄与したものである。

山木遺跡の資料も含め、静岡県蘿山村の5遺跡より出土した田下駄及び「大足」151点について論じたのが斎藤宏氏である（斎藤 1967）。斎藤氏は田下駄を4「型式」、「大足」を3「型式」に分けている。田下駄の「第1型式」は横長板状で4孔が穿たれたもの、「第2型式」は横長板状、4孔があり足台の隆起があるもの、「第3型式」は縦長板状で3孔が穿たれたもの、「第4型式」は「U字形側壁つき」つまり足囲い状の足台隆起があるものである。そして、「時間的差を実証する件出土器、地層・出土地などの資料は皆無であるが」と述べた後、「第1型式から逐次進化し、第3型式に及び、その後釘の出現により・・・ナンバに進んだものと推定される。」としている。この「逐次進化」の根拠、実態、年代観が不明なのが気にかかる論の展開である。「大足」は「平面舟形で両端の加工が欠失あるいは明らかにみとめられないもの」と「両先端にT字状の突起のあるもの」と「両端にはぞ穴や凸凹の細工のあるもの」との3「型式」に分け、復元形は大型長方形の枠が組み合わせられると想定している。斎藤氏はこの「大足」の機能について、「苗しろ」専用のものではなく、田植え前の代掻き全般に用いたことを指摘している。が、縫孔が3つ穿たれた舟形木製品が、長方形枠型の大足の足板になると前提で論が進められており、その後のこの種の木製品の盲目的な「大足」との規定に先鞭をつけたものと考えられる。その意味において、この宮下遺跡の報告書はその後の「大足」、輪カンジキ型田下駄研究にとって大きな障壁となったことは確かである。

兼保明氏は登呂遺跡、山木遺跡及び畿内の数遺跡の田下駄、大足の資料を集成し、分類を試みている（兼保 1985）。兼保氏は田下駄、大足を総称して「田下駄」と呼び、「a ナンバ（単純横長多下駄）」、「b 輪桟付きナンバ（輪桟付き横長田下駄）」、「c 狹義のタゲタ（単純縦長タゲタ）」、「d オオアシ（輪桟付き型、棒付き縦長田下駄）」。4種に分けています。aのナンバは弥生時代前期（I期）に大阪府八尾市恩智遺跡より出土例があり、初期農耕段階での田下駄の使用を指摘している。bの「輪桟付きナンバ」は滋賀県新旭町針江北遺跡、同町森浜遺跡で確認されたことにより、輪カンジキ型になる田下駄を板状田下駄と別系統の田下駄として分類した。これは輪カンジキ型田下駄を板状四孔の田下駄と同一機能でありながら、輪カンジキ型という組合せ式の田下駄を形態的に分けて論じた点重要である。ただ、ここでこの輪カンジキ型の足板を横長にしているが、針江北遺跡のものは明らかに縦長になるものである。dの「オオアシ」は棒型大足の足板として並べたものであるが、鳥取県池内遺跡出土のものは、その後の出土例でも確認できるように輪カンジキ型田下駄の足板になるものである。後述するが、筆者はここに並べられたdの「オオアシ」は、すべて輪カンジキ型田下駄の足板になるものと考える。兼保氏はdの「オオアシ」としたものに輪が付くものもあり、機能的に「ナンバ・タゲタ」なのか「オオアシ」なのか不明であるとし、「オオアシ中でも比較的足板の短い輪桟型のものについては、ナンバやタゲタのような湿田での作業に用いられた可能性がある。そのため、比較検討の素材として、関連する民俗学や民具の研究成果をも学ぶとともに、時代に特定されず弥生時代から現代までの変遷過程を的確にとらえる視野が必要である。」と説く。

田下駄、大足研究で從来の硬直した枠組を打破したのが、秋山浩三氏の「『大足』の再検討」（秋山 1993）という論考である。秋山氏の最大の論点は木下氏、斎藤氏が山木遺跡の「舟形木製品」を大足の足板としたものが、本来は輪カンジキ型田下駄の足板であったという点に集約される。近年、京都府鶴冠井清水遺跡で古墳時代後期の輪を伴った田下駄の出土例が確認され（向日市埋文センター 1992）、その推定復元を試みることで、從来「大足」の足板として報告された一群の木製品が輪カンジキ型田下駄であったことを実証している。静岡県内でも瀬名遺跡、川合遺跡から輪、横木を伴った輪カンジキ型田下駄が確認されており、秋山氏の説を補強している。また秋山氏は田下駄（秋山氏は田下駄を田で履くものを総称して用いている。）の名称と分類を民俗学で用いる分類名称を援用しながら検討している。田下駄を大別して三型式に分けている。1つは棒なし型式で、從来の板状の4孔または3孔の田下駄であり、2つには円形棒付き形式、つまり輪カンジキ型田下駄であり、3つには方形棒付き形式つまり梯子棒付き大足である。筆者も輪カンジキ型田下駄の確認例が増加した現在、從来「大足」の足板と読んでいたものか、ここでいう2つ目の円形棒付き形式になったことからも、この三形式の設定に賛成したい。ただ、田下駄の総称の中、大足という別機能のものまで棒なし形式と円形棒付き形式の分類と同レベルでの分類は問題がある。別機能である大足と田下駄をまず第1の形式分類にもっていきたいのが筆者の考え方である。また、各形式内をいくつかの型に分けている。たとえば棒なし形式は「四孔縦型」「四孔横型」「三孔縦型」の3つに分けているが、模式図で見る限り、四孔縦の中に明らかに四孔横型同系列のものが含まれており、「四孔縦型」と「四孔横型」とを分けることには必要性を見いだすことができない点もある。これらの点については、瀬名遺跡の田下駄の分類試案のところで詳述する。

次に民具研究において扱われてきた田下駄の研究を瞥見してみたい。田下駄の民具調査、研究は戦前において既に「民具問答集」（アチックミューゼアム 1918）で全国規模の調査が唱えられ、地域的な調査研究としては、「静岡県方言誌 民具篇」（内田武志 1921）が刊行されている。特に「静岡県方言誌」では256点もの田下駄、大足を静岡県内から収集し、整理記録している。図は模式的なものになっているが、形態を十分表現しており（サイズが不明なところがあるが）、全国的に確認できる棒型大足、輪カンジキ型田下駄、板状3孔田下駄、板状4孔田下駄等各種の基本型がほぼ図示されている。そして、

名称、使用地、田下駄の構造、用途、用いられる水田の土壤等も記録されている。水田の戦後の水利灌漑事業が施行される前、農法の機械化の前段階の資料として重要である。

戰後、田下駄、大足の資料が各地域ごとにまとめられ報告してきた。潮田鉄雄氏は1964年に「千葉県の田下駄」(潮田 1964)を発表し、統いて「続千葉県の田下駄」(潮田 1966)、「茨城県の田下駄」(潮田 1968)と霞ヶ浦周辺に分布する田下駄について長年研究、報告してきた。特に「千葉県の田下駄」で示された分類は、全国の田下駄、大足を形態上分類する規範を示している。1 枠型大形類、2 枠型小形類、3 輪擗型類、4 下駄型類、5 足駄型類、6 板型類と6分類している。機能を念頭に入れた妥当で普遍的な分類であろう。箱型大足がこれに入れば特殊事例を除いて民具の大足、田下駄は概ね包含することになるであろう。ここで注目すべきことは6分類した形態には、その形態に相応しい機能があり、それがまとめられていることである。1の「枠型大形類」は「代踏みに使用している枠型の大形の田下駄で手持縄を装着したもの」、2の「枠型小形類」は「稲刈に使用している枠型の小形の田下駄」、3の「輪擗型類」は「稲刈りに使用している輪擗形の田下駄」、4の「下駄型類」は「芦刈り、葦刈り等に使用されている」下駄であり、5の「足駄型類」は「水の出た田の稲刈りに使われた田下駄であり、6の「板型類」は「稲刈りに使用された」田下駄である。1と2の形態差と機能差の整理はこの潮田氏の整理を基本としたい。また潮田氏はその分布構造、材質、製作技法についても記録、報告している。枠型大足の構造については全長(縦)、全幅(横)、全高、足板幅を計測して、使用地、機能との関係をも考察している。潮田氏は長年の霞ヶ浦周辺の田下駄研究成果を踏まえ「田下駄の変遷」(潮田 1967)を示している。ただ詳細な追跡調査の故か、12に細分類を示し、その細分に基づいた形態上の変遷をも図示している。考古資料では、この変遷に合わない事実が次々と提示されており、この変遷図は現在では有効性を持ち得ない段階に来ている。<sup>(3)</sup>

中村俊亀智氏は「シロフミ田下駄の諸系列」(中村 1976)の中で長方形田下駄を4つに分類している。枠型の大型、枠型の中型、枠型の小型、箱型の4種である。各々の型について事例を報告しつつ、その機能を整理しているが、潮田氏の説いた枠型の形状のものは大型が大足の機能、小型のものが田下駄の機能のものと単純に分離できないことが了解できる。中間的な大きさの枠型のものは、大足として縁肥踏み込み、代踏きに使われながらも、稲刈りの時足が沈まないようにも用いられるということである。

神野善治氏は静岡県の富士市と沼津市に広がる浮島沼周辺の湿田農耕の調査研究により、湿田農耕の中での農具としての田下駄、大足の位置づけを整理している(神野 1979)。低湿地の水田稻作農法を事例を用いまとめ、その中における道具の形態と機能を整理している。田下駄、大足の農事暦内での実態的位置づけが可能になった研究である。橋本武氏は猪苗代湖周辺の湿田地帯に分布する田下駄、大足の使用法を整理して報告している(橋本 1982)。佐々木長生氏は福島県会津若松市の門田条里制跡より出土した田下駄について、民具研究の成果と、「会津農書」をはじめとした近世農書研究の成果を用いて考察している。門田条里跡出土の「大足の足板」を「刈敷踏みに使用した『大足』で輪擗型の大足」となるとしているが、いかなる根拠で「大足」としたか不明である。いずれにせよ、民具研究の成果と考古資料の成果とを近世農書の記載内容の手助けを受けながら結びつけることの意義があろう。市出京子氏は広島県の民具の田下駄を集成し考察している。集成に際し、形態分類として簀の子型、枠大型、枠小型、箱型、下駄型、輪かんじき型の6種に分けている。今までの湿田という視点からの田下駄の検討だけなく、ここでは寒冷地での耕作効率から残糞処理を含めた施肥作用としての大足の使用をとらえている。また、箱型は新出のものとし、短冊型苗代の施肥に必要として出現したという。田下駄、大足の機能と形態についてより水田稻作技術との深い関連の中での検討が今後必要とされる期待がある。

以上、民具研究においては、大足と田下駄は不可分のものとして、「田下駄」と総称して検討される

傾向にあったことが了解できる。しかし機能分類を念頭におく分類において「大足」と「田下駄」は名称の上でも使い分けたい。筆者が民具を瞥見したとき機能分類を念頭においた形態分類は第39図で示した。これは前述の潮田氏の6分類に箱型大足を加えたものが基本となっている。1) 桟型大足、2) 箱型大足、3) 桟型田下駄、4) 輪カンジキ型田下駄、5) 横長板状田下駄、6) 高下駄型田下駄、7) 下駄型田下駄の7種である。機能を整理すると、1)の柵型大足は大足の本来の機能である綠肥踏み込みと代播きの機能がある。2)箱型大足は綠肥踏み込みが専らの機能である。3)柵型田下駄、4)横長板状田下駄、5)輪カンジキ型田下駄は稲刈りの作業を中心に水田に足が沈まないようにするために履くものである。6)高下駄型田下駄は3)、4)、5)と同様に足が沈まないようにするために履くが、特に出水時に履くものである。7)は下駄型田下駄で、稲刈りにも用いられるが、ヨシ刈り、畦歩き、開墾する時、ヒエトリの時などに履くものである。株間や畦など幅狭い所を歩く時に用いる。

1)柵型大足	2)箱型大足	3)柵型田下駄	4)輪カンジキ型田下駄	5)横長板状田下駄	6)高下駄型田下駄	7)下駄型田下駄
綠肥踏み込み 代播き	綠肥踏み込み 代播き	稲刈り等に足が 沈まないように 履く	稲刈り等に足が 沈まないように 履く	稲刈り等に足が 沈まないように 履く	強運田、冷水等 で足が沈まない ように履く	堤地の開墾、ヒ エ取り、畦の上 を歩る

第39図 田で履く下駄 民具分類模式図

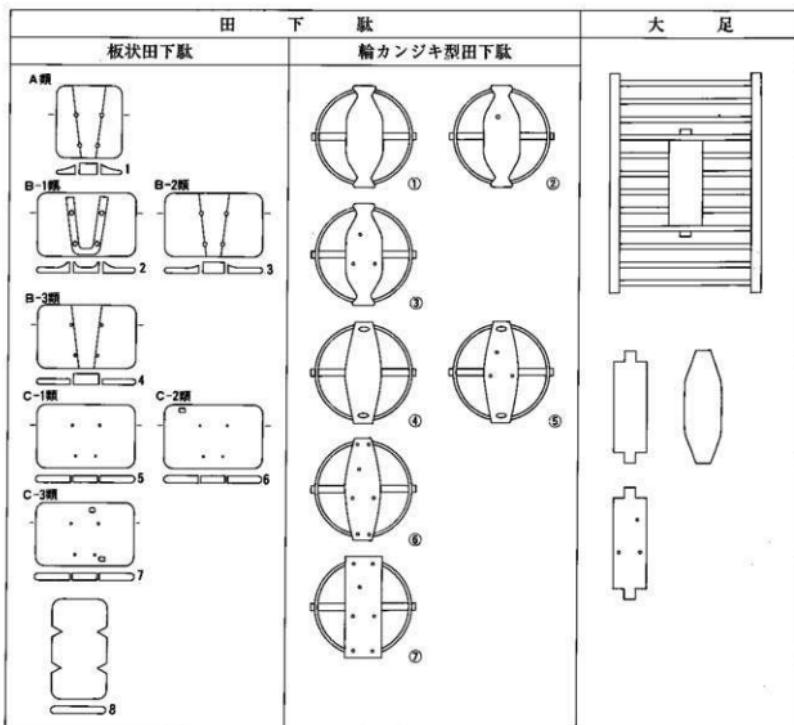
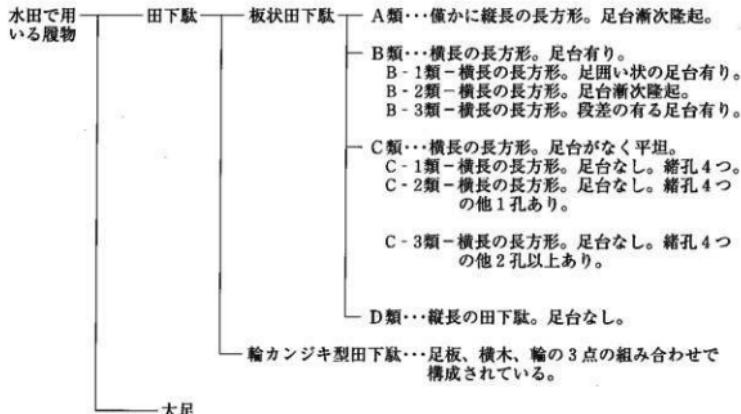
### 3 濑名遺跡出土の田下駄

瀬名遺跡出土の板状田下駄178点及び輪カンジキ型田下駄30点の個々の出土状況及び形状は本文を参照していただきたい。ここでは本文と若干重複するが、瀬名遺跡出土の田下駄の形態分類をし、その形態的特徴を明記したい。大足と田下駄を分類する概念も含め、下のように分類してみた。

水田で用いる履物は、まず機能で2つに大別できる。稲刈りの時などに足を浮かせるために履く田下駄と、綠肥を踏み込んだり代播きのときに用いる大型で柵状になった大足である。田下駄は形態の大きな差異により、板状の田下駄と輪カンジキ型田下駄に分けることができる。板状の田下駄は1枚の板を整形して孔を穿って出来ている。輪カンジキ型田下駄は足板と横木と輪の3点の部材を蔓状繊維で縛った組み合わせの田下駄である。この構造上の差異は後述するが、時代差に直結する重要な差異である。板状の田下駄は4つに分類できる。平面形が若干縱長の長方形を呈し、足台が左右両端から中央の足がのる平坦面に向かい漸次隆起している田下駄がA類である。平面形が横長の長方形を呈し、足台を有している田下駄がB類である。平面形が横長の長方形で、足台隆起がなく平坦な田下駄がC類である。縱長で足台がなく平坦な田下駄をD類とした。

B類は足台の隆起の仕方により3つに細分した。B-1類は足台が足囲い状をしているものである。B-2類は足台が左右両端から中央の足がのる平坦面に向かい漸次隆起するものである。B-3類は足台

第34表 田下駄分類



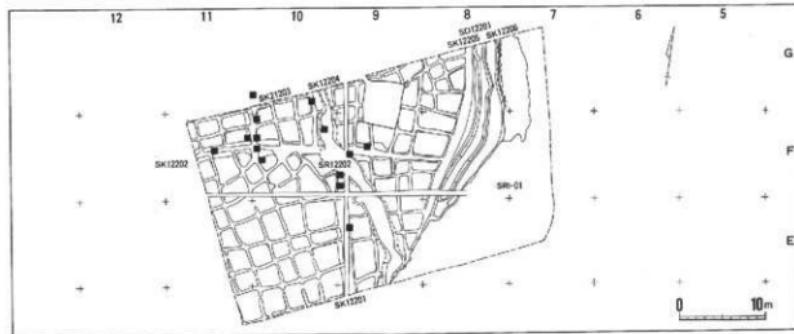
第40図 田下駄の分類模式図

が段差を設け強調されているものである。C類は足台のない平坦な横長の田下駄を穿孔の数により3つに細分した。通常の4つの緒孔だけのものをC-1類とし、4つの緒孔に1つの孔が別に穿たれたものをC-2類、別に穿たれた孔が2つ以上のものをC-3類とした。B類とC類のこれら3つの細分は、当初、時間差、機能差を期待した。後述するが、B類を3つ細分することは、時間差に関連することが了解でき、この細分が有効であることが確認できる。が、C類の3つの細分は、機能差、時間差を期待したが、4孔以外の孔に規則性が見られず、むしろ建築材の壁材を転用するために4つ以上の孔があるとき考えることができ、このC類を細分したことには意義を見いだせずにいるのが現状である。<sup>(4)</sup>

輪カンジキ型田下駄の分類については、ここでは明記しないことにする。第40図の模式図で示すように足板の形状で6つぐらいに形態分類が可能であるが、足板の形状だけで分類することに現段階では意義が見いだせないのが実状であろう。ただ、瀬名遺跡出土の輪カンジキ型田下駄の足板の形態は時期によって変遷することが確認できる。しかし、同じ巴川水系で、長尾川を隔てただけの川合遺跡八反田地区の輪カンジキ型田下駄の様相は瀬名遺跡の変遷が全く当てはまらないことより、ここでは普遍性をもつ分類としては示さないことにする。

次に田下駄の出土状況を瀬名遺跡で検討してみる。特に水田遺構との関係に注視してみたい。以下、瀬名遺跡で田下駄が多数（13枚以上）確認できた水田跡を6面抽出して検討した。各面毎に田下駄の出土地点を点描し、その遺構を含めた全体図を示した。

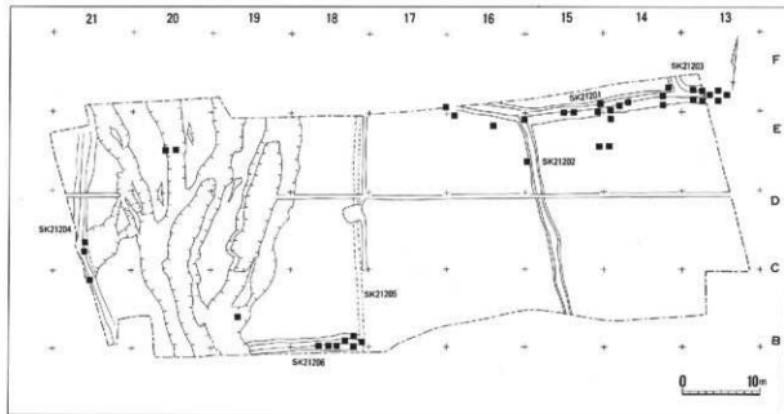
1区の22層水田は弥生時代後期から古墳時代前期の時代幅のある水田である。調査区中央に北北西から南南東へ貫流する溝、及び調査区東端は大河遺跡の左岸が検出されている。この大河遺跡の左岸に小区画水田が全面に確認されている。東西方向1本、南北方向5本の杭列を伴う大畦畔と畦の幅40~50cmの小畦畔とによって区画された水田である。畦畔の盛土内より多数の木製品及び土器片が出土しており、木製品としては、二又鋤、四本鋤、田下駄、梯子等が特に大畦畔内より出土している。板状の田下駄は計16点出土している。第41図22層水田田下駄出土位置図で確認できるように、SD12201内で1点出土している以外すべて、大畦畔内より出土していることが特筆できよう。東西方向のSK12202を中心とする南北方向のSK12203、SK12204、SK12201の5本の大畦畔が交錯するところから出土している。特にSK12202とSK12203との交差点付近は田下駄が集中して出土したと言える。この16点の形態についてはB-2類1点、B-3類2点、C-1類11点、C-2類が1点であった。C-1類が卓越しているのが了解できる。



第41図 1区22層水田田下駄出土位置図

■田下駄出土地点

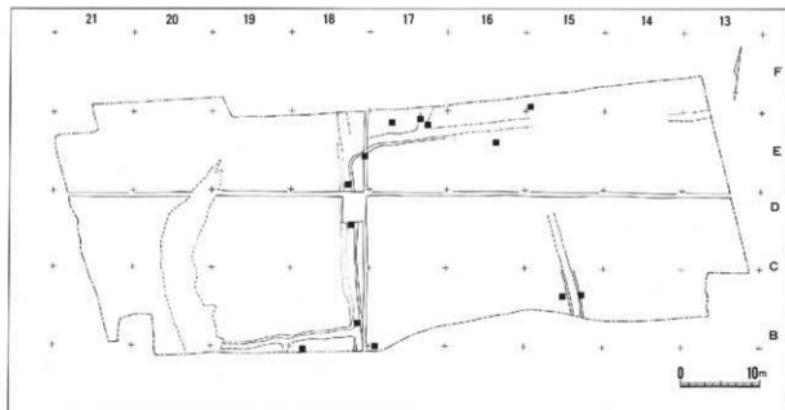
2・3区の12層水田は、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての水田跡である。大区画の畦畔により区画されており、畦畔にはいずれも杭や横板が伴う。東西方向の大畦畔2本、南北方向の大畦畔4本が検出されている。調査区の西側は10層の段階の流路跡により、削られている部分がある。この田面より二又鋤、三叉鋤、剝物、棒状木製品などと共に44点もの板状田下駄が出土している。田下駄は西側の流路跡より3点出しているが、他はすべて大畦畔内より出土している。特に東西方向のSK21201内より25点もの田下駄が確認されている。東西方向のSK21206からも7点出土している。田下駄はB-2類が5点、B-3類が4点、C-1類が30点、C-2類が2点である。B-2、B-3類は少数であるが、C-1類が多数を占める。



第42図 2・3区12層水田下駄出土位置図

■田下駄出土地点

2・3区14層水田は弥生時代後期前半にはは時代確定できる。東西方向の2本、南北方向4本の大畦畔

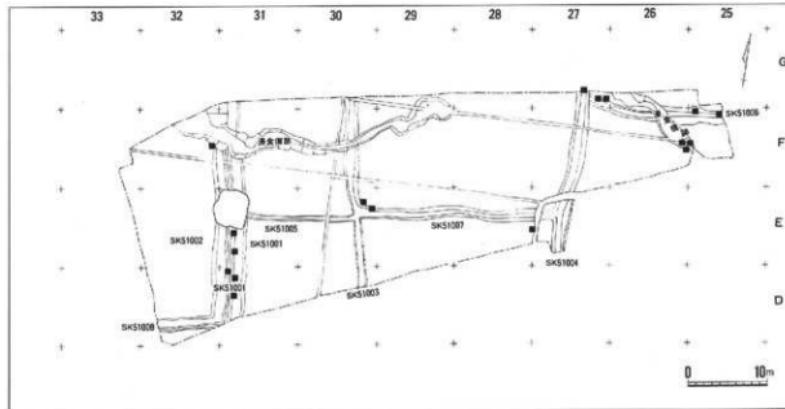


第43図 2・3区14層水田下駄出土位置図

■田下駄出土地点

により区画されている。12層ほどではないにしても、14層のこれらの大畦畔にも杭が打たれ、横板が敷かれていた。やはり、大畦畔内には、多数の木製品が埋め込まれており、狄鍬、三本鍬、梯子などと共に13点の板状田下駄が確認されている。13点ともすべてほぼ大畦畔内より出土したと考えてよいであろう。南北方向の畦畔のSK21401、SK21404、東西方向の畦畔、SK21403、SK21402から出土している。13点の田下駄のうち、A-1類が3点、B-1類が5点、B-2類が3点、B-3類が2点であった。A-1、B-1類という弥生時代中期に出現し、弥生時代後期前半に消滅してしまう田下駄が大半を占める状況である。逆にC類が全く検出されていない。A-1類、B-1類という古いタイプの田下駄が主流を占め、後期後半から古墳時代前期に主流を占めるC類が、ここでは全く見られないことは、瀬名遺跡の田下駄の形態変遷を追うときに重要な意味を持つ。

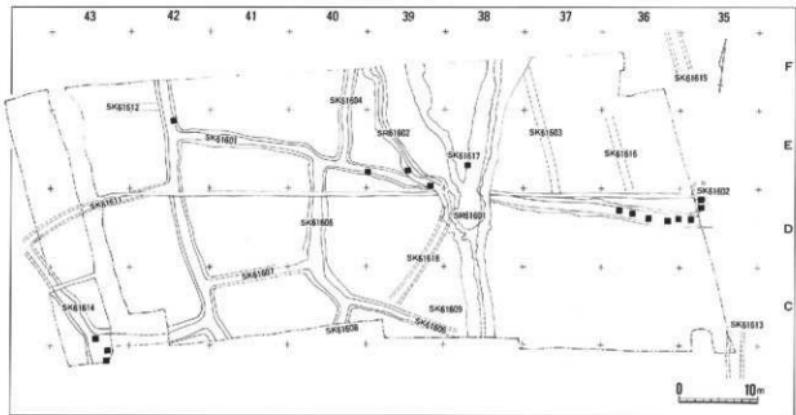
5区10層水田は弥生時代後期後半から古墳時代前期の時期幅に収まる。東西方向3本、南北方向4本の大畦畔によって区画された水田跡が検出されている。畦畔内より二又鍬、三叉鍬、舟形、曲物、梯子などの木製品と共に田下駄が19点出土している。田下駄は南北方向のSK51002、SK51001、東西方向のSK51007、SK51006内より出土している。SK51006を削っている浸食痕跡内より3点ほど出土しているが、元来はSK51006内にあったものと考えられる。SK51002とSK51001はSD51001を挟んだ並行の畦畔であり、このSD51001付近に田下駄は集中する。19点の田下駄のうちB類は1点、B-3類が確認されているだけで、他はすべてC類である。特にC-1類は15点を数え、C-2類、C-3類は各々1点である。弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけてC-1類が卓越することは、瀬名遺跡では普遍的にとらえられる傾向である。



第44図 5区10層水田下駄出土位置図

■田下駄出土地点

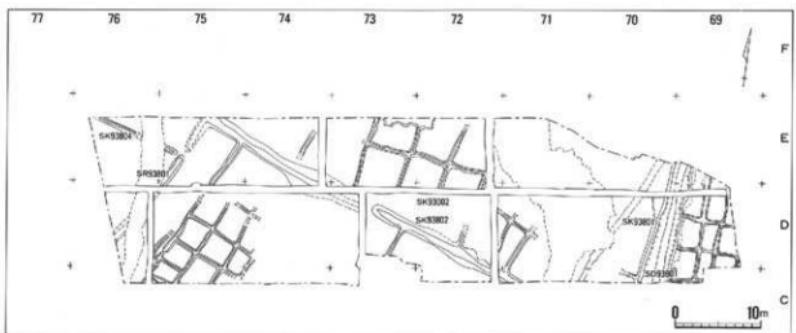
6区16層上面では、弥生時代後期から古墳時代前期の水田跡が検出されている。大畦畔により区画された水田であるが、畦畔は概ね南北と東西に走るが、畦畔で区画された田は不整形の四辺形を示している。大半の大畦畔には、杭、横板が密に打ち込まれていた。二又鍬、四又鍬、鉋物、鼠返し、梯子などと共に田下駄が16点検出された。16点中13点が東西方向の畦畔SK61601内より出土しており、他3点はSK61604とSK61609との交点付近より出土している。形態的には16点中、B-2類が6点、B-3類が1点、C-1類が8点、C-2類が1点である。この16層での水田耕作が弥生時代後期前半から始まっているとすると、首肯できる形態のバラツキである。



第45図 6区16層水田田下駄出土位置図

■田下駄出土地点

9区38層水田は弥生時代後期から古墳時代前期の時期幅が考えられる。大畦畔により区画された内に小畦畔で小さく区画された水田跡が確認されている。大区画は調査区中央を東西に走るSK93802を中心とし、それに直交する南北方向のSK93803、SK93801がある。田下駄は計17点出ており、出土位置が確認できるのは、うち14点でこの14点はいずれも大畦畔付近より出土している。特にSK93801の北端部よりは10点が集中して出土している。17点の田下駄の形態はB-2類が1点、C-1類が10点、C-2類が4点、D類が2点である。大半がC類で、D類が2点確認できることに注視したい。



第46図 9区38層水田田下駄出土位置図

■田下駄出土地点

以上板状田下駄が多数出土した水田遺構における田下駄の出土状況を見た。ここで、確認しておきたい点が3点ある。第1点は2・3区の14層水田（弥生時代後期前半）に伴った田下駄の形態と12層水田（弥生時代後期後半から古墳時代前期）のそれとは明瞭な形態差があるということである。12層水田の田下駄の形態はここで確認した1区22層、5区10層の同時期の田下駄と似ることも了解できた。これは次で詳述する瀬名遺跡における田下駄の形態変遷に直結する事実である。第2点は田下駄が大畦畔内またはその付近での出土が大半であるということである。検討した6面の水田面のうちすべての面におい

て言える事実である。溝内の出土や田面中央部の出土などは殆どなく、大畦畔内かその付近で出土している。1区22層水田と9区38層水田では、小区画の小畦畔が多数確認されているものの、これら小畦畔内の出土ではなく、この2面においても専ら大畦畔内の出土に限定できる。第3点はすべての大畦畔において、田下駄が出土しているのではなく、1つの田面においても限られた大畦畔において田下駄が集中して出土しているという事実である。2・3区の12層水田、5区10層水田、6区の16層水田、9区の38層水田は特に顕著であり、調査区を縱横に走る大畦畔ではあるが、田下駄はその大畦畔の限定された数本の大畦畔に出土が限られている傾向を読みとることができる。



写真1 SK51006 田下駄 出土状況



写真2 8区14b層 W-337, 338  
343 出土状況



写真3 9区 W-1612  
1611 9区 W-1613  
1614 出土状況

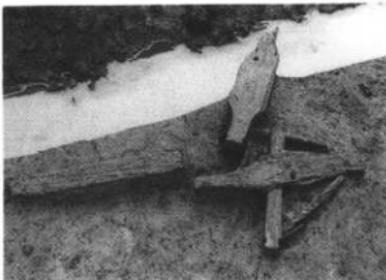
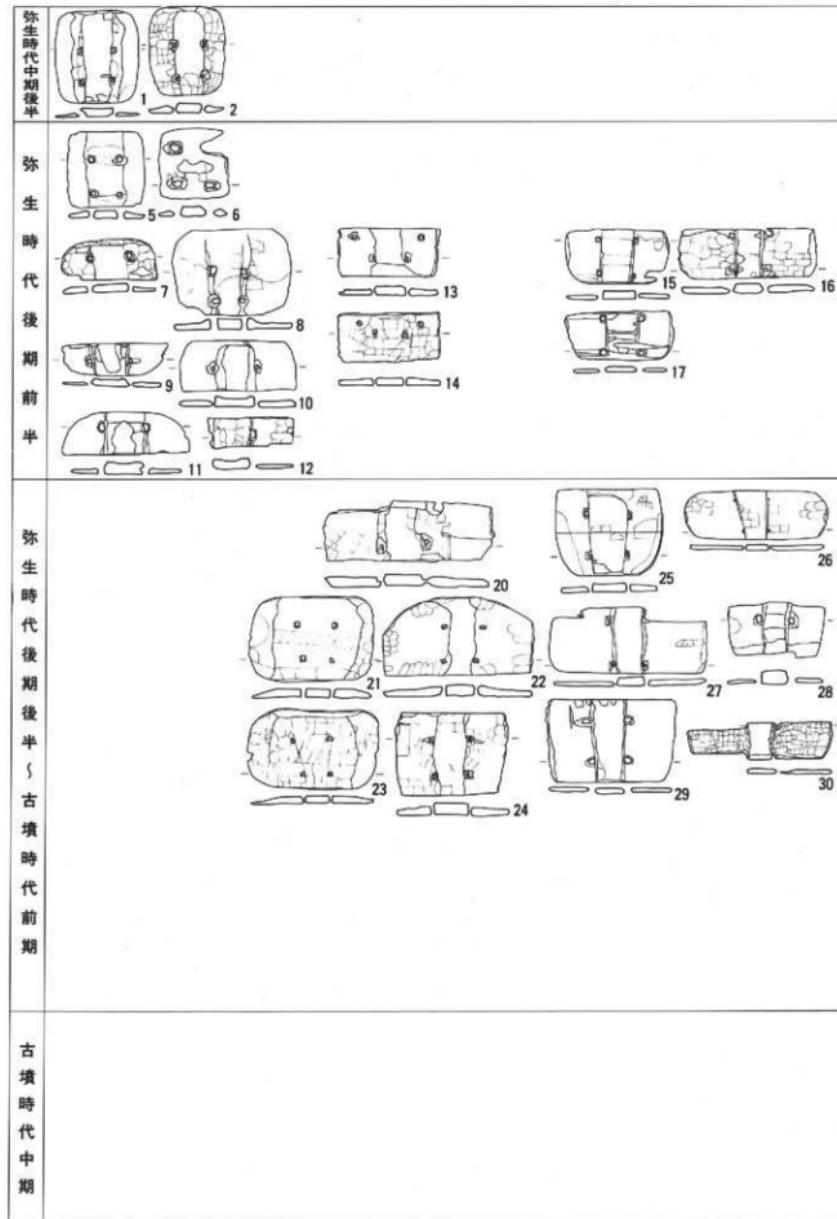


写真4 10区30層 W-614  
615 616 出土状況

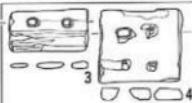
#### 4 板状田下駄の形態変遷

瀬名遺跡出土の田下駄178点の出土状況を検討してみると、中には出土層位の関係上、所属時期に幅をもたせないといけないものと、短い時期に限定できるものがある。特に板状田下駄の所属時期としては次の5つの時期を設定してみた。1)弥生時代中期後半、2)弥生時代後期前半、3)弥生時代後期後半から古墳時代前期、4)古墳時代中期、5)古墳時代後期の5時期である。これは瀬名遺跡のこれらの時期における水田遺構が確認できることから設定できた5時期である。が、調査区によっては、弥生時代中期から古墳時代前期までの土器片が連続した層、遺構の中で確認できるところもあり、必然的に田下駄がこれら5時期のどこに属するかについては慎重な検討を必要とした。各調査区の遺構の年代を再

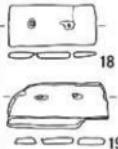


第47図 瀬名遺跡の板状田下駄の編年図

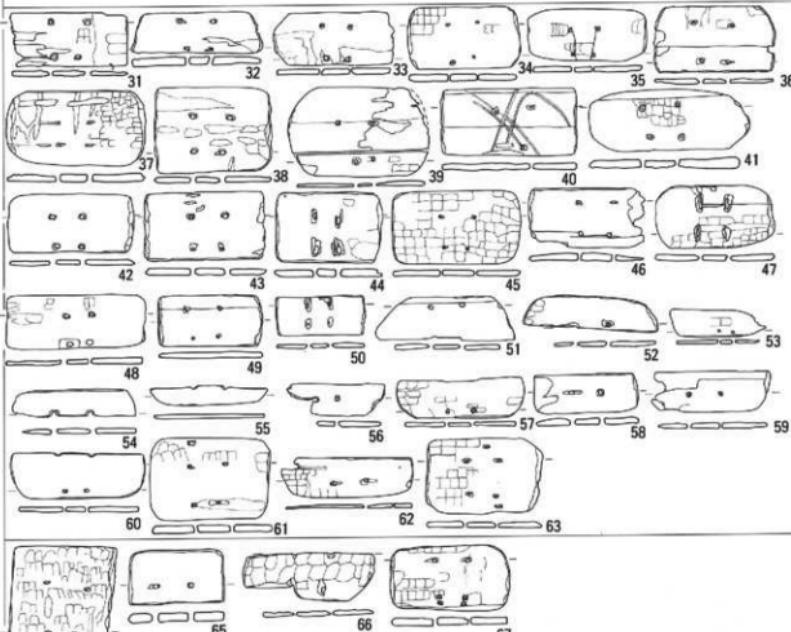
弥生時代中期後半



弥生時代後期前半



弥生時代後期後半～古墳時代前期



古墳時代中期

古墳後

第48図 瀬名遺跡の板状田下駄編年図

び出土器よりチェックし、178点の板状田下駄を検討した結果、5時期に分けて時期設定できるものは、69点であることがわかった。他の109点に関しては時期幅を長く持ってしまい、5時期に分けることが不安なため外した。69点に関してはすべて第47図、第48図に示した。

69点を5つの時代別に分け、先述したA・B・C・D類の別を縦軸にとって示してみた。1、2、5、6、7は綫長で、足台が漸次隆起するタイプ、A類の田下駄である。1、2は典型的なA類の形態を示すもので、また、2・3区の16層水田という弥生時代中期後半の良好な資料として注目されるものである。8、9、10、11、12はB-1類に属する田下駄で、横長であり、足台は漸次隆起し、足囲い状を呈する。8は典型的なB-1類の形状を示す完形品である。5点と数は少ないが、形態的には似たものばかりで、定型化している様子が窺える。13、14、20、21、22、23、24はB-2類で、横長であり、足台部が漸次隆起する田下駄である。13、14は2区14層で近接して出土した資料で、同一工人による製作が想定できるものである。これら7点は足台の隆起の仕方はある共通性があるものの、平面形は長方形あり、隅丸長方形あり、台形あり、扇形ありと千差万別の感がある。15、16、17、25、26、27、28、29、30はB-3類に属し、足台は段差状に強調して設けている一群である。15、16、17は25、26、27、28、29、30に比して平面積が明らかに小さく、前孔が前の端部に近く穿たれている。やはり平面形にはバラエティがある。3、4、18、19、31-60、64、65、66はC-1類に属し、足台がない板状の平坦な田下駄である。平面形は本文で分けたように、正方形、長方形、隅丸長方形、小判型、椿円形、円形などの形狀があり、定型化した平面形を示さない。61、62はC-2類で、平坦な田下駄であり、緒孔の4つ以外に1孔別に穿たれている。63、67はC-3類としたもので、緒孔以外の孔は定まった位置に穿たれておらず、61は壁板材の転用のための孔とも考えられたり、67に関しては、後孔の穿ち直しのための別の2孔とも考えられ、緒孔以外の孔の機能は定まったものとは考えにくい。68、69は田下駄と断じれず、孔の穿ち方、平面形いいずれも古墳時代中期までのそれとは違ひ、変則である。

板状田下駄の形態別の消長を見てみる。A類は弥生時代中期後半に丁寧な作りで形態的にも整ったもので出現する。瀬名遺跡においては、この時期が明確な水田区画を捉えられる最も古い時期であり、木製農耕具もこの時期に出現しているのが確認されている。静岡の初期農耕に伴う田下駄は、このA類とC-1類である。このA類は弥生時代後期前半まで続くが、そこで消滅してしまうようだ。B-1類は瀬名遺跡の確実な資料だけから判断すると、弥生時代後期前半にのみ見られる形態の田下駄である。B-1類に似た形態のB-2類は、後期前半に現われ、後期後半から古墳時代前期まで続く。後期前半から古墳時代前期になると平面積が大きくなり、平面形も多様化する。その傾向はB-3類も同様である。

第35表 田下駄形態別の消長表

	弥生時代中期 後半	弥生時代後期 前半	弥生時代後期後半 から古墳時代前期	古墳時代中期	古墳時代後期 ～
A類	←→				
B-1類		↔			
B-2類		↔	→		
B-3類		↔	→		
C類	←				→

B-3類もやはり後期前半は小型で定型化しているが、後期後半から古墳時代前期になると、大型で平面形が乱れる。B-2、B-3類はこの古墳時代前期で終焉する。足台がある田下駄、つまりA類、B類の田下駄は、この古墳時代前期に消滅してしまう。

C-1類は初期農耕段階の弥生時代中期後半から出現しており、古墳時代中期までは確実に残る。特に弥生時代後期後半から古墳時代前期に飛躍的に卓越し、その数を増す。やはり、平面積はこの時期大きくなり、平面形も多様である。古墳時代中期になると、数は減り、形態も乱れ、穿孔位置すら定まらず乱れる。古墳時代後期以降になると、明瞭に板状の田下駄と呼べるものなくなる。C-2類、C-3類は資料不足のため、ここでは言及しない。形態別の消長も時期差が捉えられ重要である。同じ形態の田下駄においても、弥生時代後期前半までは平面形態はその形態の中で定型化しているのだが、弥生時代後期後半から古墳時代前期になると平面積が大きくなり、平面形が乱れて多様化することが重要と考える。

またここで押さえておきたいことは、板状田下駄は弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて最も頻繁に用いられるようだが、ほぼ古墳時代中期には消滅してしまう事実である。板状田下駄は何に置き替えられたのか検討するとき、輪カンジキ型田下駄の検討が必要になる。

## 5 板状田下駄の穿孔方法について

通常、板状田下駄には4つの緒孔が穿たれている。その4つの孔の位置については、後に詳述したいが、ここでは孔の穿ち方に差異が認められるため、その差異を検討し、穿孔道具の素材についての予察を述べてみたい。

木製品の加工痕を観察分析することによって、その加工工具の形状、材質を想定しようとした研究には、管見で漏れがあろうが、山田昌久氏（山田 1984）と宮原晋一氏（宮原 1988）が取り組んでいる。特に宮原氏は木製品加工痕分析の限界を知らしめると同時に、鉄器にある加工痕の抽出がある部分では可能であることを指摘してくれている。木材の加工面で、斜角面または直角面において刃先痕が露出していない加工痕は、鉄器加工工具と断定して良いという見解を示している。また刃先痕が切り取られていたりして残っていない場合や、露出している場合は、石器の可能性も含めて、断定は困難であるという限界性をも指摘している。その後の研究で宮原氏が示した限界性を越える研究はなく、木製品の加工痕分析は、そこで停滞しているのが現状であろう。<sup>(5)</sup>

ここで検討する田下駄の緒孔の穿孔方法についても明瞭に穿孔道具の材質まで断定しえるものではないことは、残念ながら事前に明らかである。しかし瀬名遺跡出土の田下駄において、時期限定可能な69点の穿孔の形態には差異が観察でき、その差異は穿孔道具の違いに直結するものと考えることができる。ここで模式的に穿孔形態についてA~Hまで図示してみた。Aは円形の小孔であるが、実測図に示すと貫通している孔のまわりに稜線が巡るようになる。孔の断面は角がなく緩やかな曲線を描く。孔の穿ち方として、表面から穿ち、裏面からも穿っているのが観察できる。Bは楕円形の小孔であり、Aとはほぼ似た技術によって穿たれている。楕円形になってしまうのは、穿孔道具の刃幅が影響しているのであろうか。Cは円形でAに比して大きく穿たれている。貫通部分で直径2cm以上もあるものもある。基本的な穿孔技術はA・Bと似る。Dは真円形の小孔である。垂直に直線的に穿たれている。Eは方形の小孔であるが、やや斜めに穿孔工具が当たっているのか、上端に稜がつく。裏面、両側から穿っているのが観察できる。Fは長方形に穿たれており、刃は垂直に入っている。断面は角が直角になっている。Gは正方形の小孔に穿たれている。Fとはほぼ同じ技術で穿たれている。Hは継位に鋒がある直線的な刃物を当てて、無理矢理穿ったものである。表裏両側から同じように切り込み、孔を貫通させている。

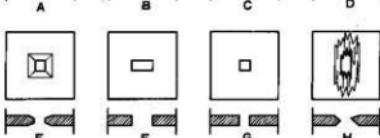
これら8つの穿孔形態を、69点の田下駄の中で見てみる。Aの穿孔形態を有する田下駄としては、5、

7、8、19、42などを挙げることができる。Bの穿孔形態としては9、10、11、12、20、66などを挙げることができよう。Cの穿孔形態としては3、6が典型であろう。Dの穿孔形態を示すものは、古墳時代までの田下駄にはない。これは輪カンジキ型田下駄のところで述べるが、この穿孔形態の孔を有する輪カンジキ型田下駄の足板は、古代には今のところ確認できず、民具資料の中では数多く確認できることにより、中・近世の時期の中で出現していく穿孔技術であろうとしかここでは言えない。Eの穿孔形態としては1、2、4、13、14、15、16、17、18、28、29、30、38、43、64などを挙げることができる。Fの穿孔形態としては63を挙げることができるであろう。Gの穿孔形態としては21、22、23、24、25、26、27、31、32、33、34、35、36、37、39、40、41、45、46、49、56、59、60、61、63などを挙げることができる。Hの穿孔形態としては44、47、50を挙げができる。

これらの穿孔形態を有する田下駄の出現を確認し、表にしたのが第36表の板状田下駄穿孔形態の消長表である。CとEの穿孔方法は弥生時代中期後半の瀬名遺跡においては、初源的な田下駄から見られる技法である。あまり鋭利な刃物ではないことは確かであり、刃幅1cmほどの石製鑿状工具を用いて穿孔したと想定することができる。川合遺跡で出土している刃厚がある刃幅1cmほどの石製鑿を穿孔道具として想定したい。AとBの穿孔方法は弥生時代後期前半から出現する。Cよりは鋭利な刃物と考えられるが、それでも表裏両側から相当力まかせに穿孔している様子が窺われる。AとBの違いは平面形か円形か梢円形の違いだけで、穿孔技術としてはほぼ類似したものであろう。穿孔道具が石器か鉄器かは判別ができない。穿孔技術は弥生時代後期後半から古墳時代前期の田下駄から確認でき、F・Gは鋭利な刃幅の狭く、刃厚が薄い穿孔道具を用いている。それ故にはば垂直に小孔が穿てるのであると考える。H

第36表 板状田下駄の穿孔形態の消長表

	弥生時代中期	弥生時代後期 前半	弥生時代後期後半 ～古墳時代前期	古墳時代中期	古墳時代後期～
A		←			
B		←			
C	←				
D					←
E	←				
F			←		
G			←		
H			←		



第49図 穿孔形態模式図

は小刀状の鋭利な鉢のある刃物で切りつけ穿孔したものである。F・G・Hは鉄製穿孔道具によると考える。

以上より、穿孔道具に関しては弥生時代中期後半には、石製の盤状加工工具で穿孔しており、弥生時代後期後半から古墳時代前期には、明らかに鉄製の穿孔道具を用いていることが了解できよう。弥生時代後期前半はその過渡期とも位置付けられ、その後の弥生時代後期後半から古墳時代前期の明確な鉄器化の時期を際立たせているであろう。これは鉄器の出土例、前述の木製農耕具の組成の変遷とも関係し、静岡県における鉄器化への流れを物語る重要な事実の一つとして考えられるであろう。

## 6 輪カンジキ型田下駄の形態変遷

先述の秋山浩三氏は「方形枠付き形式」の「田下駄」は「各材が原則として枘孔結合で組み立てられる」とし、山木遺跡出土の有頭舟形木製品は「方形枠付き形式」の大足の足板ではなく、「円形枠付き形式」の「田下駄」としている。静岡県内の大足、輪カンジキ型田下駄の出土例から判断して、この秋山氏の所見は正しいであろう。<sup>(6)</sup>また瀬名遺跡出土の輪カンジキ型田下駄の出土例は、具体的にこの秋山氏の所見を補強する実例であろう。足板状をした木製品は、上下端付近を有頭状または縛綱用の穿孔が施されており、この2つのタイプの足板に横木が組み合わされて出土したり、またより良好な出土としては、横木と輪を伴って出土している。つまり有頭状または縛綱用穿孔が上下端に設けられている足板状木製品は、輪カンジキ型田下駄になるということは明確に言えるであろう。

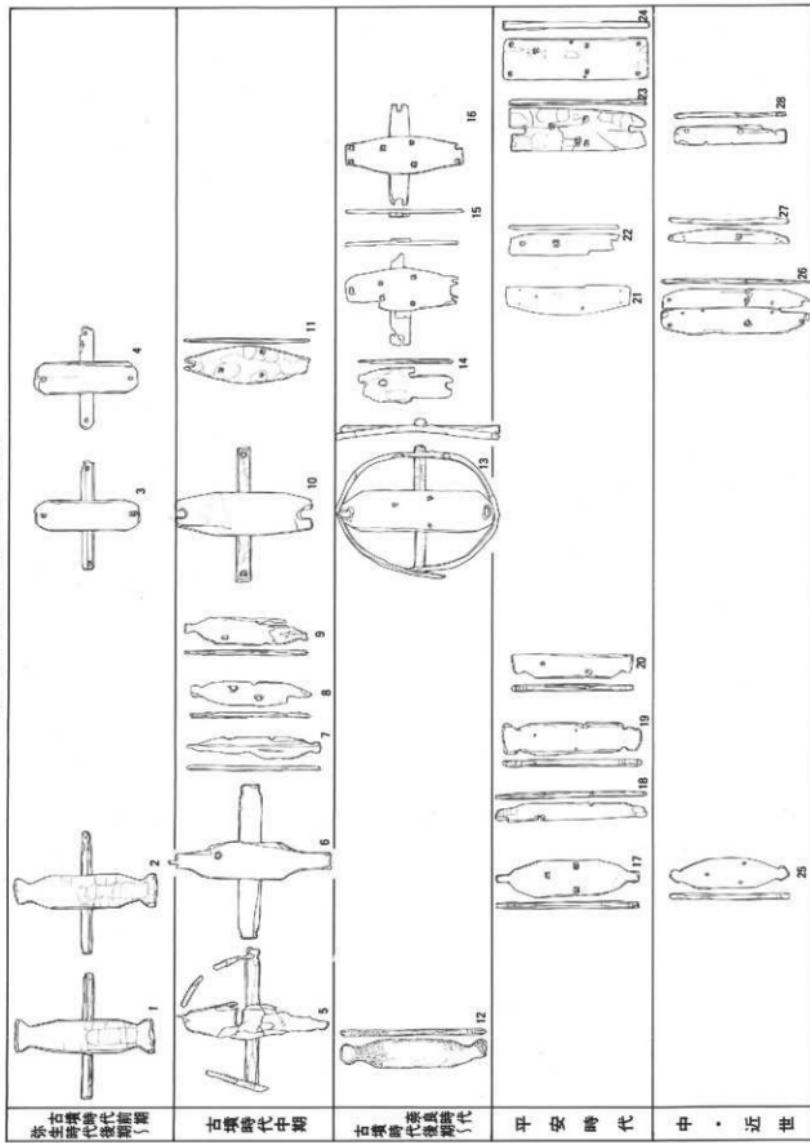
第50図の輪カンジキ型田下駄形態変遷に図示してある28点について、輪カンジキ型田下駄であると判断している。横木を伴って出土したものがうち10点あり、輪をも伴ったものが2点ある。これらの出土状況及び民具例の輪カンジキ型田下駄の形状から、これら28点はすべて輪カンジキ型田下駄になると考へる。輪カンジキ型田下駄は既述の様に、足板と横木と輪とを植物纖維で縛するという構造をもつ。瀬名遺跡出土の輪カンジキ型田下駄の基本的な形態は、第40図の模式図で示した①～⑦がそれである。①は両端を有頭状に削りだし、縫孔を1つのみ有した足板をもつものである。③はやはり両端を有頭状に削りだし、縫孔を3つ有した足板をもつものである。④は平面形は舟形をし、上下端付近にそれぞれ縛綱用の穿孔を施し縫孔を有しない足板をもつものである。⑤は舟形をし、上下端付近に縛綱用の穿孔がそれぞれ1つづつあり、縫孔を3つ有する足板をもつものである。⑥は舟形をし、上下端付近に縛綱用の穿孔をそれぞれ2つづつ有し、縫孔を3つ有する足板をもつものである。足板の輪との縛綱部の形状の違いと、縫孔の数の違いが目立つ形態の差異である。

第50図の形態変遷図であるが、1、2、5、12が①の形態の輪カンジキ型田下駄である。1、2は9区37層水田の畦畔内より横木を伴い、2枚セッタ1足分で出土したものである。5は横木と輪を伴って出土したものである。これらの足板には縫孔がなく、足を足板に縛り付けたものと想定する。6は②の形態として唯一確認できたもので、有頭、舟形の足板に縫孔が1つ穿たれたものである。7、8、9、<sup>(7)</sup>17、18、19、20、25は③の形態を示す。縛綱部を有頭にし、3つの縫孔が穿たれている。

3・4・10は④の形態で、縫孔がなく舟形の足板の上下端付近に縛綱用の穿孔が1つづつあるものである。横木の左右端部付近にも1つづつ穿孔がある。11、13、14、15は⑤の形態で舟形の足板に3つの穿孔が穿たれているものである。特に13は、横木、輪と伴に出土し、完形状態を復元できる好資料である。<sup>(8)</sup>16、21、22、26、27は⑥の形態で、舟形の足板に上下端付近に2つづつの縛綱用の穿孔がある。23、24、28は⑦の形態である。ただ23は輪を縛綱する上下端の孔が1つづつあるのに対し、24、28は2つづつある。これは民具例でも多く見られるが、長方形の板材を最も簡便に加工し、輪カンジキ型田下駄にしたものである。

①は古墳時代前期に確認でき、ほぼ古墳時代ぐらいで消えてしまうのだろうか。③のように明瞭に3

第50図 繩カンジキ型田下鉢 編年図



つの縫孔が穿かれたものは、古墳時代中期頃から現われると考えられ、その後民具例まで続くものである。④のように、①と同じく縫孔がないタイプのものは、古墳時代前期頃に現われ、古墳時代のうちに消えていくのだろう。⑤のように縫孔があるものは古墳時代中期に始まり、⑥のような上下端付近に2つの穿孔のあるものは、古墳時代後期頃から現われ、⑦のように平面形が長方形をしたものは、後出のものと考へることができる。

以上、瀬名遺跡における輪カンジキ型田下駄の形態変遷を検討したが、次の3点を確認しておきたい。1つは、輪カンジキ型田下駄が出現するのが弥生時代後期後半から古墳時代前期頃であり、定型化し数も増えるのが古墳時代中期である。先述のように、古墳時代中期には板状田下駄が急減し、消滅に向かう時期に当たる。つまり古墳時代前期から中期頃にかけて、田で足を浮かすために履く山下駄は板状の田下駄から輪カンジキ型田下駄に漸次置き換わっていくことが了解できる。板状田下駄はこの時期に消滅したようであるが、輪カンジキ型田下駄は、その後も中近世まで存続し、民具例までつながるようである。2つに、輪カンジキ型田下駄の足板において、古墳時代前期頃、初出の段階では縫孔しかしないもので始まることがある。古墳時代中期に3つの縫孔の形態が出現する。それはその後輪カンジキ型田下駄において普遍的な縫孔のあり方になる。これは日常履く下駄にも影響を与えたとも考へることができる。3つに、足板の上下端付近の縫縫用穿孔が1つづから2つづに変化していることや、足板の平面形が長方形のものが出現するということである。この変化は今の段階では明確にどの時期に現われるのか言えない。輪カンジキ型田下駄は板状田下駄に比して、出土数も少なく、帰属時期も幅があり変遷を明瞭に言い切れないという限界がある。

## 7 田下駄の形態と機能

田下駄、特に板状田下駄を計測し、計測値より田下駄の形態上の特徴を整理してみた。ここで特に取り上げるのは、縫孔の位置関係と表面積である。縫孔は板状の4孔の田下駄が対象となり、表面積は輪カンジキ型田下駄をも含めて検討した。ここで計測対象とした板状田下駄は、瀬名遺跡出土のもの95点、池ヶ谷遺跡（静岡市）出土のもの50点、川合遺跡（静岡市）出土のもの23点、長崎遺跡（清水市）出土のもの16点、計184点である。瀬名遺跡出土の田下駄は178点中、縦長・横長が計測でき、面積が概ね算出できるもの95点に絞った。また他3遺跡の田下駄は現地調査途中であることにより、担当の調査員が田下駄と現地点で認定しているものをすべて計測してみた。欠損状態によりこれら3遺跡の場合は計測不可の部位が多い。

計測部位の名称は第51図の模式図を参照してほしい。現行の民具例の縫孔の位置関係より4つの孔は、前孔より後孔の方が短いことより、4孔を逆台形状に配した場合を正位置とした。縦長、横長は各々の最大長を計測した。4孔の位置関係を示すため次の5つの部位を計測した。前孔間とは左前孔と右前孔間を測る。孔と孔の間長は孔の中心点から中心点を測った。後孔間とは左後孔と右後孔間の長さである。前孔前長とは前端から前孔間の直線に垂線を下ろした長さである。前後孔間長とは前孔間の直線から後孔間の直線までの長さである。後孔後長とは後端から後孔間の直線に垂線を下ろした長さである。以上の縫孔の位置関係を示す計測値に加えて、厚さ（平坦面の最大厚）、足台厚（足台のあるA類、B類の足台の最大厚）を計測した。面積はここでは横全長に縦全長を乗じた数値をあげた。



第51図 田下駄計測部位名

第37表 田下駄計測表

No	道跡名	登録番号	区	被松	年代	分類	横全長 (cm)	横反 (cm)	足厚 (cm)	厚 (cm)	前孔 (cm)	前孔 前後 (cm)	後孔 (cm)	後孔 前後 (cm)	本取引 枚目	孔形	面積 (cm)	
1	湖南道跡	W1547	8.3	16	赤中	A-1	28.1	29.1	3.1	0.6	10.0	12.5	9.0	6.9	9.7	板目	円形	739.5
2	湖南道跡	W1548	2.3	16	赤中	A-1	23.7	28.1	3.2	1.2	8.8	12.1	8.0	6.8	9.9	板目	円形	696.0
3	湖南道跡	W1147	2.5	14	赤後→古前	A-1	20.5	23.3	3.1	1.8	9.8	4.6	-	-	-	透板(木製)	円形	477.7
4	湖南道跡	W1144	2.3	14	赤後→古前	A-1	23.8	23.6	2.3	2.1	8.9	8.8	8.1	3.9	10.6	板目(木製)	円形	561.9
5	湖南道跡	W738	1	22	赤後→古前	B-2	36.6	19.1	2.6	2.0	9.8	6.3	6.5	4.1	9.1	板目	円形	689.1
6	湖南道跡	W1575	2.3	11	赤後→古前	B-2	31.5	18.1	-	2.0	18.8	3.4	8.8	2.1	10.0	板目	円形	451.1
7	湖南道跡	W308	2.3	12	赤後→古前	B-2	36.6	28.0	2.8	1.9	11.2	9.3	8.6	7.2	11.4	板目	方型	1021.8
8	湖南道跡	W412	2.3	12	赤後→古前	B-2	38.7	26.4	2.1	1.6	11.2	9.4	7.9	5.4	11.4	板目	方型	1021.9
9	湖南道跡	W429	2.3	12	赤後→古前	B-2	34.6	28.0	2.7	2.5	11.4	8.4	9.8	6.1	11.7	透板	圓孔	899.6
10	湖南道跡	W2950	6	16	赤後→古前	B-2	38.3	2.1	3.4	2.3	10.8	7.7	8.8	3.0	12.7	透板(木製)	方型	933.0
11	湖南道跡	W2961	6	16	赤後→古前	B-2	41.8	27.2	2.3	1.9	15.0	9.5	9.2	3.4	14.5	板目(木製)	方型	1131.5
12	湖南道跡	W1156	6	16	赤後→古前	B-2	31.9	18.2	2.6	1.9	10.8	7.7	8.7	4.2	9.3	板目(木製)	円形	580.6
13	湖南道跡	W597	6	16	赤後→古前	B-2	16.2	15.2	1.5	1.1	10.3	5.5	-	-	-	板目(木製)	円形	792.2
14	湖南道跡	W504	8	17	赤後→古前	B-2	38.1	15.9	2.3	1.3	10.8	5.2	-	-	-	板目(木製)	円形	605.8
15	湖南道跡	W2864	9	34	赤後→古前	B-2	38.1	28.9	2.9	2.0	12.8	9.5	8.5	7.8	11.4	板目(木製)	方型	1109.8
16	湖南道跡	W891	10	31	赤後→古前	B-2	33.9	23.4	-	2.3	10.5	7.6	8.7	6.5	9.3	板目(木製)	方型	772.2
17	湖南道跡	W537	9	25	平安	B-2	41.6	22.8	3.1	1.6	10.8	9.5	8.2	2.5	12.8	透板	圓孔	1031.7
18	湖南道跡	W737	1	23	赤後→古前	B-3	19.5	21.6	2.1	1.6	11.0	3.2	10.0	3.3	13.0	透板(木製)	方型	1069.2
19	湖南道跡	W1551	2.3	16	佛中	B-3	31.6	17.2	3.3	1.0	11.7	3.3	19.7	3.0	10.4	板目	方型	543.6
20	湖南道跡	W171	2.3	14	赤後→古前	B-3	31.8	16.1	1.9	1.4	11.2	2.2	11.7	1.9	11.3	板目(木製)	圓孔	512.0
21	湖南道跡	W1059	2.3	12	赤後→古前	B-3	33.3	26.9	2.5	1.6	13.6	7.9	11.8	6.1	12.6	板目(木製)	圓孔	988.5
22	湖南道跡	W535	2.3	12	赤後→古前	B-3	42.4	16.2	2.9	1.5	9.7	3.0	7.6	3.2	10.0	板目(木製)	方型	665.9
23	湖南道跡	W609	2.3	12	赤後→古前	B-3	19.1	21.0	2.8	-	-	-	9.5	2.6	-	板目(木製)	円形	1010.1
24	湖南道跡	W531	3	13	赤後→古前	B-3	36.9	27.7	2.1	1.4	12.7	7.2	14.9	6.9	12.6	板目(木製)	圓孔	1017.6
25	湖南道跡	S6770	7	10	赤後→古前	B-3	45.6	19.3	2.7	1.1	12.2	2.3	9.2	2.7	11.2	板目(木製)	円形	868.5
26	湖南道跡	W942	7	10	赤後→古前	B-3	37.2	25.1	-	1.2	14.7	6.1	13.6	5.9	10.0	板目	圓孔	933.7
27	湖南道跡	W946	10	33	赤後→古前	B-3	46.2	17.7	3.1	1.6	10.9	1.8	8.1	2.8	10.6	透板(木製)	方型	640.7
28	湖南道跡	W169	1	22	赤後→古前	C-1	33.8	20.7	-	1.8	-	-	6.2	3.1	-	板目(木製)	圓孔	699.7
29	湖南道跡	W693	1	22	赤後→古前	C-1	37.6	15.1	-	2.0	9.8	3.4	8.2	3.0	8.7	透板(木製)	方型	579.0
30	湖南道跡	W1743	1	22	赤後→古前	C-1	39.5	22.6	2.0	1.9	9.3	8.8	8.3	4.4	9.2	透板	方型	1118.7
31	湖南道跡	W1722	1	22	赤後→古前	C-1	41.1	32.1	-	1.7	10.3	12.7	9.1	4.2	9.3	透板(木製)	方型	1031.6
32	湖南道跡	W1595	2.3	20	佛中	C-1	21.4	13.3	-	1.8	10.5	3.9	-	-	-	板目(木製)	方型	324.5
33	湖南道跡	W1502	2.3	16	佛中	C-1	25.3	22.8	-	3.8	8.8	6.0	9.0	5.7	10.2	板目(木製)	方型	576.8
34	湖南道跡	W403	2.3	12	赤後→古前	C-1	36.3	17.1	-	1.4	11.1	5.1	7.3	3.0	10.8	板目(木製)	方型	620.7
35	湖南道跡	W492	2.3	12	赤後→古前	C-1	40.3	13.3	-	2.4	10.3	2.7	7.3	3.3	8.7	板目(木製)	圓孔	536.0
36	湖南道跡	W411	2.3	17	赤後→古前	C-1	30.1	10.9	-	1.0	-	-	8.6	1.6	-	板目	円形	661.0
37	湖南道跡	W149	2.3	12	赤後→古前	C-1	37.2	16.8	-	1.9	8.8	4.1	6.6	2.1	10.2	板目(木製)	方型	624.5
38	湖南道跡	W534	2.3	12	赤後→古前	C-1	31.5	19.7	-	1.9	9.3	5.3	6.9	3.1	11.2	板目(木製)	円形	679.6
39	湖南道跡	W438	2.3	12	赤後→古前	C-1	31.6	24.9	-	1.9	9.8	4.4	6.6	2.1	10.2	透板(木製)	方型	1035.8
40	湖南道跡	W435	2.3	12	赤後→古前	C-1	39.9	19.2	-	2.1	10.8	5.3	10.0	4.5	9.6	板目(木製)	方型	658.1
41	湖南道跡	W406	2.3	12	赤後→古前	C-1	31.8	28.8	-	1.8	11.0	9.9	8.4	6.7	13.3	板目(木製)	圓孔	1002.3
42	湖南道跡	W134	2.3	12	赤後	C-1	40.5	22.5	-	2.1	10.7	7.0	-	-	-	板目(木製)	圓孔	911.3
43	湖南道跡	W720	2.3	12	赤後→古前	C-1	37.9	21.3	-	2.7	10.6	7.8	8.9	3.3	10.2	板目(木製)	圓孔	805.1
44	湖南道跡	W633	2.3	12	赤後→古前	C-1	35.6	21.8	-	1.3	11.6	5.9	7.9	3.3	12.5	板目(木製)	方型	726.1
45	湖南道跡	W625	2.3	12	赤後→古前	C-1	35.1	17.0	-	1.7	8.2	6.2	6.1	2.2	8.0	板目(木製)	円形	601.8
46	湖南道跡	W118	2.3	12	赤後→古前	C-1	38.8	16.5	-	1.4	9.2	7.1	7.6	1.7	9.3	板目(木製)	圓孔	717.8
47	湖南道跡	W117	2.3	12	赤後→古前	C-1	33.3	22.1	-	2.1	7.6	6.0	7.0	1.1	9.9	板目(木製)	圓孔	735.9
48	湖南道跡	W473	2.3	12	赤後→古前	C-1	43.0	27.8	-	1.2	11.1	11.2	3.6	4.9	12.2	板目(木製)	圓孔	217.6

No	地名	登録番号	区	層位	年代類	分類	標本量	総面積 (cm)	延長 (cm)	厚 (cm)	礫化 率	孔 (cm)	孔径 (cm)	孔長 (cm)	孔深 (cm)	木炭量 (ton)	木炭 率(%)	孔形	面積 (sqm)
49	地名道路	W-130	2.3	12	古後~古前	C1	42.9	16.9	-	1.6	8.0	6.3	6.2	1.4	8.0	過往(木炭)	圓形	725.0	
50	地名道路	W-393	2.3	11	古後	C1	31.3	38.4	-	2.0	12.5	12.8	8.1	5.7	13.3	過往	圓丸	1045.5	
51	地名道路	W-216	5	10	古後~古前	C1	28.0	12.5	-	1.6	6.8	7.9	6.6	2.6	9.8	過往(木炭)	圓丸	350.0	
52	地名道路	W-221	5	10	古後~古前	C1	22.7	12.5	-	1.8	9.3	5.8	7.1	-	-	過往(木炭)	方形	408.8	
53	地名道路	W-228	5	10	古後~古前	C1	36.8	19.1	-	1.8	8.6	5.4	8.4	4.7	9.1	過往(木炭)	-	713.9	
54	地名道路	W-229	5	10	古後~古前	C1	35.4	12.8	-	1.6	-	9.8	5.6	-	-	過往(木炭)	圓丸	462.1	
55	地名道路	W-230	5	10	古後~古前	C1	29.8	23.2	-	2.3	10.2	8.0	7.0	9.1	10.0	板目(木炭)	方形	928.2	
56	地名道路	W-232	5	10	古後~古前	C1	32.7	16.2	-	1.3	9.8	1.1	8.0	2.8	9.4	板目	圓形	529.7	
57	地名道路	W-1190	6	16	古後~古前	C1	21.5	15.8	-	1.1	6.0	5.8	4.8	1.7	8.8	板目(木炭)	方形	545.1	
58	地名道路	W-2797	6	16	古後~古前	C1	41.8	16.1	-	1.7	9.3	4.1	7.1	2.7	9.3	板目(木炭)	圓丸	673.0	
59	地名道路	W-2456	6	16	古後~古前	C1	31.6	18.3	-	1.3	9.9	5.5	8.2	2.5	10.0	過往(木炭)	方形	528.3	
60	地名道路	W-883	7	10	古後~古前	C1	37.1	31.5	-	1.1	11.8	12.7	7.8	6.9	12.1	過往(木炭)	圓丸	1168.6	
61	地名道路	SKY-10 -16	7	10	古後~古前	C1	39.1	16.7	-	1.2	10.6	9.3	8.3	1.6	11.4	板目(木炭)	圓丸	653.0	
62	地名道路	W-906	7	10	古後~古前	C1	36.8	18.2	-	1.4	8.6	8.3	6.6	2.0	7.6	過往(木炭)	圓形	670.0	
63	地名道路	W-907	7	10	古後~古前	C1	35.3	19.1	-	1.7	8.5	8.0	6.1	2.6	8.3	過往(木炭)	圓丸	731.5	
64	地名道路	W-908	7	10	古後~古前	C1	48.0	23.5	-	1.9	9.8	6.1	8.9	6.1	10.7	板目(木炭)	圓形	940.0	
65	地名道路	W-670	8	17b	古後~古前	C1	36.8	19.0	-	2.3	12.0	4.3	11.5	3.3	11.1	板目(木炭)	圓形	699.2	
66	地名道路	W-682	8	17b	古後~古前	C1	33.6	8.2	-	1.5	-	-	-	-	-	過往(木炭)	圓丸	275.5	
67	地名道路	W-1671	9	38	古後~古前	C1	32.0	15.1	-	1.6	9.2	3.9	8.1	2.7	19.8	板目(木炭)	圓丸	515.2	
68	地名道路	W-1765	9	38	古後~古前	C1	35.7	15.6	-	1.9	10.3	2.7	5.7	4.2	8.1	板目(木炭)	方形	351.4	
69	地名道路	W-1594	9	38	古後~古前	C1	34.5	20.0	-	1.4	9.6	5.1	7.6	2.9	11.8	板目(木炭)	圓丸	690.0	
70	地名道路	W-1773	9	38	古後~古前	C1	37.3	22.6	-	2.0	9.6	6.8	8.0	4.8	11.0	板目(木炭)	方形	843.0	
71	地名道路	W-1774	9	38	古後~古前	C1	29.8	11.7	-	1.6	-	6.3	1.7	-	-	板目	圓丸	348.7	
72	地名道路	W-1811	9	38	古後~古前	C1	40.0	16.8	-	1.2	10.2	1.6	7.5	1.3	10.8	過往(木炭)	方形	612.0	
73	地名道路	W-1661	9	37	古後~古前	C1	49.1	35.5	-	1.4	11.6	13.5	12.1	10.9	11.5	板目	方形	1423.6	
74	地名道路	W-1663	9	37	古後~古前	C1	38.5	32.4	-	1.6	10.4	11.3	10.3	11.9	11.8	板目	方形	1362.9	
75	地名道路	W-1626	9	37	古後~古前	C1	28.1	19.9	-	2.2	11.0	7.1	7.8	2.2	10.5	板目(木炭)	方形	758.2	
76	地名道路	W-1625	9	37	古後~古前	C1	20.6	19.1	-	2.3	10.6	5.6	7.6	2.1	11.7	板目(木炭)	方形	768.2	
77	地名道路	W-1623	9	37	古後~古前	C1	33.7	20.1	-	2.3	11.4	6.5	7.8	2.3	11.7	板目(木炭)	方形	687.5	
78	地名道路	W-1647	9	33	古後~奈良	C1	49.8	21.5	-	1.6	10.9	7.1	7.9	2.5	11.9	過往(木炭)	方形	877.2	
79	地名道路	W-833	10	35	古後~古前	C1	29.7	13.6	-	1.7	-	7.6	4.3	-	-	板目	圓丸	615.4	
80	地名道路	W-2811	10	33	古後~古前	C1	32.4	17.1	-	1.4	9.4	5.1	7.1	3.2	8.6	板目(木炭)	圓丸	534.0	
81	地名道路	W-838	10	31	古後~古前	C1	52.6	20.8	-	2.2	9.5	6.5	7.3	3.2	11.2	板目	方形	1094.1	
82	地名道路	W-693	1	22	古後~古前	C1	46.0	19.9	-	1.9	9.4	3.2	7.3	2.5	13.1	板目(木炭)	圓丸	915.4	
83	地名道路	W-433	2.5	12	古後~古前	C2	42.0	13.2	-	1.8	9.7	3.7	-	-	-	板目(木炭)	-	504.4	
84	地名道路	W-1419	6	16	古後~古前	C2	40.8	15.9	-	1.3	11.5	4.2	9.6	3.4	7.8	板目(木炭)	圓丸	648.7	
85	地名道路	W-1964	9	38	古後~古前	C2	36.4	19.2	-	1.1	9.0	6.5	8.0	5.4	6.9	板目(木炭)	方形	688.9	
86	地名道路	W-1666	9	38	古後~古前	C2	40.7	21.2	-	1.4	11.8	9.2	10.0	6.5	9.3	板(木炭)	方形	961.9	
87	地名道路	W-1097	10	33	古後~古前	C2	42.1	16.0	-	1.1	9.6	7.7	-	-	-	板目(木炭)	圓形	678.1	
88	地名道路	W-394	2.5	11	古墳	C3	37.4	20.5	-	2.1	10.4	4.1	7.1	2.7	13.3	板目(木炭)	方形	766.7	
89	地名道路	W-207	5	10	古後~古前	C3	36.4	24.1	-	1.5	10.9	7.0	8.3	6.4	10.7	板目(木炭)	圓形	877.2	
90	地名道路	W-1644	9	37	古後~古前	C3	40.3	18.3	-	1.8	11.4	6.2	7.6	1.9	10.5	板目(木炭)	圓形	737.6	
91	地名道路	W-2003	9	40	古中	C3	36.8	22.2	-	1.1	9.8	6.7	7.3	3.3	11.6	板目(木炭)	方形	817.0	
92	地名道路	W-783	10	31	古後~古前	C3	29.5	13.8	-	1.8	6.3	3.7	5.2	3.1	6.4	板目(木炭)	圓丸	407.1	
93	地名道路	W-322	5	17b	古後~古前	D	35.4	10.6	-	1.3	-	-	-	-	-	板(木炭)	-	375.8	
94	地名道路	W-803	10	31	古後~古前	D	30.3	14.7	-	2.2	-	-	-	-	-	過往(木炭)	-	445.4	
95	地名道路	W-2729	6	16	古後~古前	D	35.7	14.5	-	1.8	-	-	-	-	-	板目(木炭)	圓形	517.7	
96	地名道路	W-324	1	4	平安	2L	(51.1)	(21.0)	-	3.0	-	-	-	-	-	板目	圓形	-	

No	地點名	地點 番号	性別	年代表	分類	頭全長 (cm)	顎骨長 (cm)	尾長 (cm)	耳 (cm)	前乳 (cm)	前乳 (cm)	後乳 (cm)	後乳 (cm)	前乳 (cm)	本取引 量	乳頭 (cm)	面積 (cm <sup>2</sup> )
97	池+谷道跡	W1689	6	♀ 平安	3孔	39.2	16.2	-	2.0	-	-	-	-	-	板目	方形	133.4
98	池+谷道跡	W1687	5	♀ 平安	3孔	36.5	17.0	-	2.0	-	-	-	-	-	板目	方形	620.5
99	池+谷道跡	W1686	7	♀ 平安	3孔	37.7	16.0	-	1.6	-	-	-	-	-	板目	円形	
100	池+谷道跡	W5010	7	♂ 雄後~古前	C3	57.4	21.2	-	1.7	9.0	7.8	7.5	2.0	11.8	板目	方形	1216.9
101	池+谷道跡	W7095	7	♂ 雄後~古前	C2	63.3	22.2	-	2.4	10.0	7.5	9.0	2.8	17.5	板目	方形	1403.3
102	池+谷道跡	W5011	7	♂ 雄後~古前	C1	56.8	23.3	-	1.8	10.5	8.5	8.5	1.8	13.3	板目	圓丸	1224.1
103	池+谷道跡	W8374	7	♂ 雄後~古前	C3	58.1	19.0	-	1.8	11.0	8.8	7.8	0.8	10.5	板目	側丸	1122.9
104	池+谷道跡	W7706	7	♂ 雄後~古前	C2	43.3	20.0	-	1.8	10.2	6.0	8.0	2.5	11.5	板目	方形	
105	池+谷道跡	W7701	7	♂ 雄後~古前	C3	57.1	19.5	-	1.8	10.5	3.1	8.0	2.5	12.0	板目	方形	1113.6
106	池+谷道跡	W7778	7	♂ 雄後~古前	C1	40.8	23.5	-	2.6	10.5	10.0	8.0	2.3	11.0	板目	方形	941.3
107	池+谷道跡	W7779	7	♂ 雄後~古前	C1	42.8	21.6	-	2.5	10.0	7.8	7.8	2.3	11.8	板目	方形	936.1
108	池+谷道跡	W9529	7	♂ 雄後~古前	C1	46.6	26.9	-	1.7	10.3	9.8	7.5	3.8	13.5	板目	圓丸	1092.1
109	池+谷道跡	W7609	7	♂ 雄後~古前	C1	46.0	14.1	-	1.4	9.8	2.6	6.5	1.5	9.8	板目	方形	
110	池+谷道跡	W7228	1-2	♂ 雄後~古前	C1	36.2	23.1	-	1.9	8.8	5.8	9.3	7.0	9.5	追蹤	圓丸	890.0
111	池+谷道跡	W7064	7	♂ 雄後~古前	C1	35.8	19.0	-	2.8	10.0	4.8	10.0	4.8	10.0	板目	圓丸	856.1
112	池+谷道跡	W6131	7	♂ 雄後~古前	C1	41.1	16.7	-	1.7	9.2	4.8	7.3	2.5	9.5	板目	圓形	666.4
113	池+谷道跡	W8516	7	♂ 雄後~古前	C2	33.3	16.3	-	-	7.5	5.5	6.5	3.8	7.0	板目	方形	547.8
114	池+谷道跡	W1796	7	♂ 雄後~古前	C1	38.8	16.4	-	1.7	7.5	4.5	6.3	1.8	9.8	板目	圓丸	638.0
115	池+谷道跡	W7146	7	♂ 雄後~古前	C1	47.6	16.8	-	2.1	6.6	2.0	6.5	2.8	11.2	板目	圓丸	631.7
116	池+谷道跡	W753	7	♂ 雄後~古前	A7	19.6	21.8	-	2.1	9.3	6.0	7.8	3.8	12.5	板目	方形	497.3
117	池+谷道跡	W6852	7	♂ 雄後~古前	C1	45.7	21.1	-	2.3	10.5	6.8	7.3	2.5	11.5	板目	方形	922.1
118	池+谷道跡	W8790	1-2	♂ 雄後~古前	C1	35.6	20.8	-	2.5	9.3	3.3	12.3	8.3	10.8	板目	方形	933.0
119	池+谷道跡	W7508	1-2	♂ 雄後~古前	C1	37.9	20.0	-	1.9	11.5	2.0	8.5	4.5	10.5	板目	圓丸	938.0
120	池+谷道跡	W5018	7	♂ 雄後~古前	C1	51.1	20.7	-	2.0	10.2	4.8	8.0	3.3	12.8	板目	圓丸	1068.8
121	池+谷道跡	W6005	7	♂ 雄後~古前	C1	32.6	19.8	-	1.6	9.3	1.0	6.5	3.3	11.2	板目	圓丸	1014.3
122	池+谷道跡	W7923	7	♂ 雄後~古前	C1	32.3	20.0	-	1.8	11.5	7.1	8.0	3.5	12.2	板目	方形	1016.0
123	池+谷道跡	W7022	7	♂ 雄後~古前	C4	109.5	20.3	-	1.9	12.3	3.5	12.8	3.5	12.3	板目	方形	2222.9
124	池+谷道跡	W9151	7	♂ 雄後~古前	C1	68.0	21.9	-	2.3	11.6	4.3	8.8	2.3	15.5	板目	圓丸	1489.2
125	池+谷道跡	W7189	7	♂ 雄後~古前	C1	68.6	19.9	-	2.0	9.8	5.5	7.3	4.5	10.8	板目	圓丸	1361.2
126	池+谷道跡	W5019	7	♂ 雄後~古前	C1	51.6	19.3	-	2.0	10.5	1.8	8.0	3.0	11.8	正目	圓形	995.9
127	池+谷道跡	W8371	7	♂ 雄後~古前	C1	61.9	21.3	-	1.7	10.0	7.8	8.0	3.0	10.8	板目	圓丸	1330.9
128	池+谷道跡	W7718	7	♂ 雄後~古前	C1	37.3	20.1	-	1.7	8.5	6.6	7.3	2.9	10.5	板目	圓形	1151.7
129	池+谷道跡	W7602	7	♂ 雄後~古前	C1	32.6	22.4	-	1.4	10.3	8.5	8.3	2.8	11.0	板目	方形	1182.7
130	池+谷道跡	W6370	7	♂ 雄後~古前	D	44.3	17.1	-	2.4	-	-	-	-	-	板目	圓形	757.5
131	池+谷道跡	W235	1-2	♂ 雄後~古前	?	43.5	18.1	-	2.7	-	-	-	-	-	板目	方形	
132	池+谷道跡	W7850	7	♂ 雄後~古前	?	16.9	15.6	-	1.5	-	-	-	-	-	板目	圓丸	
133	池+谷道跡	W5022	7	♂ 雄後~古前	?	41.2	12.1	-	1.4	-	-	-	-	-	板目	圓丸	
134	池+谷道跡	W338	2	♂ 雄後~古前	?	11.6	12.6	-	1.4	-	-	-	-	-	板目	圓丸	
135	池+谷道跡	W236	1-2	♂ 雄後~古前	?	32.6	11.6	-	1.6	-	-	-	-	-	板目	圓形	
136	池+谷道跡	W5073	7	♂ 雄後~古前	?	15.1	11.5	-	1.6	-	-	-	-	-	板目	圓形	
137	池+谷道跡	W611	7	♂ 雄後~古前	D	36.5	12.1	-	2.0	-	-	-	-	-	板目	-	1177
138	池+谷道跡	W5096	7	♂ 雄後~古前	D2	67.7	3.3	2.8	1.7	11.5	10.2	8.0	9.0	15.3	板目	圓丸	2335.7
139	池+谷道跡	W5015	7	♂ 雄後~古前	B2	47.0	25.0	2.6	1.9	11.0	6.0	8.8	4.5	19.8	板目	圓形	
140	池+谷道跡	W5001	7	♂ 雄後~古前	B3	44.7	19.6	1.0	1.7	9.0	3.8	8.5	2.3	19.3	板目	方形	876.1
141	池+谷道跡	W5011	7	♂ 雄後~古前	B1	56.3	26.0	2.5	1.5	10.0	9.5	10.0	2.6	11.0	板目	圓形	1476.8
142	池+谷道跡	W6472	7	♂ 雄後~古前	B?	30.6	22.3	2.7	1.6	9.5	6.8	-	-	-	板目	圓形	
143	池+谷道跡	W9551	7	♂ 雄後~古前	B2	37.6	26.6	2.2	1.7	9.3	3.5	9.0	3.0	12.0	板目	圓丸	
144	池+谷道跡	W5329	7	♂ 雄後~古前	B3	43.5	26.9	4.8	1.2	10.0	9.6	9.6	4.6	12.5	板目	圓丸	1182.1
145	池+谷道跡	W9-12	7	♂ 雄後~古前	B2	47.0	18.0	2.5	1.9	-	-	-	-	-	板目	圓丸	

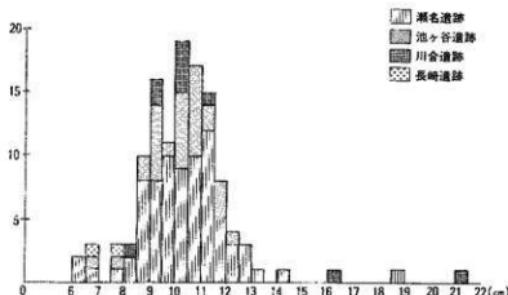
No	遺跡名	登録番号	区	層位	年代編	分類	横全長 (cm)	縦全長 (cm)	足右 半 (cm)	厚 (cm)	前孔 開 (cm)	縫孔 縫長 (cm)	後孔 縫長 (cm)	前後 縫開 (cm)	本数	丸形	角形
136	結合遺跡	W-185	II			C2	17.2	22.6	-	2.0	13.8	7.6	8.0	(2.0)	12.0	板目	円形
137	結合遺跡	W-150	6	赤中-古前	C1	24.2	16.3	-	2.0	9.2	5.0	7.8	3.8	9.5	板目	圓丸	371.0
148	川合遺跡	W-142	8	赤後-古前	C1	30.6	17.9	-	1.6	10.3	4.5	1.3	3.0	9.0	板目	圓丸	326.0
139	結合遺跡	W-135	8	赤中-古前	C1	22.2	17.3	-	1.8	8.8	4.0	6.5	3.0	9.0	板目	圓丸	-
150	結合遺跡	W-788	II			赤中-古前	?	(24.5)	7.8	-	2.0	-	-	-	68.0	板目	方形
141	川合遺跡	W-153	9	赤中-古前	?	(28.0)	18.5	3.8	1.5	-	-	-	-	-	板目	-	-
152	結合遺跡	W-747	II	赤中-古前	C1	17.8	20.7	-	2.6	8.5	1.0	7.0	2.8	10.0	板目	圓丸	-
153	結合遺跡	W-741	II	赤中-古前	C2	35.2	19.9	-	1.8	8.0	5.0	7.5	3.5	11.0	板目	圓丸	7.0
124	川合遺跡	W-163	II	赤中-古前	C1	12.0	21.9	-	2.0	10.0	0.5	8.8	2.8	17.5	板目	圓丸	104.9
165	結合遺跡	W-690	II	赤中-古前	C1	56.3	33.3	-	2.1	11.0	5.8	8.9	4.2	12.8	板目	方形	1311.8
156	川合遺跡	W-133	8	赤中-古前	C1	31.0	22.0	-	2.7	10.0	9.3	7.8	2.8	10.8	板目	方形	739.0
137	結合遺跡	W-744	12	赤中-古前	C1	48.0	19.7	-	2.0	10.0	5.3	7.0	3.0	10.8	板目	圓丸	94.0
138	川合遺跡	W-408	13	赤中-古前	?	49.6	12.8	-	1.4	-	-	-	-	-	板目	方形	-
159	川合遺跡	W-632	12	赤中-古前	?	56.5	16.1	-	1.9	-	-	-	-	-	板目	圓丸	-
160	結合遺跡	W-334	12	赤中-古前	?	(13.6)	(12.9)	-	1.5	-	-	-	-	-	板目	圓丸	-
161	川合遺跡	W-335	17	赤中-古前	C1	27.0	16.1	-	2.0	9.0	4.3	7.0	1.0	7.9	板目	方形	606.8
182	両台遺跡	W-481		赤中-古前	?	(29.0)	9.8	-	2.2	-	-	-	-	-	板目	方形	-
155	川合遺跡	W-227	12	赤中-古前	?	44.0	9.6	-	1.6	-	-	-	-	-	板目	圓形	-
164	結合遺跡	W-501	14	赤中-古前	?	114.0	61.1	-	1.6	-	-	-	-	-	板目	方形	-
165	川合遺跡	W-594	13	赤中-古前	?	(43.5)	15.1	-	1.8	-	-	-	-	-	板目	方形	-
156	川合遺跡	W-295	12	赤中-古前	B3	(46.1)	(10.5)	1.3	1.2	-	-	-	-	-	板目	方形	-
167	結合遺跡	W-696	12	赤後-古前	B2	36.2	22.2	6.4	2.5	16.0	12.0	14.3	8.5	24.5	板目	方形	802.2
168	川合遺跡	W-469	17	赤後-古前	B3	48.8	22.3	1.3	3.2	21.0	13.5	15.0	6.4	26.2	板目	圓丸	1039.1
179	長崎遺跡	W-36	4	赤中-古前	?	(18.8)	12.9	-	2.1	-	-	-	-	-	板目	方形	-
170	長崎遺跡	W-871	6	赤中-古前	C2	(1.2)	(1.2)	-	1.0	9.5	5.0	7.0	6.0	-	板目	圓形	-
171	長崎遺跡	W-1048	5	赤後-古前	?	(1.3)	(1.3)	-	1.5	-	-	-	-	-	板目	圓丸	-
172	長崎遺跡	W-815	5	赤中-古前	C1	(1)	(1)	-	1.6	-	9.2	-	-	8.0	板目	圓形	-
173	長崎遺跡	W-19	1	赤後-古前	C1	38.5	28.0	-	1.8	9.8	4.9	8.2	6.1	8.1	板目	方形	107.8
174	長崎遺跡	W-300	1	赤後-古前	C1	(37.9)	(19.0)	-	2.1	7.1	3.1	9.4	3.6	11.8	板目	圓形	-
175	長崎遺跡	W-1605	1	赤中	-	(29.6)	(6.6)	-	1.1	-	-	-	-	-	板目	圓形	-
176	長崎遺跡	W-25	1	赤中	C1	(24.2)	(1.9)	-	2.2	-	-	9.9	4.0	-	板目	圓形	-
177	長崎遺跡	W-1601	1	赤後-古前	?	(27.1)	(11.6)	-	2.1	-	-	-	-	-	板目	方形	-
178	長崎遺跡	W-44	3	赤中	?	(25.3)	(15.6)	-	2.6	-	-	8.0	5.8	-	板目	方形	-
179	結合遺跡	W-915	5	赤後-古前	C1	33.0	20.2	-	1.7	7.8	6.1	6.0	2.1	7.7	板目	圓丸	207.0
180	長崎遺跡	W-1012	5	赤中-古前	C1	(30.6)	(17.9)	-	2.0	9.5	7.0	-	-	-	板目	方形	-
181	長崎遺跡	W-809	1	赤後-古前	?	(21.1)	(9.3)	-	1.5	-	-	-	-	-	板目	圓丸	-
182	長崎遺跡	W-15	4	赤後-古前	?	(11.1)	(13.1)	-	1.1	-	-	-	-	-	板目	方形	-
183	長崎遺跡	W-705	6	赤後-古前	?	12.0	21.1	-	1.0	-	-	-	-	-	板目	方形	-
184	長崎遺跡	W-210	6	赤後-古前	?	(28.9)	(9.6)	-	2.1	-	-	-	-	-	板目	圓丸	-

それに木取り（瀬名遺跡出土のものは木表、木裏が判別できるものは表記した。）そして縫孔の平面形を示した。

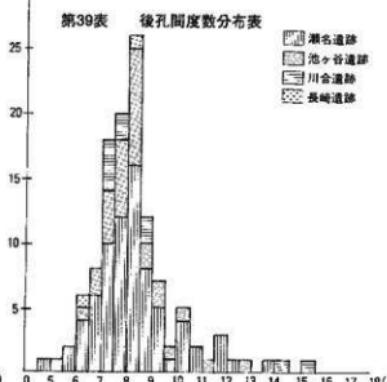
次に4つの縫孔の位置関係を見る。その場合、4つの縫孔が明瞭に残存した資料でないと、正確にその位置関係を示せない故、1つでも縫孔の位置が不明の出下駄は外した。瀬名遺跡77点、池ヶ谷遺跡30点、川合遺跡10点、長崎遺跡2点の計119点を対象資料とした。

第38表は前孔間の度数分布表である。8.5cm~12cmの間に、全体の81%が入ってくる。この当たりが前

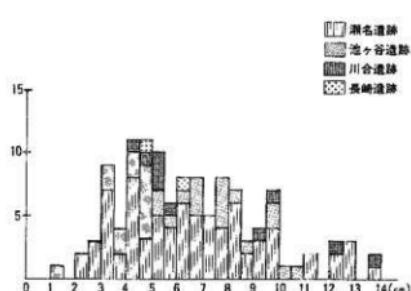
第38表 前孔間度数分布表



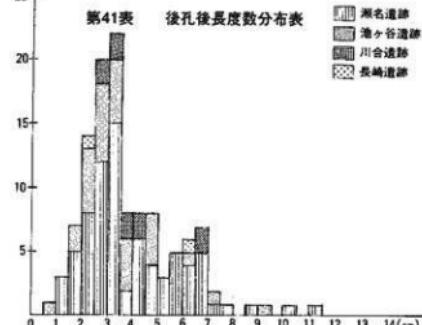
第39表 後孔間度数分布表



第40表 前孔前長度数分布表



第41表 後孔後長度数分布表



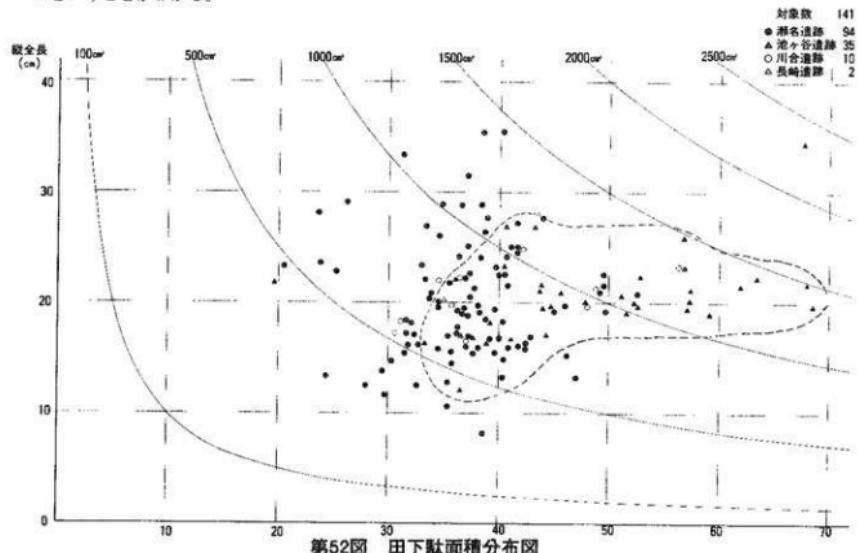
孔間の適当な間隔と考えられる。第39表は後孔間の度数分布表である。7 cm～9 cmの間に全体の64%が入って来ておりバラツキが少ないので了解できる。第38表と第39表より、前孔間より後孔間の方が相対的に短いことが了解でき、以前より感覚的に前孔間の方が後孔間より幅広であることが数値によって示すことができている。これは当然現行の民具資料からも言える傾向であり、足を緊縛する際、足の指付近の方が踵付近より幅広になることからも容易に想像することができる。

第41表は後孔後長の度数分布表である。3 cm前後にピークがくる残存状態が良好な田下駄は、この数値に来るようだ。8 cm～11 cm前後もあるものは、田下駄の前後が判別するに若干苦しみのような曖昧な資料である。後孔後長は3 cmほど短いということが指摘できる。第40表は前孔前長の度数分布表である。後孔後長に比して度数がバラツキ、ピークが明瞭でなく集中しない。3 cm～10 cm間に85%のものがある。前孔前長は集中する数値はないものの、後孔後長に比して明かに長いのが特徴である。

前後孔間はここでは分布表を作成しなかったが、10 cm前後とやはり足を固定するには相応しい程度の距離がある。以上の検討より、板状田下駄の絞孔位置は明確な位置関係があることを示すことができる。つまり前後孔間は8.5 cm～12 cmほどで、後孔間が7 cm～8.5 cmと短いのに比して長く、前後孔長間は10 cm

前後離れてあり、後孔後長は3cm前後と短く、前孔前長は後孔後長に比して長く3cm~10cmの幅にくる。この位置関係で示された4孔は縫孔として板状田下駄をバランスよく緊縛できるためのものであると言えるであろう。

次に、田下駄の面積について検討する。前述のように縫全長、横全長を計測できた田下駄141点を対象資料として第52図に表面積の分布図を作成した。この図は縫軸に縫全長をとり、横軸に横全長をとったものである。500cm~1500cmに90%が含まれる。全資料の面積平均値が813.8cm<sup>2</sup>なのに対し、瀬名遺跡出土のものの平均値が735.2cm<sup>2</sup>であり、池ヶ谷遺跡は1017.7cm<sup>2</sup>である。この分布図内に破線で囲んだ範囲内に池ヶ谷遺跡出土の田下駄の大半が入ってしまうのがわかる。池ヶ谷遺跡出土の田下駄は瀬名遺跡出土のそれに比して面積が大きい傾向があるという事実に加え、この分布図より、横全長の長いものが多いことが了解できる。瀬名遺跡出土の田下駄の横全長の平均値が35.9cmであるのに比して池ヶ谷遺跡のそれは48.3cmと12.4cmの差がある。縫全長の平均値は瀬名遺跡が20.2cm、池ヶ谷遺跡が21.3cmとあまり差がないのとは対照的である。つまり瀬名遺跡の板状田下駄と池ヶ谷遺跡のそれとは、縫の長さは変わらないが、横の長さが池ヶ谷遺跡の方が相当長く、その分面積が池ヶ谷遺跡の田下駄が大きいということがわかる。



第52図 田下駄面積分布図

ここで池ヶ谷遺跡と瀬名遺跡の立地条件を瞥見してみる。池ヶ谷遺跡は静岡平野の北西部安倍川の氾濫、洪水等により形成された扇状地の北端であり、麻機低湿地の南部に位置する。麻機沼の低湿地帯を安倍川の堆積物で出しを塞いでしまったという静岡平野の中でも一大集水帯である。この地下水位の高い池ヶ谷遺跡では、7区の標高4.3m前後のFⅡ層上面において、古墳時代前期に廃絶された水田が検出され、この水田より多数の板状田下駄が検出されたのである。このFⅡ層はその下にG層という上位が泥炭層、下位が黑色粘土層の層が1m以上堆積している。つまりFⅡ層上面では、地下水位が高いのと同時に、そのFⅡ層も粘土層であり更にその下層は厚い泥炭層という非常に軟柔な地盤であったことがわかる。7区より東の1・2区では同時期の水田の標高は6.6m前後で、7区より1m以上も高く、ド

畝の泥炭層も7区に比して薄い。1・2区では田下駄の出土点数が7区に比して極端に少ないことが第3・7表の計測表で見える。また池ヶ谷遺跡付近ではつい近年まで麻機沼の澤山と同形態の田下駄が使用されていたといふ。強湿地の水田であった瀬名遺跡は、やはり静岡平野の北東端に位置するが、麻機沼を水源とした巴川流域の低湿地帯の中にある。長尾川が開削した扇状地にのり、長尾川の押し出した多量の土砂の堆積した地形に立地する。瀬名遺跡で板状田下駄をも出土した2・3区12層水田を見ると、この12層上面標高は8.0m前後である。12層の粘土層はその下に砂層を挟み、14層も水田耕作上の粘土層である。14層の下には、厚い15層、17層、18層、19層という1ロを越える砂礫層がある。以上、池ヶ谷遺跡の7区と瀬名遺跡の2・3区を比した場合、いずれも低湿地性の水田ではあるが、池ヶ谷遺跡の7区は相当軟柔な地盤の強湿地性水田であり、瀬名遺跡の2・3区は下層に厚い砂礫層を含む。下層地盤は堅固な湿田であることが了解できよう。

この池ヶ谷遺跡7区と瀬名遺跡2・3区に地盤の差異が、板状田下駄の平面積に反映されていると考えたい。既述のように、池ヶ谷遺跡出土の板状田下駄と瀬名遺跡出土の田下駄とは、形態上はほぼ類似し、時期も重なるという一致、類似点がある一方、池ヶ谷遺跡の田下駄は瀬名遺跡のそれに比して横に長く面積も大きい。それは同技術の田下駄を所有しながらも強湿地であるが故、浮力をより付けるため、横長にし、表面積を確保したという背景があったことを推察させる。

輪カンジキ型田下駄の場合、表面積は輪の倍円形の面積を有効面積と考え出してみた。第30図の輪カンジキ型田下駄の形態変遷図で示された1、2、3、4、5、6、10、13、15、16に関してはほぼ推定の有効面積が算出された。1は1268.6cm<sup>2</sup>、3は824.3cm<sup>2</sup>、5は1661.1cm<sup>2</sup>、10は1358.3cm<sup>2</sup>、13は1603.9cm<sup>2</sup>、15は961.8cm<sup>2</sup>となった。2、4、6、16はそれぞれ1、3、5、15とセット関係にあるため、それらとほぼ近い面積を示している。平均面積は1258.5cm<sup>2</sup>である。先述の板状田下駄に比すと若干面積が大きいようであるが、輪カンジキ型田下駄の場合、足板、横木、輪との間に空隙があるため、ここでいう有効面積は、板状田下駄の表面積より面積に対する浮力はつきにくいという事情があり、輪カンジキ型田下駄の有効面積の方が板状田下駄の面積より大きくなるのは当然であろう。それに比しても輪カンジキ型田下駄の有効面積は板状田下駄の面積の大小の幅内にあり、輪カンジキ型をもつて湿田で足を浮かせるという機能上、板状田下駄と同一の機能を十分に発揮することができる。

## 8 まとめ

瀬名遺跡出土の田下駄を中心に田下駄の形態変遷とその機能について検討してきた。検討の視点が多岐にわかれてしまったため、検討した視点をここでは確認しておきたい。田下駄とは湿田において足が沈まないために履く下駄を示し、その形態には大別して板状の田下駄と輪カンジキ型田下駄がある。この定義と分類に基き、瀬名遺跡出土の田下駄の形態変遷を追った。弥生時代中期後半に板状田下駄が出現し、弥生時代後期後半から古墳時代前期に盛期を迎、古墳時代中期頃に板状田下駄が消失し、輪カンジキ型田下駄がそれに替わっていく。輪カンジキ型田下駄の足板は縫孔なしのものから3つの縫孔のものへと変化し、民具例にまで直結するという形態変遷が確認できた。また、板状田下駄の出土遺構、出土地点を確認すると、瀬名遺跡においては、大規模墓群の盛土中からの出土が大半であった。板状田下駄の穿孔技術に鉄器を用いたと類推できるものが、弥生時代後期から出現することが確認できる。板状田下駄の4つの縫孔の位置関係を計測値により定量化した穿孔技法があったことが了解でき、4孔の位置関係が明瞭になった。田下駄の面積は有効な範囲があり、それは板状、輪カンジキ同様に言える。そして田下駄の表面積は地盤の軟弱度により強湿地では面積が大きくなるという傾向を示すことが想定できるようだ。

以上の諸点が拙文によってある程度明らかになってきたであろう。ただ検討に際しては、資料上の制

約に始まり、問題点、誤りも指摘しうる。次の4点を挙げて終わりとする。第1点は検討資料の点数が多いにしても、あくまで一遺跡の資料が中心の検討であり、普遍性を語れる資料ではなかった。これは田下駄の出土遺跡が偏在するという事実からやむおえぬことと考える。第2点に輪カンジキ型田下駄の資料点数が少なく、形態変遷を板状田下駄との連続と捉えるにはまだ不十分であった。今後の出土例の増加を待ちたい。第3点目に土壤と田下駄の形態との関係は田下駄の出土状況、出土遺跡の立地等を含め、より詳細な検討が必要であろう。第4点目に湿田稲作農耕において、田下駄の果たした役割は、湿田稲作農業技術全般を視野に入れない、ただ単なる水田で履く下駄というモノの検討で終わってしまう。それには当該時代の農具全般の中での田下駄の位置を確認する作業が今後必要となるであろう。

(中山正典)

#### <註>

- (1) 「大足」と「タケナ・ナンバ」を総称する研究者に山田鉄雄氏、市山京子氏、並木保明氏、秋山信二氏等がいる。
- (2) 小論文中で用いる機能とは、より具体的な使い方を示す用途ということばの意味をも含む。岡村道雄氏が「機能とは、あるものがもつ因縁な役割、はたらきであり、用途とはそれらの使いみちを用いるところという意味」であるが、「機能と用途は一連のことであり、切り離して考えられない。また機能と用途とを厳密に区別する必要もない。」という考え方によると。
- (3) 例えば、潮田氏の「制作法、構造、名稱による田下駄の種類」(潮田、1967)を見ると、輪カンジキ型田下駄が先駆して仲型大足になったとしているが、四孔足型が最も多く見られているのが1、2点あったため、代理町野にヒモを付け替型人足のように手で引きながら歩行したのではと考えたが、検討したところ4孔以外の孔に繋帯性が見られず、4孔以外の孔の穿った理由が不明のままである。
- (4) 宮原氏は古墳時代の古代遺跡出土の木製品を見ていたい折、草木技術についての所見を求めたが、やはり明確に右器の加工痕と工具のそれとを分離させる方法は月光原の範囲以外ではないとのことであった。
- (5) ただ山田鉄雄氏の舟形木製品の中には大型のものがあり、90cm近くのものもあり、輪カンジキ型田下駄にしては大きすぎるとの見方もある。
- (6) 6は明確に1孔あるが、6とセットで出土した5は残存状態が悪いが縫合らしいものが見られない。5、6の形態をどう考えるかは、今後検討すべきことであろう。
- (7) 15は4孔掌たれしているが、掌の2孔は一方が穿も直しと考える。特に左側の穿孔は他の3孔と形狀が異なり、直接用いた経路ではないと考える。
- (8) 通名遺跡出土の輪カンジキ型田下駄において、平安時代以降のものは帰属する年代観については不明瞭な点が多く、良好な資料と言えない。歴史時代以降の田下駄については、以後の良好な出土資料に待ちたい。
- (9) 田下駄の上面に開く検討は、元文化研究会調査員の梅谷雄氏が行った。特に平面積の分布図を作成する考え方を提供し、土床と田下駄の面積との関係を示したのは純益氏であった。

#### <引用・参考文献>

- |          |       |  |
|----------|-------|--|
| 人場豊雄     | 1939年 | 「上越省生駒勝の考察(二)」『考古学雑誌』29-3                    |
| 内田武志     | 1941年 | 「海防隊方面」分布調査第三輯「鳥取県」アチックミューゼアム                |
| 木下 忠     | 1951年 | 「弥生式文化 代における施肥の問題」『史学研究』57号                  |
| 木下 忠     | 1969年 | 「おおあしー代踏み用田下駄の問題と舞磨ー」『民具論集』1巻友社              |
| 木下 忠     | 1974年 | 「田植と追跡」『日本考古学の諸問題 考古学研究会十周年記念論文集』            |
| 木下 忠     | 1985年 | 「日本農耕技術の起源と伝播」『農山閣』                          |
| 潮田鉄雄     | 1964年 | 「千葉県の田下駄」『民俗学研究』29-2                         |
| 潮田鉄雄     | 1966年 | 「越千賀県の田下駄」『民俗学研究』31-1                        |
| 潮田鉄雄     | 1967年 | 「千葉県の田下駄 分布と仕組」『民族学研究』32-1                   |
| 潮田鉄雄     | 1967年 | 「田下駄の変遷」『物質文化』10号                            |
| 潮田鉄雄     | 1968年 | 「茨城県の田下駄」『物質文化』12号                           |
| 潮田鉄雄     | 1969年 | 「田下駄の変遷」『民具論集』1巻友社                           |
| 佐藤守一     | 1962年 | 「足山村・木曾郡」『足山村史』第1巻                           |
| 山口貢      | 1964年 | 「新潟県の田下駄(1)」『新潟森林研究』16分                      |
| 斎藤 宏     | 1967年 | 「伊豆・山宮下郷跡」『山宮町史』第2巻                          |
| 橋本 武     | 1968年 | 「所前代湯川辺の田下駄(1)」『民具マヌスリ』1-7                   |
| 橋本 武     | 1968年 | 「所前代湯川辺の田下駄(2)」『民具マヌスリ』1-8                   |
| 中村俊義智    | 1976年 | 「シロフミ田下駄の諸系列・川井義智のー」『国立民俗学博物館研究報告』1-1        |
| 森田修平     | 1977年 | 「『海浜遺跡出土』の田下駄について」『民俗文化』168号 濱谷民俗学会          |
| 神野吉治     | 1979年 | 「浮島周辺の牛糞田・潮田農業と前の魚獲」『洞津津便史・俗習資料叢紀要』3         |
| 神野吉治     | 1982年 | 「浮島ヶ原の混田農業と用具」『中部地方の民具』明玄書房                  |
| 乙巳松      | 1980年 | 「上越省生駒勝」『中央公論』新書版                            |
| 並木保明     | 1985年 | 「田下駄」『弥生文化的研究』第5巻 雄山閣                        |
| 町田 理     | 1985年 | 「木器の生産」『弥生文化の研究』第5巻 雄山閣                      |
| 井之介 泰    | 1987年 | 「ウツセー代踏み田下駄」『京都府埋蔵文化財調査』第1集                  |
| 宮瀬哲一     | 1988年 | 「石斧・铁斧のどちらで加工したか」『弥生文化の研究』第5巻 雄山閣            |
| 山田京子     | 1990年 | 「門田赤里制跡出土の田下駄について」『門田赤里制跡発掘調査報告書』 会津若松市教育委員会 |
| 佐々木長生    | 1990年 | 「『櫛能論』『岩波講座』『日本考古学』」岩波書店                     |
| 秋山信二     | 1993年 | 「『人足』の再検討」『考古学研究』40-3                        |
| 岡村昌雄     | 1985年 | 「『櫛能論』『岩波講座』『日本考古学』」岩波書店                     |
| 山田久久     | 1984年 | 「杭の加工痕について」『芳賀紀成研究会発掘報告書』-人工遺物・統括編』 埼玉県教育委員会 |
|          |       | アチックミューゼアム編 1937年『民具調査集』                     |
| 新潟市教育委員会 | 1969年 | 「山本遺跡 -第二次調査概報-」『燕山町史』第1巻                    |
| 新潟市教育委員会 | 1976年 | 「山本遺跡 -第三次調査報告-」『燕山町史』第1巻                    |
| 丘山町教育委員会 | 1977年 | 「山本遺跡 -第四次調査報告書-」『燕山町史』第1巻                   |

- 日本考古学協会 1978年 「發呂」 東京堂出版  
瓜生堂遺跡調査会 1980年 「恩智遺跡」 I・II  
大阪文化財センター 大阪府教育委員会 1980年 「瓜生堂」  
大阪文化財センター 大阪府教育委員会 1982年 「丘塹瓜生堂」  
(財) 大阪文化財センター 1983年 「友井東(その2)」  
福島県高鄉村教育委員会 1986年 「尋毛遺跡」  
(財) 埼玉縣埋蔵文化財調査事業團 1986年 「年報」 6  
静岡市教育委員会 1987年 「有東紀了遺跡」  
沼津市教育委員会 1990年 「靜鹿梨遺跡発掘調査報告書Ⅱ 造物編」  
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1985年 「川合遺跡調査報告」  
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1987年 「瀬名遺跡 昭和61年度発掘調査概報」  
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989年 「大谷川N 遺物・考察編」  
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991年 「池ヶ谷遺跡調査会概報」  
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991年 「瀬名遺跡調査会概報」  
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991年 「角江遺跡調査会概報」  
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991年 「長崎遺跡 I (造構編)」

# 第VII章 遺物の自然科学的分析

## 第1節 瀬名遺跡出土材の樹種について

山内文

遺跡よりの出土材は、弥生時代中・後期～古墳時代前・中期、古墳時代～奈良、平安および中世、近世の各時代に及んでいる。判明した樹種は、針葉樹はイスマキ、イスガヤ、マツ属（アカマツ又はクロマツ）、スギおよびヒノキ、広葉樹はクマシデ属1種（アカシデ又はイヌシデ）、ツブライ、スダジイ、クリ、アカガシ属数種、ムクノキ、ハルニレ、ケヤキ、カツラ、クスノキ、タブノキ、イスノキ、マンサク、カスミザクラ、ムクロジ、ツバキ、サカキ、ヒサカキ、ツルグミ、ハリギリ、タイミンタチバナ、カンザブロウノキ、シオジおよびティカカゾラである。資料は総数269点はすべて切片を作成し検鏡の上樹種の同定を行った。樹種名、遺物名、出土数（調査数）はそれぞれ表として掲載した。なお肉眼による同定は488点ある。いずれもスギである。

以下に樹種別に樹種名、調査数、遺物名および樹種同定に利用した材の解剖学的特徴を簡単に記す。

・イスマキ *Podocarpus macrophyllus* 2、鞍、編錘

仮道管、本部柔組織（樹脂細胞）および柔細胞構成の放射組織から構成されている。放射断面での仮道管の有線膜孔の開孔は斜めのレンズ状である。樹脂細胞は散在状で割合にその存在数が多い。

イスガヤ *Cephalotaxus harringtonia* 1、用途不明木製品

内壁に螺旋肥厚を持つ仮道管と、年輪内に散在状に配列する本部柔組織（樹脂細胞）および柔細胞構成の放射組織から構成されている。

マツ属（アカマツ又はクロマツ） *Pinus* (*P. densiflora*又は*P. thunbergii*) 17、杭

いずれも年輪幅の広い材で年輪界の曲線から細い材と考えられる。水平・垂直樹脂溝が存在し、仮道管と放射仮道管とを持つ放射組織とで構成されている。放射組織の分野の膜孔は人形の窓状、放射仮道管に鋸歯状肥厚がある。これらの特徴を持つものはマツ属のアカマツ又はクロマツであるが両種の識別は困難なことが多いのでマツ属とした。

スギ *Cryptomeria japonica* 30、(488)、舟、火きり舟、人形、馬形、輪擧型田下駄、用途不明木製品、下駄、挽物、箸、ヨコヅチ、柄、杭、(曲物、付札状木製品など、その他表参照)

仮道管、本部柔組織および柔細胞構成の放射組織とで構成されている。本部柔組織（樹脂細胞）は晩材部付近にやや接線状に配列するが多い。分野膜孔はスギ型（外縁の輪郭は楕円形、開孔は斜めの凸レンズ状を呈する）。()内の数字は肉眼同定によるものである。

ヒノキ *Chamaccyparis obtusa* 79、挽物、壇巾、ヨコヅチ、下駄、編錘など

仮道管、樹脂細胞および柔細胞構成の放射組織とで構成されている。樹脂細胞の水平膜に結節状の顯著なものが多く、内容物は赤褐色を呈するものが多い。分野の膜孔は斜めに狭い開孔が聞く狭レンズ状のもの、あるいはこれより広いレンズ状を呈するものなど種々である。分野の膜孔は縁部は2-3コで2列、中間部では2コの事が多い。

クマシデ属1種 *Carpinus* sp.アカシデ又はイヌシデ(*C. laxifolia* or *C. tschonoskii*) 1、編錘

散孔材、道管は2-5数個対放射方向に複合する、さらにこれらが接線状に複合する事が多い、道管の穿孔板は單一で時に道管の内壁に螺旋肥厚が存在する、道管相互間の膜孔は対列状・交互状である。道管

と放射組織との交わる部分には大径の交互状の膜孔が存在する。放射組織は異性、1-3細胞列のものと集合放射組織が存在しこれらに時に結晶が含有されている。

ツブライ *Castanopsis cuspidata* 7、杭

放射性環孔材、道管の最大接線径160-250 $\mu\text{m}$ 。放射組織は単列のものと集合放射組織とが存在する。材色は黒くなる事が少ない。

スダジイ *Castanopsis cuspidata* subsp. *sieboldii* 13、杭

道管の最大接線径240-350 $\mu\text{m}$ 、前者同様放射性環孔材、木部柔組織には小形の結晶を含有する事が多い。放射組織は単列のみで集合放射組織は存在しない。出上材の場合にはクリと同様に黒色を呈している事が多い。

クリ *Castanea crenata* 2、用途不明木製品 杭

環孔材、大道管は最大放射径370 $\mu\text{m}$ 、同接線径290 $\mu\text{m}$ 、小道管は集って放射状-火炎状に配列する、填充体が存在する。道管と放射組織との接する部分の膜孔は大径で斜め配列の柵状、あるいはこれらが変形した配列をする。放射組織は単列である。材は黒色を呈している。

アカガシ属数種 *Cyclobalanopsis* spp. 67、農耕具(鋤、鋤)、輪櫻型田下駄、ヨコヅチ、堅朧、杭  
道管は2-3條放射方向に配列する傾向の強いもの、散在状のもの種々存在する放射孔材。木部柔組織は接線状に配列する。道管と放射組織との交わる部分に柵状の膜孔が存在する。単列および垂直要素の混入することの多い広放射組織が存在する。屢々大形の結晶細胞が木部柔組織および放射組織に含有されている。粘合細胞の存在量は倒体により可なりの開きがある。これらの相違は樹種による場合、樹齢による場合と切片を採取した部位にもよるものと考えられる。

ムクノキ *Aphananthe aspera* 1、刀子

散孔材、道管は単独または2-3個宛各方面に複合する、接合膜は厚い、道管は單穿孔板を有する。木部柔組織は周囲状および巡回葉状、数層の柔細胞と厚膜組織とが交互に配列する。放射組織は異性、1-4細胞列である。

ハルニレ *Ulmus propinqua* 1、漆桶

環孔材、孔圈は1-2(3)層、道管の最大径は放射径が420 $\mu\text{m}$ 、接線径は360 $\mu\text{m}$ 、道管は単独または2-3個宛として放射方向に複合する、小道管は集ってやや波状に配列する、道管相互間の膜孔は交互状、道管の内壁に螺旋肥厚が存在する。道管と放射組織との交わる部分には大形の膜孔が対列状に配列する。放射組織は同性、1-5細胞列である。

ケヤキ *Zelkova serrata* 8、漆椀、挽物、その他

環孔材、孔圈1層、大道管は主として単独、時に2個宛複合する、小道管は花菜状に集合する、年輪幅の広いものは花菜状に集合した小道管は斜状に配列する、小道管の螺旋肥厚は顕著である。道管および放射組織に褐色物質が含まれている。放射組織は異性、1-8細胞列、放射組織細胞に大形の蔭酸石灰の結晶を含有している。年輪幅の広いものは厚膜細胞が多く、狭いものは材がほとんど道管で占められている。従って年輪幅の広いものは材が硬く重いが、狭いものは軽い。特に糠目材と称されるものはとくに軽く好んで挽物特に椀に使用される。

カツラ *Cercidiphyllum japonicum* 1、漆椀

散孔材、道管は単独を主とするが時に2-3個宛複合する、道管は階段穿孔板を持ちbar(横線)は多数存在する、尾部に螺旋肥厚がある。道管と放射組織との交わる部分の膜孔も階段状である。放射組織は異性1-2細胞列である。

クスノキ *Cinnamomum camphora* 1、杭

散孔材、道管は単独または2-3(4)個宛として放射方向に複合する、単独道管の放射径は大径の

もので  $160\text{ }\mu\text{m}$  に到り、同接線径は  $130\text{ }\mu\text{m}$  に到る、道管の穿孔板は單のみで階段のものは見当らなかつた。本部柔組織は周圍状のものが顯著であり、大形の油細胞が多数存在する。放射組織は異性で 1 - 2 (3) 細胞列である。

タブノキ *Machilus thunbergii* 2、銀・鎌の柄

散孔材、道管は單独または 2 個宛放射方向に複合する、単独道管の最大径は放射径  $130\text{ }\mu\text{m}$ 、接線径  $100\text{ }\mu\text{m}$ 、道管の穿孔板は階段状および單一、bar (横線) は数が少ない、道管に細かい螺旋肥厚が存在する。周圍状柔組織が顯著であり、大形の油細胞が存在する。道管と放射組織とが交わる部分には比較的大形の膜孔が対列状に存在する。放射組織は異性、1 - 3 細胞列である。

イスノキ *Distylium racemosum* 1、横櫛

散孔材、道管は多くは單独、階段状穿孔板を持つ。本部柔組織は接線状に配列する。放射組織は異性、1 - 2 細胞列、時に蔥酸石灰の結晶を含有する。本部柔組織および放射組織細胞内に、時に導管内にも黒色物質が充填され全体として材色は黒色を呈している。

マンサク *Ilex aquifolium* 1、杭

散孔材、道管の直径は小さく放射径は大径のもので  $40\text{ }\mu\text{m}$ 、同接線径  $35\text{ }\mu\text{m}$ 、穿孔板は階段状で尾部は長い。道管と放射組織との接する部分には対列状～階段状膜孔が存在する。放射組織は異性で 1 - (2) 細胞列である。

カスミザクラ *Prunus verecunda* 2、櫻、杭

散孔材 (半散孔材)、道管は單独または 2 ~ 数個宛複合する、単独道管の大きさ最大放射径  $80\text{ }\mu\text{m}$ 、同接線径  $70\text{ }\mu\text{m}$ 、これに続く道管は疎で斜行に配列する傾向があり、夏材部では通常の散孔材配列となる、道管内壁に螺旋肥厚がある、穿孔板は單一。本部柔組織に時に集晶様の結晶を含有している。道管と放射組織との交わる部分の膜孔は交互状～対列状、放射組織は異性、1 - 3 (4) 細胞列である。

ムクロジ *Sapindus mukorossi* 2、漆楠、

環孔材、孔圈 1 層、小道管に螺旋肥厚がある。本部柔組織と纖維組成とが互いに数層ずつ交互に接線状配列をする。木部柔組織に時に結晶物を含有している。放射組織は同性、1 - 3 細胞列である。

ツバキ *Camellia japonica* 1、堅杵

散孔材、道管は單独時に放射方向に 2 ~ 3 個宛複合する、道管の穿孔板は階段状。木部柔組織は 1 層の接線状配列、道管および纖維細胞に螺旋肥厚が存在する。道管と放射組織との交わる部分の膜孔は階段状。放射組織は異性、1 - 3 (4) 細胞列、時に大形の結晶を含有している。

サカキ *Cleyera japonica* 7、柄 (農具)、その他

散孔材、道管は單独を主とする、切口は角丸の多角形でその大きさ最大放射径  $55\text{ }\mu\text{m}$ 、同接線径  $40\text{ }\mu\text{m}$ 、穿孔板は階段状で bar (横線) の数が多い。木部柔組織は接線状、散在状でその存在数が多い。道管と放射組織との交わる部分の膜孔は対列状～交互状である。放射組織は異性、1 - (2) 細胞列である。

ヒサカキ *Eurya japonica* 2、鞍、杭

散孔材、道管は單独時に 2 ~ 3 個宛複合する、道管の大きさ、最大放射径  $70\text{ }\mu\text{m}$ 、接線径  $60\text{ }\mu\text{m}$ 、道管の穿孔板は階段状で bar の数が多い。道管の尾部に螺旋肥厚が存在する、道管相互間の膜孔は階段状～対列状。木部柔組織は接線状、散在状、放射組織は異性、1 - 3 細胞列、縁部の直立細胞は長径のものが多く存在する。

ツルグミ *Elaeagnus glabra* 1、輪樺型田下駄の輪

資料は樹皮付の芯持丸木材、小径の道管を持つ散孔材の年輪とこれより大径の道管を持ち輪初にやや大径の道管を持つ半散孔性的年輪とがある。底辺の長いやや三角形をした極めて大きい傷害ゴム溝が多数存在する。道管は單穿孔板を持っている、内壁に螺旋肥厚が存在する。放射組織は 1 - 6 (7) 細胞列、

單列のものは異性のものが多く、多列のものは同性、放射組織細胞に褐色物質を含有している。

ハリギリ *Kalopanax pictus* 1、漆椀

年輪幅の極めて狭い材である。環孔材、孔圈1層、大道管の最大放射径 $280\text{ }\mu\text{m}$ 、同接線徑 $340\text{ }\mu\text{m}$ 、小道管は花葉状に集合する、道管相互間の膜孔は大形で交互状配列をする。放射組織は異性、(1) - 4 (5) 細胞列、鞘状細胞が存在する。

タイミンタチバナ *Myrsine seguinii* 12、杭

散孔材、道管の大きさ、最大放射径 $60\text{ }\mu\text{m}$ 、同接線徑 $50\text{ }\mu\text{m}$ 、道管の穿孔板は単一。木部柔組織および放射組織細胞に褐色物質が充填している。放射組織は異性(1 - 2)、7-14細胞列の広いもののが存在する、時に広放射組織中に藤酸石灰の結晶を含有する、なおタンニン細胞様のもの(cyst)が存在する。

カンザブロウノキ *Dicalyx theophrastaefolia* 1、柄

散孔材、道管は放射径 $70\text{ }\mu\text{m}$ 、接線徑 $50\text{ }\mu\text{m}$ に至る、道管は単独時に2個宛複合する、道管の穿孔板は階段状でbarの間隔は割合に広い、道管の内壁に螺旋肥厚が存在する、道管側壁の膜孔は階段状～対列状の移行形。放射組織は異性、1 - 3 (4) 細胞列、鞘状細胞が多く存在する。

シオジ *Fraxinus spathiana* 4、漆椀

環孔材、孔圈は1 - 2層、道管の大きさ放射径 $400\text{ }\mu\text{m}$ 、接線徑 $350\text{ }\mu\text{m}$ に到る、道管は単独または2 - (3) 個宛 各方向に複合する、その接合膜は厚い、道管の側壁の膜孔は交互状。放射組織は同性、1 - 2 (3) 細胞列である。

ティカカヅラ *Trachelospermum asiaticum* 1、輪櫻型田下駄の輪

資料は仄迫されて散孔材様に見えるが本来は放射孔材である。大道管と小道管とが1年輪内に混在する。道管の大きさ、放射径 $340\text{ }\mu\text{m}$ 、接線徑 $270\text{ }\mu\text{m}$ に到る、道管の穿孔板は単。放射組織は異性、1 - 3 細胞列、高さは∞、資料は若い材で放射組織の並列数が少ない。

出土遺物はこれまでに発掘された水田遺跡と同様農具類が多く出土している。豊作、柄、ヨコヅチなど強度が求められるものに、とくに鉛錠などはすべてカシ材が用いられているのは、これまでの遺跡の出土遺物と同様である。そのほか別してとりたてて記すこともないと思われる物ばかりであるが、興味深い出土遺物は輪櫻型田下駄に使用されていた輪材であった。輪は2点あり、1つはツルグミであり、他の1つはティカカヅラであった。共に常緑性藤本植物である。ツルグミは長い枝を伸ばす、そのしなやかな枝材が使用されていると考えられる。ツルグミの材部には屢々大径の傷害ゴム溝が生じる。切られた木の切り口からゴム様物質を割合多量に滲出させる。このことも材が曲げ易くかつ折れ難い事に関係があると考えられる。ティカカヅラは他の植物に絡んで伸びて行く蔓性植物で、その幹には充分な水分を含む大径の道管を持つ材部を持っている。このことが前者と同様曲げ易く折れ難いために輪を作るのに適した材なのであると考えられる。この遺物と同様のものはこれまで處々の遺跡から出土しているとのことであるが専門にして私は知らない。しかし青森県八戸市是川遺跡(縄文晩期)から雪用の櫻の輪が出土している記録がある。(杉山寿栄男「石器時代有機質遺物の研究概報」史前学雑誌2 - 4、1930)この辺の方言名ニキヨウ、和名シラクチヅル、サルナシ、コクワなどといわれている落葉性藤本植物である(加納 淳同定)。そのほか記録としては、鈴木牧之「北越雪譜」1842、倉田 智「続樹木と方言」1967に雪用の櫻に使用する植物の記載がある。ここでは詳しく記さないが、倉田によれば雪用の櫻も水田用に利用するという記録がある。勿論この遺跡出土のものは雪用の軒用ではなく、専ら水田用のものである。いずれにしても本遺跡出土の樹種を使用するという記録はないが、是川遺跡出土のものと同様に、藤本性植物が多く使用されている。

第42表 瀬名遺跡出土遺物樹種同定一覧

遺 物 樹 種 名 の 身 名	根 鉢 の 身 柄 葉	丸 輪 探 輪 輪 ヨ コ 坚 格	細 錐 形 形	馬 人 鳥 車	人 形 車	挽 油 物	薪 火 白	机 火 白	横 器 版	下 船 板	船 板	刀 木	本 用 途 不 明 木 製 品	計
	脚 板	脚 板	脚 板	脚 板	脚 板	脚 板	脚 板	脚 板	脚 板	脚 板	脚 板	脚 板	脚 板	
イヌマキ					1						1			2
イヌガヤ														1
マツノケ(モチノケ)										17				17
スギ	1 1	1		1 1	8	1 1 2	6	1					6	30
ヒノキ		6	1	1	68				1				2	79
クマシデ属1種 (アカシデ又はイヌシデ)			1											1
ツブライ							7							7
スタジイ							15							13
タリ							1							1
アカガシ属	49 5	1 1	1 1				2					7	67	
ムクノキ											1			1
ハルニレ						1								1
ケヤキ					3 4								1	8
カツラ						1								1
クスノキ							1							1
タブノキ	1 1													2
イスノキ							1							1
マンサク							1							1
カスミザクラ							1		1					2
ムクロジ						1								1
ツバキ			1											1
サカキ	5										1 1			7
ヒサカキ								1		1				2
フルグミ		1												1
ハリギリ							1							1
タイミンクチバナ								12						12
カンザブロウノキ														1
シオジ						4								1
ティカカカラ		1												1
	49	11 1	1 2	1 2	8 2 3	1 1 1	79 12	1 1	58 1 7	1 2 1	1 1 21		269	

## スギ (肉眼同定)

舟形	6	陽物	1	輪桿型田下脚足板	2 8
舟串	4 0	田舟	4	輪桿型田下脚横板	1 0
鳥形	1	曲物	1 4 6	台札状製品	1 1
刀形	3	劍物	3 7	泥除け	2 1
卒塔婆	1	田下脚	1 7 8	柱	1

計4 8 8



## 第2節 瀬名遺跡出土漆器資料の製作技法

(財)元興寺文化財研究所 北野信彦

### 1はじめに

瀬名遺跡からは、弥生時代から中・近世にかけての遺構・遺物が多数検出されている。その内には、飲食器としての漆器資料もいくつか含まれている。今回(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所の御厚意により、これら漆器資料の製作技法について自然科学的手法を用いた調査を行う機会を得たので、その結果を報告する。

### 2調査方法

一般に漆器の製作は、原木から木地をつくり挽物・板物の形態にする木胎製作の工程と、その木胎に下地および漆を塗布し、装飾、研磨作業を行う塗工の工程から成り立っている。この様な漆器資料の製作技法を調査することは、個々の資料の性格を正確に把握する上で有効な方法であり、それらが出土した遺構・遺跡の性格を考える上でも意味があるものと考える。本稿では、漆器資料の製作技法に関する調査として、まず形態、漆塗り表面の状態を表面観察した後、(1)用材選択 (2)木取り方法

(3)漆膜面の塗り構造 (4)色漆の使用顔料 (5)漆の性質 等の項目別に自然科学的な手法を用いた分析を行った。以下、項目別に調査方法を記す。

#### (1)用材選択(樹種鑑定)

樹種の同定作業は、出土木材の内部形態の特徴を顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料は、遺物本体ができるだけ損傷しないように破切面などオリジナルでない面から木口、板目、板目の三方向の切片をカミソリの刃を用いて作成した。切片は常法に従い脱水し、検鏡プレパラートに仕上げた。

#### (2)木取り方法

挽物類である漆器資料の木取り方法の調査は、樹種鑑定の切片作成時に同時に行った。

#### (3)漆膜面の塗り構造

まず肉眼で漆器資料の漆塗り表面の状態を観察した後、簡易顕微鏡を用いて細部の観察を行った。次に漆器資料の表面洗浄作業の際に出した1mm×3mm程度の漆膜剥落片を採取し、合成樹脂(エボキシ系樹脂 アラルダイトGY1251JP. ハードナーIIY837)に包埋した後、断面を研磨し、漆膜の厚さ、塗り重ね構造、顔料粒子の大きさ、下地の状態について顕微鏡観察を行った。

#### (4)色漆の使用顔料等の定性分析

色漆に用いられた顔料の無機物に関する定性分析は、先の漆膜剥落片をカーボン台に取り付け、日立製作所S-415型の走査電子顕微鏡に堺場製作所EMAX-2000エネルギー分散型X線分析装置(X線マイクロアナライザー)を連動させてそれを用いた。分析設定時間は500秒、分析ポイントは30倍照射。なお、分析チャートの補正には、Geochemical Journal vol.8P175-192(1974)「1974 compilation of data on The GJ geochemical reference sample JG-1 grandiorite and JB-1 basalt」Atusi Ando and others のJG-1, JB-1サンプルを用いた。

#### (5)漆の性質(成分分析)

一部の漆膜面試料については、日本電子JIR-6000型フーリエ変換型赤外分光光度計(FT-IR)による漆の成分分析を行った。分析設定時間は500秒、顕微照射。なお、分析結果の考察は、見城敏子「漆の分析に関する研究 第2報 赤外吸収分析」(『古文化財の科学』vol.23 p32-39. 1978年)、同「漆類天然物の赤外吸収スペクトル」(『保存科学』vol.21 p47-53. 1982年)等を参考文献として用いた。

### 3 調査結果

今回の調査で用いた漆器資料は合計12点である。これらについて前章で項目別に記した方法を用いた調査を行った。その結果を(表44)に示す。

まず、挽物類である本漆器資料は、いずれもその形態から、椀・皿等の飲食器類である。材の利用(用材選択)の状況をみてみると、広葉樹のカツラ(1)、ノグルミ(2)、シオジ(4)、ケヤキ等のニレ科の材が確認された。

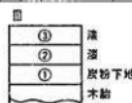
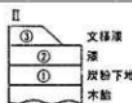
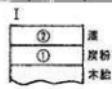
木沢(1975)の研究によると、近世以降の輜重挽物である漆器類の用材には、早晚材の組織の差が少ない広葉樹の散孔材もしくは環孔材ではあるが縦性のある材を適材であるとしている<sup>(1)</sup>。これらの木材の組織、工作の難易、割れ狂い、色光沢、塗り等を考慮に入れて分類すると(表43)に示すようになる。この点を考慮に入れて、本漆器資料の用材選択の傾向をみてみると、ケヤキ等のニレ科やシオジ材などの最良材が中心となっている。ところが加工や入手の容易さという大量生産の点からみて極めて一般性が高く、各地の中・近世、とりわけ近世以降の出土漆器資料で高い使用率が認められるトチノキ、ブナ材は本漆器資料では確認されなかった。この点は本漆器資料の特徴の一つと言えよう。

次に、挽物類である本漆器資料の木取り方法をみてみる。資料は、いずれも機械成型による横木地であり、(A)板目取りと(B)柾目取りの2種類が見出された。椀・皿等の挽物類の木取り方法には、大きく分けて横木地と堅木地があり、中・近世の出土資料の場合、前者を用いる例が一般的である(図53)<sup>(2)</sup>。この点では、本漆器資料もその範疇に入る。

次に、個々の漆器表面の塗塗り技法をみてみる。塗りは、地と文様からなり、本漆器資料の場合、無文様で地塗りのみの資料と、家紋等の漆絵文様を地外間に描く資料に分かれた。

第43表 潟名遺跡出土漆器資料観察表

No	器型	樹種	木取	表面塗り技法				使用顔料		漆塗構造		備考	
				内		外		内		外			
				文	様	内	外	文	様	内	外		
1	椀	シオジ	A	黒	黒	内・赤・絵	外・赤・不明	朱	朱	II	II		
2	椀	ノグルミ	B	赤	-	無	朱			III		(内)炭粉下地-黒・朱	
3	椀	ニレ科	B	黒	黒	無	朱			I	I		
4	椀	ニレ科	B	暗赤	黒	無	朱			III	I	(内)炭粉下地-黒・赤褐色	
5	椀	ノグルミ	B	黒	黒	内・赤・絵	外・赤・絵	朱	朱	II	II		
6	椀	ニレ科	A	黒	黒	内外・赤・絵	朱	N	N				
7	椀	シオジ	A	黒	黒	無	朱			I	I		
8	小型椀	シオジ	A	黒	黒	無	朱			I	I		
9	カツラ	A	赤	黒	外・赤・不明	朱	朱	I	II				
10	ニレ科	B	赤	黒	無	朱	朱	III	I			(内)炭粉下地-黒・朱	
11	小型椀	ニレ科	B	黒	黒	無	朱			I	I		
12	シオジ	A	黒	-	無	朱	朱			III			



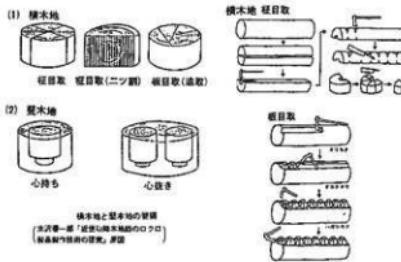
第53図 漆塗り構造の分類

漆塗り面の構造、特に、各漆器資料の堅牢性を知る目安となる本胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、いずれの資料も無機物を含んでいないためピーク自体はほとんど見出されなかった。さらにこれらを顕微鏡観察し、それぞれを炭粉を柿渋や生漆などに混ぜて用いる炭粉下地であると理解した。一般に中・近世の出土漆器資料の下地は、堅牢性を重視するため細かい粘土や珪藻土を生漆等に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地とも言う）と、それよりやや簡便な代用下地である炭粉下地の二種類に大別される。<sup>(3)</sup> 本資料は、いずれもその後者にある。ところが地の漆塗り層は、1-2層の極めて薄い上塗り層をもつ資料と、それよりやや堅牢で複雑な多層の塗り構造をもつ資料（No.6）に分類された。このことから、本漆器資料自体は、基本的にはいずれもやや簡便で実用に即した日用漆器資料の範疇に入るものの、若干ながらいくつかのランクが存在している可能性が推察された。なお文様等の加飾は、いずれも地の上塗り層の上に描かれていた（写真5～12）（図54）。

次に色漆の性質についてみてみると、赤色系漆の使用顔料の定性分析結果では、いずれの資料も、Hg（水銀）およびS（硫黄）のピークが強く認められた（図55）。これらをさらに顕微鏡観察することにより、赤色系顔料である朱（辰砂もしくは水銀朱HgS）を用いた赤色系漆であると理解した。朱以外の赤色系漆の使用顔料としては、ベンガラ（酸化第二鉄、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）を用いる例が知られ両者の歴史は古い。しかし近世中・後期以降の漆器の顔料としては、人造ベンガラの工業生産化にともない大量生産が可能となるために、ベンガラの方が朱に比較して廉価で一般的であったようである。<sup>(4)</sup> しかし本漆器資料の場合、いずれも朱の使用が確認されており、その意味では特徴的である。

第44表 ろくろ挽き物の用材分類一覧表（橋本1979による）

A 櫛 孔 材	a. ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリギリ、クワ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表れる堅硬であるが方熱性もあり、木工など薄手物に適する。
	b. サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ類ヤママクラ、ウワミズザクラ、メズミなど	白木で美しい光沢があり、白木堆物にも適している。狂い割れが少なくて、やや堅さはあるが、加工は容易。下地が少量で足るので、塗り物にもっとも適する。
B 板 材	c. ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カツラ、ホオノキなど	軽らかくて加工は容易であるが、乾燥が難しくて狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大である。
	d. エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白く軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目にもよく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

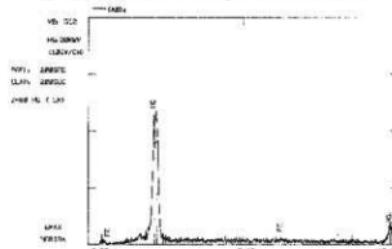


第54図 横木地と堪木地の要領

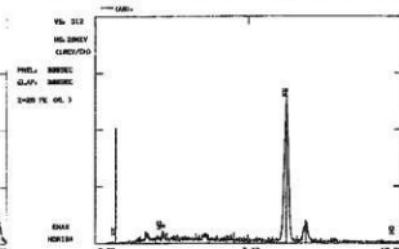
#### 4 若干の考察

以上、前章では項目別に瀬名遺跡出土漆器資料の製作技法をみてみた。その結果、本漆器資料自体はやや簡素で一般的な、実用に即した日用漆器資料のグループに基本的には分類される。しかし用材の選択性や赤色系漆の使用顔料はいずれも吟味された素材を中心としていることなどもわかった。このデータを集計してみると(図57-1)の様になる。これは同じ静岡県下の近世原川遺跡出土漆器資料(18世紀以降)のそれと比較しても大きく異なる特徴である(図57-2)。とりわけ①内外面に黒漆を塗布し特に内面に赤色系漆で内面に加飾を施す点、②楕円部に楕円挽き跡を明確に残す点、③炭粉下地の上に極めて薄い上塗りの漆刷毛を塗布する点、④赤色系漆の使用顔料として朱を多用する点、等は中世から近世初期へ前期にかけての漆器資料に多く認められる製作技法上の特徴(より中世的な古い傾向を残すもの)の一つである。このことは本漆器資料の年代観を考える上で何等かの参考となろう。一方、本漆器資料の製作技法の在り方と他地域の近世初頭前後の年代に比定される出土漆器資料のそれを各遺跡別に集計して比較してみてみると若干その様相は異なる(図57-3~10)。一般に生活用具の一つである漆器資料の形態や製作技法の在り方は、地域性、資料の製作年代、生産地、文化的な時代背景、その資料を所有していた階層、使用目的、の違い等によって、ある程度の傾向があったことは十分に考えられることである。しかし本漆器資料の場合、資料個体数自体あまり多い方ではないので生産地や所有階層、使用目的等の一般的傾向を知るためににはさらに資料の充実を計る必要性があろう。

第55図 赤色系漆(朱漆HgS)のX線分析結果

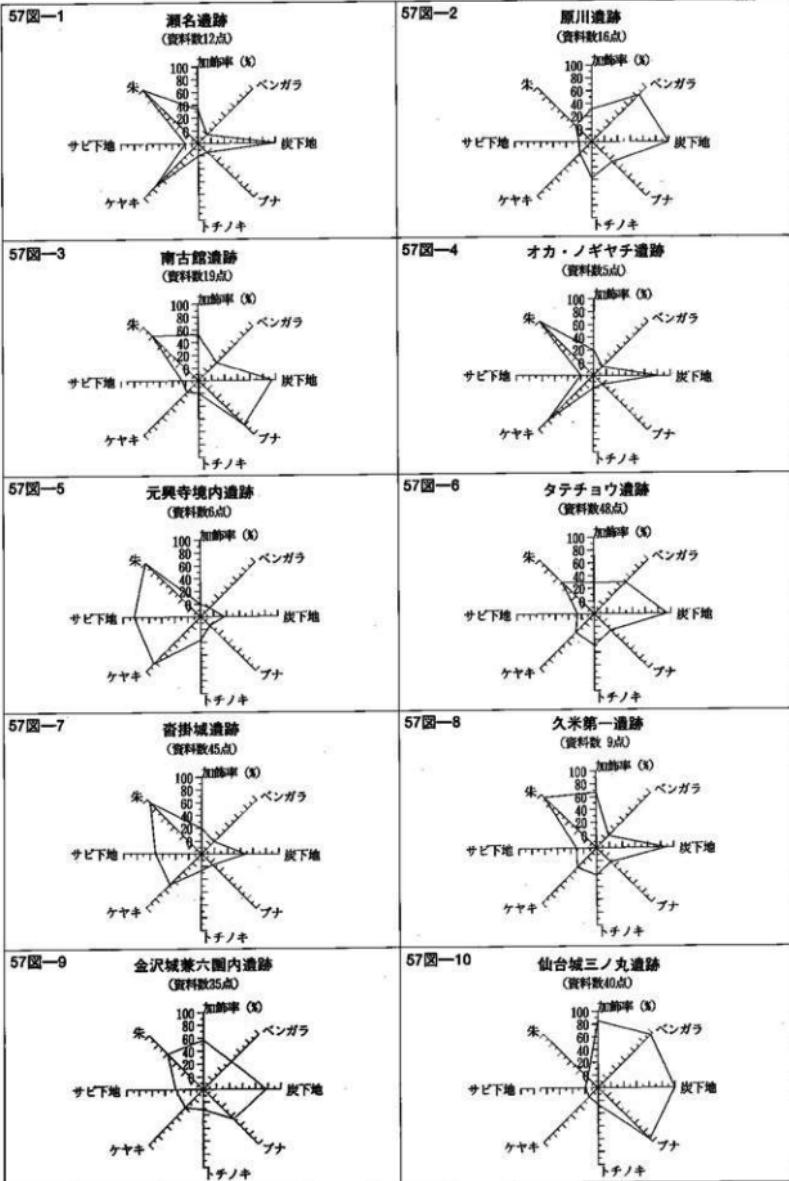


第56図 赤系漆塗(ベンガラ漆Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)のX線分析結果



第45表 近世初—前期頃の年代に比定される各地の遺跡

	1540	1550	1560	1570	1580	1590	1600	1610	1620	1630	1640
清須城城下町	—	—	—	—	—	—	■■■	■■■	■■■	■■■	■■■
香川城址遺跡	■■■	■■■	■■■	■■■	■■■	■■■	■■■	■■■	■■■	■■■	■■■
元興寺寺域遺跡	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
タテチヨウ遺跡	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
久米第一遺跡 (久米城)	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
島西城址遺跡	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
堺堺堺都市	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
大坂城三ノ丸遺跡	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
新路城天守閣	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
彦根城天守閣	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
金沢城江戸門遺跡	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
仙台城三ノ丸遺跡	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■



第57図 各遺跡別の一括出土漆器資料の組成

今回、出土漆器資料の調査を行う機会を与えてくださった、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所の中山正典氏、栗野克巳氏はじめとする多くの方々にはたいへんお世話になりました。厚く謝意を表します。

<註>

- (1) 末沢春一郎 1975年 「近世以降木地刷のロクロ製品製作技法の研究」 『京都大学農学部林学科卒業論文』 横本鉄男 1979年 「ろくろ ものと人間の文化史31」 法政大学出版局
  - (2) 須藤謙 1982年 「日本人の生活と文化⑤ 著らしの中の木器」 日本刊行文化研究所編 『ぎょうせい』
  - (3) 文化庁文化財保護部編 1974年 「太鼓塚の曹洞・民俗資料選集2」 国土地理協会
  - (4) 稲鳥市文化委員会 1973年 「輪島市史 第六巻 資料編」
  - (5) 北野信彦 1991年 原川遺跡出土漆器資料の製作技法『原川遺跡Ⅴ』 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
  - (6) 愛知県豊明市教育委員会 1986年 「香掛城址」
- 農明市香掛城址発掘調査報告 1984-1985年『香掛城址第二、四次発掘調査報告』  
福井県岩瀬郡長沼町教育委員会 1988年『古館I 長沼町文化財調査報告書第13集』  
北野信彦 1989年 中・近世寺社什器としての朱漆器「厨物と民具」 日本文具学会編雄山閣出版社  
島根県土木部河川課・島根県教育委員会 1990年『タテヨウ遺跡発掘調査報告書3』  
北野信彦 1992年 仙台城二ノ丸跡出土漆器資料の製作技法『仙台市博物館調査研究報告第12号』 仙台市博物館  
北野信彦 1992年 オカ塚跡出土漆器資料の製作技法「ナカ・ノギヤチ遺跡」 石川県中島町教育委員会  
北野信彦 1993年 特別名勝 金沢城兼六園跡出土漆器資料の製作技法『特別名勝 金沢城兼六園跡』  
石川県立埋蔵文化財センター



写真5

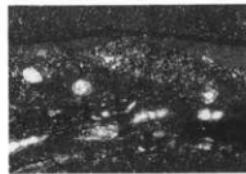


写真6

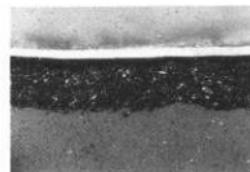


写真7

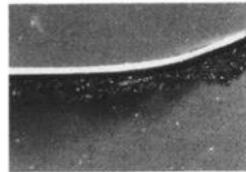


写真8

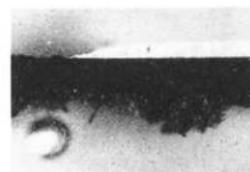


写真9

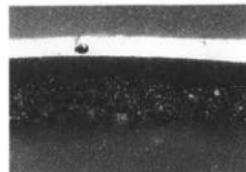


写真10



写真11



写真12

### 塗り面の塗り構造

### 第3節 瀬名遺跡出土金属製品の分析結果

S MMリサーチ住友金属鉱山（株）中央研究所

#### 出土品の調査

##### 1 目的

瀬名遺跡の出土品について、その組成および金属組織を調べるものである。

##### 2 試料

次の5種である。

平根型鎌（A）

平根型鎌（B）

鎌

袋状鉄斧

劍

上記の試料の外観を写真13～18に示す。

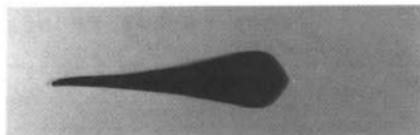


写真13 平根型矢じり (A) M-0004

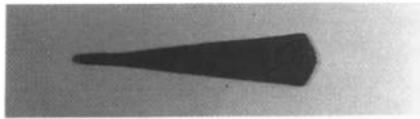


写真14 平根型矢じり (B) M-0004

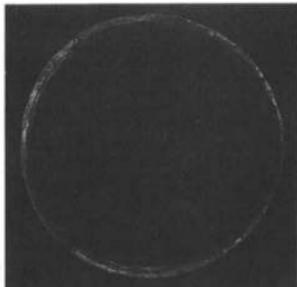


写真17



写真15 鎌



写真18 外観写真 (鉄)

写真16 袋状鉄斧  
図1-1 出土品試料の外観図

図1-2 出土品試料の外観図 (×1)

### 3 調査内容

試料とその調査内容を表46に示す。

調査の内容および試料切断等の供試料の作製法については、東京国立文化財研究所修復技術部第3修復技術研究室・青木繁夫室長のご指示に従った。ただし、全試料について蛍光X線分析による定量分析を行った。

第46表 試料種と調査内容

試料名	調査内容	備考
平根型鎌(A) (矢じり)	鉄製であることを確認する 蛍光X線分析による定量分析	M-0004 加工せずに分析する
平根型鎌(B) (矢じり)	鉄製であることを確認する 蛍光X線分析による定量分析	M-0005 加工せずに分析する
鎌	断面の金属組織観察 発光分光分析による定性分析	ファインカッターで切断可
袋状鉄斧	断面の金属組織観察 発光分光分析による定性分析	ファインカッターで切断可 腐食が激しいのでエポキシ樹脂の真空含浸を要す
鋼	発光分光分析による定性分析 ICPによる定量分析	試料採取には切断せずに ポンチ等で抜く

### 4 分析および金属組織観察条件

#### 1) 分析

定性分析：蛍光分光分析（鎌、袋状鉄斧、鋼）

定量分析：蛍光X線分析（平根型鎌(A)・(B)、鎌、鋼路、袋状鉄斧）

ただし、鋼についてはICP発光分析も行った。

#### 2) 金属組織観察

平根型鎌(A)、平根型鎌(B)共にそれぞれ樹脂中に埋め込み、研磨後エッチング処理した。

エッチング液：5%硝酸+エチルアルコール

撮影装置：金属顕微鏡（オリンパス光学）

### 5 結果

#### 1) 分析結果

##### ①定性分析結果

鎌、袋状鉄斧、鋼の定性分析結果を表46に示す。

概略、鎌はMnを含むFeを主成分としているが、袋状鉄斧は不純物の少ないFeである。一方、鋼はCu、Snを主成分とした合金系である。

第47表 出土品の発光分光分析結果

単位 (wt %)

元素	鎌	袋状鉄斧	鉄	元素	鎌	袋状鉄斧	鉄
Ag	0.00n	0.00n~0.0n	0.n	Nd	<0.00n	<0.00n	<0.00n
Al	0.0n~0.n	0.0n~0.n	0.n	Nb	<0.0n	<0.0n	<0.0n
As	<0.0n	<0.0n	0.0n~0.n	Ni	0.n	0.n	0.n
Au	<0.00n	<0.00n	<0.00n	Os	<0.00n	<0.00n	<0.00n
B	<0.00n	<0.00n	<0.00n	P	<0.0n	x	<0.0n
Ba	<0.0n	<0.0n	<0.0n	Pb	<0.00n	<0.00n	>n
Be	<0.00n	<0.00n	<0.00n	Pd	<0.00n	<0.00n	<0.00n
Bi	<0.00n	<0.00n	0.0n~0.n	Pr	<0.n	<0.n	<0.n
Ca	0.n	<0.00n	0.00n~0.0n	Pt	<0.00n	<0.00n	<0.00n
Cd	<0.00n	<0.00n	<0.00n	Re	<0.00n	<0.00n	x
Ce	<0.0n	<0.0n	<0.0n	Rh	<0.00n	<0.00n	<0.00n
Co	0.n	0.0n~0.n	0.00n~0.0n	Ru	<0.00n	x	<0.00n
Cr	<0.00n	<0.00n	<0.00n	Sb	<0.00n	<0.00n	0.00n~0.0n
Cu	0.n	0.n	>n	Sc	<0.00n	<0.00n	<0.00n
Dy	<0.00n	<0.00n	<0.00n	Se	<n	<n	<n
Er	<0.00n	<0.00n	<0.00n	Si	0.n~n	0.n	n
Eu	<0.00n	<0.00n	<0.00n	Sm	<0.n	<0.n	<0.0n
Fe	>n	>n	0.n~n	Ta	<0.00n	<0.00n	>n
Ga	x	x	<0.00n	Tb	<0.n	<0.n	<0.n
Gd	<0.00n	<0.00n	<0.00n	Te	<0.00n	<0.00n	<0.00n
Ge	<0.00n	<0.00n	<0.00n	Th	<0.00n	<0.00n	<0.00n
Hf	<0.00n	<0.00n	<0.00n	Ti	<0.0n	<0.0n	<0.0n
Hg	<0.00n	<0.00n	<0.00n	Tl	<0.00n	<0.00n	<0.00n
Ho	<0.0n	<0.0n	<0.0n	Tm	<0.00n	<0.00n	0.00n~0.0n
In	<0.00n	<0.00n	<0.00n	U	<0.n	<0.n	<0.n
Ir	<0.00n	<0.00n	<0.00n	V	<0.00n	<0.00n	<0.00n
La	<0.00n	<0.00n	<0.00n	W	<0.n	<0.n	<0.n
Li	<0.0n	<0.0n	<0.0n	Y	<0.00n	<0.00n	x
Lu	<0.00n	<0.00n	<0.00n	Yb	<0.00n	<0.00n	<0.00n
Mg	0.0n	0.00n	0.00n~0.0n	Zn	<0.0n	<0.0n	0.0n~0.n
Mn	0.n~n	0.n	0.n	Zr	<0.00n	<0.00n	<0.00n
Mo	x	x	<0.00n				
Na	<0.0n	<0.0n	x				

0.0n = 0.01~0.09

注) xは妨害のため測定不能であることを示す。

第48表 発光分光分析定性結果報告書

## 試料名 錄

元 素		単位 (w t %)	元 素		単位 (w t %)
A g	銀	0.00n	N b	ニオブ	<0.00n
A l	アルミニウム	0.0n~0.n	N d	ネオジウム	<0.0n
A s	ヒ素	<0.0n	N i	ニッケル	0.n
A u	金	<0.00n	O s	オスミウム	<0.00n
B	ホウ素	<0.00n	P	リン	<0.0n
B a	バリウム	<0.0n	P b	鉛	<0.00n
B e	ベリリウム	<0.00n	P d	パラジウム	<0.00n
B i	ビスマス	<0.00n	P r	プラセオジウム	<0.n
C a	カルシウム	0.0n	P t	白金	<0.00n
C d	カドミウム	<0.00n	R e	レニウム	<0.00n
C e	セリウム	<0.0n	R h	ロジウム	<0.00n
C o	コバルト	0.0n	R u	ルテニウム	<0.00n
C r	クロム	<0.00n	S b	アンチモン	<0.00n
C u	銅	0.n	S c	スカンジウム	<0.00n
D y	ジスプロシウム	<0.00n	S e	セレン	<n
E r	エルビウム	<0.00n	S i	ケイ素	0.n~n
E u	ユーロビウム	<0.00n	S m	サマリウム	<0.0n
F e	鉄	>n	S n	スズ	×
G a	ガリウム	×	S r	ストロンチウム	<0.n
G d	ガトリウム	<0.00n	T a	タンタル	<0.00n
G e	ゲルマニウム	<0.00n	T b	テルビウム	<0.00n
H f	ハフニウム	<0.00n	T e	テルル	<0.0n
H g	水銀	<0.00n	T h	トリウム	<0.00n
H o	ホルシウム	<0.0n	T i	チタン	0.00n~0.0n
I n	インジウム	<0.00n	T l	タリウム	<0.00n
I r	イリジウム	<0.00n	T m	ツリウム	<0.00n
L a	ランタン	<0.00n	U	ウラン	<0.n
L i	リチウム	<0.0n	V	バナジウム	<0.00n
L u	ルテチウム	<0.00n	W	タンゲステン	<0.n
M g	マグネシウム	0.0n	Y	イットリウム	<0.00n
M n	マンガン	0.n~n	Y b	イッテルビウム	<0.00n
M o	モリブデン	×	Z n	亜鉛	<0.0n
N a	ナトリウム	<0.0n	Z r	ジルコニウム	<0.00n

注) ×は妨害のため測定不能であることを示す。

第49表 発光分光分析定性結果報告書

## 試料名 袋状鉄斧

元 素		単位 (w t %)	元 素		単位 (w t %)
A g	銀	0.00n~0.0n	N b	ニオブ	<0.00n
A l	アルミニウム	0.0n~0.n	N d	ネオジウム	<0.0n
A s	ヒ素	<0.0n	N i	ニッケル	0.n
A u	金	<0.00n	O s	オスミウム	<0.00n
B	ホウ素	<0.00n	P	リン	x
B a	バリウム	<0.0n	P b	鉛	<0.00n
B e	ベリリウム	<0.00n	P d	パラジウム	<0.00n
B i	ビスマス	<0.00n	P r	プラセオジウム	<0.n
C a	カルシウム	<0.00n	P t	白金	<0.00n
C d	カドミウム	<0.00n	R e	レニウム	<0.00n
C e	セリウム	<0.0n	R h	ロジウム	<0.00n
C o	コバルト	0.0n~0.n	R u	ルテニウム	x
C r	クロム	<0.00n	S b	アンチモン	<0.00n
C u	銅	0.n	S c	スカンジウム	<0.00n
D y	ジスプロシウム	<0.00n	S e	セレン	<n
E r	エルビウム	<0.00n	S i	ケイ素	0.0n
E u	ユーロビウム	<0.00n	S m	サマリウム	<0.0n
F e	鉄	>n	S n	スズ	<0.00n
G a	ガリウム	x	S r	ストロンチウム	<0.n
G d	ガトリウム	<0.00n	T a	タンタル	<0.00n
G e	ゲルマニウム	<0.00n	T b	テルビウム	<0.00n
H f	ハフニウム	<0.00n	T e	テルル	<0.0n
H g	水銀	<0.00n	T h	トリウム	<0.00n
H o	ホルシウム	<0.0n	T i	チタン	<0.00n
I n	インジウム	<0.00n	T l	タリウム	<0.00n
I r	イリジウム	<0.00n	T m	ツリウム	<0.00n
L a	ランタン	<0.00n	U	ウラン	<0.n
L i	リチウム	<0.0n	V	バナジウム	<0.00n
L u	ルテチウム	<0.00n	W	タングステン	<0.n
M g	マグネシウム	0.00n	Y	イットリウム	<0.00n
M n	マンガン	0.n	Y b	イッテルビウム	<0.00n
M o	モリブデン	x	Z n	亜鉛	<0.0n
N a	ナトリウム	<0.0n	Z r	ジルコニウム	<0.00n

注) xは妨害のため測定不能であることを示す。

第50表 発光分光分析定性結果報告書

## 試料名 鋼

元 素		単位 (w t %)	元 素		単位 (w t %)
A g	銀	0.n	N b	ニオブ	<0.00n
A l	アルミニウム	0.n	N d	ネオジウム	<0.0n
A s	ヒ素	0.0n~0.n	N i	ニッケル	0.n
A u	金	<0.00n	O s	オスミウム	<0.00n
B	ホウ素	<0.00n	P	リン	<0.0n
B a	バリウム	<0.0n	P b	鉛	>n
B e	ベリリウム	<0.00n	P d	パラジウム	<0.00n
B i	ビスマス	0.0n~0.n	P r	プラセオジウム	<0.n
C a	カルシウム	0.00n~0.0n	P t	白金	<0.00n
C d	カドミウム	<0.00n	R e	レニウム	x
C e	セリウム	<0.0n	R h	ロジウム	<0.00n
C o	コバルト	0.00n~0.0n	R u	ルテニウム	<0.00n
C r	クロム	<0.00n	S b	アンチモン	0.00n~0.0n
C u	銅	>n	S c	スカンジウム	<0.00n
D y	ジスプロシウム	<0.00n	S e	セレン	<n
E r	エルビウム	<0.00n	S i	ケイ素	n
E u	ユーロビウム	<0.00n	S m	サマリウム	<0.0n
F e	鉄	0.n~n	S n	スズ	>n
G a	ガリウム	<0.00n	S r	ストロンチウム	<0.n
G d	ガトリウム	<0.00n	T a	タンタル	<0.00n
G e	ゲルマニウム	<0.00n	T b	テルビウム	<0.00n
H f	ハフニウム	<0.00n	T e	テルル	<0.0n
H g	水銀	<0.00n	T h	トリウム	<0.00n
H o	ホルシウム	<0.0n	T i	チタン	0.00n~0.0n
I n	インジウム	<0.00n	T l	タリウム	<0.00n
I r	イリジウム	<0.00n	T m	ツリウム	<0.00n
L a	ランタン	<0.00n	U	ウラン	<0.n
L i	リチウム	<0.0n	V	バナジウム	x
L u	ルテチウム	<0.00n	W	タングステン	<0.n
M g	マグネシウム	0.00n~0.0n	Y	イットリウム	<0.00n
M n	マンガン	0.0n	Y b	イッテルビウム	<0.00n
M o	モリブデン	<0.00n	Z n	亜鉛	0.0n~0.n
N a	ナトリウム	x	Z r	ジルコニウム	<0.00n

注) ×は妨害のため測定不能であることを示す。

## ②定量分析結果

全試料の蛍光X線分析による定量分析結果を表51に示す。鋼についてはICP発光分析結果も併記した。

平根型鐵(A)は、6.2%Mnを含むFeである。しかし、このMnは金属中に存在するのか、付着した土石に由来するのか不明である。Caは鐵中の介在物であるのか、表面に付着した土石あるいは錆に存在する成分であるのかは不明である。

平根型鐵(B)は、主成分が平根型鐵(A)と類似しているが、Zn、Ni、Crが微量検出されている点が異なる。

錆は26%Mnを含むFeであるが、さらに0.2%Ti、Ca、Kが存在する。しかし、Mn、Ti、Ca、Kは錆中の介在物のか付着物なのかは不明である。

袋状鉄斧の主成分はFeであり、Mn、Cuがそれぞれ0.3%含まれているだけである。この試料の分析箇所が、試料を切断して得られた金属光沢部であることから、不純物元素が検出されなかったものと思われる。

鋼はCu-Sn-Pb系合金である。不純物としてFe、Ag、As、Ca、Al、Mnが存在する。ICP分析結果からSが2%含まれていることがわかった。これは硫化鋼として合金中に存在しているものと思われる。

第51表 定量分析結果 (wt %)

元 素 試 料 \	Fe	Mn	Cu	Zn	Sn	Pb	Ti	Ni	Cr	As	Ag	Ca	Al	K	S
平根型鐵(A) M-0004	91	6.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.5	-	-	-
平根型鐵(B) M-0005	88	6.9	-	0.7	-	-	-	0.08	0.05	-	-	3.7	-	-	-
錆	69	26	-	-	-	-	0.2	-	-	-	-	4.2	-	0.7	-
袋状鉄斧	99	0.3	0.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
鋼	2.3	0.1	75	-	14.3	2.2	-	-	-	1.0	0.2	5.1	-	-	-
鋼*	2.5	-	81	-	7.0	3.9	-	-	-	-	0.1	-	0.03	-	2.0

蛍光X線分析による。ただし、\*印の結果はICP発光分光分析による。

平根型鐵(A)、平根型鐵(B)、錆、鋼は試料表面を分析。袋状鉄斧は断面を分析した。

鋼\*は採取試料を全て供した。

## 2) 金属組織

鎌および袋状鉄斧の金属組織観察のためにそれぞれ写真19,20に示す部位で切断した。



写真19 鎌

A

A'

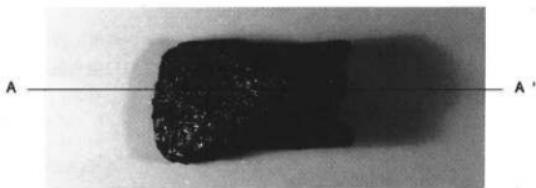


写真20 袋状鉄斧

A—A' 断面を観察

エッティング液

5% 硝酸十エタノール

鎌および袋状鉄斧の金属組織観察のための切断部位

### ①鎌

鎌のマクロ組織写真を図版編図版111に、その各部のミクロ組織写真を図版112~114に示す。

図版111では、長手方向に多くの筋状の組織が観察される。これは加熱と鍛打を繰り返し行って造られた鍛造組織であると考えられる。

鎌の両端 (A, A') および中央部のミクロ組織において、黒い部分は炭素を多く含むバーライト相であるが、図版112 (A') 即ち刃の部分ではA部あるいは中央部に比してバーライト相が多い。

### ②袋状鉄斧

袋状鉄斧のマクロ組織写真を図版111に示す。鎌と同様に鍛造組織が認められる。各部のミクロ組織を図版115~117に示す。写真の中で、白い部分即ちフェライト相とバーライト相がランダムに分布し、且つ結晶粒に方向性がない。結晶粒径は図版112 A' 部位のものが最も小さい。しかし、局所にやや粗大化したバーライト相を有している。

## 第4節 濑名遺跡出土の弥生時代人骨

山口 敏 (国立科学博物館 人類研究部)

### 緒言

瀬名遺跡では昭和63年度から平成3年度にかけて、弥生時代中期の方形周溝墓が多数発見され、そのうちの7基の墓の主体をなす組合せ式木棺で、被葬者の骨あるいは歯の遺残が出土した。全般的に人骨は風化が進み、土圧による変形が著しく、形態的特徴の観察や計測ができる状態ではなかったが、幸いにして5個体の歯列の一部については歯冠エナメル質が比較的よく保存されており、計測・観察を行うことができた。

本稿では、はじめに各人骨の出土状態、保存状態等の概要を記述し、そのあと5個体の歯冠の計測値とその比較結果について報告する。

### 出土人骨の概要

#### 1区木棺墓の人骨

主軸が南北方向にあり、内寸が長さ約1.5m、幅約0.55m、高さ0.2m以上の箱型木棺内で、頭を北にし、顔を右（西）に向け、上半身はほぼ仰臥し、左右の上肢は肘関節を完全に曲げて体側に置き、下肢は膝関節を曲げ、股関節をやや屈した状態で右側に倒した姿勢で出土した。頭骨および四肢長骨の輪郭はたどることができたが、骨の表面は風化しており、骨質も軟らかく、土圧による変形を被っている。横方向に圧平された状態での脳頭蓋の最大矢状径は195mm、横径は約70mm。縫合の状態や眉間の隆起程度などは不明。乳様突起は中等大、乳突上後が強い。上顎高はおよそ70mm前後と推定されるが、鼻骨や眼窩の形態は不明。下顎骨のオトガイ高は推定で約36mmである。（写真21）

寛骨は大きく、大坐骨切痕の形態は男性的である。出土時に推定計測した左大腿骨の最大長は443mmである。これに基づく推定身長は、ビアンソ法で164.5cm、藤井法で164.3cmとなる。この値は绳文時代人男性平均より大きく、山口県土井ヶ浜遺跡や福岡県金隈遺跡出土の、いわゆる渡来系を主体とする弥生人骨の男性平均に近い。四肢骨骨幹の横断面形は変形のため判断できない。左脛骨の骨幹中央部の現状における矢状径は34mmである。

下記の歯が保存されているが、頭部が全体として硬化剤による処理を受けているため、歯の一部は観察・計測が困難となっている。

MMMF P C ? ?		I I ? ? P MM -
MMMP P C I I		I I C P P M M M

咬耗の程度は1度または2度の初期で、ラヴェジョイの基準のE段階（24-30歳）にほぼ相当する。下顎切歯の咬耗はほぼ水平である。この人骨は比較的若い壯年の男性と考えられる。

#### 7区5号方形周溝墓の人骨

内法1.35×0.56mの木棺内で、頭位北、仰臥屈葬の姿勢で発見された。前腕は胸の上に置き、下肢は膝を曲げて右に倒した状態であった。下顎骨の体部がある程度形をとどめており、オトガイ高は約30mmであったと推定される。下記の歯が保存されている。（写真22）

- M M P P - I I	- I - P P - M -
- - M - P C I -	- - - P - - -

上顎切歯はシャベル形を呈する。咬耗はほぼ水平で、切歯、犬歯、第1小白歯、第1大臼歯にそれぞれわずかなゾウゲ質の露出が認められる。全体的な咬耗程度はラヴジョイのD段階（20-24歳）にはほぼ相当する。若い壯年の、おそらくは男性と推定される。

#### 7 区 7号方形周溝墓の人骨

内法1.11×0.5mの木棺内で、遊離した歯冠エナメル質だけが比較的まとまって出土した。歯の大部分は下記の乳歯である。（写真23）

- m c i i		i i - - -
m - c i -		- i c - -

上顎切歯は軽度のシャベル形を呈する。わずかなゾウゲ質の露出が上顎第1乳臼歯に認められる。乳歯のほかに永久歯のうちの大歯2点の未完成の歯冠（約1/2）が出土している。エナメル質の形成状態から判断して、ほぼ4歳の段階に相当するものと思われる。

#### 7 区12号方形周溝墓の人骨

頭蓋と左右脛骨が辛うじて認められ、頭を南にした仰臥伸展位であったと想像される。骨遺残の一つから推定すると、身長はおよそ130cm前後であったかと考えられる。頭蓋は風化し変形しているが、現状での矢状方向最大径は約170mmである。この個体は歯がまったく保存されていない。年齢区分は少年期と推測される。

#### 7 区14号方形周溝墓の人骨

内法約1.5×0.6mの木棺の南端付近で頭蓋の後頭部と下顎骨と上下の歯列が出土した。骨はすべて風化のため表面が剥離し、形態学的所見はまったく得られなかったが、下記の歯の歯冠は保存状態が良好である。（写真24）

- M M P P C I I		I I - - - - -
- M M P P - - -		- - C P - - -

上顎切歯はシャベル形。咬耗は軽度で、切歯と犬歯にのみゾウゲ質のわずかな露出が見られる。全体としての咬耗程度は、上顎歯はラヴジョイのB2段階（16-20歳）、下顎歯はC段階（18-22歳）に相当する。この個体は青年の女性かと推測される。

#### 8 区15号方形周溝墓の人骨

木棺は保存不十分で大きさは不明。底板上に頭骨と四肢長骨の糊状の小破片が若干認められ、頭位北のい屈葬で、屈した膝が左に倒れた状態と判断された。歯は下記の6点の歯冠が保存されている。

（写真25）

- M M P - - - -		- - - - P M M -
- - - - - - - -		- - - -

歯冠は比較的大きく、咬耗の程度はラヴジョイのB1段階（16-20歳）に近い。年齢は青年、性別は男性である可能性が高いと思われる。

## 9区19号方形周溝墓の人骨

内法1.8×0.7mの木棺内で、頭を北にし、膝を曲げた状態で発見された。風化が著しく、左上顎犬歯の歯冠と長さ約25cmの右大腿骨の骨幹部破片だけが取り上げられた。犬歯は大きく、歯冠頬舌径が9.2mmあり、ゾウガ質の露出がある程度進んでいる。大腿骨は土圧によって歪んでいるが、粗線がよく発達しており、骨幹はピラステル構造をもっていたと考えられる。変形した現状での中央最大径は36mmである。おそらくは成人男性であったと思われる。

注目すべきことに、本遺跡出土の歯冠には齶触が全く認められない。

## 歯冠計測値について

上述の出土人骨のうち、成年および青年の4個体の永久歯歯冠の近遠心径および頬舌径は第52表に、また幼児1個体の乳歯歯冠の同計測値は第53表に示したとおりである。比較のためこれらの表には松村

第52表 永久歯の歯冠計測値 (mm)

	源名		遺跡		弥生♂ 平均	縄文♂ 平均 S.D.	
	1-1♂ <sup>a</sup>	7-5♂ <sup>a</sup>	7-14♀	8-15♀		平均	S.D.
<b>近遠心径</b>							
UI1	9.3		8.6		8.81	8.51	0.40
UI2	6.9	7.0	7.1		7.44	7.10	0.47
UC			8.1		8.17	7.55	0.42
UP1	7.7	7.6	7.4		7.59	6.90	0.38
UP2	7.1	7.2	7.4	7.2	7.10	6.46	0.40
UM1	10.5	10.4	10.5	10.6	10.68	10.28	0.47
UM2	10.1	9.7	9.3	10.4	9.86	9.12	0.60
LI1					5.44	5.27	0.36
LI2					6.19	5.72	0.37
LC	7.0	6.9			7.24	6.73	0.45
LP1	7.7	7.3			7.38	6.91	0.37
LP2			7.2		7.49	6.94	0.45
LM1	11.6	11.4			11.82	11.61	0.45
LM2			10.7		11.35	10.80	0.63
<b>頬舌径</b>							
UI1			6.9		7.56	7.29	0.34
UI2	6.9	6.2			6.87	6.69	0.42
UC			8.0		8.68	7.96	0.49
UP1	9.4	9.6	9.3		9.74	9.27	0.49
UP2	9.5	9.1	9.1	9.8	9.52	9.00	0.58
UM1	11.4	11.8	10.9	12.1	12.06	11.78	0.51
UM2	11.7	11.3	11.0	12.1	11.84	11.45	0.62
LI1					6.02	5.93	0.36
LI2					6.47	6.20	0.37
LC					8.13	7.44	0.51
LP1	8.0	8.1			8.35	7.79	0.48
LP2			8.1		8.76	8.33	0.48
LM1	11.3	10.8			11.33	11.23	0.43
LM2			10.2		10.73	10.47	0.51

1) Matsumura, 印刷中. 2) Matsumura, 1989.

第53表 乳歯の歯冠計測値 (mm)

	近遠心径			頬舌径				
	瀬名7-7	弥生*	縄文*	瀬名7-7	弥生*	縄文*		
	平均	平均	S.D.		平均	S.D.		
U11	6.3	6.89	6.72	0.29	3.9	5.12	4.94	0.20
U12	5.7	5.64	5.50	0.20	4.1	5.07	4.80	0.18
Uc	7.4	6.71	6.52	0.65	5.9	5.76	5.54	0.42
Uml	8.2	7.51	7.24	0.32	9.6	8.95	8.84	0.34
Um2		9.54	9.34	0.56		10.40	10.18	0.45
L11		4.36	4.19	0.26		3.83	3.75	0.17
L12	5.5	4.94	4.87	0.31	4.6	4.27	4.12	0.18
Lc	6.2	6.00	5.87	0.33	5.8	5.42	5.27	0.33
Lml		8.76	8.63	0.47		7.53	7.10	0.41
Lm2	11.6	10.87	10.97	0.47	9.5	9.44	9.32	0.37

\* Matsumura (1991). 男女混合資料。

(印刷中、1991)による西日本のいわゆる渡来系弥生人の平均値と各地の縄文人の平均値・標準偏差が示してある。松村の計測した弥生人資料は、主として山口県土井ヶ浜遺跡、中の浜遺跡、および福岡県金隈遺跡で出土した資料である。永久歯の比較数値は男性に関するものであり、乳歯のそれは男女混合資料のそれである。なお、歯冠計測は藤田(1949)の提唱した方法にしたがって行ったものである。

松村によれば、いわゆる渡来系弥生人の永久歯歯冠は、縄文人のそれに比較して絶対的に大きいばかりでなく、犬歯、小白歯、および第2大臼歯の第1大臼歯に対する相対的比率も大きいという。また、乳歯においては、絶対的な大きさの差は永久歯と同様であるが、相対的な比率の差は永久歯におけるほど顕著ではないといふ。

瀬名遺跡出土人骨の歯冠径をみると、7区14号墓出土の個体以外は、すべて縄文人平均より大きく、弥生人平均に近い。7区14号墓の人骨は女性である可能性が高いので、その歯冠径を縄文人女性の平均値(松村、1989)と比較すると、明らかに後者よりも大きい。したがって、瀬名遺跡出土の全歯列は縄文人よりも大きく、西日本の渡来系弥生人のそれに近い歯冠径をもっている、と結論することができる。

歯冠計測値を用いて瀬名遺跡の各個体と弥生人および縄文人とのあいだのベンローズの距離(サイズ距離とシェイプ距離)を求めた結果を第54表に示した。女性と推定される7区14号墓人骨以外はすべて

第54表 歯冠計測値に基づく渡来系弥生人および縄文人  
平均からのベンローズ距離

	サイズ距離		シェイプ距離	
	弥生	縄文	弥生	縄文
<b>永久歯</b>				
瀬名 1- 1	0.035	0.663	0.563	0.985
7- 5	0.102	0.373	0.233	0.586
7-14	0.787	0.004	0.403	0.873
8- 1	0.107	1.655	0.135	0.380
<b>乳歯</b>				
瀬名 7- 7	0.002	0.253	6.981	5.780

てがサイズ距離において弥生人に近く、7区7号墓出土の乳歯列をのぞく全永久歯列が、シェイプ距離において弥生人に近いという結果となっている。乳歯の場合はシェイプよりもサイズを重視すべきであるとすれば、結局すべての個体が縄文人よりも西日本の渡来系弥生人に近い歯をもっていたという上記の結論が裏書きされる。

#### 考察および結論

近年、九州北部および山陰西部では多数の弥生時代人骨が発見され、縄文時代人とはかなり異なる形態的特徴をもった人々が、この時代に大陸から渡來したことが、広く認められるようになっている（中橋・永井、1989など）。

九州山陰をのぞく日本の大半の地域においては、弥生時代人骨の出土例がまだ限られているが、大陸からの渡來者の影響が、少なくとも伊勢湾付近の地域まで及んでいたことは、断片的な出土資料によって明らかにされてきつつある（池田、1988；吉備、1989；馬場ほか、1990；池田、1993aなど）。

しかし、伊勢湾地域よりもさらに東の地域においては、弥生人骨の出土が一層まれであり、しかも從来発見されている東日本の弥生人骨はすべて、多かれ少なかれ縄文時代人に特有の形態的特徴を備えていると報告されている（鈴木、1963；海部、1992；など）。

今回瀬名遺跡で出土した人骨は、骨の保存状態は極めて不十分であったが、幸い何点かの歯冠について近遠心径と頬舌径を計測することができた。これらの資料は、從来東日本で報告されてきた洞窟遺跡出土のものではなく、弥生時代中・後期特有の墓制である方形周溝墓で発見されたものであり、その点で東日本でははじめての貴重な発見ということができる。

瀬名出土人骨の永久歯列4例がすべてシェイプ距離において、また1例の乳歯列がサイズ距離において、松村の縄文人平均よりは弥生人のそれに近い傾向を示したことは、東海地方の弥生時代中期の方形周溝墓の被葬者に、西日本のいわゆる渡来系弥生人の影響が強く及んでいたことを意味していると考えてよいであろう。古墳時代に大陸からの渡來者の遺伝的影響が東日本にも広く及んでいたことは、すでに明らかになっている（山口、1990；池田、1993b；など）が、この影響がどの時期に始まっていたかという問題は、これまで未解決となっていた。乏しいながらも今回の瀬名遺跡の資料は、その意味で、本州東半においても弥生時代中期には渡來系（非縄文系）の要素が存在していたことを示す、最初の人類学的証拠として注目すべきものといえよう。

#### <参考文献>

- 馬場悠男・茂原信生・埴原和郎 1989年 唐古・鍵遺跡出土人骨(23次発掘) 第43回日本人類学会・日本民族学会連合大会抄録 64
- 藤田恒太郎 1949年 前の計測基準について 人類学雑誌61-1
- 池田次郎 1988年 東海西部、近畿、瀬戸内の弥生時代人骨「日本民族文化的生成」(六興出版) 19-33
- 池田次郎 1993a 愛知県知多市法海寺遺跡出土の弥生時代人骨「法海寺遺跡Ⅱ」(知多市教育委員会) 63-77
- 池田次郎 1993b 古墳人「古墳時代の研究 I」(雄山閣)
- 海部勝介 1992年 群馬県岩津保割遺跡出土の弥生時代人骨 人類学雑誌100-4
- 吉備 登 1989年 瀬名計測値からみた古代近畿・中国地方人の特性 人類学報 48輯
- 松村博文 1989年 縄文人と永久歯の面計測値の地域変異(英文) 人類学雑誌 97-4
- 松村博文 1991年 縄文人および弥生人における乳歯の大きさについて(英文) 国立科学博物館研究報告 D類 17巻
- 松村博文 印刷中 唐古の形質からみた日本人の小進化(英文) Anthropol.Sci.Vol.102
- 中橋孝博・永井昌文 1989年 弥生人-形質「弥生文化の研究 I」(雄山閣) 23-51
- 鈴木 尚 1963年 「日本人の骨」 岩波書店
- 山口 敏 1990年 「日本人の祖先」 雄明書店



写真21 1区木棺墓人骨の頭骨



写真22 7区5号墓出土の歯



写真23 7区7号墓出土の歯（乳歯）



写真24 7区14号墓出土の歯



写真25 8区15号墓出土の歯

# 報 告 書 抄 錄

ふりがな	せないせき いぶつへん						
書名	瀬名遺跡Ⅲ(遺物編Ⅰ)						
副書名	静清バイパス(瀬名地区)埋蔵文化財調査報告書3						
卷次							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告						
シリーズ番号	第47集						
編著者名	中山正典・中林賢治(付編:北野信彦・山内文・山口敏)						
編集機関	静岡県埋蔵文化財調査研究所						
所在地	〒424 静岡県清水市江尻町18-5 TEL 0543-67-1171						
発行年月日	西暦 1994年 3月 29日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
瀬名遺跡 <small>セナイセキ</small>	静岡県静岡市 <small>セナ</small>	22201		138度 25分 31秒	35度 0分 18秒	19860403~ 19911115	182,834 静清バイパス(瀬名 地区)埋蔵文化財発 掘調査業務
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
瀬名遺跡	生産遺跡	弥生時代 中期	水田 方形周溝墓 溝	弥生土器、鍬、鋤、田下駄、 机、打製石斧			当地方の初期農耕段階の水 田。
		弥生時代 後期 古墳時代 前期	水田 掘立柱建物 溝 環	弥生土器、古式土器類、鍬、 鋤、田下駄、田舟、ヨコヅチ、 堅物、縄錆、かせい、 銅鏡、梯、木製高杯、銅物、 舟形木製品、鳥形木製品、 木棺、柱根、梯子、ネズミ 返し、杭、舟材			多数の杭を打ち込んだ水田 跡を全調査区で確認。多数の 木製農具の出土。
		古墳時代 中期	木造状遺構	土師器、須恵器、田下駄、 舟形木製品、銅物、杭、柱 材、垂木、梯子、鐵錆、鍬 鋤			
		古墳時代 後期 奈良時代	水田 溝 自然流路	土師器、須恵器、田下駄、 田舟、ヨコヅチ、曲物、挽 物、銅物、漆椀、人形木製 品、蓋串、馬形			
		平安時代	水田 溝 掘立柱建物 自然流路	土師器、陶器、田下駄、田 舟、ヨコヅチ、曲物、挽物、 銅物、漆椀、刀形木製品、 蓋串、舟形木製品、箸、下 駄、木箇			条里型地割を示す水田区画 を確認。
		中・近世	水田 自然流路	土師器、陶器、田下駄、挽 物、曲物、漆椀、箸、蓋串、 木箇、辛塔婆、錢貨、鐵錆			

## 資料整理関係者名簿

(敬称略)

### 1 資料提供・調査協力

樋上 昇（愛知県埋蔵文化財センター）	吉田秀享（福島県文化センター）
小久賀隆史（千葉県長生都市文化財センター）	秋山浩三（京都府向日市埋蔵文化財センター）
平野幸伸（福島県会津若松市教育委員会）	佐々木長生（福島県立博物館）
芋本隆裕（東大阪市立郷土博物館）	飯塚武司（東京都埋蔵文化財センター）
山田昌久（元筑波大学）	庄司一雄（住友金属鉱山中央研究所）
新国 勇（福島県南会津郡只見町教育委員会）	大村和男（静岡市登呂博物館）
鈴木敏則（浜松市教育委員会）	

### 2 整理作業参加者

青島久仁子	浅野富恵	跡部麻由子	安部智恵子	天野佐知子	池田きよ子
石井弘道	石原 茜	稲垣調子	井上のり子	岩石文江	榎本喜代子
加藤真己	加藤百合子	川口シゲ子	木村泰美	齋持富枝	後藤輝乃
酒井敦子	酒井春江	佐藤静枝	佐藤容子	柴田圭子	白井温子
特野絵里	杉山すず代	鈴木記代	高田清子	竹中比呂美	辻澤久江
中川里美	長澤つた恵	夏目景五	橋戸明子	早瀬容子	平井豊子
望月澄子	脇田千晶				

# 遺物觀察表

第56表 1区 土器觀察表

番号	器形	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	文様・調整等の特徴	胎土・焼成・色調	備考	
1 1-1264	弥生壺	28層 E9N	口径 底径 高さ 厚度	8.3 (28.5) 20.8 6.0	肩部がやや張る算葉五状の胸部に受け口状の口縁部。底部は厚く突出する。	腹部から胴上半部に5条1厘位の横筋きず。底部に木炭痕。	胎土 黒色粒子を含む。 焼成 色調 灰白色	2/3残存。
2 1-1159	弥生壺	28層 E9N	底径	7.4	やや外側に張り出す厚い底部。	底部立ち上がり高いタテハケ (3厘/ cm)。底部に木炭痕。	胎土 砂粒・小石を多く含む。 焼成 色調 淡黄褐色 内面 淡白色	底部一部欠損。
3 1-1183	弥生壺	28層 F11N	底径	7.0	平底のやや薄い底部から直線的に胸部に斜く。	内面に腹巻状の低いハケ。裏面ナデか。	胎土 小石・砂粒を多く含む。 焼成 色調 青褐色 内面 黄灰色	底部完形。
4 1-1162	土師壺	22層 E9N SK12205	口径 (20.5)	直線気味に外に広がる複合口縁。底部はやや太く緩やかに屈曲する。	口縁に単位不明の腹巻波状文。外面部にヨコハケ (8条/cm)。後部にヨコハケ (8条/cm)。	胎土 砂粒を含む。 焼成 色調 にない褐色	口縁部1/4強残存。	
5 1-1166	弥生壺	20層 F8N SK12205	口径 (19.0)	張りのあおり入りたくない口部から緩やかに外反する口縁。	外面部横筋ナメハケ (7条/cm)。底部ヨコハケ (7条/cm)。内面ヨコハケ (7条/cm)。内面底部により調整不良。一部にヨコハケ後退。	胎土 長石・砂粒・赤色粒子を含む。 焼成 色調 にない赤褐色 内面 灰褐色	口縁部1/10残存。	
6 1-737	弥生壺	22層 F8N SK12202	底径 (9.0)	やや外に張り出す薄い底部。肩部は大きく外方に開く。	摩滅により内外面ともに調整不明。	胎土 砂粒・長石を多く含む。 焼成 色調 反黄褐色	底部1/3残存。	
7 1-779	弥生壺	22層 F10N SK12204	底径 (7.6)	やや厚みのある半球の底部。	摩滅により内外面ともに調整不明。	胎土 砂粒・長石を多く含む。 焼成 色調 青褐色	底部1/4残存。	
8 1-873	土師壺	22層 G8S	口径 (19.4)	幅広い薄い粘土帯を張り付けた大きく外反する折下返し口縁。	口端部ナデ。外面部口縁部にナメハケ。内面底部にヨコハケ。摩滅により調整不鮮明。	胎土 砂粒・長石・赤色粒子を含む。 焼成 色調 やや軟褐色 内面 明黄褐色	口縁～頸部1/4弱残存。	
9 1-638	土師壺	22層 G8N	口径 (13.2)	紙やかに内向する受け口氣味の口縁部。	摩滅により内外面ともに調整不明。	胎土 長石・砂粒を含む。 焼成 色調 外表面 内面 にない褐色	口縁1/7残存。	
10 1-1208	弥生壺	22層 G8S	胸径 12.5 底径 4.9	肩がやや張り、肩下部に最大径を持ち、腰やかな腹をなす。底部は上げ底状。	外面部唇部上～中段タテヘラミガキ。下位ヨコラミガキ。内面底部に指捺压痕。	胎土 黑褐色・砂粒・長石・赤色粒子を含む。 焼成 色調 外表面 黑褐色 内面 黑褐色	肩部～底部はぼ完形。	
11 1-781	土師壺	22層 G10S	底径 (10.6)	やや外に張る底部から直線的に斜く肩部。開きは小さい。	外面部ナメハケ、下部タテハケ後退ナデ。底部裏面木炭痕。	胎土 砂粒・長石・赤色粒子を含む。 焼成 色調 やや硬褐色 内面 にない褐色	底部1/3残存。	
12 1-537	小型丸底土器	20層 F8N	口径 12.0 底径 6.0 厚度 2.65	やや直線的に立ち上がる深い肩部に内向気味に広がる口縁部。底部の経年は濃い。底部は上げ底状に跡む。	口縫部ナデ。口縁内外面ともにナメハケ (8条/cm)。底部摩滅により調整不良。一部ナメハケ。	胎土 砂粒・小石・赤色粒子を多く含む。 焼成 色調 内面 にない黄褐色	口縫部2/3残存。	
13 1-544	土師壺	20層 G9S	口径 (17.0)	やや外反気味に広がる口縁部、中央で厚味が増す。	口縫部ナデ。外面部摩滅により調査不鮮明。内面ヨコハケ (5条/cm)。	胎土 砂粒・小石を多く含む。 焼成 色調 やや软褐色 内面 にない褐色	口縫部約1/10残存。	
14 1-559	須恵壺	20層 G9S	底径 4.3	底部はやや厚みを持って作り出され、内向気味に立ち上がる。	底部糸切り未調整。	胎土 白色粒子・砂粒を含む。 焼成 色調 やや软灰白色	底部一部欠損。	
15 1-558	土師壺	20層 G9S	口径 (23.6)	底部から水平方向に屈曲し、口縫部はつまみ上げられ、丸く收める。	内外面ともにナデ。	胎土 黑褐色・赤色粒子・砂粒を含む。 焼成 色調 やや硬褐色 内面 にない黄褐色	口縫部約1/5残存。内外面にスズ付着。	
16 1-572	手盤ね土壺	20層 F10N SR12001 右岸	口径 6.0 基盤高 2.1	弧形を呈しており、底部は丸く不安定。	内外面は不整形で凹凸が大きい。	胎土 赤色粒子・砂粒を含む。 焼成 色調 軟黄褐色	完形品。	
17 1-594	土師壺	20層 F9S SR12001	口径 (15.3)	腰やかに屈曲し、底上気味に立ち上がる口縁部。	外面部摩滅により調整不明。内面板ナデ。	胎土 長石・砂粒を含む。 焼成 色調 やや良 内面 黄褐色 外表面 黑褐色	口縫部約1/8残存。	

番号	断面	出土地点	法量 (ca)	形態の特徴	文様・調整等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
22 1-625	土輪环	20層 F10N SR12001	底径 ( 7.1 )	箱形を呈す环の底部。(取束环)	内面摩滅により調整不明。外面ヨコヘラミガキ。	胎土 黒母・砂粒・白色 粒子を含む。 焼成 普通 青白	底部1/4残存。
23 1-594 ②	土輪环	20層 F10N SR12001	底径 ( 8.1 )	箱形を呈す环の底部。(取束环)	底面内面に放射状の擦痕。脚部タマヘラミガキ。外面ヨコヘラミガキ。	胎土 黒母・砂粒・白色 粒子を含む。 焼成 普通 灰白色	底部1/4残存。
24 1-597	須恵环	19層 E9S	口径 ( 14.3 ) 高さ 底径 6.0	平底の底部から内面気味に立ち上がり口縁部を大きく外反させる。	ノク目が明瞭に残る。底部回転糸切り未調整。	胎土 長石・砂粒を含む。 焼成 普通 灰白色	口縁部2/5残存。 底部完形。
25 1-528	灰釉大碗	19層 G8N	口径 ( 19.0 )	内面気味に立ち上がる脚部から口縁部を外側に引き出す。口縁部内面には波が作られる。	回転ナデ。掛け掛け施釉。	胎土 長石・砂粒を含む。 焼成 普通 灰白色	口縁部1/5残存。
26 1-536	灰釉碗	19層 G7N	底径 ( 7.0 )	やや外に開く先端部の丸い高台から内面気味に立ち上がる脚部。	底部ナデ。	胎土 長石・黒色粒子を含む。 焼成 普通 灰白色	底部1/4残存。
27 1-189	須恵环	18層 G9S	底径 ( 14.8 )	低い断面四角形の高台から腰やかに回曲し、直線的に立ち上がる脚部。	回転ナデ。	胎土 長石・黒色粒子・ 砂粒を含む。 焼成 普通 灰白色	底部1/4残存。 底部内面に自然釉。
28 1-175	大平鉢	18層 F9S	口径 ( 26.0 )	円錐状の脚部から口縁部を外側に引き出し丸く收める。	回転ナデ、外面ノタ目未調整。	胎土 長石・黒色粒子・ 砂粒を含む。 焼成 普通 灰白色	口縁部1/9残存。
29 1-274	灰釉碗	17b層 E10S	口径 ( 17.4 ) 高さ 底径 ( 7.0 )	外に開く脚部が平坦な高台に内面で立て立たせる脚部。底部は外に引き出し腰をまつ。	外面ノタ目が残る。底部糸切り後ナデ。	胎土 長石・黒色粒子・ 砂粒を含む。 焼成 普通 灰白色	口縁部1/10、底 部1/2残存。
30 1-354	灰釉碗	17b層 E10N	口径 ( 16.0 )	済めの半球状の脚部から若干外反する口縁部は腰を丸く膨らめ、内面に波が付く。	外面ノタ目未調整。	胎土 黒色粒子・長石を含む。 焼成 普通 灰白色	口縁部約1/4残存。 外側に一部スズ付。
31 1-249	灰釉碗	17b層 E10S	口径 ( 14.0 )	内面気味に立ち上がる脚部から口縁部を外側に引き出し丸く收める。	外面ノタ目未調整。	胎土 長石・黒色粒子・ 砂粒を含む。 焼成 普通 灰白色	口縁部約1/6残存。 内面に自然釉。
32 1-234	灰釉碗	17b層 E11N	口径 ( 17.0 )	直線状脚部に立ち上がる脚部から大きく外反する口縁部。	外面ノタ目未調整。	胎土 黒色粒子・砂粒・ 長石を含む。 焼成 普通 灰白色	口縁部約1/7残存。
33 1-333	灰釉碗	17b層 E10N	底径 ( 8.8 )	やや外に張る三角形高台。脚部は内面気味に立ち上がる。	底部糸切り後ナデ。体部回転ナデ、外面ノタ目が残る。	胎土 長石・砂粒・小石 を含む。 焼成 普通 灰白色	底部2/5残存。 頂部被成形。 内面に自然釉。
34 1-226	灰釉碗	17b層 E10S	底径 ( 6.2 )	脚部が丸く断面が長円形に近い高台。脚部内面気味に立ち上がる。	体部回転ナデ。底部ナデ。	胎土 長石・砂粒を含む。 焼成 普通 灰白色	底部一部欠損。 頂部被成形。 内面に自然釉。
35 1-266	灰釉碗	17b層 E10S	底径 ( 6.2 )	脚部を丸く収め張り出す高台。脚部は内面気味に立ち上がる。	底部ナデ。	胎土 黒色粒子・長石・ 砂粒を含む。 焼成 普通 灰白色	底部1/2残存。 重ね被成形。
36 1-449	灰釉碗	17b層 E11N	底径 ( 6.8 )	三日月形に近い新面三角形の低い高台。脚部は内面気味に立ち上がる。	体部回転ナデ、底部ナデ。	胎土 黒色粒子・長石・ 砂粒を含む。 焼成 普通 灰白色	底部1/4残存。
37 1-262	灰釉碗	17b層 E10S	底径 ( 7.4 )	端部をやや丸める三角形高台。脚部はやや内面気味に立ち上がる。	底部糸切り、接合部ナデ。	胎土 長石・黒色粒子・ 砂粒を含む。 焼成 普通 灰白色	底部1/3残存。 重ね被成形。 内面に自然釉。
38 1-282	山茶碗	17b層 E10S	口径 ( 15.6 ) 高さ 底径 ( 6.7 )	やや外側に張り出す長方形の高台。脚部は内面気味に立ち上がる。	体部回転ナデ、底部糸切り後ナデ。	胎土 小石・長石・黒色 粒子を含む。 焼成 普通 灰白色	口縁部～脚部約 2/3残存。 口縁部に降灰。
39 1-251	山茶碗	17b層 E10S	口径 ( 15.6 )	内側に立ち上がる脚部から腰やかに外反する口縁部。	回転ナデ。	胎土 砂粒・長石を含む。 焼成 普通 灰白色	口縁部1/5残存。
40 1-261	山茶碗	17b層 E10S	口径 ( 17.0 )	やや内面気味に立ち上がる脚部から、口縁部を若干引き出す。	回転ナデ。外面わずかにノタ目 が残る。	胎土 長石・砂粒を含む。 焼成 普通 灰白色	口縁部1/6残存。

番号	器形	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	文様・調査等の特徴	胎土・施成・色調	備考
41 1-232	山茶碗	17b層 E11S	口径 (18.6)	半球状に立ち上がる脚部から口縁部を引き出し丸く収める。	外面ノタ目未調査。	胎土 白色粒子・砂粒を含む。 焼成 色調 灰色	口縁部1/5残存。 内面自然釉。
42 1-233	山茶碗	17b層 D10N	口径 (16.7)	半球状に立ち上がる脚部とやや外反する口縁部。	外面ノタ目未調査。	胎土 白色粒子・砂粒を含む。 焼成 色調 灰色	口縁部1/8残存。 内面自然釉。
43 1-268	山茶碗	17b層 E10S	底径 (8.1)	縦筋が丸柱を帯びた断面長方形状に丸い高台。脚部は内周気味に立ち上がる。	底部余切り痕。接合部ナデ。	胎土 基石・白色粒子・砂粒を含む。 焼成 色調 普通灰オリーブ色	底部1/4残存。 重ね燒成。 内面自然釉。
44 1-264	小碗	17b層 E10S	口径 (9.2) 底径 (8.8) 底深 (5.0)	形の割れた断面長方形状の高台から中腹まで月桂枝紋と立ち上がり、その腰内周気味に口縁部を丸く收める。	底部ナデ。脚下部にヘラによる削痕。口縁部は外側よりナデ。	胎土 長石・白色粒子・砂粒を含む。 焼成 色調 灰色	1/2残存。 内面自然釉。
45 1-198	小碗	17b層 E11N	口径 (8.3) 底径 (8.0) 底深 (3.8)	断面長方形状の高台から脚中央部でやわらかに屈曲し、内周気味に立ち上がる。	体部回転ナデ、底部ナデ。	胎土 長石・白色粒子・砂粒を含む。 焼成 色調 灰色	口縁部1/8、底 部1/3残存。 重ね燒成。 内面に焼灰。
46 1-280	小碗	17b層 D10N	口径 (10.5) 底径 (9.2) 底深 (4.9)	縦筋が丸柱を帯びた内側にやわらかに屈曲しながら、内周気味に立ち上がる。	体部回転ナデ、底部ナデ。	胎土 長石・黑色粒子・砂粒を含む。 焼成 色調 灰色	1/3残存。 外側スッキ付。
47 1-270	小碗	17b層 E10S	口径 (9.7) 底径 (8.1) 底深 (4.7)	縦筋が丸く仄められた三角形高台。脚部は中腹で腰内周気味に立ち上がる。	体部回転ナデ、底部ナデ。	胎土 長石・砂粒・黑色 粒子を含む。 焼成 色調 灰白色	約1/3残存。 重ね燒成。 内面に自然釉。
48 1-481	小碗	17b層 E9N	口径 (9.5) 底径 (8.9) 底深 (4.3)	縦筋が丸柱を帯びた断面、逆台形に近い高台。脚部は中腹で腰内周気味に立ちながら、外反気味に立ち上がる。	体部回転ナデ。	胎土 砂粒・黑色粒子を含む。 焼成 色調 灰白色	一部欠損。 重ね燒成。 内面に自然釉。
49 1-475	小碗	17b層 E11N	口径 (9.7) 底径 (8.6) 底深 (4.8)	紙つぶれな三角形高台。脚部は中腹で腰内周気味に立ち上がる。	体部回転ナデ。ノタ目が残る。 底部回転余切り痕。接合部ナデ。	胎土 多量の黑色粒子・ 長石を含む。 焼成 色調 灰色	口縁部1/8残存。 底部少欠損。 重ね燒成。 内面に焼灰。
50 1-411	小碗	17b層 E9S	口径 (9.5) 底径 (8.9) 底深 (4.8)	縦筋が丸く仄められた三角形高台。脚部は中腹で腰内周気味に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。	外面ノタ目未調査、高台部接合部は無難なナデ。	胎土 長石・砂粒を含む。 焼成 色調 灰白色	1/4残存。
51 1-297	小碗	17b層 E10S	口径 (10.4)	外周気味の脚部は中腹で腰内周気味に立ち、口縁部は厚く、やや内周し丸く收める。	外面ノタ目未調査。	胎土 黑色粒子・長石・ 砂粒を含む。 焼成 色調 灰色	口縁部1/4残存。 内面に焼灰。
52 1-288	小碗	17b層 E11N	底径 (4.4)	先端がや丸く作られた三角形高台。	底部ナデ。	胎土 長石・黑色粒子を含む。 焼成 色調 灰白色	底部1/2残存。
53 1-941	大平鉢	17b層 E10N	口径 (22.6)	内周気味に立ち上がる脚部から口縁部はやや外反して丸く收める。	外面ノタ目未調査。	胎土 長石・黑色粒子を含む。 焼成 色調 灰色	口縁部1/2残存。 内面に焼灰。
54 1-358	大平鉢	17b層 E10N	底径 (11.4)	縦筋が丸くやや内周気味の高台。脚部は直線的に立ち上がる。	体部下半回転ヘラ削り。	胎土 長石・黑色粒子を含む。 焼成 色調 灰色	底部1/3残存。
55 1-389	經物碗	17a層 F10S	底径 (6.4)	高台はわざず外に丸く、小さな西角形を呈す。	底部回転ヘラ削り。高台裏面に芯棒状の強いナデ。	胎土 長石・黑色粒子・ 砂粒を含む。 焼成 色調 明緑灰色	底部1/2残存。
56 1-130	山茶碗	17a層 F10S	口径 (12.7)	腰やかに内周せし脚部、丸く收める口縁部の外反は小さい。	回転ナデ。外面ノタ目が残る。	胎土 黑色粒子・長石を含む。 焼成 色調 灰白色	口縁部約1/12残存。
57 1-161	土師壺	17a層 F10N	底径 6.4	低くつぶれた丸い高台部。	底部回転余切り後ナデ。発達に より不明瞭。	胎土 砂粒・石英を含む。 焼成 色調 淡青橙色	底部一部欠損。
58 1-137	白磁碗	17a層 F10S	口径 (17.1)	腰やかに内周気味に立ち上がる脚部、脚部から口縁部のみ外側に引き出しあく收める。	外面に壓押し運弁文。	胎土 若干の砂粒を含む。 焼成 色調 灰白色	口縁部1/4残存。
59 1-196	土師壺	17a層 F10N	口径 (21.0)	丸柱を帯びた脚部。口縁部は断面三角形を呈するが、頂部は丸柱を持ち、口縁部付近で瘤みを有する。	内外面ともに丁寧なナデ。口縁部上面は指輪圧により形成。	胎土 長石・砂粒・雲母・ 石英を含む。 焼成 色調 外面 内面に よい褐色 褐綠色	口縁部1/6残存。

番号	地形	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	文様・調査等の特徴	地土・焼成・色調	備考
60 1-514	灰陶塊	17層 SH111701 SF31	底径 7.2	体部は漸く内側突出して立ち上がる。高台は今や肉厚の三角形。	回転ナデ、外面ノタ目が残る。 底部余切り未調査。	胎土 焼成 色調 長石・砂粒を含む。 灰色	底部完形。内面 にねじれ成形。 墨書き「前」
61 1-20②	灰陶塊	16層 F11N	口径 (18.0)	直線的に立ち上がる脚部から、わずかに口縁部を外側に引き出し丸く收める。	外面ノタ目が明瞭に残る。	胎土 焼成 色調 長石・砂粒を若干 含む。 灰色	口縁部1/8残存。
62 1-78	山茶碗	16層 F10S	口径 (15.6)	半球状に立ち上がる脚部、口縁部の引き出しは小さい。	外面ノタ目が明瞭に残る。	胎土 焼成 色調 長石・砂粒を含む。 黄灰色	口縁部1/7残存。
63 1-20①	山茶碗	16層 E11N	口径 (16.0)	内側で立ち上がる脚部から、小さく口縁部を外に引き出す。唇壁はやや高い。	回転ナデ。	胎土 焼成 色調 長石・砂粒を若干 含む。	口縁部1/1残存。 内面とも自然角。 陶灰。
64 1-124	山茶碗	16層 P6N	口径 (15.0)	直線気味に立ち上がる脚部、口縁部の引き出しは非常に小さい。	外面ノタ目が明瞭に残る。	胎土 焼成 色調 長石・砂粒を若干 含む。 灰白色	口縁部1/1残存。 内面に陶灰。
65 1-47	灰陶塊	16層 E10N	底径 ( 7.0 )	底部が丸柱を帯びた三角形高台。脚部下位は直線的に立ち上がり、途中で緩やかに屈曲する。	体部回転ナデ、ノタ目が残る。 底部ナデ。	胎土 焼成 色調 長石・黒色粒子を若干 含む。	底部1/2残存。
66 1-44	小碗	16層 E11N	底径 ( 4.9 )	底部が丸い三角形高台。	底部余切り後ナデ。	胎土 焼成 色調 長石・黒色粒子を 含む。	底部1/3残存。
67 1-38	青磁碗	16層 E9N	口径 (15.0)	直線的に立ち上がり、口縁部のみわずかに外に開く。	内面にヘラ括き文。	胎土 焼成 色調 若干の白色粒子を 含む。	口縁部1/3残存。
68 1-33	灰陶塊	13層 E11N	口径 (14.0)	口張り状に立ち上がる脚部から、わずかに外に引き出し、内側に丸く收める。	回転ナデ、外面ノタ目が明瞭 に残る。	胎土 焼成 色調 長石・黒色粒子・ 砂粒を含む。	口縁部1/12残存。
70 1-28	小碗	13層 F10S	口径 (10.0)	裏や内側する脚部、口縁部はわずかに外に引き出し、厚厚する。	回転ナデ、外面ノタ目が残る。	胎土 焼成 色調 長石・砂粒を含む。 灰灰色	口縁部1/7残存。
71 1-25	山茶碗	13層 D10N	底径 6.6	相平なやや丸味を帯びた四角形を呈する高台。	底部余切り後ナデ。高台裏面に 粉状。	胎土 焼成 色調 長石・砂粒・石粒 を含む。	底部5/6残存。
72 1-24	山茶碗	13層 F11S	底径 ( 6.8 )	やや相平な四角形を呈する高台。	切り離しは摩滅により不明。接合部ナデ。	胎土 焼成 色調 長石・石英・砂粒 を含む。	底部1/4残存。
73 1-16	青磁碗	10層 E10N	口径 (15.0)	直線的に立ち上がる脚部、口縁部は丸く收められる。	不明瞭だが、外面にヘラ括によ る墨弁文。	胎土 焼成 色調 白色粒子を含む。 灰白色	口縁部1/7残存。
74 1-10	灰陶塊	3層	底径 6.6	脚部の丸い四角形を呈した高台、脚部は直線的に立ち上がる。	摩滅により不鮮明だが、系切り 後ナデ。	胎土 焼成 色調 長石・黒色粒子・ 砂粒を含む。	底部3/4残存。 重ね焼成灰。
76 1-500	須恵塊	SR1-01	底径 ( 7.9 )	やや丸味を帯びた外に広がる階型の环部、前面四角形の高台は やや外に偏る。	内外面ともにノタ目が残る。	胎土 焼成 色調 長石・砂粒を含む。	底部1/9残存。
77 1-67	灰陶塊	SR1-01	底径 ( 8.4 )	やや外側に張り出す断面四角形の高台。	底部余切り後、接合部ナデ。	胎土 焼成 色調 長石・黒色粒子・ 砂粒を含む。	底部1/2残存。
78 1-11①	山茶碗	SR1-01	底径 6.1	相平な底くざれた高台、脚部は 直線気味に立ち上がる。	摩滅により不明。底部ナデか。	胎土 焼成 色調 長石・黒色粒子・ 砂粒を含む。	底一部欠損。
79 1-11②	青磁碗	SR1-01	口径 ( 9.4 )	内側突出して立ち上がる脚部、口 縁部は鏡状に水平に引き出さ れる。	壓押し運弁文。	胎土 焼成 色調 白色粒子を含む。 オーリーブ灰色	口縁部1/7残存。
81 1-1168	土師壺	SR1-01	底径 ( 8.6 )	やや外反気味に聞く台形の脚部。	外面ナメハケが一部残るが、 摩滅により不明。	胎土 焼成 色調 長石・砂粒・赤色 粒子を含む。	脚部1/3残存。 やや歿 外側 内面 にぼい複色

第56表 2・3区土器観察表

番号	器形	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	文様・調査等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
8 2-3-598	弥生壺	16層 D18S SD21601	口径 9.6	やや細目の纏目から直線気味に外方に続く口縁部。	口縁部は面取り後裏文 (LR) と内側とも厚薄により詳細不明だが、外面へラミガキの跡跡、内面指頭痕が残る。	胎土 砂粒・石粒を非常に多く含む。 焼成 普通 色調 黄褐色	口縁部完形。
9 2-3-608	弥生壺	16層 E18S	口径 (12.9)	大きく外反する單純口縁。	口縫部を取り、内外面ともに摩滅により調査不明。	胎土 赤色粒子・砂粒を多く含む。 焼成 普通 色調 黄褐色	口縁部L/5残存。
10 2-3-603	弥生壺	16層 E20S	底径 (7.4)	やや外側に張り出す平底の底部から内側気味に立ち上がる唇部、鋸歯の少ない縁部から縦やかなカーブを描きながら細目で纏目。	内外面ともに摩滅・剥離が著しく調査不明。外面上にハケがわずかに残る。	胎土 石粒・砂粒を非常に多く含む。 焼成 普通 色調 に似た黄褐色	縁部L/2残存。
11 2-3-609	弥生壺	16層 C20S	底径 (8.6)	若干上げ底気味の厚く突出した底部。	底部輪郭へ臺面丁寧なナテ。外面裏面テクハケ (4条/cm)。内面裏面により調査不明。	胎土 砂粒・石粒・赤色粒子を多く含む。 焼成 普通 色調 に似た黄褐色	底部L/2残存。
12 2-3-602	弥生壺	16層 E21S	底径 (7.3)	厚く突出する底部から緩やかに外反して立ち上がる唇部。	全体裏面により細目調査不明。外面上テクハケ (7条/cm) の調査。	胎土 砂粒・石粒・赤色粒子を多く含む。 焼成 普通 色調 黄褐色	底部L/3残存。底部裏面に材辻窓あり。
13 2-3-602 (2)	弥生壺	16層 E21S	底径 (7.8)	外に張り出す深く突出した底部。	内外面ともに摩滅・剥離により調査不明。外面上ヨコハケ。	胎土 砂粒・石粒を多量に含む。 焼成 普通 色調 に似た黄褐色	底部L/2残存。
14 2-3-591	弥生壺	14層 E18N SK21401	胸径 (16.6) 底径 (7.8)	底部から直線的に立ち上がった胸部は下段で狭い縁を持ち半球状の胸上半部は鋸歯。肩部は短く、口縫部は大きく外方に開く。	縁部6条1単位の繩描き波状文3段、口部に5個単位の円滑文が施され、口縫部へ強めのテクハケ (4条/cm)。内面裏面不規則なテクハケ (7条/cm)。下位2層はヨコハケ (6条/cm)。内面裏面へ縦感ナメハケ、胸下位へ底部ヨコハケ、胸中位ナメハケ。口縫部へ胸上半赤彩、底部裏面素面。	胎土 長石・砂粒・赤色粒子を含む。 焼成 普通 色調 に似た橙色	口縫部欠損。 1/2残存。
15 2-3-595	弥生壺	14層 E17N SK21402	底径 (6.8)	やや上げ底部から直線的に立ち上がる唇部。	内外面ともに剥離により、細目調査。外面上テクハケ (6条/cm) 残存。内面ヨコハケ (6条/cm) 残存。	胎土 長石・砂粒を含む。 焼成 外面 色調 黄褐色 内面 黄灰 (2cm)	底部L/3残存。
16 2-3-567	土師壺	12層 F14S SK21201	口径 (11.4)	器壁の薄い大きく外反する單純口縁。	内外面にハケが認められるが、摩滅により詳細不明。	胎土 長石・砂粒を含む。 焼成 普通 色調 黄褐色	口縫部L/3残存。
17 2-3-568	弥生壺	12層 F14S SK21201	底径 (8.8)	平底の薄い底部から直線的に立ち上がる唇部。	外面裏面により調査不明。内面胸部付近の短いヨコハケ (7条/cm)。	胎土 長石・石英・砂粒を含む。 焼成 普通 色調 浅黄色 内面 黑色	底部L/2残存。
18 2-3-508	弥生壺	12層 D22	底径 (5.4)	やや厚く突出した底部から直線的に外方に立ち上がる唇部。	底部裏面、外面ともにナデ、外面上に指頭痕が認められる。胸下位3条1単位テクハケ (5条/cm)、内面裏面ヨコハケ (5条/cm)、そのほかヨココナズ。	胎土 長石・石英・砂粒を含む。 焼成 普通 色調 底部 内面 黑色	底部ほぼ光沢。
19 2-3-572	土師壺	12層 C15S	胸径 9.3	胸部下位に最大幅を持つ、丈の短い扁平な葵花形。	外面上位へ中位ナメハケ (5条/cm)、中位ヨココナズ。内面ヨコハケ (5条/cm)、そのほかヨココナズ。	胎土 長石・砂粒を含む。 焼成 普通 色調 黄褐色	胸部L/2残存。
21 2-3-471	土師甕	12層 B18N	口径 15.8 高さ 26.5 胸径 (22.4) 底径 9.8	S字状口縁付甕。口縫部は若干厚化する。胸部上半部は最大径を持ち、やや内側膨らみにせず、口縫部へ厚化する。胸下位は幅が狭く、厚い。	胸部に平行難文。脚部外側のナメハケ (5条/cm) はほどなく、内面裏面へヨコハケ (5条/cm)。脚部は上位にナメハケ (5条/cm) が残るが、内面ともにナデ。	胎土 長石・砂粒・赤色粒子を含む。 焼成 普通 色調 黄褐色	口縫部L/2残存。
22 2-3-534 (1)	土師高环	10層 D19S SR21001	口径 17.5 高さ 15.1 胸径 26.5 底径 12.5	環部下位の明瞭な縦から大きく外反して立ち上がる。脚部は堅やかな膨らみを持ち内側膨らみに厚い脚部は大きく屈曲して瓶部に続く。	環部及び底部ナメハケ。脚部外側に工具によるケズリ。内面ヘラバツリ。	胎土 砂粒・石粒・赤色粒子を含む。 焼成 普通 色調 黄褐色	脚部一部欠損。
23 2-3-550	土師高环	10層 D18S SH21001	口径 17.8 高さ 12.9 底径 12.7	环部下位の後はやや弱く直線的に立ち上がる。脚部は堅やかな膨らみを持ちながら環部に至る。	环部及び底部ナメハケ。脚部外側カチラミガキの前跡が残るが摩滅により詳細不明。内面数ナメ。	胎土 砂粒・石粒・赤色粒子を含む。 焼成 普通 色調 黄褐色	口縫部・脚部一部欠損。
24 2-3-534	土師高环	10層 D18S SR21001	底径 11.6	堅やかな膨らみを持つ円柱状の脚部。	脚部外側テクハケラミガキ。内面砂粒色書き上げとしりぞり目。脚部内外面ともにナデ、接合部内外面ナメハケ、内面に粘土のはみ出し。	胎土 砂粒・石粒を含む。 焼成 普通 色調 黄褐色	脚部L/2残存。

番号	基形	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	文様・調整等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
25 2-3-603	土師高环	10層 E19N SR21001	底径 (12.8) 高さ (1.8)	やや外に開く円柱状の脚部。	脚部外面ナメハケ、内面ナメハケ、しぶり目。接合部～脚部ナメハケ。	胎土 砂粒・石粒・赤色 焼成 粒子を含む。 色調 淡黄 褐色	脚部1/4残存。
26 2-3-649	小型壺	10層 C19 SR21001	口径 (11.0) 脚径 (7.8)	半球状の脚部とやや内湾気味に開く口部。	外面部口縁ナメハケ、脚部ナメハケ (8条/cm)、内面部口縁ヨコハケ (8条/cm)、脚部～脚部ナメハケ。下位に指揮印。	胎土 砂粒を含む。 焼成 色 (やや灰) 外面部にいよいよ黄褐色 内面 明赤褐色	口縁部1/2・脚部1/4残存。
27 2-3-475	小型土器	10層 D19 SR21001	口径 9.2 腹高 12.1 脚径 14.0 底径 4.2	中位がやや膨る球状の脚部は下半が直線気味にすぼまる。口部側の開きは小さく直線的に伸びる。	外面部ともに摩滅により調整不易。	胎土 砂粒・石粒を非常 に多く含む。 焼成 やや灰 色調 褐色	脚部～脚部～ 腹欠損。
28 2-3-536	秀生高环	10層 D20S SR21001		直線的に外方に広く台形の脚部。	脚部上位に後藤模様文、施文後3ヶ所に円孔。外面部リミガキ、内面部上位ナメハケ、下位不定方向のハケメハケ (10条/cm)。	胎土 墓母・砂粒・赤色 粒子を含む。 焼成 色淡黄色	端部欠損。
29 2-3-481	小型器台	10層 E19N SR21001		直線的に外方に伸びる円錐形の脚部。	脚部3ヶ所に円孔。要受脚部に2ヶ、脚部から1ヶ所の穿孔。外面部ともに脚部不規則、外面部ハケの痕跡が残る。	胎土 雪母・長石・砂粒・ 赤色粒子を含む。 焼成 青褐色 黄色	端部欠損。
30 2-3-480	壺	10層 E19N SR21001	口径 (13.5)	直線的に立ち上がる口縁部、唇壁は薄い。	外面部ナメハケ、内面部ナメハケ。	胎土 砂粒・黑色粒子を 含む。 焼成 青褐色 灰黄色	口縁部1/4残存。
31 2-3-547 ①	壺	10層 C19S SR21001	脚径 14.0 底径 3.4	脚部中位で細い縦を持ち、小さな上げ足部の底部に缺く。胴半は球状を呈す。	外面部ともに5条1段位の削り工具によるハケ、外面部ナメハケ、内面部ヨコハケ。下位ナメハケ、中位に指揮印が明確に残る。	胎土 長石・砂粒・黒色 粒子を含む。 焼成 褐色	口縫部～脚部欠 損。脚部～底部 剥落。脚部外側下半 にスス付着。
32 2-3-488	土師壺	10層 B19N SR21001	脚径 (32.4)	球状の脚部から屈曲する口縁部は直線的に立ち上がる。	口縫部外縫いタケハケ (3条/cm) 後ナメハケ、内面部ナメハケ (3条/cm) 後ナメハケ。脚部内面ともに丁寧な手作。脚部外縫ハラミナメ、内面部ナメハケ (10条/cm) 後ナメハケ。	胎土 長石・赤色粒子・ 砂粒を含む。 焼成 やや灰 白色	脚部1/3残存。
33 2-3-534 ②	土師壺	10層 D19S SR21001	脚径 (35.7)	球状を呈する大型壺の脚部。	外縫は摩滅により不明瞭だが、周囲タケハケ、脚部ナメハラミガキ。内面部ヨコハケ (7条/cm)、11条/cm)、指揮印が認められる。	胎土 長石・赤色粒子・ 砂粒を含む。 焼成 やや良 白色	脚部1/2残存。
34 2-3-047 ①	土師壺	10層 B19N SR21001	腹高 (27.7) 底径 (6.2)	やや厚手の球状を呈す脚部。平底の底部にはほぼ垂直に突出している。	外縫ナメハケ (5条/cm)、内面部ナメハケ、底部に指揮印が残る。底部外縫ナメ。内面部ヨコハケ (6条/cm)。	胎土 長石・石英・砂粒 を含む。 焼成 にいよいよ褐色	脚部1/2・底部1/3残存。
35 2-3-609	土師壺	10層 E19S SR21001	口径 (12.6) 腹高 20.3 脚径 6.4	脚部中位で大きく張り出し、丸底の底部は直線的に傾く。丸底の底部はその字に大きく屈曲する。	口縫部内表面ともにナメハケ。脚部外縫ナメハケ (5条/cm)、内面部ナメハケ (10条/cm)、内面部ヨコハケ (10条/cm)、脚部ナメハケ、脚部は指揮印が残る。	胎土 砂粒・砂粒を多く 含む。 焼成 淡褐色	口縫部1/2残存。 脚部～脚部欠損。
36 2-3-501	土師壺	10層 C16N	口径 11.7 腹高 16.5 脚径 5.3	脚部上位に最大径を持つ長ねじ形の脚部、口縫部への粗部は頗る直線気味に立ち上がる。	口縫部外ナメハケ後ナメハケ、内面部ヨコハケ (5条/cm)、内面部外縫ともに脚部の長い不定方向のハケ (5条/cm)。	胎土 砂粒・石粒が多く 含む。 焼成 やや良 褐色	口縫部一部欠損。 脚部外縫にスス付着。
37 2-3-547 ②	土師壺	10層 C19S SR21001	底径 (9.3)	平坦な薄手底部から直線的に立ち上がる脚部。	底部ナメハケ。脚部不定方向のハケメ。	胎土 石粒・砂粒・長石 を含む。 焼成 淡褐色	底部1/6残存。 内面に炭化物付着。
38 2-3-470	土師高环	10層 F22S	口径 (16.4) 腹高 12.8 底径 (12.2)	環部下位の明瞭な腰から直線的に立ち上がる口縫部。脚部は腰やかな彫みを持ちながら外に広がり、大きく細曲して脚部へ続く。	環部脚部ナメハケ、外縫上位ヨコハケ、下位タケハケ、内面部ヨコハケ (4条/cm) 底部ナメハケ。脚部外縫により直線的。内面部は直線的でやや細く、内縫はヨコハケ (4条/cm)、外縫はヨコハケ (4条/cm)。	胎土 砂粒を多く含む。 焼成 普通 にいよいよ褐色	口縫部1/3・脚 部1/3残存。
39 2-3-147	土師高环	10層 F20S	口径 16.6 腹高 13.2	環部下位の腰は脱さを欠き、接合部から口縫部まで腰やかに伸びる。脚部は直線的に外に向く。	环部内面ともにハケ後ミガキ。脚部外縫により不明瞭だが、内縫はヨコハケ (4条/cm)、外縫はヨコハケ (4条/cm)。	胎土 砂粒・石粒・黒色 粒子を含む。 焼成 にいよいよ褐色	口縫部2/3残存。 脚部欠損。
40 2-3-538	土師壺	10層	口径 (20.4)	大きめ外反する複合口縫、頸部の脚部は大きい。	口縫部外ナメハケナメ、内面上部ヨコナメハケ、下位ナメハケ (12条/cm)。	胎土 砂粒・石粒・黒色 粒子を含む。 焼成 やや良 褐色	口縫部1/5残存。

番号	器形	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	文様・調整等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
41 2-3-472	土師壺	10層 E21S	口径 (11.0)	下位で若干断らしながら立ち上がる口縁部。	口縁部へ内面中位ヨコナデ。外面・内面に散板ナデ。腹部内面ヨコハケ。	胎土 砂粒・赤色粒子・長石を含む。 焼成 色調 やや良 偏灰色 褐色	口縁部2/5残存。
42 2-3-398	土師高环	9層 E18N SR20901	口径 17.6	环部下位に明瞭な縦を持ち外反気味に大きく外に向く。やや短かめの縦は腹へ向くに膨らみながら外に向いて伸びる。	全体に摩擦感が著しく評難不明。脚部等ナダ、脚部外側へラミガキ、内面にラケグリ。	胎土 砂粒・石粒・赤色粒子を含む。 焼成 色調 青透 にいり褐色	环部完形。脚部欠損。
43 2-3-397	土師壺	9層 D18S SR20901	口径 (11.1) 底径 16.9	中位に横縫を持つ。やや扁平な底の内縫は脚部。口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁部は腹を含む。	口縁部へ内面横縫。口縁部内面に縦ともにナダ。脚部外側ナメハケ。(6条/cm)、内面ヘラケグリ。	胎土 磨呂・長石・砂粒を含む。 焼成 色調 やや良 灰青褐色	口縁部1/2残存。 脚部一部欠損。
44 2-3-444 ②	土師高环	9層 F20S	口径 (17.0) 底高 16.2 底径 (13.2)	环部下位に明瞭な縦から脚部が大きく伸びる环部。脚部の縦は腹へ向くに膨らみながら伸びる。	环部外側ともにナダ。脚部内面に縦より、内面へ下位ヨコ方向へのラケグリ。脚部内外側ともにナダ。	胎土 砂粒・石粒を含む。 焼成 色調 良 にいり褐色	环部・脚部1/3 残存。
45 2-3-419 ②	土師高环	9層 E20N	口径 (16.6) 底高 16.4 底径 (12.0)	环部下位の縦から内湾気味に大きく外へ向く口縁部。脚部はやや短く、円錐状に伸びる。脚部と組紐は腹へ向く縦を以て統合する。	摩擦感が著しく調整不良。	胎土 砂粒・石粒を多く含む。 焼成 色調 良	环部・脚部1/3 残存。
46 2-3-381	土師高环	9層 E20	底径 (11.6)	腰やわらかな縫を持ち脚部は外に向いて伸び、脚部へはだらかに統合する。	脚部内面へラケグリ、ほかは摩擦により評難不明。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 黄褐色	脚部・脚部1/2 残存。
47 2-3-440 ⑥	土師壺	9層 F22S	口径 (18.0) 底径 15.4	外反気味に大きく外に向く二重口縁。脚部は中に張りを持つ偏平気味の球状を呈す。	口縁部上段ヨコナデ、下段ヨコナデ、外面直いタコハケ(6条/cm)、脚部ヨコハケ(6条/cm)、口縁部内面下段ヨコナデ、底ヨコハケ(6条/cm)。	胎土 砂粒・石粒を含む。 焼成 色調 やや良 灰黄色	脚部3/4残存。
48 2-3-375	土師壺	9層 E21	口径 (14.2)	やや内湾気味に外に向く草口縁。	脚部ナダ。その他の摩擦により不明。	胎土 砂粒・石粒を多く含む。 焼成 色調 やや不良 暗褐色	口縁部 残存。
49 2-3-432	土師壺	9層 E21N	口径 (15.0) 底高 16.0 脚径 13.0	最大気味に中央や下位に持つ縫。内面ヨコナデ。脚部は小さく直角気味に立ち上がる。	口縁部内面ハケナゲナダ。内面ヨコナデ。脚部ヨコハケ(6条/cm)及び散板ナダ、内面ナダ。	胎土 石粒・砂粒を含む。 焼成 色調 普通 にいり褐色	口縁部1/5残存。
50 2-3-426	壺	9層 F22S	口径 9.8 底高 14.8 脚径 (12.5) 底径 (3.8)	肩部から中位まで張りのある脚部は下位で小さくすさまじく縮む。脚部の縫は小さく、直角気味に立ち上がる。	口縁部内外ともにナダ。脚部外側ハケ板ナダ、内面ナダ。	胎土 長石・砂粒・石粒を含む。 焼成 色調 やや良 灰黄色	口縁部2/3・脚 部1/2残存。
51 2-3-442	土師壺	9層 F20S	口径 (20.4) 底高 21.5 脚径 21.5 底径 9.0	脚部は中位に最大縫を持ち状況を呈す。厚く重ねた広い粘土持縫は直角気味に立ち上がる。字の字に統合し、直角気味に外に向く。	口縁部ハケが一部認められるが、全体に摩擦感が強く外反調整不良。内面口縁部ナダ、脚部ヨコハケ(6条/cm)、ナメハケ(4条/cm)、ナダ。	胎土 赤色粒子・白色粒子・砂粒・黒色粒子を多く含む。 焼成 色調 やや良 灰白色	口縁部1/2残存。 脚部一部欠損。 底部完形。
52 2-3-424 ③	土師壺	9層 F21S	口径 22.3 底高 35.5 脚径 28.4 底径 9.1	中位に最大縫を持つ球状の脚部。大抵脚部は屈曲する。厚い粘土持縫を貼り付いた口縁部は直角気味に立ち上がる。	口縁部一部にハケが飛ぶが、外に走ることにナダ。外面は摩擦感で内面は脚部中央に直角に走る。	胎土 長石・黒色粒子・砂粒を含む。 焼成 色調 やや良 黄褐色	口縁部・脚部・ 底2/3残存。
53 2-3-396	土師壺	9層 F20S	口径 17.5 底高 30.6 脚径 27.3 底径 6.6	中位に張りを持つ球状の脚部。脚部は厚く垂直方向に突出する。口縁部は厚く作られ、屈屈して大きく屈曲し、外反気味に開く。	口縁部内外ともにヘラミガキ、内面にヨコハケ(4条/cm)、下位ナメハケ(4条/cm)。	胎土 石粒・砂粒を多く含む。 焼成 色調 やや良 褐色	口縁部・脚部一 部欠損。外面に スス付着。
54 2-3-434	土師壺	9層 F21	口径 16.1 底高 28.3 脚径 24.4 底径 7.3	中位に最大縫とする球状の脚部。脚部は外反気味に外に向くに立ち上がる。この字に通ずる口縁部は直角気味の段が折られ、直角的に外に向く。	口縁部外側ともにヨコナデ、脚部外側ヨコハケにより不明。内面ヨコハケ(6条/cm)後ナダ。	胎土 石粒・砂粒を非常に多く含む。 焼成 色調 普通 褐色	口縁部・底部完形。 脚部一部欠損。
55 2-3-400 ③	土師壺	9層 E21N	口径 37.2	中位に最大縫を持つ球状の脚部。脚部は外反気味に外に向くに立ち上がる。	口縫部内外ともにヨコナデ。脚部外側ヨコハケにより不明。内面ヨコハケ(6条/cm)後ナダ。	胎土 長石・黒色粒子・赤色粒子・砂粒を含む。 焼成 色調 やや良 灰白色	口縁部2/3残存。 脚部一部欠損。
56 2-3-441	土師壺	9層 F20S	口径 22.0	直角気味に立ち上がる折り返し口縁。	口縫部、口縫部内面ヨコナデ。折り返し部分指捺圧による成形後ヨコハケ。外反摩擦により不易。内面不規則のハケ(7条/cm)後ナダ。	胎土 黑色粒子・赤色粒子・砂粒を含む。 焼成 色調 やや良 褐色	口縫部完形。
57 2-3-443 ③	土師壺	9層 F20S	口径 16.1 底高 20.5 脚径 27.0 底径 3.5	脚部中位に最大縫を持つやすかな球形を呈す。口縁はくの字に屈曲し、直角的に立ち上がる。	口縫部内外ともにナダ。脚部外側にヨコハケ、下位にナメハケ(5条/cm)。内面ナダ。	胎土 石粒・砂粒を多く含む。 焼成 色調 やや良 褐色	口縫部・脚部一 部欠損。外面ス ス付着。

番号	器形	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	文様・調整等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
58 2-3-446	土師壺	9 番 F20S	口径 底高 肩幅 底径 13.3 18.8 17.9 5.2	肩部中央に最大縦張を持つが、肩の張りが小さく、上半部やかな立ち上がりに対する下半部はやや底付	内外面ともに摩擦により詳細不明。頭部内面ナデ、肩部内面ハケの痕跡。	胎土 石粒・砂粒・白色 粒子を多く含む。 焼成 普通 にぶい褐色	口縁部3/4残存。
59 2-3-417	土師壺	9 番 F20S	口径 肩幅 底径 (13.2) 17.6	肩部の張りが小さい球状の肩部。口縁部はくの字に屈曲し、やや外反気味に立ち上がる。	口縁部内外面ともにナデ。外面ナメハケ (7条/cm)、内面板ナデ。	胎土 石粒・黒色粒子を 含む。 焼成 普通 にぶい赤褐色	口縁部1/2残存。 外面ス付留。
60 2-3-440 ④	土師壺	9 番 F22S	口径 底高 肩幅 5.6	肩部中央の張りが小さく、下位底部は底部へ続く。外方	口縁部内外面ともにナデ。肩部外反気味により底部が狭めで、底部の底高はくの字で、外方への開きがない。	胎土 石粒・砂粒を含む。 焼成 普通 にぶい黄褐色	口縁部2/3残存。 外面ス付留。
61 2-3-460	土師壺	9 番 F22S	口径 肩幅 20.9	肩部中央の張りが小さい長球状を呈す。口縁部はくの字に屈曲し外方に開く。	口縁部内外ともにナデ。肩部外反気味により底部が狭めで、底部の底高はくの字で、外方への開きがない。	胎土 石粒・砂粒を含む。 焼成 普通 にぶい黄褐色	口縁部1/2、肩部 5.6/3残存。
62 2-3-440 ①	土師壺	9 番 F22S	口径 (16.0)	肩部から腰部にかけて球状しながら外反気味に開く。	口縁部内外面ともにナデ。肩部内面ともに板ナデ。	胎土 石粒・砂粒・ごく 少量の赤褐色を含む。 焼成 普通 にぶい褐色	口縁部1/4残存。 外面ス付留。
63 2-3-443 ①	土師壺	9 番 F20S	口径 肩幅 (15.6) 24.2	肩の張る球形の肩部。口縁部はくの字形に屈曲し、中位部やや厚みを持ち、端部を外に引き出し肥厚化する。	口縁部内外面ともにナデ。肩部外反気味ナデ、内面指捺により成形痕ナデ。	胎土 石粒・砂粒を含む。 焼成 普通 にぶい褐色	口縁部1/3残存。 外面ス付留。
64 2-3-450	土師壺	9 番 F20S	口径 肩幅 (17.1) (25.5)	肩部の張りが大きいやや偏平な肩部の肩部。口縁部はくの字形に屈曲し、中位部やや厚みを持ち、端部を外に引き出しているが、やや内向気味に外に向く。	口縁部。脚部内外面ともにナデ。肩部外反気味ナデ、内面指捺により詳細不明。	胎土 石粒・砂粒・多く 含む。 焼成 普通 赤褐色	口縁部1~肩部1/ 3残存。
65 2-3-464	土師壺	9 番 C17S	口径 (14.6)	肩部からくの字に屈曲して開く口縁部。	口縁部ナデ。口辺部タテハケ (4条/cm)、無部ナデ、肩部ナメハケ、内面ナメハケ、指捺痕が残る。	胎土 長石・砂粒・石粒 を多く含む。 焼成 普通 にぶい黄褐色	口縁部1/6残存。
66 2-3-399	小型壺	9 番 F21S	口径 底高 肩幅 8.6 8.8 8.8	肩部中央に最大縦張を持つ偏平な肩部。口縁部はくの字形に屈曲し、中位部やや厚みを持ち、端部を外に引き出しているが、やや内向気味に外に向く。	口縁部~肩部内外面ナメハケ後ヨコナデ、内面ヨコナデ。肩部外反気味ナデ、内面指捺により土粒のほり出しが認められる。内面ナデ。	胎土 砂粒・石粒を含む。 焼成 普通 にぶい褐色	口縁部一部欠損。
67 2-3-47	小型壺	9 番 E20S	肩幅 3.2	肩部中央が大きく張り出す偏平な球状の肩部、底部は若干程みを持つ。	外面ともに板ナデ。	胎土 砂粒・石粒を含む。 焼成 普通 にぶい褐色	肩部1/2残存。
68 2-3-149	小型壺	9 番 E20S	口径 肩高 肩幅 (9.1) 8.3 (9.1)	やや偏平の球状の肩部、短い口縁部はくの字に屈曲し、内向気味に立ち上がる。	肩部下半ヨコハケ (12条/cm)、肩部ナメハケ後ナデ。他は摩擦により不明。	胎土 砂粒・石粒を含む。 焼成 普通 やや良 赤褐色	口縁部、肩部一部 欠損。
69 2-3-424 ②	小型土器	9 番 F21S	口径 底高 肩幅 (4.2)	平坦な底部に直線気味に立ち上がる部分は上位で最も厚く、側面は丸く仕上げる。	外面ともに摩擦、摩滅により不明。内面に指捺痕が認められる。	胎土 石粒・白色 粒子を含む。 焼成 普通 にぶい黄褐色	1/4残存。
70 2-3-386 ①	土師鉢	9 番 E21N	口径 底高 肩幅 10.2 9.0 10.4 4.7	底部から張りの小さい腰部中央まで直線的に削り、口縁部までほぼ垂直に立ち上がる。	外反摩擦により調整不明。内面ナデ。	胎土 石粒を多く含む。 焼成 普通 やや良 褐色	口縁部一部欠損。
71 2-3-424 ①	土師壺	9 番 F21S	底径 (9.6)	直線的に外方へ大きく傾く筒形の肩部。座部は丸く仕上げる。	内外面ともに摩擦により調整不明。接合部内面にナデ。	胎土 砂粒・石粒・白色 粒子を含む。 焼成 普通 にぶい褐色	底部1/2残存。
72 2-420	土師壺	9 番 D20S	口径 (19.7)	直線的に外方に開き、底部内面を肥厚化させた口縁部。	口縁部直下棒工具によりナデ、内外面ともに板ナデ。	胎土 石粒・白色粒子を 含む。 焼成 普通 にぶい赤褐色	口縁部1/8残存。
73 3-54	土師壺	8 番 D20N	口径 (23.6)	くの字に屈曲し、外反気味に立ち上がる口縁部は内面を肥厚化させ、浅い凹線を有する。	肩部ナメハケ (10条/cm)、内面 面ヨコナデナグ、ヘラミガキ、 面ヨコハケ (10条/cm)。	胎土 石粒・白色粒子を 含む。 焼成 普通 にぶい赤褐色	口縁部1/4残存。
74 2-194	灰陶壺	6 番 D13N	口径 底高 4.4 5.3	二等辺三角形を呈す高台から腰部は直線気味に立ち上がり、肩部を丸く形成する。	底部ナデ。後づけ蓋輪。	胎土 砂粒・白色粒子を 含む。 焼成 普通 褐色	口縁部1/4残存。
75 3-40	灰陶壺	6 番 E16N	口径 肩幅 底径 14.2 5.6 6.6	やや外方に張る断面三角形の高台。肩部は直線気味に立ち上がり、口縁部を短く引き出す。	底部余切り木調節。接合部ナデ。	胎土 砂粒・石粒・白色 粒子を含む。 焼成 普通 褐色	口縁部3/4残存。

番号	器形	出土地点	法量 (cm)	形 塵 の 特徴	文様・調整等の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
76 2- 95	灰輪底	6層 D14S	口径 (17.3) 底径 ( 7.5)	輪部がない三角形高台。脚部下位で腰やかに屈曲しながら立ち上がり、口縁部を外に引き出し丸く收める。	底部余切り未調整。接合部ナダ。 ノタ目が明顯に残る。	胎土 白色粒子・石粒・白色粒子を含む。 焼成 やや灰 色調 灰白色	口縁部～底部 1/6残存。内面 に自然模。
77 2-107	灰輪底	6層 D13N	口径 (15.0) 最高 ( 6.5) 底径 ( 7.5)	輪部がない三角形高台。大きく内湾気味に立ち上がる深めの脚部から口縁部を外に引き出し丸く收める。	底部余切り未調整。接合部ナダ。 ノタ目が明顯に残る。	胎土 白色粒子・黒色粒 子・砂粒を含む。 焼成 やや灰 色調 灰白色	口縁部1/16・周 部～底部1/2残 存。
78 2-247	土師环	6層 C15N	口径 (10.4) 脚径 ( 4.1) 底径 ( 5.8)	平坦な底盤から直線的に立ち上がる脚部。腰時に立ち上がる脚部を外に引き出される。	口縁部ナダ。脚部外面へラケズ リ、内面ナダ。	胎土 白色粒子・砂粒を 含む。 焼成 やや灰 色調 灰黃褐色 内面 にぶい黄褐色	口縁～脚部1/10・ 底部1/2残存。
79 2-171	須恵器	6層 D16N SK20602	口径 (22.0)	やや外反気味に立ち上がる口縁部。口縁部は下位に引き延ばし、輪部は断面三角形の凸部が付けられる。	口縁部～脚部ナダ。脚部外面タ クタ目。	胎土 白色粒子・黒色粒 子を含む。 焼成 やや灰 色調 灰白色	口縁部～脚部 1/6残存。
80 2-154	小碗	5層 C13N	口径 (10.2) 最高 ( 3.5) 底径 ( 4.3)	横平した三角形高台。やや内湾気味に立ち上がる脚部から口縁部を引き出し丸く收める。	底部余切り未調整。外面ノタ目 が残る。	胎土 白色粒子・黒色粒 子を含む。 焼成 やや灰 色調 灰白色	口縁部1/3残存。
81 3- 10	土師高环	5層 F20S	底径 (14.0)	大きく外に広がる円錐形の脚部は鋲金して裾部に統く。	外表面ともに摩耗により調整不明。	胎土 白色粒子・赤色粒 子・砂粒を多く含む。 焼成 黄褐色 色調 黄褐色	脚部1/3残存。
82 2- 81	山茶碗	4層 E15N	底径 7.4	横平につぶれた台形を呈する高台。脚部は直線気味に立ち上がる。	底部余切り未調整。	胎土 白色粒子・砂粒・ 石粒を含む。 焼成 やや灰 色調 灰白色	底部完形。
83 2-147	山茶碗	4層 E13N	底径 ( 7.1)	横平につぶれた台形を呈する高台。	底部ナダ。高台裏面に捺压板。	胎土 白色粒子・黒色粒 子・石英を含む。 焼成 青褐色 色調 黑褐色 内面 灰白色	底部1/3残存。
84 2- 41	ミニチュ ア土器	4層 C16N	口径 3.9 最高 1.1 底径 2.3	浅い环状を呈す。平坦な底盤から内湾気味に立ち上がる。	底部余切り後一部ナダ。口縁部 ～脚部内外面ともにナダ。	胎土 白色粒子・黒色粒 子・石英を含む。 焼成 や 色調 白	完形品。
85 2- 29	青磁瓶	3層 C15 SK20302	口径 (15.3)	腰やかに内湾して立ち上がる脚部。口縁部はやや粗くつまみ出される。	壓押し運弁文。	胎土 白色粒子・黒色粒 子を含む。 焼成 緑 色調 オーラブ灰色	口縁部～脚部 1/6残存。
86 2- 21	灰釉瓶	3層 D14 SK20303	底径 ( 6.0)	やや内湾気味の長方形を呈する高台。脚部は内湾気味に立ち上 がる。	底部余切り未調整。爪形瓶が残 る。脚部外面ノタ目が残る。	胎土 白色粒子・黒色粒 子を含む。 焼成 灰 色調 灰白色	底部1/2残存。 重ね焼底原。

第57表 5区 土器銀密表

番号	巣形	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	文種・調査等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1 5-458	卵生巣	14層直上 F29 墓地内	口径 (21.0) 底径 (7.6)	下位で大きく張り出す無花果形を呈す剥型。	剥型外部不規定向けのケ (7条 /cm) 接合部、内面ヨコハケ (7条/ cm)、下位ナデ。腹部に木漏板。 剥型外部に錐痕有。	胎土 砂粒、赤色粒子、 白色粒子を含む。 焼成 外側 にない黄褐色 内面 暗灰色	頭部～底部1/2 頭部。剥型外部 赤色。
2 5-481	卵生巣	14層直上 F29 墓地内	口径 (8.6) 底径 (18.0)	中位に最大径を持つ長球状の剥 型。口縫部の開きは小さい。	頭部に化粧。頭部には次様によ る文様帶の区画が行われる。 頭部内部から外へ向いて、半球 形の内壁に剥離した剥離部は半球 形による剥離部が形成する。頭部 内壁にヨコハケ (7条/cm)、下位ナ デ、内面ヨコハケ (7条/cm)、 内面ヨコハケにヨコハケ (7条/ cm)。	胎土 砂粒、赤色粒子、 白色粒子を含む。 焼成 外側 に不含 内面 浅褐色	口縫部～頭部一 筋灰。頭部1/2残存。
3 5-480	卵生巣	14層直上 F29 墓地内	口径 (9.2) 底径 (21.0)	下位が大きく張り出す無花果形 の剥型。頭部のくびれは小さく、 頭部は直線気味に外へ開く。	頭部～頭中にかけて5条単位の 剥離部を複数枚を重ね配置し、 その後の1/2腰による日本の籠目 が施される。口縫部ナデ、頭 部～頭中にヨコハケ (6条/ cm)、下位ナデ。内面ナデ。	胎土 砂粒、赤色粒子、 白色粒子を含む。 焼成 外側 やや灰 内面 灰黄色	口縫部～頭部1/ 2残存。 一起にスス付着。
4 5-476	卵生巣	14層直上 F29 墓地内	口径 (25.2) 底径 (16.5) 底径 (7.6)	平底の直底から直線気味に立ち 上がり、腰やかなカーブを呈す。 頭部は剥離部によって波打つ口縫部。	頭部上位に剥離するよう複数枚 の剥離部を複数枚を重ね配置する。 頭部内壁にヨコハケ (14条/cm)、下位は 頭部直線により不明。内面ナデ。底 部直線にて代謝。	胎土 砂粒、赤色粒子、 白色粒子を含む。 焼成 外側 やや灰 内面 黄褐色	口縫部～頭部1/ 2、底底3/4残存。
5 5-462	卵生巣	14層直上 F29 墓地内	口径 (25.6)	上位がやや張り気味の剥型はや やかに外方に開く。口縫部は ヘケ工具による剥め目。	外表面タチハケ・ナメハケ (5 条/cm)、内面ヨコハケ (5条/ cm)、後一部ナデ。	胎土 砂粒、黑色粒子を 多く含む。 焼成 外側 青灰 内面 にない黄褐色	頭部1/15、頭 部/4残存。 外面上半にスス 付着。
6 5-467	卵生巣	14層直上 F29 墓地内	口径 (21.6)	上部でやや張り気味の剥型から 腰やかに外方に開く。口縫部は ヘケ工具による剥め目。	口縫部剥離取り落し、やや剥離から 腰部直線方向に剥離をも入れ る。外表面タチハケ (7条/cm)、 内面ヨコハケ～頭部上位ヨコハケ (7条/cm)、下位ナデ。	胎土 砂粒、黑色粒子を 多く含む。 焼成 外側 青灰 内面 にない黄褐色	頭部1/1、2/2、頭 部3/4残存。
7 5-449	卵生巣	13b層 F29	口径 (15.2) 高さ (19.3) 底径 (23.0) 底径 (6.8)	下位が大きく張り出す剥型は底 部から外反角度に立ち上がり、 腰やかに広口の口縫部に統く。	頭部は頭部より調整不明。 頭部に剥離前頭部、外面上部に 横筋状剥離部が施され、頭部 内壁にヨコハケ (7条/cm)、下位ナ デ、頭部直線が認められる。 底部に不鮮明な代謝。	胎土 砂粒、白色粒子、 白色粒子を含む。 焼成 外側 にない褐色	頭部～頭部1/ 2残存。 底底完形。
8 5-447 ①	卵生巣	13b層 F29	口径 (28.0) 高さ (26.5) 底径 (6.8)	腰やかなカーブを描く斜傾状の 剥型。口縫部は浅い直線剥離部に よる波打つ口縫部。	外表面タチハケ (7条/cm)、内 面ヨコハケ (7条/cm)、が剥離部 が直線にて詳細不詳。	胎土 砂粒、赤色粒子を 多く含む。 焼成 外側 やや黄褐色	頭部1/10、頭 部/4残存。 底底完形。
9 5-448	卵生巣	13b層 G29	口径 (16.5)	若干内窓気味に立ち上がる頭部 から腰やかに水平に引き出す口縫部。	外表面直線直下にヨコハケ。タ チハケ (12条/cm)、一部剥離する 外表面タチハケ (11条/cm)、 後一部ナデ。	胎土 砂粒、石粒、赤色 粒子を含む。 焼成 外側 青灰 内面 明褐色	頭部1/4残存。
10 5-417	卵生巣	13b層 F29 SR51301	口径 (28.4)	やや太めの弱い頭部から大き く外反して外方に開く口縫部。口 縫部は肥厚化せず、面取りりする。	頭部及び頭部に剥離され波状 (もみじかん)、直線剥離や直線 剥離の弱い不明瞭 (頭部8cmか ら) 口縫部に横筋状剥離部が施さ れる。外表面タチハケ (11条/cm)、 後一部ナデ。	胎土 砂粒、白色粒子、 白色粒子を含む。 焼成 外側 内面 明褐色	頭部1/16、頭 部1/3残存。 外表面形の痕跡。
11 5-387	卵生巣	13a層 F28S SR51301	口径 (18.4)	腰やかにくびれた直底から大き く外反して水平に開く口縫部。	頭部に9多條位の剥離され波状 波紋有。口縫部は輪郭からまで直 線状の波紋が付与される。外表面 頭部不規定向けのハサウエー ナデ、頭部ナメハケナデ。内 面ヨコハケとヨコハケナデ、その 他ナデ。	胎土 砂粒、白色粒子、 白色粒子を含む。 焼成 外側 内面 淡褐色	頭部1/4、頭 部4/5残存。
12 5-383	卵生巣	13a層 G29 SR51301	口径 (26.4) 底径 (6.9)	下位が大きく張り腰やかな斜を 持つ剥型。直底から腰まで直線 形に大きく弱いて立ち上がり、 上位は腰やか張り気味に頭部 へ統く。	頭部に半位不規則の剥離され波状 波紋外表面ヨコハケ (8条/cm)、 内面ヨコハケ (8条/cm)。底 部に木漏板。	胎土 砂粒、白色粒子、 白色粒子を含む。 焼成 外側 内面 灰	外表面形。頭部 口縫部～頭部不 規。
13 5-484	卵生巣	13a層 G29 SR51301	口径 (23.8)	腰の張りの小さい球状の剥型か ら緩く細い頭部。	頭部に8多條位の剥離され波状 波紋外表面ヨコハケ (9 条/cm)、内面ヨコハケ (8条/cm)、 内面ヨコハケ (8条/cm) などナデ。 全体に直線剥離が施される。	胎土 砂粒、白色粒子、 白色粒子を含む。 焼成 外側 内面 褐色	頭部1/2残存。
14 5-384	卵生巣	13a層 G29 SR51301	口径 (20.4) 高さ (27.8) 底径 (26.0) 底径 (9.8)	上位に最大径を持つ剥型は頭部 から直線気味に立ち上がり、腰 部に直線剥離が施される。腰 の開きは小さく、腰より直線化した 頭部の下方からナデ。頭部は直線的 に伸びる台形状。	剥型内外面ともにヨコハケ (9 条/cm)、内面ヨコハケ (11条/cm)、 内面ヨコハケ (8条/cm) などナデ。	胎土 砂粒、白色粒子、 白色粒子を含む。 焼成 外側 内面 褐色	頭部1/3、頭 部/4残存。 底底完形。 外面上半にスス 付着。

番号	器形	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	文様・調査等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
15 5-366 ②	弥生壺	13a層 SR51301	口径 (25.5) 底径 (22.7)	中位でやわかな彫りを持つ縦部は直立気味に立ち上がり口縁部は大きく外反する。口縁部は口内面と直面にハケ工具で削みを入れる。	口縁部内外面ともに細いヨコハケ (15束/cm)、調査外面下半ナメカケ (6束/cm)、内面ナメナダ。	胎土 白色粒子・赤色粒子・砂粒を含む。 焼成 普通 色調 灰褐色	口縁部L/30・刺 目L/8残存。 外面にスス付着。
16 5-354	弥生壺	13a層 F29 SR51301	口径 (20.7)	調査から縦やかに屈曲し、直立して立ち上がる口縁部は縦部を面取りし斜めに長いハラ工具で削みを入れる。	口縁部内外面ナメ、頭部外面ヨコハケ。	胎土 白色粒子・黒色粒子を含む。 焼成 普通 色調 に深い褐色	口縁部L/19残存。 外面にスス付着。
17 5-366 ①	弥生壺	13a層 SR51301	口径 (20.2) 最高 底径 (19.2) 底径 6.2	肩に突出した底部から直線的に立ち上がる。肩の側面は小さく、縦やかに屈曲し直線的に外方へ開く口縁部に続く。	頭部の彫状文はさんで上位一段、下位一段の繰り返し波状文 (6束単位) が施されている。外側口縁部ナメ、下半部半タケハケ (8束/cm)、下半部ナメ、内面口縁部ヨコハケ (1束/cm)、頭部ヨコハタミガタ、頭部・底部・底部ナメ。	胎土 墨書き・砂粒を含む。 焼成 普通 色調 に深い褐色	口縁部L・頭部L/4 残存。 底部完形。 肩上半にスス付着。
18 5-432	弥生壺	13a層 G33 SR51303	口径 (19.8)	頭部から大きく外反し、ラッパ状に開く口縁部。	口縁部は取り戻り、頭部は波状文、豆字の序文が2箇単位で貼付される。頭部は単位不明の繰り返し波状文。口縁部内外面ともにヨコハケ (10束/cm)、口縁部下部外面ヨコハタミガタ、内面ヨコハタミガタ。	胎土 砂粒・白色粒子・赤色粒子を含む。 焼成 普通 色調 に深い褐色	口縁部L/3残存。 外面に赤色の痕跡。
19 5-492 ①	弥生壺	13a層 F32 SR51303	底径 7.6	やや上げ底氣味の底部。	内面にヨケの痕跡はあるが、外表面ともに摩耗により詳細不明。	胎土 砂粒・石粒・白色粒子・赤色粒子を含む。 焼成 やや不良 色調 に深い褐色 黄灰色	底部完形。
20 5-492 ②	弥生壺	13a層 F22 SR51303	口径 (24.8)	縦やかなカーブを持つ副部から直立気味に立ち上がる口縁部は指頭押圧による波状口縁。	外表面ともに摩耗により不明瞭。外側ナメハケ (11束/cm)、内面ヨコハケ (11束/cm)。	胎土 石粒・砂粒・白色粒子を含む。 焼成 普通 色調 に深い褐色	口縁部L/7残存。 外面にスス付着。
21 5-429	弥生壺	13a層 G29	口径 (7.8)	無い直立する頭部から縦やかに外反する口縁部。器壁は薄い。	口縁部ナメ。外側タケハケ (6束/cm)、内面口縁部ヨコハケ (6束/cm)、頭部ナメ、指頭圧痕が多い。	胎土 砂粒・石粒・赤色粒子を含む。 焼成 普通 色調 浅黄褐色	口縁部L・頭部L/2 残存。
22 5-450	弥生壺	13a層 F29	口径 6.2	縦やかなカーブを描いて立ち上がる頭部。口縁部の開きは小さい。	頭部中央に指頭押圧による跡がありヨケが9ヶ所につけられる。調査は内面外側ともに摩耗により不明。	胎土 砂粒・赤色粒子を含む。 焼成 普通 色調 浅黄褐色	口縁部完形。 頭部L/2残存。
23 5-547	弥生壺	13a層 G28	口径 (13.2)	外反して開く單口縁。	口縁部外面ナメハケ (8束/cm)、ナメナダ、内面ナメ。	胎土 砂粒・白色粒子・赤色粒子を含む。 焼成 普通 色調 に深い褐色	口縁部L/4残存。 外面に赤色。
24 5-409	弥生壺	13a層 E21	口径 13.6	無い直立する頭部から外反して開く口縁部。	口縁部を取り後頭文 (LR)、頭部文 (LR)、頭部外面にも摩耗が見られるが、口縁部外面ナメハケ、内面ヨコハタミガタ、肩部外口縁部タケハケ (1束/cm)、頭部内面ヨコハケ後ナメ。	胎土 砂粒・赤色粒子・白色粒子を含む。 焼成 普通 色調 に深い褐色	口縁部一部欠損。 頭部L/2残存。
25 5-360	弥生壺	13a層 F28	口径 (12.0) 最高 33.3 底径 (7.7)	下位が僅なる彫形の頭部を呈しており、直立気味に立ち上がる。頭部と縦長部のもので口縁部は縦やかに外反して聞く。	頭部に彫文 (LR)、口縁部は内側からヨケを出して仕上げられ、口縁部外面タケハケ (6束/cm)、内面ヨコハケ (6束/cm)、頭部内面ナメハケ、下半タケハケ (6束/cm)、底部ナメナダ。内面頭部ヨコハタミガタ、頭部中央に指頭ヨコハケ (6束/cm)、中位ナメ。	胎土 砂粒・白色粒子・赤色粒子を含む。 焼成 普通 色調 に深い褐色	口縁部・頭部L/2 残存。 頭部完形。
26 5-422	弥生壺	13a層 F30	口径 (13.7)	肥厚化し、面を作り出した口縁部。	口縁部に彫文 (LR)。内面ヨコハケ後ナメ。	胎土 砂粒・石粒・赤色粒子を含む。 焼成 普通 色調 に深い褐色	口縁部L/7残存。
27 5-346	弥生壺	13a層 F28	口径 (26.4)	大きく外反する口縁部は肥厚化し、面取りされる。	口縁部に7条単位の繰り返し波状文を施した後2箇単位の棒状ナメハケ (11束/cm)、内面ヨコハケ (11束/cm) 後ナメ。	胎土 砂粒・赤色粒子・白色粒子を多く含む。 焼成 普通 色調 浅赤褐色	口縁部L/4残存。 外面に赤色。
28 5-376	弥生壺	13a層 F30	口径 22.4	太く短い頭部から大きく外反する口縁部。	口縁部はハケ工具により面取り後ナメハケ (11束/cm)、内面ヨコハケ (11束/cm) 後ナメ。	胎土 砂粒・赤色粒子・白色粒子を含む。 焼成 普通 色調 に深い褐色	口縁部一部欠損。 外面に赤色。
29 5-415	弥生壺	13a層 F+G31		肩部の張りの小さい大型壺。縦やかなカーブを描いて頭部へ続く。	頭部に彫文 (LR)。外側頭部ナメナハケ後ハタミガタ。頭部ナメナダ。内面頭部ヨコハケ (9束/cm)、内面ヨコハタミガタ (9束/cm)、内面ヨコハケ (6束/cm) 後ナメ。	胎土 砂粒・赤色粒子・白色粒子を含む。 焼成 普通 色調 に深い褐色 褐灰色	頭部L/4残存。

番号	器形	出土地点	法種 (cm)	形態の特徴	文様・調整等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
30 5-371	弥生壺	13a層 F31	肩幅 (24.1) 底径 (8.0)	下位が垂れ気味の無花果形の肩部、肩部は膨長で腰やくに口絞部へ続く。	肩部に同一の器 (6条单位) による直線文 (8段) と波状文 (1段)。外口縁部5箇ハケ、肩部ナナルメハケ (各5箇/cm)、内面ヨコハケ (各5箇/cm) 後テテ。底部裏面に木葉模。	胎土 砂粒・赤色粒子・ 白色粒子を含む。 燒成 やや良 色調 外面 内面 にぶい橙色 褐色	頭部～脚部1/2・ 底部1/4残存。 底部完形。
31 5-421 ②	弥生壺	13a層 F28	肩幅 (24.0) 底径 8.0	若干肩の張る無花果形の肩部、肩部はやや太く腰やくに口絞部に続く。	肩部の文様は7条单位の輪葉文 (5条/cm) と2段の波状文が施される。外口縁部上位までタメハケ (8箇/cm)、中位ヨコノハケ (5箇/cm)、下位ヨコノハケ (5箇/cm) 後テテ。内面ヨコハケ (5箇/cm) 後テテ。底部裏面に木葉模。	胎土 砂粒・赤色粒子・ 白色粒子を含む。 燒成 やや良 色調 外面 内面 にぶい黄褐色 褐色	頭部2/3・脚部 1/2残存。 底部完形。
32 5-416	弥生壺	13a層 F29	肩幅 24.4 底径 8.4	下半に最大径を持つ肩部で、底部の突出が大きく、基盤が全体に厚い。	肩部外面ヨコハラミガキ、内面摩滅により輪葉は不明だが、ハケ5箇ナダ。底部裏面に木葉模。	胎土 砂粒・石粒・白色 粒子を含む。 燒成 普通 色調 外面 内面 浅黄褐色 灰白色	脚部2/3残存。 底部完形。
33 5-408	弥生壺	13a層 E31	肩幅 (24.0) 底径 8.1	下半が大きく垂れる無花果形の肩部。下位に不明瞭なが發なす。	肩部上位～中位ナナルメハケ。タメハケ (5箇/cm)、下位ヨコノハケ (5箇/cm) 後テテ。内面ヨコハケ (5箇/cm)。底部裏面に木葉模。	胎土 砂粒・白色粒子を 含む。 燒成 普通 色調 外面 内面 にぶい橙色 褐色	頭部1/3残存。 底部完形。 外面上赤。
34 5-385	弥生壺	13a層 F30	肩幅 19.1 底径 (7.8)	下半の張りが小さい無花果形の肩部。	内外面ともに摩滅により調整不明。底部裏面に木葉模。	胎土 砂粒・白色粒子を 含む。 燒成 普通 色調 にぶい褐色	脚部2/3・底部 1/2残存。
35 5-299	弥生壺	13a層 F30	肩幅 (21.2) 底径 7.1	肩部下位がやや張る長球状を呈す肩部。	外口縁部上位タマハケ、中位ヨコノハケ (5箇/cm)、下位ヨコノハケ (5箇/cm) 後テテ。内面中位ヨコハケ (5箇/cm)、その他のナダ。	胎土 砂粒・白色粒子・ 白色粒子を含む。 燒成 普通 色調 外面 内面 にぶい黄色 褐色	頭部1/5・底部 5/6残存。 外面上赤。
36 5-434	弥生壺	13a層 G29	肩幅 (23.0) 底径 7.6	中位で大きく張り出す後端円形を呈する肩部。底部の突出はやや厚い。	肩部上半タメハケ (5箇/cm)、下位ヨコノハケ (5箇/cm)、内面ヨコハケ (5箇/cm) 後テテ。底部裏面に木葉模。	胎土 砂粒・石粒・赤色 粒子を含む。 燒成 普通 色調 外面 内面 浅黄褐色 灰白色	脚部一度欠損。 底部完形。
37 5-351	弥生壺	13a層 F28	口径 (15.8) 肩幅 14.6 底径 (18.6) 底径 7.3	肩部下位に最大径を持つ短肩部。口縁は下面に引きされ、外方へ小さい。	内外面ともに摩滅により調整不明。内面裏面ともにハケの痕跡が残る。底部裏面に木葉模。	胎土 砂粒・赤色粒子・ 白色粒子を含む。 燒成 普通 色調 浅黄褐色	口縫部～脚部上 半1/5残存、底 部ほぼ完形。
38 5-361	弥生壺	13a層 G30	口径 (28.6) 肩幅 25.6 底径 (26.8) 底径 11.5	上半は大きく張り出す球形を呈すが、腰部から中位までは、腰減味に立ち上がる。口縁部は字形で、外方に屈曲し、指揮押圧により形状が形成される。	口縫部ナダ。外口縁部ヨコハケ (10箇/cm)、肩部下位～脚部ハケ5箇ナダ。内面ヨコハケ (10箇/cm)、中位ナダ。脚部内外面ともにナダ。	胎土 砂粒・石粒・白色 粒子を含む。 燒成 普通 色調 外面 内面 浅黄褐色	口縫部1/2・脚 部3/4残存、脚 部ほぼ完形。 外面上半にスス付着。
39 5-410	弥生壺	13a層 E31	口径 (16.8) 肩幅 (15.9) 底径 (13.9) 底径 (7.4)	肩部中央がやや張る球形の肩部。肩部はやや扁平して外方に開き、指揮押圧により形状が形成される。	外口縁部上半ヨコハケ (10箇/cm)、肩部下位～脚部ハケ5箇ナダ。内面ヨコハケ (10箇/cm)、中位ナダ。脚部内外面ともにナダ。	胎土 砂粒・石粒・赤色 粒子を含む。 燒成 普通 色調 にぶい褐色	口縫部1/5・脚 部2/3、底部1/6 残存。 外面上半にスス付着。
40 5-426 ①	弥生壺	13a層 F30N	口径 (20.2)	直立気味に立ち上がる球形から外へ開く指揮押圧による波状口縁。	肩部～脚部外面上ともヨコハケ (10箇/cm)、一部タメハケ。	胎土 砂粒・白色粒子を 含む。 燒成 普通 色調 にぶい黄褐色	口縫部～脚部上 半1/5残存。 外面上スス付着。
41 5-425 ②	弥生壺	13a層 F30N	口径 (27.6) 肩幅 (50.0)	腰部が腰やくにびれ、直立気味に立ち上がる口縁部の指揮押圧には残り。	摩滅により調整不明。一部ヨコハケが残る。	胎土 石粒・砂粒を多く 含む。 燒成 普通 色調 内面 にぶい青褐色 浅黄褐色	口縫部1/9・脚 部6残存。
42 5-451	弥生壺	13a層 F30N	口径 24.4 肩幅 23.8	肩部がわざかに張り出す半球状と考えられる肩部。指揮押圧によって腰減味は大きく外方へ開く。	口縫部内外面ともヨコハケ (10箇/cm)、脚部外面ヨコハケ、腰曲部ナダ。	胎土 砂粒・石粒・赤色 粒子・白色粒子を 含む。 燒成 普通 色調 にぶい青褐色 浅黄褐色	口縫部～脚部一 度欠損。 外面上スス付着。
43 5-411 ①	弥生壺	13a層 F30	口径 (27.4)	上位がやや扁平化する肩部。短い外口縁部は指揮押圧により形状が形成される。	外口縁部タメハケ及びナナルメハケ (13箇/cm)、内面ヨコハケ、腰曲部ナダ。	胎土 石粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 燒成 普通 色調 にぶい青褐色	口縫部1/2残存。 外面上スス付着。
44 5-420	弥生壺	13a層 E29	口径 (25.6)	外方への開きが小さい瓶形の肩部。	指揮押圧による波状口縁形成後、口縫部工具による削ぎ方で削込みを入れる。外口縁部タメハケ (7箇/cm)、内面ヨコハケ。	胎土 砂粒・石粒・赤色 粒子・白色粒子を 含む。 燒成 普通 色調 にぶい褐色	口縫部1/13残存。
45 5-355	弥生壺	13a層 F29	口径 (17.8) 肩幅 (18.3)	中位が張り出す肩部より直立気味に立ち上がる口縁部はくの字に屈曲し、外方へ開く。	口縫部ハケ工具による削り後、口縫に削る。外口縁部ナナルメハケ (7箇/cm)、内面ヨコハケ。	胎土 石粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 燒成 普通 色調 にぶい褐色	口縫部～脚部1/2 残存。 外面上スス付着。

番号	器形	出土地点	法差 (cm)	形態の特徴	文様・調査等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
46 5-401	弥生壺	13a層 F28	口径 (19.7)	中位がやや膨らむ脚部。短い口縁部は外方に大きく屈曲して開く。	口縁部を取り後、面に垂直にハケ工具により刃をもじられる。外半周に半タメハケ (5条/cm)、下半部に小ナタメハケ (5条/cm)、内面ヨコハケ (5条/cm)。	胎土 砂粒・石粒・赤色粒子・白色粒子を含む。 焼成 色調 に近い褐色	口縁部1/7・脚部1/4残存。 外面部ス付着。
47 5-342	弥生壺	13a層 H27	口径 (16.2)	くの字に屈曲して外方に開く口縁部。	口縁部は外側に肥厚化し、面取り後はツリ工具による刃をもじられる。内面部ともにヨコハケ (8条/cm)。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 に近い褐色	口縁部1/14残存。
48 5-359	弥生壺	13a層 F28	口径 (30.1) 底高 (42.9) 胴径 (34.6) 底径 (12.9)	下位で大きく屈曲する脚部は、底部から直線状に立ち上がり、直線状やかに頭部へ傾く。脚部は短く、外方への開きは小さい。脚部はやや外反気味の台形を呈す。	口縁部ハケ工具による面取り後、頭部を丸め方向からハケ工具による刃をもじられる。脚部は接合部で4ヶ所に強度の接合部が現れる。外半周に半タメハケ (5条/cm)、下半部に半タメハケ (5条/cm)、内面ヨコハケ (5条/cm)、脚部ヨコハケ (13条/cm)。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 淡黄褐色	口縁部1/3残存。 外面部ス付着。
49 5-496	弥生壺	13a層 E30	口径 20.5 底高 25.0 胴径 20.0 底径 9.6	中位が張る長球状を呈す脚部。口縁部は鏡やかに屈曲し、直線状に開く。脚部は短めの台形。	口縁部は指頭によるナデ成形のため表面に深い波状が確認される。内面ヨコハケ (5条/cm)、外面部ヨコハケ (5条/cm)、内面ヨコハケ (5条/cm)、脚部ヨコハケ。	胎土 砂粒・石粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 に近い黄褐色	脚部下1/2残存。 脚部外側にスス付着。
50 5-399	弥生壺	13a層 F30S	底径 (6.2)	外反気味に開く短い脚部。	外面部に調整不明。内面ヨコハケ。	胎土 砂粒・石粒・黑色粒子・白色粒子を含む。 焼成 色調 に近い褐色	脚部1/4残存。
51 5-411 ②	弥生壺	13a層 F30S	底径 (10.0)	短く外に大きく開く台形の脚部。	接合部に深い粘土斑を貼り付けた後、脚部内面にヨコハケ (5条/cm)、外面部外側ナゲ (5条/cm)、内面ヨコハケ (5条/cm)、接合部ナゲ。	胎土 砂粒・石粒・赤色粒子を含む。 焼成 色調 やや良灰色	脚部下半部～脚部1/3残存。
52 5-356	弥生壺	13a層 F29	底径 (9.6)	開きの小さいやや内湾気味の脚部。	外面部正反方向のケメ (12条/cm)、内面ヨコハケ。接合部内面にナゲ。	胎土 黒色粒子・白色粒子・砂粒を含む。 焼成 色調 やや良黄色	脚部1/5残存。
53 5-339	弥生壺	12層下 F31N	口径 17.2 底高 32.3 胴径 24.8 底径 8.3	下位で大きく垂り出す瓶花形の脚部。脚部は直線状に立ち上がり、大きく外反する口縁部は鏡やかに脚部は薄い粘土斑を貼り付けて肥厚化する。	口縁部は肥厚した粘土工具により削り、外反気味に直線状に開く。脚部に金屬の小さな標記が確認できる(部位不明)。内面ヨコハケ (5条/cm)、外面部ヨコハケ (5条/cm)、内面ヨコハケ (5条/cm)、脚部下半部ヨコハケ。正常な脚部に本脚部。	胎土 砂粒・赤色粒子を含む。 焼成 色調 に近い褐色	脚部一部欠損。 口縫内～脚部外側に赤茶の痕跡。
54 5-320	弥生壺	12層下 西側排水溝	口径 (25.8)	内湾気味に外に開く口縁部。	口縁部に櫛擦び波紋。口縁部に6ヶ所の脚部の輪郭が確認され、内面ヨコハケ (5条/cm)、外面部ナメハケ、内面ヨコハケ後ナゲ。	胎土 黑色・砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 やや良灰褐色	口縫部1/20残存。
55 5-333	弥生壺	12層下 F30	口径 (31.1) (31.3)	上位でやや外に張る脚部は下位で鏡やかなるカーブを描く。接合部はよく張り、表裏口縁部。	外面部と内面に摩耗・摩滅により詳細不明。内面端ともにヨコハケ (11条/cm)。	胎土 砂粒・石粒・赤色粒子を含む。 焼成 色調 普通	脚部～脚部1/5残存。 外面部ス付着。
56 5-301	土師壺	10層下 H28	口径 (16.8)	緩やかに外反する折り返し口縁部。	口縁部は瓶底の薄い粘土壁を貼り付けて形成。口縁部に赤茶の浮遊物が現れる。内外面ともに摩耗により詳細不明。内面ヨコハケの範囲が現る。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 に近い褐色	口縫部1/3残存。
57 5-245	土師壺	10層 P28 SKS1004	口径 (15.6)	球状を呈す腹上半部からくの字に屈曲する口縁部。	外面部ヨコハケナメハケアーチカーメハケ (6条/cm) により羽状を呈す。内面ヨコハケ部ヨコハケ後ナゲ、脚部ヨコハケ後ナゲ、脚部ヨコハケ。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 やや良褐色	口縫部1/2残存。 外面部ス付着。
58 5-265	土師壺	10層 G28 SKS1004	口径 (14.5) (15.4)	脚部は中位がやや垂り出す瓶形を呈す。口縁部は鏡やかに屈曲し、開きは小さい單口部。	外縁部ナメハケ、外面部脚部～脚部上位ヨコハケ (7条/cm)、内面ヨコハケ (5条/cm)、下位正反方向のケメ (5条/cm)、内面ヨコハケ (7条/cm)、内面ヨコハケ、鏡やかなナゲ。	胎土 砂粒・石粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 普通	口縫部～脚部1/3残存。 外面部上半にスス付着。
59 5-256	土師高环	10層 G28 SKS1004	底径 3.1	外反気味に広がる脚部。	内外面ともにナカダ。摩滅により詳細不明。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 に近い褐色	脚部一部欠損。
60 5-268	土師高环	10層 G32 SKS1002	口径 (15.9)	環部はわずかに鏡を持ち、直線的に外方に開く。脚部は鏡やかに膨らむ円柱状。	外面部ハケ模様ナメハケ、脚部ヨコハケ (5条/cm)、内面ヨコハケ (5条/cm)、内面ヨコハケ、鏡やかなナゲ。	胎土 砂粒・石粒を含む。 焼成 色調 普通	口縫部1/8・环部1/2残存。
61 5-235	土師壺	9層 G26	口径 (17.6)	大きく外反する折り返し口縁部。	複数の粘土斑を貼り付け。口縁部を内面に張り付ける。外縁部内面に小さな凹凸が現れる。脚部前寄り2ヶ所。内面ヨコハケ (5条/cm)、内面ヨコハケ (5条/cm)。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 普通	口縫部1/5残存。

番号	器形	出土地点	法量(㎤)	形態の特徴	文様・調査等の特徴	胎土・焼成・色調	備考	
62 5-234	土師壺	8層 H26 SR50801	口径(19.4) 底径(13.6)	やよい状の腹部から、直線的に外に開く形で返し口縁。	種の長い脚と、帶を持ち付けた脚。直線的に外方に開く形で返し口縁。腹部はやよい状のテハケ(6条×6条)、肩ナデ、内面ヨコハケ(6条×6条)、頸部内面ナデ。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 やや良 色調 内面 明褐色 灰色	口縁部1/6残存。	
63 5-262	土師高环	8層 H26 SR50801	口径(17.0) 基高 底径(15.2) 底径(13.6)	環部下位に明瞭な縦を有し、直線的に外方に開く。腹部はやかに膨らみながら、上位に開く傾斜状で、大きめに屈曲して輪郭に統一。	内外面とも摩滅・摩耗により詳細不明。外面部環部にテハケ、腹部ナデ。腹部内面に上位指頭押圧、下位ヨコハケ(12条×6cm)。	胎土 砂粒・黑色粒子を含む。 焼成 普通 色調 内面 にない黄褐色	环部1/2・裾部 1/3残存。 輪郭元形。	
65 5-267	土師高环	8層 H27 SR50801	口径 基高 底径 底径	11.8	环部は下位に明瞭な縦を有し、腹部はわかな膨らみを有す円筒形。	环部内外面にテハケの痕跡。腹部外面部タラミガキ、内面ナデ。	胎土 砂粒・黑色粒子を含む。 焼成 普通 色調 内面 にない黄褐色	环部1/5残存。 輪郭完形。
66 5-312 ①	土師高环	8層 H27 SR50801	口径(17.1) 基高 底径(13.9) 底径(12.7)	环部下位の不明瞭な健から腰やかに屈曲し、直線的に外方に開く。腹部はわずかに膨らむ太いエニシタス状を呈し、大きめに屈曲して輪郭に統一。	全体に摩滅が著しく調査不明。環部、腹部内外面ともにナデ。腹部外面部タラミガキ、内面ナデ。	胎土 砂粒・石粒が多く含む。 焼成 普通 色調 内面 にない黄褐色	口縁部1/2・裾部 2/3残存。	
67 5-295	土師高环	8層 H27 SR50801	口径(17.0) 基高 底径(14.1) 底径(11.9)	腰を持たない直線的に外方に開く浅い环部。腹部はやや膨らむエニシタス状のものと太く短い環部の腰はやや小さい。	环部～脚部底盤により摩滅不明。腹部ナデ。腹部外面部タラミガキ。腹部内面、腰部ナデ。	胎土 砂粒・石粒を含む。 焼成 普通 色調 内面 にない黄褐色	环部1/2・裾部 2/3残存。	
68 5-286	土師高环	8層 H28 SR50801	口径(16.7) 基高 底径(13.0) 底径(12.0)	下位に腰(沈痕を有し、腹部から腰からカーブを描く环部)。腹部はやや膨らむ。腹部は腰よりも腰盤である。腹部の腰曲はやや小さい。	环部上半内外面ともに丁寧なナデ。下位タラメの痕跡。腹部外面部タラミガキ。腹部下半はやや内面ナデ。腹部外面部ナメハケ後ナデ、内面ナデ。	胎土 砂粒・石粒・赤色 粒子を含む。 焼成 普通 色調 内面 にない黄褐色	环部1/2残存。	
71 5-311	小型壺	8層 H27 SR50801	口径 基高 底径 底径	9.9 7.2 3.2 3.3	偏平気味の丸柱を帯びた肩部。底盤は半球形。口縁部の曲筋はやや小さく、直線的に開く。	内面全体にナデ。外面部口縁部ナデ、脚部ヘラケ zigzag。	胎土 砂粒・石粒を含む。 焼成 普通 色調 内面 にない黄褐色	口縁部2/3残存。
72 5-244	小型壺	8層 H27 SR50801	口径(10.2) 脚径 8.6	環形の脚部を緩く屈曲して立ち上がる口縁部。	周辺により内外面とも調査不明。内面ナデ。	胎土 砂粒多く含む。 焼成 普通 色調 内面 にない黄褐色	口縁部1/20・胴部1/3残存。	
73 5-238	小型壺	8層	口径(9.7) 基高 7.6 底径 7.8 底径	上位がやや膨らむ球形を呈す肩部。脚部はくの字に屈曲して直線的に大きく外に向く。	口縁部内外面ともにナメナメハケナデ。脚部外面部ハケ後ナデ、内面ナデ。	胎土 砂粒・石粒・白色 粒子を含む。 焼成 普通 色調 内面 ナデ	一部欠損。	
75 5-283	小型壺	8層 H28 SR50801	口径 基高 8.5 9.6 底径 2.5	中位がやや膨らむ偏平気味の肩部。口縁部は直し、外方へ直線的に開く。	口縁部内外面ともにナデ。外面部口縁部ナデ、内面ヨコハケ後ナデ。脚部内面に不定方向のハケ。	胎土 砂粒・石粒を含む。 焼成 普通 色調 内面 ナデ	口縁部一部欠損。 外面にスス付着。	
76 5-207 ①	土師壺	8層	口径 脚径 13.8 15.9	中位がやや膨らむ偏平気味の肩部。口縁部は直し、外方へ直線的に開く。	全体底盤により調査不明。口縁部外面部ナデ、内面ヨコハケ後ナデ。脚部内面に不定方向のハケ。	胎土 砂粒・石粒・赤色 粒子を含む。 焼成 普通 色調 内面 ナデ	口縁部、脚部一部欠損。	
77 5-312 ②	土師壺	8層 H27 SR50801	口径 12.8	肩が膨る球形の肩部。口縁部はくの字に屈曲し、直線的に外方に開く。	口縁部外面部ヨコ・タテハケ(7条×7cm)後ナデ、内面ヨコハケ。脚部外面部不定方向のハケ、腰部ナデ。脚部内面ナデ、底盤は粘土のほみ出。	胎土 砂粒・石粒・赤色 粒子を含む。 焼成 普通 色調 内面 ナデ	口縁部2/3・脚部 1/3残存。	
79 5-305 ① 307	土師壺	8層 H27 SR50801	口径(15.7) 基高 (21.1) 底径(11.4)	中位が膨る球形の肩部。肩台部は直し、外方へ直線的に開く。腰部はくの字に屈曲し、直線的に外方に開く。	脚部外面部ヨコ・タテハケ(7条×7cm)後ナデ、内面ヨコハケ。脚部外面部ナデ。内面ヨコハケ。脚部内面ヨコハケによる不規則な凹凸。腰部底盤内面ともにナデ、内面に指頭圧痕が残る。	胎土 砂粒・黑色粒子を含む。 焼成 普通 色調 内面 ナデ	口縁部2/5・脚部 1/2残存。 外面にスス付着。	
80 5-305 ②	土師壺	8層 H27 SR50801	底径(11.4)	脚部はやや内側気味に立ち上がる。脚部は大きく外に広がる台形。	脚部外面部にへう状工具による沈痕。脚部内面に不規則な凹凸。脚部底盤内面ともにナデ、内面に指頭圧痕が残る。	胎土 砂粒・石粒を含む。 焼成 普通 色調 内面 ナデ	脚部1/4・脚部 1/2残存。 外面にスス、内面に灰化物付着。	
81 5-245	土師壺	8層 H27 SR50801	口径(17.4)	肩の張りの小さい脚部からくの字に屈曲し、直線的に外方に開く。腰部は全体に薄手である。	口縁部内外面ともにナデ。脚部外面部にヨコ・タテハケによる不規則な凹凸。脚部内面ヨコハケによる不規則な凹凸。脚部底盤内面ともにナデ、内面に指頭圧痕が残る。	胎土 砂粒・石粒を含む。 焼成 普通 色調 内面 ナデ	口縁部1/9残存。	
82 5-207 ③	土師壺	8層 H27 SR50801	口径(17.0)	くの字に屈曲して立ち上がる口縁部。中位に底を折つ。	内外面ともにナデ。	胎土 砂粒・石粒を含む。 焼成 普通 色調 内面 ナデ	口縁部1/7残存。 外面にスス付着。	
83 5-304	土師壺	8層 H27 SR50801	口径 16.2	器體の薄い底部が丸く收められた口縁部。	内外面ともにナデ。	胎土 砂粒・石粒を含む。 焼成 普通 色調 内面 ナデ	口縁部2/3残存。	

番号	基形	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	文様・調整等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
54 5-309	土師壺	8層 H27 SR50801	口径 13.2	わざかに膨らみながら直立気味に立ち上がる口部。口縁部は外側に開き、口縫合部は小さい。基盤が全体に厚く、	口縫合部外側ナデ。結合部には指紋状痕跡がある。脚部外側ナメハケ、内面ヨコハケ。	胎土 砂粒・石粒を含む。 燒成 赤褐色	口縫部2/7残存。
85 5-282	土師壺	8層 H28 SR50801	口径 (10.0)	口縫形を呈すと考えられる崩壊から多くの部分で直線的に立ち上がる口部。	口縫部内外ともにナデ。肩部は厚めにより調整不明。	胎土 砂粒・石粒を含む。 燒成 褐色	口縫部1/2残存。
86 5-213	土師高环	8層 H27	口径 (15.7) 高径 (11.9) 底径 (11.6)	環部は大きく、肩部から水平に崩壊し、直線的に立ち上がる。脚部は直線的に開く、やや細い円錐状を呈する。	环部崩壊により調整不明。前面にハコの痕跡がある。脚部内外ともにナデ、肩部ハケ後ナデ。	胎土 砂粒・石粒を含む。 燒成 褐色	口縫部1/5、底 部1/10残存。 脚部完形。
87 5-263	土師高环	8層 H28	口径 15.7 高径 12.0	下位口縫を持たず、ややかに崩壊する环部。脚部はやや太く、右側にシアンス状を呈し脚部に傾く。	环部内外ともに厚めが著しく、調整不易。前面にハコの痕跡がある。脚部内外ともにナデ。脚部はハケ後ナデ。	胎土 砂粒・石粒を多く含む。 燒成 褐色	口縫部、肩部一 次残。
88 5-218	土師壺	8層 H26	口径 (15.7)	外方に開き気味に立ち上がる複合口縫。	口縫部に5本輪郭の(?)のへき緒さする。脚部は厚めにより内外面ともに不規則。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 燒成 褐色	口縫部1/6残存。
89 5-146	土師壺	8層 H27S	口径 (10.8) 脚径 (13.1)	やや弱い小さい複合の脚部。口縫部の粗度は較やかで、外方に直線的に開く。	外面口縫部ハナメハケ(?)のへき緒さする。脚部は厚めにより内外面ともに不規則。ナメハカから内面ヨコハケ、ナメハカから脚部ハケ後ナデ、下位ハメハカ。輪郭後ナデ。	胎土 砂粒・石粒を多く含む。 燒成 褐色	口縫部1/3 残存。
90 5-412	土師壺	8層 D32	底径 6.0	厚く突出する底部の中央は窓みを持つ。脚部の粗度は小さく、窓みやかなカーブを呈して立ち上がる。	底部ナメハケ(5条/口)、外面ヨコハケ、尾端ナメ。内面に指痕状痕跡がある。	胎土 砂粒・石粒を含む。 燒成 褐色	底部1/4残存。 底端完形。 内面に硬化物、 外側に付着物。
91 5-372	土師环	8層 G31 水戸内	口径 (14.0)	下位の裏張りが小さく、やや直線気味に立ち上がり、口縫部は内面残す。	内外面ともに丁寧なナデ、非常に平滑。	胎土 石英・砂粒を含む。 燒成 褐色	口縫部1/2残存。
92 5-945	須恵环	8層 F31 水戸内	口径 (12.3) 高径 3.6 底径 4.4	底部から直線的に立ち上がる肩部。脚部は外側に引き出され、丸く收める。全体に基盤が薄く。	底部糸切り未調整、外面ノタ目が明顯に残る。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 燒成 褐色	口縫部1/4残存。
93 5-325	灰釉壺	8層 F223	口径 (16.9) 高径 6.0 底径 (7.5)	壺底部や内面窓み、丸く收められた高台。脚部は内面直線気味に立ち上がり、口縫部は外側に引き出されない。	邊掛け施釉。底部糸切り未調整。	胎土 砂粒を含む。 燒成 褐色	
94 5-101 ①	須恵环	8層 洪武痕跡		脚部直線の宝珠状つまみを有する壺底。	外面直線気味により不明瞭だが、天井部に回転削りの痕跡。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 燒成 褐色	つまみはほぼ完 形。
95 5-101 ②	須恵环 長颈瓶	8層 洪武痕跡	口径 (13.2)	外反気味に立ち上がる口縫部。口縫部は肥厚し、上辺に引け出しして断面三角形を呈する。口縫部に断面三連形状の隆起が付される。	全体に厚誠。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 燒成 褐色	底部1/4残存。
96 5-87	須恵环	8層 F225	底径 (12.8)	断面西角形の低い貼り付け高台。脚部は浅く、内面窓みながら立ち上がる。	底誠により調整不明。底部糸 転ハラケグリ。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 燒成 褐色	底部1/9残存。
97 5-111	灰釉壺	6層 G32N	口径 16.9 高径 6.5 底径 7.1	高い直断面長方形の高台。脚部は深く、内面窓みながら立ち上がる。	底誠糸切り未調整。外面ノタ目が明顯。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 燒成 褐色	外面自然転、 内面に重ね燒成 痕あり。
98 5-8	小甕	6層 G31	底径 (8.4)	底部の丸い三角形高台。脚部は直線的に立ち上がる。	底部糸切り未調整。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 燒成 褐色	底部1/3残存。
99 5-122	土師环	6層	口径 (11.4)	小さい底部から直線的に外方に開く脚部。口縫部は丸く收める。	厚誠により調整不明。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 燒成 褐色	口縫部1/8残存。
100 5-53	灰釉壺	3層下 G29	口径 (12.8)	内面しながら立ち上がる脚部から、外縫合部外側に引き出しあくく收める。基盤が非常に厚い。	外面にノタ目が残る。	胎土 白色粒子を含む。 燒成 褐色	口縫部1/11残存。
101 5-57	小甕	3層 H30S	口径 7.4 高径 1.9 底径 3.8	やや内面気味に立ち上がり口縫部を丸く收める。	底部糸切り未調整。	胎土 砂粒を含む。 燒成 褐色	完品。
102 5-5	小甕	2層	口径 (9.8)	内面しながら立ち上がる脚部から、外縫合部を若干外側に引き出しあくく收める。	外面にノタ目が明瞭に残る。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 燒成 褐色	口縫部1/7残存。

第58表 6区 土器観察表

番号	器形	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	文様・調査等の特徴	粘土・焼成・色調	備考
1 6-1042	弥生壺	23番 D36S	口径 (28.0)	下半に最大幅を有する胴部、肩の張りはやや大きい。	肩部に半周以上による部位の平行弦紋、その中で解剖部位の平行弦紋で埋める。肩上部には半周性管による継走状況。下半は横筋の条線が施される。内面調整無ナダ。	粘土 全表面・砂粒・長 石を多量に含む。 焼成 やや良 褐色	肩部1/3残存。 外外面にスズ付 着。
16 6-795	弥生壺	18番 E38S	口径 16.7 底径 22.6 高さ 8.2	下位が大きく張る無花果形の形態。肩部から頸部へは緩やかなカーブを以て立ち上がり。腹部は大きく外反し、口縁部を面取りする單純口縫。	頸部に5条部位の横筋及び弦紋2段、肩部に単位不明の円形浮出文が施される。外縁に斜面不定方向のハサウエ後ナダ、頸上部一定方向のハサウエ、腹上部ヨコハケ (5条/cm)、下位一定方向のハサウエ。内面横筋ヨコハケ (5条/cm)、腰部ヨコハケ、腹部ヨコハケ、底部ヨコハケ、底部不定方向のナダ。底部外周不整。	粘土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 焼成 やや良 にぶい褐色	口縁部光形、肩 部3/4・底部3/4 残存。 口縫部内面～肩 部に赤彩の痕跡。 肩部外周に粉斑 模。
17 6-521	弥生壺	18番 E37S	口径 25.4	受口部に近い複合口縫。肩部は明瞭な輪郭を有し、内面気味に立ち上がり、内側へ折り返して認められる。頸部は太く短い。	15条部位の横筋及び弦紋2段、肩部5段を有する。口縫部に2本部位の横筋及び弦紋が4ヶ所貼付される。口縫部外周ヨコハケ (5条/cm)、底部外周方向のハサウエナダ、底部内面ヨコハケ (2条/cm)。	粘土 砂粒・石粒・白色 粒子・赤色粒子を含む。 焼成 やや良 にぶい褐色	口縫部3/4残存。 内外面に赤彩。
18 5-374	弥生壺	18番 D36N	口径 (11.6)	輪の抜けいや厚めの粘土層を貼り付け口縫部を面取りした折返し口縫。頸部から大きく外反して開く。	内外面ともに厚誠が著しい。頸部4条部位の横筋及び弦紋5段、腰部は4本部位?の神代序弦紋が施される。内面底部にヨコハケ (6条/cm)、腰部タテナマヘハケ (6条/cm)、底部ナダ。底部指印痕が頸部。	粘土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 普通 焼成 青褐色	口縫部1/3残存。
19 6-827	弥生壺	18番 D36N		肩部から直線気味に立ち上がり、外反する口縫部に粗い頸部。	頸部に9条部位の横筋及び弦紋。上位に1段目が複雑文、その中を3段に複数する。口縫部外周タテハケ (6条/cm)、腰部タテナマヘハケ (6条/cm)、底部指印痕が頸部。	粘土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 普通 焼成 内面 灰白色	肩部2/3・肩 部3/4残存。 頸部内面に赤彩 の痕跡。
20 6-329	弥生壺	18番 E42N	口径 (9.7) 底径 5.6	頸部は下位の張りが小さい無花果形、底径は大きく、やや厚く突出する。	頸部～肩部：8条部位の横筋及び弦紋。直徑に4個部位の円形浮出文。頸部は厚誠になり不明顯。外縫部下部に浅いハサウエ、内面ナダ。底部指印痕が頸部。	粘土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 普通 焼成 褐色	頸部～肩部1/2 残存。 底部完形。
21 6-924	弥生壺	18番 E36S	口径 (13.6)	人さく屈曲する短瓶の型。口縫部取り。	口縫部ヨコハケ (10条/cm)、外縫ナマヘハケ (10条/cm)、内面ヨコハケ (10条/cm)。	粘土 砂粒・白色粒子・ 黑色粒子を含む。 普通 焼成 青褐色	口縫部1/5残存。
22 6-772	弥生壺	18番 D37N	口径 (23.8) 底高 33.9 高さ (29.7) 底径 (11.0)	頸部は上半が張り、腰部から直線気味に立ち上がる。口縫部はハサウエによる割目が施され、輪郭部が細い。腰部は各部位を重ねて置き、外方への開闊が大きい。	口縫部面取り後、射め下方からハサウエ工具による割目を施すが、ハサウエナダより位相的にはヨコハケ (5条/cm)、腰部ヨコハケ (5条/cm)、中位ヨコハケ、腰部ナマヘハケ後ナダ。内面ヨコハケ。	粘土 砂粒・石粒・白色 粒子を含む。 普通 焼成 褐色	口縫部～腰部上 位1/3・腰部中 位1/2・腰部下位1/2 残存。 外周にスズ付着。
23 5-672	弥生壺	18番 D37N	口径 (21.6) 底径 (20.4)	頸部は下部が張る球状を呈する。口縫部は緩やかに内側を寄りながら屈屈し、外方へ開く。口縫部はハサウエによる割目。	口縫部は丸く肥厚化した後、射め下方よりY字型にしたる鋏み目を入れる。腰部ヨコハケ (5条/cm)、内面ヨコハケ (5条/cm)、腰部ナマヘハケ後ナダ。	粘土 砂粒・石粒を含む。 焼成 やや良 にぶい褐色	口縫部1/7残存。 外周スズ付着。
24 6-754	土師壺	16番 D35N SX61601	口径 (19.6) 底径 (31.8)	頸部は中位が大きく張り出す横筋文を有す。頸部は緩やかにカーブをして立ち上がり、輪郭的に大きく開く口縫部に統一。	口縫部内面に横文 (LR)、部分的に刃縫状跡と腰部正方形文、内形浮出文が施される。口縫部に刃縫状跡と腰部正方形文、内形浮出文が施される。口縫部タテラミガキ、腰部タテナマヘハケ後ナダ、下位ナダ。腰部ヨコハケ (6条/cm)、下位不定方向のハサウエ (12条/cm)。	粘土 砂粒・白色粒子を 含む。 焼成 良 淡黄褐色	口縫部1/15、肩 部下位1/2残存。 肩部上位位元 形。
25 6-700	土師壺	16番 C42S	口径 15.0	幅広の青い粘土層を貼り付けた射め口縫。太い頸部から腰部にかけて開きはやや小さい。	口縫部ヨコハケ後ナダ、外縫部頭部ヨコハケ後ナダ・ナマヘハケ (7条/cm)、腰部ヨコハケ後ナダ、内面ヨコハケ (7条/cm)。	粘土 砂粒・白色粒子を 含む。 焼成 やや良 にぶい褐色 内面 灰褐色	口縫部1/4残存。
26 6-586	土師壺	16番 D37N	口径 10.9	やや直線の張る頸部から大きいく屈曲して外方に開く口縫。	口縫部ヨコハケ後ナダ、口縫部内外面ともに不定方向のハサウエ (8条/cm)、腰部ヨコハケ後ナダ、内面ヨコハケ後ナダ。	粘土 砂粒・白色粒子を 含む。 普通 焼成 内面 にぶい褐色 灰黄色	口縫部3/4・腰 部1/3残存。
27 6-277	土師壺	16番 C39N	底径 7.0	平底の底部から外反気味に立ち上がる頸部。	腰部により内外面ともに調整不明顯。外縫部ヘタ後ナダ、内面ヨコハケ。	粘土 砂粒・多く含む。 普通 焼成 青褐色 内面 淡黄褐色	底部完形。
28 6-1019	小菅丸底 土器	16番 C43N SK61614	口径 12.4 底高 7.0 高さ 9.4 底径 3.1	側平面が半球状の底盤。口縫部は直線的に大きく外方に開く。底盤は上部底に座む。	口縫部内外面ともにハサウエ後ナダ。口縫部内面ともにナマヘハケ (7条/cm)、腰部ヨコハケ後ナダ。腰部～底盤裏側条文のハサウエ。内面はスズの付着により不明。	粘土 砂粒・白色粒子を 含む。 焼成 やや良 淡黄褐色	口縫部一部欠損。

番号	器形	出土地点	法量 (an)	形態の特徴	文様・調整等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
29 6-300	土師壺	15層 D38N	底径 9.9	やや内溝気味に外方に開く肩台部。肩部内側に無い。口端部を扁り付け厚化する。	肩部のねり付け部分指揮され、外周タテケ (7条/φ)、背面ヨコケ。	胎土 砂粒・石粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 良 に近い褐色	底部ほぼ完形。
30 6-173	土師壺	15層 D38	口径 (12.7)	頸部から外反して開く単口縫。		胎土 砂粒・石粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 良 に近い褐色	口縫部L/残存。
31 6-163	土師壺	15層 D38	口径 (26.0)	やや外に開き気味に立ち上がる複合口縫。	外面ナメハケ後、焼成の沈殿を施す。内部ヨコハケ後ナデ。	胎土 砂粒・長石・赤色チャートを含む。 焼成 色調 やや良 明褐灰色	口縫部L/8残存。
32 6-115	土師壺	14層 F37N	口径 基高 底径 (13.0)	底部下位に明瞭な縫を持ち、外方に開く。やや内溝気味に直縫部に開きながら餘る円錐状を呈す。	杯形の外縫とともにナメハケ (9条/φ)、肩部外縫上位ナメハケ、下位ナデ。底部内縫へラケズ。底部内面タテケ、内面ナデ。	胎土 砂粒・石粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 良 浅黄褐色	口縫部L/2・報 部L/4残存。
33 6-160	土師壺	14層 C38S	口径 (12.4) 基高 16.4 底径 14.5	頸部は僅りの小さい疵を呈す。口縫は内側に開き立てるが、外縫はやや内溝気味に開き、内面充てんして立ち上がる。	口縫部内外縫ともにナメハケ (5条/φ)、肩部外縫上位ナメハケ、内面ナデ、底部内縫が堅調。	胎土 砂粒・石粒を多く含む。 焼成 色調 やや良 灰褐色	口縫部L/5・報 部～底部4/9残存。
34 6-88	土師壺	15層 F38N	底径 (6.2)	平坦な底部から内溝気味に立ち上がる肩部。	底部余切り未調整。外面にノタ目が残る。	胎土 黒色粒子・白色粒子を含む。 焼成 色調 有過 に近い黄褐色	底部L/3残存。
35 6-1084	灰釉壺	11層 E40S	底径 (6.0)	底部が緩やかな三角形高台。肩部は直線的に開く。	底部余切り未調整。高台接合部ナデ。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 良 灰白色	底部L/2残存。
36 6-1082	灰釉壺	11層 E59N	底径 5.9	頸部が丸味を帯びる三角形高台。	底部余切り未調整。高台接合部ナデ。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 良 灰白色	底部一部欠損。
37 6-1085	山茶碗	11層 C36	底径 6.2	頸部が内溝気味の低い三角形高台。	底部余切り未調整。高台接合部ナデ。	胎土 白色粒子を多く含む。 焼成 色調 やや收 灰白色	底部2/3残存。
38 6-55①	須恵壺	11層直上 B36	口径 基高 底径 (5.0)	底部から肩下位は直線的に立ち上った後、内溝気味に開く。口縫部は外に引き出され丸く収める。	底部ナデ。	胎土 砂粒・黒色粒子を含む。 焼成 色調 やや收 灰白色	口縫部2/3残存。
39 6-55②	須恵壺	11層直上 B36	口径 基高 底径 (5.2)	底部からやや内溝気味に立ち上る肩部。口縫部は外側に引き出され繊維状となる。	底部余切り後ナデ。外面ノク目が明顯。	胎土 砂粒・黒色粒子を含む。 焼成 色調 やや收 灰黄色	口縫部・肩部一 部欠損。
40 6-55③	須恵壺	11層直上 B36	口径 基高 底径 (4.7)	底部から直線的に立ち上がる肩部。口縫部は丸く收められる。	底部余切り後ナデ。外面ノク目が明顯。	胎土 砂粒・石粒・黒色粒子を含む。 焼成 色調 やや收 灰黄色	口縫部・肩部一 部欠損。
41 6-55④	須恵壺	11層直上 B36	口径 基高 底径 (5.2)	中位から内溝気味に立ち上がる肩部。口縫部は若干厚化する。	底部が余切り後ナデ。	胎土 砂粒・黑色粒子を含む。 焼成 色調 やや收 灰黄色	完形品。
42 6-70	土師壺	11層直上 F37N	口径 (11.2) 基高 4.1 底径 (7.2)	大きい平底の底部から直線的に立ち上がる構造を呈す。	内外面ともに摩擦により詳細不明。内面底部ラミガキが。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 やや良 灰褐色	口縫部L/2・底 部L/2残存。
43 6-65	灰釉壺	11層直上 B36N	底径 (5.9)	平底の底部から直立気味に内湾して立ち上がる。	内面ノタ目が明顯。	胎土 白色粒子を含む。 焼成 色調 オリーブ色 外縫 内縫 斜面 灰白色	底部L/2残存。
44 6-1080	灰釉壺	10層 C36S	底径 (6.4)	外に大きく張る縫部が丸い高台。縫部は内溝気味に立ち上がる。	底部余切り未調整。高台接合部ナデ。	胎土 白色粒子・黒色粒子を含む。 焼成 色調 良 灰白色	肩部～底部L/3 残存。
45 6-113	須恵壺	9～10層 C38	口径 (11.8) 基高 3.7 底径 4.7	平底の底部から大きいくぼみながら立ち上がる。	底部余切り後ナデ。内面に重ね燒成痕。自然縫が残る。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 やや收 灰白	口縫部L/4残存。 底部元形。
46 6-42	灰釉大壺	9～10層 Tレンジ P3	底径 8.6	外に張り出す四角形高台。	底部余切り後ナデ。内面に重ね燒成痕。自然縫が残る。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 やや硬 灰白色	底部一部欠損。 内面重ね燒成痕。 自然縫。
47 6-1087	小甕	9～10層 F36N	口径 (7.6) 基高 2.6 底径 (4.2)	平底の底部から肩部は内溝気味に立ち上がり、口縫部を内側に丸く收める。	底部余切り未調整。外面上ノタ目が残る。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 やや硬 灰白色	1/4残存。

番号	形態	出土地点	法量(cm)	形態の特徴	文様・調整等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
45 6-30	灰動 反覆環	9番 D37N	9+10層 底径 9.8	底部は中央が垂れ、面みが大きい。腹部は頭きが小さく、内面 気味にたる上がる。	底部ナデ、腹部外面凹起へラケ スリ、内面ノタ目が明顯。	胎土 砂粒・白色粒子・ 黒色粒子を含む。 焼成 やや變 色調 灰白色	肩部1/3・底部 2/3残存。 内面底部、肩部 外面に自然軋。
49 6-107	上部臺	9番 C35	口径(30.7)	腹部から水平気味に大きめ屈曲し、腹部を若干たるませて丸く 収める。	摩滅が著しいが、内外面ともに ナデ、外面部に堆積状態が残る。	胎土 砂粒・白色粒子を 含む。 焼成 普通 にぶい黃褐色	口縁部1/2残存。
50 6-108	須恵環	9番 D36		偏平につぶれた宝珠状のつまみ。	内外面ともに摩滅。回転ナデ。	胎土 白色粒子を含む。 焼成 普通 灰白色	天井部1/4残存。
51 6-1090	小底	8番 E37S	口径 高さ 底径 8.1 2.2 3.8	内部氣味に立ち上がり、口端部 を丸く收める。	底部糸切り未調整。外面にノタ 目が明顯。	胎土 砂粒・黒色粒子を 含む。 焼成 やや變 オリーブ灰色	口縁部一部欠損。 内面に一部附着。
52 6-1079	須恵環	5番 E37S	口径(17.2)	腹部断面三角形を呈す。	輪強いナデ。	胎土 砂粒・白色粒子・ 黒色粒子を含む。 焼成 灰白色	1/12残存。
53 6-1	土輪環	3題上	口径(13.7)	半球状を呈す肩部、口縁部は垂 直気味に丸く收められる。	内外面ともに摩滅により調整不 明顯。外面部に布須痕。	胎土 白色粒子・赤色粒 子を含む。 焼成 やや不良 褐色	口縁部1/4残存。
54 6-1076	上部臺	河川	口径(30.7)	大きく外反する口縁、中位には 厚い断面三角形を呈す実率。	内外面ともに摩滅により調整不 明顯。	胎土 砂粒・石粒が多く 含む。 焼成 やや不良 色調	口縁部1/8残存。
55 6-1077	土輪臺	河川	口径(18.2)	直線的に外に聞く口縁部。腹部 を若干肥厚する。	内外面ともに摩滅により調整不 明顯。内面ナデか。	胎土 白色粒子・赤色粒 子を多く含む。 焼成 普通 にぶい褐色	口縁部1/7残存。
56 6-1074	灰動碗	河川	口径(14.8)	内面気味に腹部は立ち上がり、 口縁部を若干外に引き出し、丸 く收める。口縁部の内壁は薄い。	掛け掛け施釉。	胎土 白色粒子を含む。 焼成 やや變 灰白色	口縁部1/2残存。
57 6-1072	灰動碗	河川	口径(16.6)	内面気味に立ち上がる頭部、口 縁部を若干外に引き出し露台状 に仕上げる。	回転ナデ。	胎土 砂粒・白色粒子を 含む。 焼成 やや變 灰白色	口縁部1/1残存。
58 6-1073	灰動碗	河川	口径(11.2)	頭部はやや深めで内面気味に立 ち上がり、口縁部を外に引き出 し丸く收める。	回転ナデ、外面にノタ目が残る。	胎土 砂粒・白色粒子を 含む。 焼成 普通 灰白色	口縁部1/14残存。

第59表 7区 土器観察表

番号	型形	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	文様・調整等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1 7-844	弥生壺	5号方形 周溝基 西側周溝	口径 (28.0) 底径 5.7	腹部は下部を外反するが、建伏に大きく張り出す。縦長い肩部は2段に分かれ、下段は矮やかな腰立ちを持ち、上段は円筒状を呈し、直面に立ち上がる。	腹部は横文 (1/2)、境の上には菱形浮文を描いた後、三条心形浮文により区別する。口部は平行花口により区別する。	胎土 砂粒・石粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 白 灰黄褐色	頭部1/2・腹部1/3、底部3/4残存。
2 7-878	弥生壺	6号方形 周溝基 東側周溝	口径 8.1 底径 (20.0)	腹部下半が大きく張り出す下垂れ気味の肩部。下位は矮やかな腰立ちと、上位は肩の張りながら直角部に立ち上がる。腹部は垂直部伸び、腰や外反、上端をよく内反する受け口状を呈す口絵形に続く。	全体に彫刻・削除が著しく、文様等にほとんど不明。口部は直角部に複数の横溝がある。腹部は横文 (1/2)、境の上には菱形浮文を描いた後、三条心形浮文により区別する。腹部は上位は腰溝部を有するが、下位は直角部に立ち上がる。腹部は直角部伸び、腰や外反、上端をよく内反する受け口状を呈す口絵形に続く。	胎土 砂粒・白色粒子・黑色粒子を含む。 焼成 色調 普通 褐色	口縁3/4・頭部 4/5・腹部1/4 残存。
3 7-854 7-821	弥生壺	8号方形 周溝基 南側周溝 12号方形 周溝基 西側周溝	口径 (10.4) 底径 (9.7) (29.6) 底径 6.8	上部が張る長錐状の肩部を有する。下位は矮やかな腰立ちと、上位は肩の張りながら直角部に立ち上がる。腹部は垂直部伸び、腰や外反、上端をよく内反する受け口状を呈す口絵形に続く。	全体に浅い斜面状より腰溝なし。腹部は下位が矮やかな腰立ちと、上位は肩の張りながら直角部に立ち上がる。腹部は直角部伸び、腰や外反、上端をよく内反する受け口状を呈す口絵形に続く。	胎土 砂粒・白色粒子・黑色粒子を含む。 焼成 色調 白 灰黄褐色	口縁部・頭部1/2・ 腹部1/3残存。 底部ほぼ完存。
4 7-827	弥生壺	12号方形 周溝基 底土内	口径 (10.5) 底径 (6.5)	腰の小さな長錐状を呈す肩部。底部はやや厚く突出する。	外外面とも腰溝により腰溝なし。外面上に複数指捺压痕が認められる。	胎土 砂粒・長石・黑色粒子・藍色粒子・赤色粒子を含む。 焼成 色調 普通 に互いに黄褐色	頭部～底部1/4 残存。
5 7-870	弥生壺	12号方形 周溝基 西側周溝	口径 5.4	小さい腹部は中央がやや膨らみ不安定。腹部は大きく外方に張り出し、内窓気味に立ち上がる。	腹部外面タテヘラミガキ、内面ナナハケ (7条・1cm)、底部木輪板か。内面腰溝状のつぼ。	胎土 砂粒・白色粒子・藍色粒子を含む。 焼成 色調 白 黒色	頭部2/3残存。 底部完存。
6 7-866	弥生壺	14号方形 周溝基 東側周溝	口径 (10.5) 底径 31.4 25.0 6.0	上部に最大径を持つ偏平した球状の肩部。頭部は太く下広がりで中位で腰やかな腰立ち。腹部は大きく外反する。	文様部は3ヶ所に分けられ、中間部腰溝2ヶ所を有する。口縁部は斜め腰溝の文様帶に、下位は直角部伸び、腰や外反する。腹部は直角部伸び、腰や外反する。腹部は直角部伸び、腰や外反する。腹部は直角部伸び、腰や外反する。	胎土 砂粒・白色粒子・黑色粒子を含む。 焼成 色調 やや良 オーリーブ黒色	頭部～腰部2/3 頭部～頭部2/3 残存。
13 7-535	弥生壺	10号 ES51N 砂埋蔵	口径 (8.6)	腰いわゆる腰やかに外反し、受け口状をなす口部。	全体に腰溝があり不明瞭。口縁部に円形浮文。外面上から斜め腰溝と内窓に張り出す。口縁部下位に5条单位の腰溝き裂文。腰溝部位不明の腰溝き裂文。腹部は直角部伸び、腰や外反する。腹部は直角部伸び、腰や外反する。腹部は直角部伸び、腰や外反する。	胎土 砂粒・石粒を含む。 焼成 色調 普通 に互いに褐色	口縁部～頭部1/2 残存。
14 7-504	弥生壺	10号 ES51N	口径 (25.7)	直立気味に立ち上がる肩部から大きく外方に開く口部。	口縁部直下後、竹管状工具による複数のナメラ方向の跡み。外面上ナメラハケ (15条・1cm)、内面ナメラハケ。内面腰溝部に指捺压痕。	胎土 砂粒・石粒・赤色粒子を含む。 焼成 色調 やや良 に互いに褐色	口縁1/2残存。 外表面スス付着。
15 7-537	弥生壺	10号 ES51N SK71005	口径 (14.0)	肩部から腰部にかけてやや直線気味に立ち上がる。頭部は太目で短く、口部は大きく述べる肩口部。	外外面ともに腰溝により腰溝不 明瞭。頭部から肩部にかけて、単位別に腰溝き裂文が故状況。頭部に内窓の円形浮文2ヶ所。腹部に内窓にナナハケの痕跡。口縁部は2ヶ所。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 普通 に互いに黄褐色	頭部～胴部1/3 残存。
16 7-771	弥生壺	10号 ES51N SK71003	口径 (25.0)	上位に最大径を持つ肩部。下位は小さくすばまり肩部等一統。口縫部は肥厚化し、腰やかに屈曲して、外方に開く。	口縁部直下へケ工器具による横方向から別の目。外面上ナメラハケ (10条・1cm)、内面ナメラハケ～腰溝ヨコハケ、肩部ナメラハケ中位ヨコハケ (8条・1cm)。	胎土 砂粒・石粒・赤色粒子を含む。 焼成 色調 普通 に互いに褐色	口縁部～胴部1/4 残存。 外表面スス付着。
17 7-794	弥生壺	10号 D46	口径 (26.0)	下半が大きく張り出し、堅密な腰を有する低い肩部。腹部は大きくなり腰やかに太い腰部へ続く。	腰部内面と外面ともにナメラ、外面腰溝により不明瞭。ナメラハケ後1ヶ所ナメラハケ。内面腰溝ナメラハケ。頭部上半ナメラハケ。足部頭部前いわゆるヨコハケ (5条・1cm)。指捺压痕に記載する。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 やや良 に互いに褐色	頭部1/2残存。 外表面青色の痕跡。
18 7-797	弥生壺	10号 B46	口径 18.0 底径 23.1 (28.0) 底径 8.9	やや膨らむ気味の球形を呈す肩部。口縫部は肥厚化しながら直角部として開く形態。腹部は大きくなり腰やかに内窓気味に開く台形。	口縫部内面ともにナメラ、外面腰溝により不明瞭。ナメラハケ (4条・1cm)、内面腰溝ヨコハケ (6条・1cm)、腰ヨコハケ後ナメラハケ。	胎土 砂粒・石粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 普通 に互いに黄褐色 内面 橙色	口縫部完存。 頭部1/3残存。 底部3/4残存。 外表面スス付着。

番号	墓形	出土地点	法量(㎥)	形態の特徴	文様・調整等の特徴	埴土・焼成・色調	備考	
19 7-467	弥生壺	10輪上面 D48S	口径 底高 腰径 8.0	17.0 24.2 (21.8) 8.0	肩部は中央よりやや上に最大径を持ち、下半は緩やかなカーブを描いてぼりまくり胴部で続く。口部部より下の字は筋目で組み、反対して單口縫。胴部は直線的に伸びる。合形。	口縫部外面ナメハケ後ナデ、内面摩滅により不明。胴部外面ナメハケ(5条/cm)、内面上位ナメハケ、中位一下位摩滅により不明。底部前面ナメハケ、内面ハケ兼用テ。	埴土 砂粒・石粒・赤色 粒子を含む。 焼成 普通 にぶい褐色	口縫部3/5、腰 部2/5残存。 外面スス付着。
20 7-468	土師壺	10輪上面 D48S	口径 底高 19.6	14.2 (23.0) (25.0)	肩部中央位に最大径を有するが、腹部の径は小さい。口部部は丸味を帯びながら緩やかに屈曲し、底部に開く單口縫。	内外面ともに摩滅により調整不分明。外面上ナメハケの痕跡。内面ヨコハケ、指捺圧痕。	埴土 砂粒・石粒を多く 含む。 焼成 普通 橙色	口縫部完形。 腰部1/2残存。
21 7-386	弥生壺	10輪 D47S	口径 底高 16.6	(23.0) (25.0)	上位に最大径を有する偏平気味の胴部。下部へは緩やかにカーブを描き、底部は丸く、字は細め。口部部の字は丸く、内反気味に開く單口縫。	内外面ともに摩滅、摩滅により不明。底部外面ヨコハケ(5条/cm)、内面ヨコハケ及びナデ、指捺圧痕が認められる。	埴土 砂粒・石粒・白色 粒子を多く含む。 焼成 普通 にぶい褐色	口縫部～胴部1/3 残存。
22 7-466	土師壺	10輪上面 D48S	口径 腰径 (25.6)	(16.6) (25.6)	S字状縫合付垂壺。胴部上半位に最大径を有し、直線気味に台形部に統べてやや膨らむ。口部部は丸味を帯びながら緩やかに屈曲し、底部は丸く、腰部は丸く収められる。	口縫部内外面ともにナデ、胴部は長いハケ(5条/cm)、内面摩滅により不明。底部外面ヨコハケ(5条/cm)、内面ナメハケ、指捺圧痕が認められる。	埴土 砂粒・石粒・白色 粒子を含む。 焼成 普通 にぶい黃褐色	口縫部～胴部1/2 残存。
23 7-404	土師壺	10輪上面 F51	口径 底径 9.1	(16.7) (24.2)	腰部を欠損しており、全体の形状は不明。口縫部の字は緩やかで丸味を帯び、底部は丸く、腰部は直線的で丸く、台形部の腰部は直線的で外方に開く。台形部の腰部は、中位の内面が若干厚ずる。	口縫部内外面ともにナデ。胴部は長いハケ(5条/cm)、内面摩滅により不明。底部外面ヨコハケ(5条/cm)、内面ナメハケ、指捺圧痕が認められる。	埴土 青岳・砂粒・白色 粒子を含む。 焼成 普通 やや黄褐色	口縫部1/2残存。 外面スス付着、 内面炭化物斑。
24 7-388	土師壺	10輪 C47N	口径 底高 腰径 9.4	(12.0) (24.2) (16.2)	長脚壺の型、下半部腰部を膨らむ。口縫部は丸く、腰部は丸く、底部は中央がやわらかに膨らむ。	口縫部摩滅により不明。ナデ、内面ヨコハケ(5条/cm)、内面不均方向の後ナデ、肩部に指捺圧痕が明瞭。	埴土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 焼成 外面 灰色 内面 にぶい黃褐色	1/2残存。
25 7-385	土師鉢	9輪 D54	口径 (14.4)	半球状の脚部から丸味を帯びながら広口。口縫部はさらに外方に開く。内面には明瞭な縦を有す。	口縫部ナデ、肩部外面は特に強いナデ、肩部ハケ兼用ナデ。内面粗面ヨコハケ(5条/cm)、内面摩滅。	埴土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 焼成 普通 にぶい黃褐色	口縫部～胴部1/5 残存。	
26 7-439 ①	土師壺	9輪 F54	口径 14.0	外反しながら開く口縫部。壺部は若干内側に入る。器壁は厚い。	外面ナメハケ(5条/cm)後ナデ、内面ヨコハケ後ナデ。	埴土 砂粒・石粒を含む。 焼成 普通 にぶい褐色	一部欠損。 外面上スス付着。	
27 7-442	土師壺	9輪 F54	口径 底高 腰径 (16.0)	(14.6) (17.2) (16.2)	中位に最大径を有す球形の脚部。口縫部の字はややく立ち内反気味に開く。	外面口縫部ナメハケ(8条/cm)、内面ヨコハケ(5条/cm)、中位以下摩滅が強いのが、ナメハケか、内面口縫部ヨコハケ後ナデ、胴部ナデ。	埴土 砂粒・石粒を多く 含む。 焼成 普通 橙色	口縫部～胴部1/2 残存。 外面上スス付着。
28 7-337	土師环	8輪 D46S SD70801	口径 (13.0)	横環跡。短い立ち上がりは内幅し、口縫部をつまみ上げる。	内外面ともに摩滅が著しく、調整不分明。口縫部ナデ。	埴土 砂粒・白色粒子を 含む。 焼成 普通 褐色	1/2残存。	
29 7-179 ④	土師壺	8輪 C49 SD70801	腰径 (9.0)	腰部中位に最大径を持つ長脚壺。全体に丸味を帯びる。	腰部外面部位の長いナテハケ(10条/cm)、内面ヨコハケ、指捺圧痕が認められる。底部裏面に窪部。	埴土 砂粒・白色粒子を 含む。 焼成 普通 褐色	腰部～底部1/3 残存。	
30 7-328	土師壺	8輪 C48 SX70801	口径 底高 7.1	20.4 5.0 4.6	大きさ腰部がある建設の脚部。口縫部はぐく寸位で腰部を形成する。外方に開く。腰部の字は肥厚化する。底部は外張・突出せず、中央内部内面が肥厚する。	口縫部はナテにより平坦に仕上げられる。口縫部外面は特に強めで、内面摩滅が認められる。内面ヨコハケ後ナデ、内面ヨコハケ(5条/cm)、内面モヨコハケ(5条/cm)、内面ナメハケ後ナデ、指捺圧痕が認められる。底部裏面に木漏れ。内面ヨコハケ(5条/cm)後ナデ。	埴土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を多く含 む。 焼成 普通 外面 褐色 内面 灰色	口縫部一部欠損。 底部3/4残存。
31 7-114	土師环	8輪 F49	口径 底高 腰径 4.6	12.4 5.0 4.6	小さい直筒から直線的に立ち上がり、肩部中位で大きく盛り出しどとし、内側寄る口縫部。口縫部は若干内側にしまる上上がる。	内外面ともに摩滅により調整不分明。内面ヨコハケ(5条/cm)後ナデ。	埴土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 焼成 普通 褐色	口縫部一部欠損。
32 7-370	土師环	8輪 E50	口径 底高 (4.6)	(14.0) (4.6) (4.6)	丸底の底部を持つもの。胴部中位で屈曲し、やや外反気味に立ち上がる。	内外面ともに摩滅により調整不分明。	埴土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 焼成 普通 褐色	1/2残存。
33 7-175 ①	土師环	8輪 C49N	口径 底高 4.6	(13.3) (4.6)	丸底の底部を持つもの。胴部中位で屈曲し、やや外反気味に立ち上がる。	口縫部外面部位ともにナデ。胴部外面ナメハケ(5条/cm)、内面摩滅により不明瞭、ナメハケ。	埴土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 焼成 普通 褐色	明褐色 にぶい黃褐色
34 7-113	土師碗	8輪 F49	口径 底高 7.1	(20.8)	半球状の腹部、腰部で腰やかに曲じ、口縫部は外方に開き、壺部を丸く收める。	口縫部外面部位ともにナデ。胴部外面ナメハケ(5条/cm)、内面摩滅により不明瞭、ナメハケ。	埴土 砂粒・石粒・赤色 普通 にぶい黃褐色	口縫部～胴部1/5 残存。

番号	器形	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	文様・調査等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
35 7-179 ③	土師壺	8層上 C49N	口径 (18.3)	直筒的に外に聞く口断部。口縁部内側は横縫の狭い筋土帯を貼り付け肥厚化する。	口端部ナデ。外面板ナデ、内面ヨコハケ (7箇所/cm)。	胎土 砂粒・白色粒子 燒成 やや硬 色調 黄褐色	口縁部1/2残存。
36 7-66	土師高杯	8層 D53	底径 (11.0)	やや膨らみながら伸びる円筒状の脚柱部。重みで大きい。	外面断部により調整不規則。外面脚柱部ナデヘラヨカギ、内面ヘラヨカギ。脚部外面ナデか、内面ヨコハケ後ナデ。	胎土 砂粒・石粒を含む。 燒成 普通 外腹 内面 褐色 にぶい黄褐色	脚部1/4残存。 脚柱完。
37 7-332	須恵壺	8層 E52	口径 (11.9) 基高 4.5 底径 8.3	やや丸みを持った断面西角形の高台。脚部は直立気味に立ち上がる前輪を呈する。	外腹にも摩滅により不明瞭。底部回転ヘラケツリか。	胎土 砂粒・黒色粒子 燒成 普通 内面 黄褐色	口縁部1/3残存。 底部一筋欠損。
38 7-250	灰釉瓶	8層 E52	口径 (17.0) 基高 5.1 底径 7.1	内側する瓜形高台。脚部は内側して立ち上がり、上部は脚部が外側に引き出され、錐音状に認められる。	底部余切り後ナデ。	胎土 砂粒・赤色粒子を含む。 燒成 普通 灰白色	口縁部1/16、脚部 一部4残存。 内面に落灰有。 重ね燒成。
39 7-369	灰釉瓶	8層 F51	口径 (15.2) 基高 5.1 底径 8.1	やや外方に張り出す方形容の高台。脚部は内側して立ち上がり、口断部を若干外に突出ししく認められる。	高台脚部ナデ。内腹ともにノタ目が明瞭に残る。	胎土 砂粒・赤色粒子 燒成 普通 灰白色 一部にぶい 黄褐色	口縁部～脚部1/3 残存。 重ね燒成。
40 7-179 ②	土師壺	8層上 C49N	底径 10.9	若干内側気味に立ち上がる直筒型の脚部、全体に重みが大きい。	外面ナメナヘケ (8条/cm)、下位はナデ。内面ヨコハケ (6条/cm)、一部指痕紅斑が認められる。	胎土 砂粒・石粒を多く含む。 燒成 普通 内面 黄褐色	脚部下茅～底部 1/3残存。
41 7-234 ③	須恵壺	8層 E49N SR70801	口径 (16.0) 基高 4.6	天井部が扁平腰状で、丸柱が並びながら斜面に傾く。身上は鋸く深い凹縫で作り出す。口端部は内側。	天井部約2/3まで回転ヘラケツリ、前は回転ナデ。口端部は斜めに底張後、深い凹縫を施す。内腹ノタ目が明瞭に残る。ロクロ左回転。	胎土 砂粒・石粒・白色 粒子を含む。 燒成 普通 灰白色	天井部～口縁部 1/3残存。
42 7-201	須恵壺	8層 C49N SR70801	口径 (13.6) 基高 4.5	天井部から底張し、直筒気味に聞く。口端部に縦く、身上は鋸く深い凹縫で作り出す。口端部は内側。	天井部約2/3まで回転ヘラケツリ、後は回転ナデ。内腹ノタ目が残る。ロクロ左回転。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 燒成 普通 灰白色	口縁部1/20、天 井部1/3残存。
43 7-248	須恵壺	8層 D49 SR70801	口径 (13.2) 基高 3.5	天井部が平滑で、身上は丸柱が並びながら斜面に傾く。身上は鋸く深い凹縫で作り出す。口端部は内側。	天井部約2/3まで回転ヘラケツリ、前は回転ナデ。内腹ノタ目が残る。ロクロ左回転。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 燒成 普通 灰白色	口縁部1/6、天 井部2/3残存。
44 7-235 ②	須恵壺	8層 F48S SR70801	口径 (13.6) 基高 5.1 底径 5.0	底盤が平坦気味の脚部は斜くやかとなる。身上は縦く、身上は斜めに底張して立ち上がる。内腹ノタ目が残る。	底盤回転ヘラケツリ、他は回転ナデ。内腹ノタ目が明瞭。ロクロ右回転。	胎土 砂粒・石粒・白色 粒子を含む。 燒成 普通 灰白色	3/5残存。 口縁部の火虫が多い。
45 7-234 ②	須恵壺	8層 E49 SR70801	口径 (12.4) 基高 4.1 底径 7.0	平坦な底盤、脚部は斜くやかに外方に聞く。立ち上がりは内側にしており、脚部が厚化し、深い沈溝が施される。	底部回転ヘラケツリ、他は回転ナデ。内腹ノタ目。ロクロ左回転。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 燒成 普通 灰白色	口縁部～脚部1/5 残存。 底盤完。
46 7-255 ①	須恵壺	8層 F48S SR70801	口径 (12.7) 基高 5.1 底径 (8.1)	底盤から内側気味に立ち上がる。受け部はやや反戻する。立ち上がりは内側にして、脚部を丸く収める。	全体に摩滅が著しい。底部回転ヘラヨカギ、内腹ノタ目が明瞭。ロクロ右回転。	胎土 砂粒・黒色粒子 白色粒子を含む。 燒成 普通 灰白色	口縁部～底盤1/2 残存。
47 7-187	須恵壺	8層 E49N SR70801	口径 (11.8) 基高 5.3 底径 (4.0)	円錐状に聞く。身上はやや内側にする。全体に墨書きが薄い。	底部～脚部の1/3回転ヘラケツリ、前は回転ナデ。ロクロ左回転。	胎土 砂粒・石粒・黑色 粒子を含む。 燒成 普通 灰白色	口縁部1/20、底 部1/4残存。
48 7-177	須恵壺	8層 D50N SR70801	口径 (12.4) 基高 4.8	脚部から外反気味に聞く。受け部は斜めに作られ唇部のやや厚い立ち上がりがある。脚部は直筒気味に斜めに底張して立ち上がる。身上は斜めに底張して立ち上がる。	底部回転ヘラケツリ、他は回転ナデ。ロクロ右回転不明。	胎土 砂粒・白色粒子 黑色粒子を含む。 燒成 普通 灰白色	口縁部～脚部1/4 残存。
49 7-165	須恵高杯	8層 C49N SR70801	底径 (13.2)	長脚2段高杯。脚部は脚で下指してあり、形状は不明。床盤下位は斜めに底張する。受け部は大きめに回転するのみ、立ち上がりは内側し、丸く収める。	全体に摩滅が大きい。通し窓間に横い小窓。脚部はナデにより内側気味に立ち上げる。身上は斜めに底張して立ち上がる。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 燒成 普通 灰白色	环部1/3、脚部 1/2残存。 外腹に落灰。
50 7-148	須恵 長瓶瓶	8層 E48S SR70801	脚径 17.3 高合径 9.1	脚部は直筒が丸柱を帯びながら大きめに張り出している。身上は斜めに底張する。身上は斜めに底張する。	脚部回転ヘラケツリ、底部回転ナデ。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 燒成 普通 灰白色	脚部欠損。 脚上半に降灰。 自燃。
51 7-245 ②	土師壺	8層 D49S SR70801	口径 10.6 基高 5.9	横幅広。丸柱の底盤から脚部を斜めに底張する。身上は斜めに底張する。受け部は大きめに回転するのみ、立ち上がりは内側し、丸く収める。	内腹ともにナデ。内腹は一部ヘリミガキ。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 燒成 普通 灰白色	口縁部、底部 一部欠損。

番号	器形	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	文様・調査等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
52 7 - 245 ①	土師環	8層 D48S SR70801	口径 高さ 底径 2.0	丸底の底部から半球状に立ち上がりがある脚部、受け口は平坦、短く立ち上がりは内傾し、丸く收める。	底盤が寄り外側面ともに調整不明。	砂粒・白色粒子・赤色粒子を含む。 焼成色調 青褐色 内輪 褐色	口縁部一部欠損。
53 7-178	土師環	8層 D48N SR70801	口径 (13.0) 高さ 底径 (7.4)	平底の底部から内窓気味に立ち上がる脚部、口縁部は内窓し端部をつまみ上げる。	内外面ともに厚壁。底部裏面に木炭斑。内面に指痕底。	砂粒・白色粒子・赤色粒子・蒸母を含む。 焼成色調 やや不良 にぶい褐色	1/4残存。
54 7-186	土師環	8層 E48N SR70801	口径 (11.8)	平底の底部から緩やかに立ち上がり、中央で屈曲し、外反気味に立ち上がる。	厚壁により調整不明。底部裏面に木炭斑。	砂粒・石粒を含む。 焼成色調 青褐色 褐色	口縁部1/4・腹部～底部1/3残存。
55 7 - 228 ②	土師環	8層 E48N SR70801	口径 (14.4) 高さ 底径 5.8	丸底の底部、脚部は深めで、やや外反気味。上部で屈曲し、外反気味に立ち上がる。	厚壁により調整不明。口縁部ナデ、内面底部にうき印記。口縁部外端、脚部裏面に黒色仕上げの跡。	砂粒・白色粒子を含む。 焼成色調 灰黄色	口縁部1/10・肩部1/6残存。
56 7 - 230 ③	土師環	8層 E48S SR70801	口径 (16.0) 高さ 底径 2.7	丸底の底部、脚部は深めで、やや外反気味。上部で屈曲し、外反気味に立ち上がる。	厚壁により内外面ともに調整不明。口縁部ナデ。内面に指痕底。	砂粒・白色粒子・石粒を含む。 焼成色調 赤色	口縁部1/8・肩部～底部2/3残存。
57 7 - 254 ②	土師環	8層 F49 SR70801	口径 (12.4) 高さ 底径 5.4	平底の底部からやや内窓気味に立ち上がる脚部。若干歪みが大きい。	底部糸切り未調整。他は回転ナデ。	砂粒・白色粒子を含む。 焼成色調 青褐色	口縁部～肩部1/2残存。底部は完形。
58 7-181	土師環	8層 D48N SR70801	口径 (12.0) 高さ 底径 5.4	平底の底部からやや内窓気味に立ち上がる脚部。若干歪みが大きい。	厚壁により調整不明。	砂粒・白色粒子・赤色粒子を含む。 焼成色調 青褐色	口縁部～肩部1/2残存。底部は完形。
59 7-233	土師高环	8層 D49N SR70801	底径 (12.3)	太く直線的に外方に聞く脚部、肩部の凸部は小さい。	外面部テハケ (8名/cm) 後ヨコナデ、内面脚部ヘラクズナデ、内面ヨコカヘ、脚部輪郭も要明確。	砂粒・白色粒子を含む。 焼成色調 褐色	肩部1/2残存。
60 7-163	土師壺	8層 D49 SR70801	口径 (14.0)	大きくなっている肩部から、直曲り直立気味に立ち上がる脚部。口縁部は内窓気味で、罐部がやや尖る。	外面部直脚ヨコカヘ後ナデ、肩部不定方向のハケ (7条/cm)。	砂粒・白色粒子・黑色粒子・赤色粒子を含む。 焼成色調 青褐色 褐色	口縁部～肩部1/6・肩部3/5残存。
61 7-243	土師壺	8層 C49N SR70801	口径 (20.1)	くの字に組みし、内窓気味に立ち上がる肩部。罐部内側を若干肥厚させる。	外面部直脚ナデ、肩部ヨコカヘ。内面口縁部底盤により不明。肩部ヨコカヘ (5名/cm)。	砂粒・白色粒子を多く含む。 焼成色調 青褐色	口縁部1/6残存。
62 7-154	土師壺	8層 E49 SR70801	口径 (18.0)	くの字に組みし、内窓気味に立ち上がる肩部。罐部は深めで、やや半扁平形に形成され、内側を肥厚させる。	外面部直脚ナデ、肩部ヨコカヘ (6名/cm)。内面口縁部底盤充ヨコカヘ、肩部ヨコカヘ。	砂粒・白色粒子を多く含む。 焼成色調 青褐色	口縁部1/5残存。
63 7-120	須恵環	7層 D50	口径 (12.0) 高さ 底径 5.4	大きい平底の底部から内窓気味に立ち上がる脚部。口縁部を丸く收める。	底部糸切り未調整。脚部回転ナデ、外面上にノタ目が明顯に残る。	砂粒・白色粒子を含む。 焼成色調 青褐色	口縁部～肩部1/4残存。底部一部欠損。
64 7-126	須恵環	7層 ES2N	口径 (12.5) 高さ 底径 6.8	平底の底部から内窓気味に立ち上がる脚部、口縁部は直立外反する。	底部糸切り未調整。脚部回転ナデ。全体に厚壁。	砂粒・白色粒子を含む。 焼成色調 やや灰 褐色	口縁部～肩部1/2残存。底部一部欠損。
65 7-131	土師環	7層 F48S	口径 (12.5) 高さ 底径 6.4	平底の底部から直線的に立ち上がる脚部。口縁部は直角で肥厚する。	厚壁により調整不明。	砂粒・白色粒子・赤色粒子を含む。 焼成色調 やや灰 褐色	口縁部～肩部1/5残存。底部一部欠損。
66 7-270	灰釉壺	7層 D48	口径 (12.5) 高さ 底径 6.2	低く、罐部の丸く内側する高台。脚部は直線的に立ち上がり、中段部は内窓し立ち上がり、下方に引出され、罐部底盤に収められる。	底部糸切り後、接合部ナデ。回転ナデ、外面上にノタ目が残る。	砂粒・白色粒子を含む。 焼成色調 灰褐色	口縁部～肩部2/3残存。底部完形。
67 7-118	灰釉壺	7層 D51S	口径 (14.4) 高さ 底径 6.2	やや内窓する三脚形高台。罐部外面は直角ナデによる凹凸があり、罐部内部は内窓し立ち上がり、罐部底盤を外方に引き出す。	底部糸切り後ナデ。回転ナデ。	砂粒・黑色粒子を含む。 焼成色調 灰褐色	口縁部1/6・肩部一部欠損。内面に自然釉、重ね焼成釉。
68 7-124	灰釉壺	7層 E50S	口径 (14.0) 高さ 底径 5.4	内窓気味の罐部が丸く三角形高台。罐部内部は内窓し立ち上がり、罐部底盤を外方に引き出す。	底部糸切り後、接合部ナデ。脚部回転ナデ、外面上ノタ目が明顯。	砂粒・白色粒子を含む。 焼成色調 やや灰 褐色	口縁部～肩部一部欠損。内面に自然釉、重ね焼成釉。
69 7-119	灰釉壺	7層 D50N	口径 (14.0) 高さ 底径 5.4	内窓気味の罐部が丸く三角形高台。罐部内部は内窓し立ち上がり、罐部底盤を外方に引き出す。	底部ナデ、脚部回転ナデ、ノタ目が明顯に残る。横け掛け施釉。	砂粒・白色粒子を含む。 焼成色調 灰褐色	口縁部～肩部1/4残存。底部完形。内面に自然釉、重ね焼成釉。

番号	形態	出土地点	法量 (m)	形態の特徴	文様・調査等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
70 7-123	灰褐色花瓶	7層 DS6N	口径 (16.1) 基高 3.9 底径 7.0	内側気味に立ち上がる肩部。口縁部は丸く収める。	回転ナダ。清け掛け施釉。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 茶色 色調 灰白色	口縁部1/2残存。
71 7-129	土師壺	7層 DS1S	口径 (14.2) 基高 3.9 底径 7.0	肩部がやや丸味を帯びる三角形高台。肩部は内側気味に大きめに立ち上り、口縁部は若干外方に引き出し、丸く収める。	底部余切り後、接合部ナダ。回転ナダ、外面にノタ目が残る。	胎土 砂粒・白色粒子、 赤色粒子。藍母を含む。 焼成 外面 色調 内面 にない褐色 にない褐色	口縫然1/7・對 部2/3残存。底 部一部欠損。
72 7-125	須恵壺	7層 CS6N	口径 12.7 基高 3.8 底径 5.2	平底の底部から内側気味に立ち上る肩部、口縁部は丸く収める。全体的に垂みが大きい。	底部余切り後、外面ノタ目が明瞭。	胎土 砂粒・黑色粒子を含む。 焼成 灰色	口縫然3/3残存。 肩部～底部一部 欠損。
73 7-132	土師壺	7層 CS6N	口径 12.7 基高 3.6 底径 4.9	平底の底部から内側気味に立ち上る肩部、口縁部は若干外方に引き出し、丸く収める。	底部余切り未調整。回転ナダ、外面上ノタ目が明瞭。	胎土 砂粒・白色粒子、 赤色粒子を含む。 焼成 普通 色調 にない褐色	口縫部～底部5/6 残存。
74 7-226	土師壺	7層 D64	口径 (12.8) 基高 (3.1) 底径 (5.0)	平底の底部から直線気味に立ち上る肩部、口縁部は若干外方に引き出す。	底部余切り未調整。回転ナダ、外面上ノタ目が明瞭。	胎土 砂粒・白色粒子、 赤色粒子を含む。 焼成 青色	口縫部～底部1/3 残存。
75 7-90	灰陶壺	5層 E48S	口径 11.9 基高 4.2 底径 6.4	高台は内側気味の高い三角形高台。肩部は直線的で立ち上がるが、中位で屈曲し、變となす。口縁部は外に引き出さず、丸く収める。	底部余切り後、高台接合部ナダ。肩部～口縁部回転ナダ、外面上ノタ目が残る。清け掛け施釉。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 やや硬 灰色	完形品。
76 7-122	土師壺	5層 D49	口径 11.8 基高 3.1 底径 6.3	大きめの平底の底部から直線的に立ち上る肩部。口縁部は丸く収められる。全体に垂壁が多い。	底部余切り未調整。口縁部～肩部ノタ目が明瞭。口縫部直下を強く押さえます。外面上ノタ目引張、黒色仕上げ。	胎土 砂粒・白色粒子、 赤色粒子を含む。 焼成 普通 色調	口縫部～底部2/3 残存。
77 7-25	灰釉壺	4層 E48N	口径 (14.2) 基高 (5.1) 底径 (7.0)	輪郭をもつたやや長めの三角形高台。肩部は内側気味に立ち上るが、中位で腰やかに屈曲し、變となす。口縁部は縫隙部を若干外方に引き出し、丸く収める。	底部ナダ。口縫部～肩部回転ナダ、外面上ノタ目が明瞭に残る。	胎土 白色粒子、黑色粒子を含む。 焼成 やや硬 灰色	口縫部～肩部3/3 底部3/8残存。
78 7-21	小壺	4層 P49S	口径 (6.2) 基高 (2.8) 底径 (5.2)	輪郭が丸めやや低目の三角形高台。肩部は直線的で立ち上がり、口縫部は縫隙をなし、やや尖る。全体に垂壁が多い。	高台接合部ナダ。口縫部～肩部回転ナダ、外面上ノタ目が残る。内面上重ね燒成斑。	胎土 白色粒子、黑色粒子を含む。 焼成 やや硬 灰色	口縫部～底部1/4 残存。外面上に重ね燒成 斑。
79 7-84	灰釉壺	南迎排水 溝	口径 (15.0)	縫隙部がやや肥厚する口縫部。	回転ナダ、外面上ノタ目が残る。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 茶色 色調 灰白色	口縫部1/10残存。 墨書き。
80 7-83	灰陶壺	南迎排水 溝	底径 6.7	やや斜平気味に内側する三角形高台。肩部は直線気味に立ち上がる。	底部余切り後、接合部ナダ。肩部回転ナダ。	胎土 白色粒子。黑色粒子を含む。 焼成 やや硬 灰色	底部3/4残存。 底部に墨書き。

第60表 8区 土器觀察表

番号	器形	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	文様・調査等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
12 8-1097	弥生壺	17号 D63N D63N	口径 (26.6)	丸味を帯びながら屈曲する刻み目を有する口縁部。	口縁部の側に直底方向からハック工具による刻み目。外側ナマコハケ (7条/cm)、内面ヨコハケ (6条/cm)。	胎土 砂粒・石粒・白色 粒子を含む。 焼成 普通 色調 棕褐色	口縁部1/T残存。
13 8-1203	弥生壺	17号 D63N D63N	口径 (25.6)	丸味を帯びながら大きく屈曲する刻み目を有する口縁部。	口縁部を面取り後、直底に直底方向からハック工具による刻み目。外側ナマコハケ (7条/cm)、内面ヨコハケ (6条/cm)。	胎土 砂粒・石粒・白色 粒子を含む。 焼成 普通 色調 棕褐色	口縁部1/L残存。
14 8-753	土師壺	17a層 E63S	口径 11.4 底径 (6.6)	球形を呈す脚部は下位に最大径を持ち、底やかに屈曲し、大さめの底部に絞く。	口縁部を面取り後、直底に直底方向からハック工具による刻み目。外側ナマコハケ (7条/cm)、内面ヨコハケ (6条/cm)。	胎土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 焼成 外面 にぶい黄褐色 内面 淡灰色	脚部2/3・底部 1/3残存。
15 8-923	土師高杯	17a層 D63S SK817all	口径 (10.8) 高さ 9.2 底径 (8.5)	半球状の环底。脚部は底やかな膨張がりとなる。	脚部により内外面ともに調整不明。脚部外側ナマコハケ (7条/cm)、内面ヨコハケ (8条/cm)、輪横ナマコハケ、指頭圧痕。	胎土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 焼成 普通 色調 棕褐色	口縁部1/2・脚部 1/3残存。
16 8-773	土師高杯	17a層 E63S		直筒形的に外に広がる脚部は中位でわざかに屈曲し、大きく外方に伸びる。	内外面ともに厚底により調整不易。脚部に凹孔3ヶ所。	胎土 砂粒・石粒・白色 粒子を含む。 焼成 普通 色調 棕褐色	脚部ほぼ完形。 脚部欠損。
17 8-600	土師高杯	17a層 E61S	口径 (13.5) 高さ 13.1 底径 (8.8)	下位に緩い腹を有するが、開きが少ないうなれ気味に立ち上がる球形。脚部は太く、底やかに外に屈曲しながら伸び、脚部を外に折り出す形。	脚部外側厚底により不明、内面口縁部先にヨコハケ (4条/cm)、内面ヨコハケ (5条/cm)、内面ヨコハケ (6条/cm)。	胎土 砂粒・石粒・赤色 粒子を含む。 焼成 普通 色調 棕褐色	脚部1/3・脚部 1/3残存。 脚部は完形。
18 8-768	土師壺	17a層 E62S	口径 13.2	肩部がやや張る脚部、口縁部は丸味を帯びながらわずかに屈曲する。口縁部は肥厚化する。	内外面ともに厚底により調整不易。外側に指頭圧痕。	胎土 砂粒・石粒を多く 含む。 焼成 やや不良 色調 優色	口縁部～脚部3/5 残存。
21 8-1262	弥生壺	D63S 1号方形 周溝底 南側溝底 西側溝底	底径 6.8	垂直気味に立ち上がる脚部、基盤はやや薄い。	脚部直面に鉢底ナマコハケ。内外面ともに厚底により調整不易。	胎土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 焼成 普通 色調 淡赤褐色	底部一部欠損。
22 8-1363	弥生壺	05SN 2号方形 周溝底 南側溝底 西側溝底	口径 (7.6) 底径 (15.0)	蓋の小さい球状を有する脚部。蓋は細く、口縁部は若狭上に開くが、外に開く。	外側口縁部～脚部タケハケ (5条/cm)、内面厚底により調整不易。内面ヨコハケ及びナマコハケ。輪横ナマコハケ。	胎土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 焼成 普通 色調 淡灰褐色	口縁部定形、脚 部1/3残存。
23 8-1366	弥生壺	05SN 2号方形 周溝底 南側溝底 西側溝底	口径 9.1 高さ 27.3 底径 18.8 底径 6.8	中位に最大径を有する球形の脚部。やややまの脚部は短く、口縁部の外方は小さい。	内外面ともに厚底により調整不易。外側に脚部ナマコハケ、内面ヨコハケ。輪横ナマコハケ。	胎土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 焼成 淡灰褐色	口縁部3/4・脚 部1/3・底部 1/3残存。 底部一部欠損。
24 8-1364	弥生壺	E63S 3号方形 周溝底 南側溝底 西側溝底	口径 7.2 高さ 25.6 底径 (17.1) 底径 (5.3)	中位に最大径を有する球状の脚部。短く、脚部から伸びる口縁部の開きは小さい。	肩部に5条の輪横き波状紋3段設置。外側に脚部ナマコハケ、内面ヨコハケ。	胎土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 焼成 普通 色調 淡褐色	脚部～底部1/2 残存。脚部下位 に凸筋状穿孔。 底部下位にスズ 付着。
25 8-464	土師高杯	16層 C63N SX81601	口径 16.1 高さ 15.6 底径 12.1	脚部は下位で屈曲し、厚底な腹をなす。口縁部は直立ちながら立ち上がるが、開きは小さく。脚部は中位でわざかに膨らみが、全体に腹面やや厚く、丸味を帯びながら大さめに絞く。	内面頂部に厚底により調整不易。脚部直面にもヨコハケ (10条/cm) 後ナマコハケ、脚部外側上位ヨコハケ、下位ナマコハケ、内面ナマコハケ及びヨコハケ、輪横ナマコハケ。	胎土 砂粒・石粒・赤色 粒子を含む。 焼成 普通 色調 棕褐色	口縁部2/3・脚 部4/5残存。
26 8-465 ①	土師壺	16層 C63N SX81601	口径 (11.4) 高さ 21.2 底径 (20.7) 底径 4.0	球形を呈す腹、口縁部は直立ちながら立ち上がるが、開きは小さく。脚部は直立ちながら外反させる。底部は平底。	口縁部ヨコハケ (10条/cm) 後ナマコハケ、脚部外側上位ヨコハケ、下位ナマコハケ、内面ナマコハケ及びヨコハケ、輪横ナマコハケ。	胎土 砂粒・石粒・白色 粒子を含む。 焼成 普通 色調 淡灰褐色	口縁部～脚部1/2 残存。脚部スス 付着。
27 8-374	土師壺	16層 C63N SX81601	口径 17.4 高さ 21.6 底径 21.8 底径 2.4	脚部は球形を呈するが、全体に開きが大きい。口縁部はくの字に屈曲し、直筒的に立ち上がる。底盤は丸底。	口縁部内外面ともにナマコハケ、内面ナマコハケ、内面ナマコハケ及びヨコハケ、輪横ナマコハケ。	胎土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 焼成 淡灰褐色	口縁部～底盤3/3 残存。脚部スス 付着。
28 8-385	土師壺	16層 E61S SX81602	口径 (12.9)	丸味を帯びながら大きく屈曲する口縁部。	内外面とも厚底により調整不易。ナマコハケ。	胎土 砂粒・石粒・白色 粒子を含む。 焼成 普通 色調 淡黄色	口縁部1/8残存。
29 8-366	土師壺	16層 D63S	口径 14.1	肩部から大きく屈曲し、外反して開く口縁部。	口縁部ナマコハケ、外側タケハラミガキ、内面厚底により調整不易、内面ヨコハケ。	胎土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 焼成 普通 色調 淡褐色	口縁部一部欠損。
30 8-568	土師壺	16層 D62S	口径 (11.1) 底径 (15.6)	蓋の小さい球状の脚部から腹やかに屈曲し、直筒気味に立ち上がる口縁部。	口縁部内外面ともにナマコハケ、内面ナマコハケ (7条/cm)、内面ナマコハケ、指頭圧痕が明瞭に残る。	胎土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 焼成 普通 色調 淡褐色	口縁部1/4・脚 部2/3残存。外 面スス付着。

番号	器形	出土地点	法量 (cm)	彩 織 の 特徴	文様・調節等の特徴	黏土・焼成・色調	備 考
31 8-112	土師高杯	15層 E58N	口径 (17.0) 器高 (14.5) 底径 (11.9)	下位及び位に縦やかな縞をなして立ち上がる部分は大きく外に向く。脚部は若干中筋み気味に外へ伸び、縦やかなカーブを描いて脚部に統一。	内外面ともに調整不規則。脚部内側は凹だ。脚部下位に円孔1ヶ所。	粘土 砂粒・白色粒子。 燒成 赤褐色	環部L/2・新部 L/3残存。
32 8-131	土師高杯	15層直上 E61S	口径 (14.0) 器高 (15.5) 底径 (9.3)	下位で屈曲し、直線的に外方に張り出る。脚部は細長く伸びて立ち上がり、縦やかに屈曲して小さい板部に来る。	内外面ともに厚底により調整不規則。脚部内面に粘土栓に巻き上げ痕を残す。	粘土 砂粒・石粒・赤色 粒子を含む。 燒成 青褐色	環部L/2・新部 L/3残存。 脚柱完存。
33 8-89	灰釉瓶	14b層 D64S	口径 (14.9) 器高 (13.5) 底径 (7.3)	ややつぶれ気味の圓角高台。脚部は内腹気味に立ち上がり、口縁部を大きく外側に折り丸く收める。	底部余切り後ナデ。脚部へ口縫部回転ナデ、外面ノタ目が明顯。	粘土 砂粒・白色粒子を含む。 燒成 中や硬 色調 黄灰色	口縫部L/10・底 部L/5残存。 重ね焼成痕。
34 8-140	灰釉瓶	14b層 F62S	口径 (12.0)	直線的に立ち上がる口縁部。	回転ナデ、外面ともにノタ目が明顯に残る。	粘土 砂粒・長石を含む。 燒成 中や硬 色調 灰白色	口縫部L/6残存。
35 8-78	土師瓶	14a層 E58N	口径 (13.2) 器高 (4.8) 底径 (5.3)	腰やかな断面逆三角形の高台。腰はやや内腹気味に立ち上がり、縦やかに屈曲し、口縁部は外反して丸く收める。	内面に焼成前の縫割。底部余切り後ナデ。脚部へ口縫部回転ナデ。	粘土 砂粒・赤色粒子を含む。 燒成 中や硬 色調 黄褐色	口縫部～脚部L/4 残存。底部裏面 に黒斑。
36 8-63	灰釉瓶	14a層 D62N	口径 (14.7) 器高 (5.1) 底径 (7.4)	底部を重取りして四角形高台。脚部は内腹気味に立ち上がり、脚部を丸く收める。	底部ナデ、脚部回転ナデ、外面ノタ目が明顯。	粘土 白色粒子を含む。 燒成 硬 青褐色	1/2残存。
37 8-61	土師皿	14a層 F61S	口径 (11.7) 器高 (2.8) 底径 (7.3)	やや中央の落んだ底部から外反気味に立ち上がり、縦部を丸く收める。	底部余切り未調査。回転ナデ。	粘土 砂粒・白色粒子を含む。 燒成 普通 灰白色	1/2残存。
38 8-41	灰釉瓶	13層 E60S SK813	口径 (16.6) 器高 (5.3) 底径 (7.8)	二段高台。脚部は内腹気味に立ち上がり、脚部を丸く收める。底部中央がやや膨らむ。	体部中位～底部回転へ引削り、口縫部回転ナデ。内面刷毛磨り施す。	粘土 砂粒・白色粒子を含む。 燒成 硬 灰白色 褐色 オリーブ灰色	口縫部～体部L/3 残存。重ね焼成 痕。
39 8-71	灰釉瓶	13層 C57N	口径 (18.6)	内腹気味に立ち上がる体部、口縁部は若干外に引き出し丸く收める。	内外面回転ナデ、外腹黒漆仕上げ。	粘土 砂粒を含む。 燒成 普通 灰白色	口縫部L/3残存。
40 8-15	灰釉瓶	10層 C59N 深食鉢	口径 (13.1) 器高 (5.0) 底径 (7.2)	やや長めで太い長方形を呈する高台。内腹に立ち上がる体部、口縁部は丸く收める。器底は厚い。	高台張り付け後ナデ。体部へ口縫部回転ナデ。潰け掛け施釉。	粘土 白色粒子・黑色粒子を含む。 燒成 中や硬 灰白色	口縫部～底部L/3 残存。
41 8-18	灰釉瓶	10層 D68S	口径 (16.9) 器高 (6.5) 底径 (7.6)	やや内腹気味に開く脚部が大きいハの字形の高台。体部は内腹して立ち上がる高いもので、口縫部を若干引き出し丸く收める。	高台張り付け後ナデ、体部へ口縫部回転ナデ。	粘土 砂粒・長石を含む。 燒成 中や硬 灰白色	口縫部～底部L/2 残存。
42 8-9	灰釉瓶	10層 D62S	底径 (6.0)	高台は逆台形を呈し、中腹を比較的狭く收める。体部は内腹気味に立ち上がる。	底部余切り、高台張り付け後ナデ、体部へ口縫部回転ナデ。	粘土 長石・黑色粒子を含む。 燒成 中や硬 褐 にせい黄色 褐色 オリーブ 灰白色	底部L/3残存。

第61表 9区 土器觀察表

番号	要形	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	文様・調査等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1 9-921	弥生型	42層 D72S SR94201	胴径 (30.0)	上位に最大径を有す球形の胴部。	断面は横写 (LR) 増にへとぎ様による変形遮瓦・重三角文を加える。断面下部は最位の変形遮瓦。内部は側面が著しく、調査不明箇所ナダ。	胎土 砂粒・石粒・白色 粒子を含む。 焼成 色調 灰 褐色	胴部1/4残存。 外面上スス付着。
11 9-737	弥生型	1号方形 周溝溝 東側周溝	胴径 (19.0)	上下を欠損しているが、中位がやや厚る球形を呈すと考えられる断面。	外面面にナメロカケ (1条/cm)、内面ナダ、指揮圧痕が多く認められる。	胎土 砂粒・石粒・赤色 粒子を含む。 焼成 色調 普通 灰 褐色	断面1/3残存。 外面上スス付着。
12 9-783	弥生型	2号方形 周溝溝 東側周溝	胴径 17.3	中位に最大径を持つ長球形の胴部で張りが小さい。	断面に4条単位に横縞模様文が3段設さる。外側ともに指揮圧痕があり、外側にナメロカケ (1条/cm)、内面ナダ、頭部にしぼり目が認められる。	胎土 砂粒・石粒・赤色 粒子を含む。 焼成 色調 灰 褐色	断面2/3残存。
13 9-780	弥生型	2号方形 周溝溝 南側周溝	口径 (9.1) 底高 27.0 胴径 6.4	下位が大きく張り出す花果形を呈す胴部。頭部は直立気味に立ち上がり、口縁部は直線的に外方に開く。底部は厚く突出する。若干歪み持つ。	断面～胴部上半に5条単位の横縞模様文が6段設さる。外側の口縁部には周溝溝周溝溝に沿うて5条の横縞模様文と2条の横縞模様文がある。底部ナダ、指揮圧痕が認められる。内面口縁部ヨカケ (9条/cm)、頭部～胴部ナダ。	胎土 砂粒・石粒・赤色 粒子を多く含む。 焼成 色調 普通 灰 褐色	口縁部・胴部下 1/2残存。 断面下半にスス付着。
14 9-805	弥生型	41層 E76N	胴径 19.3	頭部～胴上半が大きく張り出し、頭部を斜めに折り込む。	断面～頭部上部に4条単位の横縞模様文と4条の横縞模様文が6段設さる。上位には横写 (LR) が認められる。内面はヘラ捺痕による横縞状文が施され、頭部及び、下位の文様部に捺痕が施される。内面とともに丁字なだ。	胎土 砂粒・白色粒子・ 砂粒を多く含む。 焼成 色調 良好 灰 褐色	頭部2/3残存。
15 9-627	弥生型	41層 D72N	胴径 (18.6) 底径 (6.9)	頭部中位が張る長球状を呈す。底部はやや大きめで、厚く突出する。	全体に見えおり、不明瞭だが、頭部及び胴部下部は葉立いナメロカケ (3条/cm) が認められる。内面ハケ後ナダ、頭部にほり目が認められる。	胎土 砂粒・石粒・赤色 粒子を多く含む。 焼成 色調 普通 灰 褐色	1/2残存。
16 9-867	弥生型	41層 E76N	胴径 (17.7) 底径 6.4	長球状を呈すと考えられる胴部。底部は厚く直線的に突出する。	断面には横縞模様だが、外側胴部ナメロカケ (7条/cm)、底部ナダ、内面指揮圧痕が認められる。	胎土 砂粒・赤色粒子を 含む。 焼成 色調 普通 灰 白色	断面1/8・底部 2/3残存。
17 9-771	弥生型	40層 D73N	口径 (8.3)	頭部は太く短いもので、胴部から直線的につながる。瓶口口縁部は若干歪曲し、開きは小さい。	口縁部ナダ、外側頭部窓いナメロカケ (7条/cm)、内面口縁部ヨカケ、頭部模様文が明瞭に認められる。	胎土 砂粒・石粒・赤色 粒子を多く含む。 焼成 色調 普通 灰 褐色	1/2残存。
18 9-545	弥生型	40層 E74N	口径 10.6	頭部が大きく張り出す胴部。頭部は細長く、開きの大きい口縁部は頭部がやや厚く、平坦気味に認められる。	断面に4条単位の横縞模様文が3段設さる。口縁部ナダ、内面口縁部ヨカケ、頭部模様文が認められる。	胎土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 焼成 色調 普通 灰 褐色	3/4残存。
19 9-550	土師壺	38層 E76N	胴径 (25.7) 27.5	頭部は上位に最大径を持ち、中位で緩慢に組合して直線的に、胴部へ傾く。頭部の二字に組合し、頭部は開き、口縁部は直線的に組合し、頭部を直線的に持つ。	口縁部外側ヨカケ後ナダ、頭部ナメロカケ (7条/cm)、内面ハケ後ナダ、下位ヨカケ、中位ヨカケ後ナダ。	胎土 砂粒・白色粒子を 含む。 焼成 色調 普通 灰 褐色	口縁部1/4・頭 部2/3残存。 外面上スス付着。
20 9-617	弥生型	38層 E76N SK93804	口径 (18.0)	丸味を帯びながら直曲し、大きめの外反足を有する。口縁部は取りされ、剥み目が付される。	口縁部ナメロカケにより割れり、外側口縁部～胴部ヨカケ後ナダ、内面口縁部ヨカケ後ナダ。	胎土 砂粒・青色粒子・ 雲母を含む。 焼成 色調 普通 灰 白色	1/12残存。
21 9-491	土師壺	37層 C75N	口径 (24.0)	S字形状口縁付合。口縁部はやや厚いものの、内外部の凹凸部によく対応せず、外面の大きな工具によく強く捺めることによって鋸を打ち出している。頭部は中位が大きく張る輪状球状を呈す。	頭部外面はS字の長い羽状のハケ (8条/cm)。内面ナダ。	胎土 砂粒・雲母を含む。 焼成 色調 普通 灰 褐色	口縁部3/4・胴 部1/2残存。 外面上スス付着。
22 9-495	土師壺	37層 E74S	口径 14.7 底径 (17.7) 底径 (15.8) 底径 8.0	頭部は中位に最大径を有す球状で、頭部は直線的で、口縁部はややゆるめの合口の字に組合し、外方に開く。頭部模様文は、若干外反気味で、頭部ヨカケ後、頭部ヨカケ後ナダ。脚合部ナダ。	頭部内面はS字の長い羽状のハケ (8条/cm)。内面ナメロカケ (5条/cm)、頭部ヨカケ後ナダ。内面口縁部ヨカケ後ナダ。頭部ヨカケ後ナダ。	胎土 砂粒・石粒・赤色 粒子を多く含む。 焼成 色調 普通 灰 褐色	口縁部2/3・胴 部1/2残存。 頭部はほぼ完 形、外面上スス付着。
23 9-435	須恵器	33層 E71S SR93301	口径 10.9 底径 7.8	頭部が張る形の頭部、頭部は直線的で、頭部がくびれる。口縁部は表裏に貼り付けた後、差し込んでいる。	頭部中～底部自転ハラケズリ、頭部ヨカケ後ナダ、頭部ヨカケ後ナダ。頭部に深い凹窓を施す。	胎土 砂粒・石英・長石 粒子を含む。 焼成 色調 普通 灰 褐色	頭部欠損。 頭部外周～頭部 内面自然釉、耳 缺。
24 9-438	土師高杯	33層 D70N SR93301	底径 (7.8)	外反気味に開く円錐状の頭部。	上位に凹凸3ヶ所。外面上ともに調整不良だが、外側ヘラミガキ、内面ナダ。	胎土 砂粒・白色粒子・ 赤色粒子を含む。 焼成 色調 普通 灰 褐色	頭部1/2欠損。

番号	基形	出土地点	法規 (m)	形態の特徴	文様・調査等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
25 9-466	土師坏	33層 ET2S SR93902	口徑 10.7 底面 4.3 厚径 19.6	平南氣味の底から腰やかなカーブを描いて立ち上がる。口盤部は粗面で、外反気味に収められる。	底面により内外面ともに摩耗不均。ナメか。底部表面に木葉模様。	胎土 砂粒・白色粒子 赤色粒子を多く含む。 燒成 色調 灰褐色	2/3残存。
26 9-354	須恵坏	33層 ET5N SR93033	口徑 (13.6)	脚部は腰やかなカーブを描いて立ち上がりやや長めの口盤部は内傾して丸く收められる。	口盤部内面に浅い比較。脚部下位に凹窓ハラケツリ。他の回転ナメ。ロクロ回転底。	胎土 砂粒・長石・赤色粒子を含む。 燒成 色調 灰色	1/6残存。
27 9-361	須恵坏	33層 D75N SR93303	口徑 (13.1)	腰やかなカーブを描いて立ち上がる筋部。受け部少し小さく、外方に若干引き出している。立ち上がりが最も低く、内側にしている。	体部下位回転ハラケツリ。他の内面ノタ目が明瞭に残る。ロクロ回転底。	胎土 砂粒・長石を若干含む。 燒成 色調 黄褐色	1/4残存。
28 9-401	須恵坏	33層 ET7S SR93903		中位に最大径を有する球形の解剖部。腰部は太く外反気味に立ち上がる。	腰部には比較。脚部回転ハラケツリ。他の回転ナメ。	胎土 砂粒・長石を多く含む。 燒成 色調 灰色	1/5残存。
29 9-365	土師坏	33層 ET6S SR93903	口徑 (14.6) 底面 5.2 厚径 19.0	脚部は平底氣味の底盤から腰やかなカーブを描いて立ち上がる。内面は内傾し、つまみ上げて収める。	内外面ともに摩耗により、不明顯ナメ。	胎土 砂粒・白色粒子 赤色粒子を含む。 燒成 色調 青褐色	口盤部1/8・脚部2/3残存。
30 9-368	土師坏	33層 ET5N SR93303	口徑 (16.2)	内側に立ち上がる脚部から口盤部は直立曲線で、直立気味に収められる。	内外面ともに摩耗により調整不明顯。	胎土 砂粒・白色粒子を多く含む。 燒成 色調 青褐色	1/6残存。
31 9-416	土師壺	33層 C75N SR93903	底径 12.0	内南氣味に外方に開く台付型の脚部。底部は丸く收められる。	内外面ともに摩耗により調整不均勻。内面にヨコハケの痕跡がある。	胎土 砂粒・石粒・赤色粒子を含む。 燒成 色調 灰褐色	2/3残存。
32 9-349	土師壺	33層 ET6S SR93303	口徑 (25.6)	薄い粘土帯を貼り付けた折り返し口縁。直線的に外方に開く。	粘土帯端部に小さな刻み目を施す。腰部は内面ともに摩耗により不明顯。	胎土 白色粒子・赤色粒子を含む。 燒成 色調 青褐色 内面 暗褐色	1/4残存。
33 9-460	灰釉壺	33層 D73N・S SR93903 ～ 93302	口徑 (13.1) 底高 4.3 底径 5.6	内南氣味に立ち上がる脚部。口盤部のみわざかに外方に引き出されて丸く收める。高台は腰部が丸みを帯びた長方形を呈す。	底部回転糸切り未調査。高台接合部ナメ。体部～口盤部回転ナメ。外面ノタ目が明瞭に残る。	胎土 砂粒・長石・赤色粒子を含む。 燒成 色調 硬 にぶい橙色	口盤部～脚部1/7 残存。 底部完形。
34 9-317	土師壺	33層直上 (黄色砂 層内) ET6S	口徑 (13.1) 底高 6.4 底径 6.4	見込みまで直線的に立ち上がった後、内側に引き戻す。高台は丸みを帯びた三角形を呈す。	底部回転糸切り未調査。高台接合部ナメ。体部～口盤部ナメ。	胎土 長石・砂粒・石粒 を含む。 燒成 色調 にぶい黄褐色	口盤部～脚部1/6 残存。 底部完形。
35 9-300	灰釉壺	22～32層 内 DTSS	口徑 (13.0) 底高 4.3 底径 5.8	内南氣味に立ち上がる脚部。口盤部はわずかに外方に引き出されて丸く收める。高台は腰部が丸い三角形高台。	底部回転糸切り後ナメ。高台接合部内面に掛け施脂。	胎土 長石・砂粒・石粒 を含む。 燒成 色調 灰褐色	口盤部一部残存。 底部完形。
36 9-283	須恵坏	25層 DT0S SR92501	口徑 15.2 底高 3.7 底径 5.6	開口直線的に立ち上がり、口盤部は切削し、わずかに内に引出す。	底部糸切り未調査。他の丁寧な当転ナメ。	胎土 砂粒・長石・石英 を含む。 燒成 色調 灰白色	口盤部一部欠損。
37 9-162	土師壺	25層 ET1S SR92501	口徑 (18.9) 底高 4.0 底径 6.4	内南氣味に立ち上がる脚部はややゆがめで、口盤部を肥厚させ、丸く收める。高台は最も太めの三 角形を呈す。	底部糸切り後ナメ。高台接合部のナメはやや弱い。他の回転ナメ、外面にノタ目が明瞭に残る。	胎土 砂粒・石英・長石・赤色粒子を含む。 燒成 色調 にぶい黄褐色	口盤部1/8残存。 底部完形。
38 9-284	土師壺	25層 DT0S SR92501	口徑 19.0 底高 5.1 底径 7.3	直線的に立ち上がる脚部。底部はややくびれられる。高台は外に張り出す台脚を呈す。	底部糸切り後ナメ。高台接合部のナメはやや弱い。他の回転ナメ、外面にノタ目が明瞭に残る。	胎土 砂粒・石英・赤色粒子を含む。 燒成 色調 青褐色	口盤部～脚部1/2 残存。 底部完形。
39 9-287	土師壺	25層 DT1N SR92501	口徑 (12.2) 底高 4.1 底径 7.0	外反気味に立ち上がる脚部はややゆがめで、口盤部は切削し、丸く收める。高台の腰部が特に厚い。高台は丸みを帯びた台脚を呈す。	底部糸切り後ナメ。他の回転ナメ。高台接合部は離れたナメ。	胎土 砂粒・長石・赤色粒子を含む。 燒成 色調 にぶい黄褐色	口盤部～脚部1/5 残存。 底部完形。
40 9-304	土師坏	25層 ET1 SR92501	口徑 (13.3) 底高 4.4 底径 6.0	やや内南氣味に立ち上がり、口盤部は若干外反する。	底部糸切り未調査。他の回転ナメ。高台接合部に内面ノタ目が残る。	胎土 砂粒・石英 を含む。 燒成 色調 灰褐色	1/4残存。 内外面にスズ村器。
41 9-483	土師坏	25層 ET1N SR92501	口徑 12.7 底高 3.3 底径 6.6	見込みで腰をなし、外反気味に立ち上がる。重みを持った。	底部糸切り未調査。体部～口盤部回転ナメ。	胎土 砂粒・石英 を含む。 燒成 色調 にぶい橙色	口盤部一部欠損。
42 9-285	土師壺	25層 C71N SR92501	口徑 12.7 底高 10.8 底径 12.8 厚径 7.0	中位に最大径を有する船形の脚部。口盤部は丸みを帯びて直線化し、大きめ外反する。	外反脚部下位～底部手前迄に直線化。脚部上半～口盤部内面回転ナメ。内面脚部～底盤部へマガキ、黒色土上げ。	胎土 砂粒・長石を含む。 燒成 色調 良好 黄褐色	口盤部～脚部1/3 残存。 底部完形。

番号	器形	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	文様・調整等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
43 9-290	灰釉壺	25層 E71S SR5201	口径 底径 高さ 12.7 3.1 5.7	薄い脚部は直線的に立ち上がり、口縁部は内側に厚く收められる。高台は低い三角形高台。	底部回転角切り。他は回転ナデ。	胎土 長石・砂粒・石粒 燒成 清透 色調 灰白色	本形品。 著書「万葉」 卷第10回。
44 9-258	灰釉壺	25層 E74N SR5202	口径 底径 高さ 15.0 3.1 8.5	底部は丸みを帯び、全体に弓張り状となり、口縁部はわざかに外に引き出る。高台はやや緩やかな気味の三日月高台が取り付けられる。	外面部～脚部回転ナデ。内面～脚部内側に厚ね燒成。	胎土 長石・黒色粒子を含む。 燒成 清透 色調 灰白色	口縫部～脚部一部欠損。
45 9-190	灰釉壺	22b層 D71N	口径 底径 高さ 14.3 4.8 6.6	脚部は浅く直線的に立ち上がり、口縁部は内側に丸く收める。高台は丸みを帯びた四角形のもので、並みが大きい。	底部回転角切り。他は回転ナデ。外面部ノタ目が残る。	胎土 長石・黒色粒子を含む。 燒成 清透 色調 灰白色	口縫部～脚部 1/10残存。 底面完形。 重ね燒成。 著書「百人一首」。
46 9-152	灰釉壺	22層 D76S	口径 底径 高さ 15.0 4.9 7.1	内側気味に立ち上がる脚部。口縁部は弓張り、わざかに外反する。高台は外側に引張りした丸みを帯びた三角形を呈す。	底部静止角切り。他は回転ナデ。外面部清透角切り。	胎土 長石・黒色粒子を含む。 燒成 清透 色調 灰白色	口縫部～脚部 1/4残存。 底面完形。 2段。
47 9-221	小碗	22層 C76N	口径 底径 高さ 8.2 2.7 3.6	中位で緩やかに屈曲する脚部。口縁部は内側に、脚部をつまらせる。高台は湯船の丸い三角形高台。	底部静止角切り。内外面ともに回転ナデ。	胎土 砂粒・長石を含む。 燒成 清透 色調 灰色	口縫部～脚部 1/4残存。 底面完形。 内面に降灰。
48 9-211	土師壺	22層 C75N	口径 底径 高さ 14.9 4.2	平底風の底盤から直立気味に立ち上る口縁部。底部中央がやや厚みを持つ。	外面部にも摩滅により調整不明显。ナタ。	胎土 長石・砂粒・石粒 燒成 清透 色調 灰色	1/2残存。
49 9-51	須恵壺	20層 E76S SR5201	口径 底径 高さ 15.5 4.2 5.0	やや偏平気味に緩やかなカーブを描く脚部。受け部は水平に引き出され、立ち上がりは直立し、口縁部を強めながらて面を作り出す。	脚部1/3回転ヘラケズリ、内外面ともに回転ナデ。内面ノタ目が明顯。	胎土 砂粒・長石・石粒 燒成 多く含む。 色調 灰色	口縫部～受け口1/4。 脚部～底部1/2 残存。
50 9-58	土師壺	20層 E75S SR5201	口径 底径 高さ 11.8 4.6 4.4	平底の底盤から直線的に立ち上がり、口縁部直下で踏み出し、口縁部をつまみ上げ内側気味に收められる。	外面部ともに摩滅により調整不明显。ナタ。	胎土 砂粒・長石・赤色 燒成 灰褐色	口縫部一部欠損。
51 9-69	土師壺	20層 E75S SR5201	底径 径 (9.0)	内側気味に外方に聞く口付型の脚部。端部は丸く收められる。	外面部摩滅により調整不明显。一握テクテカガラス。内面ココハタ、接合部ナダ。小口窓が認められる。	胎土 砂粒・石粒を多く含む。 燒成 清透 色調 灰白色	1/3残存。
52 9-57	土師高壺	20層 E76N SR5201	底径 8.9	太い直立する中央の脚部。椎部は緩やかに大きく開く。	外面部柱ナタヘラミガキ、椎部及び内面ナタ。	胎土 砂粒・石粒・長石・赤色 燒成 灰褐色	脚部一部欠損。
53 9-67	土師壺	20層 E75N SR5203	口径 底径 4.6 4.6	須恵器接縫壺。偏平した脚部は緩やかに内側して立ち上がり、受け部分を削ぎなし、立ち上がりを内側して認められる。	内外面ともに摩滅により調整不明显。外面部に指頭正窓が認められる。	胎土 黒色粒子を含む。 燒成 良・黄褐色	1/2残存。
54 9-106	須恵壺	20層 E73N SR5204	口径 12.6	輕氣味の脚部から受け部を大きく外方に引き出す。立ち上がりは内側して認められる。	底部～脚部1/2まで回転ヘラケズリ。他は外面部ともに回転ナデ。口縁端部内側を強めナダ尖らせる。ロコロ回転。	胎土 長石・砂粒・石粒 燒成 灰褐色	1/3残存。
55 9-43	須恵長瓶	20層 D75 SR5204	口径 10.6	大きく外反して聞く口縁部。椎部を下方に突き上げ、口縁部は内側に直立する三角形の突起が認められる。	回転ナデ。内面に自然釉。	胎土 長石・黒色粒子を含む。 燒成 灰色	1/7残存。
56 9-72	土師壺	20層 E71N SR5205	口径 底径 11.6 4.9	平底の底盤から内側しながら立ち上る脚部。口縁部は直立し強くナダ上げて尖らせる。	内面に放射狀の輪文が彫られる。内外面に墨痕。調整は底盤により不明。底面に木炭痕。	胎土 砂粒・長石・赤色 燒成 清透 色調 灰褐色	1/2残存。
57 9-38	灰釉壺	17層 D76	底径 7.5	やや丸みを帯び三日月高台。脚部は内側気味に立ち上がる。	底部回転ヘラケズリ、内外面ともに回転ナデ。	胎土 砂粒・白色粒子・ 黒色粒子を含む。 燒成 清透 色調 灰白色	底面1/2残存。 内面底部に自然釉。
58 9-74	小碗	10層 E70S	口径 3.1 底径 7.2	直線的に大きく聞く脚部。口縁部は肥厚し、丸く收められる。高台は丸い高い三角形を呈す。	内外面ともに回転ナデ。	胎土 長石・石英・赤色 燒成 清透 色調 灰褐色	1/4残存。
59 9-8-1	須恵壺	13層直上 D75N	口径 16.4	受け部は垂直に折り曲げ、縫い三角状となる。	天井部回転ヘラケズリ、内外面ともに回転ナデ、受け部は強いナダ。全体に摩滅。	胎土 長石を含む。 燒成 清透 色調 灰色	1/7残存。
60 9-6-2	山茶碗	13層直上 D75N	底径 ( 6.1)	低くつぶれた三角形の高台。	摩滅により不明。接合部にナダの痕跡が残る。	胎土 砂粒・長石を含む。 燒成 清透 色調 灰白色	底面一部欠損。

第62表 10区土器觀察表

番号	器形	出土地点	法量 (cm)	形 壁 の 特 徴	文様・調整等の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
1 10-887	弥生壺	35層 E82N SK109903	口径 8.0 底径 29.9 高さ 19.7 底深 6.3	中位がややく張る輪郭した球形を呈する腹部。底盤はやや厚く、やや突起する。口縁部は丸味を帯びて、外方に立ち上がる。口縁部は短く開き小さい。	肩部に3条の太い輪郭と文波状文と被伏文。調整等の口縫ナメ。腹部タコハケ。内面底盤により不明瞭。ナデか。底盤裏面に木葉模様。	胎土 砂粒・石粒・白色粒子・赤色粒子を含む。 焼成 色調 にぼい褐色	口縫部3/5、肩部1/4。底盤3/4残存。
2 10-905	弥生壺	39層 E82S SK109903	口径 6.4	平底の底盤から直線的に聞く肩部。	内外面ともに摩擦感が著しく、表面不規則。内面ヨコハケ、指端圧痕。横模様が認められる。	胎土 砂粒・石粒・白色粒子・赤色粒子を含む。 焼成 色調 外 内 淡黄褐色 内 褐色	底盤3/4残存。
5 10-745	弥生壺	35層 E84S	口径 (14.2)	垂直気泡に立ち上がる頸部から、直線的に外方に聞く単純口縫。	頸部に9条の輪郭を有する複数文と被伏文を交互に施す。口縫部内外面ともにナメハケ後ナメ。	胎土 砂粒・白色粒子・赤色粒子を含む。 焼成 色調 合む。 にぼい褐色	口縫部部1/4残存。
6 10-792	弥生壺	35層 E84S	口径 (16.0)	丸味を帯びながら屈曲する小型の壺。口縫部に刃目。	口縫部に4工具による刮み跡、内面に粗面加工。外側ナメハケ(5条/cm)、内面ヨコハケ。	胎土 砂粒・白色粒子・赤色粒子を含む。 焼成 色調 やや黄 にぼい褐色	口縫部1/13残存。
7 10-800	土師壺	35層 D83S SK109305	口径 (16.4) 底高 15.7 底径 7.0	中位が張り気味の垂耳平底状を呈す。肩部はよく盛りで、腰部はやかに外反する折り返し口縫に統く。	口縫部ナデ。頸部外面タコハケ(5条/cm)、内面ヨコハケ、腰部上位ナメハラミガキ、下位ナデか。内面ナデか。底盤裏面ナメ。	胎土 砂粒・石粒・赤色粒子を含む。 焼成 色調 やや白 淡黄褐色	口縫部3/4欠損、 他ほぼ完形。
8 10-744	土師高环	31層 D83N	口径 (17.0)	环底部に明瞭な輪郭を持ち、直線的に大きく外方に聞く渦わるの耳环。	口縫部ヨリナデ、外面ナデ、内面ヨコハケ後ナメ。	胎土 砂粒・石粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 やや白 にぼい褐色	环部1/3残存。
9 10-716	土師高环	31層 E83N		下位で腰から屈曲し、大きくなりながら立ち上がる环部。肩部は粗面で、直線的に伸びる。	环部剥離不規則。肩部外面タコハケ(5条/cm)、内面ヨコ方向のハラケギ。	胎土 砂粒・石粒・赤色粒子を含む。 焼成 色調 やや白 にぼい褐色	环部1/3残存。
10 10-675	土師环	30層 E81S	口径 (12.0)	やや質が張り内溝気泡に立ち上がる。腹部は内外面よりつまみ上げ尖らせて収める。	摩擦感により内外面ともに不明瞭。外側ナメハケ後ナデ。	胎土 砂粒・赤色粒子・黒色粒子を含む。 焼成 色調 普通 にぼい黒褐色	口縫部～肩部1/2残存。
11 10-680	小型壺	30層 D83S SK103003	口径 (10.0) 底高 7.3 底径 (4.4)	中位が張る幅平底状の肩部。口縫部を丸みを帯びて腰やから屈曲し、直線気泡を有する。底盤平底。	口縫部～肩部ナデ。肩部外面ナメナメハク後ナメ、内面指端によると押さえ。	胎土 砂粒・石粒を含む。 焼成 色調 やや良 にぼい黄褐色	口縫部1/4、肩部1/2残存。 他ほぼ完形外側に黒斑。
12 10-677	土師壺	30層 D82S SK109303	口径 (15.4) 底径 (22.0)	中位に最大径を持つ球形の肩部。底盤はくの字型に屈曲し、やや内溝気泡に立ち上がる。	内外面とも摩擦感、剥離により肩部不規則。外側ヨコ方向のハラケギ及びナメハクナデ、内面ナデか、輪接み模様が認められる。	胎土 砂粒・石粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 普通 明赤褐色	口縫部1/8、肩部1/2残存。 外側スス、内面化物付着。
13 10-104	土師壺	21層 C80N	口径 (16.0)	薄い幅広の粘土を貼り付けた折り返し口縫。外反は小さい。	口縫部に小さな豆粒状の穿文を貼り付ける。内面は内面ともに摩擦感により不明。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 淡黄褐色	口縫部～肩部1/4残存。
14 10-316	須恵瓶	21層 F81S	底径 (2.1)	建設の肩部、底部は丸底で不安定。	肩部による剥離。内外面回転ナメ、内面は摩擦感が著しい。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 やや硬 灰白色	肩部1/3残存。
15 10-985	土師环	21層 D79N	口径 (14.4) 底高 4.2 底径 (7.1)	底盤平底。肩の張りが小さく、腹部は内溝し、つまみ上げ尖らせる。	内外面ともに摩擦感により調整不規則。底盤に木板痕。	胎土 砂粒・白色粒子・赤色粒子を含む。 焼成 色調 普通 にぼい褐色	1/2残存。外側 底盤に黒斑。
16 10-474	土師壺	21層 D84N	口径 (19.0)	直線的に立ち上げる口縫部、端部内側を若干叩き壓する。	口縫部工具による強いナメ、外側ヨコハケ後ナメ、内面ナメハケ(5条/cm)後ヨコハケ。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 普通 にぼい褐色	口縫部1/5残存。
17 10-252	須恵环	16層 E82N 北朝排水溝	口径 (13.8)	腰やかに内溝しながら立ち上がる肩部。口縫部は若干外につまみ出し丸く收まる。	肩部～口縫部回転ナメ、内外面にノタ目が明顯。	胎土 白色粒子・黒色粒子を含む。 焼成 色調 普通 灰色	口縫部～肩部1/4残存。
18 10-250	灰釉瓦	14層 C80N	口径 (13.0)	内溝して立ち上がる肩部、口縫部は直角し、外方につまみ上げる。全体に墨差が無い。	肩部～口縫部回転ナメ、外面上ノタ目が明顯。	胎土 砂粒・白色粒子を含む。 焼成 色調 普通 灰色	口縫部～肩部1/4残存。
19 10-219	天目茶碗	10層 E80S	口径 (15.0)	内溝して立ち上がる深い肩部、口縫部は直角し、外方につまみ上げる。	内外面に天目釉。	胎土 黑色粒子・白色粒子を含む。纖維。 焼成 色調 暗褐色 灰白色	口縫部～肩部1/10残存。

番号	器形	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	文様・調査等の特徴	胎土・焼成・色調	備考
20 10-155	土師壺	10層 C84N	口径 (21.0) 内径 (21.0)	やや唇が盛る腹部から、水平に 絞り、喉部を上方に引き出す 口縁部。	口縁部内外面ともに強いナデ。 内外面に緑色の施釉。	胎土 砂粒・石片・白色 粒子・黒母を含む。 焼成 普通 色調 灰褐色	口縁部1/8残存。
21 10-174	壺	9層 E83S	口径 (29.0)	大きく外反し、粘土帯を張り付 ける口縁部。	内外面に緑色の施釉。	胎土 白色粒子・白色粒 子を含む。 焼成 オーブン黄色 色調 断面 灰白色	口縁部1/3残存。
22 10-106	壺鉢	6層直上 D84	底径 9.5	直線的に外方に開く脚部。	外面回転ヘラケズリ。	胎土 白色粒子を含む。 焼成 灰褐色	脚部1/4残存。 底部元形。
23 10-108	碗	6層直上 D84S	底径 (6.3)	盤平した逆台形の高台、中央が 強いナデにより若干盛る。	底部余切り後ナデ。底部に窓印 「X」。	胎土 白色粒子・赤色粒 子を含む。 焼成 やや硬 色調 外腹 灰色 内腹 淡灰色	底部1/2残存。
24 10-80	須恵環	4層 D83	口径 (10.0) 基高 3.8 底径 (6.0)	内湾して立ち上がる脚部から 外反する口縁部は、上下につま み上げる。	底部約1/3まで回転ヘラケズリ。 他は回転ナデ、内面ノク目が明 顯。ロクロ右回転。	胎土 白色粒子を含む。 焼成 灰褐色	口縁部～底部1/8 残存。
25 10-39	長颈瓶	4層 C83S	口径 8.9	垂直気味に立ち上がる脚部から 外反する口縁部は、上下につま み上げる。	回転ナデ、内面ノク目が明顯。	胎土 砂粒・白色粒子を 含む。 焼成 灰褐色	口縫縫部欠損。 内外面に自然釉。
26 10-79	小皿	4層 C84N	口径 (11.0) 基高 2.5 底径 7.0	高台は堅実した三角錐形の高台。 内縫気味に見込み型に立ち上がる 脚部、口縁部は丸く收める。 全体に隔壁が厚い。	回転ナデ、内面ノク目が残る。 内外面に鉄砂釉。内面に鉄粒に よる文様。	胎土 黑色粒子を含む。 焼成 普通 色調 断面 灰色	口縫縫部～底部1/5 残存。

第63表 漢名遺跡木製鋸觀察表

No.1

番 号	器 種 名	登録番号 出土地點 出土土層 層位	法 量 (cm)	形 態	技 法	分 木 樹 類		
1	鋸	W 952 7 区	残存長 片身最大幅 厚さ	15.5 12.1 2.6	下部三分合と右側端部は欠損。中央に円形の柄穴が空たれている。側面木口の角を丸く抉るように削って肩を付けている。表面の軽い凹凸には滑潤の効果の跡の圧痕がある。	表面は裏面にも丁寧に調査している。表面の仕上部分が肥厚し、先端を突せて仕上げている。刃部部分には右側に向かう擦痕が残る。	極 カ 目 シ	
2	広 鋸	W 1658 2 区 21 層	残存長 片身最大幅 厚さ	23.6 9.4 0.8	直柄を挿入する穴があり、広葉(狭葉の可能性もある)の形である。上端の一端は保存している以外、身の断面はすべて欠損している。柄穴付近には滑潤の効果の跡の圧痕がある。	柄穴は加工時の痕か使用時痕か不明だが、確かに穿孔技術、加工工具で穿っている。	極 カ 目 シ	
3	広 鋸	W 776 10 区 31 層	全長 片身最大幅 厚さ	26.3 14.5 0.9	平頭部を表面に削り、身の左側面及び下部が欠落している。表面は裏面と同様に削り落して整形を行っている。柄穴を表面に削り落す。表面は平頭にするため丁寧な加工調整をしていている。裏面は柄穴付近が一番肥厚し、次第に薄くなっている。	表面は平頭にするため丁寧な加工調整をしていている。裏面は柄穴付近が一番肥厚し、次第に薄くなっている。	極 カ 目 シ	
4	狭 鋸	W 1508 2・3区 SK12463 14 层	残存全長 片身最大幅 厚さ	31.9 7.7 0.9	身は上端が少し残っているもののほぼ完形の残りである。円筒の柄穴に新鋸形の片身一部が挿入されたまま出土した。表面は5.7cmと狭く、平坦面を上面とすると柄は絶対に装着され得るからである。裏面は新鋸形である。	身の柄穴付近は肥厚に出来ており、それより下部はいくに従い薄くなる。柄穴付近の施設は裏面に付いており、それは絶対に身に装着される。	極 カ 目 シ	
5	鋸	W 391 2・3区 SK12101 10 层	全長 片身最大幅 厚さ	11.7 12.6 1.8	直柄挿入の柄穴付近の疊合部分のろが残存する。疊起は身の裏面にあると考えられる。柄穴は平頭な身の面に対し、柄は絞り込みがあるからである。	表面は平頭に整形されている。裏面は柄穴を強度にするためか、身の中央部より肥厚し疊起させている。	極 カ 目 シ	
6	二 又 鋸	W 420 2・3区 SK12101 12 層	全長 片身最大幅 厚さ	54.8 7.9 0.5	二又の身の分岐点部分で身は欠落している。腰錠緊縛部は腰錠原型を保っている。上面は平頭で、下面は上部斜面に腰錠用の溝を抉り落としている。左側の身は残存状態が良い。	腰錠緊縛部は腰錠が施因に固定できるように腰錠を作り出している。身は薄く、外側は分岐点より刃端まで下へ削り出している。内側の身は刃端部より約8 cm上まで削り出している。	東 洋 型 腰錠	極 カ 目 シ
7	一 又 鋸	W 1659 9 区 38 層	全長 片身最大幅 厚さ	54.8 8.5 0.5	腹は施錠部でいるものも残存状態が非常に良好な資料である。肩より刃先端まで54.8cmと長い腰錠の二又鋸である。肩は表面を削り落としている。柄の最大幅部は中央部で、腰錠部は中央部より外側へとあり、肩よりこの最大幅部では直線的で腰錠部は切欠き落としている。最大幅部より刃先端部もほぼ直線的である。腰錠部も腰錠でき、製作後部の腰錠を示す資料であろう。	腰錠は定義された形態及び製作技法を示すものと見られる。腰錠は腰錠部で54.8cmと長い腰錠の二又鋸である。肩より刃先端まで54.8cmと長い腰錠の二又鋸である。腰錠部は直線的で、腰錠部は切欠き落としている。最大幅部より刃先端部もほぼ直線的である。腰錠部も腰錠でき、製作後部の腰錠を示す資料であろう。	東 洋 型 腰錠	極 カ 目 シ
8	一 又 鋸	W 821 10 区 33 層	全長 片身最大幅 厚さ	56.0 7.2 0.6	腰錠は本文参照のこと。	腰錠は本文参照のこと。	東 洋 型	極 カ 目 シ
9	一 又 鋸	W 1878 9 区 38 層	全長 片身最大幅 厚さ	59.7 9.3 0.4	左の身の部分が欠落している。この時期の二又鋸の最大幅部は身の中央部からやや下にあるのが大半であるが、最大幅部は中央部からかなり下にあり、肩よりこの最大幅部では直線的で腰錠部は切欠き落としている。最大幅部より刃先端部もほぼ直線的である。腰錠部も腰錠でき、製作後部の腰錠を示す資料であろう。	腰錠緊縛部の右端は尖端部は直角的に腰錠部を示すものと見られる。腰錠は腰錠部で59.7cmと長い腰錠の二又鋸である。肩より刃先端まで59.7cmと長い腰錠の二又鋸である。腰錠部は直線的で、腰錠部は切欠き落としている。最大幅部より刃先端部もほぼ直線的である。腰錠部も腰錠でき、製作後部の腰錠を示す資料であろう。	東 洋 型 腰錠	極 カ 目 シ
10	一 又 鋸	W 2730 5 区 15 层	全長 片身最大幅 厚さ	61.4 8.2 0.7	身の右半分が欠落している。左の身の部分が腰錠部で埋め尽くされている。肩の部分が腰錠部で埋め尽くされている。肩は腰錠部の部分にかけて外端部は柔らかく曲線を描く。	腰錠緊縛部の右端は尖端部は直角的に腰錠部を示すものと見られる。腰錠は腰錠部で61.4cmと長い腰錠の二又鋸である。肩より刃先端まで61.4cmと長い腰錠の二又鋸である。腰錠部は直線的で、腰錠部は切欠き落としている。肩の部分が腰錠部で埋め尽くされている。肩は腰錠部の部分にかけて外端部は柔らかく曲線を描く。	東 洋 型	極 カ 目 シ
11	一 又 鋸	W 1704 1 区 SK12202 22 層	残存長 片身最大幅 厚さ	63.3 8.4 0.9	二又の左側の身が欠落している。右側の身も刃先端が欠落している。腰錠は63.3cmと最大幅部の二又鋸である。肩は腰錠部に直線的に切り落とされている。	腰錠緊縛部の右端は尖端部は直角的に腰錠部を示すものと見られる。腰錠は腰錠部で63.3cmと長い腰錠の二又鋸である。肩は腰錠部に直線的に切り落とされている。肩は刃先端部に直線的に切り落とされている。内側の身の刃先は丁寧に尖らされている。	東 洋 型	極 カ 目 シ
12	一 又 鋸	W 432 2・3区 SK12202 12 层	全長 片身最大幅 厚さ	68.7 10.4 0.5	二又の身の左側が欠落している。全長68.7cmを測る長大な二又鋸である。腰錠は68.7cmと最大幅部の二又鋸である。	肩は68.7cmほど主軸に直交する方向で面を作ると、その肩より身端部まで腰錠部は直角的に削り落としている。腰錠部は腰錠部で68.7cmと長い腰錠の二又鋸である。	東 洋 型	極 カ 目 シ
13	一 又 鋸	W 2738 6 区 16 层	全長 片身最大幅 厚さ	69.8 8.5 0.4	全体は小片に分割され、あるいは菱形、ねじれ曲がり残存状態は良くない。全長69.8cmの長大な二又鋸である。	残存状態不良のため腰錠部の複数は不能であるが、ほぼ11号同形盤・技注のものと思われる。	東 洋 型	極 カ 目 シ
14	一 又 鋸	W 1062 1 区 SK12202 22 層	残存長 片身最大幅 厚さ	40.2 5.8 0.5	腰錠緊縛部及び身の刃先端部が欠落している。肩は殆どなく外側は直線的で、刃先端部は直角的に削り落としている。	上面は基部より下端まではほぼ平面になってしまおり、一の身の部分の中央部を扶ることをしていない。	東 洋 型	極 カ 目 シ
15	一 又 鋸	W 739 1 区 SK12203 22 層	残存長 片身最大幅 厚さ	58.4 9.3 0.7	肩は両方とも欠落しているが、それは使用時の摩耗なのかも腰錠の欠損なのかも知れない。全体的に片身上に割れているのが基部では最大幅2.5cmあり堅固な出来である。	二の身の身はあまり薄くならず、全体的に厚手にできている。	東 洋 型	極 カ 目 シ
16	一 又 鋸	W 395 2・3区 11 层	残存長 片身最大幅 厚さ	39.1 9.1 0.6	二又の身の右側が残存している。身の最大幅は中央部よりやや外側は直線的で外端部の曲線は直角ではなく、肩よりカーブする。	身の外側は薄く削り出し、底面は尖る。刃先端は本來锐利に尖っていたらどうが若干磨损している。	東 洋 型	極 カ 目 シ
17	一 又 鋸	W 404 2・3区 12 层	残存長 片身最大幅 厚さ	33.4 8.8 0.5	二又の身の右側が残存している。中央部は小片に分割されてしまっている。刃先端部も欠落している。小片端よりやや下の箇所では両側を少し前面から削り、芯を二次的に入れていて。	最大幅部は中央や下部にあり、そこから外側に向けて直線的に尖る後に削り出している。	東 洋 型	極 カ 目 シ

番号	器種名	登録番号 出土土地 出土遺物 出土部位	法量 (cm)	形態	技法	分類 本 樹 取 り 種	
18	二叉鋸	W 478 2・3区 SK21201 12層	53.6 片身最大幅 身厚	53.6 8.3 0.5	二叉鋸の右側部分が残存しており、藤柄堅縛部も下部を被る。残存部は53.6cmと長い。肩は丸くやわらかであるものの藤柄堅縛部より優しくかなめ線を描き、刃先方に逆さ。	右側面が柔らかな曲線になるよう丁寧な調整が施されている。	東海型 目 シ
19	二叉鋸	W 696 2・3区 SK21201 12層	44.5 片身最大幅 身厚	44.5 8.9 0.5	身は左側が刃先部、右側が中位以下が欠損している。藤柄堅縛部の上部も少しがれしている。肩は斜めではあるが意識的に削り出している。	藤柄堅縛部の上面は平坦に削り出されているが、一次加工または取りつけ時の跡かもしれないが、この平坦部を2mm程度削り込んでいる。	東海型 目 シ
20	二叉鋸	W 252 5区 SK51000 10層	45.5 片身最大幅 身厚	45.5 9.0 0.4	左の身の部分が大部分残存している。身厚は45.5cmと若干厚くでき上部に残っている。肩から身の大部分にかけて腰やかに輪広くなる。身外側は薄く、刃をついている。刃先端は欠損している。	全体的にこの型式の難点として右肩は手に出来ている。身の内側は角を削り落すし、脇部を尖らせている。外側は薄く削り出している。	東海型 目 シ
21	二叉鋸	W 275 5区 SK51000 10層	43.6 片身最大幅 身厚	43.6 9.5 0.5	分岐点より上方が殆ど欠落している。全体的に小片に割れている。刃先端に使用のためと思われる摩擦感がある。	身軸は中央や下位に最大幅があり、先端部へ向って腰やかなカーブを描く。	東海型 目 シ
22	二叉鋸	W1554 6区 16層	22.9 残存全長 残存身幅 身厚	22.9 6.2 0.5	二叉の身の左側、それも上半分しか残していない。肩は丸く、身幅もほど広くないが残存される。	肩は意識的に丸く加工してある。身の厚さは外側にむかって腰となる。	東海型 目 シ
23	二叉鋸	W1347 6区 16層	54.8 残存全長 片身片身幅 身厚	54.8 9.0 0.5	身の左右側面及び刃先端部が欠損している。藤柄堅縛部の上部は丸く、腰の細い部も丸く残り出している。全面に削け入り表面の残存状態は良くない。	藤柄堅縛部は丁寧に削り出されている。肩は斜めに切り落とされている。	東海型 目 シ
24	二叉鋸	W237 6区 SK61605 15層	42.4 片身最大幅 身厚	42.4 9.2 0.5	残存状不良で左側の身の部分を残す。剥けが數箇所に入り、小片に割れておりほとんどない。刃先端部は残存しない。残存部で42.4cmを測り、全体的に大型の二叉鋸である。身の最大幅は中央部より刃先端に向って下く。	肩より身の最大部まで腰側部は直線的に切り落とされている。身の厚さ0.5mmで腰部に削り出されている。	東海型 目 シ
25	二叉鋸	W2733 6区 16層	50.9 片身最大幅 身厚	50.9 9.3 0.5	藤柄堅縛部が欠損している。全体的に残存状態は良くなく小片に残っている。肩から刃先端までが50.9cmを測る大型である。最大幅が中央部にくる。	身の上端より1cmほど下から一段下げて削り落とし、身全体を薄く削り出している。使用感が後世の欠點が判明がつかないが、身外側、身先端部が腰減したようになされている。	東海型 目 シ
26	二叉鋸	W 765 6区 17層	43.1 片身最大幅 身厚	43.1 8.5 0.4	二叉の身の右側が残存する。小片に割れており残存状態が良くない。刃先端部は欠損している。	棘部は近い基部は厚目に削り出され、刃先部は2mm程度に極薄に削り出されている。	東海型 目 シ
27	二叉鋸	W 691 8区 17層	31.8 残存全長 残存最大幅 身厚	31.8 7.3 0.5	藤柄堅縛部と身の基部を残すが、全体的に表面が削離している。身の分岐部が残存している。刃先端部が欠損している。	肩は腰減しているのか丸い。藤柄堅縛部の上面は平坦に削り出されている。	東海型 目 シ
28	二叉鋸	W 815 10区 31層	32.3 残存全長 片身片身幅 身厚	32.3 6.8 0.5	残存状態は悪く、右側の身の内側の切り込み部分が残存しているのに留まる。変形もしておらず元の形状を想定するには困難である。	二叉の身の内側の切り込みは直線的に加工されている。	東海型 目 シ
29	二叉鋸	W 669 10区 30層	37.6 片身最大幅 身厚	37.6 7.0 0.5	身の右側のみ残存している。刃先端は欠損している。二つの分岐部から直角に分岐する点の長さは37.6cmと出土二叉鋸の中でも最も大きいものである。身の最大幅は腰よりやや上位に位置する。小形のものである。	表面、裏面ともに丁寧な平滑仕上げをしている。刃先での表裏差削形によりさりやん複数な仕上げである。小形に作られた後、二分岐点当たりの身軸が抜いたり他の二叉鋸と全体的な形態、技法が異なる。	東海型 目 シ
30	三叉鋸	WT22-1 2・3区 20層	42.3 全長 片身 身厚	42.3 2.9 0.7	三叉の曲の中央及び右側の先端部分が欠損しているものの、ほぼ全部が肥厚化する。肩は丸く滑らかになっていない。曲は薄く広くなっている。	棘部は難しいが全面に手元の痕が見える。細く調整しているので、精緻な作りの棘である。	棘 目 シ
31	三叉鋸	W1413 2・3区 SK21404 14層	37.8 残存全長 片身片身幅 身厚	37.8 3.5 0.5	藤柄堅縛部及び左側の曲が欠損している。肩は斜めに直線的に切り落とされている。有頭状の藤柄堅縛部が付くものと考えられる。	基部は厚さ3.4mmを測り、全体的に20mmと30mmに比して、加工、整形が粗雑な作りである。	棘 目 シ
32	三叉鋸	W 214 5区 SK61001 22層	43.6 全長 片身 身厚	43.6 2.3 0.7	肩が張り、直線的に肩を作り出している。棘部は狭く、やや厚い。藤柄堅縛部の裏面には、一段横位に溝を切り込んである。	両側の曲が左右側に開く様に削り出されている。裏面は概ねフラットである。	棘 柄 目 シ
33	三叉鋸	W 770 10区 31層	32.0 残存全長 片身 身厚	32.0 1.7 0.4	残存状態は極めて悪く、表面は剥離し、変形もしている。身の曲の曲は欠落しているものの三叉の藤柄が接着する様の身とした。	棘柄堅縛部は有頭状に削り出されている。	棘 目 シ
34	棘尖二叉鋸	W 321 5区 SK51301 15層	44.1 残存全長 片身 身厚	44.1 4.9 0.5	棘穴部及び左側の曲が欠けている。出土状態より33で示した様な形状が復元が可能であった。直頭が身の筋肉に挿入された三叉鋸と考えられる。棘部は幅広で薄い。 「棘柄角度?」	棘穴附近は肥厚に作り出している。肩は幅広であるが、先端部へいくと2mmと極めて薄くなる。棘穴附近は棘も狭く強度がないように観察できる。	棘 カ 目 シ
35	四叉鋸	W2824 5区 SK21203 22層	34.6 残存全長 片身 身厚	34.6 2.5 0.7	右側の2本の曲及び左側の2本の曲の下部が欠落している。肩は丸くやわらかに複雑に削られている。	棘柄堅縛部は有頭状を呈し、裏面は半月状を呈する。	棘 柄 目 シ
36	四叉鋸	W 415 5区 4・5号層 13層	28.6 残存全長 片身 身厚	28.6 13.8 0.5	藤柄堅縛部、基部が残存しているが歯部は大半が欠落している。僅かに左端の身の分岐点が残存しているため四叉鋸と判断した。	肩は丸みを帯びている。全体的に表面が傷んでおり装飾不能である。	棘 柄 目 シ

番号	器種名	登録番号 出土地名 出土層位	法量 (cm)	形態	技法	分類 本 樹 木 根 柄 目 シ	
37	四又鋤	W 344 6 区 SR51002 13 層	全長 重ね幅 身厚	42.0 3.5 0.6	右端、左端の曲が欠落している。大頭で柄が粗広で薄い特徴を持つ四又鋤の部頭に属する。	表面中央部に向かって抉り出されている。柄柄茎部ののみ平坦に削り出されている。	鍛 鍛 柄 目 シ
38	四又鋤	W273 6 区 16 層	残存長 残存幅 身厚	37.7 1.8 0.9	四又の駒柄装着の歯の身である。右外側の1本分の歯が欠落している。歯は丸く緩やかな弧を描く。歯の断面は長方形を成し厚いところで1.2cmあり、やや厚手の感がある。	表面は平坦に削り出している。柄柄茎部は削り、変形しており、厚手な駒頭はできないが有頭状に棘頭部を削り出している。	鍛 鍛 柄 目 シ
39	四又鋤	W 85 6 区 18 層	全長 残存最大幅 身厚	52.0 4.3 0.7	全長52.0cmを測り、幅も標準で30mm前後になると思われる。大頭の四又鋤である。刃は緩やかな曲線を描くものと思われる。身の基部の裏面に三角形をした突起がある。	身は匣円柱作りである。基部は厚く削はれていて、刃に近づくほど薄いが粗広に削られている。身をもじらして棘頭部を削る。棘頭部は細く小さい。	鍛 鍛 柄 目 シ
40	四又鋤	W 2 7 区 10 層	残存長 残存幅 身厚	36.3 1.8 1.4	身の部分の残存状態は良くない。四又の歯はいずれも幅1.3cm程度で幅が狭い。駒柄茎部のやりは良い。	各歯はやや厚めに輪状に削り出している。駒柄茎部は上端を45度に切り落とし、上部は直角で下部は丸く丁寧に仕上げている。	鍛 鍛 柄 目 シ
41	四又鋤	W5028 10 区 33~41層	残存長 残存最大幅 身厚	31.3 1.8 0.8	駒柄装着の四又の歯の身と考えられる。駒柄茎部及びより左端の歯は欠落している。残存している身の大さきからして歯が無い。	表面は、駒柄茎部の基部は平坦に削り出されているが、分岐点より下は内側を抉り出している。身は斜めに削り出されている。	鍛 鍛 柄 目 シ
42	四又鋤	W 609 8 区 17a 層	残存長 身幅 身厚	36.2 1.1 0.5	全体的に歯が状態は悪く、変形してしまっている。歯の下部はいずれも少し落としている。歯は丸く、基部の幅は1.0cmと狭い。身や小型の四又鋤がある。	表面のみ甚だしく、詳細な觀察は不能。駒柄茎部は断面半月形で15.0cmと長く削り出している。	鍛 鍛 柄 目 シ
43	四又鋤	W 343 3 区 13 層	残存長 残存幅 身厚	32.3 3.2 0.7	左端の歯1本のみ残存し、下部も欠落する。歯は緩やかな弧を描く。	身の外側は薄く削り出す。身・裏面とも平滑に調整している。	鍛 鍛 柄 目 シ
44	請手鋤	W 300 5 区 SE505001	柄長 身全長 身最大幅 身厚	88.4 44.2 11.7 0.8	身の上の端面が欠損しているが他のではほぼ完形で削付の状態で出土した。歯穴は円形でその周りは刃形跡が残る。身は軽く彫刻である。刃の先端の左側の方に刃削りの跡があり、刃の中心のところに刃削りの跡がある。刃削りの跡その身の幅は約25mmである。また舟形刃起の主旋方向に対し、上へ右肩側面それの角度は75°である。	身は土台をうけて舌干変形として出土したため詳細な觀察は不能である。柄穴は刃削りがつづく様な跡がある。柄は身の背にくる方が早く、振り方が細く作られており身の背に沿う柄が細く刃が挿入し固定するようになってる。	鍛 鍛 柄 目 シ
45	請手鋤	W1600 9 区 35 層	柄長 身全長 身最大幅 身厚	95.0 51.0 11.8 0.4	身の左端面が欠損しているが柄が装着した形でほぼ完形で出土した。身は形の柄があり、その附近には刃形跡がある。刃の先端の左側の方に刃削りの跡があり、刃の中心のところに刃削りの跡がある。刃削りの跡その身の幅は約25mmである。	身の背にくる方向の刃削りは刃を削しを左右両側が平行に反る形で削られている。刃形の柄は角度がぐく崩に筋方に削られ切れている。柄は身の背にくる方が早く、振り方が細く作られており、身の背より柄の柄の方が挿入し、柄を固定する様な出来ている。	鍛 鍛 柄 目 シ
46	鋤	W 771 10 区 31 層	残存長 残存最大幅 身厚	21.1 5.1 1.2	駒柄の駒柄茎部であり若干基部も残す。身の形状は不明。駒柄部は広く、底部には棘頭方向に溝がある。	上面は平坦に削り出している。裏面の駒柄部は横位に幅1.5cm程度に入れている。	鍛 鍛 柄 目 シ
47	鋤	W 183 6 区 16 層	残存長 残存幅 身厚	14.5 3.8 1.5	駒柄の駒柄茎部である。断面半月形をし、上部は平坦で下部に端部には有頭状の突起を削り出している。	上面の平坦面、裏面加工とともに丁寧である。上端は丸みのある有頭状に削り出している。	鍛 鍛 柄 目 シ
48	鋤	W2889 1 区 SK12202 22 層	残存長 身全長 身厚	18.6 3.2 0.8	多又鋤の外側の歯と考えられる。歯幅が3.2cmと狭いが、加工、木取り、櫛柄より鍛の可能性がある。	平面を平滑に調整してあり始部も丁寧に變形してある。	鍛 鍛 柄 目 シ
49	鋤	W 730 5 区 17a 層	残存長 身最大幅 身厚	27.0 9.6 1.1	残存状態が悪く歯の身と判断するのは困難である。上部に伸びる部分を刃形跡と見受けられる。刃形跡がガリ材であるところから最も一次加工が加わったものと推定した。	駒柄茎部は上部が平坦で下部は株形に削り出している。下に伸びる下部は多又鋤の歯とも考えられる。	鍛 鍛 柄 目 シ
50	鋤	W 441 5 区 16 層	残存長 身全長 身厚	29.5 7.2 0.6	上部が欠落している。二又鋤の身と似た刃の削り出し方をしていて。加工方法、木取り、櫛柄より鍛の歯の一端と判断した。	上部は平坦で裏面は端部近くを緩やかな曲線になる様に加工している。丁寧な加工である。	鍛 鍛 柄 目 シ
51	駒柄	W 205 6 区 18 層	駒柄長 身全長 身厚	30.5 2.2 0.6	残存状態悪く、土圧を受けて変形もしている。頭は有頭状突起を持つ、振り上部は欠落している。 柄装着角度45°	身の駒柄部との接面はフラットに削り出している。	枝 材 サ カ ナ
52	駒柄	W1633 9 区 37b 層	残存柄長 身厚	2.7 16.5	駒の駒柄である。頭を有頭状に削り出している。身の駒柄部との接面は平坦になっている。振り上部は欠落している。 柄装着角度52°	頭を有頭状に加工し、駒柄部は丁寧な加工を施している。柄材を利用しての加工である。全面に手斧痕が残る。	枝 材 サ カ ナ
53	駒柄	W2586 1 区 22 層	残存柄長 身厚	15.6 2.6	材料を用いて枝の骨を柄にしている。身の駒柄部との接面を平滑にして頭を有頭状にしている。	特に頭を有頭状に削り出すのに何度も刃を入れている様子が窺われる。	枝 材 サ カ ナ
54	丸鋤	W 208 5 区 SK51001 10 層	残存長 身最大幅 身厚	16.0 21.2 0.3	頭は3mmと薄く、表面も平滑である。複円形の板に型どられ、中央部や上位に丸扇形方の柄穴が穿たれたと推定する。上部は欠落している。	取り上げ時の変形が面が被打っている。外縁の円形も左右対称になる様丁寧な仕上げである。	鍛 鍛 柄 目 シ

第64表 泥除け具類表

番号	登録番号	区	置位	造構 ダリヤフ	堤長 (m)	最大橋長 (m)	厚さ (mm)	小孔数	木取り	柄孔径 (mm)	柄装着角	面積 (mm <sup>2</sup> )	形態、特徴
1	W-280(1)	10	21層	E84S	19.3	7.5	0.7	2	板目	6.9×2.2 (4.4)	35	(127.4)	
1	W-280(2)	10	21層	E84S	21.5	7.5	0.9	2	板目	6.9×2.3 (4.5)	42 36	128.5	
2	W-35	2+3	8層	B19N	23.4	7.9	1.0	4	板目	6.6×1.8 (3.6)	50 60	152.8	
3	W-26	7	5層	F48 SD70701	21.8	7.6	1.0	3	板目	—	50	—	
4	W-27	2+3	6層	C15S	19.3	8.1	1.0	2	板目	5.5×1.9 (3.8)	50 55	129.9	
5	W-518	7	10層	C50 SR70801	20.1	4.3	1.2	4	板目	6.0×2.0 (4.0)	59 48	(78.3)	
6	W-718	7	10層	E48N	29.0	8.3	0.8	2	追板目	[6.6]×2.1 (4.2)	35	(213.2)	
7	W-289	8	14b層	D68N	27.0	9.0	1.0	5	板目	6.8×1.9 (3.8)	65 72	206.2	
8	W-18	5	6層	F16	17.8	8.3	1.4	2	板目	5.6×2.8 (5.6)	—	127.7	
9	W-798	7	8層	E49 SR70801	14.6	3.6	0.7	2	板目	—	40	—	
10	W-745	7	8層	E49 SR70801	12.9	3.3	0.9	1	板目	—	70	—	
11	W-470	8	14b層	D67S	12.7	3.6	0.9	2	板目	—	40°	—	
12	W-344	8	14b層	E60	25.5	9.3	1.3	2	板目	9.7×2.7 (5.4)	25° 35°	(173.6)	
13	W-361	8	14b層	E60	21.2	10.4	1.0	(2)	板目	7.8×3.0 (6.0)	27° 35°	(170.8)	
14	W-407	8	15層	D68N	25.2	8.8	0.8	6	板目	5.8×1.3 (2.5)	—	(178.7)	
15	W-388	8	14b層	E65S	24.2	7.7	0.9	0	板目	5.7×1.3 (2.5)	—	—	
16	W-793	9	25層	ET1S SR25501	28.3	9.8	0.6	4	板目	6.4×2.0 (4.0)	17° 32°	205.3	
17	W-808	9	25層	D70N SR25501	25.2	7.7	0.7	4	板目	6.1×2.3 (4.5)	—	(144.5)	
18	W-1254	9	25層	ET1S	22.6	6.4	0.9	2	追板目	[6.0]×2.2 (4.4)	—	(127.6)	
19	W-221	8	14a層	E50S	13.3	4.1	1.0	4	板目	[7.6]×2.6 (5.2)	45°	—	
20	W-721	9	25層	E71N SR25501	9.7	3.3	0.8	1	板目	—	—	—	
21	W-156	10	16層	D86N	11.2	4.4	0.6	1	追板目	—	—	—	

第65表 潛名遺跡 鋏 観察表

番号	器種名	登録番号 出土地点 出土遺物 出土層位	法 量 (cm)	形 無	枝 法	分類	細 種
1 鋏	W1394	残存長 (身) 全幅 8 区 18 層 21.9 2.0 65.1 3.3 厚さ	42.3	柄と身を別々に作り、組み合わせて彫縫し磨とした。B 区 I 全形で南北溝より出土した土器とほとんど同じ形である。身は元々円筒形の先端部が削り落とされた形になっている。身の柄が当たる部分は溝状に削りされている。刃先端部は左端が残存しているのが判明せず。その形状は不明である。柄は身と連結する部位は銛状に身の穴に入る。柄の握りは刀のハサカ状に削り出している。	柄、身とともに非常に丁寧な造作をしている。中央ややや左側に鋸歯形の溝がある。刃先端部は左端が残存しているが判明せず。その形状は不明である。柄は身と連結する部位は銛状に身の穴に入る。柄の握りは刀のハサカ状に削り出している。	木取り	身 柄 サカナ
2 鋏	W1471	残存長 8 区 17a 層 34.5 12.6 1.9	34.5	身の右半分が欠落しているが断じた別の方向に作り組み合わせせる。身の柄は丸形で背は尖らっており、身の表面に向かっている。柄との連結部は丸形に空くと想定でき、身のほぼ中央部に柄部に斜面が鋸歯状に削り込まれるように削り込まっている。彫縫用の突起は欠落していると考えられ、元は削り出されていたと想定する。	W1394に比して、刃物底も狭く、全体的に指輪状作りである。身の裏面の内側は削り込み、裏面は圓らんだ形に調整している。先端部は尖り、薄くなるように削っている。	板目	カ シ
3 鋏	W786	全長 10 区 31 層 81.8 9.5 2.7	81.8	一木造りの鋏である。身の右半分が欠落しているが、削りの痕跡は見られない。二次的に削り出している。刃先端部は丸形で背は尖らっており、二又に身を削り出した一本體と想定する。柄の握りは丸形で身に溝状の孔が空けられている。全長 81.8 cm、身の長さ 24.0 cm 全体的に小型の鋏である。	身の部分は圓盤も横盤に施されている。刃先端部は尖り、薄くなるように削り込んでいる。柄は指輪状作りを削り出ししながら、刃先端部は丸形で切削面を施しながら、刃を作っている。	板目	
4 鋏	W 231 SK51006 10 層	残存長 全幅 厚さ 9 区 13 層 27.2 17.6 2.5	27.2	一本木造りの身のみ残存している。刃先も一部欠落している。圓盤の裏面に彫刻がある。身の裏面には丸形の溝がある。刃先端部は丸形で背は尖らっており、二又に身を削り出した一本體と想定する。左右両側端部より 1 cm ほど下に溝が観察できる。	身は平面面を意識的に削りだしている。身の裏面とも不規則な刃物底が一面に観察できる。	板目	
5 鋏	WT1741	残存長 全幅 厚さ 9 区 38 層 10.2 11.3 2.5	10.2	一本木造りの身のみ残存している。刃先も一部欠落している。圓盤の裏面に彫刻がある。身の裏面には丸形の溝がある。刃先端部は丸形で背は尖らっており、二又に身を削り出した一本體と想定する。左右両側端部より 1 cm ほど下に溝が観察できる。	身面は平面面を意識的に削りだしている。身の裏面とも不規則な刃物底が一面に観察できる。	板目	
6 鋏	WT22-2 2・3E 12 層	残存長 全幅 厚さ 49.6 9.2 2.3	49.6	一本木造りの身のみ残存している。刃先も一部欠落している。圓盤の裏面に彫刻がある。身の裏面には丸形の溝がある。刃先端部は丸形で背は尖らっており、二又に身を削り出した一本體と想定する。左右両側端部より 1 cm ほど下に溝が観察できる。	表面は平面面を意識的にとる。側面、裏面はのみをもって面を取り、彫形している。	板目	

第66表 漢名遺跡田下駄銀穿表

番号	基盤番号 出土寸法 出土道筋 出土位置	法 量 (cm)	形 態	技 法	分 類	本 取 り 種 類
1	田下駄 W1547 2×3X 15層	縦全長 横全長 厚さ	29.1 36.1 0.8	若干長尺である丸角長方形の田下駄である。表面の足台は左右両端より断次隆起しており、足をせる部分を直角的に縦方向に二つ折りで割り出している。	表面は若干削減しているものの全面的に丁寧な調査の刀痕が残る。4つの穿孔は、ほぼ刃先の小孔で上下から切り込みでいる。	A1 板目 ギ
2	田下駄 W1548 2×3X 15層	縦全長 横全長 厚さ	29.1 33.7 1.2	W1547とはほぼ同形である。W1547に比して断面などより丸角の形をなし、足台のフラットな面は上部先端を削り落としている。	表面は、もじに去面調整跡がよく残存している。足台部分の左側はフラットにして、右側は底部に内かって削り込みでいる。	A1 板目 ギ
3	田下駄 W1147 2×3X 14層	縦全長 横全長 厚さ	23.2 29.5 1.8	表裏は足台の有無で明確にわかるが、上下は差別が難しい。左側は刃先部で底盤が1.5cm程度と大きい。左下の左側面が削り取られている。	足台は、幅4~5cm程度の直角の切欠き作成されている。左側面に施された部分的に粗削り、刃先ながら木墨加工が施されたのか。	A1 追削目 ギ
4	田下駄 W1414 2×3X 14層	縦全長 横全長 厚さ	23.6 23.8 2.1	ほぼ方形近似。B・C型の機長の田下駄に比してやはりC型を意識して作られたように見える。穿孔は直径1.5cm程度の円形である。	中央に足台を構造を作り出している。左右両側面部に内かって削り込みでいる。穿孔は刃先で削り切ったものであろう。	A1 板目 ギ
5	田下駄 W1426 2×3X SK1404 14層	既存縦長 既存横長 厚さ	13.4 28.0 1.9	上部半分が欠落している。整形的にはW1547、W1548とはほぼ同形と見れる。丸角の矩形・長方形をなすと推測できる。穿孔は、方形を旨に穿たれているが、角が摩耗している。	足台のカット面には薄削り仕上げ、左右両側の削り落し跡は刃削りが残る。穿孔は刃先の刃刃で細胞組織的な直進が残る。	A1 板目 ギ
6	田下駄 W1146 2×3X 14層	既存縦長 既存横長 厚さ	27.6 37.6 1.5	足裏に凹みがあり足をせらる部分が削り落しているという田下駄の特徴である。4つの穿孔は田下駄中央部に同じく左側面に削り落す。孔は方形を意識して穿たれているが、孔は歪曲している。	右側面側面を丸めて由して切欠きをしていている。足台部は左側に直角に切欠いており、足裏側は頭部を直面に削り切る方法で切り落している。	B1 板目 ギ
7	田下駄 W1428 2×3X SK1401 14層	既存縦長 既存横長 厚さ	10.1 31.8 1.1	上部半分が欠落している。足裏に作り出しながら足台を設けている。足裏の外側に圓形の孔が穿たれている。	足台の脚部部分を足下駄側面する部分だけ削り落とすようにしている。足台部は左側に直角に切欠いており、足裏部は頭部を直面に削り落す方法で切り落している。	B1 板目 ギ
8	田下駄 W1493 2×3X SK1401 14層	既存縦長 既存横長 厚さ	15.8 35.9 1.9	下部半分が欠落している。足裏に作り出しながら足台を設けている。やはり足裏の外側に孔を穿っている。	足が乗る部分だけ少し削り込み。フ ラットに整形している。	B1 板目 ギ
9	田下駄 W1476 2×3X SK1401 14層	既存縦長 既存横長 厚さ	14.1 37.7 1.4	上部半分が欠落している。足裏に切欠きを作り出しが直進されているといふ。足の重かる部分を少し削り込んで固定しやすく仕上げにしているものもある。孔は表面に丸形を呈するを推定される。	足台部は外側に斜めに削り落としている。左側面は頭部に直面に削り落す方法で切り落としている。	B1 板目 ギ
10	田下駄 W1479 2×3X SK21402 14層	既存縦長 既存横長 厚さ	9.5 26.4 1.1	上部、下部ともに欠落し、2孔を含む中央の一部のみが残存している。やはり足裏の部分を孔に削り込む形状である。孔は間に3cmほどになる大きさの横円の彫印に穿たれている。	足裏は内側、外側ともに斜めに削り込み直進している。足裏の頭部を直面に削り落す方法で切り落している。足を置く部分の平面面積は狭い。	B1 板目 ギ
11	田下駄 W 728 1区 SK1203 14層	縦全長 横全長 厚さ	19.1 36.6 2.0	足を全く部分は横幅方向に平面面積を広げている。足台底座から左右両側面部に向かって断次削落くなるように削り出している。頭の表面は彫刻でさくびり込んでいる。	表面を削り落して頭部は直進しないが、足裏部は左側面に直面に削り落す。孔は規則性がなく、横円状に穿っている。	B2 板目 ギ
12	田下駄 W1496 2×3X SK21401 14層	既存縦長 既存横長 厚さ	13.0 27.9 1.3	上部・下部ともに欠落し。上下は判別がつかない。足台は左右両側面部を直角に削り落している。3孔孔が11.5cmあるため2孔は前方孔と推定できる。	足台底座に頭部でなく左右両側を少し削り込んでいる。	B2 板目 ギ
13	田下駄 W1474 2×3X SK21402 14層	既存縦長 既存横長 厚さ	15.5 31.4 1.8	足台は断次削落している。前方の2孔孔が9.0cmと大きく空いている。頭部は下部端に向かって断次削落くなる。	表・裏面とも手斧の整形痕がよく観察できる。	B2 板目 ギ
14	田下駄 W1473 2×3X SK21402 14層	縦全長 横全長 厚さ	15.4 31.5 1.8	W1474と同様形の田下駄である。出土地点からも対をなして使用されたものと考えられる。足台の頭部は頭部ではない。特に右側面は、頭部に内かって削り落くなっている。	足台の頭部を直面に削り落して頭部を直面に削り落す。孔は規則的でない。穿孔は直角に切欠き削り落す方法で切り落す。	B2 板目 ギ
15	田下駄 W 296 2×3X 12層	既存縦長 既存横長 厚さ	20.0 50.4 2.5	全長が50cmを超える大空の田下駄である。前方2孔より上部が欠落している。左側面は外側に向かって斜めに削り出している。孔は直角に削り落す方法で削り落す。	全体的に削り落し、頭部も直角に削り落す。調整用の一辺が削り落す頭部と大きい。頭部木口も直角に切削である。	B2 板目 ギ
16	田下駄 W 408 2×3X 12層	縦全長 横全長 厚さ	28.0 36.6 1.9	丸角長方形で、バランスのとれた影響をしている。足台を作り出しているよう。左側面を削面木口に向かって斜めに削り落している。孔は直角に削り落す方法で削り落す。孔は直角に削り落す方法で削り落す。	表面全面横筋方向に削面板が残る。孔は規則的でない。穿孔は直角に削り落す方法で削り落す。	B2 板目 ギ
17	田下駄 W 721 2×3X SK1202 12層	既存縦長 既存横長 厚さ	25.9 45.0 2.2	頭部部分が半月形で呈り、頭は直線的に裁断されている。やはり足裏をせらる部分はフリットであるが、左側面に向かって断次削落くなっている。裏面後方の2孔間にWは40mm幅、浅い溝がある。	表裏とも横筋方向に削面板が残る。足を乗せる部分は平滑な仕上げをしている。	B2 板目 ギ
18	田下駄 W 412 2×3X 12層	縦全長 横全長 厚さ	26.4 38.7 1.6	W408とはほぼ同形の田下駄である。全面的に角を落とした丁寧な作りである。	刃幅5cmほどもある幅広の加工痕が頭部に観察できる。	B2 板目 ギ

番号	器種名	登録番号 出土地点 出土連接 出土部位	法 規 (cm)	形 態	技 法	分 類	樹 種	
19	田下駄	W 429 9区 SK21206 12層	縦全長 横全長 厚さ	26.0 34.6 2.5	ほば台形状を有し、前方地、後方部は直線的である。穿孔は本丸部のものと見受けられる。重量は55.1gと最も重い部類に属する。	穿孔部より左右両端部に向かって深く削り込んでいる。	B2	追根目 追根目
20	田下駄	W2950 6区 16層	縦全長 横全長 厚さ	24.1 38.3 2.5	左上端部が一部欠落している。足台を強調すべく、左右両側を一段削り落としている。裏面後方2孔間に鍵神用の跡が確認される。	無い調整痕が全面に残る。孔は方形に垂直に穿たれている。	B2	追根目 追根目
21	田下駄	W2951 6区 16層	縦全長 横全長 厚さ	27.2 41.6 1.9	水滴状重量で21.8gと最も重い部類に属する。面積もより厚さも最も厚いところで4cmを越える。形態的にはW2950に似る。	斜面上もW2950に似る。調整痕の刀幅も5mm程の幅広のものがある。	B2	板目 板目
22	田下駄	W1155 6区 16層	縦全長 横全長 厚さ	18.2 31.9 1.9	完形でかなり薄い面積が55.8cm <sup>2</sup> と小型の田下駄である。右上の穿孔部が直線的のものよりも上位にあり、また4孔も中心部よりやや左側にくる。	表面は磨擦しているためか細かな加工痕は確認できない。孔は複数に膨らむ構造形状に穿たれている。	B2	追根目 追根目
23	田下駄	W2451 6区 16層	残存縦長 横全長 厚さ	12.4 39.3 1.4	上面半分が欠落している。左右両側は丸みをもって作形されている。足台部もその一段下がった両側も平面形を作り出している。	孔はほぼ正方形を意識して穿たれている。	B2	追根目 追根目
24	田下駄	W 558 16層水田	残存縦長 横全長 厚さ	11.9 31.8 0.8	上部半分が欠落している。全体的に残存状態が悪く、形態的にも残存するものかもしれない。左右両側面部は直線的に形成されている。	足台降起部は斜めに両側方向に切り落とされている。孔は直径3cm程の大型円孔に穿たれている。	B2	板目 板目
25	田下駄	W 597 6区 16層水田	縦全長 横全長 厚さ	15.2 46.2 1.1	横全長が46.2cmと横に長い。足台はあまり強調されていない。	左右両側を若干削っている程度で足台を設けていない。孔はほぼ円形である。	B2	板目 板目
26	田下駄	W 954 7区 10層下部	残存縦長 横全長 厚さ	18.0 37.6 1.6	右側3分の1が欠落している。足台も強調されていない。両側面は直線状に作形されている。	孔は足台と両側底部の段差間に縱方向に長い槽円形に穿たれている。	B2	板目 板目
27	田下駄	W 673 8区 17層	縦全長 横全長 厚さ	13.2 31.2 2.1	半分が欠落しており、上下の判別が難しい。横全長が31.2cmである。足台降起部の輪に付し、残存している2孔の位置が若干離れていている。	足台部の最大厚は、2.8cmと小形の田下駄としては厚く、左右両側に向かって少しすつ歯切り込んでいる。	B2	板目 板目
28	田下駄	W 504 6区 17層	残存縦長 横全長 厚さ	15.9 38.3 1.3	右側が一部欠落している。足台降起から左右両両舟形への腹面に円形の直径3cm程の大きな穴が開けられている。	孔は表・裏面側から鋭い刃物で円形に穿たれている。	B2	板目 板目
29	田下駄	W2864 9区 SK21001 38層	縦全長 横全長 厚さ	28.9 38.3 2.0	表面横102.5cm、重量2507gを説く大型の田下駄である。穿孔部より直線的両側に向かって薄くなる。本来穿孔は方形をしていて観察できる。	全体的に工事な作りである。左右両端部は丸味のある加工を施している。	B2	板目 板目
30	田下駄	W 404 10区 31層	縦全長 横全長 厚さ	23.4 33.0 2.3	足台を強調するため、穿孔部と左右外側に向かって削り込んでいる。孔は機械にやや長い長方形に穿たれている。	表面の調整痕が横位方向に観察できる。幅は6mmもあるものもある。	B2	板目 板目
31	田下駄	W 775 10区 31層	残存縦長 横全長 厚さ	16.8 28.3 1.1	右上端部一部が欠落しているものはほぼ正方形面積は46.6cm <sup>2</sup> と小型である。横全長も28.3cmと最も小さい部類に属する。孔は後方1孔しか空いていない、3孔である。	孔は鋭利な刃物で方形を意識して穿たれている。粗雑な作りで未製品と考えられる。	B2	板目 板目
32	田下駄	W527-1 9区 SK21201 25層	縦全長 横全長 厚さ	24.8 41.6 1.6	全体は橢円形を呈している。後方左側の孔が作り戻されている。	足台を削り出すように穿孔部より昇側への加工は丁寧に施されている。	B2	板目 板目
33	田下駄	W1556 1区 SK12201 22層	縦全長 横全長 厚さ	20.1 26.2 1.3	穿孔状態が悪く、特に右側3分の1が欠落している。左右の2孔を縦に引いた縫で足台を強調している。	足台降起を強調するように、段差をつけるよう切り込んでいる。	B2	追根目 追根目
34	田下駄	W 737 1区 SK12202 22層	縦全長 横全長 厚さ	21.6 49.8 1.6	横全長が49.5cmあり、最も横に長い田下駄の部類に属する。丸孔の長方形を生す。前孔間と後孔間の差があまりない。	足台部がほぼ長方形をしている。穿孔は小さく、前孔は前に出ている。	B2	追根目 追根目
35	田下駄	W1541 2区 16層 上	縦全長 横全長 厚さ	17.2 31.6 1.0	前方部辺が長い台形をしている。足台は最厚部で4cmほどと厚く、後方の欠損部と思われるが、前方部に向かって薄くなっている。穿孔は方形を意識しているものと思われる。	穿孔は方形に何度も刃を入れて穿たれている。左右両側面部は大きく意識的に削り出している。	B2	板目 板目
36	田下駄	W1425 2区 SK21004 14層	残存縦長 横全長 厚さ	16.2 39.0 2.0	38.40.41は小野の田下駄に属するものである。前孔間と後孔間に距離の差がなく割合は判別しにくい。	削材の板をまだ削った時の凹凸が残ったまま田下駄に加工している。	B2	板目 板目
37	田下駄	W 471 2-3区 14層	縦全長 横全長 厚さ	16.1 31.4 1.4	裏面とも穿孔部がほとんど観察できない。孔は表面を皆に1邊2cm近い大きさで穿たれている。	裏面とも調整痕がほとんど観察できない。表面調整をしない粗雑な作りである。	B2	板目 板目
38	田下駄	W681 2-3区 SK21202 12層	縦全長 横全長 厚さ	26.9 33.4 1.6	中央で上下に半折れさせて出土した。前部は直線的に切断されている。足台は底部において段差を設けている唯一の例である。	全体的に工事な仕上げになっている。段差部分を以て底面に穿孔されている。	B2	板目 板目

番 号	名 称	登録番号 出上部底 出上部端位	法 量 ( cm )	形 態	技 法	分 木 取 り 機 種	
39	田下駄	W 435 2・3区 SK12101 12層	縦全長 横全長 厚さ	16.2 42.4 1.5	左右両側端部は弧を描くように形作り、全体的に楕円形を呈する。左前のがやや外側に向いて穿たれている。	表面では部分的に横位方向の手斧痕が確認できる。足台と両側平坦部との段差は約5mm程度と小さい。	B3 板目(スギ)
40	田下駄	W 609 2・3区 SK12101 12層	縦全長 横全長 厚さ	20.9 47.9 1.5	前方部、左右両端が一部欠落している。楕円長方形である。前孔端と後孔間に距離の差がありなく、34のW737と似た形状を示す。	穿孔技術は粗雑である。表面両側は上縁に丸く、下方は直線で整理に穿っているような加工痕が確認できる。	B3 板目(スギ)
41	田下駄	W 453 2・3区 SK12104 12層	残存底長 横全長 厚さ	16.4 29.5 1.2	足台部が最大厚さのところで5cmあり、両側平坦部と4cmの段差がある。下位半分が欠落している。横全長は90cmを切る小ささである。	足の段差部を上から垂直に切り落として整形している。	B3 追削目(スギ)
42	田下駄	W 334 5区 SK121301 13層	縦全長 横全長 厚さ	27.7 38.9 1.4	縦全長が27.7cmと最も短い長さがある部類に属する。前方部辺が後方部より長い台形を呈する。	大型にしては全体的に薄く仕上げている。孔は直径が2cm以上のものもあり粗雑に穿たれている。	B3 板目(スギ)
43	田下駄	W 312 5区 10層	残存底長 横全長 厚さ	11.8 45.2 1.5	前孔より前方部、後孔より後方部が欠落している。足台部は平面に仕切られ、左右両側平坦部には調整の刃物痕が全面に確認できる。	足台部は平滑に仕上げをしており、左右両側平坦部は細かな手斧痕が複数に並び、丁寧な調整加工が確認できる。	B3 板目(スギ)
44	田下駄	W 557 5区 16層	残存底長 横全長 厚さ	12.2 54.9 0.9	後方部半分が欠落している。左側平坦部より右側平坦部の方が薄く、左側は底長とところで8cm程度の厚さになってしまった。孔は楕円形である。	特に右側平坦部は薄く削り込んでいる。孔は使用したため滑らかになったか不明であるが、縦長楕円形に整形している。	B3 追削目(スギ)
45	田下駄	W 1 7区 10層	縦全長 横全長 厚さ	19.3 45.0 1.1	前方2孔間距離と後方2孔間ののそれとの差が3cm以上ある。足台は左側両端の平面もフラットに開削してある。孔は横長の楕円形に穿たれている。	表面は摩耗しているため細かい削痕はできないものの全体的に丁寧に平滑な加工を施している。	B3 板目(スギ)
46	田下駄	W 451 7区 10層	残存底長 横全長 厚さ	19.9 38.2 0.5	残存状態で悪く左半分が欠落している。残存しているところは厚さが楕円形程度で薄くなっている。	摩耗しているため薄くなったのか不明だが全体的に薄く仕上げている。	B3 板目(スギ)
47	田下駄	W 912 7区 16層	縦全長 横全長 厚さ	25.1 37.2 2.2	前方部端は直線的で、側面辺は後方に向かって、弧を描きながら転折になり台形を呈している。孔は縦長楕円形に穿たれている。	不規則な手斧痕が全面的に残る。且合を取り出すときに差し込むと刃物を何度も繰り返す刃物跡が多数残るよう加工を繰り返している。	B3 板目(スギ)
48	田下駄	W 639 8区 17層	残存底長 横全長 厚さ	16.6 33.8 1.8	前方孔より後半分が欠落している。全体的には楕円形に近い複雑丸方孔である。足台はわざと厚さにして2mm程度高くしてあるだけである。孔は縦長で一番長い延べ4cmにもなる楕円形に穿たれている。	厚さ約3mmの板をくらかし金鎚で加工している。足台と左右両側との段差は斜めに落としている。	B3 板目(スギ)
49	田下駄	W 946 10区 33層	縦全長 横全長 厚さ	17.7 36.2 1.6	外形は丸方孔を呈している。足台は最厚部で3.5cmと厚い。孔は方形を意識しているが小さく穿たれている。	全面的に横位方向の手斧痕が残る。穿孔時の刃は斜めに入っている。	B3 追削目(スギ)
50	田下駄	W 189 1区 SE12001 裏土中 22層	縦全長 横全長 厚さ	20.7 33.8 1.8	前方孔付近が欠落している。椭円形を呈している。孔は横長の長方形に穿たれている。	外形の楕円形を作り出すのに丁寧な加工が施されている。	C1 板目(スギ)
51	田下駄	W 636 1区 SE12001 裏土中 22層	残存底長 横全長 厚さ	18.4 22.6 1.8	後方孔より後方が欠落している。足を要せる部分は若干厚くできているが足台を削り出す加工は確認できない。	若干横長の方形孔に孔が穿たれていい。孔は横に2.5cmと大きい。	C1 板目(スギ)
52	田下駄	W 693 1区 22層	縦全長 横全長 厚さ	15.4 37.6 2.0	楕円長方形で表記ともフラットな田下駄である。孔は方形を意識して穿たれている。	表面は削材にしたときの凸凹をそのままに残して整形していない。	C1 追削目(スギ)
53	田下駄	W 740 1区 SK12205 22層	残存底長 横全長 厚さ	12.8 22.9 1.6	残存状態極めて悪く、残存部の形状と2つの孔および木取りより田下駄とした。前、後方は判別が不可能である。	孔は縦長の長方形状に穿たれている。	C1 板目(スギ)
54	田下駄	W 874 1区 SK12203 22層	残存底長 横全長 厚さ	13.5 48.3 1.9	前方半分が欠落している。孔は小さな方形に穿たれている。	表面は摩耗している。孔は刃幅の狭いノミ状工具を垂直に当てて穿っている。	C1 板目(スギ)
55	田下駄	W1743 1区 SK12201 22層	縦全長 横全長 厚さ	22.6 49.5 1.9	外形は長方形を呈している。足台底盤はないが、前方に前後の孔を斜め上縁に刀物で引いている。孔は方形で小さく穿たれている。	全面にはばね横位方向の手斧痕が確認できる。手斧痕は横位方向は確認できるが、1つ1つの単位が不規則である。	C1 板目(スギ)
56	田下駄	W1722 1区 SK12202 22層	縦全長 横全長 厚さ	25.1 41.1 1.7	前方が楕円形に形作られ、全体的には半円形を呈す。孔は若干横長の長方形に穿たれている。	全面に横位の複数的な手斧痕が見よ。刃幅2mm程度の陥落性を持つ。	C1 追削目(スギ)
57	田下駄	W1937 1区 SK12201 22層	残存底長 横全長 厚さ	14.0 32.8 1.2	前方孔より前の部分が欠落している。後方の左右角は弧状に削られている。孔は長方形に穿たれている。	刃幅3mm程度の手斧痕が横位に若干確認できる。	C1 板目(スギ)

番号	器種名	登録番号 出土年 出土場所 出土位	法 量 (cm)	形 態	技 法	分 木 取 り	編 目	
58	田下駄	W1825 SK12202 22層	残存長 幅全長 厚さ	13.0 37.7 2.0	両丸長方形をし、両側面木口は角を削り落としている。孔はほぼ方形に穿たれている。	表面とも平滑にする加工を丁寧に施している。	CI 通目	スギ
59	田下駄	W2931 1区 SK12203 22層	残存長 幅全長 厚さ	17.8 35.8 1.8	後方半分が欠落している。孔は横長の長方形を意識して穿たれている。	表面には幾位方向の一単位の大きい手斧痕が残っている。	CI 板目	スギ
60	田下駄	W 784 15区 SK12202 22層	残存長 幅全長 厚さ	9.7 41.5 2.0	部分が欠落していると考えられる板木本木品である。形状、木口より田下駄と判断したが、残る2つの孔は問題が少なすぎで、この2孔が割れた2枚板を緊密に接する孔とも考えられる。	表面とも丁寧な調整加工作である。左側面の木口は特に丸みを出すよう加工されている。	CI 板目	スギ
61	田下駄	W1536 2-3区 25層	幅全長 幅全長 厚さ	18.3 34.4 1.8	後方部が欠落している。横全長が94.4cmと短い。全体的には横長の長方形を呈す。裏は大きく若干横長の長方形を意識して穿たれているようだ。	割り出して面を平滑に調整しておらず、裏面とも凸凹がある。	CI 板目	スギ
62	田下駄	W1532 2-3区 16層	幅全長 幅全長 厚さ	22.8 25.3 3.3	全体にはほぼ正方形を呈し、厚さは3.3cmとかなり厚い。左側孔が4cm×2.5cmと横長の長方形で大きくなっている。	側面とともに切削の凹凸を調整していない。孔はノミの工具で斜めに刃を入れてほぼ方形に穿っている。	CI 板目	スギ
63	田下駄	W 403 9-15区 12層	幅全長 幅全長 厚さ	16.9 36.1 1.4	左半分は摩耗している部分が多い。全体的には長方形を呈す。左半分は薄く削り込まれている。孔はほぼ方形を旨として穿たれている。	右側表面には幅3cm余の幅広で横直手斧痕が見え、中央部附近には刀彫の鋭い横線の手斧痕が残る。	CI 板目	スギ
64	田下駄	W 582 2-3区 SK12101 12層	幅全長 幅全長 厚さ	13.3 40.3 2.4	前方の横の長さが後方の横の長さより短く、全体的には台形を呈す。厚さは前方部より後方部に向かって厚くなる。後方部では幅2.4cmと厚手の田下駄である。孔は横円形が基本と思われる。	前面の角は丸く削りしている(4個面とも切り落としただけ)で調整はしていない。孔は円形に穿たれており、裏面も同じ。	CI 板目	スギ
65	田下駄	W 411 2-3区 12層	幅全長 幅全長 厚さ	14.9 40.4 1.0	前孔より前部、後方部が欠落している。両側面は弧状に削り出している。孔は不定形だが小さく穿たれている。	左右両側面の木口は面を削り出し、半周に調整している。全体的に薄く平滑に削り出している。	CI 板目	スギ
66	田下駄	W 434 2-3区 12層	残存長 幅全長 厚さ	12.4 39.4 1.8	半分が欠落している。2孔が残るが、前後が接觸できない。2孔の間隔は11.6mmと距離があるため、2孔は別孔とも思えるが、前孔は2.2cmと幅いため、2孔は後孔と考えてよいだろう。	表面は凸凹の激しく材のまま調整はしていない。孔は円形に穿たれており、裏面も同じ。	CI 板目	スギ
67	田下駄	W 424 2-3区 SK12106 12層	残存長 幅全長 厚さ	14.2 45.8 1.4	前方半分が欠落している。両側面の木口は頭を據くように丸みを持て加工されている。孔は2孔間が7.5cm、2孔より離れて2.2cmと幅いため、2孔は後孔と考えてよいだろう。	裏面とも摩耗延びだしく木目が凹凸となって現れている。孔は横長の横円形。	CI 板目	スギ
68	田下駄	W 419 2-3区 12層	幅全長 幅全長 厚さ	16.7 25.8 0.8	右側3分の1程度が欠落している。4孔とも確認できる。横長方形を呈す。	現状状態よく、表面は木目に沿った削れの凹凸が確認できるのみだ。孔も角が摩耗している。	CI 板目	スギ
69	田下駄	W 449 2-3区 SK12104 12層	幅全長 幅全長 厚さ	16.8 37.2 1.9	左側面は頭の部分を直線的に切り落としており、右側面は直線的に整形しないままにしている。孔は不定形ではあるが小方形を旨としている。	表面左側に手斧痕が幾位に複数で残っている。前孔より後孔の方が大きく穿っている。	CI 板目	スギ
70	田下駄	W 451 2-3区 SK12101 12層	残存長 幅全長 厚さ	12.0 37.1 1.0	前方左側及び後方右孔近辺が欠落している。存在している最大横長が12.0cmと短く、厚さは薄いところで1.0cmに満たない離さである。	表面裏面とも整形らしい整形はしていない。孔は横長の横円形である。	CI 板目	スギ
71	田下駄	W 554 2-3区 SK12101 12層	幅全長 幅全長 厚さ	19.7 34.5 1.9	左側両側面は頭状に丸く加工しており、前後の横筋は直線的である。孔は小さく横円形を呈すが、右後孔は内側に入っている。	表面的な加工かそれとも後世の変形か表面が反っている。	CI 板目	スギ
72	田下駄	W 458 2-3区 SK12101 12層	幅全長 幅全長 厚さ	24.9 41.6 1.9	重量が2290gと重く大型の田下駄である。表面も972cm <sup>2</sup> とやや少く厚さも最厚のところで2.6cmに近い。孔はやや横長の横円形に穿っている。	表面右側に手斧痕が複数に複数で残る。左右両本口面も加工痕が残る。	CI 通目	スギ
73	田下駄	W 436 2-3区 SK12101 12層	幅全長 幅全長 厚さ	19.2 49.9 2.1	全体が横長の横円形を呈す。表面は木表の平滑なところを利用している。孔はやや形が崩れてはいるが、ほぼ方形に穿たれている。	表面前面と後面に複数の手斧痕が残る。両側面の木口は角を落とすように切り込んでいる。	CI 板目	スギ
74	田下駄	W 416 2-3区 12層	残存長 幅全長 厚さ	6.4 36.0 0.8	残存状態が悪く、後方半分以上が欠落している。裏面とも摩耗が甚しくそのため薄くなっているとも思われる。	左右両側面木口は粗く切断したまま整形もしないでいる。	CI 板目	スギ
75	田下駄	W 437 2-3区 SK12101 12層水田	残存長 幅全長 厚さ	12.6 36.4 0.9	前方3分の1程度が欠落している。薄い出来上がりである。孔は横長に大きく梢円形に穿たれている。	表面とも薄く平滑に仕上げている。	CI 通目	スギ
76	田下駄	W 406 2-3区 12層	幅全長 幅全長 厚さ	28.8 34.8 1.8	横全長が98.8cmもある。全体的には横円形に近い。表面とも意識的に平滑にしている。孔は不定形である。	表面とも特に表面に手斧痕が複数に多く残る。単位は不定形である。	CI 板目	スギ

番号	器種名	登錄番号 出土地点 出土遺物 出土位置	法 (cm)	形 態	技 法	分 類	本 取 り ( ス ギ )	樹 種
77	田下駄	W 154 2-3区 12層	縦全長 横全長 厚さ	22.3 40.3 2.1	全体的には長方形をしている。表裏とも板目に割材したときの直角をそのまま残している。孔は左側が横に細長く穿っ ている。	表裏とも調査痕が観察できない。孔 は左側が横に細長く穿っているが、左側 は变形させている。	C1	板 目 ( ス ギ )
78	田下駄	W 720 2-3区 12層	縦全長 横全長 厚さ	21.3 37.8 2.7	やや角丸みを残すつまほ長方形である。孔は不定形で あるが裏は円形。前孔が後孔より大きくなっている。	表裏とも摩耗のためか手斧痕が観察 できない。手手に加工している。	C1	板 目 ( ス ギ )
79	田下駄	W 633 2-3区 SK21201 12層	縦全長 横全長 厚さ	21.8 38.0 1.3	前後端部は直角的であり、左右側面は直角を描いている。孔は 小方形である。左上が若干昇っており出している。	表裏とも平面に仕上げているが摩耗 のためか手斧痕は観察できない。	C1	板 目 ( ス ギ )
80	田下駄	W 625 2-3区 12層	縦全長 横全長 厚さ	17.0 35.4 1.7	角を丸くした隅丸長方形の田下駄である。4孔の中心軸がや や左に寄っている。孔は方形を意識して穿たれている。	刃幅4cmの手斧痕が横位に残る。角 は丸みをつける加工が施されている。	C1	板 目 ( ス ギ )
81	田下駄	W 572 2-3区 SK21201 12層	残存縦長 横全長 厚さ	7.0 40.2 1.2	残存状態は悪く、2孔と残部一部が残存していることにより 田下駄と判別した。孔は残部の横円形に穿たれている。	左右木口の角は隅丸になるよう加工 している。	C1	板 目 ( ス ギ )
82	田下駄	W 571 2-3区 SK21201 12層	残存縦長 横全長 厚さ	8.9 40.8 1.1	残存状態悪い。厚壁、変形等大きく全体的に直に圓くなり反 りもある。右後孔は残存するが左後孔は直角が確認できる 程度である。	左右側面は直角を描くよう切り出して いる。	C1	板 目 ( ス ギ )
83	田下駄	W 565 2-3区 SK21201 12層	残存縦長 横全長 厚さ	10.3 34.8 1.3	2孔残存するが前面部、後面部、右側部は欠落している。2 孔間20.3cmと長いため前孔とした。左側面は残存している。 孔は隅丸長方形に穿たれている。	表面の摩耗甚だしい。加工痕として は明確に観察できない。	C1	板 目 ( ス ギ )
84	田下駄	W 426 2-3区 SK21206 12層	残存縦長 横全長 厚さ	14.1 38.4 0.9	前部が欠落している。左端部は欠損か否かが判別できない。 孔は不定形である。	右後の角は残存しており、これから 残存するとほぼ長方形に形成されて いる。	C1	板 目 ( ス ギ )
85	田下駄	W 421 2-3区 SK21206 12層	残存縦長 横全長 厚さ	15.8 33.2 2.0	前部が欠落している。全体は長方形を呈す。孔は横長の長方 形に穿たれている。	刃幅3.5から4.0cmの横位の手斧痕 が全面に確認できる。側面の木口面 には直い切削痕が残る。	C1	板 目 ( ス ギ )
86	田下駄	W 415 2-3区 SK21201 12層	縦全長 横全長 厚さ	18.5 35.8 1.4	両側面は若干弧状に切削している。孔は不定形であるがほぼ 横長で左後孔は長方形を呈す。	両側面には斜めに切削面を調整する 加工痕が大きな単位で残る。	C1	板 目 ( ス ギ )
87	田下駄	W 417 2-3区 SK21201 12層	縦全長 横全長 厚さ	22.1 33.5 2.1	全体は隅丸長方形で厚さは1cmあり、重量感がある。孔は 横長の横円形に穿たれている。	角はいずれも丸みをもって加工され ている。孔は鋭利な刃物を被方向に 切り込んで穿いている。被の刃物 頭が孔の端に嵌入する。	C1	板 目 ( ス ギ )
88	田下駄	W 415 2-3区 12層	残存縦長 横全長 厚さ	7.9 36.3 0.7	前方部、後方部は欠落している。左右端部は残存していると 観察できる。2孔が約10.0cmもの距離があるため前孔とした。	対角部は直角く、殆ど加工痕観察でき ない。孔は横長の横円形に穿たれただろ うか。	C1	板 目 ( ス ギ )
89	田下駄	W 407 2-3区 12層	残存縦長 横全長 厚さ	18.2 33.1 1.8	前孔より右端部が欠落している。全体的には長方形を呈す。孔 は直角に穿たれている。	左側木口は斜めに切削した痕が残る。 我の木口と斜めに切削痕を平行に調整して いる。	C1	板 目 ( ス ギ )
90	田下駄	W 413 2-3区 12層	縦全長 横全長 厚さ	27.8 43.8 1.2	前方部、後方部の木口は直角的に切削してあるが、全体的に は横長の横円形に作成されている。孔は小さな方形に穿たれている。 後孔が近く左前孔が外側に穿かれている。	左右側面木口は直角を描くように丁 寧な加工が施されている。前孔2つ は正方形に穿たれている。	C1	板 目 ( ス ギ )
91	田下駄	W 240 2-3区 12層	残存縦長 横全長 厚さ	12.5 29.6 1.5	残存状態悪い。前半分が欠落している。左側端部は欠落し ているか不明である。孔は直角3cm程の大きな円形に穿 たれている。	全体的に摩耗しているため細胞は難 しい。剥り出した面は剥離しておらず、 表裏とも直角の孔が残る。	C1	板 目 ( ス ギ )
92	田下駄	W 420 2-3区 SK21206 12層	縦全長 横全長 厚さ	17.1 43.5 1.8	隅丸長方形を呈す。幅が17.1cm、高さが43.5cmと縦に比べて縦 に横長の長方形の田下駄である。孔は使用のためかもしれない が横長の横円形をしている。	表面には一単位の大きい粗雑な刃物 痕が残る。	C1	油 目 ( ス ギ )
93	田下駄	W 401 2-3区 11層	残存縦長 横全長 厚さ	19.7 29.5 2.3	半分が欠落している。2孔が残るが、前後の判断が困難であ る。2孔が約8.0cmと短いためこの2孔を後孔とした。	孔は横長の長方形に穿たれている。	C1	油 目 ( ス ギ )
94	田下駄	W 399 2-3区 11層	縦全長 横全長 厚さ	34.2 32.5 2.2	縦全長が32.4cm、横全長が32.5cmと縦長で大型であるとい う特異な形状を示す田下駄である。右側側面が直線でなく左側 は曲線で穿かれている。右の前孔がやや上位にずれていている。	表裏とも全面に手斧痕がある。この 手斧痕、被の方向前から後への方向 に加工したと観察できる。	C1	紙 目 ( ス ギ )
95	田下駄	W 400 2-3区 11層	残存縦長 横全長 厚さ	16.7 29.4 2.7	後方半分が欠落している。全体にはば長方形を呈すると想像 できる。厚さは2.7cmやや厚くなっている。	角を削り、方形ではあるが端部の加 工痕を残している。	C1	板 目 ( ス ギ )
96	田下駄	W 313 5区 SK21203 12層水田	残存縦長 横全長 厚さ	14.4 31.9 1.7	残存状態が悪く、前方一部及び後方半分が欠落している。左 側端部は直角になり、右側は直角やかな直角を描く。2孔間長が 11.2cmあるため前孔とした。	全体的に残存状態も悪いが、粗雑な 作りである。孔は不定形に横長に穿 っている。	C1	不 明 ( ス ギ )

番号	名	登録番号 出土地点 出水機 出土土質	法 量 (cm)	形 態	技 法	分 木 取 り 率	樹 種	
97	田下駄	W 200 5区 10畳 SK51001 10畳水田	横右幅長 縦全長 厚さ	8.6 38.9 1.8	前孔より後方部分が欠落している。2孔間が1.6cmあるため は正方形に穿たれたと推定する。	前方の複数に向かって中央部より順 次に薄くなるように削り込んでいた。 前方、左右側面は丁寧に調整してい る。	C1	追削目 (スギ)
98	田下駄	W 216 5区 SK51001 10畳水田	縦全長 横全長 厚さ	12.5 38.0 1.6	前方部が一部欠落している。全体的には長方形を呈す。孔は 縦に刃幅のある刀物を入れて穿っている。4孔は若干左寄 りにある。	裏面は凸凹があるがまだ調整してお らず、表面は平滑に調整している。	C1	追削目 (スギ)
99	田下駄	W 204 5区 10畳 SK51001 10畳	残存幅長 縦全長 厚さ	13.9 44.0 1.3	後孔より後方部が欠落しているが、全体的には前方部より細い 台形を呈すと推定できる。孔はほぼ平行で穿通して穿たれて いる。	後から前方部にかけて徐々に薄くな るように削り込まれている。	C1	板目 (スギ)
100	田下駄	W 211 5区 SK51001 10畳	残存幅長 横全長 厚さ	10.1 40.6 1.5	後方半分が欠落している。全体的には左右対称ではないが、 は横円形をしている。孔は小さな円形に穿たれている。	端部には斜めに角を落すと加工が施 されている。	C1	板目 (スギ)
101	田下駄	W 221 5区 SK51002 10畳	残存幅長 縦全長 厚さ	12.5 32.7 1.8	前方半分が欠落している。残存部の左側面が大きくなり ていている。全体的には丸みの長方形を呈す。穿孔は不定形 である。	端部の面高落とすように角削面とも 丁寧に調整している。	C1	板目 (スギ)
102	田下駄	W 234 5区 SK51006 10畳水田	残存幅長 縦全長 厚さ	12.7 39.3 1.2	前孔より全部が欠落している。左右両側は半円形に削り出さ れ、全体的には横円形を呈す。孔は小さな方形に穿たれて いる。	左右両側面の丸みを落とした加工や、 裏面の平滑な調整など丁寧な作り である。	C1	板目 (スギ)
103	田下駄	W 227 5区 SK51006 10畳水田	残存幅長 縦全長 厚さ	6.2 37.2 1.2	後孔より前部が欠落している。全体的には横円形になると推 測される。孔は方形に削られた丸み方圓になっている。	裏面は平滑にしており、左右側面 も調整を施している。	C1	板目 (スギ)
104	田下駄	W 228 5区 10畳	縦全長 横全長 厚さ	19.4 36.8 1.8	全体的には横円形の横円形を呈す。左右両側は斜めに大きな單 位の刃物痕が残る。孔は縦位に刀物を入れて穿っている。	裏面には後位の手斧痕が残る。表面 調整、左右側面の削除、穿孔、いづ れも刃幅の広い複数の刀物で加工し ている。	C1	板目 (スギ)
105	田下駄	W 229 5区 SK51006 10畳水田	縦全長 横全長 厚さ	12.8 35.4 1.6	2孔が穿たれており、半分が欠落している田下駄である。2 孔が孔あき孔か斜削りがないか、『孔間約9.8cmあること、 2孔より端辺まで5.6cmあることより斜削り』とある。孔は小 さな方形か。	左右両側の端辺近くは若干落と削り込 んでいる。角を落すと加工が施され ている。	C1	板目 (スギ)
106	田下駄	W 230 5区 10畳水田	縦全長 横全長 厚さ	23.2 39.8 2.3	残存状態良好の骨壙である。全体的には横長方形を呈す が削りより横円形の刀物削りによる台形である。全体的に機 械の手斧痕が残る。孔は小さな方形に穿たれている。後方よ り前方に向かう漸次薄くなっている。	残存状態が良いので蘇生可能とも思 われるが、全体的に刃物痕が裏面に観 察でき、丁寧な造作をしている。	C1	板目 (スギ)
107	田下駄	W 224 5区 10畳	縦全長 横行横長 厚さ	18.9 36.4 1.8	右側端部及び左側端部が欠落している。全体的には長方形を呈す。 孔はほぼ方形にやや小さく穿たれている。後方よ り前方に向かう漸次薄くなっている。	左側端部は裏面両側から斜めに切り落 として尖らせている。裏面をそのままに観 察でき、丁寧な造作をしている。	C1	板目 (スギ)
108	田下駄	W 232 5区 SK51006 10畳水田	縦全長 横全長 厚さ	16.2 32.7 1.8	左側端部は直線的であり、右側端部は弧を描く。孔はやや 左に寄る。孔は小さな方形を旨に穿たれている。	左右両側は斜めに刃を入れて切り落 としている。	C1	板目 (スギ)
109	田下駄	W 235 5区 SK51001 10畳水田	残存幅長 横行横長 厚さ	8.7 29.1 1.1	前孔と右側一部が欠落している。左右両側は弧を描くよう に丸く切削されている。孔は小さな方形に穿たれている。	摩滅しているが、横位の裏面とも版 型的な倒鉤痕が観察できる。	C1	板目 (スギ)
110	田下駄	W 233 5区 SK51006 10畳水田	残存幅長 縦全長 厚さ	14.5 42.3 1.6	前孔より両部が欠落している。四隅の角を丸く削り込んでお り、横円形を呈す。孔は小さな方形である。	表裏に平面を平滑に仕上げ、木口面も 角を落とし、丁寧な調整を施してい る。	C1	板目 (スギ)
111	田下駄	W 249 5区 SK51006 10畳水田	残存幅長 縦全長 厚さ	9.5 30.8 1.5	前部半分及び左側端部が欠落している。2孔間が7.0cmであ るため後孔とした。孔は不定形と思われる。	残存状態悪いが、裏面とも平滑に 調整している。	C1	板目 (スギ)
112	田 駄	W 548 5区 16畳水田	残存幅長 縦全長 厚さ	8.5 38.6 1.5	後方半分が欠落している。右側端部近しも欠落している。孔 は横長い長方形に穿たれている。	前方部に向かって薄く削り込まれて いる。孔の縫合が明らかに施されている。	C1	板目 (スギ)
113	田下駄	W1190 6区 16畳 SK61614	縦全長 横全長 厚さ	15.8 34.5 1.1	割れは入っているが、ほぼ完形の残存状態良好の田下駄であ る。縦全長が15.8cmと短く、成人男子用とは思われない。孔 は小さい方形に穿たれている。	裏面とも機械的の削り切れた手斧痕が 残る。裏面も各側面も丁寧な調整が 施されている。	C1	板目 (スギ)
114	田下駄	W2797 6区 16畳 SK61614	縦全長 横全長 厚さ	16.1 41.9 1.7	左前方の肩が欠落している。全体的には長方形を呈す。孔は 小さく横長い横円形を呈している。	裏面は右から左へ機位に刃幅4cm程 での手斧痕が複数回に及んでいる。	C1	板目 (スギ)
115	田下駄	W2456 6区 16畳	縦全長 横全長 厚さ	18.3 31.6 1.3	完形の田下駄である。全体的には丸み長方形を呈し、縦18.3cm、 横31.6cmとやや大型である。孔はやや横長の長方形である。 裏面の孔の付近は手斧用の鍔の当たった痕と考えられる痛み が孔の周囲に残っている。	裏面は中央部から左右両側に機位に 手斧痕が観察できる。裏面には顕著 な手斧痕がない。全体的にかなり丁 寧な作りである。	C1	追削目 (スギ)

番号	苗種名	登録番号 出土地点 出土遺物 出土層位	法量 (cm)	形態	技法	分類 木取り 板目	種類
116	田下駄	W1367 5区 15番水田	残存総長 幅全長 厚さ	19.3 48.0 2.3	後孔より後部が欠落しているのか、後孔は穿孔せずに側面に切り込んだだけの内部観察では不明である。孔は縦位に刃物を入れて穿たっている。	表面とも凹凸を調整していない。左右両木口も鋭く切り落としている。	C1 板目 (スギ)
117	田下駄	W 586 5区 16番水田	残存総長 幅全長 厚さ	13.5 34.7 1.3	残存状態悪く、前孔と後孔の間のみしか残存していない。左側部は欠落している。表面には謎めがあり、その縫には側面が残る。	表面とも摩滅している。中央部より左右両端部にむかいで少しつぶく削られている。	C1 板目 (スギ)
118	田下駄	W1248 5区 16番水田	残存総長 幅全長 厚さ	10.3 44.8 1.3	前方半分が欠落している。左右両側端は頭を抜く。孔は横長の横に穿たれています。	左側より右側端部にむかって薄く削られている。表面には凹凸が残る。	C1 板目 (スギ)
119	田下駄	W 905 5区 16番水田	残存総長 幅全長 厚さ	10.3 44.9 1.4	半分が欠落している。2孔間が11.6cmもあることを考えると前孔とも考えられ、2孔より後方まで長さが2cmであることを考へると後孔とも考えられる。	表面面とも平滑に調整している。孔はやや大き目の円形に穿たれている。	C1 板目 (スギ)
120	田下駄	W 73 7区 14番	残存総長 幅全長 厚さ	15.2 40.4 1.4	前孔より側面及び左の後方孔が欠落している。右後方角は直角的に削り落としている。孔は縦位に刃を入れて縦長に穿っている。	表面には不規則な手斧痕が全面に残る。	C1 板目 (スギ)
121	田下駄	W 985 7区 10番	幅全長 横存横長 厚さ	31.5 37.1 1.4	去裏面とも摩滅して凸凹が残るようだ。右側面は半円形に削り出している。全体的には円形である。孔は大きな横長の横円形に穿たれている。	左右両側の木口は粗雑な切削の仕方である。表面とも摩滅のための凹凸がある。	C1 板目 (スギ)
122	田下駄	W 908 7区 10番上面	幅全長 横存横長 厚さ	24.0 28.3 2.1	残存状態あまり良くなく、左側の一部が欠落している。孔は表面のため大きく円形になったか不鮮らが横円形を呈す。	左側前方の脇と後方の脇は斜めに直線的に刃物を入れて削り落としている。	C1 板目 (スギ)
123	田下駄	W 461 7区 10番	幅全長 横存横長 厚さ	16.7 39.1 1.2	横全長が16.7cmと短い。全体的には前方部が後方部よりも長い印象を呈している。孔は横形であるが、側位に穿たれている。	表面とも木口が残っている。側位の斜め形がレンガ状を呈する。前方部と後方部とが薄く削り込まれている。	C1 板目 (スギ)
124	田下駄	W 733 7区 10番	残存総長 幅全長 厚さ	12.9 33.3 0.8	前孔より前面、後孔より後部が欠落している。全体的に摩滅している。孔は右前孔が内側に入り込んでいる。	削離しているためか加工不明だが、全体的に8mm程度に薄くできている。	C1 板目 (スギ)
125	田下駄	W 906 7区 10番上面	幅全長 横存横長 厚さ	18.2 36.8 1.4	左側後方角が欠落している。全体は横丸長方形を呈す。後方から側面に沿って次第に薄くなるように削り込んでいく。孔は横長の横円である。	表面は平滑に調整している。裏面は削材そのまま凸凹で残る。	C1 板目 (スギ)
126	田下駄	W 907 7区 10番上面	幅全長 横存横長 厚さ	19.1 38.3 1.7	全体は横長方形に形成されている。中央部より後方部にかけて断次なくなっている。孔は固定形である。	表面は平滑に調整している。右側木口には斜めに入った大きな刃物痕がある。	C1 板目 (スギ)
127	田下駄	W 903 7区 10番	幅全長 横存横長 厚さ	22.5 40.6 1.9	右後方角が一部欠落している。全体は横丸長方形を呈する。1.5cmと孔の横長の横円形に穿たれている。裏面には後孔と後孔のそれぞれの脇に謎めがあり、裏側のためのものと想定する。	側面とも丁寧に整形し、角を落としている。孔は横形のためどうも考えられ、大きく摩滅したよう空いている。	C1 板目 (スギ)
128	田下駄	W 164 7区 10番	残存総長 幅全長 厚さ	19.5 21.9 1.0	孔が1つ、縫が一部残存しているが、後孔は斜めつかない。全体的には横丸長方形を呈す。孔は横長の横長方形に穿たれている。	表面は平滑に調整している。	C1 板目 (スギ)
129	田下駄	W1479 5区 17b番	残存総長 幅全長 厚さ	17.0 37.9 1.2	左側後方部が欠落している。左右両面は半円形に削り出し、全体的に横円形を呈している。孔の縫には摩滅しているため裏面は不明。	残存状態はよくなが、左右両側面の加工、薄く均一な出来上がりからして、全体的に精巧な作の田下駄である。	C1 板目 (スギ)
130	田下駄	W 670 5区 17b番	幅全長 横存横長 厚さ	19.0 36.8 2.3	全体は長方形を呈している。前孔開長と後孔開長、及び前孔長と後孔長の横円形がほとんど差がない。4孔の縫等に位置している。孔は大きく若干横長の横円形に穿たれている。	木表裏共に利用し、左から右に向かって刃幅3cmの手斧を一面に残す。	C1 板目 (スギ)
131	田下駄	W 647 5区 17b番	残存総長 幅全長 厚さ	18.9 32.5 1.6	全体は長方形を呈する。前孔より前駆、後孔より後駆である。後部が欠落している。孔は横長の横円形に穿たれている。	右木口は粗雑な切削面が残っている。	C1 板目 (スギ)
132	田下駄	W 631 5区 17b番	残存総長 幅全長 厚さ	8.2 34.6 1.7	後部半分が欠落している。左の脇を丸く上げており、全体的には横長形の横円形のようだ。	側面の調整が丁寧である。表面とも平滑に仕上げている。	C1 板目 (スギ)
133	田下駄	W 672 5区 17b番	残存総長 幅全長 厚さ	8.4 33.0 1.4	前面部半分残存している。左右両側とも裏面に丸く削り出している。孔は横長の横円に穿たれている。	両側面は丁寧な整形をしている。表面はフラットである。	C1 板目 (スギ)
134	田下駄	W 682 5区 17b番	幅全長 横存横長 厚さ	8.2 33.6 1.5	前孔より後部が欠落している。前方部は直線的でなく、中央部はやや曲線に出る。2孔間は13.0cmもあり、やはり前孔と考えたい。孔は縦位に穿たれている。	側面の加工は直線的でなく、波うちはするが角を落としている。	C1 板目 (スギ)
135	田下駄	W 503 5区 17b番	残存総長 幅全長 厚さ	18.3 32.3 1.9	前孔と後孔とも底部一帯も欠落している。孔はやや大きめの横長の横円に穿たれている。残存している2孔間が6.0cmと短いため後孔とした。	残存状態悪く、觀察はあまりできない。	C1 板目 (スギ)
136	田下駄	W1671 9区 38番	幅全長 横存横長 厚さ	16.1 32.0 1.6	全体は横丸長方形を呈す。4孔は左に寄っており、バランスを欠いている。孔は横長だから不定形である。	表面が摩滅のため、製作技法は把握できない。	C1 板目 (スギ)

番号	器種名	登録番号 出土位置 出土遺物 出土部位	法量 (cm)	形態	技法	分類 木取り 板目	樹種	
137	田下鉢	W1765 9区 38層	縦全長 横全長 厚さ	15.5 35.7 1.9	全体は横に長い長方形を呈す。縦全長が15.5cmと短い。前孔間が10.3cm、後孔間が6.7cmと短である。孔は右前が方窓、あと左の3つは横窓の大きさで長方形に分かれている。	表面は左後方、右側もやはり後方に横位のが斜めが残る。	C1	板目 (スギ)
138	田下鉢	W1894 9区 38層	縦全長 横全長 厚さ	20.0 34.5 1.4	全体は横長の長方形である。孔は左に寄っている。孔は横長で長方形を意識して穿たれている。	両側面は粗く、鋸刃状の刃物で上方より切断している。表面には横位ではあるが不規則な調整痕が観察できる。	C1	板目 (スギ)
139	田下鉢	W1773 9区 38層	縦全長 横全長 厚さ	22.6 37.3 2.0	全体は横長の長方形である。孔は若干横長の長方形に穿たれている。	表面は滑らか調整をしていている。裏面は削材をままに残す。	C1	板目 (スギ)
140	田下鉢	W1769 9区 38層	縦全長 横全長 厚さ	13.0 39.0 0.9	前方部半分が欠落している。左右両側が斜状に削り出されている。後孔より前孔に向て刃物痕の新痕が確認できる。孔は小さな円形に穿たれている。	運び丁寧な仕上げである。表面には横位の手斧痕が若干残存している。	C1	板目 (スギ)
141	田下鉢	W1774 9区 38層	縦全長 横全長 厚さ	11.7 29.6 1.5	前方部が一部欠落している。左側面部は孔を描くように削られている。孔は横長である。右側面部は底端方に切り落とされている。孔は横長の円形に穿たれている。	左と右の側面の加工が違う。孔は横長である。表面には横位の手斧痕が観察できる。	C1	追削目 (スギ)
142	田下鉢	W1791 9区 38層	縦全長 横全長 厚さ	16.8 40.0 1.2	左右両側が半円形を呈す。孔は横長の長方形を旨とする。	左右両側面の加工は丸くするために丁寧に削られている。表面には手斧痕が残る。	C1	追削目 (スギ)
143	田下鉢	W1793 9区 38層	縦全長 横全長 厚さ	18.1 34.9 1.5	後方部が欠落している。全体は横丸長方形を呈す。前孔は小さな方窓に穿たれている。後孔は既存状態不良で明確でない。	左右側面は上から刃物が何度も小刻みになり、切れ目をしている。表面には横位の手斧痕が全面に残る。	C1	追削目 (スギ)
144	田下鉢	W1818 9区 38層	縦全長 横全長 厚さ	10.0 39.5 1.1	後方半分が欠落している。左右両側が弧を描くように削られている。孔は小さな円形に穿たれている。	左右側面は丸みを削り出し、丁寧な調整がある。表面には不規則な手斧痕が全面に残る。	C1	板目 (スギ)
145	田下鉢	W 887 9区 38層	縦全長 横全長 厚さ	19.5 33.0 1.3	後孔より底部が欠落している。西側は丸く整形されており、全体的には横長の横丸長方形を呈す。孔は使用のため角が摩滅しているのか、形は不明である。	表面は滑らかに、側面、角隅は丸みを削り出し、丁寧な整形をしている。	C1	追削目 (スギ)
146	田下鉢	W1636 9区 37層	縦全長 横全長 厚さ	18.7 38.0 1.8	後方部が欠落している。2孔が残るが、前後の判断は難しい。前方部は下がりの歪んだ形になっている。孔はほぼ円形を呈している。	側面の加工は粗雑である。表面の整形も若干の凸凹を残すままになっている。	C1	追削目 (スギ)
147	田下鉢	W1661 9区 37層	縦全長 横全長 厚さ	35.5 40.1 1.4	139の正方形をした田下鉢とほぼ同位置に出土した。右前の孔が欠落している。全体は真円形を呈している。孔は横長の長方形に穿たれている。	全体を円形に形成するのに、鋸刃状の刃物痕をも入れて整形している。表面には横位の複数の刃物痕が観察できる。	C1	板目 (スギ)
148	田下鉢	W1663 9区 37層	縦全長 横全長 厚さ	35.4 38.5 1.6	138とセットで出土した。全体は若干横長はあるがほぼ正方形を呈している。孔は横長の長方形に穿たれている。	138と整形技法、穿孔技法とも類似したのである。両側面は底度でも刃を入れて削っている。後孔に刃幅3cmほどの調整痕が観察できる。	C1	板目 (スギ)
149	田下鉢	W1636 9区 37層	縦全長 横全長 厚さ	19.6 38.1 2.2	全体は横長の長方形を呈す。厚さは2.3cmとやや厚い。孔は横長の小さな方窓に穿たれている。	左右側面に斜面に刃物痕が残るが、底度も入っている。完全面に横位に刃幅3~5cmほどの調整痕が残る。	C1	板目 (スギ)
150	田下鉢	W1625 9区 37層	縦全長 横全長 厚さ	19.4 39.6 2.3	全体は横長の長方形である。厚手であり146の田下鉢とほぼ同形態である。孔は横長の小さな長方形に穿たれている。	技法は149とほぼ同じと考えられる。手斧痕は特に表面前方に刃の刃物痕として残る。	C1	板目 (スギ)
151	田下鉢	W1627 9区 37層	縦全長 横全長 厚さ	20.4 33.7 2.3	全体は横長長方形を呈す。中央部で横位に半折している。孔は横長の長方形を基本としている。右前孔のみ小さく方窓に穿たれ、若干左右に位置している。	技法は149と技術的には同系統のものである。表面全面に横位の刃物痕が残る。	C1	板目 (スギ)
152	田下鉢	W1647 9区 33層	縦全長 横全長 厚さ	21.5 40.8 1.6	左右両側は半円形に削り出し、全体的には横円形を呈している。孔は小さな方窓を旨として穿たれているようだ。	左右両側面には刃物痕が並び、弧状に作り出す。穂かい造形が可能である。表面には横位の刃幅3~4cmの調整痕が観察的に並んでいる。	C1	追削目 (スギ)
153	田下鉢	W 835 10区 35層	縦全長 横全長 厚さ	15.5 39.7 1.7	前孔より前方部が欠落している。左右両側は孔を描くよう削られている。孔は横長に不定形に穿たれている。	左右孔より外側に手斧痕が残る。足を踏む位置で刃を削りこめており、刃物痕も残らない。表面に左側面の刃物痕が観察的に並んでいる。	C1	板目 (スギ)
154	田下鉢	W3029 10区 34層	縦全長 横全長 厚さ	15.9 33.0 1.1	左側端が欠落している。右側端は直線に削り出されている。孔は前孔が外に出ている。孔の形は不定形である。裏面後孔の間に茎縫用の跡が観察される。	表面は滑らかに調整されている。側面の調整痕も丁寧である。	C1	追削目 (スギ)
155	田下鉢	W1155 10区 33層	縦全長 横全長 厚さ	14.4 39.6 1.6	表面、前孔付近は表面削離しており、全体的にも摩滅している。左側端が直線に削りこまれていて、孔は右前が方窓である。裏面の前孔の間、後孔の間に溝が観察できる。茎縫の跡によると歴史がある。	左右両側面は丸く仕上げるため入金に何度も刃を入れている。表面全面にも刃物痕がなされている。	C1	板目 (スギ)

番号	品種名	登録番号 出土地名 出土遺物 出土層位	法量 (cm)	形態	技法	分類 木取り 直進目	樹種
156	田下駄	W1094 10区 33層	残存縦長 横全長 厚さ	19.0 42.1 1.8	前方の一孔が欠落している。左側端は直線的に切り落とされ、後ろ二つは斜めに削離状に削離されている。左側端に3つの中孔ははく剥離で、右側端はやや外側に円形に穿たれている。	右側面は直線的に切り落とされている。左側面には横位の手斧痕があり、表面に観察できる。	C1 (スギ)
157	田下駄	W2811 10区 33層	横全長 横全長 厚さ	17.1 32.4 1.4	17.1cm×32.4cmと小形の田下駄である。左右両端は弧形に削り出されている。孔は小さな方形に穿たれている。	側面の調整は丁寧である。表面には横位の手斧痕がある。	C1 (スギ)
158	田下駄	W 838 10区 31層	横全長 横全長 厚さ	29.8 52.5 2.2	横全長が51.6cmと大型な個体に入る。左側端一筋が欠落している。左右両側を深くよう削離されている。孔は小さな方形に穿たれている。	表面・裏面・側面全面にわたって調査の刃物痕が残る。表面の手斧痕は直進に入っているが不規則な並びである。	C1 (スギ)
159	田下駄	W 694 10区 22層	横全長 横全長 厚さ	19.9 46.0 1.9	全体は楕円形を呈し、足を固定する4孔はいずれも方形に穿たれている。前孔の側で少し前方位置に横長の長方形孔がある。	全体的に丁寧な調査である。表面にはやや摩滅しながらも調査痕が残る。	C2 (スギ)
160	田下駄	W 433 2-3区 12層	横全長 横全長 厚さ	13.2 42.0 1.8	半分が欠落している。左側の孔が4.7cmほど横長で2孔間が判明しないため後頭の判別はつかない。この長い孔の附近近くにもう1孔穿たれていたと想定できる孔の半分がある。	表面には横位の規則的な手斧痕が残る。	C2 (スギ)
161	田下駄	W 423 2-3区 12層	残存縦長 横全長 厚さ	8.0 42.4 0.9	3分の2近くが欠落している。前方、後方とも欠落しているため形態がわからぬ。横長の孔は横長の8cm弱ある。	表面とも摩滅が甚だしい。	C2 (スギ)
162	田下駄	W 388 2-3区 12層(水田)	残存縦長 残存縦長 厚さ	25.5 37.4 2.1	闊丸で横長の長方形を呈す。左上孔の前側面に横長の長方形の孔が穿たれている。4孔は小さな方形に穿たれている。	表面には横位の刃物痕が残る。側面の調査は丁寧である。	C2 (スギ)
163	田下駄	W 209 5区 SK51001 10層	残存縦長 横全長 厚さ	11.8 41.8 1.3	前方部半分が欠落している。両面端は直線に削り出されている。右側端寄りに方形の孔が穿たれていたと想定できる。後孔2孔が残るが不定形である。	表面は平坦に整形されている。側面は側面のまま凸凹を残す。	C2 (スギ)
164	田下駄	W1419 6区 16層(水田)	横全長 横全長 厚さ	15.9 40.8 1.3	全体は長方形を呈す。横全長は15.9cmと短い。孔は使用のためか不明だが、2孔以上大きく不定形に穿たれている。右後孔の右に横8cmもある長方形孔が穿たれている。	表面とも凸凹を残す。木口の調査等は粗略である。	C2 (スギ)
165	田下駄	W1964 9区 30層	横全長 横全長 厚さ	19.2 35.4 1.1	両側端は直線に削離している。中央部は薄く、前後、後端が削り落とされている。孔は小さな方形で左上端部に横長長方形の孔が穿たれている。	表面とも横位の手斧痕が一面に粗略である。左右側端は斜めに刃物を入れ切削している。	C2 (スギ)
166	田下駄	W1666 9区 39層	横全長 横全長 厚さ	24.2 40.7 1.8	165の田下駄と形態的に類似する。4孔はやや横長の長方形であり、左上の孔は前方端部に近く横長長方形に穿たれている。	表面とも横位の手斧痕が一面に粗略である。左右側端は粗略に切り落としている。	C2 (スギ)
167	田下駄	W2132 9区 38層	残存縦長 横全長 厚さ	9.3 33.3 1.3	前方半分が欠落している。全体は椭円形を呈すと想定できる。孔は横長に穿たれている。右後孔右下に横長の穿孔がある。	側面は丸く削り出されている。表面とも凸凹のまま残す。	C2 (スギ)
168	田下駄	W1765 9区 35層	残存縦長 横全長 厚さ	7.9 34.4 1.1	後方半分が欠落している。全体は闊丸長方形を呈すと想定する。前孔は使用のためか不定形である。左前に横長長方形の孔が穿たれている。	残存状態が悪いのか、表面とも凸凹のまま残す。前方に向かって削り落とされている。	C2 (スギ)
169	田下駄	W1097 10区 33層	横全長 横全長 厚さ	16.0 42.4 1.1	後方半分及び側端付近が欠落している。左側端は横状に削離されている。前孔は1つだけ視認不能である。2孔間寄りに円形の小孔が穿たれている。	表面は平滑に調査している。前孔付近にはつは貫通しているが、他は貫通していない孔がいくつかある。	C2 (スギ)
170	田下駄	W 394 2-3区 11層	横全長 横全長 厚さ	20.5 37.4 2.1	全体は横丸長方形を呈す。孔は横長の長方形を皆に穿たれている。孔は1つだけ見付かれた後、その2cm前にまた2つ並んで穿たれたようだ。	表面とも横位の刃物痕が残る。特に前後端部は丁寧な仕上げをしている。	C3 (スギ)
171	田下駄	W 207 5区 10層	横全長 横全長 厚さ	24.1 36.4 1.5	全体は横丸長方形である。足固定用の4孔は小さく方形に穿たれている。前孔間に1つ、右後孔間に1つ、後横長方形の孔が穿たれている。	表面は横に削離されている。左右側端は斜めに刃を入れ、粗く削り落とされている。	C3 (スギ)
172	田下駄	W 20 7区 10層	残存縦長 横全長 厚さ	15.7 33.6 2.2	後方右側端が欠落している。左側端は弧形に削り出されている。孔は最ももしているが、横長に大きく横円形に穿たれていた。左前孔のやや下に同じ形の穿孔がある。	表面ともに調整している。右側側面は丁寧に調整されている。	C3 (スギ)
173	田下駄	W1624 7区 27層	横全長 横全長 厚さ	18.3 40.3 1.8	全体は横長の長方形を呈す。足固定用の4孔は小さく方形に穿たれている。右側端附近へ、前と後に孔が穿たれている。	表面には横位の刃物痕が残る。表面には刃物痕も殆どなく、凸凹を残したものである。	C3 (スギ)
174	田下駄	W2003 9区 40層	横全長 横全長 厚さ	22.2 36.8 1.1	左側端は弧形に作られ、右側端はコの字形に削り落としている。孔は最ももしているが、横長に大きく横円形に穿たれたのが上下に2つずつ穿たれている。足固定用の4孔は小さく方形である。	全体的に調整也非常に丁寧に仕上げている。表面とも調査痕が一面に観察できる。	C3 (スギ)

番号	器種名	遺物番号 出土地点 出土環境 出土位置	法量 (cm)	形態	技法	分類 木取 頭	標 理	
175	田下駁	W 783 105 31層	縦全長 横全長 厚さ	13.8 29.5 1.8	縦13.8cm、横29.5cmと小型で横長長方形の田下駁である。足部前面の4孔は不定形である。左右両側端に横長の長方形の穿孔がある。	表面とも平滑に調整している。	C3	板目 (スギ)
176	田下駁	W 532 85 17a層	縦全長 横全長 厚さ	35.9 10.6 1.3	縦長の板材の左右側端部を上下2ヶ所三角形に切り込みを入れている。横長に覆く田下駁と考えた。	本表面を表面にしていると思われ、表面は意識的に平滑にしている。	D	板目 (スギ)
177	田下駁	W 805 105 31層	縦全長 横全長 厚さ	30.7 14.7 2.2	縦長の横丸長方形の板材を上下2ヶ所切り込みを入れている。この切り込み部に縄をかけ足を固定したと考えられる。	表面には縄位の手斧痕が残る。側面は丁寧に調整している。	D	追積目 (スギ)
178	田下駁	W2729 65 16層水田	縦全長 横全長 厚さ	36.1 14.6 2.0	縦長の板目板状材に2つずつ三段に円形の小孔が穿たれてい。バランスト刺には縄より2段目以降、3段目の計4孔を固定に用いたと考えられる。	前方の質を削っている。木面を利用し、表面を整形している。	D	板目 (スギ)
179	田下駁	W 149 85 8層水田	残存縦長 残存横長 厚さ	6.0 27.5 2.3	実測図下方が欠落している。上端部を弧状に削り出している。上方部の孔が2つ残存している。	表面とも手斧痕が残る。側面は丁寧に整形している。	板目 (スギ)	板目 (スギ)
180	田下駁	W 428 85 17層	残存縦長 残存横長 厚さ	6.3 23.4 1.2	実測図上方部と下方部が欠落している。残存部上辺には2つの孔があったと想定する。	残存状態悪い。孔は横長の長方形か複数形と想定できる。	板目 (スギ)	板目 (スギ)
181	田下駁	W1711 1区 22層	残存縦長 残存横長 厚さ	15.2 29.7 0.8	全体的に残存状態悪い。板目板状材に円形の孔が2ヶ所以上穿たれている。	表面とも摩滅しており観察不可。	板目 (スギ)	板目 (スギ)
182	田下駁	W 886 95 38層	残存縦長 残存横長 厚さ	15.0 27.4 1.7	上方部が欠落している。田下駁とすれば方形に近い形になる。孔は不定形に2つに穿たれている。	表面とも平滑に調整されている。	追積目 (スギ)	追積目 (スギ)
183	田下駁	W1796 95 38層	残存縦長 残存横長 厚さ	8.7 42.5 1.6	実測図上部、右側部が欠落している。下端近くに横長長方形の孔が穿たれ、左下にこの字状に削り込みがある。	表面とも平滑に調整されている。	板目 (スギ)	板目 (スギ)
184	田下駁	W 47 65 14層	残存縦長 残存横長 厚さ	14.8 30.3 2.3	実測図上部、下部とも欠落していると思われるが判別つかない。2孔穿たれているが規則性がない。	表面には刀斧痕が残り、調整されている。	板目 (スギ)	板目 (スギ)

第67表 田下駁計測表

No.	登録番号	区	標位	年代観	分類	機長度(cm)	縦-全長(cm)	足台厚(cm)	厚( cm)	前孔間( cm)	前孔底( cm)	後孔間( cm)	後孔底( cm)	木取り	孔形	重量(g)	面積(cm <sup>2</sup> )	備考	
1	W1547	2-3	16	海中	A-1	26.1	39.1	3.1	0.8	10.0	12.5	0.0	6.9	3.7	板目	円形	1350	702.7	
2	W1548	2-3	16	海中	A-1	23.7	28.1	3.2	1.2	8.8	12.1	8.0	8.8	2.9	板目	円形	1370	596.9	
3	W1547	2-3	14	劣後-古前	A-1	20.5	23.2	3.5	1.8	9.8	4.6	-	-	-	過極(木裏)	円形	1068	(残存482.7)	
4	W1414	2-3	14	劣後-古前	A-1	23.8	23.6	2.3	2.1	9.9	8.8	8.1	3.9	10.8	板目(木裏)	円形	1200	547.6	
5	W1426	2-3	14	劣後-古前	A-1	28.0	(13.4)	2.6	1.9	11.9	6.0	-	-	-	板目	楕丸	552	(残存341.8)	
6	W1145	2-3	14	劣後-古前	B-1	37.0	37.0	3.2	1.6	9.4	13.0	8.2	4.7	9.3	板目	円形	2200	906.9	
7	W1428	2-3	14	劣後-古前	B-1	(31.8)	(10.1)	2.0	1.1	-	-	12.7	6.9	-	板目(木裏)	円形	492	(残存389.8)	
8	W1493	2-3	14	劣後-古前	B-1	35.9	(15.0)	2.6	1.9	13.7	8.8	-	-	-	板目(木裏)	円形	1074	(残存48.0)	
9	W1475	2-3	14	劣後-古前	B-1	37.7	(14.1)	3.4	1.4	13.2	5.0	-	-	-	板目(木裏)	円形	915	(残存459.0)	
10	W1478	2-3	14	劣後-古前	B-1	(38.4)	(9.6)	2.7	1.1	-	-	-	-	-	板目(木裏)	円形	492	(残存331.0)	
11	W729	1	22	劣後-古前	B-2	36.6	19.1	2.6	2.0	9.8	6.3	6.5	4.1	8.1	板目	円形	1170	693.6	
12	W1496	2-3	14	劣後-古前	B-2	27.9	(13.0)	1.8	1.3	11.5	6.2	-	-	-	板目(木裏)	楕丸	640	(残存356.6)	
13	W1474	2-3	14	劣後-古前	B-2	31.4	15.3	2.9	1.8	20.7	-	10.3	5.6	6.9	板目	円形	948	471.6	
14	W1473	2-3	14	劣後-古前	B-2	31.6	15.4	2.0	1.8	18.8	3.4	8.8	8.8	3.1	板目	円形	838	475.0	
15	W295	2-3	12	劣後-古前	B-2	50.4	(20.0)	3.6	2.5	-	-	13.4	5.8	-	板目(木裏)	円形	2464	(残存411.8)	
16	W408	2-3	12	劣後-古前	B-2	36.6	28.0	2.8	1.9	11.3	9.3	8.6	7.2	11.4	板目	方形	2212	969.5	
17	W721	2-3	12	劣後-古前	B-2	45.0	35.9	3.7	2.2	11.5	9.6	9.5	5.4	11.4	板目(木裏)	方形	2594	1934.0	
18	W412	2-3	12	劣後-古前	B-2	38.7	26.4	2.4	1.6	11.2	9.4	7.9	5.4	11.4	板目	方形	1846	950.8	
19	W428	2-3	12	劣後-古前	B-3	34.6	26.0	3.7	2.5	11.4	8.4	9.8	6.1	11.7	過極	楕丸	2534	855.4	
20	W2950	6	16	劣後-古前	B-3	38.3	24.1	3.4	2.3	10.8	7.7	8.8	3.0	12.7	過極(木裏)	方形	1776	875.6	
21	W2951	6	16	劣後-古前	B-3	41.6	37.2	2.3	1.9	12.0	9.5	9.2	3.4	14.5	板目(木裏)	方形	2218	1104.2	
22	W1155	6	16	劣後-古前	B-3	31.9	18.2	2.6	1.9	10.8	4.7	8.7	4.3	9.3	過極(木裏)	円形	1107	558.8	
23	W2451	6	16	劣後-古前	B-3	39.3	(12.4)	1.8	1.4	11.3	2.5	-	-	-	過極(木裏)	方形	646	(残存472.0)	
24	W589	6	16	劣後-古前	B-3	(31.9)	(11.0)	1.1	0.8	-	-	7.6	3.3	-	板目	円形	263	(残存416.8)	
25	W597	6	16	劣後-古前	B-3	45.2	(16.2)	1.3	1.1	10.3	5.5	-	-	-	板目(木裏)	円形	548	(残存532.4)	
26	W564	7	10	劣後-古前	B-3	(27.0)	(18.0)	1.9	1.6	8.4	5.6	-	-	-	板目(木裏)	方形	585	(残存14.0)	
27	W673	8	17b	劣後-古前	B-3	31.2	(13.2)	2.5	2.1	9.8	7.0	-	-	-	板目(木裏)	方形	663	(残存332.6)	
28	W504	8	17	劣後-古前	B-3	38.1	19.9	2.3	1.3	10.5	9.3	-	-	-	板目(木裏)	円形	694	(865.8)	
29	W2864	9	38	劣後-古前	B-3	38.3	28.9	2.9	2.0	12.8	9.5	8.5	7.8	11.4	板目(木裏)	方形	2507	1026.7	
30	W804	19	31	劣後-古前	B-3	33.0	23.4	2.8	2.3	10.5	7.6	8.7	6.5	9.1	板目(木裏)	方形	1677	541.8	
31	W775	19	31	劣後-古前	B-3	28.5	16.8	2.0	1.1	10.8	5.3	-	-	-	板目	方形	638	(465.6)	
32	W337	9	25	半壳	B-3	41.6	24.8	3.1	1.6	10.8	9.5	6.2	2.5	12.6	過極	楕丸	1654	(919.6)	
33	W1538	1	22	劣後-古前	B-3	(28.2)	20.1	2.5	1.3	10.9	5.5	7.8	2.9	11.5	過極(木裏)	楕丸	681	(残存420.9)	
34	W727	1	22	劣後-古前	B-3	49.5	21.6	2.1	1.6	11.0	3.3	10.0	3.3	15.0	過極(木裏)	方形	1866	1032.9	
35	W1541	2-3	16	海中	B-3	31.6	17.2	2.3	1.0	11.7	3.3	10.7	3.0	10.8	板目	方形	844	(508.6)	
36	W1425	2-3	14	劣後-古前	B-3	39.0	16.2	3.0	2.0	10.3	1.8	9.7	2.6	11.5	板目(木裏)	円形	1073	603.7	
37	W471	2-3	14	劣後-古前	B-3	31.8	16.1	1.9	1.4	11.4	2.2	11.7	1.9	11.3	板目(木裏)	円形	580	483.4	
38	W681	2-3	12	劣後-古前	B-3	33.4	26.0	2.5	1.6	13.6	7.9	11.8	6.4	12.6	板目(木裏)	楕丸	1752	841.0	W1009接合
39	W453	2-3	12	劣後-古前	B-3	42.4	16.2	1.9	1.5	9.7	3.0	7.6	3.2	10.0	板目(木裏)	方形	1003	641.7	
40	W809	2-3	12	劣後-古前	B-3	47.9	20.9	2.8	1.5	-	-	9.5	2.6	-	板目(木裏)	円形	1510	(1007.0)	
41	W453	2-3	12	劣後-古前	B-3	29.5	(16.4)	4.4	1.2	10.1	5.5	-	-	-	過極(木裏)	方形	995	(残存447.0)	
42	W354	5	13	劣後-古前	B-3	38.9	27.7	2.1	1.4	12.7	7.2	10.9	6.9	13.6	板目(木裏)	楕丸	1935	1042.0	
43	W2112	5	10	劣後-古前	B-3	45.2	(11.8)	2.2	1.5	-	-	-	-	-	板目(木裏)	円形	709	(残存435.3)	
44	W567	6	16	劣後-古前	B-3	34.9	(12.3)	1.4	0.9	8.9	5.3	-	-	-	過極(木裏)	円形	409	(残存443.2)	
45	W1	7	10	劣後-古前	B-3	45.0	19.3	2.7	1.1	12.2	2.3	9.2	2.7	14.2	板目(木裏)	円形	1092	831.2	
46	W451	7	10	劣後-古前	B-3	(30.2)	19.9	1.1	0.5	-	-	-	-	-	板目(木裏)	円形	366	(残存489.4)	
47	W912	7	10	劣後-古前	B-3	37.2	25.1	-	2.2	14.7	8.4	13.6	5.9	10.5	板目	楕丸	1583	877.8	
48	W639	8	17a	劣後-古前	B-3	33.8	(16.6)	2.6	1.8	10.4	6.0	-	-	-	板目(木裏)	楕丸	860	(残存533.4)	

No	番号	区	層位	年代類	分類	横全長 (cm)	足台 厚 (cm)	厚 (cm)	前孔 深 (cm)	前孔 幅 (cm)	後孔 深 (cm)	後孔 幅 (cm)	前後 孔間 (cm)	木取り	孔形	重量 (g)	面積 (cm <sup>2</sup> )	備考		
49	W146	10	33	弥後-古前	B-3	36.9	17.7	3.1	1.6	10.9	4.8	8.4	2.5	15.0	遺鉢(木製)	方形	1026	604.9		
50	W189	1	22	弥後-古前	C-1	33.8	20.7	-	1.8	-	-	6.2	3.1	-	板目(木製)	圓丸	601	(648.6)		
51	W638	1	22	弥後-古前	C-1	28.6	(18.4)	-	1.8	10.4	7.4	-	-	-	板目	方形	856	(残存497.6)		
52	W693	1	22	弥後-古前	C-1	37.6	15.4	-	2.0	9.8	3.4	8.9	3.0	8.7	遺鉢(木製)	方形	932	569.5		
53	W740	1	22	弥後-古前	C-1	(21.9)	(12.5)	-	1.6	-	-	-	-	-	板目(木製)	方形	373	(残存259.2)		
54	W874	1	22	弥後-古前	C-1	45.3	(15.5)	-	1.9	-	-	8.5	5.5	-	板目	方形	1020	(残存644.4)		
55	W1743	1	22	弥後-古前	C-1	49.5	22.6	-	1.9	9.3	8.8	8.8	4.4	9.2	板目	方形	2082	1113.7		
56	W1722	1	22	弥後-古前	C-1	41.3	25.1	-	1.7	10.3	12.2	8.1	4.2	9.3	遺鉢(木製)	方形	1526	995.0		
57	W1837	1	23	弥後-古前	C-1	32.8	(14.0)	-	1.2	-	-	6.2	2.4	-	板目(木製)	方形	578	(残存411.3)		
58	W8255	1	22	弥後-古前	C-1	37.7	(18.0)	-	2.0	11.4	6.9	-	-	-	遺鉢	圓丸	842	479.2		
59	W2931	1	22	弥後-古前	C-1	36.8	17.5	-	1.8	8.2	7.1	6.6	2.5	8.1	板目(木製)	方形	1095	597.8		
60	W764	1	22	弥後-古前	C-1	41.6	(5.7)	-	2.0	24.6	8.0	-	-	-	板目	方形	759	(残存386.2)		
61	W1595	2	30	集中	C-1	24.4	(13.3)	-	1.8	10.5	3.9	-	-	-	板目(木製)	方形	484	(残存319.2)		
62	W1569	2	3	16	集中	C-1	25.3	22.6	-	3.3	8.8	6.0	9.0	5.7	10.2	板目(木製)	方形	1896	972.7	
63	W402	2	3	12	弥後-古前	C-1	36.1	16.9	-	1.4	11.4	3.1	7.3	3.0	10.8	板目(木製)	方形	730	(614.8)	
64	W582	2	3	12	弥後-古前	C-1	40.3	13.3	-	2.4	10.3	2.7	7.3	1.3	8.7	板目(木製)	圓丸	945	595.2	
65	W411	2	3	12	弥後-古前	C-1	40.4	(14.9)	-	1.0	-	-	8.6	4.6	-	板目	円形	393	(残存554.8)	
66	W434	2	3	12	弥後-古前	C-1	29.4	(13.4)	-	1.8	11.5	4.8	-	-	板目	円形	527	(残存353.2)		
67	W424	2	3	12	弥後-古前	C-1	45.8	(14.2)	-	1.4	-	-	7.5	2.2	-	板目	圓丸	720	(残存591.4)	
68	W419	2	3	12	弥後-古前	C-1	(26.8)	16.7	-	0.8	11.4	4.5	8.8	2.8	9.0	板目	方形	340	(422.4)	
69	W448	2	3	12	弥後-古前	C-1	37.3	16.8	-	1.9	8.8	4.4	6.6	2.1	10.2	板目(木製)	方形	1016	590.6	
70	W451	2	3	12	弥後-古前	C-1	37.1	12.0	-	1.0	8.3	2.9	-	-	板目	円形	271	(残存399.8)		
71	W564	2	3	12	弥後-古前	C-1	34.5	19.7	-	1.9	9.3	5.3	6.9	3.1	11.2	板目(木製)	円形	1155	654.2	
72	W436	2	3	12	弥後-古前	C-1	41.6	34.9	-	1.9	8.8	4.4	6.5	2.1	10.2	遺鉢(木製)	方形	2200	971.5	
73	W436	2	3	12	弥後-古前	C-1	48.9	19.2	-	2.1	10.8	6.3	10.0	4.5	9.6	板目(木製)	方形	1660	855.7	
74	W416	2	3	12	弥後-古前	C-1	36.0	(6.4)	-	0.8	8.8	4.3	-	-	板目	円形	189	(残存211.5)		
75	W427	2	3	12	弥後-古前	C-1	36.4	(12.6)	-	0.9	-	-	6.7	3.6	-	遺鉢(木製)	圓丸	399	(残存482.2)	
76	W406	2	3	12	弥後-古前	C-1	34.8	28.8	-	1.8	11.0	9.9	8.4	6.7	15.3	板目(木製)	圓丸	1620	987.1	
77	W154	2	3	12	弥後	C-1	40.2	22.3	-	2.1	10.7	7.6	-	-	板目(木製)	圓丸	1715	899.4		
78	W720	2	3	12	弥後-古前	C-1	37.8	21.3	-	2.7	10.6	7.8	8.9	3.3	10.2	板目(木製)	圓丸	1688	800.6	
79	W633	2	3	12	弥後-古前	C-1	35.6	21.8	-	1.8	11.6	5.9	7.9	3.3	12.5	板目(木製)	方形	1105	754.4	
80	W625	2	3	12	弥後-古前	C-1	36.4	17.0	-	1.7	8.2	6.2	6.1	2.2	8.0	板目(木製)	方形	850	566.1	
81	W572	2	3	12	弥後-古前	C-1	40.2	(7.0)	-	1.2	8.0	3.6	-	-	板目(木製)	円形	237	(残存342.2)		
82	W571	2	3	12	弥後-古前	C-1	40.8	(8.9)	-	1.1	-	-	-	-	板目	圓丸	331	(残存308.8)		
83	W665	2	3	12	弥後-古前	C-1	34.8	(10.3)	-	1.9	9.3	2.3	-	-	板目(木製)	圓丸	334	(残存321.7)		
84	W428	2	3	12	弥後-古前	C-1	36.4	(14.1)	-	0.9	-	-	5.9	3.8	-	板目	圓丸	392	(516.2)	
85	W421	2	3	12	弥後-古前	C-1	33.2	(18.8)	-	2.0	-	-	8.5	3.0	-	板目(木製)	方形	871	(残存506.6)	
86	W418	2	3	12	弥後-古前	C-1	39.8	18.5	-	1.4	9.3	7.1	7.6	1.7	9.3	板目(木製)	圓丸	977	763.4	
87	W417	2	3	12	弥後-古前	C-1	33.3	22.1	-	2.1	7.6	8.0	7.0	4.1	9.9	板目(木製)	圓丸	1458	711.4	
88	W415	2	3	12	弥後-古前	C-1	36.2	(7.9)	-	0.7	10.9	3.9	-	-	板目(木製)	圓丸	179	(残存158.0)		
89	W407	2	3	12	弥後-古前	C-1	33.1	(18.2)	-	1.8	-	-	8.5	5.3	-	板目(木製)	方形	990	(残存599.0)	
90	W413	2	3	12	弥後-古前	C-1	43.8	27.8	-	1.2	11.1	11.2	5.6	4.9	12.2	板目(木製)	圓丸	1420	1128.5	W414接合
91	W240	2	3	12	弥後-古前	C-1	29.6	(12.5)	-	1.5	-	-	8.7	4.3	-	板目	円形	462	(残存337.5)	
92	W430	2	3	12	弥後-古前	C-1	43.5	17.1	-	1.8	8.0	6.3	6.5	1.4	8.9	遺鉢(木製)	円形	1115	715.4	
93	W401	2	3	11	古墳	C-1	29.3	(13.7)	-	2.3	-	-	8.4	8.0	-	遺鉢(木製)	方形	922	(残存391.4)	
94	W393	2	3	11	古墳	C-1	32.5	34.2	-	2.2	12.5	12.8	8.1	5.7	15.3	板目	圓丸	1885	1045.8	
95	W400	2	3	11	古墳	C-1	29.4	(16.7)	-	2.7	11.1	10.8	-	-	-	板目(木製)	圓丸	1260	(残存480.0)	
96	W313	5	12	弥後-古前	C-1	31.9	(14.4)	-	1.7	11.2	-	-	-	-	-	不明	方形	630	(残存393.4)	

№	標本 番号	区	層位	年代概 分類	横全長 (cm)	縱全長 (cm)	尾厚 (mm)	厚 (mm)	前孔 (mm)	後孔 (mm)	後孔 (mm)	前後 孔間 (mm)	木取り	孔形	重量 (g)	面積 (cm²)	備考	
97	W300	5	10	新猿-古鯛	C-I	38.9	(8.6)	-	1.8	11.6	7.5	-	-	追板(木表)	方形	470	(残存307.0)	
98	W215	5	10	新猿-古鯛	C-I	28.0	12.5	-	1.6	6.8	2.9	6.6	2.8	5.8	追板(木表)	隅丸	381	346.2
99	W304	5	10	新猿-古鯛	C-I	44.0	(13.9)	-	1.3	9.7	2.8	-	-	-	板目	隅丸	797	(残存610.0)
100	W311	5	10	新猿-古鯛	C-I	(46.6)	(10.1)	-	1.5	10.0	9.3	-	-	-	板目(木表)	円形	563	(残存373.0)
101	W221	5	10	新猿-古鯛	C-I	32.7	(12.5)	-	1.8	9.3	5.8	-	-	-	板目(木表)	方形	570	(残存401.8)
102	W234	5	10	新猿-古鯛	C-I	39.8	(12.7)	-	1.2	-	-	8.0	2.5	-	板目	方形	582	(残存457.1)
103	W227	5	10	新猿-古鯛	C-I	37.2	(8.3)	-	1.2	-	-	-	-	-	板目	-	197	(残存389.2)
104	W228	5	10	新猿-古鯛	C-I	36.8	19.4	-	1.8	8.6	5.4	8.4	4.7	9.4	板目(木裏)	-	1112	855.4
105	W229	5	10	新猿-古鯛	C-I	(35.4)	(12.4)	-	1.6	-	-	9.8	6.6	-	板目(木表)	隅丸	549	(残存428.6)
106	W230	5	10	新猿-古鯛	C-I	39.8	23.2	-	2.0	10.2	8.0	7.0	6.1	10.0	板目(木表)	方形	1749	888.0
107	W224	5	10	新猿-古鯛	C-I	(36.4)	18.9	-	1.8	11.0	4.5	9.1	4.3	10.1	板目(木表)	方形	934	(残存643.6)
108	W232	5	10	新猿-古鯛	C-I	32.7	16.2	-	1.6	9.8	4.1	8.0	2.8	9.4	板目	円形	860	522.2
109	W215	5	10	新猿-古鯛	C-I	(29.1)	(8.7)	-	1.1	-	-	4.4	1.7	-	板目	方形	228	(残存321.2)
110	W233	5	10	新猿-古鯛	C-I	42.3	(14.6)	-	1.0	-	-	6.9	2.6	-	板目	方形	1008	(残存577.8)
111	W249	5	10	新猿-古鯛	C-I	30.8	(9.9)	-	1.5	-	-	7.0	5.4	-	板目(木表)	隅丸	314	(残存247.2)
112	W548	6	15	新猿-古鯛	C-I	38.6	(8.5)	-	1.5	9.9	6.0	-	-	-	板目(木裏)	円形	368	(残存399.8)
113	W1190	6	15	新猿-古鯛	C-I	34.5	15.8	-	1.1	6.9	5.8	4.8	1.7	8.8	板目(木裏)	方形	495	589.3
114	W279	6	15	新猿-古鯛	C-I	41.8	16.1	-	1.7	9.3	4.1	7.4	2.7	9.5	板目(木表)	隅丸	951	(658.6)
115	W2456	6	15	新猿-古鯛	C-I	31.6	18.3	-	1.3	9.9	5.5	8.2	2.5	10.0	追板(木裏)	方形	585	548.0
116	W1307	6	15	新猿-古鯛	C-I	40.0	19.3	-	2.3	10.4	3.8	-	-	-	板目	椭円	1447	740.2
117	W586	6	15	新猿-古鯛	C-I	34.7	(13.5)	-	1.3	-	-	8.5	3.7	-	板目	円形	334	(残存536.4)
118	W1245	6	15	新猿-古鯛	C-I	44.8	(10.2)	-	1.3	-	-	7.3	3.5	-	板目(木表)	円形	420	(残存408.6)
119	W905	6	15	新猿-古鯛	C-I	44.9	(10.3)	-	1.4	11.6	-	-	-	-	板目(木表)	円形	499	(残存420.8)
120	W73	6	14	古猿	C-I	40.4	(16.2)	-	1.4	-	-	-	-	-	板目	隅丸	767	(残存503.6)
121	W583	7	10	新猿-古鯛	C-I	37.1	31.5	-	1.4	11.2	12.7	7.8	6.8	12.1	追板(木裏)	隅丸	1298	1017.7
122	W508	7	10	新猿-古鯛	C-I	(28.3)	24.0	-	2.1	9.5	8.1	-	-	-	板目(木表)	円形	772	(残存611.6)
123	W681	7	10	新猿-古鯛	C-I	39.1	16.7	-	1.2	10.6	3.3	8.3	1.6	11.4	板目(木裏)	隅丸	616	628.8
124	W733	7	10	新猿-古鯛	C-I	(33.3)	(13.2)	-	0.8	-	-	-	-	-	板目	方形	310	(残存413.3)
125	W906	7	10	新猿-古鯛	C-I	36.8	18.2	-	1.4	8.5	8.3	8.6	2.0	7.5	追板(木表)	円形	612	(471.0)
126	W907	7	10	新猿-古鯛	C-I	38.3	19.1	-	1.7	8.5	8.0	6.1	2.6	8.3	追板(木裏)	隅丸	1163	713.1
127	W903	7	10	新猿-古鯛	C-I	40.0	23.5	-	1.9	9.8	6.1	8.9	6.1	10.7	板目(木表)	円形	1877	(315.0)
128	W164	7	10	新猿-古鯛	C-I	(21.9)	(19.5)	-	1.0	-	-	-	-	-	追板(木表)	方形	304	(残存382.3)
129	W1479	8	17b	新猿-古鯛	C-I	(27.9)	17.0	-	1.2	-	-	-	-	-	板目(木表)	隅丸	430	(残存475.2)
130	W870	8	17b	新猿-古鯛	C-I	36.8	19.0	-	2.3	12.0	4.3	11.5	3.3	11.1	板目(木表)	円形	1147	693.8
131	W647	8	17b	新猿-古鯛	C-I	(32.5)	(18.0)	-	1.6	-	-	-	-	-	板目	隅丸	877	(残存410.8)
132	W631	8	17b	新猿-古鯛	C-I	34.6	(8.2)	-	1.7	10.4	4.4	-	-	-	追板(木表)	円形	381	(残存66.9)
133	W872	8	17b	新猿-古鯛	C-I	33.0	(8.4)	-	1.4	8.5	4.8	-	-	-	追板(木表)	隅丸	290	(残存262.1)
134	W822	8	17b	新猿-古鯛	C-I	33.6	(8.2)	-	1.5	-	-	-	-	-	追板(木表)	隅丸	251	(残存224.7)
135	W503	8	17a	新猿-古鯛	C-I	(27.3)	(10.3)	-	1.0	-	-	-	-	-	板目(木表)	円形	181	(残存227.2)
136	W1171	9	38	新猿-古鯛	C-I	32.0	16.1	-	1.6	9.2	3.8	8.4	2.7	19.8	板目(木表)	隅丸	957	504.4
137	W1765	9	38	新猿-古鯛	C-I	35.7	15.5	-	1.9	10.3	2.7	5.7	4.3	8.1	板目(木表)	方形	939	536.2
138	W1894	9	38	新猿-古鯛	C-I	34.5	20.0	-	1.4	9.6	5.1	7.6	2.9	11.8	板目(木表)	隅丸	1038	677.1
139	W1773	9	38	新猿-古鯛	C-I	37.3	22.6	-	2.0	9.6	6.8	8.0	4.8	11.0	板目(木表)	方形	1451	842.4
140	W1769	9	38	新猿-古鯛	C-I	39.0	(13.0)	-	0.9	-	-	6.7	2.5	-	板目(木表)	円形	490	(残存401.4)
141	W1774	9	38	新猿-古鯛	C-I	29.8	(11.7)	-	1.6	-	-	6.3	1.7	-	板目	隅丸	568	(残存329.8)
142	W1811	9	38	新猿-古鯛	C-I	40.0	16.8	-	1.2	10.2	4.6	7.5	1.3	10.8	追板(木表)	方形	819	633.2
143	W1793	9	38	新猿-古鯛	C-I	34.9	(18.1)	-	1.5	9.8	7.6	-	-	-	板目	方形	668	(残存414.4)
144	W1816	9	38	新猿-古鯛	C-I	39.5	(10.0)	-	1.1	9.0	7.6	-	-	-	板目	円形	400	(残存367.0)

地 名	登録 番号	区	層位	年代範 囲	分類	横全長 (cm)	縦全長 (cm)	足台 厚 (cm)	厚 (cm)	前孔 幅 (cm)	前孔 底 (cm)	後孔 幅 (cm)	後孔 底 (cm)	前後 孔間 (cm)	木取り	孔形	重量 (g)	面 積 (cm <sup>2</sup> )	備 考	
145 W887	9 38	弥後-古前	C-1	33.0 (15.5)	-	1.3	11.8	8.0	-	-	-	10.2	6.4	-	-	経目	圓丸	840	(残存629.2)	
146 W1635	9 37	弥後-古前	C-1	36.0 (18.7)	-	1.8	10.2	6.4	-	-	-	-	-	-	-	通經(木表)	方形	1129	(残存631.2)	
147 W1661	9 37	弥後-古前	C-1	40.1	35.5	-	1.4	11.6	13.5	12.1	10.0	11.5	11.8	-	-	方形	1696	1169.6		
148 W1663	9 37	弥後-古前	C-1	36.5	35.4	-	1.6	10.4	11.3	10.3	11.9	11.8	11.8	-	-	方形	1971	1329.6		
149 W1695	9 37	弥後-古前	C-1	38.1	19.9	-	2.2	11.0	7.1	7.8	9.2	10.5	10.5	-	-	板目(木表)	方形	1763	737.0	
150 W1625	9 37	弥後-古前	C-1	39.6	19.4	-	2.3	10.8	5.5	7.6	2.1	11.7	板目(木表)	-	方形	1707	760.8			
151 W1627	9 37	弥後-古前	C-1	23.7	20.4	-	2.3	11.4	6.5	7.6	2.1	11.7	板目(木表)	-	方形	1429	680.8			
152 W1647	9 33	古墳-奈良	C-1	40.8	21.5	-	1.6	10.9	7.1	7.9	2.5	11.9	11.9	-	-	通經(木表)	方形	1313	608.9	
153 W836	10 35	弥後-古前	C-1	39.7 (15.5)	-	1.7	-	-	-	7.6	4.1	-	-	-	-	経目	圓丸	770	(残存568.3)	
154 W3029	10 34	弥後-古前	C-1	(33.0)	18.9	-	1.1	8.7	2.8	4.7	2.0	11.1	11.1	-	-	通經(木表)	圓丸	458	(514.0)	
155 W1155	10 33	弥後-古前	C-1	39.6	14.4	-	1.6	7.8	5.3	6.1	1.1	8.0	板目(木表)	-	方形	654	548.8			
156 W1094	10 33	弥後-古前	C-1	42.8	19.0	-	1.8	10.3	5.7	6.5	2.9	10.5	10.5	-	-	板目(木表)	圓丸	1028	722.4	
157 W2811	10 33	弥後-古前	C-1	38.4	17.1	-	1.4	9.4	5.4	7.4	3.2	8.6	板目(木表)	-	圓丸	557	527.2			
158 W838	10 31	弥後-古前	C-1	52.6	20.8	-	2.2	9.5	6.5	7.8	3.3	11.2	11.2	-	-	経目	方形	2030	(1027.0)	
159 W694	1 22	弥後-古前	C-2	46.0	19.9	-	1.9	9.4	4.2	7.5	2.5	13.1	板目(木表)	-	圓丸	1822	864.2			
160 W433	2-3 12	弥後-古前	C-2	42.0 (18.2)	-	1.5	9.7	3.7	-	-	-	-	-	-	-	板目(木表)	-	693	(残存541.2)	
161 W423	2-3 12	弥後-古前	C-2	42.4	(8.0)	-	0.8	-	-	-	-	-	-	-	-	板目	方形	256	(残存310.4)	
162 W388	2-3 12	弥後-古前	C-2	37.4	35.5	-	2.1	11.0	8.3	7.5	5.1	11.8	板目(木表)	-	方形	2005	919.5			
163 W209	S 10	弥後-古前	C-2	41.8	(18.3)	-	1.3	10.0	4.9	-	-	-	-	-	-	板目	圓丸	598	(残存479.4)	
164 W1419	6 16	海後-古前	C-2	40.5	15.9	-	1.3	11.5	4.2	9.8	3.4	7.8	板目(木表)	-	圓丸	711	654.6			
165 W1964	9 38	弥後-古前	C-2	36.4	19.3	-	1.1	9.0	6.5	8.0	5.4	6.9	板目(木表)	-	方形	860	(残存629.5)			
166 W1666	9 38	弥後-古前	C-2	42.7	24.2	-	1.8	11.8	9.2	10.0	6.7	9.3	板目(木表)	-	方形	1556	919.1			
167 W2122	9 38	弥後-古前	C-2	33.3 (3.3)	-	1.3	-	-	-	6.6	4.3	-	-	-	-	経目	圓丸	280	(残存259.6)	
168 W1763	9 38	弥後-古前	C-2	34.4	(7.9)	-	1.1	8.5	5.5	-	-	-	-	-	-	板目(木表)	圓丸	302	(残存256.0)	
169 W1097	10 33	弥後-古前	C-2	42.4	(16.0)	-	1.1	9.6	7.7	-	-	-	-	-	-	板目(木表)	円形	846	(残存644.1)	
170 W394	2-3 11	古墳	C-3	37.4	20.5	-	2.1	10.4	4.4	7.4	2.5	13.3	板目(木表)	-	方形	1595	715.2			
171 W207	8 10	弥後-古前	C-3	36.4	34.1	-	1.8	10.4	7.0	8.3	6.4	10.7	板目(木表)	-	方形	1535	833.2			
172 W20	7 10	弥後-古前	C-3	33.5 (15.7)	-	2.5	13.7	3.5	-	-	-	-	-	-	-	通經	円形	665	(503.8)	
173 W1654	9 37	弥後-古前	C-3	40.3	18.3	-	1.8	11.4	6.2	7.5	1.9	10.5	板目(木表)	-	方形	1261	713.5			
174 W3003	9 40	海中	C-3	36.8	22.3	-	1.1	9.8	8.7	7.3	3.5	11.6	板目(木表)	-	方形	965	(778.9)			
175 W783	10 31	弥後-古前	C-3	29.6	13.8	-	1.8	6.3	3.7	5.3	3.1	8.4	板目(木表)	-	圓丸	646	378.2			
176 W522	8 17a	赤後-古前	D	10.5	25.9	-	1.3	-	-	-	-	-	-	-	-	板目(木表)	-	455	(残存404.8)	
177 W805	10 31	赤後-古前	D	14.7	30.7	-	2.2	-	-	-	-	-	-	-	-	通經(木表)	-	850	428.2	
178 W2729	6 16	弥後-古前	D	14.6	36.1	-	1.0	-	-	-	-	-	-	-	-	板目(木表)	円形	740	485.8	

横全長、縦全長の( )は残存部長

面積の( )は推定面積を表す

第68表 濱名遠跡鰐カンジキ型田下駄観察表

番号	器物名	登録番号 出土場所 出土層位	法線 (cm)	形態	技法	分類	
						大束り	蓄種
1-1	足板	W338 9区 14b層	全長 全幅 厚さ	49.4 12.6 2.0	檜板、輪ともに出土した。復元可能な輪カンジキ型田下駄である。板目板状材の両を4箇所始めに切り落とし、先端部を尖らせてある。前後の緊縛用には孔を4cmほどの横長の楕円形に穿っている。締孔は小さな円形である。	表面は平滑に仕上げているものの、裏面は材のままの面を残す。木口側面は丁寧に調整されている。前後の緊縛孔は鋭利な刃物で直線的に削り込んでいる。	板目 (スギ)
1-2	横板	W337 8区 14b層	全長 全幅 厚さ	40.2 3.6 2.4	1のW338とセットで出土した。輪は板目材を半周にしたものを使っている。輪が半円形の輪板状材である。両端の上面に上から穴を入れ緊縛部としている。	板状材の上面を平滑に加工しており、刃物が差し込んだ跡は上から何箇か刃物を入れた直線的な刃物痕が残る。	板目 (スギ)
2-1	足板	W614 10区 30b層	残存長 全幅 厚さ	43.5 10.7 1.5	我存状態が悪い。横板と輪を併せて出土している。中央部の輪の孔は人為的なものか、発掘時の損傷か不明である。	全体的に摩滅感が強く加工痕の觀察不能。	板目 (スギ)
2-2	横板	W615 10区 30b層	残存長 全幅 厚さ	42.6 4.5 1.9	5のW612とセットで出土した。板目板状材の両端を削り落とし、緊縛できるように若干くびれさせて有頭状にしている。	表面は平滑で丁寧な仕上げである。緊縛用のくびれ部分も何度も刃を入れては加工している。	板目 (スギ)
3-1	足板	W612 10区 30b層	残存長 全幅 厚さ	50.3 11.3 2.3	前方の緊縛部の一端が欠落している。右側端に近くも剥離・摩耗している。有頭状の緊縛部は、両側に輪を削り込むことでより作り出している。孔は1つ円形に穿たれている。	表面は、木素を利用して平滑である。後方緊縛部はかなり丁寧に取られてしまっている。	一孔有頭 板目 (スギ)
3-2	横板	W615 10区 30b層	残存長 全幅 厚さ	42.6 4.5 1.9	3-1のW614とセットで出土した。輪の一部も残存している。板目板状材の両端を削り落としている。一方の端部は欠落している。	表面・裏面とも粗く削り出した加工痕が残る。	板目 (スギ)
4-1	足板	W1612 9区 37層	全長 全幅 厚さ	42.4 10.1 2.6	4-2のW1611とセットになると見られる。板目板状材に前後にくびれを入れて、前後に有頭状緊縛部を作り出している。	表面・裏面とも段階的の刃物痕が残る。特に左側には、木幅5cmに達する幅広の刃物痕が残る。	板目 (スギ)
4-2	横板	W1611 9区 37層	全長 全幅 厚さ	37.8 3.7 1.9	輪目の1カン削材の両端を切り落としている。緊縛のための加工は見られない。	表面・裏面は材のまま面を残す。裏面は平滑に調整されている。	板目 (スギ)
5-1	足板	W1613 9区 37層	全長 全幅 厚さ	43.6 10.2 2.4	4-1のW1612とはほぼ同形態である。4に比して若干薄く、2.6cmを測る。	表面・裏面とも段階的の刃物痕が残る。表面は3列全面に観察できる。	無孔板 板目 (スギ)
5-2	横板	W1614 9区 37層	全長 全幅 厚さ	36.9 3.5 1.8	4-2のW1611とはほぼ同形態である。一方の端部の劣化が著しい。	4-2のW1611とはほぼ同じような調整を施している。	板目 (スギ)
6-1	足板	W64 6区 14層	全長 全幅 厚さ	37.9 11.6 1.2	板目板状材の両端の孔を切り落とし、前後に紧縛用の横長楕円形の孔を穿っている。前後2孔の端部は欠落している。	側面の調整は丁寧に行われている。表面が凸凹がまだ残る。	無孔紧縛孔 板目 (スギ)
6-2	横板	W69 6区 14層	全長 全幅 厚さ	41.2 5.0 1.9	6-1のW64とセットで出土した。板目板状材の両端に紧縛用の楕円形孔を穿ったものである。	表面は特に調整の刃物痕が全面に残る。	孔紧縛 板目 (スギ)
7-1	足板	W556 10区 26層	残存長 全幅 厚さ	34.4 13.1 1.1	板目板状材の両端を基準に削り出している。本来は前後の紧縛孔は長い楕円形に削り出されていたと思われる。しかし万葉の左近前約2cmの孔は中央の孔の欠落を補う為のものと考えられる。左側の孔が4つあるのに対し右側は3つある。右側は左用か右足用への転用がされたからと想定できる。締孔は、ほぼ正方形に穿たれている。	表面と裏面は意識的に削られているよう、裏面に對し表面は平滑である。孔は長方形に削り込まれている。	三孔紧縛 板目 (スギ)
7-2	横板	W557 10区 26層	残存長 全幅 厚さ	27.9 6.5 0.9	一方の端部が欠落し、もう一方の端部の既存状態も良くなない。板目板状材の両端に削り出し、さらに両端に紧縛用の楕円形孔を穿ったものと考えられる。	表面・裏面とも平滑に調整されている。表面の下端には縮痕と考えられる右側方向のくびれ跡が多く確認される。	孔紧縛 板目 (スギ)
8-1	足板	W558 10区 26層	全長 全幅 厚さ	36.4 11.7 1.1	11と二枚組となって出土した。両側縫合部は両端に削り出している。締孔も、紧縛孔も1辺1cmの方程式に同一規格に穿たれている。前後端に紧縛孔が2つずつ穿たれている。	表面は平滑に整彫しており、裏面は凸凹をそのままにしている。木口、裏面は丁寧に整彫している。	三孔紧縛 板目 (スギ)
8-2	横板	W559 10区 26層	全長 全幅 厚さ	31.0 6.5 1.3	8-1のW558とセットで出土した。板目板状材の前後端に楕円形の孔を穿ったものであったと想定する。	板目材の表面をよく整彫加工してある。	孔紧縛 板目 (スギ)
9-1	足板	W983 9区 35層	全長 全幅 厚さ	31.8 9.4 2.2	板目板状材の前後木口端を丸くして前後に紧縛用の方形状の孔を穿ったものである。全長31.8cmと小型である。	表面は平滑に整彫している。前後木口は刃物を何度も入れて整彫した痕が観察できる。	無孔紧縛 板目 (スギ)
9-2	横板	W984 9区 35層 左トレチ内	全長 全幅 厚さ	32.8 4.0 1.9	板目の削材を加Tしている。ミカン削材のまま両端に方形状の紧縛孔を穿いている。	材の両先端部と本体部分を整彫しているのみである。	孔紧縛 板目 (スギ)

番号	基盤名	登録番号 出土地点 出土機器 出土部位	法量 (cm)	形 態	技 法	分 類	樹 種	
10-1	足板	W1757 9区 36層	全長 全幅 厚さ	31.6 9.6 2.3	9-1とほぼ同形態であり、2つで1セットと考えられる。	同上の技法が觀察できる。	無孔 密閉 四孔	板 目 (スギ)
10-2	脚板	W1758 9区 36層	全長 全幅 厚さ	31.2 4.2 1.8	板目の板材を加工している。両端を丸くし、方形の緊縛孔を穿っている。	先端部の加工、方形の緊縛孔とともに角を落とし、丁寧に加工している。	孔 密閉 四孔	板 目 (スギ)
11	足板	W296 2-3区 11層	全長 全幅 厚さ	40.8 6.5 1.2	上、下が斜面つかない直面状に作り出し、足部部分は平而 レンズ状にしている。これは上、下とも、半分斜面を残し ている。	直面とも斜面の為かもしれないが、凸凹を 残したままにしている。	三元 密閉 四孔	板 目 (スギ)
12	足板	W397 2-3区 11層	残存長 残存幅 厚さ	36.9 7.5 1.6	右端縫合部及び後方有頭状緊縛部が欠落している。有頭部は 円形に形作っている。孔は3つほど円形に穿っている。	くびれ部分は何度も刃物を当てたのか、刃 物痕が多く残る。後方くびれ部分には擦痕 が残る。	三孔 有頭	板 目 (スギ)
13	足板	W598 2-3区 11層	残存長 残存幅 厚さ	36.7 8.1 1.3	残存部が悪く、左右両側面近が欠落している。前後に有 頭部の緊縛部を作り出し、足部部は平面レンズ状を呈してい る。前後1つは長方形に穿たれており、後孔は左側面が一 概に残存している。	後方の紧縛部付近に擦痕が一面に残る。 有頭部に削り出す時に、焼きなま加工し たと想定できる。	三孔 有頭	板 目 (スギ)
14	足板	W145 5区 8層	全長 全幅 厚さ	43.5 10.5 1.5	前方の緊縛部とともに有頭部を削りしていると思われる。 前方に後方側に突出部がある。足部部は平面レンズ状に している。孔はやや傾斜の長方形に穿たれている。	表面は裏面底面は残らないが、平面に仕上げ ている。背面側や緊縛部は、鋭利な刃物で 大きな単位で切断している。	三元 密閉 四孔	板 目 (スギ)
15	足板	W130 5区 8層	全長 残存幅 厚さ	46.0 8.5 1.4	左右側面とも縦方向に一部欠落している。前孔と右後孔の一 部が残存し、前後の有頭状緊縛部が残るために輪カッキントし た。前面の緊縛部は1-1~6-2のように頭を明確に穿り出 たものではない。	前後の紧縛部は、前後端部にむかって若干 深くなるように削り出されている。孔は定 形である。	三孔 有頭	板 目 (スギ)
16	足板	W84 5区 8層水田	全長 全幅 厚さ	42.2 9.8 2.0	全长42.2cmと長い。やはり前後2ヶ所で左右両側からくびれ を削り入れる所によく、斜面部を作り出している。孔は極 小の内円形で穿たれている。孔づらが前より穿たれており、 孔の大きさがかなり前にくると想定できる。	表面は平滑に調整しているが、裏面は削 いた所の凸凹がまだ残る。左右側面は角 を丸くしている。	三孔 有頭	板 目 (スギ)
17	足板	W23 5区 5層	全長 残存幅 厚さ	36.8 7.3 1.8	右側1-3程度が欠落している。板目の板材の前後にくびれ を削り入れることにより、斜面部を作り出している。孔は小さな内円形で、 斜面に対し直角に穿たれている。	くびれ部分の切り込みには何度も刃を入れ 調整した痕が残る。	三孔 有頭	板 目 (スギ)
18	足板	W7 7区 4層	全長 残存幅 厚さ	35.5 9.1 1.8	全长35.5cmと小型である。緊縛部の邊は円形に削り出される 。足部部は平面レンズ状を呈している。孔はほぼ円形に穿 たれている。	表面は平滑に調整している。全体的に側面 に大きな刀痕が観察できる。	三元 密閉 四孔	板 目 (スギ)
19	足板	W254 8区 14層	残存長 残存幅 厚さ	28.5 10.9 1.0	前後の緊縛孔付近、左右両側面の一部が欠落している。縫孔 は縫合の長方形に3つ穿たれている。前後の緊縛孔も方形に 近い形で穿たれていたらう。	全体的に残存部不良のため技法はよく捉 えられない。縫孔は、縫合の長方形に直もと り丁寧な仕上げである。	三孔 密閉 四孔	板 目 (スギ)
20	足板	W64 5区 8層 被系 色 土工	残存長 全幅 厚さ	41.8 13.2 1.6	後方の緊縛部が欠落している。緊縛部は縫合長径の孔を一つ づつ空けている。全体はレンズ状をしている。孔は小さい円 形である。	表面は調整痕が残るが、不規則なものであ る。裏面には整形した痕はない。	三孔 密閉 四孔	板 目 (スギ)
21	足板	W27 2-3区 6層	全長 残存幅 厚さ	37.9 8.9 1.2	右側縫合部が欠落している。板目の板材を用いている。左右の 縫孔を弧状に削り出している。縫孔は小さな内円に穿たっている 。左孔の使用部分は、中央の縫孔を見るとよいように覆われ る。縫孔は前孔と2孔ずつ小さな円形である。	柱目打を用い、表面は平滑に丁寧に仕上げ ている。側面木口も角を取るように仕上げ ている。	三孔 密閉 四孔	板 目 (スギ)
22		W28 2-3区	残存長 残存幅 厚さ	33.4 6.6 1.4	左側縫合部及び後縫合部が欠落している。板目板材の右側縫合 部が斜面に削り出している。同一線上に正方形に穿するが1-1斜 めで穿たれているが、位置と大きさより前方の孔を緊縛孔、後方の 孔を縫孔と判断した。	表面は平滑に調整されているが、裏面には 凹凸が残る。側面木口も角を取るように仕 上げている。	三元 密閉 四孔	板 目 (スギ)
23	足板	W8 7区 2層	全長 全幅 厚さ	45.8 13.4 1.4	合計は板幅の4箇所を直線的に切り落とした形をしている。 中央部で縫合に削り、その跡を補修する為、後の縫孔より 7cm前方に小孔を開け、形状のもので整備したものの直線化 する。縫孔部は前後2-3つ空いているが、バランス的には後の ものが使はれたと考へられる。緊縛部に前後側に2孔ずつ 穿たれている。	板の側を直線的に切った後、木口・側面の 角を丸くすべく調整している。後縫孔は不 定形にやや大きいが後のものは補修孔も含め 小さく丸い。	三孔 密閉 四孔	板 目 (スギ)
24	足板	W164 8区 8層	全長 残存幅 厚さ	36.9 8.6 2.1	右側1-3程度しか残していない。右側縫合部は斜面に削り出 している。縫孔は右後孔から奥へ立てしないが、正方形に穿たれて いる。緊縛部には前後2-3孔ずつ孔が穿たれているが、左 側の小孔はその位置より補修孔と考える。	表面は平滑に整形しており、裏面は凸凹を そのままにしている。右側面には手状痕が 残る。	三元 密閉 四孔	板 目 (スギ)

番号	名	登録番号 出土地点 出土地位	法 量 (cm)	形 態	技 法	分 類	鑿 り 種	
25	足 板	W134 5区 8畳 水田	全長 幅 厚さ	41.5 13.4 1.5	後方の側縫は、後方に向かって削り込んでいる。前後の緊縫部は、元来縫合の楕円形に穿たれていたと想定する。縫孔は4つに穿たれているが、後方左上の孔は直進に開通しないものと考える。孔は方形に近いが、不定形と思われる。	表面には、整形時の刃物痕が大きな単位で残る。全体的に造作が粗雑である。	長方形 板 目	(ス ギ)
26	足 板	W150 5区 8畳	全長 幅 厚さ	44.2 12.6 2.5	長方形の目皿状材をそのまま利用している。縫孔は3つほど方形に大きく穿たれている。脇の要縫孔は前後端に2つずつ小さな方孔に穿たれている。右後端より少し前に縫孔の左側にそれと離れた穴があるが、この穴はそれぞれ縫板がぐる上位縫と下位縫に当たるために、後縫板補強のための孔と考えられる。	木表面の平坦な面を利用し、最小限の加工でませてある。縫孔と緊縫孔はいずれも小さな方形状に穿っている。	長方形 板 目	(ス ギ)
27	足 板	W129 6区 9畳	全長 高さ 幅 厚さ	34.1 5.8 1.4	輪カンジキ型田下脚の足板が左半分欠損したものと見える。17と基本的には似ており、板材に3つの縫孔を、前後端に2つずつ緊縫用の孔を穿っている。孔はいずれも、直徑1.2cmの真円形である。右の後方縫孔の左に小孔がある。	長方形の板材を最小限の加工で田下脚にしたるものである。真円形の穿孔技術は高度で、ドリルで空けたものとも見える。	長方形 板 目	(ス ギ)
28	足 板	W389 2-3区 11畳	全長 幅 厚さ	39.7 8.7 1.8	穿孔はなく、前後に有頭状の緊縫部を作り出している。前方の緊縫部は裏用の為か半彎曲して、小さな頭になっている。くびれ部分を中心に裁断が残る。	裏・裏面とも、平滑に仕上げられ手斧痕は観察できないが、くびれ部分には刃物痕が残る。	板 目	(ス ギ)
29	足 板	W390 2-3区 11畳	全長 幅 厚さ	44.5 8.5 1.8	穿孔は無く、前後に有頭状の緊縫部を作り出している。前方のくびれ部分には加工用の為か焼痕が残る。	前後のくびれ部分に切り込んだ刃物痕が残る。くびれ部分及び側面に焼痕が多く残る。	無孔有頭 板 目	(ス ギ)
30	足 板	W405 2区 12畳	全長 幅 厚さ	36.9 7.4 1.5	左側縫部と前方の右側縫部の一部が欠落している。足を乗せる両側縫部は、レンズ状に弛やかな弧を描いてカーブさせている。	くびれ部分の側面、及び裏面に刃物痕が大きめの単位で観察できる。	無孔有頭 板 目	カ シ (ス ギ)
31	脚 板	W68 6区 14畳	全長 幅 厚さ	43.5 5.5 1.7	20に比して3cm長いが、整形的に類似のものである。	表面とも整形し、角も落としている。	丸脚 板 目	(ス ギ)

第69表 漬名遺跡その他 農具観察表

番 号	器 皿 名	登録番号 出土地点 出土層 出土部位	法 量 (cm)	形 態	技 法	分 類	制 限
1	縦	W5922 9区 SR53301	全長 40.3 全幅 3.7 厚さ 1.8	本文参照のこと。	本文参照のこと。		タブ ノキ
2	横 縦	W 62 1区 20層	全長 35.7 敲打部最大径 6.9 柄部最大径 2.6	敲打部が断面方形をしている。柄部は断面円形で、長さは23.1cmと長い。敲打部は正面に割り入る窓と側面の窓のことで使用楽らしき跡みが観察できる。	敲打部の窓部に刃物痕がある。柄部は線位に削った経路の刃物痕が観察できる。	-	削 材
3	横 縦	W 598 7区 SR70801	全長 36.1 敲打部最大径 6.3 柄部最大径 2.3	厚めの板状材を圓取りしながら折部を削り出している。敲打部中央に使用跡と思われる窓みが観察できる。	端位に調整出が削られている。角はすべて削られている。	-	削 材 (スギ)
4	横 縦	W 173 1区 SR12001	全长 23.0 敲打部最大径 6.3	断部が欠落している。敲打部長は14.5cmと柄に比して短い。敲打部から柄部にかけては、断次細くなる。使用用跡は観察できない。	心材を加工している。柄部を削りに削り出すことにより形造っている。	-	心 材 持 ち 材
5	横 縦	W 443 7区 SR70801	全长 32.2 敲打部最大径 6.2 柄部最大径 3.8	削り部が断面圓錐形をしている。敲打部より柄部にかけて断次細くなり、グリップエンドを有頭状に削り出している。	残部は調整され、丁寧な仕上げが観察できる。	-	心 材 持 ち 材
6	横 縦	W 469 7区 SR70801	全长 38.9 敲打部最大径 5.1 柄部最大径 2.8	敲打部から柄部にかけて断次細くなり、グリップエンドを有頭状に削り出している。敲打部中央部に範囲広く使用後破壊できる。	鍛錬焼きで作製したような端格性のある接觸部である。特にグリップエンドは複数に削り出されている。	-	心 材 持 ち 材
7	横 縦	W1124 9区 33層	全长 40.7 敲打部最大径 6.2 柄部最大径 2.5	端位に半次裂している。敲打部より柄にかけて断次細くなるように削り出し、グリップエンドは有頭状である。	グリップエンドを球状に削り出している。	-	心 材 持 ち 材
8	横 縦	W1685 9区 33層	全长 40.2 敲打部最大径 4.3 柄部最大径 3.0	残存状態が悪い。グリップエンドを有頭状に削り出している。敲打部より柄部にむかいで断次細くなるタイプと想定する。	グリップエンドをくびれるように刃を入れている。	-	削 材
9	横 縦	W 714 9区 25層	全长 42.4 敲打部最大径 5.4 柄部最大径 3.0	やはり大半が摩滅している。敲打部より柄部にかけて断次細くなる。	摩滅甚だしく詳細は不明。	-	心 材 持 ち 材
10	堅 忤	W 316 2区 10層	残存長 32.5 柄部最大径 10.0	片方の敲打部のみ残存する。敲打面が平建式に加工されていること、裏面より敲打面にかけて断次太くなっていることより摩滅の一例とした。	敲打部は丁寧に調整されており、敲打面には刃物痕があるが、丸味をつけて削り出している。	-	削 材
11	堅 忤	W 902 7区 9層	全长 119.0 敲打部最大径 9.3 柄部最大径 3.8	握り部で三箇所折れているが、ほぼ定形の堅忤である。敲打部一方は丸み痕があり、半球状に崩らても一方は平面に削り出されている。	全長119.0cmもあり、両側の敲打部が重く、握り部が強く削り込まれている。	-	心 材 持 ち 材 (バキ)
12	縦 縦	W 615 7区 SR70801	全长 8.4 全幅 13.2 厚さ 4.0	丸太の半削材の両側を削って作っている。孔は使用のためか横切形をし、真直している。	丸太材の外側を刃物で面取りしながら調整している。	-	心 材 持 ち 材
13	縦 縦	W 498 7区 SR70801	全长 7.4 全幅 12.0 厚さ 4.5	丸太の半削材を利用し、端面に横長の長方形孔を貫通させている。	丸太材を半削にして両面を切り落として横ねの形を作っている。右側木口には大きな刃物痕が残る。	-	心 材 持 ち 材 (イタマキ)
14	縦 縦	W 710 9区 SR25601	全长 4.7 全幅 11.2 厚さ 2.3	丸太の半削材の両側を切り落としている。方形の孔をまっすぐくり、穿つてている。	細い半削丸太を所ど加工せず、方形の孔をあけたのちの加工である。	-	心 材 持 ち 材 (イタマキアカシデシテ)
15	田 舟	W1159 9区 SR93303	残存長 198.7 残存幅 27.5 厚さ 3.4	全長が2m弱ある長大な田舟である。握りが1つ残存して全长が把握できるが左側面部部分欠落している。残さは最深部で1cm程度。	柱目のスギの大きな材を加工している。内部を削ると刃物痕が残るが、削りながら削っているようで内部側面は焼けている。	柱 目	(ス ギ)
16	田 舟	W 553 7区 SR70801	残存長 41.5 残存幅 13.7 厚さ 3.2	舟の一部と握り部分が残存している。握りがあるため舟底と接觸している。内部部分だけでは底が平坦であるか判明しない。	船首、舷側部分は丸みをもって形作られていて、表面は摩滅が甚だしい。	柱 目	(ス ギ)
17	田 舟	W 316 9区 20層	残存長 23.0 残存幅 13.2	握りの部分とその連結する船底部分のみ残る。	使用のためか加工のためか判明しないが、握りの基部がくびれている。	柱 目	(ス ギ)
18	田 舟	W1302 9区 SR93303	残存長 54.2 残存幅 32.5 厚さ 1.8	9区の自然終塊内で残存状態が悪く出土したものである。机上で復元したところ図のようになつたが、不明な点が多い。	残存状態が悪い。底部は丸底に厚さも2cmもない程である。	柱 目	(ス ギ)

第70表 潮名遺跡筆記遺物觀察表

番号	遺物名	登録番号 調査区 出土場所 遺構	法 量 (cm)	形 態	技 法	分 木 取 り 類
13	薪 串	W 54-2 15X 20幅 SR12001	残存長 34.9 最大幅 1.7 厚さ 0.4	下端の一部が欠落している。両側面とも部分的に欠損しているが、磨耗全般が把握できる。上面にやや細めの上方からの切り込みがある。両側面の切り込みはほぼ左右対称で入っている。上より一段目は下から上へ、三段目は上から下へ、四段目は上から下へ切り込みで入っている。四段の切り込みより下は断次横幅が狭くなり下端に達する。	上端は直線状に直角的に切り落とされている。表面は円滑に整形している。上端に斜めに1箇所切り込みがあり、左右側面には左右対称となる様に4箇所ずつ切り込みがある。	A1 板 目
14	薪 串	W 54-4 15X 20幅 SR12001	全長 32.6 最大幅 2.1 厚さ 0.6	上端は直線状を呈す。下部は曲線を呈しながら尖る。上端や尖端の上方からの切り込みがある。下部の両面はレンズ状を呈す。上端は下から上への切り込みが入る。1つの切り込みに刃を差すだけでは少しづきせ何度も入れていい。二段目は左側面で今度は下から下へ入れている。三段目は右側面が下から上へ、左側面が下から下へ入れている。この左側面は刃が差していなければ入るだけである。	表面、裏面とともに、平滑な丁寧な仕上げをしている。切り込みは直線的に斜めに入れた後、同じ方向で3、4回くりかえしサクレの状態に切る。一段目以下の切り込みは不規則に入れている。	A1 板 目
15	薪 串	W 54-3 15X 20幅 SR12001	残存長 16.4 最大幅 1.6 厚さ 0.2	下端が粗落している。また両側面も残存状態は良好ではない。上端に斜めより上方からの切り込みがある。2cmと薄い。両側面は断続なく切り込みが入っている。特に下方へ入るが多いため、左側面には上から下へ刃を入れても見える。残存部分は切り込みが入っている。	直線状上端は粗落的である。左右の切り込みは下から上へ直接斜めに切り込んでいるのが大半である。ほぼ等間隔ぐらいに、左側面に断続なく切り込んでいる。側面の角は削り落としておらず、横位置は長方形となる。	A1 板 目
16	薪 串	W 361 15X 19幅 SR12001	残存長 10.6 最大幅 2.0 厚さ 0.3	上部のみ残存している。残存した部分の形状は14のW54-4に似る。上端は直線状を呈す。上端は上方よりやや細めの角度の切り込みがある。側面の切り込みは一部のみ直線である。下方から上方へ切り込まれている。三段目は左側面で下から上へ入っている。	完全的に直線的な刃の刃の方をしていく。両側面の切り込みは一度入れた刃を少しずつずらし、サクレ状にしていく。	A1 板 目
17	薪 串	W 365 15X 19幅 SR12001	残存長 33.8 最大幅 1.6 厚さ 0.4	上端の一節と一部が欠落しており、両側面も一部削除していている。上端は粗落状であったと見受けられ、上端にやや細めの角度で上方から切り込みが入る。両側面の切り込みは複数ねじれで入っていったと見受けられる。上端は上から上へ切り込み入り入り、観察では五方向に刃を入れていたと見せる。中央より下は下から下へ切り込みが入り、観察では西端まである。	粗落が複数があり直角くないため、両側面の粗落の部分が正確確定できない。側面中央から上へ斜めより下へ入る。下から上へ切り込みが入り、下は、上から下へ入る。上端では左側の切り込みがほぼ右側に移行するが、下部になると対称が乱れる。	A1 板 目
18	薪 串	W 544 15X 19幅下端 SR12001	全長 23.0 最大幅 1.7 厚さ 0.3	上端は直線状に切り落としている。上端に上から斜めに切り込みが入る。両側面も左側面には一節から切り込みが入っている。この切り込みは刃を一度入れただけではなく、何度も少しづきせ入れている。下部は直線やかに横幅になり、下端は尖る。側面断面はレンズ形となる。	上端の主頭部で切り落としは直角的である。下部の切り込みは直線的に削り落としている。側面の角のはすべてで表裏きれいに削り落としている。	A1 板 目
19	薪 串	W 54-5 15X 20幅 SR12001	残存長 9.6 最大幅 1.5 厚さ 0.4	上部のみ残存している。上端は直線状をなす。上端に斜めの切り込みが入る。左側面は直線状で右側面は極端に欠損している。左側面は左側面より開闊を空けて下から上へ3段連続して入っている。	表面、裏面は直面中央を厚くし、側面に向かって斜めに削り落としている。側面に刃が落ちた跡によく見受けられる。側面の角は削り落として、直線状の側面の切り込みは左から右へ斜めに削り落としている。	A1 板 目
20	薪 串	W 54-7 15X 20幅 SR12001	残存長 7.8 最大幅 1.4 厚さ 0.4	上部のみ残存している。上端は直線状をなす。上端に斜めの切り込みが入る。左側面は直線状で右側面は左側面より開闊をして入る。左側面は右側面より開闊を空けて下から上へ3段連続して入っている。	直線状上端は直線的である。表面は中央部が縦位にやりや削りがかかる様整形している。左側の側面の切り込みは直線的な刃を一度入れるやり方で側面にも纏めている。	A1 板 目
21	薪 串	W 352 15X SR12001	残存長 6.1 最大幅 1.7 厚さ 0.5	上部のみ残存している。主頭部に上端は削り落して出でたり、左側面には上方より下へ切り込みが入っている。(「上端に斜めの切り込みが入る。左側面は直線状で右側面は左側面より開闊をして入る。左側面は右側面より開闊を空けて下から上へ3段連続して入っている。」) ただし、直線の形状からしてA1の形態が想定できるが断定できない。	直線状の上端は直線的である。両側面に入っている切り込みは斜めであり、やはり角度を少しづらして切り込んでいる。表面は平滑である。	- 板 目
22	薪 串	W 719 7X SR70801	全長 22.3 最大幅 2.0 厚さ 0.4	上端部は直線状に削り落されている。上端削面に両側から斜めに削込みが入っている。この切り込みは左から右へ斜めで上方から下方へかけて入っている。下部は断次横幅が狭くなり先端に達する。厚さは2mmあり、側面の角は削られ、側面断面はレンズ形となる。	上端は直線的な主頭を作り出している。上端側面の切り込みは斜線的な刃で上方から右斜めやや細めの角に入っている。表面、裏面とも平滑な仕上げられる。特に角を削り落とし、滑らかに整形している。	A2 板 目
23	薪 串	W 95 7X SR70801	全長 19.7 最大幅 2.2 厚さ 0.3	上端は直線状を呈す。中央部より下に向かって徐々に側面に曲線を以てようやく左側面に達する。左側面は右斜めで左側面の方を右側面よりも上の位置から削られ、側面に達している。上から下への右側面は直線的で切り込みが入っている。上から下への左側面は直線的で切り込みが入る。左側面の上端に木目と墨交する方面に上から切り込みが入り、また木目で平行する方面にも上から切り込みが入る。	直線的な直線状上端を削り落す。表面、裏面とも平滑で整形している。下端削面は角度を切って、尖りを削り落としている。上側の右側面の切り込みは直線的に入っている。上側の右側面に直線的な刃で斜めに削り落す。上側の右側面に直線的な刃で斜めに削り落す。上側の右側面に直線的な刃で斜めに削り落す。	A2 板 目
24	薪 串	W 358 15X 19幅 SR12001	全長 15.6 最大幅 1.6 厚さ 0.3	上端左側面に削痕があるものの、施は磨耗をとどめる。上端は直線状をなす。左側面は直線状で右側面の角で切り込みが入る。下部は曲線を描しながら下端へと尖る。	上端は直線的に主頭部を削り落している。下部の尖りは直線的に削り落としている。表面は平滑な仕上げをしている。	A3 板 目
25	薪 串	W 54-5 15X 20幅 SR12001	全長 16.4 最大幅 1.3 厚さ 0.4	上端左側面に削痕がある。上端は直線状を成し、斜めの角の切り込みが上方へ入り込む。左側面は直線状で右側面の角で切り込みが入る。下端部に削痕がある。	上端の主頭は直線的に切り落としている。表面、裏面とも平滑な整形を施している。	A3 板 目
26	薪 串	W 224 7X SR70801	全長 13.7 最大幅 1.5 厚さ 0.4	上端部は直線状を呈する。先端で残存している。上端部に上から斜めに削り込みが入る。左側面より右側面の角で切り込みが入る。左側面は直線状を成し、側面の角をやや削っている。	上端に上から入っている切り込みの切り込み口は刃物の当たった裏を残すが、下へは削られたまま入っている。表面とも丁寧な整形である。	A3 板 目

番 号	品 物 名	登録番号 商標登録 出典権	法 量 (cm)	形 状	技 法	分 類	本 取 扱 種 類
27	畜 串	W 138 9区	全長 22.6 最大幅 2.2 厚さ 0.1	全体的に部分で彫刻を作りである。下端一部が切れるのみである。上端は表面に彫刻はなく、表面は丸く仕上げてある。左端部から右へ入った轍があるが要領的な轍で込みが切れてある。中央部より下端部にかけて縦溝が深くなっている。	表面の上端は鋭利な刃物で直線的に切り落としている。表面は横溝などはなく、表面を切り落としている。厚さ1mmほどで軽薄く、表面、裏面とも平滑で非常に丁寧な調整を施している。	A3	板 目 (ス ギ)
28	畜 串	W 39 7区 SR70001	全長 80.6 最大幅 3.5 厚さ 0.9	ほぼ完璧な残存状態は良好である。上端は直線状に切り削る。上端部に木目と並行する方向に上から切り込みを入れている。切り込み部を嵌め込むようにしてある。表面は斜めに削り落としている。中央部から上端まで一括り、横断面は斜めにレンズ状に削っている。	全体的に角を削り直す。丁寧な作りで側面と横断面である。表面の切り込みは底の刃を木目と並行して削り落としたものである。表面に2箇所の凹みがあるが、これは丁寧に整備して丸みのある形状の折れにしている。	A	板 目 (ス ギ)
29	畜 串	W 279 7区 SR70001	全長 17.7 最大幅 1.6 厚さ 0.5	上端が緩やかな弧を描く圓錐状を呈す。表面に対して、平行で上端部に木目と並行する方向に上から切り込みを入れている。表面は斜めに削り落としている。側面は直線状になる。「」字型は残存状態になり尖る。	全長17.7cmと小型であるが精巧な作りである。上端は円錐状に何度か刃物を当てる。横断面がレンズ状になるよう角をとるべく表面を整形している。上方からの切り込みは深く、3.7cmに及んでいる。	B	板 目 (ス ギ)
30	畜 串	W 658 9区 SR92501	全長 29.7 残存最大幅 2.0 厚さ 0.5	左半分が上から下まで欠落している。右半分の残存状態は良好であり、全体を再現できる。上端部は直線やかな弧を描く円錐状である。表面は斜めに削り落している。この流れにより、左側の表面は斜めに削り落成形になっている。下部は最大幅になった後、漸次細狭になり尖る。	表面、裏面ともに平滑な整形が施されている。側面は角を削り落しているが、特に下部は角を大きく削り取っている。全体的に丁寧な作りである。	B	板 目 (ス ギ)
31	畜 串	W 332 9区 上端削水 溝	全長 26.1 最大幅 1.9 厚さ 0.7	上端部はW字型削り落しているところもあるが、円錐状を成すと観察できる。平行刃でややかな弧を描く。厚さは7mmと若干厚めである。下部は直線でやかにカーブしながら先端に達する。下端両側面には粗朶が残る。	上端は残存状態があり良好でないが円錐状に切り落している。側面は削ったまま、荒筋を残していないように見える。それに比べて裏面は表面よりも側面に仕上げが整っている。下端部は粗朶ながら、磨くなどとこころを削る手法で先端を尖らせてある。	B	板 目 (ス ギ)
32	畜 串	W 114 7区 SR70001	残存長 10.3 残存最大幅 1.3 厚さ 0.3	左側と下部が欠落しているため、全体の形状を想定するには困難である。左側の右側面が残存していると観察できるため、上端の円錐状となる面と考えた。両側面に不規則な粗朶が両側面から観察できる。	上端は緩やかな弧を描く円錐に削り出している。残存している右側面を観察すると、横断面はレンズ状になると思われる。	B	追 延 目 (ス ギ)
33	畜 串	W 173 9区 SR92001	全長 35.0 最大幅 2.8 厚さ 0.5	左側面で欠落している部分が多いが、中央下部で一部残存するため全体の形状を想定できる。上端は上から下に向一方削る。下端ではその逆の左から右へ切り落としている。表面に至る溝は斜めに削り落してあるとの考えられる。	上端と下端の切り落としは直線的で脱いだ。ほぼ中央左に穿孔がある。右側面は直線でどちらから見ても少し厚く、平坦である。表面は平滑だが裏面は凸起があるままである。	C	板 目 (ス ギ)
34	畜 串	W1154 9区 SR93003	全長 22.0 最大幅 1.8 厚さ 0.6	上下端を逆方向に切り落として、台形状にしたのである。表面は2点で小窓である。左側の切り落としは絶対に直角である。左右側面の角を落としている。	スギ材を若干削ぎ落して板目にしたった材を加工している。下端の切り落としは直線的である。裏面は平滑であるが裏面は平滑であるが裏面は直線的な調整が施されていない。	C	板 目 (ス ギ)
35	畜 串	W 394 9区 SR92503	全長 58.5 最大幅 4.0 厚さ 0.5	畜串としては長大で、上端も下端も鋭く尖っている。上下端はW字型の尖りの度合いより下端の方が尖くといふことを裏面に決めてある。	上端は直線的に刃物を当てて切り落としている。表面は粗朶削り削られており、裏面ではほとんど削られていない。左側面は直線で、左側面の奥に斜めに削り落してある。下端部は直線で、裏面は斜めに削り落してある。裏面は斜めに削り落してある。厚さは上端より下端の方で約4mmなくなる。	D	板 目 (ス ギ)
36	畜 串	W 926 9区 SR93020 ～ SR93003	残存長 43.8 最大幅 2.8 厚さ 0.5	上端が欠落しており、上端の形状が把握できないが、左側面の当部刃の当たった跡が残っているため直線状の表面を想定した。厚さは5mmと薄い。下端は直線的に絞込に尖らせている。	無い板目材を用い、表面は特に平滑に仕上げている。横断面は中央部から下部にかけて均一な削りをもつ。	D	板 目 (ス ギ)
37	畜 串	W 395 9区 SR92503 ～ SR93003	全長 60.7 最大幅 2.4 厚さ 0.7	上端が直線的に切り落とされ、下端はほぼ左右対称のまま尖るため表面に分離した。上端の左側面に切り込みを入れており、表面的に斜めに削り落してある。表面を斜めに削り落してある。左側面が右側面に比して厚く、刃をかける面に削り出されつぶつとしている。9区SR92503～93003かは3点で直角に削り落してある。表面が尖らっても刃の可塑性を捨てきれないものである。	上端と下端とを主張的に切り落としている。下端は上部にして幅広く、左側面は薄く刃をかけるように削り出されている。表面は平滑に丁寧に整形されている。	D	板 目 (ス ギ)
38	畜 串	W 46 7区 SR70001	全長 21.2 最大幅 1.5 厚さ 0.2	上端は直線状を呈す。上端部側面両側に三角形の切り欠き等を有している。中央より下端部へ斜めに削り落してある。厚さ2.0mmと薄い。平塗装状の表面である。	主頭状の上端は直線的に切り落とされている。左側面と右側面の合計16箇所ある三角形の切り欠きは上から順序によって刃を入れ、下から側面に上に刃を入れることで施されている。表面、裏面とも平滑に整形されている。	E	板 目 (ス ギ)
39	畜 串	W 760 9区 SR92501	全長 18.2 最大幅 1.9 厚さ 0.5	上端は欠落とも觀察できる。欠損するとA1番の下端のみが残ったものと考えられる。残存基部上部は直線的に削り落とされている。下端部は直角により鋭めに直線的に切り落としている。形状的には刃形になる可能性もある。	上部は直線的に切り落とされており、下部は曲線的に整形されている。表面は平滑に仕上げられている。	-	板 目 (ス ギ)
40	畜 串	W 401 9区 SR92503 ～ SR93003	残存長 36.0 最大幅 1.8 厚さ 0.4	上端は欠落している。左側面削り落とし、下端部は残してある。4mmの削り落としである。下端部は一方より鋭めに直線的に切り落としている。形状的には刃形になる可能性もある。	スギの胚の裏板を加工している。表面、裏面とも平滑な調整をしている。側面の角も残り、全体的に直線的な簡素な作りである。	-	板 目 (ス ギ)

番 号	遺 物 名	登記番号 調査区 出土位置 遺構	法 量 (cm)	形 態	技 法	施 工	
						本 取 り 部	搬 送 部
41	薪 串	W115 9EX SR29303	残存長 69.0 最大幅 3.0 厚さ 1.3	上部が欠落している。厚さが最大厚さであり、やや原木である。中央部から下部にかけて横幅は徐々に狭くなり、底部では最も狭くなる。下端部は直線的に尖らせている。下端部はA字型の形状を復元推定することができる。	全体的に左側に聞く右側が厚くなっている。また中央部から下部へと横幅が狭くなり、底部の様な形状を呈す。直線的な下端部となり、傾斜が少ないので、直線的下部で一度削るという手順の形状の複数を示す。	板 目	板 (ス ギ)
42	薪 串	W 392 9EX SR29303 ～ SR29305	全长 60.2 最大幅 1.9 ～ 厚さ 0.4	残存状態は悪く、上部部分を欠き、全体的にも剥離した箇所が多い。側面には細かい凹凸が見られる。そのため薪串とした。9区にSRT0801～SRT0803の各遺構物が出土地より出土したもので、推定全长が長大なこと、下端部の削り出し方より判断すると高市D型の形状が復元推定することができる。	厚さ3mm程度の軽薄いスギの板材を加工している。表面は平滑で、裏面および裏面を鏡面とする限りでは平滑に丁寧な彫影を施している。	板 目	板 (ス ギ)
43	薪 串	W 381 1EX 19番 SR12001	残存長 6.3 残存最大幅 1.5 厚さ 0.2	下端部のみを残す。断面形状になり尖る。	表面は平滑に仕上げている。側面は曲線を描きつ尖るように、丁寧な加工が施されている。	板 目	板 (ス ギ)
44	薪 串	W 914 1EX 105番 1号墓 丘上	残存長 16.2 最大幅 1.6 厚さ 0.7	中央部から上部にかけて欠落している。左側面も一部欠落している。横断面レンズ状をなす。厚さは3mmあり、原木である。下端部は両側より直線的に切り落とされている。	厚ねの板目板を角を削りし加工している。下端は直線的に切り出している。	追 板 目	追 板 (ス ギ)
45	薪 串	W 627 区 SR70801	残存長 30.0 最大幅 1.9 厚さ 0.8	上部が欠落している。最大厚さ8mmあり、やや椎状である。断面は右側が高く、台形となる。下部は直線的に両側から切り落として角部に尖らせている。	全体的に粗雑な作りである。表面全面とも整形しておらず、削れをそのまま利用しただけと見える。下端には複数の擦痕がある。先端は円錐形に尖らせている。	板 目	板 (ス ギ)
46	薪 串	W 754 1EX SR70801	残存長 11.0 最大幅 1.4 厚さ 0.4	中央部から下部が残存している。幅狭で若干削めである。裏面全面はレンズ状をなす。下部は直線衣面を施しながら下部に連続する。残存している中段の両側面に下方より裏面から上部の裏面に上方よりの切り込みが観察できる。本来A型の形状をするものと想定される。	表面、裏面とも平滑で、両側面の角もとり、全体的に丁寧な仕上げである。下端の切り出しへは斜めでも刃が当たった方が残存している。左右4箇所の切り込みがあり、刃を入れたのは一度だけなど少なくとも3箇所上入れてあり、少しずつざらして切り込んでいる。	板 目	板 (ス ギ)
47	薪 串	W 112 1EX SR70801	残存長 10.0 最大幅 1.4 厚さ 0.5	下端より下端部のみ残存している。断面形状になり、下端部を尖らせている。厚さは5mmあり、横断面長方形を成す。	表面、裏面とも平滑に仕上げている。下端部を尖らせる加工も丁寧である。	板 目	板 (ス ギ)
48	薪 串	W 50 1EX SR70801	残存長 17.7 残存最大幅 1.9 厚さ 0.5	残存状態は悪く、上部及び下部が欠落している。下部に向けて幅狭になっている。全体的に表面が拡張しており、焼いたものかと思われる。	中央部より下部にかけて残存するのみで全体的な範囲はできない。横断面がレンズ状を成し、角が削かれている。	板 目	板 (ス ギ)
49	薪 串	W 295 1EX SR70801	残存長 17.7 残存最大幅 1.9 厚さ 0.6	中央部より下部が残存している。左側面は欠落している。上部は欠落しているが木目が直交する方向で上から切り込みが入っている。下部は無次級横筋になる。	柱目どりで厚さも6mmとこのサイズにしては少し厚い。右側面の角は削り落として整形している。	板 目	ヒ ノ キ
50	薪 串	W 753 1EX SR70801	残存長 22.1 残存最大幅 1.4 厚さ 0.6	上部が欠落している。幅は1mmと狭く、厚さは6mmと若干削めである。下端部は直線的で角部に切り落としている。横断面はレンズ状を成す。	若干削めの粗目の棒状板を加工している。側面の角を削り落として整形している。	板 目	板 (ス ギ)
51	薪 串	W 397 9EX SR29303 ～ SR29305	残存長 27.3 薪存幅 1.7 厚さ 0.4	柵串の下部から中央部にかけて残存しており、上部及び左側の一部を欠いている。尖らした先端が鋭いていた。これぞ「ささ」とは言ふが、全く、全体的に直角的な角部である。しかし、左側面の角部は削り落としている。上部は直線衣面のSRT0801～SRT0803のよう無次級横筋、柱目どりの棒状板といふ。本来はD型に属する形状を示していたと推測する。	軽薄いスギの板材を鋭利な刃物で直線的に切り落とし、加工している。特に下端は鋭利に尖らせ、その上に刃で突き刺す意図で尖らせている様に觀察できる。	板 目	板 (ス ギ)
52	薪 串	W 930 1EX SR29202 ～ SR29303	残存長 32.9 最大幅 2.8 厚さ 0.9	上部が欠落している。下部に半折になっている跡がある。裏面は直角衣面に削り落とされている。D型に属する形状を想起させるが、裏面は直角衣面に削り落とす方が上の可能性もある。下端の角を削り落とした。	裏面は凸凹が若干あるものの、表面は平滑な仕上がりになっている。下端は両側より锐利な刃物で直線的に切り落としている。	板 目	板 (ス ギ)
53	薪 串	W 120 10EX 145番	残存長 41.5 最大幅 3.0 厚さ 0.8	上部が欠落している。下端部に観察する所と下方が斜めに削り落とされた跡がある。左側面は直角衣面で右側面から削り落したものと見られる。下端部は次級幅狭である。厚さは6mmあり、この手の棒状板としてはやや厚めである。下端の方50mm中央部に比して若干削れがある。	表面、裏面とも平滑である。横断面はどこをとっても直角衣面で削り落としている。横断面は直角衣面で削り落としている。刃の切り込みは、からんで力を入れ、少し匕方に弯曲させながら入れていている。	板 目	板 (ス ギ)
54	薪 物	W 141 5EX 8番水田	全长 9.5 最大幅 2.1 最大厚 1.0	裏面は平滑であるが、表面は立体的に、上部は直角衣面に作られたが、下部は直角衣面に削り落としている。左側面より下端まで直角衣面も部分的に削り落としている。下端部は部分的に残存しているため全長は推定できる。全体的に直角衣面である。	表面は摩滅しているため調査等の刃端はあまり観察できなかったが、ただ削れた部分はよく、つまり削り込みを入れ、有効に寸法を定めた部分より裏面に刃端を下へ切り落とす作業が行なわれている。	板 目	板 (ス ギ)
55	1 チ ュ ア 棒	W 165 4EX 10番上	全长 11.3 最大幅 1.0 厚さ 0.8	僅か11.3mmの厚の形をした木製品である。削りを作り出し、下端に同じく直角衣面で削り落としている。横断面はレンズ状にない、下端は半円形で削り落としている。横断面を模したミニチュア製品と考える。	スギの粗目の板材を精巧に加工している。削りの部分、側面、下端部は特に何度も刃を入れた痕が残る。	板 目	板 (ス ギ)

第71表 制物觀察表

No	器種	器型	地区	層位・遺構	登録番号	時 代	縦幅 (cm)	横幅 (cm)	高さ (cm)	推定容積 (c m <sup>3</sup> )	樹種	木取り	備 考
1	制物	楕円形	2・3	12層	W-505	弥後後～古前	(50.5)	(30.6)	8.3	—	(スギ)	板目	穿孔あり
2	制物	楕円形	8	17層	W-515	弥後後～古前	59.0	(16.2)	5.6	—	(スギ)	板目	—
3	制物	楕円形	9	38層	W-2233	弥後後～古前	30.5	17.4	5.6	618.4	(スギ)	板目	穿孔あり 丸底
4	制物	楕円形	6	16層	W-2739	弥後後～古前	(28.0)	(11.5)	8.6	—	(スギ)	通版目	内面に焼痕
5	制物	楕円形	2・3	10層SR21901	W-83	古墳中期	30.1	(13.6)	(3.5)	—	(スギ)	板目	底部のみ残存
6	制物	楕円形	1	22層SK12201	W-1672	弥後後～古前	(27.2)	(11.2)	2.3	—	(スギ)	板目(木表)	底部のみ残存
7	制物	楕円形	5	15層	W-333	弥中後～弥後初	(24.8)	(5.4)	4.4	—	(スギ)	板目	—
8	制物	楕円形	5	15層	W-331	弥中後～弥後初	(25.2)	(8.9)	5.0	—	(スギ)	通版目	内面に焼痕
9	制物	楕円形	9	38層	W-1790	弥後後～古前	(17.6)	(7.6)	2.8	—	(スギ)	通版目	—
10	制物	楕円形	9	SR83301	W-1163	奈良・平安・中世	18.4	(6.3)	6.1	—	(スギ)	通版目	内面に縫あり
11	制物	長方形	10	21層	W-178	平安	62.2	(6.4)	7.5	—	(スギ)	板目	—
12	制物	長方形	2・3	6層SK20601	W-47	平安	53.3	(19.2)	6.5	—	(スギ)	板目(木表)	内底に刃傷あり
13	制物	長方形	9	SR95502	W-758	奈良・平安・中世	36.6	(8.1)	5.3	—	(スギ)	板目(木表)	内底面縮小
14	制物	長方形	1	SR12201	W-63	奈良・平安	34.4	22.4	6.9	2593.4	(スギ)	板目(木表)	—
15	制物	長方形	9	SR32502	W-706	奈良・平安・中世	32.7	(13.0)	4.1	—	(スギ)	板目(木表)	—
16	制物	長方形	7	SR70801	W-411	6 C 後～8 C	30.0	19.8	7.9	1946.7	(スギ)	板目(木表)	—
17	制物	長方形	1	SR12201	W-60	奈良・平安	28.7	(10.9)	5.4	—	(スギ)	板目(木表)	内面に焼痕
18	制物	長方形	7	SR70801	W-235	6 C 後～8 C	29.2	(6.8)	6.8	—	(スギ)	板目(木表)	—
19	制物	長方形	1	20層	W-57	奈良・平安	(21.4)	11.6	5.2	—	(スギ)	板目(木表)	外面上に焼痕
20	制物	長方形	7	SR70801	W-700	5 C 後～8 C	19.7	(10.0)	4.8	—	(スギ)	板目(木表)	—
21	制物	長方形	7	7層SD70701	W-27	奈良・平安	19.2	(6.9)	6.7	—	(スギ)	板目(木表)	内底面縮小
22	制物	長方形	7	7層SD70701	W-21	奈良・平安	16.3	11.7	4.4	258.4	(スギ)	板目(木表)	—
23	制物	長方形	7	SR70801	W-545	6 C 後～8 C	15.0	11.3	4.5	279.6	(スギ)	板目(木表)	—
24	制物	長方形	9	SR83301	W-1285	奈良・平安・中世	16.1	9.0	2.5	153.4	(スギ)	板目(木表)	内面に焼痕
25	制物	長方形	9	33層	W-1330	奈良・平安・中世	15.9	8.4	4.9	228.5	(スギ)	板目(木表)	—
26	制物	長方形	9	SR92502	W-816	奈良・平安・中世	(15.8)	(7.5)	3.4	—	(スギ)	板目(木表)	—
27	制物	長方形	7	SR70801	W-66	6 C 後～8 C	16.2	(3.0)	3.9	—	(スギ)	板目(木表)	内面に焼痕
28	制物	長方形	7	SR70801	W-413	6 C 後～8 C	16.0	(5.3)	4.0	—	(スギ)	板目(木表)	—
29	制物	長方形	1	SR12201	W-106	奈良・平安	14.6	(3.4)	3.4	—	(スギ)	通版目	内面に焼痕
30	制物	長方形	8	16層	W-316	古中	13.7	(6.7)	4.5	—	(スギ)	板目(木表)	内面に焼痕
31	制物	長方形	7	SR70801	W-216	6 C 後～8 C	10.3	(2.5)	4.0	—	(スギ)	板目(木表)	—
32	制物	長方形	7	SR70801	W-419	6 C 後～8 C	17.2	10.7	3.2	158.5	(スギ)	板目(木表)	内面に焼痕
33	制物	長方形	7	SR70801	W-215	6 C 後～8 C	12.5	(4.9)	5.0	—	(スギ)	板目(木表)	内面に焼痕
34	制物	長方形	7	SR70801	W-203	6 C 後～8 C	(12.2)	(3.9)	4.1	—	(スギ)	板目(木表)	—
35	制物	長方形	7	SR70801	W-121	6 C 後～8 C	25.6	(16.0)	7.7	—	(スギ)	板目(木表)	側壁肥厚
36	制物	長方形	7	SR70801	W-671	6 C 後～8 C	(53.5)	(30.0)	3.2	—	(スギ)	板目	平面半円座
37	制物	長方形	7	SR70801	W-42	6 C 後～8 C	22.8	28.5	13.3	2782.9	(スギ)	通版目	把手付円形容器

縦幅・横幅・高さの( )は残存長を示す。

第72表 高杯觀察表

No	器種	地 区	層位・遺構	登録番号	時 代	最大径	最大高	樹種	木取り	備 考
1	高 杯	5	13層堆	W-417	弥中後～弥後初	(19.4)	(15.8)	(スギ)	板目	脚部～支柱部残存

第73表 曲物観察表

No.1

No.	器種	地区	層位・地層	登録番号	復元 最大径(cm)	厚さ(cm)	残存状態(%)	板種	接合方法	備考
1	ダエニ形	5	10層	W205	74.3	3.2	完形	(スギ)		2つに割れ
2	カキゾコ	7	S R70801	W38	17.8	1.1	完形	(スギ)	カバ縫あり	側板残存高1.9cm
3	カキゾコ	9	S R92501	W657	15.8	0.6	完形	(スギ)	カバ縫あり	側板残存高6.5cm
4	カキゾコ	9	S R92501	W535	15.7	0.8	完形	(スギ)	カバ縫あり	側板高5.0cm
5	カキゾコ	7	S R70801	W763	25.7	1.0	41	(スギ)		
6	カキゾコ	9	S R92501	W799	25.1	0.8	46	(スギ)		
7	カキゾコ	8	17a層	W1450	23.0	1.1	17	(スギ)		
8	カキゾコ	1	S R12001	W61	22.4	1.0	18	(スギ)		
9	カキゾコ	1	S R12001	W587	21.4	1.0	22	(スギ)		
10	カキゾコ	8	14b層	W361	21.1	1.1	47	(スギ)	カバ縫あり	
11	カキゾコ	9	S R92501	W801	20.0	0.8	38	(スギ)	カバ縫あり	
12	カキゾコ	1	S R12001	W150	19.8	1.1	83	(スギ)	カバ縫あり	2つに分割
13	カキゾコ	10	15層	W233	18.7	0.8	42	(スギ)	カバ縫あり	
14	カキゾコ	7	S R70801	W193	18.7	0.8	29	(スギ)		
15	カキゾコ	9	S R92501	W756	18.1	1.0	20	(スギ)		
16	カキゾコ	7	S R70801	W111	18.1	0.5	8	(スギ)		
17	カキゾコ	7	S R70801	W62	17.6	0.4	23	(スギ)		
18	カキゾコ	6	11層	W25	17.6	0.9	48	(スギ)		
19	カキゾコ	1	S R12001	W422	17.2	1.1	63	(スギ)	カバ縫あり	
20	カキゾコ	9	S R92501	W534	17.1	0.8	15	(スギ)		
21	カキゾコ	7	S R70801	W715	16.9	0.6	36	(スギ)	カバ縫あり	
22	カキゾコ	7	S D71201	W938	16.8	0.5	30	(スギ)		
23	カキゾコ	1	S R12001	W59	16.6	0.9	20	(スギ)	カバ縫あり	木釘痕あり
24	カキゾコ	9	S R92501	W723	16.5	0.6	66	(スギ)		
25	カキゾコ	2-3	6層	W11	16.5	1.2	41	(スギ)		
26	カキゾコ	5	11層	W11	16.3	0.5	32	(スギ)	カバ縫あり	
27	カキゾコ	7	S R70801	W784	16.3	0.9	38	(スギ)		
28	カキゾコ	7	S R70801	W786	16.3	0.8	22	(スギ)		
29	カキゾコ	9	S R92501	W719	16.0	0.7	19	(スギ)		
30	カキゾコ	7	S R70801	W579	15.9	0.8	71	(スギ)	カバ縫あり	2つに分割
31	カキゾコ	7	S R70801	W537	15.8	1.0	94	(スギ)	カバ縫あり	
32	カキゾコ	9	S R92501	W703	15.7	0.7	41	(スギ)	カバ縫あり	2つに分割
33	カキゾコ	1-3	8層	W54	15.6	0.8	36	(スギ)	カバ縫あり	
34	カキゾコ	5	8層	W168	15.2	0.5	24	(スギ)	カバ縫あり	
35	カキゾコ	7	不明	W12	15.2	0.5	16	(スギ)		
36	カキゾコ	6	13層	W10	15.1	0.9	45	(スギ)	カバ縫あり	
37	カキゾコ	7	S D70701	W17	14.9	0.7	69	(スギ)	カバ縫あり	木釘痕あり
38	カキゾコ	7	S R70801	W686	14.7	0.7	66	(スギ)	カバ縫あり	
39	カキゾコ	9	S R92501	W533	14.5	0.6	14	(スギ)		
40	カキゾコ	9	不明	W531	14.4	0.7	28	(スギ)		
41	カキゾコ	5	6層	W32	14.0	0.7	29	(スギ)	カバ縫あり	2つに分割
42	カキゾコ	9	S R92201	W396	13.6	0.6	27	(スギ)	カバ縫あり	
43	クレゾコ	9	S R92501	W712	20.0	0.5	完形	(スギ)	木釘痕あり	残存側板実測不能
44	クレゾコ	9	S R92501	W623	12.3	0.5	完形	(スギ)	木釘痕あり	残存側板実測不能
45	クレゾコ	9	S R92201	W446	31.4	1.1	15	(スギ)	木釘痕あり	
46	クレゾコ	9	S R93301	W1742	30.8	0.4	36	(スギ)	木釘痕あり	
47	クレゾコ	7	S R70801	W56	29.6	0.9	8	(スギ)	木釘痕あり	
48	クレゾコ	9	S R92501	W687	26.2	0.6	27	(スギ)	木釘痕あり	
49	クレゾコ	9	S R92501	W894	25.8	0.5	20	(スギ)	木釘痕不明	
50	クレゾコ	7	S R70801	W466	25.5	0.9	33	(スギ)	木釘痕あり	

No.	器種	地区	部位・遺構	登録番号	復元 最大径(cm)	厚さ(cm)	残存状態(%)	樹種	接合方法	備考
51	クレゾコ	7	中央裏面トレンチ	W1	23.7	0.8	18	(スキ)	木釘痕不明	
52	クレゾコ	6	11層	W12	23.5	0.8	16	(スキ)	木釘痕あり	
53	クレゾコ	8	11層	W170	23.2	1.3	22	(スキ)	木釘痕あり	
54	クレゾコ	7	S R70801	W593	22.5	1.0	39	(スキ)	木釘痕不明	
55	クレゾコ	7	S R70801	W471	22.4	0.9	22	(スキ)	木釘痕不明	
56	クレゾコ	9	S R92502~ S R92503	W483	21.5	0.9	32	(スキ)	木釘痕不明	
57	クレゾコ	9	S R93301	W1166	21.7	0.7	39	(スキ)	木釘痕あり	5つの破片より成る
58	クレゾコ	5	砂壁裏	W1	21.2	1.0	29	(スキ)	木釘痕あり	
59	クレゾコ	8	7a層	W690	21.0	0.9	11	(スキ)	木釘痕 輪廓不能	
60	クレゾコ	9	S R92501	W713	19.7	0.7	45	(スキ)	木釘痕不明	
61	クレゾコ	5	8層水田	W128	19.6	1.0	29	(スキ)	木釘痕あり	
62	クレゾコ	8	15層	W292	18.8	1.0	30	(スキ)	木釘痕あり	
63	クレゾコ	10	18層	W245	18.5	1.0	89	(スキ)	木釘痕あり	4つの破片に分割
64	クレゾコ	9	S R92501	W698	18.0	0.8	40	(スキ)	木釘痕不明	2つに分割
65	クレゾコ	7	S R70801	W254	17.5	0.5	50	(スキ)	木釘痕不明	
66	クレゾコ	7	S R70801	W87	17.6	0.6	21	(スキ)	木釘痕不明	
67	クレゾコ	9	S R92501	W695	17.3	0.7	59	(スキ)	木釘痕あり	
68	クレゾコ	7	S R70801	W626	17.2	0.7	23	(スキ)	木釘痕あり	
69	クレゾコ	7	S R70801	W292	17.1	0.7	39	(スキ)	木釘痕あり	
70	クレゾコ	7	S R70801	W769	16.9	0.7	10	(スキ)	木釘痕あり	
71	クレゾコ	9	S R93301	W1273	16.8	1.0	35	(スキ)	木釘痕 輪廓不能	
72	クレゾコ	9	S R92501	W655	16.8	0.5	48	(スキ)	木釘痕不明	2つに分割
73	クレゾコ	7	S R70801	W439	16.7	1.0	完形	(スキ)	木釘痕あり	2つに分割
74	クレゾコ	9	S R93301	W1582	16.6	1.1	92	(スキ)	木釘痕あり	2つに分割
75	クレゾコ	9	S R93301	W1326	16.6	1.1	28	(スキ)	木釘痕あり	
76	クレゾコ	7	S R70801	W573	16.4	0.7	57	(スキ)	木釘痕あり	
77	クレゾコ	9	S R92501	W718	16.3	0.9	60	(スキ)	木釘痕あり	
78	クレゾコ	9	S R92201	W336	15.8	0.9	48	(スキ)	木釘痕あり	2つに分割
79	クレゾコ	9	S R93301	W1164	15.7	1.0	75	(スキ)	木釘痕あり	
80	クレゾコ	7	S R70801	W58	15.7	0.7	27	(スキ)	木釘痕あり	
81	クレゾコ	7	南北排水溝	W11	15.6	0.9	90	(スキ)	木釘痕不明	2つに分割
82	クレゾコ	7	S R70801	W683	15.5	0.6	38	(スキ)	木釘痕あり	
83	クレゾコ	7	S R70801	W566	15.4	0.8	56	(スキ)	木釘痕あり	
84	クレゾコ	7	S R70801	W515	15.4	0.8	82	(スキ)	木釘痕あり	2つに分割
85	クレゾコ	7	6層砂層	W15	15.3	0.4	50	(スキ)	木釘痕不明	2つに分割
86	クレゾコ	8	15層	W189	15.2	0.5	71	(スキ)	木釘痕不明	6つの破片より成る
87	クレゾコ	6	10層	W5	14.6	0.7	9	(スキ)	木釘痕 輪廓不能	
88	クレゾコ	9	20層水田	W291	14.5	1.5	31	(スキ)	木釘痕あり	
89	クレゾコ	9	S R92501	W1040	14.4	0.8	38	(スキ)	木釘痕あり	
90	クレゾコ	10	8層	W34	14.3	0.8	26	(スキ)	木釘痕 輪廓不能	
91	クレゾコ	1	10層	W24	14.0	1.1	67	(スキ)	木釘痕不明	
92	クレゾコ	1	10層	W6	13.9	1.0	24	(スキ)	木釘痕不明	
93	クレゾコ	5	淡黄白色層	W73	13.6	1.0	30	(スキ)	木釘痕あり	
94	クレゾコ	9	S R92501	W599	13.1	0.8	完形	(スキ)	木釘痕あり	
95	クレゾコ	7	S R70801	W660	12.8	1.0	完形	(スキ)	木釘痕あり	
96	クレゾコ	9	S R93301	W1240	12.7	0.6	44	(スキ)	木釘痕あり	
97	クレゾコ	9	S R93301	W1675	12.6	0.9	完形	(スキ)	木釘痕あり	
98	クレゾコ	8	11層	W191	12.5	0.8	64	(スキ)	木釘痕あり	2つに分割
99	クレゾコ	7	S R70801	W590	12.4	0.6	44	(スキ)	木釘痕あり	

No.	器種	地区	層位・連構	登録番号	草元 最大径(cm)	厚さ(cm)	残存状態(%)	樹種	接合方法	備考	
										(cm)	
100	クレゾコ	7	S R70801	W363	12.4	0.7	55	(スギ)	木割痕あり		
101	クレゾコ	9	S R92501	W795	12.4	0.7	65	(スギ)	木割痕あり		
102	クレゾコ	1	13層	W33	12.1	0.8	25	(スギ)	木割痕あり		
103	クレゾコ	9	S R93301	W1676	12.0	1.1	73	(スギ)	木割痕不明		
104	クレゾコ	9	S R92501	W810	12.0	0.9	完形	(スギ)	木割痕あり		
105	クレゾコ	9	S R92501	W708	12.0	0.7	30	(スギ)	木割痕あり		
106	クレゾコ	6	11層	W38	12.0	0.6	完形	(スギ)	木割痕あり	5つの破片より成る	
107	クレゾコ	7	S R70801	W365	11.9	0.9	完形	(スギ)	木割痕あり		
108	クレゾコ	9	S R92501	W778	11.8	0.9	65	(スギ)	木割痕あり		
109	クレゾコ	1	不明	W86	11.6	1.1	完形	(スギ)	木割痕あり		
110	クレゾコ	9	S R92501	W803	11.7	0.6	41	(スギ)	木割痕 観察不能		
111	クレゾコ	7	S R70801	W581	11.2	0.7	91	(スギ)	木割痕 観察不能		
112	クレゾコ	7	S R70801	W728	11.3	0.6	46	(スギ)	木割痕あり		
113	クレゾコ	7	S R70801	W735	11.1	0.5	66	(スギ)	木割痕あり		
114	クレゾコ	10	9層	W50	11.1	0.6	50	(スギ)	木割痕あり	2つに分割	
115	クレゾコ	7	S R70801	W89	11.0	0.7	35	(スギ)	木割痕 観察不能		
116	クレゾコ	9	S R93301	W1298	10.8	0.5	57	(スギ)	木割痕あり		
117	クレゾコ	7	S R70801	W54	10.4	0.7	48	(スギ)	木割痕あり		
118	クレゾコ	7	S R70801	W299	10.2	0.9	94	(スギ)	木割痕あり	2つに分割	
119	クレゾコ	7	S R70801	W512	9.9	0.9	82	(スギ)	木割痕あり		
120	クレゾコ	7	S R70801	W55	9.7	0.6	49	(スギ)	木割痕あり		
121	クレゾコ	7	S R70801	W228	9.6	0.5	60	(スギ)	木割痕あり		
122	クレゾコ	1	S R12001	W178	8.9	0.8	完形	(スギ)	木割痕不明		
123	クレゾコ	1	不明	W94	8.7	0.5	39	(スギ)	木割痕不明		
124	クレゾコ	7	S R70801	W300	8.3	1.3	84	(スギ)	木割痕あり		
125	クレゾコ	9	S R92501	W814	6.9	1.3	完形	(スギ)	木割痕あり		
126	クレゾコ	2+3	6層	W20	40.0	0.6	9	(スギ)	木割痕不明		
127	クレゾコ	8	14b層	W280	32.9	0.9	18.4	(スギ)	木割痕不明		
128	クレゾコ	7	S R70801	W189	33.3	0.9	42	(スギ)	木割痕あり		
129	クレゾコ	9	S R92501	W664	—	0.6	—	(スギ)	木割痕不明		
130	クレゾコ	6	6層	W6	—	0.8	—	(スギ)	木割痕不明		
131	クレゾコ	7	S R70801	W750	10.9	0.8	47	(スギ)	木割痕あり		
132	クレゾコ	7	S R70801	W45	12.3	1.7	完形	(スギ)	木割痕不明		
133	クレゾコ	9	S R92501	W722	15.1	2.5	58	(スギ)	木割痕不明		
134	側板	9	S R93301	W1353	0.4	—	(スギ)	木割痕あり			
135	側板	7	S R70801	W762	0.3	—	(スギ)				
136	側板	10	18層	W247	0.4	—	(スギ)				
137	側板	9	S R92201	W340	0.5	—	(スギ)				
138	側板	9	S R92501	W414	0.7	—	(スギ)				
139	側板	9	S R93301	W1227	0.3	—	(スギ)				
140	側板	9	S R92501	W506	0.3	—	(スギ)				
141	側板	9	S R92201	W382	0.7	—	(スギ)				
142	側板	9	20層	W121	0.9	—	(スギ)				
143	側板	7	S R70801	W222	0.5	—	(スギ)				
144	側板	7	S R70801	W220	0.3	—	(スギ)				
145	側板	9	S R93301	W1677	0.4	—	(スギ)	木割痕あり			
146	側板	5	8層水田	W168	—	0.5	—	(スギ)			

第74表 换物被覆表

No.	番号	地区	部位・連絡	登録番号	底元最大径(cm)	内寸人径(cm)	底面径(cm)	高さ(cm)	内(cm)	難容横(cm)	樹種	木取り	備考
1	楠	7	SR70801	W237	15.0	14.0	9.0	3.6	2.3	250.1	ヒノキ	横木取り延目	
2	楠	5	8層	W152	13.5	12.4	8.4	2.7	2.0	176.1	ヒノキ	横木取り延目	
3	楠	7	SR70801	W522	13.6	13.0	8.0	2.9	2.1	192.1	ヒノキ	横木取り延目	
4	楠	9	SR92501	W709	13.0	12.6	8.0	3.4	2.0	163.2	ヒノキ	横木取り延目	
5	楓	7	SR70801	W473	20.2	19.8	17.0	3.0	1.5	401.0	スギ	横木取り板目	
6	楓	9	SR92501	W813	22.3	21.0	27.6	2.9	1.7	1149.5	スギ	横木取り延目	
7	楓	7	SR70801	W223	22.9	22.0	20.0	1.4	0.9	312.3	ヒノキ	横木取り延目	
8	楓	7	SR70801	W436	—	—	19.8	—	—	—	ヒノキ	横木取り延目	
9	楓	9	SR92501	W658	22.3	21.3	19.0	1.7	1.0	318.1	ヒノキ	横木取り延目	
10	楓	7	SR70801	W716	21.0	20.4	18.6	1.9	1.0	299.2	ヒノキ	横木取り延目	
11	楓	7	SR70801	W787	21.5	20.9	18.5	1.4	0.8	247.1	ヒノキ	横木取り延目	
12	楓	7	SR70801	W721	17.7	17.1	17.7	1.0	0.2	47.5	ヒノキ	横木取り延目	
13	楓	7	SR70801	W368	20.8	20.0	17.6	0.7	0.4	1114	ヒノキ	横木取り延目	
14	楓	7	東西トレーナ	W19	19.3	19.1	17.4	2.1	1.4	369.0	スギ	横木取り延目	
15	楓	9	SR93301	W1359	19.5	19.3	17.0	1.2	0.6	154.9	ヒノキ	横木取り延目	
16	楓	9	SR93301	W1263	19.3	18.8	17.0	1.3	0.7	176.5	ヒノキ	横木取り延目	
17	楓	7	SR70801	W59	19.3	18.7	16.9	1.3	0.7	176.5	ヒノキ	横木取り延目	
18	楓	7	SR70801	W227	—	—	16.8	—	—	—	ヒノキ	横木取り延目	
19	楓	2	6層	W14	19.0	18.6	16.6	1.1	0.7	170.8	ヒノキ	横木取り延目	
20	楓	7	SR70801	W738	—	—	16.6	—	—	—	ヒノキ	横木取り延目	
21	楓	7	SR70801	W688	18.8	18.4	16.4	1.4	0.4	95.4	ヒノキ	横木取り延目	
22	楓	7	SR70801	W1097	17.8	17.4	16.2	1.3	0.4	88.7	ヒノキ	横木取り延目	
23	楓	9	SR92501	W767	18.1	17.8	16.2	1.1	0.7	166.1	ヒノキ	横木取り延目	
24	楓	9	SR93301	W1228	18.2	18.8	16.0	1.6	0.8	191.4	ヒノキ	横木取り延目	
25	楓	9	SR92501	W776	18.2	17.6	16.0	1.0	0.6	133.3	ケヤキ	横木取り延目	
26	楓	9	不明	W480	18.8	18.6	16.0	1.6	0.8	189.0	ヒノキ	横木取り延目	
27	楓	7	SR70801	W693	17.8	17.6	15.6	1.1	0.6	130.3	ヒノキ	横木取り延目	
28	楓	7	SR70801	W785	17.2	—	15.6	—	—	—	ヒノキ	横木取り延目	
29	楓	9	SR92501	W707	17.8	17.3	15.0	1.3	0.6	122.6	ヒノキ	横木取り延目	
30	楓	7	SR70801	W202	17.1	—	15.0	—	—	—	ヒノキ	横木取り延目	
31	楓	9	SR93301	W1241	—	—	15.0	—	—	—	ケヤキ	横木取り延目	
32	楓	7	SR70801	W687	17.2	17.0	14.8	1.4	0.5	99.7	ヒノキ	横木取り延目	
33	楓	7	SR70801	W519	—	—	14.3	—	—	—	ヒノキ	横木取り延目	
34	楓	7	SR70801	W40	17.8	17.0	14.6	1.4	0.8	157.7	ヒノキ	横木取り延目	
35	楓	8	14番樋	W268	16.9	16.4	14.5	0.7	0.1	18.9	ヒノキ	横木取り延目	
36	楓	7	SR70801	W523	17.3	17.5	14.5	1.2	0.4	80.1	ヒノキ	横木取り延目	
37	楓	7	SR70801	W578	16.4	16.0	14.3	1.2	0.4	74.8	ヒノキ	横木取り延目	
38	楓	1	SK12202	W743	18.0	17.4	14.2	1.7	0.9	178.2	ヒノキ	横木取り延目	
39	楓	7	SR70801	W773	16.7	16.3	14.2	0.9	0.7	129.3	ヒノキ	横木取り延目	
40	楓	2	6層	W13	15.6	15.6	14.0	1.1	0.4	69.0	ヒノキ	横木取り延目	
41	楓	9	SR93301	W1282	15.3	15.1	13.3	1.2	0.4	64.5	ヒノキ	横木取り延目	
42	楓	7	SR70801	W521	—	—	13.2	—	—	—	ヒノキ	横木取り延目	
43	楓	7	SR70801	W580	—	—	13.0	—	—	—	ヒノキ	横木取り延目	
44	楓	9	SR92501	W406	14.8	14.2	12.2	1.6	0.6	82.5	ヒノキ	横木取り延目	
45	楓	10	19層	W236	16.6	16.0	11.8	1.4	0.6	93.1	ヒノキ	横木取り延目	
46	楓	7	SR70801	W729	13.0	12.3	11.2	0.9	0.4	44.6	ヒノキ	横木取り延目	
47	楓	9	SR93301	W1680	8.8	8.0	6.6	1.7	0.3	12.7	スギ	横木取り延目	
48	楓	9	SR93301	W756	8.9	7.5	6.6	0.9	0.5	19.6	ヒノキ	横木取り延目	

第75表 塗器観察表

No	登録番号	区	層	造形	木取り	後元口徑 (cm)	器高 (cm)	剖面	高台	外面文様	内面文様	備考
1	W477	9	22層内		横木板目	14.8	4.8	シオジ	有	朱書で花卉文様 朱書で植物・山 を描く。	朱書で植物・山 を描く。	北野レポートの1
2	W476	9	22層		横木板目	17.4	6.5	ケヤキ	有	朱書で桜の花卉 文様	朱書で桜の花卉 文様	北野レポートの6
3	W2	6	河道壁面		横木板目	14.8	6.5	ケヤキ	有	無	無	北野レポートの3
4	W8	6	9層内		横木板目	18.0	(5.9)	ムクロジ	有	朱書で記号状の 文様	朱書で家紋状の 文様を描く。	北野レポートの5
5	W4	2・3	4層		横木板目	14.0	(2.6)	シオジ	有	無	無	北野レポートの8
6	W1	8	5層		横木板目	16.4	6.9	ハルニレ	有	無	無	北野レポートの2
7	W32	1	3層上面		横木板目	16.0	(4.6)	ハリギリ	不明	無	無	北野レポートの4
8	W2	2・3	3層		横木板目	14.4	(3.3)	シオジ	不明	無	無	北野レポートの7
9	W9	7	2層 杭列内		横木板目	—	(1.3)	シオジ	不明	無	無	北野レポートの12
10	W416	9		SR92508 ～93303	横木板目	—	(1.1)	ケヤキ	不明	無	無	北野レポートの10
11	W420	9		SR92502 ～93303	横木板目	9.5	(1.0)	ケヤキ	不明	無	無	北野レポートの11
12	W55	10	9層直上		横木板目	—	(0.9)	カツラ	不明	無	朱の文様底が残 る。	北野レポートの9

第76表 審観察表

No.	登録番号	区	層	造様	長さ(cm)	断面形	断面径(cm)	樹種	折れの有無	備考
1	W704	9		SR92501	28.9 (23.3)	円形	0.7 0.5	(スギ) (スギ)	無 無	完形である。一方の先端部は尖らせていない。
2	W38	10	9		23.3	円形	0.5	(スギ)	無	両先端部を尖せている。
3	W8	2・3	5		20.6 (20.3)	圓丸	0.5 0.5	(スギ) (スギ)	無 有	両先端部を尖せている。
4	W3	1	3		19.0 (18.0)	圓丸	0.5 0.5	(スギ) (スギ)	無	両先端部を尖せている。
5	W39	10	8		16.7	圓丸	0.3	(スギ)	無	両先端部を尖せている。
6	W5	1	3		15.6	方形	0.5	(スギ)	有	両先端部を尖せている。
7	W5①	5	2	SR92501	16.9	円形	0.7	(スギ)	有	細い作りである。
8	W800②	9		SR70801	16.7	圓丸	0.3	(スギ)	無	
9	W113	7		SR70801	15.6	方形	0.5	(スギ)	有	2ヶ所に折れが観察できる。
10	W25	1	10		15.0	方形	0.4	(スギ)	有	
11	W40	5			14.9	方形	0.4	(スギ)	有	
12	W800③	9		SR92501	14.9	円形	0.8	(スギ)	無	太めの頑強な作りである。
13	W22	2・3	3		14.1	圓丸	0.6	(スギ)	有	
14	W22	5	3		13.8	圓丸	0.4	(スギ)	有	
15	W460	9	22		12.8	圓丸	0.4	(スギ)	無	細い作りである。
16	W15①	5	3		11.7	圓丸	0.6	(スギ)	無	
17	W5	2・3	4		9.8	円形	0.6	(スギ)	無	先端部の加工が丁寧である。
18	W5②	5	2		9.5	圓丸	0.5	(スギ)	無	
19	W23	1	10		9.3	圓丸	0.8	(スギ)	無	
20	W54	10	8		8.9	圓丸	0.5	(スギ)	無	先端部が扁平である。
21	W3	5	2		8.7	圓丸	0.6	(スギ)	無	
22	W4	1	3		8.2	方形	0.8	(スギ)	無	
23	W15②	5	2		6.3	円形	0.5	(スギ)	無	
24	W5③	5	3		5.7	方形	0.5	(スギ)	無	
25	W7	5	3		4.0	圓丸	0.5	(スギ)	無	

第77表 火継白・火継件観察表

No.	登録番号	区	層	造様	長さ(cm)	幅(cm)	割み目数	樹種	形態
1	W27	5	5層		(22.6)	(2.3)	2	(スギ)	棒状の火継臼である。割み目は観察できないが、焼痕がある。ウスが2箇所ある。
2	W313	8	15層		(20.6)	2.4	2	(スギ)	棒状の火継臼である。割み目が入れられているが、ウス状に受けが明瞭でない。
3	W37	10	9層		(14.1)	4.7	6	(スギ)	板状の火継臼である。残存状態のよいウスには割み目は観察できる。
4	W417	9		SR92502 ~93303	(12.7)	2.8	3	(スギ)	板状の板状の火継臼である。割み目のあるウスが3箇所、ないウスが1箇所ある。
5	W82	5		SR50801 残存部	(8.7)	1.3	3	(スギ)	棒状の火継臼である。全体に焼痕が観察でき、1度全体を焼がしたのであろう。
6	W318	8	15層		(19.2)	1.4	火継件	(スギ)	断面が円形で、一方の先端が丸く厚縮し、焼痕が残っている。

第78表 1区 22層 S K 12202

No.	登録番号	全長[m]	最大幅[m]	厚さ[m]	重量(t)	木取り	樹 種	横断面形	下端形状	地上部長[m]	地下部長[m]	備 考
1	W2163	21.0	5.2	4.0	182	芯持材	ミソツキ材	円 形	V字形	-25.0	-	
2	W2070	37.4	5.9	4.0	550	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	-2.0	-	
3	W2071	27.6	6.9	2.9	236	ミカン	ツブラジイ	長方形	V字形	-31.0	-	
4	W2072	36.4	5.9	4.0	394	芯持材	ミソツキ材	円 形	不 明	-30.0	-	
5	W2146	45.3	5.9	4.2	583	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	2.0	43.3	
6	W2073	38.2	5.9	2.9	262	芯持材	ミソツキ材	円 形	不 明	-22.0	-	
7	W2074	39.4	4.7	3.2	190	芯持材	ツブラジイ	円 形	不 明	-23.0	-	
8	W2075	46.2	5.0	2.7	222	芯持材	ミソツキ材	円 形	不 明	-24.0	-	
9	W2076	35.5	6.5	3.4	492	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	-2.0	-	
10	W2077	40.8	3.7	2.9	270	芯持材	ミソツキ材	円 形	不 明	-28.0	-	
11	W2078	39.5	4.4	2.4	193	芯持材	ツブラジイ	不定形	不 明	-22.0	-	
12	W2079	50.0	5.1	3.7	415	芯持材	ミソツキ材	円 形	不 明	-25.0	-	
13	W2141	48.5	6.3	4.2	582	ミカン	(スギ)	不定形	不 明	-1.0	-	
14	W2140	57.5	5.5	4.2	1029	ミカン	(スギ)	正方形	不 明	1.0	56.5	
15	W2139	61.3	9.2	2.8	631	ミカン	(スギ)	長方形	不 明	-2.0	-	
16	W2080	48.7	5.1	4.5	633	芯持材	ミソツキ材	円 形	不 明	-22.0	-	
17	W2144	30.9	4.6	3.0	217	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	-9.0	-	
18	W2137	28.4	5.4	2.5	156	ミカン	(スギ)	扇 形	不 明	-36.0	-	
19	W2138	50.3	6.3	4.5	761	ミカン	スダジイ	扇 形	不 明	-24.0	-	
20	W2143	37.3	4.1	2.7	198	ミカン	(スギ)	正方形	V字形	-15.0	-	
21	W2142	30.0	7.6	4.0	316	ミカン	カスミザクラ	扇 形	不 明	-26.0	-	
22	W2092	39.9	4.2	2.9	270	芯持材	ミソツキ材	円 形	不 明	-36.0	-	
23	W2093	31.1	4.6	2.5	127	ミカン	ツブラジイ	扇 形	不 明	-38.0	-	
24	W2094	47.0	5.1	4.1	605	芯持材	ミソツキ材	円 形	不 明	-34.0	-	
25	W2145	34.4	4.6	4.6	425	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	-29.0	-	
26	W2095	31.6	5.5	3.4	218	ミカン	ツブラジイ	不定形	不 明	-36.0	-	
27	W2096	32.7	7.1	2.7	372	ミカン	ツブラジイ	不定形	不 明	-29.0	-	
28	W2097	54.6	6.3	3.8	618	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	-14.0	-	
29	W2098	31.0	7.9	2.5	386	ミカン	スギ	不定形	不 明	-15.0	-	
30	W2099	28.4	7.8	2.0	266	ミカン	(スギ)	不定形	不 明	-15.0	-	
31	W2100	58.2	6.2	3.0	582	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	-4.0	-	
32	W2101	65.7	7.5	5.4	859	ミカン	(スギ)	扇 形	不 明	-14.0	-	

第79表 1区 22層 S K 12205

No.	登録番号	全長[m]	最大幅[m]	厚さ[m]	重量(t)	木取り	樹 種	横断面形	下端形状	地上部長[m]	地下部長[m]	備 考
1	W2237	64.9	6.6	6.5	1331	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	-5.0	-	
2	W2238	58.0	5.3	3.6	735	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	-18.0	-	
3	W1788	108.8	7.7	4.4	2444	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	5.0	99.0	
4	W1790	44.6	6.6	2.9	530	ミカン	(スギ)	長方形	不 明	-11.0	-	
5	W2240	59.9	6.0	2.3	299	ミカン	(スギ)	長方形	エンドウ形	-17.0	-	
6	W2252	30.3	7.9	4.5	351	ミカン	(スギ)	不定形	不 明	-21.0	-	
7	W2241	59.7	8.3	3.6	1017	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	-16.0	-	
8	W1791	73.4	6.3	4.0	1186	ミカン	(スギ)	不定形	エンドウ形	-8.0	-	
9	W2253	61.7	7.7	5.7	1376	ミカン	(スギ)	不定形	不 明	0	-	
10	W2255	46.6	5.8	4.7	743	ミカン	(スギ)	正方形	V字形	-18.0	-	
11	W2256	31.6	9.0	3.4	345	ミカン	(スギ)	不定形	不 明	-26.0	-	
12	W2254	60.7	6.1	5.1	984	ミカン	(スギ)	正方形	V字形	-4.0	-	
13	W2257	63.4	5.0	2.8	457	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	-14.0	-	
14	W2258	35.6	6.8	2.5	324	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	-22.0	-	
15	W1792	80.0	4.1	1.9	399	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	-2.0	-	
16	W1793	73.2	5.5	3.0	758	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	0	-	
17	W2271	84.4	4.0	3.2	823	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	-11.0	-	

18	W1794	73.1	5.2	4.1	814	ミカン (ス キ)	不定形	V字形	-16.0	-	上が軽利
19	W2273	58.1	7.7	4.0	1027	ミカン (ス キ)	長方形	V字形	-16.0	-	
20	W1795	78.1	4.1	4.2	844	ミカン (ス キ)	正方形	V字形	0	-	
21	W1796	76.0	6.1	3.9	953	ミカン (ス キ)	不定形	V字形	-5.0	-	
22	W1797	65.7	6.6	3.5	843	ミカン (ス キ)	長方形	不 明	-12.0	-	
23	W2289	99.2	14.1	5.3	5161	板材 (ス キ)	長方形	V字形	0	-	穴有り
24	W2305	33.9	5.6	3.7	312	ミカン (ス キ)	不定形	V字形	-10.0	-	
25	W2306	38.0	7.0	4.9	438	ミカン (ス キ)	扇 形	V字形	-3.0	-	
26	W1803	89.0	6.8	3.6	1072	ミカン (ス キ)	長方形	不 明	-8.0	-	
27	W1804	64.5	4.6	4.2	764	ミカン (ス キ)	不定形	不 明	-13.0	-	
28	W1805	56.1	4.0	4.8	704	ミカン (ス キ)	不定形	不 明	-14.0	-	
29	W1806	63.0	3.9	4.2	704	ミカン (ス キ)	不定形	V字形	-7.0	-	
30	W1807	64.1	5.6	3.0	764	ミカン (ス キ)	長方形	V字形	-12.0	-	
31	W1808	65.4	4.5	4.1	697	ミカン (ス キ)	正方形	不 明	-19.0	-	先が軽利
32	W1809	65.1	4.5	3.5	598	ミカン (ス キ)	不定形	不 明	-1.0	-	先が軽利

第80表 2・3区12層 S K21201

No	登録番号	全长mm	最大幅mm	厚さmm	重量(kg)	木取り	樹 種	横位断面形	下端形状	地上部長mm	地下部長mm	備 考
1	W745	47.4	7.3	5.5	1164	ミカン (ス キ)	長方形	V字形	-32.0	-		
2	W744	74.7	5.6	4.1	888	ミカン (ス キ)	正方形	不 明	-17.0	-		
3	W743	44.5	5.4	3.5	263	ミカン (ス キ)	扇 形	不 明	-19.0	-		
4	W794	82.8	7.2	5.8	1645	ミカン (ス キ)	扇 形	V字形	-14.0	-		
5	W796	55.0	5.4	6.4	946	ミカン (ス キ)	扇 形	不 明	-45.0	-		
6	W798	46.0	17.4	2.4	1110	ミカン (ス キ)	板 材	不 明	-26.0	-		
7	W799	72.3	6.4	5.4	1459	ミカン (ス キ)	不定形	エンビツ形	-18.0	-		
8	W803	72.0	4.1	2.7	419	ミカン (ス キ)	不定形	エンビツ形	-23.0	-		
9	W800	63.8	7.7	4.0	1194	ミカン (ス キ)	長方形	V字形	-21.0	-		
10	W802	56.1	2.4	2.2	178	ミカン (ス キ)	長方形	V字形	-29.0	-		
11	W801	54.5	6.9	2.6	413	ミカン (ス キ)	不定形	V字形	-27.0	-		
12	W804	66.6	9.2	6.8	1967	ミカン (ス キ)	不定形	V字形	-28.0	-		
13	W807	65.1	15.5	3.7	2263	ミカン (ス キ)	長方形	不 明	-22.0	-		
14	W805	47.5	9.2	6.2	1446	ミカン (ス キ)	不定形	V字形	-35.0	-		
15	W808	80.3	6.3	4.5	1576	ミカン (ス キ)	正方形	V字形	-22.0	-		
16	W809	59.7	4.8	3.3	474	ミカン (ス キ)	正方形	不 明	-24.0	-		
17	W810	44.7	6.8	5.2	965	ミカン (ス キ)	正方形	エンビツ形	-32.0	-		
18	W811	31.3	11.6	2.1	324	ミカン (ス キ)	板 材	不 明	-37.0	-		
19	W812	60.1	3.4	1.7	280	ミカン (ス キ)	長方形	不 明	-27.0	-		
20	W813	74.8	6.3	4.8	1579	ミカン (ス キ)	長方形	V字形	-13.0	-		
21	W814	60.1	6.5	3.7	693	ミカン (ス キ)	長方形	不 明	-33.0	-		
22	W815	49.9	3.5	2.9	234	ミカン (ス キ)	扇 形	V字形	-27.0	-		
23	W817	40.5	7.9	5.8	655	ミカン (ス キ)	扇 形	エンビツ形	-35.0	-		
24	W816	36.5	6.6	2.5	299	ミカン (ス キ)	長方形	V字形	-27.0	-		
25	W820	77.5	8.7	4.1	1959	ミカン (ス キ)	長方形	V字形	-19.0	-		
26	W818	69.9	4.9	3.2	889	ミカン (ス キ)	長方形	加工なし	-12.0	-		
27	W819	42.5	7.7	4.8	902	ミカン (ス キ)	長方形	不 明	-18.0	-		
28	W821	75.5	7.1	2.7	1094	ミカン (ス キ)	長方形	V字形	-15.0	-		
29	W822	45.2	3.4	3.0	313	ミカン (ス キ)	正方形	V字形	-22.0	-		
30	W823	31.3	11.2	2.4	350	ミカン (ス キ)	板 材	V字形	-33.0	-		
31	W824	35.5	6.0	4.7	670	ミカン (ス キ)	長方形	V字形	-34.0	-		
32	W825	72.5	8.7	4.7	1668	ミカン (ス キ)	長方形	V字形	-23.0	-		
33	W826	56.7	13.5	2.7	1392	ミカン (ス キ)	板 材	不 明	-25.0	-		
34	W827	48.7	6.7	3.0	643	ミカン (ス キ)	長方形	V字形	-32.0	-		

35	W828	66.7	4.3	3.4	652	ミカン (スギ)	正方形	加工なし	-21.0	-	
36	W829	63.2	9.7	6.3	1087	ミカン (スギ)	扇形	不明	-18.0	-	
37	W830	57.9	9.7	5.8	1778	ミカン (スギ)	長方形	V字形	-20.0	-	
38	W832	65.1	7.8	5.9	1504	ミカン (スギ)	扇形	V字形	-19.0	-	
39	W831	54.2	6.6	4.4	859	ミカン (スギ)	扇形	不明	-25.0	-	

第81表 2・3区12層 SK21204

No	登録番号	全长(m)	最大幅(m)	厚さ(cm)	重量(t)	木取り	樹種	横断面形状	下端形状	地上部長(m)	地下部長(m)	備考
1	W1245	96.1	9.6	2.4	1663	ミカン (スギ)	長方形	V字形	-14.0	-		
2	W1246	98.5	6.3	4.7	2169	ミカン (スギ)	正方形	エンビツ形	-21.0	-		
3	W1247	57.0	5.3	2.4	501	ミカン (スギ)	長方形	V字形	-13.0	-		
4	W1254	65.5	6.5	4.9	1029	ミカン (スギ)	扇形	不明	-10.0	-		
5	W1255	62.0	8.9	6.1	2064	ミカン (スギ)	長方形	不明	-11.0	-		
6	W1248	99.9	6.2	2.8	1253	ミカン (スギ)	長方形	V字形	-13.0	-		
7	W1249	101.5	6.5	5.6	1647	ミカン (スギ)	正方形	V字形	-18.0	-		
8	W1251	59.0	4.8	3.0	494	ミカン (スギ)	不定形	エンビツ形	-15.0	-		
9	W1257	99.6	7.9	5.0	2713	ミカン (スギ)	扇形	V字形	-16.0	-		
10	W1250	106.3	7.0	3.4	1878	ミカン (スギ)	長方形	V字形	-11.0	-		
11	W1252	107.5	5.5	2.9	1200	ミカン (スギ)	長方形	V字形	-7.0	-		
12	W1214	130.8	5.6	4.6	1926	ミカン (スギ)	正方形	エンビツ形	-2.0	-		
13	W1215	90.1	7.3	5.3	2579	ミカン (スギ)	長方形	エンビツ形	-6.0	-		
14	W1258	85.7	5.5	4.4	1152	ミカン (スギ)	扇形	V字形	-11.0	-	上端脱利	
15	W1219	94.7	7.0	3.8	1263	ミカン (スギ)	長方形	V字形	-11.0	-		
16	W1220	144.0	8.5	6.3	3902	ミカン (スギ)	不定形	エンビツ形	0.5	143.5		
17	W1218	94.6	7.6	4.8	2758	ミカン (スギ)	長方形	エンビツ形	-6.0	-		
18	W1226	114.8	8.6	2.8	2073	ミカン (スギ)	長方形	V字形	-4.0	-		
19	W1227	105.9	8.5	3.4	2105	ミカン (スギ)	長方形	V字形	-14.0	-		
20	W1228	137.9	8.9	5.1	4049	ミカン (スギ)	長方形	エンビツ形	-1.0	-		
21	W1229	93.1	6.9	4.8	1975	ミカン (スギ)	不定形	エンビツ形	-8.0	-		
22	W1230	130.6	6.0	4.3	2172	ミカン (スギ)	正方形	不明	-1.0	-		
23	W1231	87.4	7.4	5.1	2320	ミカン (スギ)	不定形	不明	-9.0	-		
24	W1232	127.1	8.4	3.9	2254	ミカン (スギ)	不定形	エンビツ形	-9.0	-		
25	W1233	40.7	6.8	5.6	1016	ミカン (スギ)	正方形	不明	-5.0	-		
26	W1238	100.2	8.6	4.9	2545	ミカン (スギ)	不定形	不明	-22.0	-		
27	W1239	94.8	10.0	4.7	2889	ミカン (スギ)	長方形	エンビツ形	-7.0	-		
28	W1240	73.3	6.9	5.4	1479	ミカン (スギ)	扇形	エンビツ形	-22.0	-		
29	W1256	115.0	7.9	4.5	2029	ミカン (スギ)	不定形	エンビツ形	-9.0	-		
30	W1261	92.1	9.2	4.9	2463	ミカン (スギ)	不定形	V字形	-9.0	-		
31	W1262	74.0	8.3	6.6	2714	ミカン (スギ)	不定形	V字形	-2.0	-		
32	W1262	97.1	9.0	6.5	2974	ミカン (スギ)	不定形	V字形	-2.0	-		

第82表 5区10層 S K 51003

No.	登録番号	全長[m]	最大幅[m]	厚さ[m]	重量(t)	木取り	樹種	横断面形	下端形状	地上部長[m]	地下部長[m]	備考
1	WK144	70.8	6.1	4.2	1218	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	3.4	67.4	
2	WK143	65.2	9.2	3.7	1486	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	2.2	63.0	
3	WK142	75.5	6.2	4.6	1344	ミカン	(スギ)	正方形	V字形	8.0	67.5	
4	WK141	58.4	6.8	3.7	1048	ミカン	(スギ)	不定形	不明	5.0	53.4	
5	WK140	62.1	6.9	5.1	1830	ミカン	(スギ)	不定形	不明	4.0	78.1	
6	WK139	82.3	8.3	4.5	2194	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	6.0	77.3	
7	WK138	71.7	5.1	4.0	977	ミカン	(スギ)	不定形	不明	7.5	64.4	
8	WK137	57.0	5.3	4.5	896	ミカン	(スギ)	不定形	加工なし	6.7	50.3	
9	WK135	59.2	7.0	3.7	1217	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	9.0	50.2	
10	WK134	68.0	5.1	4.6	792	ミカン	(スギ)	不定形	不明	8.4	59.6	
11	WK133	59.9	6.3	4.3	1068	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	5.0	54.9	
12	WK132	45.3	2.9	3.0	340	ミカン	(スギ)	円形	V字形	-10.0	-	
13	WK131	64.5	5.2	4.2	938	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	6.0	58.5	
14	WK130	54.8	8.6	4.1	1068	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	5.0	49.8	
15	WK129	64.2	4.9	3.2	579	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	6.9	57.3	
16	WK128	57.0	4.8	3.0	663	ミカン	(スギ)	長方形	不明	5.0	52.0	
17	WK127	60.9	5.6	3.4	860	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	6.3	54.7	
18	WK126	52.3	6.4	3.6	555	ミカン	(スギ)	扇形	不明	0	-	
19	WK124	82.8	6.8	4.6	1410	ミカン	(スギ)	扇形	V字形	6.5	76.3	
20	WK123	77.9	4.5	3.9	743	ミカン	(スギ)	扇形	V字形	4.0	73.9	
21	WK122	78.3	6.0	4.3	1584	ミカン	(スギ)	正方形	V字形	0	-	
22	WK121	81.4	6.5	4.8	1480	ミカン	(スギ)	正方形	V字形	7.0	74.4	

第83表 6区16層 S K 61606

No.	登録番号	全長[m]	最大幅[m]	厚さ[m]	重量(t)	木取り	樹種	横断面形	下端形状	地上部長[m]	地下部長[m]	備考
1	W2157	88.8	18.7	2.0	2176	板材	(スギ)	板材	V字形	-5.0	-	一部強化
2	W2082	60.0	4.0	1.0	196	板材	(スギ)	板材	不明	-4.0	-	
3	W2083	90.9	19.9	2.4	2850	板材	(スギ)	板材	V字形	-3.0	-	
4	W2084	96.5	24.2	3.1	3587	板材	(スギ)	板材	V字形	0	-	
5	W2085	70.2	4.4	2.3	557	板材	(スギ)	長方形	不明	1.0	69.2	
6	W2086	92.4	13.0	4.5	3356	板材	(スギ)	不定形	不明	2.0	90.4	有段全面化
7	W2090	33.5	2.4	2.0	99	(スギ)	(スギ)	不定形	不明	-10.0	-	
8	W2091	42.6	2.2	1.5	86	(スギ)	(スギ)	不定形	不明	-10.0	-	
9	W2092	40.4	2.9	1.6	87	(スギ)	(スギ)	正方形	不明	-10.0	-	
10	W2093	39.3	2.8	1.8	118	(スギ)	(スギ)	正方形	不明	-10.0	-	
11	W2094	34.2	7.0	1.5	169	(スギ)	(スギ)	不定形	不明	-20.5	-	左端部のみ残存
12	W2095	53.0	23.3	1.7	1097	板材	(スギ)	板材	V字形	-10.0	-	
13	W2096	24.7	2.8	1.5	74	(スギ)	(スギ)	不定形	不明	-23.0	-	
14	W2097	31.9	3.7	1.4	86	(スギ)	(スギ)	不定形	不明	-23.5	-	
15	W2098	33.1	5.1	1.2	104	板材	(スギ)	板材	不明	-11.0	-	
16	W2099	90.4	18.4	3.0	2821	板材	(スギ)	板材	V字形	-3.0	-	
17	W2103	103.3	14.7	3.0	2273	板材	(スギ)	板材	V字形	-4.0	-	
18	W2104	91.6	13.0	3.0	2155	板材	(スギ)	板材	V字形	-1.0	-	
19	W2105	101.4	13.9	2.7	2712	板材	(スギ)	板材	V字形	0	-	
20	W2106	90.3	25.5	2.4	2904	板材	(スギ)	板材	V字形	-6.0	-	
21	W2107	66.9	35.1	3.8	4734	板材	(スギ)	板材	不明	-8.0	-	円形
22	W2108	92.9	20.8	2.2	1858	板材	(スギ)	板材	V字形	-8.0	-	
23	W2109	65.6	26.8	3.2	3414	板材	(スギ)	板材	不明	-5.0	-	円形
24	W2110	93.6	127.2	2.1	2370	板材	(スギ)	板材	V字形	-5.0	-	設有り
25	W2111	54.9	25.7	1.7	1227	板材	(スギ)	板材	V字形	-4.0	-	先端平
26	W2112	89.7	23.8	2.3	2892	板材	(スギ)	板材	V字形	0	-	段有り

27	W2113	55.6	19.9	2.1	1110	板材	(スギ)	板 材	V字形	1.0	54.8	穴あり先端平
28	W2114	85.6	17.4	2.1	1513	板材	(スギ)	板 材	V字形	-2.0	-	
29	W2115	87.3	22.1	1.6	1617	板材	(スギ)	板 材	V字形	-2.0	-	
30	W2116	83.0	27.6	2.5	2380	板材	(スギ)	板 材	V字形	-4.0	-	
31	W2117	86.4	24.4	2.3	2113	板材	(スギ)	板 材	V字形	-7.0	-	
32	W2118	90.4	27.7	2.4	2729	板材	(スギ)	板 材	V字形	-6.0	-	
33	W2119	91.9	26.5	2.6	2146	板材	(スギ)	板 材	V字形	0	-	
34	W2120	85.4	24.7	2.0	2069	板材	(スギ)	板 材	V字形	-7.0	-	段あり
35	W2121	54.5	9.7	2.7	771	板材	(スギ)	板 材	不 明	-4.0	-	
36	W2122	45.5	10.5	1.2	458	板材	(スギ)	板 材	不 明	-18.0	-	
37	W2123	75.2	27.6	6.0	1528	板材	(スギ)	板 材	V字形	-12.0	-	段あり
38	W2124	64.6	14.0	1.8	1022	板材	(スギ)	板 材	V字形	-9.0	-	
39	W2125	49.8	12.8	1.5	496	板材	(スギ)	板 材	V字形	-24.0	-	
40	W2126	26.4	6.3	1.2	137	板材	(スギ)	板 材	V字形	-35.0	-	
41	W2127	91.4	23.0	2.2	2603	板材	(スギ)	板 材	V字形	-4.0	-	
42	W2128	86.6	20.0	2.6	2197	板材	(スギ)	板 材	V字形	-11.0	-	
43	W2129	91.2	11.1	2.0	1136	板材	(スギ)	板 材	V字形	-12.0	-	
44	W2131	88.9	26.7	2.4	3826	板材	(スギ)	板 材	V字形	-12.0	-	

第84表 6区16層 S K 61601

No	登録番号	全長(m)	最大幅(m)	厚さ(mm)	重量(t)	木取り	樹 種	接合断面形	下端形状	地上部長(m)	地下部長(m)	備 考
1	W436	72.0	19.9	2.4	1060	板材	(スギ)	板 材	加工なし	7.0	65.0	
2	W434	76.3	10.5	2.0	872	板材	(スギ)	板 材	加工なし	3.0	73.3	
3	W433	88.5	3.5	3.3	804	(スギ)	正方形	加工なし	-7.0	-		
4	W432	75.3	15.9	1.8	1140	板材	(スギ)	板 材	加工なし	-9.0	-	
5	W430	83.3	20.5	1.6	1781	板材	(スギ)	板 材	加工なし	2.0	81.3	
6	W429	97.2	5.3	3.7	1086	(スギ)	不定形	加工なし	1.0	96.2		
7	W427	66.6	17.8	1.6	1123	板材	(スギ)	板 材	加工なし	-5.0	-	
8	W425	76.4	21.4	2.1	2387	板材	(スギ)	板 材	加工なし	0	-	
9	W424	75.1	13.4	1.5	1045	板材	(スギ)	板 材	加工なし	9.0	66.1	
10	W421	58.7	15.9	1.1	505	板材	(スギ)	板 材	加工なし	2.0	56.7	
11	W423	77.4	4.0	2.2	436	(スギ)	長方形	加工なし	0	-		
12	W422	71.0	18.3	1.8	1581	板材	(スギ)	板 材	加工なし	-8.0	-	
13	W420	110.1	3.7	3.1	717	(スギ)	正方形	加工なし	-5.0	-		
14	W419	52.3	3.3	2.2	236	(スギ)	長方形	加工なし	-18.0	-		
15	W418	39.4	5.0	1.5	148	(スギ)	長方形	加工なし	-23.0	-		
16	W417	79.4	4.6	1.7	394	(スギ)	長方形	加工なし	-4.0	-		
17	W414	90.7	5.0	2.0	575	(スギ)	長方形	加工なし	-6.0	-		
18	W415	65.2	14.9	2.0	853	板材	(スギ)	板 材	加工なし	-6.0	-	
19	W413	55.8	25.4	3.3	3997	板材	(スギ)	板 材	加工なし	10.0	75.8	
20	W411	110.8	4.1	1.9	581	(スギ)	長方形	加工なし	0	-		
21	W410	61.2	8.5	1.1	275	板材	(スギ)	板 材	加工なし	-9.0	-	
22	W408	65.9	18.9	1.9	1252	板材	(スギ)	板 材	加工なし	-17.0	-	
23	W409	44.3	4.0	2.7	346	(スギ)	不定形	加工なし	-40.0	-		
24	W407	81.1	4.8	2.6	628	(スギ)	不定形	加工なし	0	-		
25	W406	65.0	12.5	2.1	685	板材	(スギ)	板 材	加工なし	-5.0	-	

第85表 7区10層 S K71003

No.	登録番号	全長[m]	最大幅[m]	厚さ[m]	重量(t)	木取り	樹 種	横位断面形	下端形状	地上部長[m]	地下部長[m]	備考
1	W550	33.1	4.6	3.9	457	ミカン	(スギ)	不規形	V字形	-21.0	-	
2	W551	32.1	3.6	3.5	299	ミカン	(スギ)	扇 形	V字形	-28.0	-	
3	W552	41.1	3.0	1.9	125	ミカン	(スギ)	円 形	不 明	-22.0	-	
4	W553	65.2	4.9	3.6	753	ミカン	(スギ)	正方形	エッピング	-3.0	-	
5	W557	80.0	4.1	3.0	669	ミカン	(スギ)	正方形	V字形	-5.5	-	
6	W558	19.9	12.5	1.9	238	ミカン	(スギ)	板 材	不 明	-16.5	-	
7	W559	76.0	4.1	3.0	585	ミカン	(スギ)	扇 形	不 明	1.0	75.0	
8	W560	21.7	2.8	2.0	92	ミカン	(スギ)	正方形	不 明	0	-	下端斜失
9	W561	18.1	4.6	1.2	53	ミカン	(スギ)	長方形	不 明	-18.0	-	
10	W582	55.7	12.7	6.7	2637	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	-7.5	-	
11	W583	66.0	4.2	3.1	609	ミカン	(スギ)	正方形	不 明	-1.5	-	
12	W584	44.2	5.9	3.4	619	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	-13.0	-	
13	W585	75.4	5.4	3.3	844	ミカン	(スギ)	扇 形	V字形	2.0	73.4	
14	W586	53.5	2.7	2.4	213	ミカン	(スギ)	正方形	V字形	-13.5	-	
15	W587	59.4	7.1	2.3	689	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	-4.0	-	
16	W588	81.5	4.8	3.1	749	ミカン	(スギ)	正方形	V字形	-1.0	-	
17	W589	71.2	5.6	1.8	534	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	-1.0	-	
18	W590	47.9	4.5	2.0	369	ミカン	(スギ)	長方形	不 明	-12.0	-	
19	W604	81.0	5.4	2.8	804	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	-1.5	-	上端加工有り
20	W605	51.0	5.8	2.7	529	ミカン	(スギ)	長方形	不 明	-11.5	-	
21	W606	67.2	7.0	4.0	1137	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	-5.5	-	上端加工有り

第86表 8区17a層 S K817a08

No.	登録番号	全長[m]	最大幅[m]	厚さ[m]	重量(t)	木取り	樹 種	横位断面形	下端形状	地上部長[m]	地下部長[m]	備考
1	WK762	52.2	16.9	2.3	960	ミカン	(スギ)	板 材	V字形	2.0	50.2	
2	WK785	57.9	7.5	3.8	976	ミカン	(スギ)	長方形	不 明	-19.0	-	
3	WK786	52.0	6.7	4.4	559	ミカン	スダジイ	不定形	V字形	-3.0	-	
4	WK787	58.8	5.3	5.7	1008	ミカン	スダジイ	不定形	V字形	-6.0	-	
5	WT88	55.1	5.0	7.8	1012	ミカン	スダジイ	不定形	V字形	-8.0	-	
6	WT46	58.3	21.1	3.0	1569	ミカン	(スギ)	板 材	不 明	-1.5	-	
7	WT48	51.5	8.4	3.4	729	ミカン	スダジイ	扇 形	V字形	-7.5	-	
8	WT44	52.9	6.2	5.2	749	スダジイ	扇 形	V字形	-11.0	-		
9	WT47	79.6	9.3	2.7	664	スダジイ	板 材	V字形	-6.0	-		
10	WT45	36.4	8.4	4.0	723	ミカン	スダジイ	長方形	加工なし	-10.0	-	
11	W830	45.8	10.3	4.8	1485	ミカン	スダジイ	長方形	不 明	-7.0	-	
12	WK789	65.4	8.1	4.9	1400	ミカン	スダジイ	扇 形	不 明	-1.5	-	
13	WK790	58.2	12.3	4.1	1460	ミカン	スダジイ	長方形	V字形	-4.0	-	
14	WT64	14.8	5.6	1.5	83	ミカン	スダジイ	長方形	不 明	-32.0	-	
15	WT93	50.1	8.7	4.1	983	ミカン	スダジイ	不定形	不 明	5.0	45.1	
16	WT94	50.8	20.1	2.8	1784	(スギ)	板 材	不 明	-6.0	-		
17	WK795	65.1	8.2	2.4	1002	(スギ)	長方形	加工なし	-0.5	-		
18	WK796	57.8	14.5	1.8	802	(スギ)	板 材	加工なし	5.5	52.3		
19	WK797	56.3	15.9	1.7	926	(スギ)	板 材	加工なし	4.5	51.8		
20	WK790	54.6	13.3	1.9	790	ミカン	(スギ)	板 材	不 明	2.0	52.6	
21	WT51	64.9	13.4	3.0	1307	ミカン	(スギ)	板 材	加工なし	2.0	62.9	
22	WT62	64.7	12.8	2.2	1252	ミカン	(スギ)	板 材	加工なし	3.0	61.7	

第87表 9区38層S K 93803

No.	登録番号	全長[m]	最大幅[m]	厚さ[m]	重量(t)	木取り	樹種	機位断面形	下端形状	地上部長[m]	地下部長[m]	備考
1	WK2237	18.8	3.7	2.4	44	ミカン	(スギ)	不定形	不明	-5.0	-	
2	WK2238	55.9	5.8	4.3	443	ミカン	(スギ)	不定形	エンドビット形	2.0	53.9	
3	WK2239	53.6	5.9	3.6	354	ミカン	(スギ)	扇形	エンドビット形	2.0	53.6	
4	WK2241	52.1	5.9	4.4	462	ミカン	(スギ)	扇形	エンドビット形	0	-	
5	WK2242	51.1	6.8	6.3	890	ミカン	(スギ)	扇形	エンドビット形	3.5	47.6	かえし有り
6	WK2243	64.5	5.8	4.7	553	ミカン	(スギ)	扇形	エンドビット形	6.0	58.5	かえし有り
7	WK2244	54.8	5.4	4.4	500	ミカン	(スギ)	不定形	エンドビット形	1.5	53.3	
8	WK2245	70.1	7.0	4.8	960	ミカン	(スギ)	長方形	エンドビット形	0	-	
9	WK2246	68.1	7.0	3.1	545	ミカン	(スギ)	不定形	エンドビット形	0	-	
10	WK2247	65.5	5.8	6.2	980	ミカン	(スギ)	不定形	エンドビット形	5.0	60.5	
11	WK2248	57.8	7.8	4.2	701	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	-1.5	-	かえし有り
12	WK2249	52.8	6.7	5.0	639	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	-5.0	-	
13	WK2250	53.4	7.3	4.3	385	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	-5.0	-	
14	WK2251	45.5	5.9	3.9	382	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	-2.0	-	
15	WK2252	54.3	6.0	2.1	363	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	-2.0	-	
16	WK2253	60.9	7.8	3.1	571	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	1.0	59.9	
17	WK2254	57.8	6.2	4.3	474	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	-1.0	-	かえし有り
18	WK2255	54.8	6.7	4.6	502	ミカン	(スギ)	扇形	V字形	1.5	53.3	
19	WK2257	47.5	6.0	3.2	377	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	-2.5	-	かえし有り

第88表 9区22層杭列3

No.	登録番号	全長[m]	最大幅[m]	厚さ[m]	重量(t)	木取り	樹種	機位断面形	下端形状	地上部長[m]	地下部長[m]	備考
1	WK508	45.4	4.7	3.7	176	芯持材	マツ	円形	不明	3.0	42.4	下端粉失
2	WK499	21.7	4.5	3.3	105	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	-1.0	-	
3	WK508	120.5	7.9	5.1	2238	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	22.0	98.5	
4	WK509	62.2	4.3	3.3	272	芯持材	マツ	円形	エンドビット形	9.0	53.2	
5	WK510	110.6	8.0	3.9	1803	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	14.0	96.6	
6	WK512	49.1	8.1	5.5	714	芯持材	ヒサカキ	円形	不明	1.0	48.1	
7	WK513	84.1	5.0	3.8	601	芯持材	マツ	円形	エンドビット形	4.0	80.1	
8	WK514	66.6	6.9	6.1	1135	ミカン	(スギ)	扇形	V字形	10.0	56.6	
9	WK515	81.9	6.0	4.1	1140	芯持材	クスノキ	円形	エンドビット形	1.0	80.9	
10	WK516	92.3	6.9	4.6	1241	ミカン	(スギ)	正方形	V字形	9.0	83.3	
11	WK517	67.1	9.3	6.8	1393	芯持材	マツ	円形	不明	0	-	
12	WK510	96.6	7.5	5.6	1437	芯持材	マツ	円形	エンドビット形	11.0	85.6	
13	WK518	100.8	7.9	6.0	2424	ミカン	(スギ)	正方形	エンドビット形	16.0	87.8	
14	WK519	63.9	7.1	6.8	1236	芯持材	スギ	円形	エンドビット形	7.0	56.9	
15	WK520	59.5	5.5	3.6	298	芯持材	マツ	円形	不明	-40.0	-	
16	WK521	84.5	4.8	3.9	682	芯持材	カシ	円形	不明	-3.0	-	下端粉失
17	WK522	137.4	6.8	6.2	2613	芯持材	マツ	円形	エンドビット形	9.0	128.4	
18	WK523	85.4	4.9	4.1	664	芯持材	タモ	扇形	不明	-2.0	-	いたる處に下端粉失
19	WK517	105.1	9.1	3.5	1417	ミカン	(スギ)	長方形	不明	6.0	99.1	
20	WK524	71.6	5.8	3.2	547	芯持材	マンサク	不定形	不明	-17.0	-	いたる處に下端粉失
21	WK525	52.8	5.3	4.0	558	ミカン	(スギ)	正方形	V字形	-48.0	-	
22	WK526	66.4	6.2	4.0	454	芯持材	カシ	円形	エンドビット形	-5.0	-	
23	WK527	76.9	7.6	4.6	943	ミカン	(スギ)	不定形	エンドビット形	1.0	75.9	

第89表 9区22層杭抗列1

No.	登録番号	全长[m]	最大幅[m]	厚さ[m]	重量(t)	木取り	樹種	横位断面形	下端形状	地上部長[m]	地下部長[m]	備考
1	WK670	109.8	6.0	4.5	892	芯持材	マツ	円形	不明	12.0	97.8	下端紛失
2	WK671	71.5	4.1	3.8	440	芯持材	クリ	円形	エンビツ形	-2.0	-	いたみ激しい
3	WK672	87.5	4.8	3.6	420	芯持材	マツ	円形	エンビツ形	2.0	85.5	
4	WK673	156.8	6.2	4.5	1131	芯持材	マツ	円形	エンビツ形	31.0	124.8	
5	WK674	109.2	5.1	4.2	630	芯持材	マツ	円形	不明	22.0	87.2	
6	WK675	113.7	5.0	4.0	753	芯持材	マツ	円形	エンビツ形	29.0	84.7	
7	WK676	104.1	6.2	4.8	865	芯持材	マツ	円形	エンビツ形	22.0	82.1	
8	WK677	116.6	5.7	4.5	745	芯持材	マツ	円形	エンビツ形	21.0	95.6	
9	WK678	100.1	5.9	4.5	812	芯持材	マツ	円形	不明	28.0	72.1	下端紛失
10	WK679	102.6	5.5	4.3	728	芯持材	マツ	円形	エンビツ形	22.0	80.6	
11	WK680	102.2	4.8	4.0	570	芯持材	マツ	円形	エンビツ形	6.0	96.6	

第90表 10区33層SK103302

No.	登録番号	全长[m]	最大幅[m]	厚さ[m]	重量(t)	木取り	樹種	横位断面形	下端形状	地上部長[m]	地下部長[m]	備考
1	WK1607	89.4	4.2	3.5	502	ミカン	(スギ)	正方形	不明	0	-	
2	WK1608	105.1	9.7	7.5	4623	ミカン	(スギ)	正方形	不明	11.0	94.1	
3	WK1609	102.5	8.5	3.5	2136	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	10.0	92.8	貫通しない穴
4	WK1606	97.7	7.1	4.7	1437	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	2.5	95.2	
5	WK1603	123.3	8.0	6.0	4720	ミカン	(スギ)	正方形	V字形	3.0	129.3	穴3内2貫通
6	WK1604	106.7	9.0	5.0	2419	ミカン	(スギ)	正方形	V字形	9.0	97.7	上に穴有り
7	WK1602	88.1	13.8	3.8	1788	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	0	88.1	
8	WK1598	129.0	9.4	4.4	3670	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	4.5	134.5	
9	WK1599	91.2	9.8	4.7	2254	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	-1.0	-	先段有り
10	WK1597	103.9	10.2	3.8	3128	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	0	-	
11	WK1596	137.5	9.2	5.4	4450	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	3.0	134.5	溝有り
12	WK1595	86.9	11.5	4.9	2779	ミカン	(スギ)	長方形	V字形	-1.5	-	
13	WK1592	131.9	8.4	4.9	3847	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	1.0	130.9	
14	WK1591	136.5	12.5	5.4	4970	ミカン	(スギ)	不定形	V字形	6.0	130.5	
15	WK1589	64.3	9.2	5.0	1039	ミカン	(スギ)	扇形	不明	0	64.3	
16	WK1590	128.7	9.1	5.3	4559	ミカン	(スギ)	正方形	エンビツ形	6.0	122.7	
17	WK1588	135.2	7.8	5.4	4124	ミカン	(スギ)	正方形	エンビツ形	5.0	139.2	

第91表 10区33層SK103305

No.	登録番号	全长[m]	最大幅[m]	厚さ[m]	重量(t)	木取り	樹種	横位断面形	下端形状	地上部長[m]	地下部長[m]	備考
1	WK1302	67.5	10.4	4.5	1905	板材	(スギ)	長方形	V字形	15.0	52.5	有段
2	WK1303	49.9	12.3	3.6	1456	板材	(スギ)	長方形	V字形	6.0	43.9	
3	WK1304	75.2	10.4	3.5	2137	板材	(スギ)	長方形	V字形	4.0	71.2	
4	WK1305	47.0	11.8	4.1	1182	板材	(スギ)	長方形	不明	7.0	40.0	有段
5	WK1306	80.8	12.8	2.4	1606	板材	(スギ)	長方形	不明	11.0	69.8	
6	WK1307	80.0	11.5	2.7	1484	板材	(スギ)	長方形	不明	6.0	74.0	有段
7	WK1308	66.3	10.7	3.3	1567	板材	(スギ)	長方形	V字形	10.0	58.3	
8	WK1309	46.8	9.9	4.7	1064	板材	(スギ)	長方形	不明	12.0	34.8	有段
9	WK1310	49.6	10.6	4.3	1900	板材	(スギ)	長方形	V字形	12.0	37.8	有段
10	WK1311	74.1	9.7	3.1	1616	板材	(スギ)	長方形	V字形	7.5	67.1	
11	WK1312	56.9	12.6	5.2	1707	板材	(スギ)	長方形	不明	8.0	48.9	有段
12	WK1313	58.5	9.2	3.4	602	板材	(スギ)	長方形	不明	4.0	34.3	有段
13	WK1314	72.2	9.2	3.4	1387	板材	(スギ)	長方形	V字形	15.0	57.2	
14	WK1315	64.3	11.3	4.4	2232	板材	(スギ)	長方形	V字形	16.0	48.3	
15	WK1316	66.4	12.9	4.5	1730	板材	(スギ)	長方形	V字形	21.0	45.4	有段
16	WK1317	58.8	11.7	3.7	1639	板材	(スギ)	長方形	V字形	12.0	46.8	
17	WK1318	86.3	10.8	4.1	2570	板材	(スギ)	長方形	V字形	18.0	68.2	

第91表 構造木製品観察表

No.	登録番号	区	層位	造構	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	材種	形態
1	W769	2・3	12層	SK21206	68.9	20.6	3.6	(スギ)	2・3・4・5と組み合せ。3とともに裏板となる。
2	W1031	2・3	12層	SK21206	55.9	10.7	2.6	(スギ)	1・3・4・5と組み合せ。右側板となる。
3	W768	2・3	12層	SK21206	67.5	18.5	5.4	(スギ)	1・2・4・5と組み合せ。裏板となる。
4	W1032	2・3	12層	SK21206	76.1	13.1	2.1	(スギ)	1・2・3・5と組み合せ。右側板となる。3つ孔あり。転用材。
5	W1033	2・3	12層	SK21206	116.5	13.6	7.9	(スギ)	1・2・3・4と組み合せ。片側だけ立ち上がる。
6	W637	8	17b層		(66.4)	13.9	(5.6)	(スギ)	横位断面がコの字になる。
7	W613	8	17b層		(91.9)	13.9	7.9	(スギ)	上・下端欠損している。横位断面コの字になる。
8	W458	1	22層	SK21222	83.4	14.8	7.9	(スギ)	完形で残る。横位断面コの字になる。
9	W683	2・3	12層	SK21201	(126.4)	25.1	8.7	(スギ)	1方がスプーン状に広がる。横位断面コの字になる。
10	W2352	6	16層水田		(86.3)	16.0	10.8	(スギ)	上部は欠落している。横位断面コの字になる。
11	W1371	2・3	12層	SK21203	(72.5)	(14.0)	4.0	(スギ)	片側面が欠損している。横位断面Jの字。
12	W1767	2・3	12層	SK21201	(41.7)	(11.2)	5.8	(スギ)	一部のみ残存。横位断面はUの字。
13	W1785	2・3	12層	SK21201	60.6	(13.8)	6.0	(スギ)	片側面が欠損している。横位断面Jの字。
14	W1784	2・3	12層	SK21201	(97.1)	(9.4)	7.2	(スギ)	片側半分が残る。横位断面Jの字。
15	W2819	9	38層	SK39803	(36.2)	13.9	8.7	(スギ)	一部のみ残存。横位断面コの字。
16	W2496	6	16層水田		(81.3)	(20.9)	8.1	(スギ)	幅広である。横位断面Jの字。
17	W2775	1	22層	SK12202	(44.2)	(8.3)	5.7	(スギ)	一部のみ残存。横位断面Jの字。
18	W2715	1	22層	SK12203	(71.5)	(7.6)	6.4	(スギ)	片側面付近のみ残存。横位断面Jの字。
19	W672	2・3	12層	SK21201	(77.6)	(9.6)	7.2	(スギ)	片側面付近のみ残存。横位断面Jの字。
20	W49	5	10層水田	SK51002	126.2	(9.6)	8.0	(スギ)	上・下端に加工入る。横位断面Jの字。
21	W526	5	16層水田	SK51006	(55.9)	(6.0)	5.6	(スギ)	全面に手斧痕がある。横位断面Jの字。
22	W317	5	10層水田	SK51004	(39.6)	(5.5)	5.7	(スギ)	片側面付近のみ残存。横位断面Jの字。
23	W244	5	10層水田	SK51006	44.4	(7.2)	6.6	(スギ)	一部のみ残存。横位断面Uの字。
24	W254	5	10層水田	SK51004	(47.3)	(10.0)	5.3	(スギ)	一部のみ残存。横位断面Uの字。
25	W274	5	10層水田	SK51006	(44.6)	(8.9)	6.7	(スギ)	片側面付近のみ残存。横位断面Uの字。
26	W1637	6	16層水田		(65.0)	(6.0)	7.3	(スギ)	片側半分が残存。横位断面Jの字。
27	W763	8	17a層		(70.6)	(7.2)	8.3	(スギ)	片側面付近のみ残存。横位断面Uの字。
28	W2487	10	35層		(81.4)	(4.9)	9.8	(スギ)	片側面付近のみ残存。横位断面Jの字。

第93表 金属製品一覧表

No.	器種名	地区	グリッド	層位・遺構	登録番号	形態	素材	備考
1	鎌の刃	9	E 7 3 N	2層	M-005	両面の度合いがやや大きい曲刀鎌。基部を折り返している。	鉄	推定刃抜長(10.0) 刃幅(3.1)刃厚(0.25) 刃の湾曲(0.21)
2	刀子	9	C 7 1 N	13層以上	M-002	断面は真鍮製か、刃部は欠損甚だしい。	鉄	残存長(13.4) 柄幅(1.5)柄厚(0.5)
3	馬鎌(刃)	6	D 3 6 S	5層 (SK60502)	M-002	断面は長方形。頭部には敲打のため、ややつぶれる。	鉄	全長(23.1) 最大幅(2.1) 最大厚(1.3)
4	馬鎌(刃)	2-3	E 1 8 N	4層	M-003	断面は長方形。刃先は長方形に尖る。	鉄	全長(23.1) 最大幅(2.5) 最大厚(1.2)
5	袋伏鉄斧	2-3	C 1 7 N	9層 (既脱層中)	M-001	全体的に鏽跡が進んでいる。曲刃と觀察できる。	鉄	全長(5.8)刃幅(4.1)
6	主邊斧頭鎌	10	E 7 9 S	31層	M-004	先端部刃刃に尖らせていた。	鉄	残存長(9.0) 最大幅(2.5)厚(0.8)
7	主邊斧頭鎌	10	D 8 1 S	31層	M-005	茎部に鏽が附着している。	鉄	残存長(9.0) 最大幅(2.1)厚(0.8) 茎部残存長(2.1)
8	頭抉三角形鎌	7	E 5 4 S	9層(上面)	M-002	茎部の長さはもっと長いと想定できる。	鉄	残存長(7.7) 最大幅(2.0)厚(0.8) 茎部残存長(4.2)
9	脛抉鉄鎌	2-3	B 2 1 N	4層	M-002	刃先部が欠損している。	鉄	茎部残存長(2.2) 残存長(7.7)
10	劍	7	F 5 3 S	9層	M-008	表面が腐食して部分的に剥がれている。	銅	外径(6.2)厚(0.2) 高さ(1.5)
11	鉄片	6	不明	SK60501	M-001	クサビ状の鉄片である。	鉄	幅(4.6)長(1.9) 厚(0.5)

第94表 銭貨一覧表

No.	種名	地区	グリッド	層位・遺構	登録番号	直 径 (cm)	孔 径 (cm)	厚 さ (cm)	初 製 造 年
1	開元通宝	10	D 6 3 N	トレンチ内 8~9層粘土層	M 001	2.45	0.60×0.77	0.13	唐621~
2	咸平元宝	3	F 1 3 N	3層北側排水溝	M 001	2.46	0.68×0.63	0.11	宋998~
3	天禧通宝	10	D 6 0 N	9~10層	M 003	2.54	0.64×0.73	0.14	宋1017~
4	聖宋通宝	9	E 7 6 S	19層SR92001	M 003	2.50	0.72×0.68	0.12	宋1039~
5	治平元宝	10	C 8 0	8層	M 002	2.40	0.75×0.67	0.13	宋1064~
6	熙寧元寶	9	D 7 6 N	SR92001	M 008	2.38	0.66×0.67	0.15	宋1068~
7	元豐通寶	9	D 7 5 N	22層	M 006	2.45	0.77×0.72	0.10	宋1078~
8	正隆元宝	9	E 7 6 S	19層SR92001	M 004	2.45	0.63×0.63	0.11	金1156~
9	永樂通寶	9	D 7 6 N	SR92001	M 007	2.52	0.54×0.54	0.15	明1408~
10	寛永通寶	9	C 7 1 N	8層	M 001	2.56	0.61×0.61	0.12	日本1636~

第95表 石器計測表 1

番号	調査区	層位	出土地点・遺構	種別	最大長(a)	最大幅(c)	最大厚(b)	重量(g)	色調	石質	備考
1	6	23a層	E37N	打製石斧	21.3	8.4	1.3	359.3	黒色	黒色砂質板岩	接合により完形
2	6	23a層	E36N	打製石斧	23.0	8.35	3.2	536.4	黒色	粗粒砂岩	接合により完形
3	6	23a層	D40S	打製石斧	14.5	8.7	3.2	415.6	黒色	黒色砂質	基部
4	6	23a層	D40N	打製石斧	13.9	8.3	3.3	419.0	黒色	黒色砂質頁岩	基部
5	6	23a層	E39S	打製石斧	14.9	8.5	2.4	348.8	暗灰色	やや凝灰質粗粒砂岩	基部
6	6	23a層	C36N	打製石斧	12.5	6.7	2.9	262.3	暗灰色	中粒砂岩	基部、基部端部欠損
7	6	23a層	D39	打製石斧	10.0	8.9	2.6	199.4	黒色	凝灰質頁岩	基部、一部後黄色
8	6	23a層	D40	打製石斧	8.7	8.3	2.2	182.7	黒色	砂質頁岩	刃部
9	6	23a層	E38	打製石斧	11.7	10.2	1.7	215.0	黒色	黒色頁岩	刃部
10	10	41層	C33N 南側排水溝	打製石斧	22.9	9.3	3.3	840.2	黒色	中粒ないし細粒砂岩	刃部先端欠損
11	2+3	21層	E15N	打製石斧	17.4	8.3	2.6	445.3	暗灰色	中粒砂岩	刃部一部欠損
12	2+3	21層	D14S	打製石斧	11.7	7.1	3.3	300.6	暗灰色	やや凝灰質粗粒砂岩	基部
13	8	22層	E61S	打製石斧	14.8	9.3	2.2	330.7	黒色	黒色砂質板岩	基部
14	5	14層	F31	打製石斧	7.2	7.1	1.6	95.4	灰色	硬質中粒砂岩	基部
15	5	14a層	F27	打製石斧	11.1	9.4	1.5	193.6	暗灰色	硬質中粒砂岩	基部
16	8	21層	D68N	打製石斧	9.8	6.5	4.1	291.6	暗灰色	硬質中粒砂岩	基部
17	5	14層	F27	打製石斧	15.3	10.2	1.8	313.1	暗灰色	硬質中粒砂岩	刃部
18	2+3	20層	D15N	打製石斧	9.9	7.3	1.7	147.6	暗灰色	中粒砂岩	刃部
19	2+3	21層	D19N	打製石斧	16.6	5.2	2.1	241.4	黒色	砂質頁岩	
20	9	42層	E72S	打製石斧	15.9	5.9	2.1	216.2	黒色	黒色粘板岩	
21	2+3	21a層	D19N	打製石斧	12.0	5.2	2.1	158.0	黒色	黒色頁岩	基部
22	2+3	21a層	E20S	打製石斧	11.7	5.2	1.9	152.4	黒色	黒色頁岩	基部
23	2+3	20層	E15N	打製石斧	13.3	5.6	2.1	191.2	黒色	黒色頁岩	基部端部欠損
24	2+3	21層	D18N	打製石斧	10.1	5.8	1.9	133.9	暗緑色	輝綠凝灰岩	基部
25	7	12層	D60N	打製石斧	11.3	5.8	3.1	191.3	黒色	砂質頁岩	
26	9	25層	S R92522~ 92563覆土	砾石	14.4	3.1	2.6	173.5	淡灰色	粗面岩質凝灰岩	
27	8	6層	C63N	砾石	10.8	2.8	2.1	116.5	淡黃灰色	粗面岩	刻印あり
28	2+3	不明	E15S	砾石	6.8	3.5	1.9	50.8	淡黃色	粗面岩	
29	2+3	不明	E15S	砾石	4.5	2.7	1.3	34.3	淡黃色	粗面岩	
30	6	5層	不明(南東部?)	砾石	5.1	3.7	3.4	61.9	後黃色	粗面岩	
31	8	10a層	D62N	砾石	3.1	2.4	1.6	14.2	黄色	粗面岩質凝灰岩	
32	2+3	4層	D17N	砾石	6.3	4.5	1.4	37.7	黄色	粗面岩質凝灰岩	やや珪質
33	5	不明	不明	砾石	7.4	2.8	0.6	20.4	淡灰色	凝灰質粘板岩	
34	6	11層	C38N	砾石	10.3	5.3	2.8	206.4	やや暗灰色	凝灰質粗粒砂岩	
35	6	表層	不明	砾石	12.1	4.8	3.4	300.9	灰緑色	凝灰質粗粒砂岩	
36	9	25層	E75N S R92692覆土	砾石	17.9	8.8	4.0	844.4	淡灰色	中粒砂岩	
37	不明	表層	不明	砾石	11.7	8.0	4.4	691.1	淡灰色	中粒ないし細粒砂岩	叩き石に転用
38	8	15層	D61N	砾石	7.9	5.1	3.1	40.2	淡灰色	砾石	
39	10	21層	D81N	砾石	6.5	6.7	5.1	45.5	淡灰色	砾石	
40	9	19層	D75S S R92003	砾石	7.3	4.0	2.8	44.4	淡灰色	砾石	泥による汚染あり
41	6	23a層	E39S	凹石	15.9	12.0	10.1	378.9	灰色	砾石	風化により茶色に変化
42	7	13層	D61S (ハシマー)執刀内	凹石	11.7	8.9	5.5	599.7	灰色	やや凝灰質粗粒砂岩	
43	8	22層	E58S	石礫	2.4	1.8	0.5	1.3		黒曜石	
44	8	21層	F61S	磨製石斧	4.5	4.6	2.3	55.3	灰色	輝綠岩	刃部
45	8	不明	不明	石耙	3.1	4.3	1.0	7.9	暗灰色	凝灰質粘板岩	

第98表 石器計測表 2

番号	調査区	層位	出土地点・遺構	種別	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	色調	石質	備考
1	2・3	25層	S R22005 上層	剝片	4.01	1.82	1.35	6.0	黒曜石		
2	7	10層	D47S	剝片	3.59	1.20	0.52	2.0	黒曜石		
3	7	10層	D47S	剝片	1.49	0.56	0.21	0.1	黒曜石		
4	7	10層	F53S	剝片	2.39	1.35	0.47	1.3	黒曜石		
5	7	12層	東辺排水溝	剝片	1.62	1.15	0.50	0.9	黒曜石		
6	7	12層	5号方形周溝北側周溝	剝片	2.06	1.80	0.41	1.6	黒曜石		
7	7	12層	5号方形周溝西側周溝	剝片	2.12	1.78	0.52	1.6	黒曜石		
8	7	12層	8号方形周溝盛土	剝片	1.75	1.39	0.37	0.8	黒曜石		
9	7	12層	14号方形周溝盛土	剝片	1.46	0.97	0.42	0.6	黒曜石		
10	7	12層	14号方形周溝盛土	剝片	1.25	1.09	0.38	0.1	黒曜石		
11	7	12層	E47S	剝片	2.53	1.05	0.46	1.0	黒曜石		
12	8	17b層	D62S	剝片	1.30	1.16	0.39	0.6	黒曜石		
13	8	17b層	E63S	剝片	2.45	0.96	0.27	0.6	黒曜石		
14	8	21層	F63S	剝片	3.30	1.74	0.69	2.1	黒曜石		
15	9	38層	D72S	剝片	1.46	1.17	0.46	0.8	黒曜石		
16	9	41層	S R94101	石核	4.19	3.48	1.80	21.6	黒曜石		
17	9	41層	1号方形周溝盛土	剝片	0.56	0.28	0.08	計測不能	黒曜石		
18	9	41層	2号方形周溝盛土主体部②	剝片	2.74	1.47	1.07	2.6	黒曜石		
19	9	41層	2号方形周溝盛土	石核	2.20	1.85	1.58	4.8	黒曜石		
20	9	41層	2号方形周溝盛土	剝片	1.27	0.90	0.34	0.3	黒曜石		
21	9	41層	2号方形周溝盛土側面溝	剝片	0.81	0.17	0.04	計測不能	黒曜石		
22	9	41層	2号方形周溝盛馬溝	剝片	2.51	1.81	1.34	5.1	黒曜石		
23	9	42層	S R4202	剝片	2.05	1.14	0.36	0.8	黒曜石		
24	6	15層	D42		5.92	4.88	2.70	9.3	灰色	鈣石	
25	7	8層	S R70801		9.90	5.90	5.00	66.7	淡灰色	鈣石	
26	8	15層	C63N		12.90	5.80	7.50	141.4	灰色	鈣石	
27	8	17b層	E68S		1.80	5.60	5.90	63.3	灰色	鈣石	
28	8	21層	E62S		1.50	1.10	0.60	0.2	灰色	鈣石	
29	8	21層	E59S		7.30	5.00	4.40	55.7	灰色	鈣石	
30	9	25層	S R92501		3.70	2.80	2.20	5.3	灰色	鈣石	
31	9	25層	S R92501		3.70	3.00	3.10	10.4	灰色	鈣石	
32	9	33層	S R93301		5.10	5.30	2.50	12.3	淡灰色	鈣石	
33	9	42層	S R4202		3.20	2.60	1.30	3.7	灰色	鈣石	
34	10	不明	東辺排水溝		2.60	2.10	1.30	1.7	淡色	鈣石	
35	10	不明	東辺排水溝		3.00	2.70	2.10	3.7	淡色	鈣石	
36	10	不明	東辺排水溝		4.00	2.80	1.40	4.5	淡色	鈣石	
37	2・3	25層	S R22005	剝片	7.63	2.35	0.31	6.7	黑色	黑色板岩	
38	6	不明	E40	剝片	7.18	2.49	0.87	14.1	黑色	砂質板岩	
39	6	23a層	E38S	剝片	4.50	2.36	0.30	4.1	黑色	黑色頁岩	
40	7	不明	北辺排水溝	剝片	15.30	6.90	1.31	125.9	黑色	砂質板岩	
41	7	12層	5号方形周溝盛土	剝片	7.21	3.34	2.38	55.1	黑色	中・珪質黑色頁岩	
42	8	21層	E60S	剝片	12.49	4.78	1.38	94.5	黑色	黑色板岩	
43	8	21層	E62S	剝片	8.17	3.93	0.98	24.9	黑色	砂質板岩	
44	8	21層	E60S	剝片	4.30	4.33	0.62	7.5	暗緑色	輝綠岩灰岩	
45	8	21層	E60S	剝片	4.51	3.78	0.48	12.1	暗緑色	輝綠岩灰岩	
46	8	21層	E59N	剝片	9.27	4.97	0.58	49.5	暗綠色	輝綠岩灰岩	
47	8	21層	E62S	剝片	7.89	3.71	1.20	35.9	黑色	砂質板岩	
48	8	22層	F59S	加工砾石	11.11	7.21	3.12	252.8	黑色	黑色頁岩	
49	9	42層	E72S	剝片	11.74	3.40	0.97	35.3	黑色	砂質板岩	

瀬名遺跡Ⅲ（遺物編Ⅰ）

静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財調査報告書 3  
本文編

1994年3月29日

編集発行 財団法人  
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所 ナガハシ印刷  
静岡市みずほ1丁目35-3  
TEL 054-257-0111㈹